御所市文化財調査報告書　第 54 集

奈良県御所（ごせ）市

中　西　遺　跡

－第 12 次発掘調査報告－
京奈和自動車道建設に係る発掘調査成果

平成 29 年（2017）12 月
御 所 市 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は、京奈和自動車道大和御所道路（御所区間）の建設に先立って、御所市教育委員会が実施した中西遺跡の発掘調査報告書である。

　なお、御所市教育委員会では、平成 19 年度以来実施している同事業による発掘調査の調査区について、遺跡ごとにＡ～Ｆ地区と呼称し、既刊の概要報告でもその名称を用いている。中西遺跡は、概要報告ではＥ地区とした遺跡である。

2．今次調査の調査次数は、中西遺跡の第 12 次調査に当たる。第 12 次調査は、さらに、面的な調査範囲や掘削深さを決定するためのトレンチ調査（第 12 －１次調査）と、それを受けた面的な発掘調査（第 12 －２次調査）、第 12 －２次調査時点で用地取得の事情等で調査に着手できなかった地点の調査（第 12 －３次調査・第 12 －４次調査）に区分した。

3．現地調査は、佐々木健太郎・西村慈子・岡田圭司・奥田智子・井ノ上佳美（以上、御所市教育委員会　嘱託職員　当時）が各地区を担当し、木許　守（御所市教育委員会　技術職員）が全体を総括した。

4．各調査区の調査期間および担当者は第２章に記した。

5．本書の執筆は、井ノ上・木許のほか、影山美智与・千喜良敦（以上、地域文化財研究所）が担当した。執筆担当箇所は目次に記した。

6．別表の作成担当者は別表の冒頭（中扉）に記した。特に、別表２に記した石器・石製品の石材の同定には、山村陽子氏（学校法人　雲雀ヶ丘学園小学校　教諭）のご教示を得た。

7．第４章第６節・第５章第１節第２項・同第２節第２項・同第３節第２項・第７章第６節における遺物に関する記述では、以下の文献をそれぞれ参照し、指標とした。

弥生土器：『弥生土器集成』（小林編 1968）
庄内式土器・布留式土器：『矢部遺跡』（寺沢編 1986）
須恵器：『陶邑古窯址群Ⅰ』（田辺 1966）・『須恵器大成』（田辺 1981）
土師器：『古代の土器（１）　都城の土器集成』（古代の土器研究会編 1992）
中世土器：『概説　中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会編 1995）

8．本書では、出土遺物の年代観等について、各執筆者間でおおむねの摺り合わせを行ったが、必ずしも細部までは統一していない。

9．参考文献は本文末尾に一括して掲げた。

10．本書の編集は、木許・井ノ上が担当した。

11．本書に先立って『御所市文化財調査報告書』第 35 集・第 37 集として、概要報告書を刊行しているが、遺構名称について概報刊行後に整理作業を進める過程で変更している。また、それ以外の内容についても本書との齟齬がある場合には、本書をもって訂正とする。

目 次

例言

本文目次

第１章　位置と既往の調査……（井ノ上）　…… 1
　第１節　位置…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1
　第３節　既往の調査…… 4
第２章　調査の契機と経過……（木許）　…… 7
第３章　調査地の旧地形と基本層序……（井ノ上）　…… 12
第４章　第 12 － 1 次調査（トレンチ調査）の成果 …… 14
　第１節　１区……（井ノ上・木許）　…… 14
　　1．1トレンチ
　　2．2トレンチ
　　3．3トレンチ
　第２節　２区……（井ノ上・木許）　…… 21
　　1．1トレンチ
　　2．2トレンチ
　　3．3トレンチ
　　4．4トレンチ
　　5．5トレンチ
　　6．6トレンチ
　　7．7トレンチ
　　8．8トレンチ
　第３節　３区……（井ノ上・木許）　…… 33
　　1．1トレンチ
　　2．2トレンチ
　　3．3トレンチ
　　4．4トレンチ
　　5．5トレンチ
　　6．6トレンチ
　　7．7トレンチ
　　8．8トレンチ
　第４節　４区……（井ノ上・木許）　…… 43
　　1．1トレンチ
　　2．2トレンチ
　　3．3トレンチ
　　4．4トレンチ
　　5．5トレンチ
　　6．6トレンチ
　　7．7トレンチ
　第５節　５区……（井ノ上・木許）　…… 50
　　1．1トレンチ
　　2．2トレンチ
　　3．3トレンチ
　　4．4トレンチ
　　5．5トレンチ
　　6．6・7・8トレンチ

第６節　遺物……（千喜良・影山）　…… 55
１．１区出土遺物
２．４区出土遺物
第７節　小結……（井ノ上・木許）　…… 69
第５章　第 12 －２次調査の成果 …… 71
第１節　２区…… 71
１．遺構……（井ノ上・木許）　…… 71
①谷地形
②素掘溝
③住居１
④住居２
⑤住居３
⑥住居４
⑦住居５
⑧住居６
⑨住居７
⑩住居８
⑪住居９
⑫住居 10
⑬掘立柱建物
⑭ピット
⑮土坑１
⑯土坑２
⑰土坑３
⑱土坑４
⑲土坑５
⑳土坑６
㉑土坑７
㉒土坑８
㉓土坑９
㉔土坑 10
㉕土坑 11
㉖土坑 12
㉗土坑 13
㉘土坑 14
㉙土坑 15
㉚土坑 16
㉛土坑 17
２．遺物……（影山）　…… 105
①谷地形出土遺物
②住居出土遺物
③ピット・土坑出土遺物
第２節　３－北区…… 130
１．遺構……（井ノ上・木許）　…… 130
２．遺物……（影山）　…… 132
第３節　３－南区…… 148
１．遺構……（井ノ上・木許）　…… 148
①住居 11
②住居 12

③住居 13
④方形状落ち込み
⑤ピット
⑥土坑 20
⑦土坑 21
⑧土坑 22
⑨土坑 23
⑩土坑 24
⑪土坑 25
⑫土坑 26
⑬土坑 27
⑭土坑 28
⑮土坑 29
⑯土坑 30
⑰溝 11
⑱溝 12
2．遺物……（影山）…… 165
①流入土出土遺物
②住居出土遺物
③方形状落ち込み出土遺物
④ピット・土坑出土遺物
⑤溝出土遺物
第４節　小結……（井ノ上・木許）…… 179
第６章　第 12 － 3 次調査の成果 ……（井ノ上・木許）…… 180
第１節　１区４トレンチ…… 180
第２節　１区５トレンチ…… 180
第３節　小結…… 181
第７章　第 12 － 4 次調査の成果 …… 182
第１節　１区６トレンチ……（井ノ上）…… 182
第２節　１区７トレンチ……（井ノ上）…… 182
第３節　１区８トレンチ……（井ノ上）…… 184
第４節　１区９トレンチ……（井ノ上）…… 184
第５節　１区 10 トレンチ ……（井ノ上）…… 185
1．遺構…… 185
①土坑 40
②土坑 41
第６節　遺物……（影山）…… 186
第７節　小結……（井ノ上）…… 189
第８章　まとめ……（井ノ上）…… 189

参考文献…… 190

別表１　出土土器　観察表……195
別表２　出土石器・石製品　観察表……243
別表３　出土木製品・木器等　一覧表
1．護岸材　一覧表……249
2．護岸材以外の木製品等　一覧表……250

挿図目次

図１　御所市の位置 …… 1
図２　周辺の主要遺跡分布図　（Ｓ．＝1/50,000） …… 3
図３　中西遺跡　今次調査地と既往の調査地　位置図　（Ｓ．＝1/10,000） …… 5
図４　中西遺跡　第12次調査　トレンチ配置図　（Ｓ．＝1/3,500）…… 9
図５　調査地旧地形　復原図　（Ｓ．＝1/5,000）…… 13
図６　１区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/300）…… 15
図７　１区　１トレンチ　東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 16
図８　１区　２トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/350）…… 17
図９　１区　２トレンチ　西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 18
図10　１区　３トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/300）…… 19
図11　１区　３トレンチ　南壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 20
図12　２区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/400）…… 22
図13　２区　１トレンチ　東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 23
図14　２区　２トレンチ・同拡張部　平面図　（Ｓ．＝1/200）…… 24
図15　２区　２トレンチ　西壁　土層断面図・同拡張部　北壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 25
図16　２区　３トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/350）…… 26
図17　２区　３トレンチ　北壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 27
図18　２区　４トレンチ　平面図・東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/150）…… 29
図19　２区　５トレンチ　平面図・東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 30
図20　２区　６トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 31
図21　２区　７トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100） …… 32
図22　３区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）…… 34
図23　３区　１トレンチ　東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 35
図24　３区　１トレンチ　井戸　平面・立面図　（Ｓ．＝1/30） …… 36
図25　３区　２トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・土層断面図　（Ｓ．＝1/100） …… 37
図26　３区　２トレンチ拡張部　平面図・南壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/150）…… 38
図27　３区　３トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 39
図28　３区　４トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 41
図29　３区　５トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 41
図30　３区　６トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 42
図31　３区　７トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100） …… 43
図32　３区　８トレンチ　平面図・北壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 43
図33　４区　１トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 44
図34　４区　２トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100） …… 44
図35　４区　３トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/300）…… 45
図36　４区　３トレンチ　西壁・南壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 46
図37　４区　４トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/150） …… 48
図38　４区　５トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 48
図39　４区　６トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 49
図40　４区　７トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100） …… 49
図41　５区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100） …… 50
図42　５区　２トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/300）・東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/150） …… 51
図43　５区　３トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/100）…… 52
図44　５区　４トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・南西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100） …… 53
図45　５区　５トレンチ　平面図・東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 53
図46　５区　６・７・８トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）…… 54
図47　１区　谷地形　出土遺物（１）（Ｓ．＝1/3）…… 59

図48　1区　谷地形　出土遺物（2）（S.＝2/3・1/3）……60
図49　4区　谷地形　出土遺物（1）（S.＝1/3）……61
図50　4区　谷地形　出土遺物（2）（S.＝1/3）……62
図51　4区　谷地形　出土遺物（3）（S.＝1/3）……63
図52　4区　谷地形　出土遺物（4）（S.＝1/3）……64
図53　4区　谷地形　出土遺物（5）（S.＝1/3）……65
図54　4区　谷地形　出土遺物（6）（S.＝1/3）……66
図55　4区　谷地形　出土遺物（7）（S.＝1/3・2/3）……67
図56　4区　谷地形　出土遺物（8）（S.＝1/3）……68
図57　2区　平面図　（S.＝1/500）……72
図58　2区　中央部　平面図　（S.＝1/200）……73
図59　2区　住居1　平面・断面図　（S.＝1/80）……75
図60　2区　住居2　平面・断面図　（S.＝1/80）……76
図61　2区　住居3　平面図　（S.＝1/80）……78
図62　2区　住居4　平面・断面図　（S.＝1/80）……78
図63　2区　住居5・6　平面・断面図　（S.＝1/80）……80
図64　2区　住居7・8　平面・断面図　（S.＝1/80）……81
図65　2区　住居7　竈　平面・断面図　（S.＝1/20）……82
図66　2区　住居9・10　平面・断面図　（S.＝1/80）……85
図67　2区　住居9　土器出土状況　（S.＝1/25）……85
図68　2区　北西部ピット群　平面図　（S.＝1/80）……86
図69　2区　ピット（1）　平面・断面図　（S.＝1/40）……87
図70　2区　ピット（2）　平面・断面図　（S.＝1/40）……88
図71　2区　ピット（3）　平面・断面図　（S.＝1/40）……89
図72　2区　ピット（4）　平面・断面図　（S.＝1/40）……90
図73　2区　ピット（5）　平面・断面図　（S.＝1/40）……91
図74　2区　ピット（6）　平面・断面図　（S.＝1/40）……92
図75　2区　ピット（7）　平面・断面図　（S.＝1/40）……93
図76　2区　ピット（8）　平面・断面図　（S.＝1/40）……94
図77　2区　ピット（9）　平面・断面図　（S.＝1/40）……95
図78　2区　ピット(10)　平面・断面図　（S.＝1/40）……96
図79　2区　ピット(11)　平面・断面図　（S.＝1/40）……97
図80　2区　土坑1　平面・断面図　（S.＝1/40）……99
図81　2区　土坑2　平面・断面図　（S.＝1/40）……100
図82　2区　土坑3～10　平面・断面図　（S.＝1/40）……103
図83　2区　土坑11～17　平面・断面図　（S.＝1/40）……104
図84　2区　谷地形(東西方向)　出土遺物（1）（S.＝1/3）……116
図85　2区　谷地形(東西方向)　出土遺物（2）（S.＝1/3）……117
図86　2区　谷地形(東西方向)　出土遺物（3）（S.＝1/3）……118
図87　2区　谷地形(東西方向)　出土遺物（4）（S.＝1/3）……119
図88　2区　谷地形(南北方向)　出土遺物（1）（S.＝1/3）……120
図89　2区　谷地形(南北方向)　出土遺物（2）（S.＝1/3）……121
図90　2区　谷地形(南北方向)　出土遺物（3）（S.＝1/3・2/3）……122
図91　2区　谷地形(南北方向)　出土遺物（4）（S.＝1/3）……123
図92　2区　谷地形(南北方向)　出土遺物（5）（S.＝1/3・2/3）……124
図93　2区　住居　出土遺物（1）（S.＝1/3）……125
図94　2区　住居　出土遺物（2）（S.＝1/3）……126
図95　2区　住居　出土遺物（3）（S.＝1/3）……127
図96　2区　ピット　出土遺物　（S.＝1/3）……128
図97　2区　土坑　出土遺物（1）（S.＝1/3）……128
図98　2区　土坑　出土遺物（2）（S.＝1/3）……129

図99　３－北区　全体図　（Ｓ．＝1/200）…… 131
図100　３－北区　柵状遺構　平面・立面図　（Ｓ．＝1/40）…… 132
図101　３－北区　谷地形　出土遺物（１）（Ｓ．＝1/3）…… 139
図102　３－北区　谷地形　出土遺物（２）（Ｓ．＝1/3）…… 140
図103　３－北区　谷地形　出土遺物（３）（Ｓ．＝1/3）…… 141
図104　３－北区　谷地形　出土遺物（４）（Ｓ．＝1/3）…… 142
図105　３－北区　谷地形　出土遺物（５）（Ｓ．＝1/3）…… 143
図106　３－北区　谷地形　出土遺物（６）（Ｓ．＝1/3･2/3）…… 144
図107　３－北区　谷地形　出土遺物（７）（Ｓ．＝1/5･1/8）…… 145
図108　３－北区　谷地形　出土遺物（８）（Ｓ．＝1/8）…… 146
図109　３－北区　谷地形　出土遺物（９）（Ｓ．＝1/8）…… 147
図110　３－南区　平面図　（Ｓ．＝1/250）…… 149
図111　３－南区　住居11　平面・断面図　（Ｓ．＝1/80）…… 150
図112　３－南区　住居12・13　平面・断面図　（Ｓ．＝1/80）…… 151
図113　３－南区　方形状落ち込み　平面・断面図　（Ｓ．＝1/80）…… 153
図114　３－南区　ピット（１）　平面図　（Ｓ．＝1/40）…… 155
図115　３－南区　ピット（２）　平面図　（Ｓ．＝1/40）…… 156
図116　３－南区　ピット（３）　平面図　（Ｓ．＝1/40）…… 157
図117　３－南区　ピット（４）　平面図　（Ｓ．＝1/40）…… 158
図118　３－南区　ピット（５）　平面図　（Ｓ．＝1/40）…… 159
図119　３－南区　土坑20～25　平面・断面図　（Ｓ．＝1/40）…… 161
図120　３－南区　土坑26～30　平面・断面図　（Ｓ．＝1/40）…… 163
図121　３－南区　流入土　出土遺物　（Ｓ．＝1/3・2/3）…… 171
図122　３－南区　住居　出土遺物（１）（Ｓ．＝1/3）…… 171
図123　３－南区　住居　出土遺物（２）・方形状落ち込み　出土遺物（１）（Ｓ．＝1/3）…… 172
図124　３－南区　方形状落ち込み　出土遺物（２）（Ｓ．＝1/3）…… 173
図125　３－南区　ピット　出土遺物（１）（Ｓ．＝1/3）…… 174
図126　３－南区　ピット　出土遺物（２）（Ｓ．＝1/3）…… 175
図127　３－南区　土坑　出土遺物（１）（Ｓ．＝1/3）…… 175
図128　３－南区　土坑　出土遺物（２）（Ｓ．＝1/3）…… 176
図129　３－南区　溝　出土遺物　（Ｓ．＝1/3・2/3）…… 177
図130　１区　４トレンチ　平面図・北壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 180
図131　１区　５トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 181
図132　１区　６トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/150）…… 183
図133　１区　７トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/100）・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/200）…… 184
図134　１区　８・９トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/300）…… 184
図135　１区　10トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/250）…… 186
図136　１区　10トレンチ　北壁・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）…… 187
図137　１区　10トレンチ　土坑　平面・断面図　（Ｓ．＝1/40）…… 188
図138　１区　６・10トレンチ　出土遺物　（Ｓ．＝1/3）…… 188

挿表目次

表１　２区　ピット１～151　計測表 …… 98
表２　３－南区　ピット 201 ～ 303　計測表…… 160

図版目次

図版1　1区1トレンチ　全景　南から
1区2トレンチ　全景　北から
図版2　1区3トレンチ　西側　全景　東から
1区3トレンチ　東側　東端付近　西から
図版3　2区1トレンチ　全景　北から
2区1トレンチ　谷地形　南東から
図版4　2区2トレンチ　全景　北から
2区2トレンチ　拡張部　東から
図版5　2区3トレンチ　全景　東から
2区4トレンチ　全景　北から
図版6　2区5トレンチ　全景　北から
2区6トレンチ　全景　南から
図版7　2区7トレンチ　全景　西から
2区8トレンチ　全景　東から
図版8　3区1トレンチ　谷地形　南から
3区1トレンチ　井戸検出面　南から
図版9　3区1トレンチ　井戸検出状況（1）　南から
3区1トレンチ　井戸検出状況（2）　南から
図版10　3区2トレンチ　全景　北から
3区2トレンチ　西側拡張部　全景　東から
図版11　3区3トレンチ　全景　北から
3区3トレンチ　拡張部　全景　北東から
図版12　3区3トレンチ　拡張部南　南西から
3区4トレンチ　全景　南から
図版13　3区5トレンチ　北半　東から
3区6トレンチ　北から
図版14　3区7トレンチ　全景　南から
3区8トレンチ　南から
図版15　4区1トレンチ　全景　西から
4区2トレンチ　全景　南から
図版16　4区3トレンチ　全景　南から
遺物出土状況（1）
遺物出土状況（2）
遺物出土状況（3）
遺物出土状況（4）
図版17　4区4トレンチ　全景　北から
4区5トレンチ　全景　南から
図版18　4区6トレンチ　全景　南から
4区7トレンチ　全景　北から
図版19　5区1トレンチ　南から
5区2トレンチ　全景　北から
図版20　5区3トレンチ　全景　北から
5区4トレンチ　全景　北から
図版21　5区5トレンチ　全景　西から
5区6トレンチ　全景　西から
図版22　1区　谷地形　出土遺物（1）（S．≒1/3、但し48-11はS．≒2/3）
図版23　1区　谷地形　出土遺物（2）（S．≒1/3）
4区　谷地形　出土遺物（1）（S．≒1/3）
図版24　4区　谷地形　出土遺物（2）（S．≒1/3）
図版25　4区　谷地形　出土遺物（3）（S．≒1/3）
図版26　4区　谷地形　出土遺物（4）（S．≒1/3）
図版27　4区　谷地形　出土遺物（5）（S．≒1/3）
図版28　4区　谷地形　出土遺物（6）（S．≒1/3）
図版29　4区　谷地形　出土遺物（7）（S．≒1/3、但し55-122・123はS．≒2/3）
図版30　2区　全景　南から
2区　北半　西から
図版31　2区　中央部　住居1・4～10　南から
2区　南半　住居2周辺　東から
図版32　2区　住居1　北西から
2区　住居1　東から
図版33　2区　住居1周辺　北から
2区　住居1　土坑16　南から
図版34　2区　住居1　トンネル状遺構　東から
2区　住居1　トンネル状遺構　西から
図版35　2区　住居2　北から
2区　住居2　遺物出土状況　北から
2区　住居2　ピット146　南から
2区　住居2　ピット150　南から
2区　住居2　ピット151　南から
図版36　2区　住居3　東から
2区　住居3　炭化物集中範囲　東から
図版37　2区　住居4　南から
2区　住居5・6　南西から
図版38　2区　住居5　南から
2区　住居5・6　北から
図版39　2区　住居7　南から
2区　住居7　土坑11　北から
図版40　2区　住居7　竈（1）　北から
2区　住居7　竈（2）　北から
図版41　2区　住居8・住居4　南から
2区　住居7・8　南から
図版42　2区　住居9・10　南から
2区　住居9・10　東から
図版43　2区　掘立柱建物　南から
2区　土坑1　南から
図版44　2区　土坑2　南から
2区　土坑3　東から
図版45　2区　谷地形（東西方向）　出土遺物（1）（S．≒1/3）
図版46　2区　谷地形（東西方向）　出土遺物（2）（S．≒1/3）
図版47　2区　谷地形（東西方向）　出土遺物（3）（S．≒1/3）
図版48　2区　谷地形（東西方向）　出土遺物（4）（S．≒1/3）
2区　谷地形（南北方向）　出土遺物（1）（S．≒1/3）
図版49　2区　谷地形（南北方向）　出土遺物（2）（S．≒1/3）
図版50　2区　谷地形（南北方向）　出土遺物（3）（S．≒1/3）

図版 51　2区　谷地形（南北方向）　出土遺物（4）
（S．≒ 1/3、但し 90-31 ～ 90-36・92-63 は
S．≒ 2/3）
図版 52　2区　住居　出土遺物（1）（S．≒ 1/3）
図版 53　2区　住居　出土遺物（2）（S．≒ 1/3）
図版 54　2区　住居　出土遺物（3）（S．≒ 1/3）
図版 55　2区　住居　出土遺物（4）（S．≒ 1/3）
図版 56　2区　ピット　出土遺物（S．≒ 1/3）
2区　土坑　出土遺物（1）（S．≒ 1/3）
図版 57　2区　土坑　出土遺物（2）（S．≒ 1/3）
図版 58　3ー北区　谷地形　全景　南から
3ー北区　谷地形　西から
図版 59　3ー北区　しがらみ検出状況　東から
3ー北区　しがらみ検出状況　上から
図版 60　3ー北区　谷地形　遺物出土状況（1）　東から
3ー北区　谷地形　遺物出土状況（2）　東から
3ー北区　谷地形　遺物出土状況（3）　南から
3ー北区　谷地形　遺物出土状況（4）　南から
3ー北区　谷地形　遺物出土状況（5）
3ー北区　谷地形　遺物出土状況（6）
3ー北区　谷地形　遺物出土状況（7）
3ー北区　谷地形　遺物出土状況（8）
図版 61　3ー北区　出土遺物（1）（S．≒ 1/3）
図版 62　3ー北区　出土遺物（2）（S．≒ 1/3）
図版 63　3ー北区　出土遺物（3）（S．≒ 1/3）
図版 64　3ー北区　出土遺物（4）（S．≒ 1/3）
図版 65　3ー北区　出土遺物（5）（S．≒ 1/3、
但し 106-64・66・67 はS．≒ 2/3）
図版 66　3ー北区　出土遺物（6）（107-68・69 は
S．≒ 1/5、107-70 ～ 109-73 はS．≒ 1/8）
図版 67　3ー南区　全景　南から
3ー南区　住居 11　西から
図版 68　3ー南区　住居 12・13　北から
3ー南区　方形状落ち込み　南から
図版 69　3ー南区　流入土　出土遺物（S．≒ 1/3、
但し 121- 5・6はS．≒ 2/3）
3ー南区　住居　出土遺物（S．≒ 1/3）
図版 70　3ー南区　方形状落ち込み　出土遺物（1）
（S．≒ 1/3）
図版 71　3ー南区　方形状落ち込み　出土遺物（2）
（S．≒ 1/3）
3ー南区　ピット　出土遺物（1）（S．≒ 1/3）
図版 72　3ー南区　ピット　出土遺物（2）（S．≒ 1/3）
図版 73　3ー南区　土坑　出土遺物（1）（S．≒ 1/3）
図版 74　3ー南区　土坑　出土遺物（2）（S．≒ 1/3）
3ー南区　溝　出土遺物（S．≒ 1/3、
但し 129-6 はS．≒ 2/3）
図版 75　1区4トレンチ　全景　東から
1区5トレンチ　全景　東から
図版 76　1区6トレンチ　素掘溝検出状況　南から
1区6トレンチ　谷地形　南から
図版 77　1区7トレンチ　全景　南から
1区9トレンチ　全景　西から
図版 78　1区 10 トレンチ　全景　南から
1区 10 トレンチ　全景　南東から
図版 79　1区 10 トレンチ　土坑 40　南から
1区 10 トレンチ　土坑 41　南から
1区6・10 トレンチ　出土遺物（S．≒ 1/3）

第１章 位置と既往の調査

第１節　位置

御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58㎢の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町と接している。奈良盆地の西南部に位置する本市は、西部に金剛山・葛城山がそびえ、東南部は竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵が起伏し、西側は葛城川、東側は曽我川によって形成された谷となっている。また、南には中央構造線が走って吉野川河谷と境している。このため、地形は平坦地や斜面地などと地形的変化が多くみられる。また、西は金剛山・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へ至り、南は風の森峠を介して五條・吉野・和歌山方面へ至るなど交通の要衝にあたる。

今回調査を行った中西遺跡は、御所市大字室・條・池之内に所在し、地形的には西の金剛山および南側の巨勢山から北東方向に広がる扇状地上に立地している。南西から北東へと緩やかに傾斜をみせながらも、所々に東流する支谷が入り、起伏をみせる。

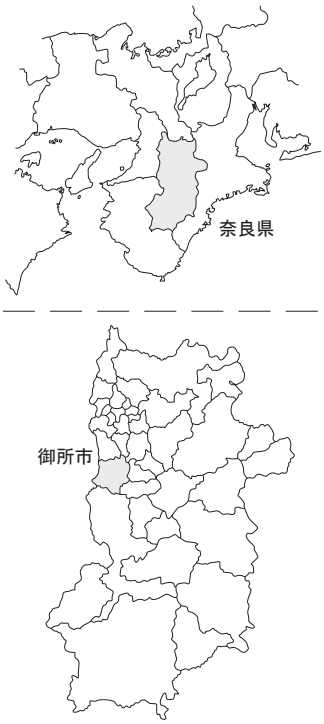


図１　御所市の位置

第２節　歴史的環境

御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。明確な遺構が確認されている遺跡はそれほど多くないが、観音寺本馬遺跡において後期の竪穴式住居・土壙墓・晩期の建物跡・水場遺構・土器棺墓群・クリ林などが検出され（岡田編 2013、平岩 2012、木許・西村編 2015、本村編 2017）、玉手遺跡において晩期の建物跡・土器棺墓群・土坑など、中期末から後期初頭の埋設土器・石囲遺構・土坑などが検出されており（木許・小泉・村島編 2017）、近接する橿原市曲川遺跡なども含めて具体的な集落の様相について議論できる下地が整ってきている。またこれら遺跡では、観音寺本馬遺跡で半裁柱、玉手遺跡で漆塗糸玉といった北陸地域との交流を示す遺構・遺物が多く確認されており、当時の交流の一端が窺われる。加えて、伏見遺跡では中期末～後期中葉（廣岡・十文字 2005）、南郷遺跡地蔵谷地区では中期末から後期初頭の土器が多く出土しており（坂編 2000）、付近に集落の存在が想定できる。縄文時代の遺物の出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期から晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている（松田 1997）。

弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる（木許編 1992、藤田・尼子編 1992 ほか）。高地性集落では、巨

勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡（藤田編 1985、木許編 2007 ほか）、巨勢山中谷遺跡（御所市教育委員会 1989）、巨勢山八伏遺跡（御所市教育委員会 1990）などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡よりやや南西のところでは外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡が発見されており、青銅器埋納地として古くから著名である（高橋 1919）。近年の発掘調査では、観音寺本馬遺跡において方形周溝墓群が検出され墓域の様相（鈴木編 2014）が、秋津遺跡・中西遺跡において広大な水田遺構や埋没林が検出され生産域の様相（岡田・松岡 2012、岡田・絹畠・中東 2013、本村・中野 2013、岡田・木村 2015、岡田・中野 2015、絹畠 2015、松吉 2015、本村 2015、絹畠・西川・松吉 2015、岡田編 2017、絹畠・岩越・西川 2017、本村・前田・中野・杉山・佐々木 2017）が、それぞれ明らかとなっている。後者については、全国でも最大規模のものであり、秋津・中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

古墳時代に入ると、前期では鴨都波 1 号墳が著名である（藤田・木許編 2001）。一辺約 20 mの小規模な方墳ながら、4 面の三角縁神獣鏡や方形板革綴短甲、漆塗りの靫といった豊富な副葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となろう。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり、鴨都波 1 号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、楢原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津遺跡から前期前半の方形区画施設や多数の掘立柱建物、竪穴式住居が検出され（米川・菊井 2010、岡田 2011、岡田・松岡 2012、岡田・中野 2015）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出される（佐々木 2012）など重要な成果があがってきている。

中期になると、突如として墳長 238 mを誇る大形前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許・藤田 1996、藤田・木許 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢（梅原 1922、関川 1989）をもち、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長 149 mの前方後円墳である掖上鑵子塚古墳が築造されるが（楠本編 1978 ほか）、その立地が曽我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約 50 mの円墳であるみやす塚古墳（網干 1959）も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である。

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡（坂編 1996 ほか）が特筆されよう。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土

1．中西遺跡　2．観音寺本馬遺跡　3．新村・柳原遺跡　4．玉手遺跡　5．伏見遺跡　6．南郷遺跡　7．鴨都波遺跡
8．巨勢山境谷遺跡　9．巨勢山中谷遺跡　10. 巨勢山八伏遺跡　11. 名柄遺跡　12. 名柄銅鐸・銅鏡出土地　13. 今出遺跡
14. 秋津遺跡　15. 茅原中ノ坊遺跡　16. 鴨都波１号墳　17. 西浦古墳　18. オサカケ古墳　19. 楢原遺跡　20. 室宮山古墳
21. ネコ塚古墳　22. 掖上鑵子塚古墳　23. みやす塚古墳　24. 極楽寺ヒビキ遺跡　25. 鴨神遺跡　26. 権現堂古墳
27. 新宮山古墳　28. 水泥北古墳　29. 水泥南古墳　30. 條ウル神古墳　31. 巨勢寺　32. 二光寺廃寺　33. 朝妻廃寺
34. 高宮廃寺跡　35. 朝町銅山遺跡
A．巨勢山古墳群　B．石光山古墳群　C．小林古墳群　D．石川古墳群　E．吐田平古墳群

図２　周辺の主要遺跡分布図　（S．＝1/50,000）

した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され（北中編 2007）、古墳に葬られた被葬者と集落との関係を考える上でこの上ない成果といえる。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構（藤田 1991）が、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構（近江編 1993）が、確認されている。後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、樋野権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教育委員会 1980 ほか）、水泥北古墳、水泥南古墳（網干 1961a ほか）があげられ、高取町域の市尾墓山古墳、市尾宮塚古墳なども含めて巨勢氏との関連が考えられる。地理的にはやや離れるが、巨大な横穴式石室をもつ條ウル神古墳についても、近年の調査で墳長 70 m前後の前方後円墳であることが確実視できるようになった。石室の型式が巨勢谷のものと類似しており、その破格の規模とともに注目される（御所市教育委員会編 2003、金澤 2015）。群集墳に関しては、総数 700 基を超える巨勢山古墳群（藤田編 1987 ほか）や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群（白石・河上・亀田・千賀編 1976）、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群（藤田 1987）や石川古墳群（白石 1974）、吐田平古墳群（網干 1961b）、金剛山の東側斜面尾根上に位置する北窪古墳群（末永 1932、廣岡 2002 ほか）やドンド垣内古墳群（十文字編 2007）などが存在する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に築造が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、金剛・葛城山東麓部は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられるが、それらの築造主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴住居などの遺構が確認できており（藤田・尼子編 1992、阪本編 2002 ほか）、集落が継続して存在していることがわかる。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺（河上・木下 2004）に限られるが、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の塼仏や瓦が出土し（廣岡 2006）、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺（前園・関川・中井 1978）、高宮廃寺（松田・近江・清水 1993）の瓦と同笵のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

第３節　既往の調査

中西遺跡は、平成 29 年 8 月現在、当市教育委員会と奈良県立橿原考古学研究所によって、30 次にわたる発掘調査が実施されている。本書は第 12 次調査の成果報告書である。

図３に従前の各調査地を示した。これまでの調査の契機になったのは、国道 309 号線の歩道整備や、個人住宅・工場・店舗・墓地の建築などの開発によるもので、比較的小規模な開発に対応する目的での発掘調査等であった。こうした状況にあって、近年は今次調査と同様に、京奈和自動車

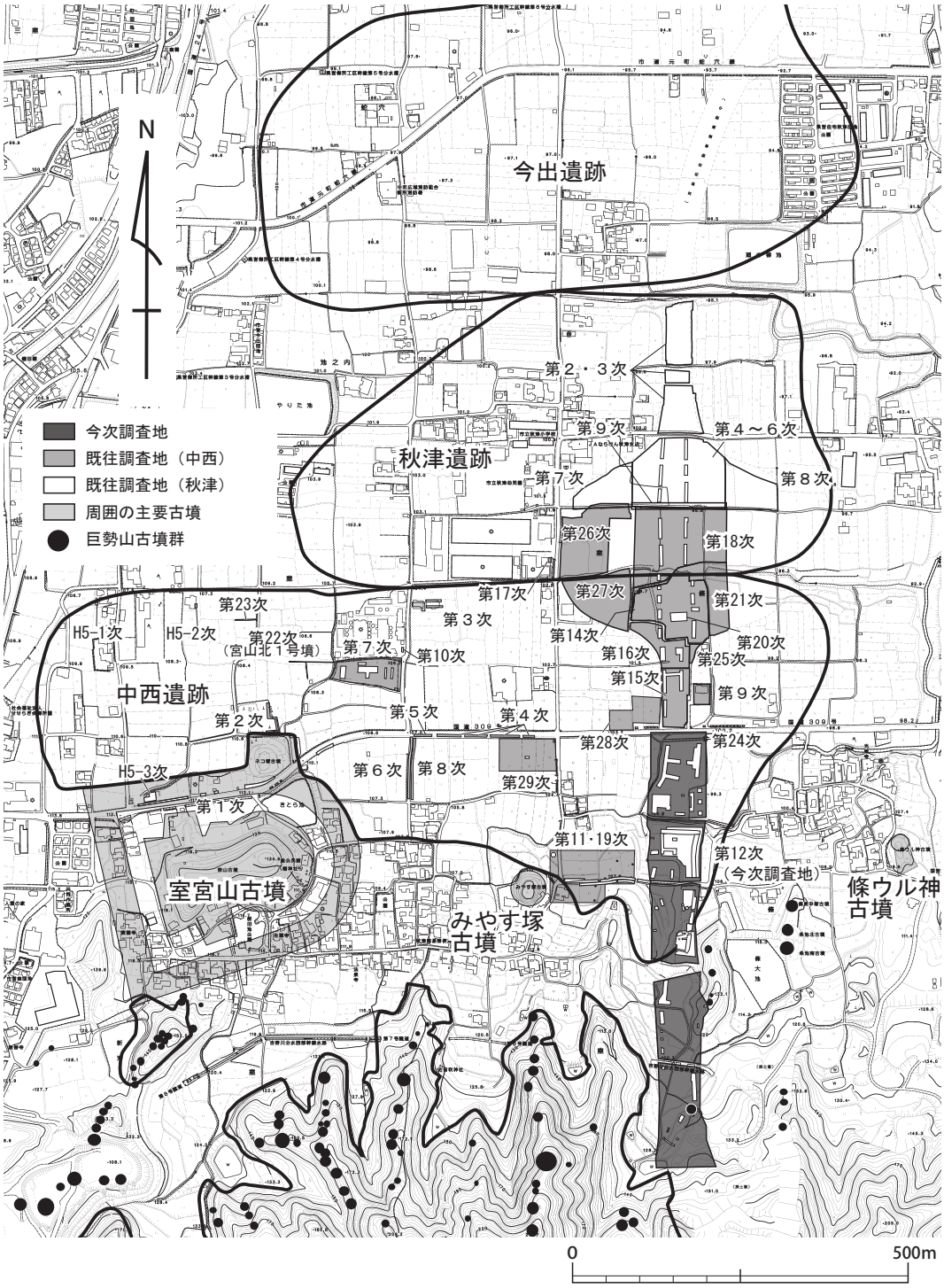


図３　中西遺跡　今次調査地と既往の調査地　位置図　（S.＝1/10,000）

道の建設に伴う事前発掘調査が奈良県立橿原考古学研究所によっても実施された。とりわけ、中西遺跡と、その北側に展開することが明らかになった秋津遺跡は、道路開発計画では御所南インターの箇所に当たるため、広大な面積が一挙に発掘調査されることになった。橿原考古学研究所による発掘調査は平成 29 年 8 月現在なお継続中であり、これまでの調査成果は正報告書が刊行されつつある段階である。ここでは現状での既往の調査成果を、概略的に検出遺構等の時代順に俯瞰する。

縄文時代の遺構として特筆すべきは、第 21 次調査（本村 2015）で、中期前葉の遺物を包含する河道の埋土の一部から、火山灰を含む層が確認されたことである。このほか、第 14 次調査（岡田編 2017）では後期中葉の遺物集積遺構が検出された。第 16 次調査（岡田編 2017）では晩期のピットや土坑が検出された。第 18 次調査（本村・中野 2013）では、後期前葉の遺物包含層と、中期前葉から後期初頭の土器を含む砂層の堆積が確認されている。

弥生時代については、『中西遺跡Ⅰ』（岡田編 2017）で報告された第 14・16・20・25 次調査では、前期の水田面が上下 2 層で検出され、その検出面積の合計は 6,400㎡に及ぶという。さらに、この調査地の北隣接地に当たる第 18 次調査地（本村・中野 2013）や秋津遺跡でも同期の水田が検出されていることから、中西遺跡・秋津遺跡全体における弥生時代前期の水田遺構の広がりは、50,000㎡以上になるものと推計されている（岡田編 2017、517 頁）。また、第 15 次調査（岡田編 2017）では、弥生時代前期の水田域の南端と、その南側に併行期の埋没林が検出された。このように、広大な面積の水田や、水田と森林がセットで検出された例は全国的にも稀有である。調査成果は、今後、水田の立地や森林利用の実態や当時の景観復原を考えるうえで重要な資料になろう。

このほか、上記の水田の検出地点からは西に 500 m以上の距離を隔てるので、その関係性は不分明ではあるが、ネコ塚古墳に北接する第 2 次調査地（木許 1990）で、溝とみられる小規模な遺構から前期後半の土器が出土している。

古墳時代においては、第 3 次調査（木許 1991）で竪穴住居が検出され、第 1 次調査（関川 1989）でもその可能性が高いとされる遺構が検出されている。従前のこうした状況であったが、京奈和自動車道建設に伴う大規模調査として実施された第 26 次調査（本村・前田・中野・杉山・佐々木 2017）では、23 棟の竪穴住居が検出された。このうち前期に関しては、北側の秋津遺跡で確認された遺構と一体的につながるもので、全体の範囲は南北約 400m ×東西 200 m以上に及ぶとみられている。なお、第 1 次調査地は、室宮山古墳に位置的にも、時期的にも近いことから、室宮山古墳の造営集落と位置づけられている（関川 1989）。

また、近年の小規模な調査で特筆するべきものとして、第 22 次調査（金澤 2014）で、ネコ塚古墳の北裾部から北東約 100 mの地点において、中期後半ごろの埋没古墳（宮山北 1 号墳）が確認されたことがある。

古墳時代以降では、第 18 次調査（本村・中野 2013）で飛鳥時代や平安時代後期の掘立柱建物群などが検出された。第 7 次調査（木許 2005）でも平安時代の土坑が検出されている。

第２章　調査の契機と経過

京奈和自動車道は、京都から和歌山を結ぶ全長 120km の高規格幹線道路として計画された自動車専用道路である。このうち、大和郡山市伊豆七条町から五條市居伝町までは大和御所道路とされ、御所市はこのうちの「御所区間」が該当している。

大和御所道路は、平成４年度に事業化がなされ、以降、用地買収・建設工事等が進められてきた。そして、この事業と併行して、工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査も奈良県立橿原考古学研究所を中心として、多くの地点で実施されている。

こうした状況にあって、平成 19 年４月に、国土交通省近畿地方整備局　奈良国道事務所長から、御所市教育委員会に対して、「御所区間」について、埋蔵文化財発掘調査業務にかかる「委託申込書」が提出された。

各種公共事業のうち国・県が行う事業に伴う発掘調査は奈良県が行うという取り決めがある。したがって、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査は奈良県が行うべきであるが、事業の早期完成とそれによる地元の利便性向上など様々な条件を考慮すると、御所市内における文化財調査については、御所市も一定の役割を担うべきであると判断された。しかし、御所市がこの事業を実施するには、調査員の人数が絶対的に不足するという問題があった。そこで当市教育委員会は、この「委託申込書」の提出に前後して、事業自体の受託の可否をも含めて内部調整を行いつつ、調査の方法や体制について奈良県教育委員会文化財保存課および奈良県立橿原考古学研究所と協議を重ねた。そして最終的に事業受託の方針を固め、同年４月に申込者に対して、「埋蔵文化財発掘調査受託承諾書」を発行した。調査体制については、最大の問題であった調査員は事業嘱託を新たに雇用して対応することや、技術職員１名をほぼ専従させて全体を総括すること、各種事務手続きなどに文化財係職員が当たることなどを決め、その整備に努めた。

事業嘱託は期限付きの雇用による専門職員である。このために、後述するように、この中西遺跡に限らず本事業においては部分的な調査区を除いては、基本的に現地調査担当者が報告書の作成時点では退職しており、整理作業を最後まで担当できないという事態が生じた。また、大規模な事業の割に専門職員の人員を十分に確保することができず、調査員の絶対数がどうしても不足気味であった。この体制は、文化財保護行政を行っている立場からは決して好ましいことはないが、小規模な自治体が通有の事業量を遙かに超える規模の事業を一時的に実施せざるを得ないという状況のもとでは、やむを得ないことであった。

いずれにせよ、このような体制整備を進めつつ、発掘調査事業が開始された。発掘調査の担当地区については、奈良県および橿原考古学研究所と協議し、御所市の調査担当地区は、道路建設予定地のうち御所インター建設予定地の南端の一部から玉手遺跡（御所市玉手所在の新池より北側）までの範囲と、国道 309 号線から巨勢山丘陵のトンネル抗口までの範囲、および南部丘陵地の朝町

におけるトンネル抗口部の工事により掘削が行われる範囲とした。なお、玉手遺跡における御所市の担当範囲は、当初は上記のように新池・大月池を除くものであったが、平成 24 年 9 月に、奈良県教育委員会教育長から当市教育長に宛て、諸般の事情からこの部分について御所市の調査担当とされたいとの依頼があった。唐突な依頼であることから担当課は大いにとまどったが、事業の早期完成を望む地元要望などに鑑みて、最終的にこれを受諾するとの結論が出された。こうして、玉手遺跡の御所市の担当範囲の南限は大月池までとなった。

また、当初に設定された上記の範囲にはそれぞれ遺跡が所在しているが、遺物散布地として認識されている地点があることや、実際の遺跡の広がりが面的な調査の結果次第では変更もありうる状況であったので、まずは便宜上各地区をアルファベットの地区名で呼称した。中西遺跡はＥ地区とし、現地作業や先に刊行した概要報告（御所市教育委員会 2009・2010・2011）ではこのアルファベットの地区名を用いている。

中西遺跡の一部である御所市担当地区（御所市名称のＥ地区）の調査は、中西遺跡全体の調査次数で言えば、第 12 次調査となる。発掘調査は平成 20 年度、平成 21 年度、平成 24 年度に実施し、それぞれを中西遺跡第 12 － 1 ～ 4 次調査と調査次数に枝番号を付けて整理した。

調査対象範囲は、京奈和自動車道建設予定地のうち、国道 309 号線を北限とし巨勢山丘陵の北裾付近を南限とした、南北約 650 m、東西約 60 ～ 80 mである。調査対象範囲が広範囲であるため、便宜上、道路や吉野川分水などの水路を基準に 5 つの小地区を設定し、図 4 に示したように、北から順に 1 区～ 5 区と呼称することとした。

1 区は、国道 309 号線を北限とし、南限はここから南に 130 mにある高低差 3 m以上の段差がある地点とした。2 区の北限はこの段差の上端とし、南限はここから南に約 90 mの地点にある市道室出走線までとした。3 区の北限はこの市道室出走線とし、南限は市道から南に約 120 mの地点にある、幅約 17 m、深さ約 2 mの東西方向の谷状の地形となる地点とした。4 区の北限はこの東西方向の谷地形とし、南限はここから南に約 130 mの地点に存在する吉野川分水の東西方向の水路までとした。5 区の北限はこの水路とし、南限はここから巨勢山丘陵の裾部に当たる地点までとした。巨勢山丘陵は、今般の自動車道建設工事ではトンネル工となるので、発掘調査の対象地の範囲もこのトンネルの取り付き位置までになる。

このように、対象地が広大になるうえに、当該調査地の現地形をみれば丘陵裾部にあたって尾根地形や谷地形が入り組んでいることから、実際に遺構が存在する範囲などをまず確定する必要があった。そこで、平成 20 年度に実施した第 12 － 1 次調査は、図 4 に示したように、調査地全体にできるだけ満遍なくトレンチを配置し、遺構の状態やその分布範囲を確認することを目的にした。

平成 21 年度は、第 12 － 2 次調査として、第 12 － 1 次調査の成果を踏まえて面的な発掘調査が必要な範囲を決定したうえで実施した。結果的に、2 区で 3,280㎡、3 区で 1,569㎡の調査区を設定した。また、これとは別に第 12 － 3 次調査として、平成 20 年度までに未買収地として調査

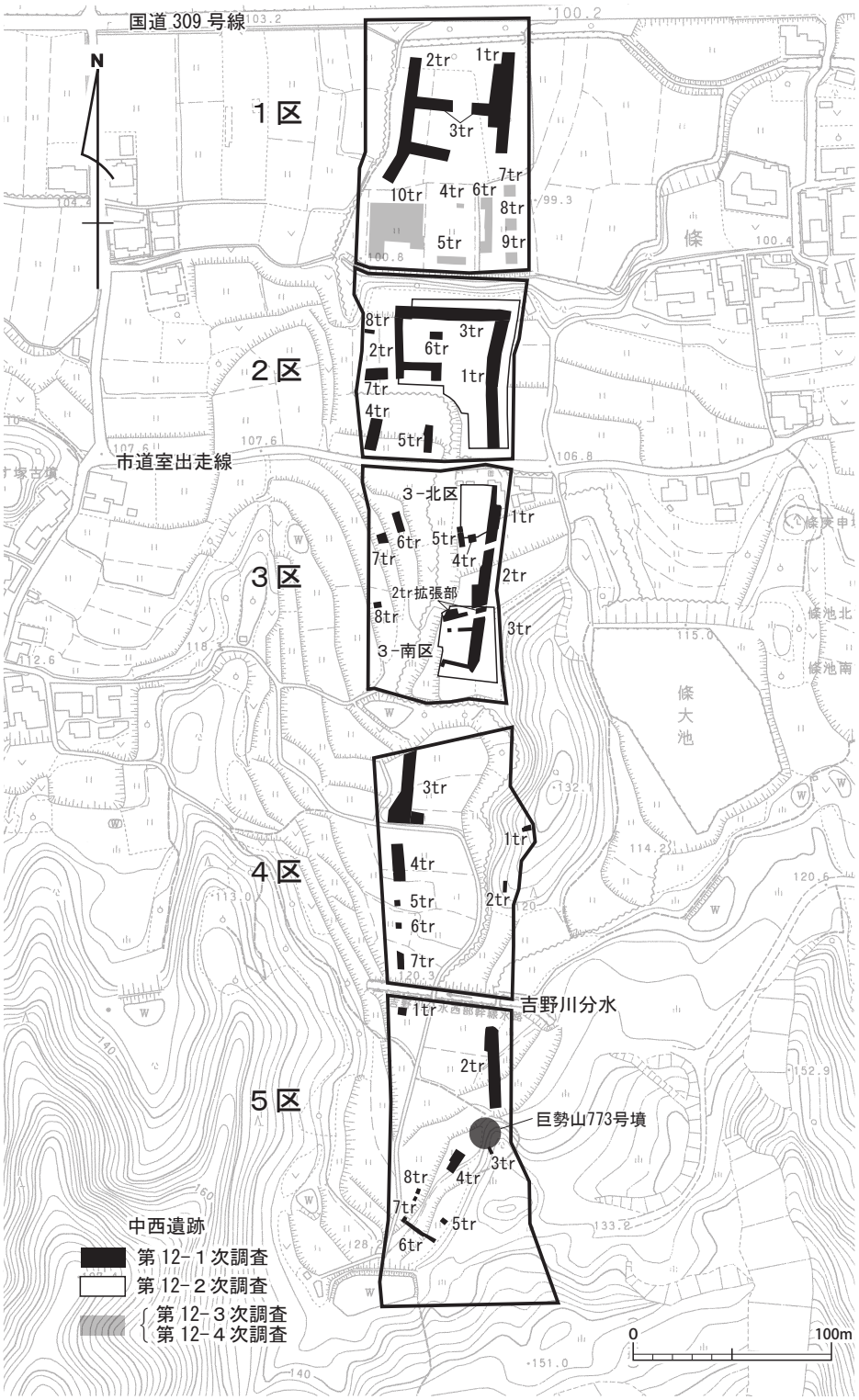


図４　中西遺跡　第 12 次調査　トレンチ配置図　（S.＝1/3,500）

不能であった1区の南半中央の箇所に、2ヶ所のトレンチを設定して層序の確認を行った。このトレンチを設定した箇所は、この調査後に自動車道の本体工事に先行して国道309号線からトンネル工事地点に至る工事車両の進入路となった。第12－3次調査を終了した時点で、土地買収など用地上の事情によって未調査になっていた1区南半部を除いて、当該調査地は調査完了となったので、工事担当に引き渡した。その後、道路の建設工事が始まった。

なお、その後平成22年8月に至り、條・室地区で建設工事を行っていたところ土器が完形で数点出土したと、工事担当者から当市教委に通報があり、実際にその土器が事務所に持ち込まれた。その出土地点は、結果的にみれば図4に示した巨勢山773号墳であった。

巨勢山773号墳は、この時点では周知の埋蔵文化財ではなかった。本来は、平成20年度の第12－1次調査において、次年度以降の調査対象地としてピックアップされるべきものであったが、遺憾ながら、見落とされたのであった。この事態を受けて、当市教育委員会は、工事担当者の協力を得て直ちに同墳の発掘調査体制を整えて発掘調査を実施した。その顛末ならびに調査成果は、既刊の報告書（奥田編2015）を参照されたい。

このような不測の事態が生じたものの、中西遺跡の第12次調査としては、上記のように、平成20・21年度に第12－1～3次調査を実施した。この時点で、未調査地として残っていたのは用地買収等の問題があった1区南半の東部と西部の地区であったが、当該地に関しても平成24年度には調査可能となったため、第12－4次調査として発掘調査を実施した。第12－4次調査は道路建設作業と併行して実施したものである。

各調査次数と調査区、調査期間、調査担当者の対応は以下の通りである。

第12－1次調査：調査区分等　トレンチ調査
担当　佐々木健太郎・西村慈子
調査期間　平成20年6月9日～平成21年2月27日

第12－2次調査：調査区分等　2区および3区の面的な調査
担当　佐々木健太郎・岡田圭司
調査期間　平成21年4月6日～平成21年8月31日
現地説明会（一般対象）　平成21年7月12日

第12－3次調査：調査区分等　1区南半中央部の調査
担当　佐々木健太郎
調査期間　平成21年9月28日～平成21年10月14日

第12－4次調査：調査区分等　1区南半東部および西部の調査
担当　奥田智子・井ノ上佳美
調査期間　平成24年9月5日～平成24年10月24日

以上の通り発掘調査を実施したが、結果的に、本書で報告した発掘対象の総面積は、9,400㎡と

なった。

以上のように、中西遺跡第 12 次調査の主担当は佐々木であったが、佐々木は上記の現地調査終了後に、朝町地区（F 地区　御所市教育委員会 2011）や巨勢山 773 号墳（奥田編 2015）などの現地調査担当となったため、中西遺跡の整理事業に専従することができず、その後、平成 23 年度末に退職した。

この後を受けて、整理作業は、第 12 － 4 次調査の担当者の一人である井ノ上が主担当となって進めた。ただし、井ノ上は本事業の主担当となりつつも、玉手遺跡における当初想定外の調査地区（大月池地区　木許・小泉・村島編 2017）の調査担当となったり、観音寺本馬遺跡の整理事業（木許・西村編 2015）を優先させる必要があったので、必ずしも本書の作成に専従できる環境になかった。井ノ上は平成 27 年度末に退職した。しかし、その時点で遺物の項を除く図面や写真を含めての整理を終えていた。報告書本文に関しても担当箇所の草稿を残した。

今次調査の報告書作成に向けた整理作業を推進できたことには井ノ上の功によるところが大きい。しかし、平成 28 年度に木許がその作業を引き継いで作業の総点検を行ったところ、残された原図・写真と整理されたトレース図面との間に、少なからず整合性のとれない箇所があることがわかった。それが、そもそも原図において誤謬があったり情報が不足しているために生じているのか、原図に対する解釈の間違いに起因する整理作業時の誤りであるのかなど、可能なかぎり検討した。そのうえで、木許が、残された本文の草稿を校閲して文章表現上の不備を大幅に修正することをはじめ、不整合な点の原因を追究して内容改変を含めて全体を調整した。

このような苦労が生じるのは、現地調査担当者が報告書の執筆、作成に最後まで関われなかったことが主要因ではある。しかし、このことによって調査担当者の意図や理解を報告書に反映できなかった点があるとすれば、その責は編著者である筆者に帰する。ただし、整理段階で原図を精査する過程で、二つの原図間での不整合や、本来記録されているべき情報が明らかに欠落しているなどという場面に幾度か遭遇したことも事実であった。このことも、現地調査担当者が整理を担当できれば、記憶などによる補いが一定程度は可能であったであろうが、それはかなわないことであった。

このような状況を踏まえて、今般の整理事業の基本方針を立てた。すなわち、原図の不整合については、複数の情報がある場合などで、その原因が特定できたうえで整合的な理解が可能であれば不備を補うように努めるが、当然のことであるが、原則として原図を改変することは行わないこととした。したがって、原図に情報そのものが欠落している場合は、もとより本書にそれを提示することはできないが、原図における不整合を解決できなかった場合にも、基本的に情報としては提示しない方針とした。本文中にはその都度、その旨を記した。

また上記のように、筆者は、整理作業の最終段階を引き継いで、文章を校閲し、文章表現を改め、内容に踏み込んで調整を行った。このため、特に第 4 章・第 5 章・第 7 章における遺物に関する記述を除いて、最終的な文責の多くを筆者が負っていることも明記しておく。

第３章　調査地の旧地形と基本層序

今次調査対象地は、南北方向に長い形状をしており、その長さはおよそ 650 mにわたる。調査地の標高は、北端の１区１トレンチの北端付近の現耕作土の上面で 100.6 m前後、南端の５区５トレンチ付近の現耕作土上面で 130.2 m前後あるので、約 30 mの比高差がある。

このように調査区は南が高く北が低い傾斜地になっているのであるが、図５に見えるように、３区以南は、その両側を南から手指状に延びてくる丘陵に挟まれている。この丘陵は、巨勢山丘陵の主稜線から北方向に幾筋も延びる尾根に当たる。すなわち、今次調査地の全体地形は、南は巨勢山丘陵によって閉じられていて、北の平地部に開く谷状の地形となっている。

今次調査地がそのような谷地形に当たっていることは、現地形をみれば容易に知られるところなのであるが、このことは第 12 － 1 次調査において対象地の各地点に設定したトレンチの断面観察の結果とも符合した。

第 12 － 1 次調査のトレンチの平面図および断面図は、図６～ 23・25 ～ 46 に示した。このうちの断面図を見ると、各地点における微地形の影響や各立地点の環境等によって堆積状況が異なっていることは理解できる。しかし、大枠を見ると、トレンチの立地点が低地に当たる場合には、土層の堆積状況は、基本的に水田耕作土である表土と地山に挟まれて谷堆積土が認められることがわかる。丘陵の斜面に当たる場合には､腐葉土である表土の直下に山側からの流出土が堆積していて、地山に至っていた。

今次調査地においては、基本層序の把握はこのような全体傾向として土層を大別したうえで、各地点の土層を具体的に細別していく方法が有効であった。すなわち、各調査区の土層は大きく次の５層に大別することが可能である。

１層は水田耕作土または山林部の腐葉土となる表土である。１層には現状での表土のほか現代の盛土（整地層）も含めた。

２層は灰褐色系統の粘質土または砂質土で、層厚は 10 ～ 90cm 程度であるが、おおむね 50cm 程度の堆積状況が多い。２層はおおむね調査区全体で認められ、谷地形が埋没した後に堆積したと考えられる。瓦器椀などの出土遺物から見て２層の堆積時期は中世以降とみられる。また、１区・２区・３区においては、２層を除去した層位で素掘溝を検出した。また、地点によっては、中世以降の整地層が存在していた。このような整地層は、生成の性格は異なるが層位の形成時期という観点からは同様に考えられるので、ここではこれも２層に含めた。

３層は谷埋土である｡調査区の全体に認められた｡検出し得た地点によってその色調などが異なっていたが、おおむね暗灰色系統の砂礫と砂、粘質土の互層となっている。

４層は暗褐色系統の粘質土および粘土や礫からなる堆積層で、調査区全体にみられる。層厚 20 ～ 120cm 程度と地点によって層厚が一定ではない。

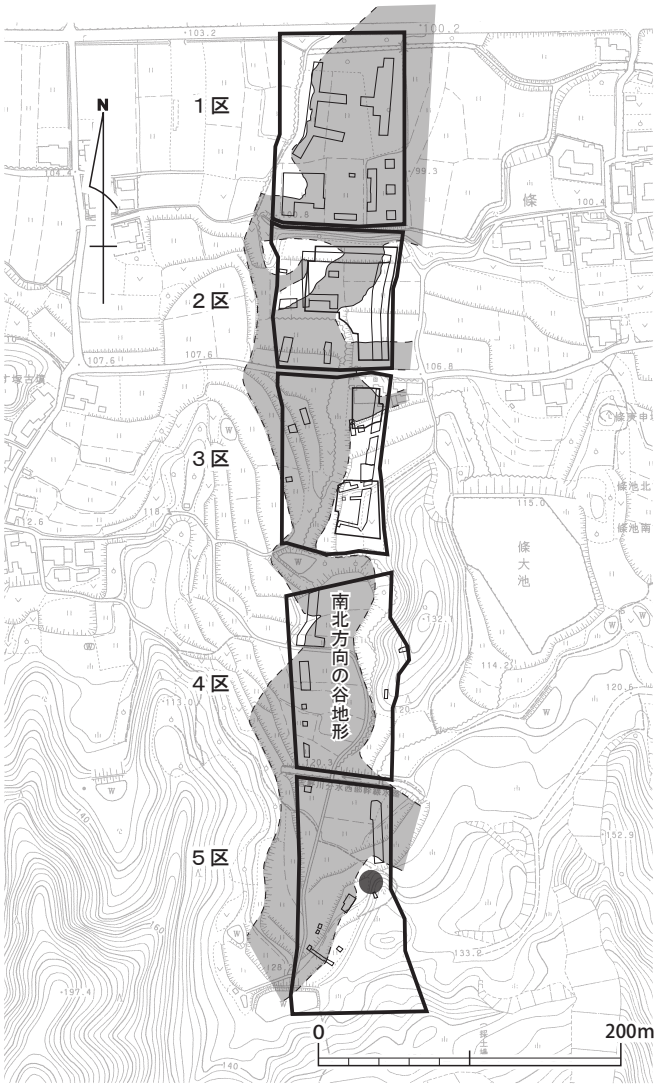


図５　調査地旧地形　復原図　（S.＝1/5,000）

５層は地山である。

３層には弥生時代や古墳時代の遺物のほか中・近世に至る時期の遺物が含まれていた。４層からは弥生時代から平安時代までの遺物が出土した。遺物相からすると、３層と４層の堆積時期には差異が少ない場合も多かったと思われるが、ここでは、谷部分に溜まって暗灰色系統の粘砂土となっているものを谷埋土として区別した。また、上記の図６～23・25～46のうち、トレンチの壁面土層図にはこの１～５層の大別を示したうえで、それぞれのトレンチごとに大別層に枝番号を付けて細分層した。この場合、大別層は、各調査区を跨いで同一の性格を有すると考えたものであるから、各図に同一のトーンを入れて統一的に示している。一方、細別土層は、土色や土質の違いによってそれを細分層したものであるが、トレンチを超えてまでは対応関係が追究されたものではない。したがって、例えば１区１トレンチの２－１層が、１区２トレンチの２－１層に必ずしも対応するわけではない。

このような当該地における土層の認識、および後述する調査の結果としての地山の形状を総合すると、図５にトーンで示したように、当該地の多くが谷地形に含まれることがわかった。また、その中でも、後述するように、２区の一部に微高地が認められたり、２区と３区の境界付近で、東方向に谷地形が延びているという状況である。繰り返すが、このことは調査の成果を総合した結果わかったことであるが、以下、記述の便宜上、調査区の全体地形であるこの谷地形を「南北方向の谷地形」と呼び、各調査地点がその谷地形のどの部分に当たっているかを記すことで説明を進める。

第４章　第 12 － 1 次調査（トレンチ調査）の成果

第 12 － 1 次調査のトレンチ総面積は 4,031㎡である。第 12 － 1 次調査は、調査区全体にできるだけ満遍なくトレンチを配置して、遺構の広がりや層位に関する見通しをつけ、次年度以降の調査区の範囲など、調査の方向性を定めることを目的にした。

第１節　１区

１．１トレンチ（図４・図６・図７）

図４に示したように、調査区北東部に長さ 51 m、幅 11 mの南北方向に長いトレンチを設定した。

基本層序は、図７に示したように、現代の耕作土、および近代の耕作土である１層が約 50cm ほど堆積し、その下層に整地土である２層、さらにその直下に谷埋土である３層が厚いところで約２mの砂礫層となっていることが確認できる。この３層の分布状況から、この地点が南北方向の谷地形の内側に当たっていることがわかる。地山は、３層の直下にあって、現地表面から浅いところで１m、深いところで 2.4 mの高さで検出されている。

また、図６に示したように、地山上で幅約６m、深さ 1.4 mの南北方向の流路状の落ち込みが検出されている。この位置は、南北方向の谷地形の底に当たるので、このような流路が谷の埋没過程で形成されたものであると考えられる。これ以外に人工的な遺構は認められなかった。

遺物は谷埋土層から弥生土器の壺（47 － 1 ）のほか室町時代の土釜（47 － 6 ）など年代幅のある遺物が出土した。なお、弥生土器（47 － 1 ）は谷地形の底付近から出土したものであるが、3 層は、細分層しても厚い場合には１m程度もの単位になるような堆積状況であるから、俄に遺物の年代と土層の堆積年代を結びつけることは難しい。

２．２トレンチ（図４・図８・図９）

図４に示したように、調査区北西部に長さ 66 m、幅６mの南北方向に長いトレンチを設定した。図９に示したように、トレンチの北半で、耕作土層直下に黄褐色粘土の地山を検出した。この地山はトレンチ西端から東に約２～３mの地点を上端として東向きの傾斜面になっている。この地点が、南北方向の谷地形の西岸にあたっている。また、トレンチ北端で、この地山面を掘り込む東西方向の素掘溝を２条検出した。

２トレンチにおいては、この谷地形の状況を探るため、トレンチの南端から北に 17 mの地点に、東方向に東西 20 m、南北６mの拡張部を設定した。拡張部では、東向きの斜面が段を形成しながら、さらに東に向かって下って行くことがわかった。

遺物は谷埋土層から土師器片や須恵器片などのほか、石包丁（48 － 16・17）が出土した。

３．３トレンチ（図４・図 10・図 11）

１区における南北方向の谷地形の状況をさらに確認するために、図４に示したように、１区１・２トレンチの間に、これらに直交する東西方向のトレンチを３トレンチとして設定した。トレンチ形状の詳細は図 10 に見えるように、トレンチを連続的な長いものにしないで、中央に未掘削の地点を残している。これは、後述するように、この地点が谷地形で地山面が現地表から２ｍ前後の深さであることが明確になって、遺構等が存在する徴候も認められなかったので、危険作業を避けたためである。

トレンチの規模は幅６ｍで、東側のトレンチは長さ 11 ｍ、西側のトレンチは長さ 19 ｍである。

基本層序は耕作土である１層とその直下に谷埋土である３層が確認できた。西側のトレンチの地山は、２トレンチ拡張部と同様に、段を形成しながら東に行くにつれて深くなっている。その深さは、現地表面から最大約 1.7 ｍであった。東側のトレンチでは現地表面から約２ｍの深さで地山が検出された。地山直上の堆積土は、灰褐色砂礫などが主体で、谷埋土の様相を呈していた。この状況から、当該地点が、南北方向の谷地形の内に含まれていることがより明確になった。

遺物は谷埋土層から弥生土器の甕（47－３）や平安時代中頃の土師器皿（47－５）があった。このほか、中世の土釜なども出土していて、出土遺物には相当な時期幅がある。

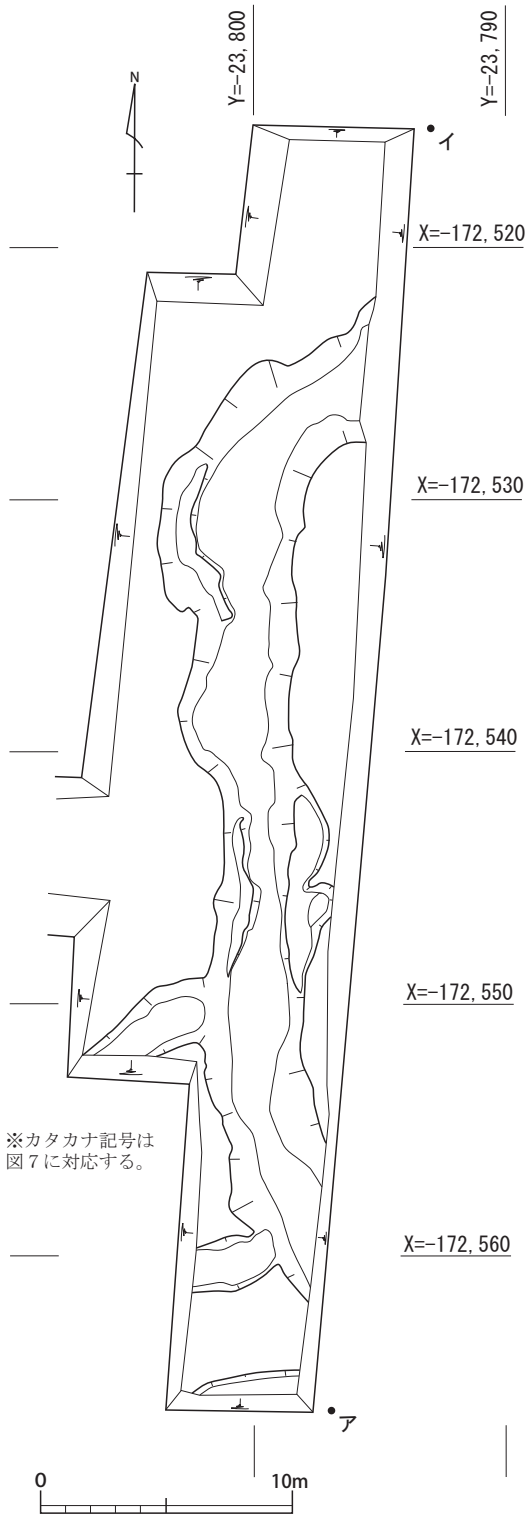
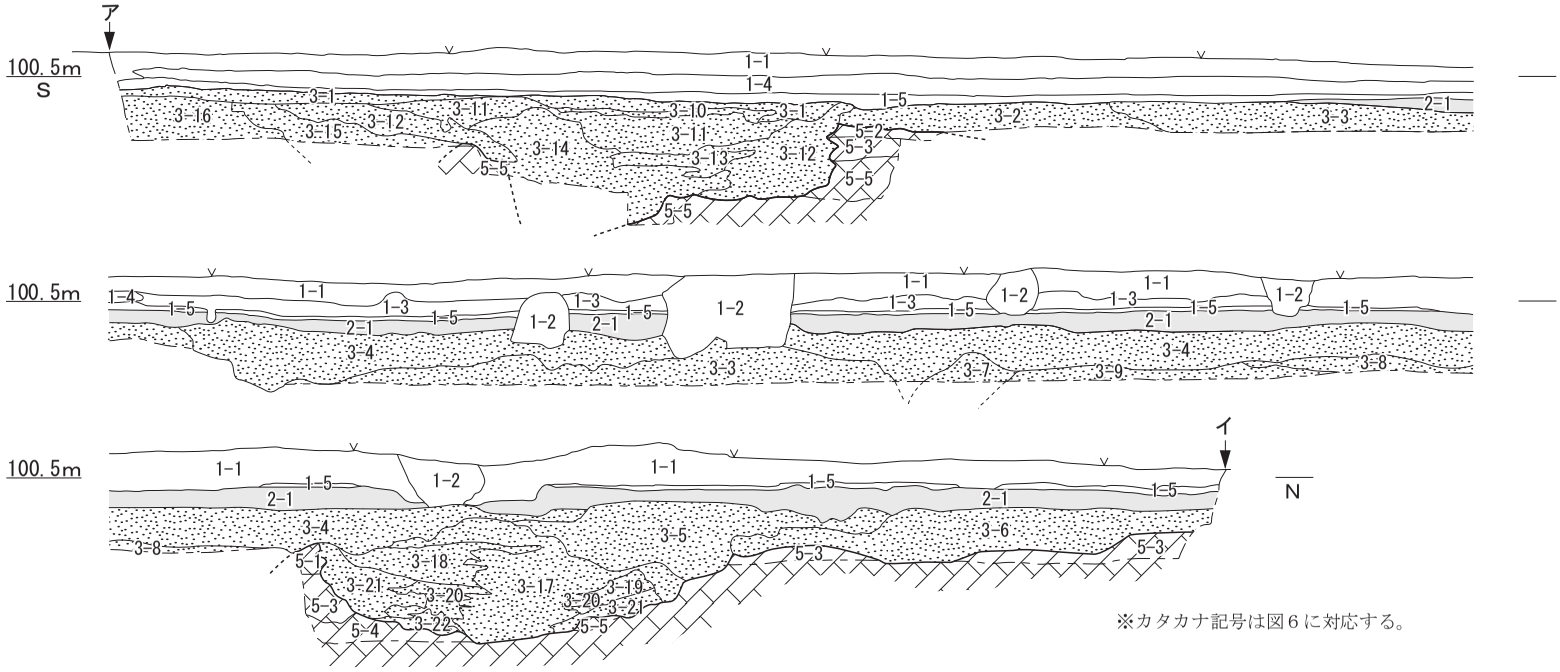


図６　１区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/300）



※カタカナ記号は図６に対応する。

1－1．現耕土
1－2．現代攪乱
1－3．旧耕土
1－4．バラス
1－5．床土（明黄褐色）
2－1．明灰白色礫混じり砂質土
3－1．灰褐色礫混じり砂質土
3－2．褐色砂礫（礫主体）
3－3．明黄褐色または暗青灰色砂礫混じり粘質土
3－4．灰褐色砂礫、粘土ブロック混在層
3－5．明灰褐色砂礫、粘土ブロック混在層
3－6．灰褐色砂礫（礫主体、鉄分がラミナ状に沈着）
3－7．明黄白色または青灰色細砂からシルト
3－8．赤褐色砂礫
（上半は礫が多く、下半は粗砂主体。固くしまる）
3－9．明黄白色または青灰色粘土
3－10．淡灰褐色シルト混じり粘土
3－11．灰色砂礫（粗砂主体）
3－12．黒褐色砂礫混じり粘土
3－13．暗黒灰色シルト
3－14．白褐色砂礫（礫主体）
3－15．３-12層と３-16層の混在層
3－16．灰褐色砂礫混じり粘質土または砂礫
3－17．褐色砂礫（粗砂主体、鉄分多量に沈着）
3－18．灰色砂礫ブロック混じり粗砂（鉄分沈着）
3－19．黒色粘土
3－20．黒色シルト混じり細砂
3－21．黒色砂礫混粘土
3－22．褐白色砂礫（礫主体）
5－1．暗青灰色砂礫（礫主体）
5－2．明褐色砂礫混じり粘質土
5－3．灰色砂礫（粗砂主体）
5－4．灰色砂礫混じり粘土
5－5．青灰色砂礫混じりシルト

0　5m

図７　１区　１トレンチ　東壁　土層断面図　（Ｓ.＝1/100）

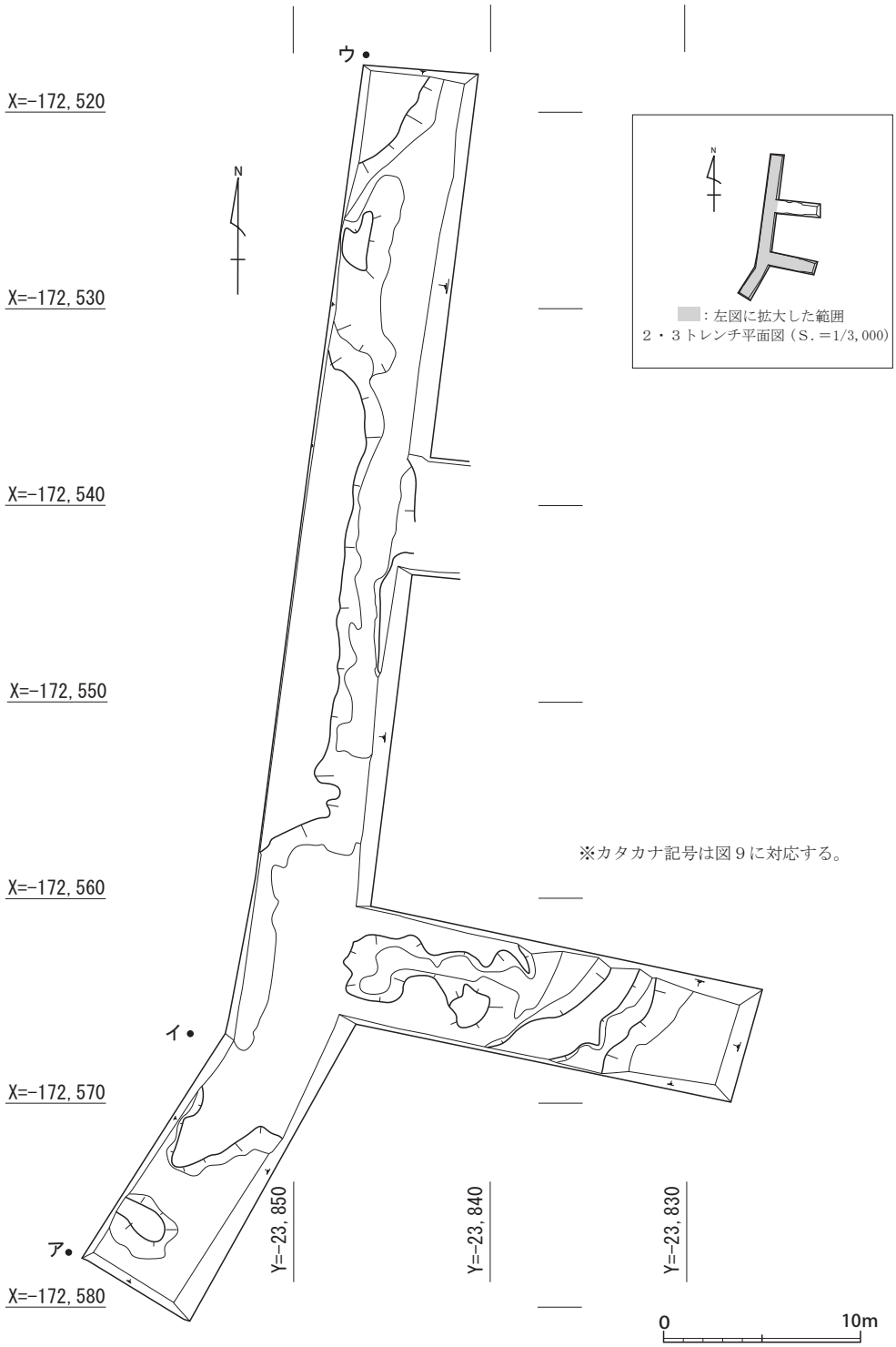
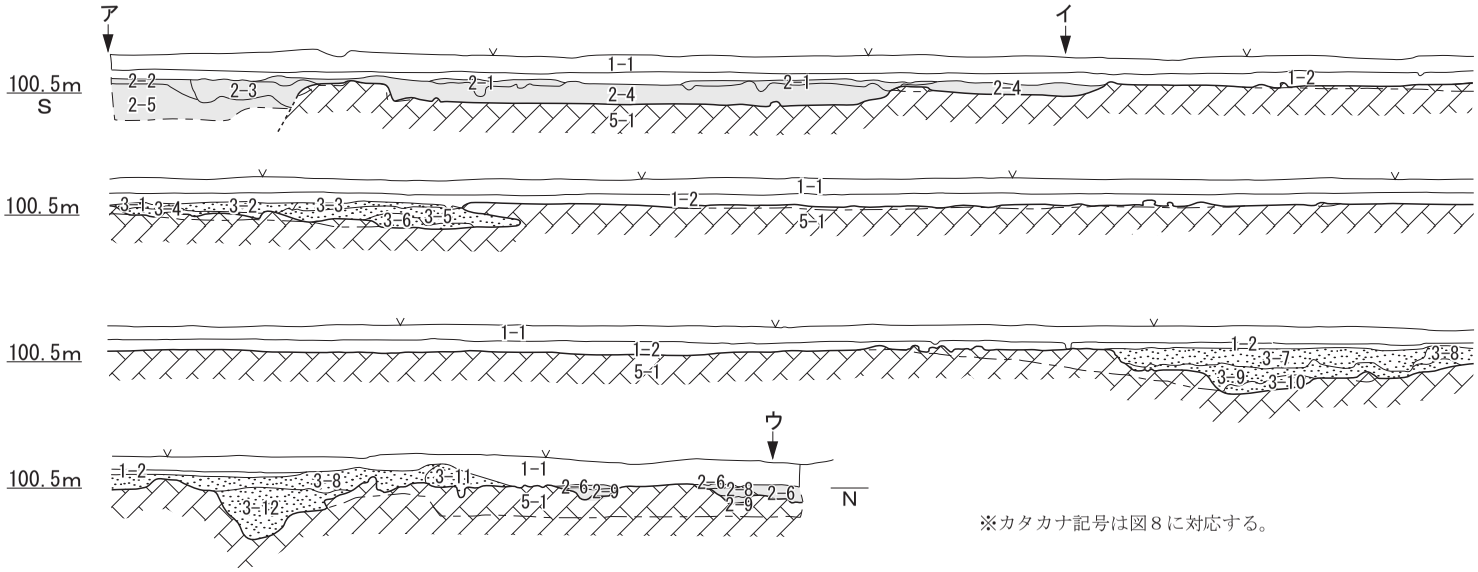


図８　１区　２トレンチ　平面図　（S.＝1/350）



※カタカナ記号は図８に対応する。

1-1．現耕作土
1-2．旧耕土と床土の混在層
2-1．灰色砂礫混じり粘質土
2-2．灰色粗砂（礫主体）
2-3．灰褐色砂礫（礫主体、鉄分沈着）
2-4．灰色砂礫混じり粘質土（灰黄色のシルトブロック混じる）
2-5．灰白色砂礫（礫主体、鉄分沈着）
2-6．褐灰色粘質土（灰白色砂礫混じる）
2-7．灰白色砂礫
2-8．黄灰色砂礫混じり粘質土（礫主体）
2-9．２-８層と５-１層の混在層（30%－70%）
2-10．灰白色砂礫混じり粘質土

3-1．灰色粗砂
3-2．黄褐色シルト質粘土
3-3．灰色砂礫（礫主体）
3-4．灰色砂礫（礫主体、下半に鉄分沈着）
3-5．赤褐色砂礫（礫主体、鉄分が多量に沈着）
3-6．黒灰色砂礫（黄白色シルト質粘土ブロック混じる）
3-7．濃灰色礫混じり粘質土
3-8．褐灰色粘質土（鉄分沈着）
3-9．灰色中砂から粗砂（黄灰色シルト質粘土ブロック混じる）
3-10．灰褐色砂礫（鉄分沈着）
3-11．黒灰色粘質土（しまり悪い）
3-12．灰褐色砂礫（礫主体）
5-1．褐色砂質土（やや粘性あり。バイラン土含む）

0　5m

図９　１区　２トレンチ　西壁　土層断面図　（S.＝1/100）

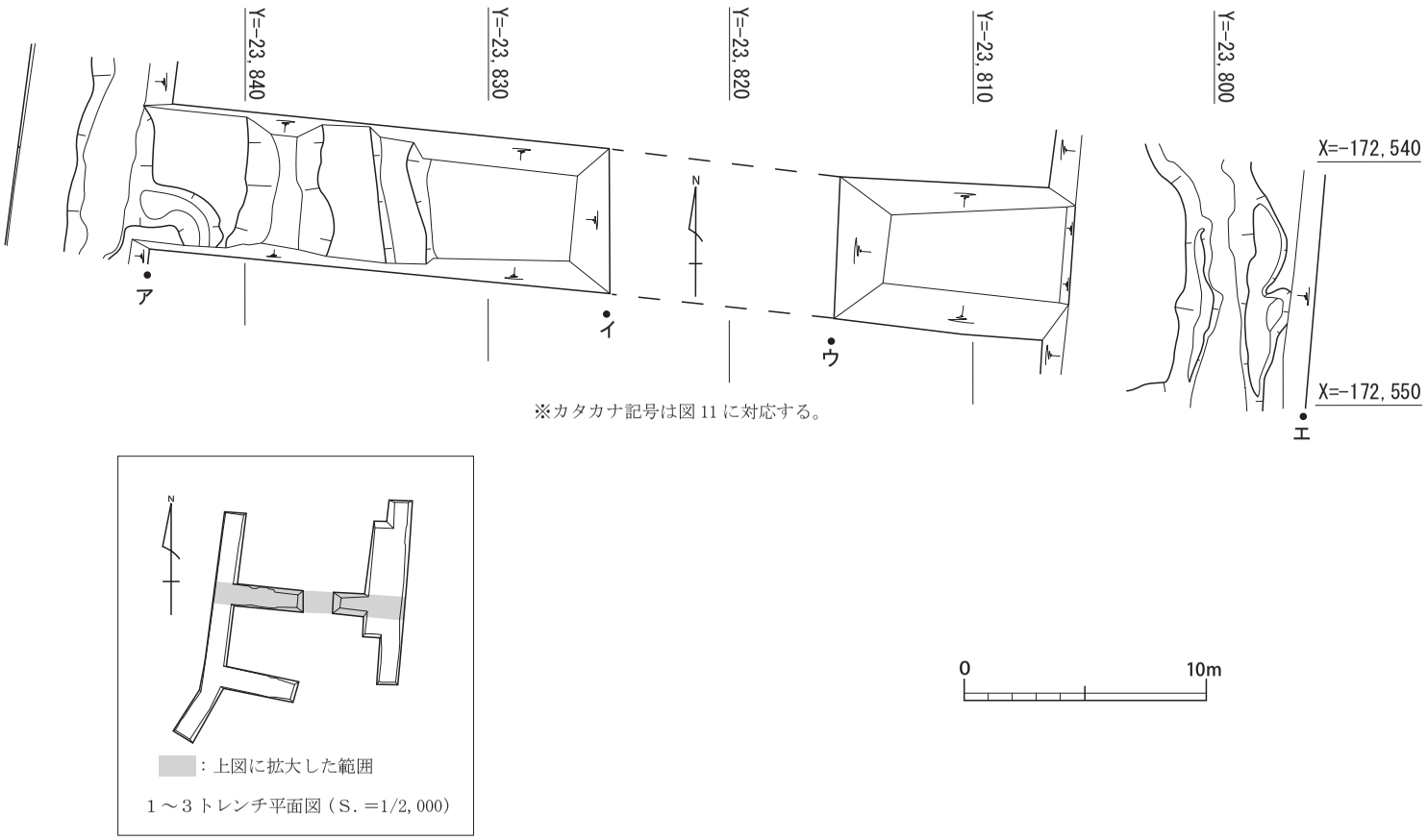
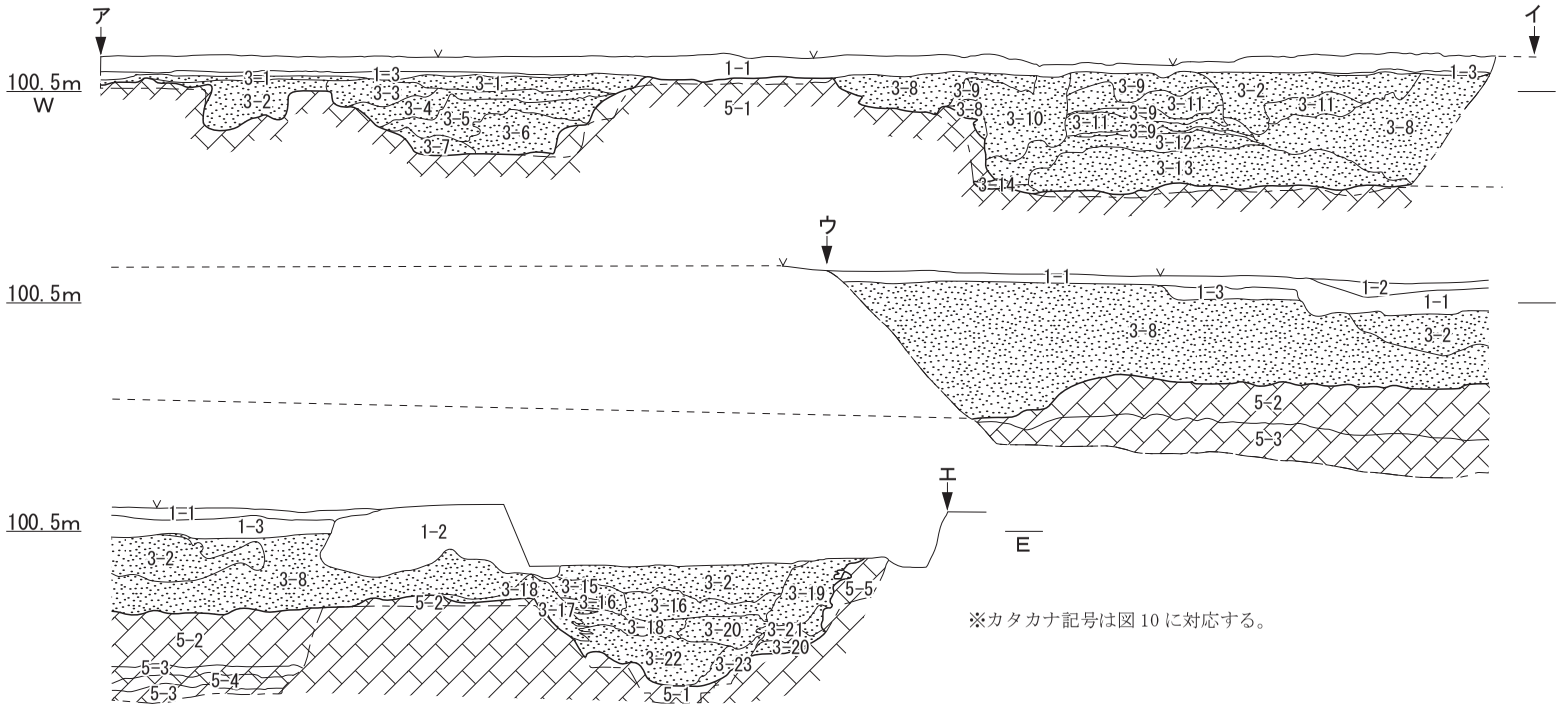


図 10　1 区　3 トレンチ　平面図　（S.＝1/300）



1－1．現耕土
1－2．近・現代攪乱
1－3．旧耕土または床土
3－1．灰褐色礫混じり粘質土
3－2．灰白色粘土ブロック、明褐色粘質土ブロック、灰色砂礫ブロックの混在層
3－3．灰白色砂礫
3－4．暗灰色粘質土（鉄分がまだらに沈着）
3－5．灰褐色砂礫（東半は細砂、西半は砂礫が主体）
3－6．灰褐色砂礫（細砂主体、鉄分がまだらに沈着）
3－7．暗灰色砂礫混じり粘質土
3－8．灰褐色砂礫（礫主体、固くしまる）
3－9．明白色シルト
3－10．3－8、3－9、3－11、3－12層の混在層
3－11．褐色砂礫（礫主体、固くしまる）
3－12．薄黒色シルト（有機物を多く含む）
3－13．褐色砂礫（礫主体）
3－14．明灰褐色砂礫
3－15．黒色砂礫混じり粘質土
3－16．淡暗赤灰色粘質土と褐色砂礫の混在層
3－17．灰色粘土
3－18．暗灰色細砂
3－19．淡黒色粘土（白色礫少量含む）
3－20．明褐色砂礫（粗砂主体）
3－21．暗灰色細砂から中砂
3－22．黄白色砂礫（粗砂主体）
3－23．黒色粘土
5－1．青灰色砂礫混じり粘土
5－2．暗灰色砂礫混じり粘質土
5－3．灰色砂礫
5－4．青灰色シルト質粘土
5－5．黄灰色シルト質粘土（鉄分沈着）

0　5m

図 11　１区　３トレンチ　南壁　土層断面図　（S．=1/100）

第２節　２区

１．１トレンチ（図４・図 12・図 13）

図４に示したように、２区東端付近に長さ 64 m、幅６ｍの南北に長いトレンチを設定した。ここでの土層の堆積状況は、図 13 のトレンチ東壁断面図に示したように、全体に現水田耕作土である１層があり、その下層は、南端から 52 ｍの地点までは整地土である２層が見られた。１層や２層を除去すると直下に地山が見れた地点もあるが、南端から 12 m程のまでの範囲には灰褐色系統を主体する谷埋土が認められた。谷埋土は、この地点では現地表から２m程度まで掘削したが、危険作業を避けるために谷底までは検出していない。

一方、トレンチの北半部は２層下に、弥生時代または古墳時代の遺物を包含する４層を確認した。４層は厚いところで 50cm 程度になるが、おおむねこれよりも薄い堆積である。この４層を除去すると地山に至り、地山面上で遺構が検出された。

検出された遺構は、図 12 に示したように、竪穴住居・ピット・溝である。

溝のうち、そのほとんどは中世の素掘溝である。素掘溝はトレンチ北半で検出でき、東西方向のものと南北方向のものがある。その規模は、東西方向の素掘溝が幅 20 ～ 40cm、南北方向の素掘溝が幅 15 ～ 30cm である。素掘溝の切り合い関係は、東西方向の溝が南北方向の溝を切っている。これらの素掘溝は、同一面に存在する様々な遺構を切っていた。

竪穴住居は計４棟が検出された。図 12 に示したように、これらの住居はトレンチの外側に広がることが認められた。この時点で、当該地点は調査区を拡張しての面的な調査が必要であるとの判断ができたので、遺構掘削については、上記の素掘溝を除いては埋土の除去を行わなかった。各遺構の精査は翌年度に実施した、第 12 － 2 次調査によって実施した。したがって、これらの住居などの遺構に関する詳細は、第 12 － 2 次調査における２区の成果をまとめた第５章第１節を参照されたい。

トレンチの南端部では、上記のように、これとは別に地山が南方向に下がって行くことを確認した。つまり、ここに東西方向の谷地形が存在することがわかった。ただし当該トレンチでは、その谷地形の上端は、北岸に当たる部分が検出できたのみで、南岸に当たる上端は検出されなかった。南岸は市道を隔てて南側に位置する、３区１トレンチ辺りに存在するかと想定されたが、後述するように、そこではトレンチの北端に地山の高い部分があり、さらにその南側に谷地形の南向きの斜面が検出された。この状況を見ると、２区１トレンチ南端で見られた南向きの斜面の対岸が単純に３区１トレンチ内にあるのではなく、一旦市道のある付近で盛り上がり、３区の範囲内で再び南側に下る地形であることが復原できる。つまり、ここには２区南東端付近と、３区北東端付近の２箇所に平行して東西方向の２条の谷地形が存在しているとみられる。したがって、北側の谷地形すなわち２区の東西方向の谷地形の上端間の幅は、実際に検出できたわけではないが、この状況から 25 m程と復原することができる。また、深さは現地表から約２m以上があることを確認したが、

この深さまで掘削を行った時点で湧水量が増加し、トレンチ壁面が崩壊する可能性があったため、危険作業を避けこれ以上の掘削は行わなかった。

遺物は東西方向の谷地形の斜面の下端付近から弥生土器が出土した。それらは比較的残存状況が良好なものが多く、なかにはほぼ完形の弥生土器甕（85－15）があった。土器以外では、同じ谷地形の底付近から杭や木樋などの木製品が出土した。

２．２トレンチ（図４・図 14・図 15）

２区西端に、長さ 31 m、幅４mの南北に長いトレンチを設定した。トレンチ内の土層の堆積状況および旧地形は、図 15 に示したように、トレンチの中央付近が高くなっていて、現耕作土である１層の直下に地山が検出された。

トレンチの北半部には、幅 10 m、深さ 1.3 m以上の落ち込みがあった。南半部には、南北方向の溝と、北東－南東方向の溝がそれぞれ検出された。

北半部の落ち込みの埋土は黄褐色系統の粘土で、後の 12 － 2 次調査でその東側を拡張した際に、落ち込みの東上端はこれより東に大きくは広がらないことが確認できた。最終的に、この落ち込みは南北方向の谷地形の一部であると理解した。

トレンチ南半の南北方向の溝は、地山面上で検出したもので、幅２m程である。深さに関しては、調査記録が残されていなかったために、ここでは提示できない。

北東－南西方向の溝は、当初トレンチの幅内の長さが検出されたのみであった。そこで、この部分での遺構の広がりや層位を確認するために、トレンチの南端付近に、図 14 に示したように、東方向に長さ 19 m、幅４mのＬ字形の拡張部を設定した。

この範囲で、先の北東－南西方向の溝の長さは約

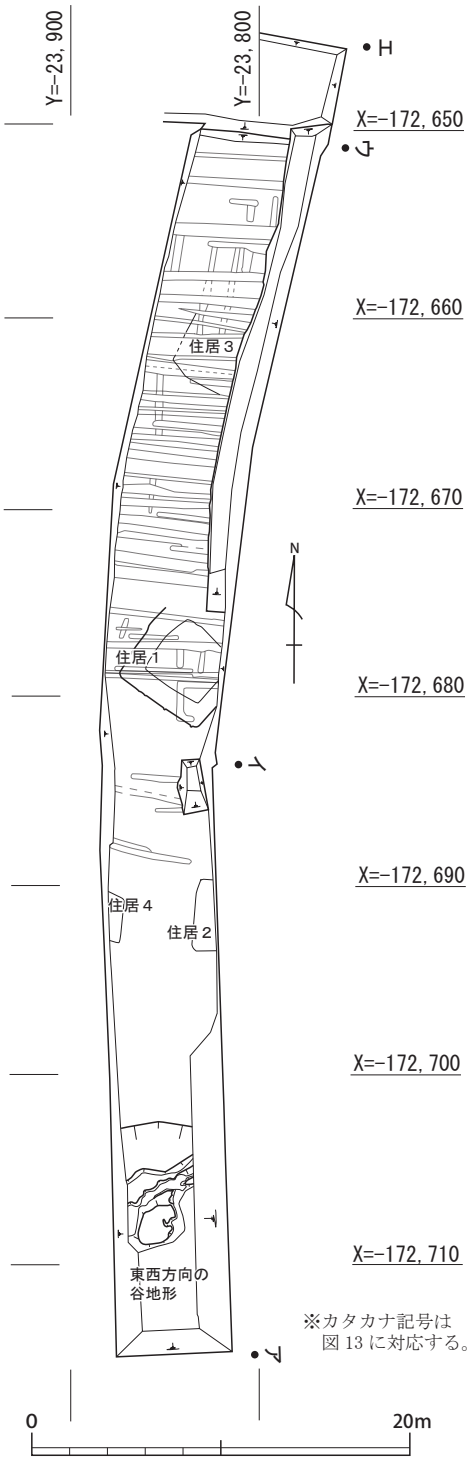
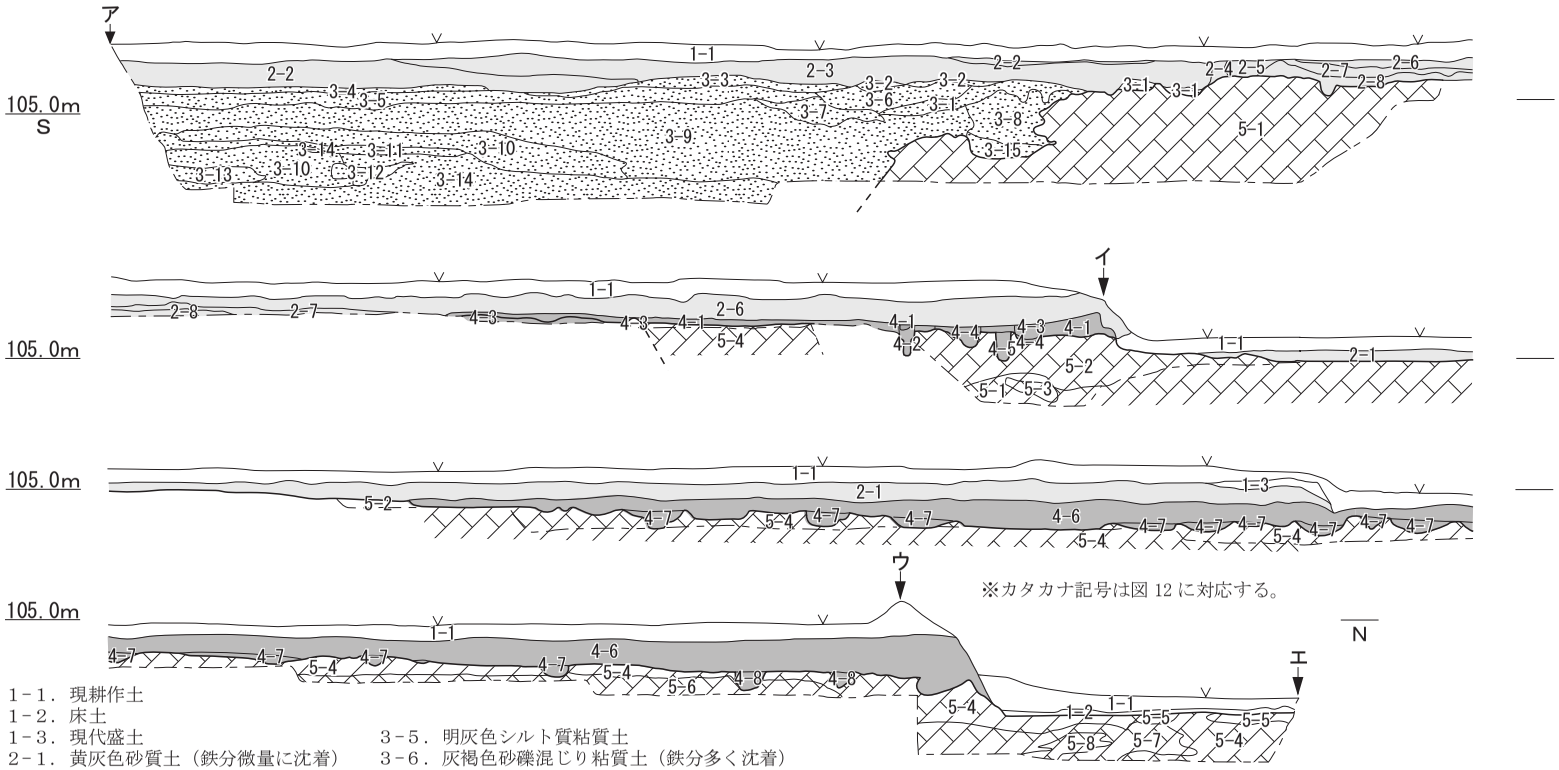


図 12　２区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/400）



1－1．現耕作土
1－2．床土
1－3．現代盛土
2－1．黄灰色砂質土（鉄分微量に沈着）
2－2．黒色粘質土
2－3．灰褐色砂礫と暗灰色粗砂の混在層
2－4．乳灰色微砂からシルト
2－5．褐色砂礫
2－6．灰褐色粘質土
（鉄分沈着。白色礫含む）
2－7．暗灰褐色砂礫混じり粘質土
2－8．赤褐色砂礫混じり粘質土
3－1．灰褐色砂礫混じり中砂から粗砂
3－2．灰色細砂から微砂（鉄分沈着）
3－3．暗褐色粘質土
3－4．明黄緑灰色砂質土
3－5．明灰色シルト質粘質土
3－6．灰褐色砂礫混じり粘質土（鉄分多く沈着）
3－7．灰色礫混じり粘質土
（鉄分がまだら状に沈着）
3－8．暗灰色粘質土（白色礫含む
3－9．暗灰褐色砂礫混じり砂質土）
3-10．白色砂礫と灰色粗砂混じりシルトの混在層
3-11．青灰色粘質土混じり砂礫
3-12．青灰色シルト
3-13．青灰色粗砂
3-14．暗灰褐色砂礫混じり砂質土
3-15．白褐色礫
4－1．灰色砂礫混じりシルト（鉄分沈着）
4－2．暗褐色礫混じり粘質土（しまり良い）
4－3．黄灰色粗砂
4－4．黄灰色細砂
4－5．黒色粘質土
4－6．明黄灰色砂礫
4－7．黄灰色細砂
（鉄分微量に沈着）
4－8．灰色砂質土
5－1．緑黄灰色砂礫混じり粘質土
5－2．明褐色砂質土
5－3．黄灰色細砂
5－4．灰色細砂混じり砂礫
（暗褐色砂質土の３cmブロックが見られる）
5－5．褐色砂礫混じり粘質土
5－6．暗褐色砂礫混じり粘質土
（白色礫多量に含む）
5－7．緑灰色細砂から中砂
（１cmの鉄分がまだら状に少量沈着）
5－8．灰褐色砂礫混じり細砂

0　5m

図 13　２区　１トレンチ　東壁　土層断面図　（S.＝1/100）

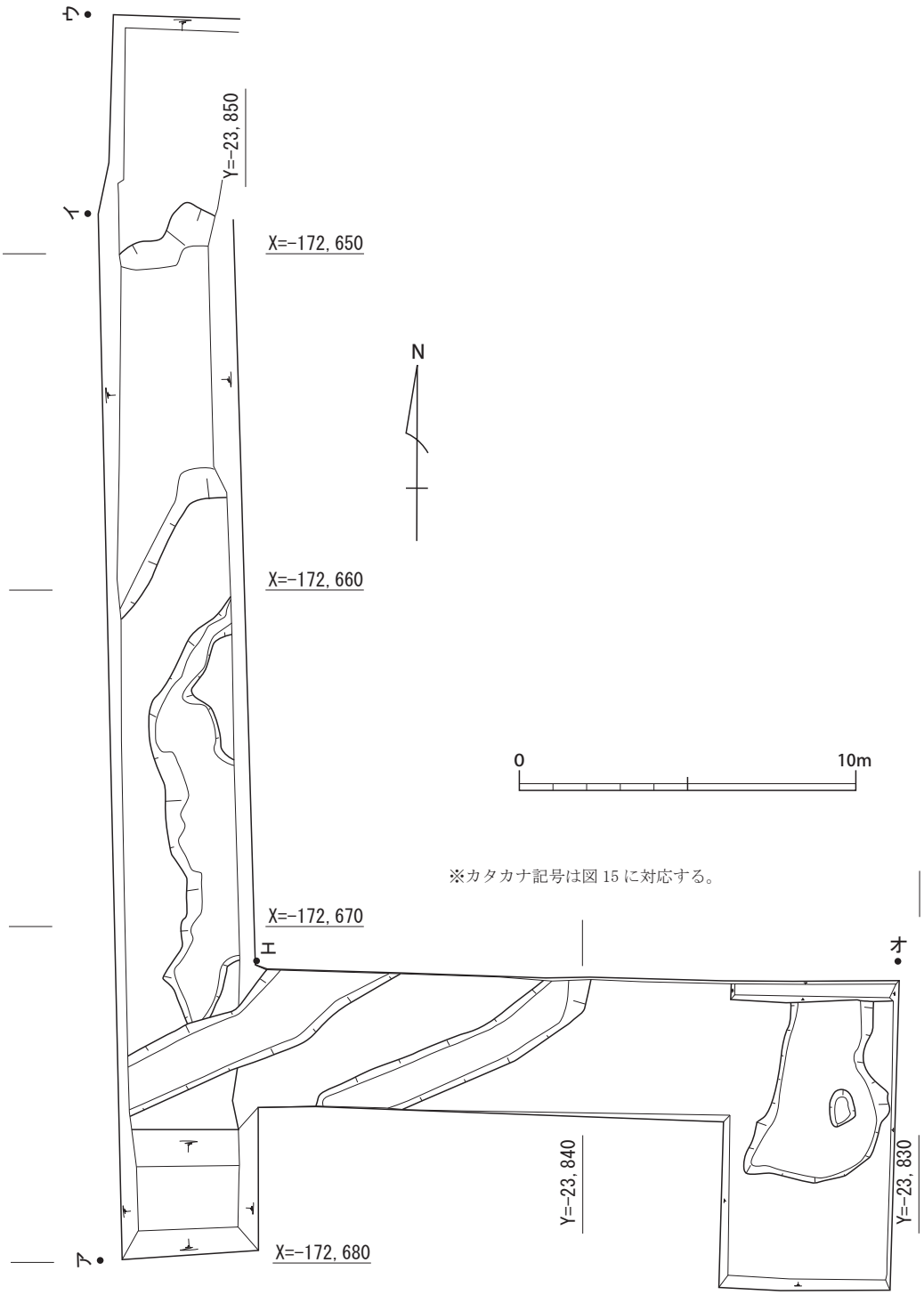
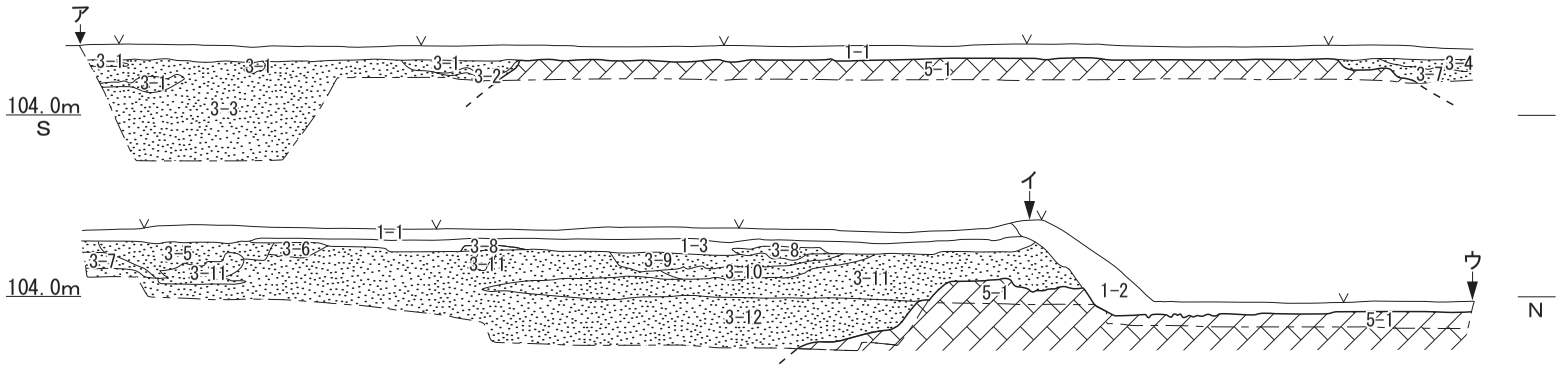
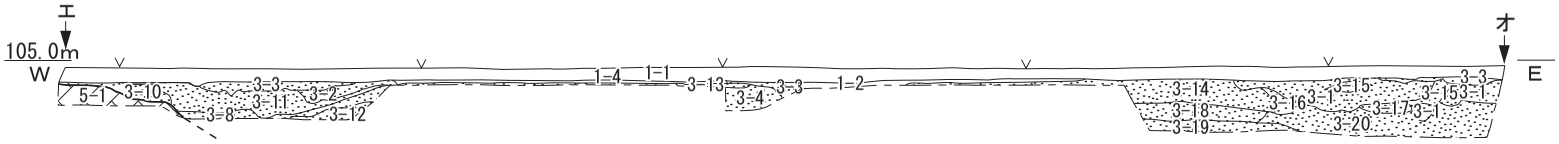


図 14　２区　２トレンチ・同拡張部　平面図　（S．=1/200）



2区2トレンチ　西壁

1-1．現耕作土
1-2．棚田盛土
1-3．灰黄緑色砂質土
3-1．暗褐色または黒色粘土（白色礫混じる）
3-2．暗褐色砂礫混じり粘土
3-3．褐色砂礫
5-1．明褐色砂礫混じり粘質土
3-4．褐色砂礫混じり粘質土
3-5．褐白色砂礫（粗砂から礫主体）
3-6．暗灰色砂礫混じりシルト
3-7．淡緑色シルト（上半に明褐色の鉄分沈着）
3-8．暗赤黒色砂礫混じり粘質土（白色礫混じる、粘性強い）
3-9．暗灰色細砂から中砂
3-10．灰褐色粗砂混じりシルト
3-11．淡黄色シルト
3-12．褐色砂礫（粗砂主体、3-3層より礫粗い）



2区2トレンチ拡張部　北壁

※カタカナ記号は図14に対応する。

1-1．現耕作土
1-4．床土
3-1．黒色砂礫混じり粘土（白色砂粒と灰白色砂含む）
3-2．暗褐色砂礫混じり粘土
3-3．灰白色砂礫土
3-4．暗黄褐色シルト混じり粗砂
3-8．灰白色シルト混じり粗砂
3-10．褐色砂礫土
3-11．黄褐色粘土
3-12．黄褐色粘土（黒色砂礫混じり粘土ブロック混じる）
3-13．黒灰色粘土
3-14．灰白色粘土（黒色砂礫混じり粘土ブロック含む）
3-15．灰白色砂（白色砂粒含む）
3-16．灰褐色粘土（白色砂粒多く含む）
3-17．灰褐色砂礫土
3-18．褐色粘土
3-19．暗灰色シルト
3-20．淡灰色粘土
5-1．黄色砂礫混じり粘土

0　5m

図15　2区　2トレンチ　西壁　土層断面図・同拡張部　北壁　土層断面図　（S.＝1/100）

７ｍが検出された。また、これと併行する別の溝もその東側に検出された。深さはいずれも 20cm 程度である。

これらの溝が形成される遺構基盤層は地山ではなく、図 15 に示したように、谷埋土となっている。すなわち、これらの溝は谷地形が埋没していく最終段階に、その埋土に形成された流路としての性格をもつ溝であると理解される。このことは、第 12 － 2 次調査において、このトレンチを拡張して面的な調査を実施した際に、より明瞭になった。

遺物は、須恵器瑕（89 － 24・25）や古墳時代中期の蓋形埴輪の破片（90 － 29）などが、南北方向の谷地形の下端付近から出土した。

３．３トレンチ（図４・図 16・図 17）

図４に示したように、２区北端付近に、１トレンチの北端と２トレンチの北端を繋ぐ、長さ 59 ｍ、幅５ｍの東西に長いトレンチを設定した。この地点は、現状の耕作地の造成のために、１トレンチや２トレンチの北端から高低差約 1.2 ｍの段差になって下がっている。

３トレンチの土層の堆積状況は、図 17 に示したように、トレンチの西半では現耕作土である１層を除去すると、その直下で地山が検出された。

また、トレンチの西端から約 30 ｍ東の地点から、地山が下りはじめ、約 40 ｍ地点から急激に深くなっていることも同図から見て取れる。このように地山が深くなっていくのは、当該地点が、図５に示したように、南北方向の谷地形の内にある微高地から東に下る上端に当たっているためである。

また、図 16 に示した平面図には、トレンチの中央付近に溝状の落ち込みが示されている。この地点は、その後の第 12 － 2 次調査においても、南北

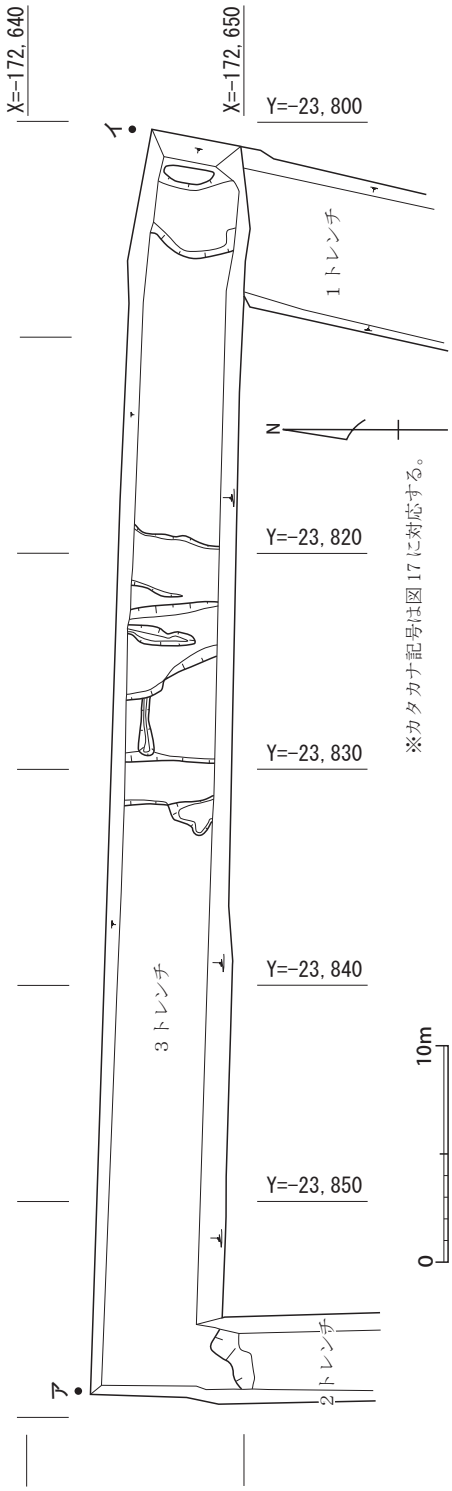
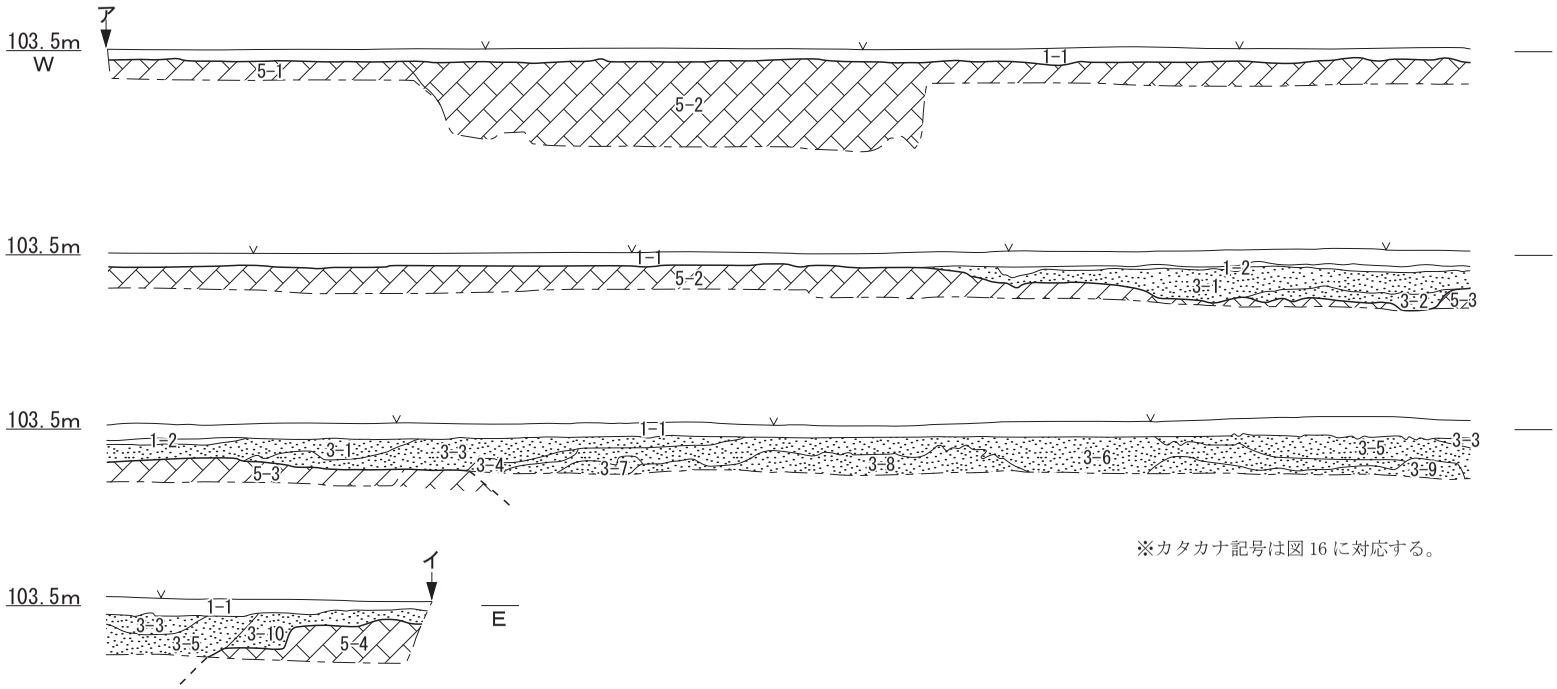


図 16　２区　３トレンチ　平面図（S.＝1/350）



※カタカナ記号は図 16 に対応する。

1－1．現耕作土
1－2．暗橙色砂礫混じり粘質土
3－1．黒褐色砂礫混じり粘土
3－2．黒褐色粘土
3－3．暗褐色細砂からシルト混じり砂礫（白色礫を含む）
3－4．褐色シルト
3－5．褐色砂礫混じり粘質土
3－6．緑灰色細から中砂（白色礫を多く含む）
3－7．灰色砂礫混じりシルト
3－8．明橙色砂礫混じりシルト（やや粘性あり）
3－9．緑灰色細から中砂（鉄分沈着）
3-10．暗褐色砂礫（白色礫を多く含む）
5－1．青灰色粘土
5－2．灰褐色砂礫（白色礫を多く含む）
5－4．暗灰色砂礫混じり粘質土（白色礫を多く含む）
5－5．暗橙色砂礫混じり粘質土

0　5m

図 17　２区　３トレンチ　北壁　土層断面図　（S.＝1/100）

方向の谷地形に当たっていることが確認されているので、このような溝状の落ち込みは、２トレンチでも見られたように、谷地形が埋没していく過程で小さな流路としてできた溝であったと理解できる。なお、周辺を面的に調査した第 12 － 2 次調査結果と、3 トレンチの調査成果を合成した図 57 には、この溝状の遺構の南側への繋がりが記録されておらず、北方向への繋がりにも不整合が生じている。当該地点は、上記のように現状での水田区画に近い地点に当たっており、南側が約 1.5 m高くなっている。このような段差のために、南側の状況がうまく検出できなかったのかもしれないなどと考えられるものの、その原因は整理段階ではよく判らなかった。

遺物はこの溝状遺構から、弥生時代後期の土器片と古墳時代とみられる須恵器の破片や土師器の破片、磨製石斧などが出土している。

４．4 トレンチ（図 4 ・図 18）

２区の南西隅付近に長さ 17 m、幅 6 mの南北に長いトレンチを設定した。このトレンチの中央付近から北側は、耕作地造成によって高低差 1.2 mの段差になって下がっている。

土層の堆積状況は、図 18 の土層断面図に示したように、現代耕作土である 1 層を除去すると、整地土である 2 層があり、さらに、その下層には谷埋土となる 3 層が堆積していた。この 3 層を除去すると地山が見られた。地山は、トレンチの南西部では現地表面から 1 m強の深さにあったが、トレンチ内で小さな段を形成しながら北東方向に下がっていて、北端部付近では 2.5 m以上の深さがあった。3 層の谷埋土はこのような傾斜面上に堆積していたものであるから、この地点が南北方向の谷地形の内にあることがわかる。ただし、トレンチの南端部付近の地山の深さからみて、この付近は、谷の上端に比較的近い位置であろうと推定される。

なお、図 18 に提示した土層断面図には、南半部分の地山の高さが記録されていなかった。一方、平面図には地山の形状が表現されているとみられるので、両図には不整合がある。図版 5 をみると、調査の過程でこの部分の谷埋土が除去されなかった段階があることがわかり、平面図はその状態を図化したものとも思える。すなわち、当該トレンチでは本来除去するべき土が完全には除去されなかった可能性がある。

遺物は谷埋土層から土師皿や土師器の甕の底部片、須恵器片が出土した。

５．5 トレンチ（図 4 ・図 19）

図 4 に見えるように、 4 トレンチから東に約 20 mの地点に長さ 14 m、幅 4 mの南北に長いトレンチを設定した。この地点は、2 区南端の中央付近に当たっている。

トレンチの中央付近から北側は、図 19 の平面・断面図に示したように、現状の耕作地造成によって高低差 1.3 mの段差になって標高が低くなっている。土層は、同図に見えるように、 4 トレンチと同様で現耕作土層である 1 層、整地土である 2 層、谷埋土層である 3 層が堆積している。3 層に

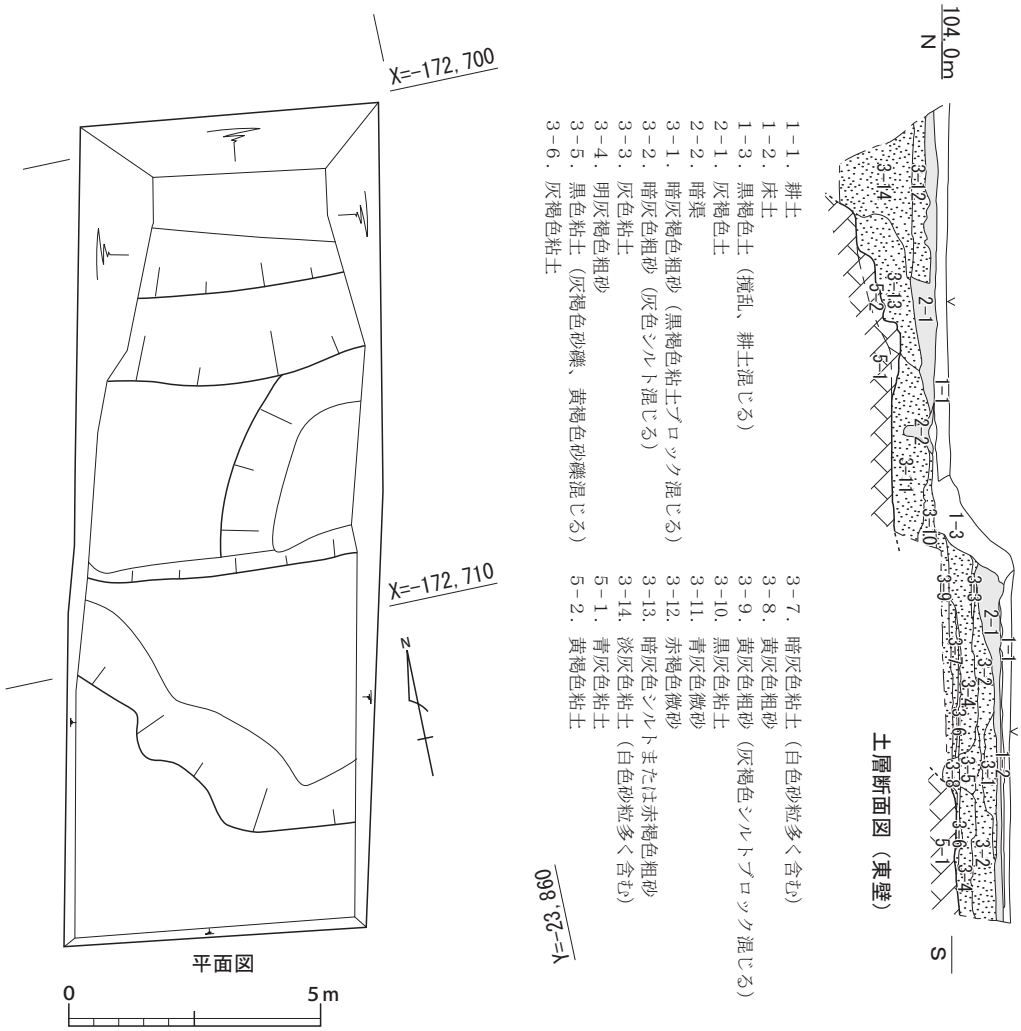


図 18　２区　４トレンチ　平面図・東壁　土層断面図　（S.＝1/150）

対しては現地表面から深さ約２ｍまで掘削したが、その時点で湧水量が増え、トレンチ壁面が崩壊する可能性があったので、危険作業を避けるために掘削を中止した。当該箇所は、南北方向の谷地形の内側に含まれるものである。

遺物は谷埋土層から土師器片や瓦器片が出土した。

６.６トレンチ（図４・図 20）

１トレンチで検出した遺構の広がりを確認するために、２区の中央付近に長さ６ｍ、幅４ｍの東西にやや長いトレンチを設定した。この地点は、図４に見えるように、１トレンチ、３トレンチ、

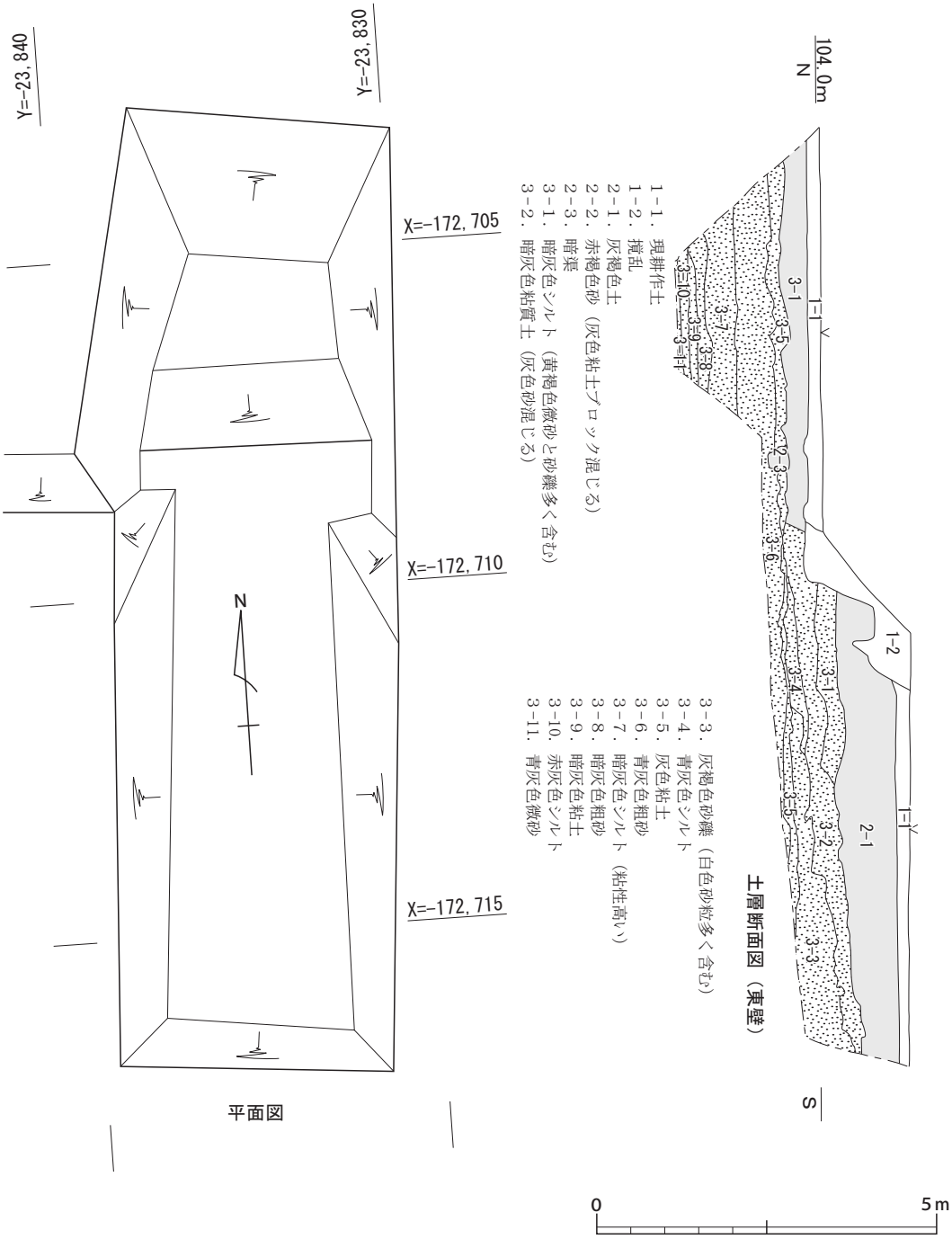
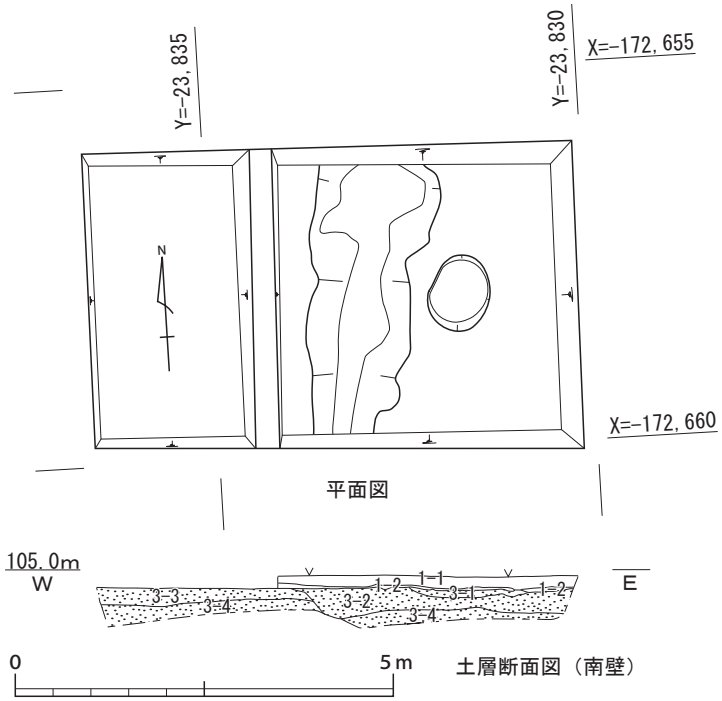


図 19　２区　５トレンチ　平面図・東壁　土層断面図　（S.＝1/100）



1－1．暗灰色土
1－2．黄褐色土
3－1．黒褐色粘質土（白色砂礫多く含む。黄褐色土少し混じる）
3－2．黒色粘質土（白色砂礫多く含む）
3－3．灰褐色砂礫混じり砂質土（鉄分沈着）
3－4．淡灰褐色砂礫混じり粘質土

図 20　２区　６トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（S．＝1/100）

2 トレンチに囲まれた位置に当たる。

土層の堆積状況は、図 20 の土層断面図に示したように、現耕作土層である 1 層を除去するとほぼその直下に、谷埋土層である 3 層が検出された。

トレンチの掘削は、表土下 60cm ほどの深さでその作業をやめた。これは、3 層を検出した時点で、この地点が南北方向の谷地形の内側に当たることがわかったためであるが、この深さで、図 20 の平面図に示したように、幅 1.7 m、深さ 65cm の溝状の窪みが検出されたためでもある。自然流路のように見えるこのような遺構は、谷が埋没過程でできたものである。平面図には、溝状の遺構の東側に長径 81cm の不整楕円形の窪みが見えているが、これも、最終的に、谷が埋没する過程でできた自然の窪み、すなわち谷埋土の土質等の違いであると判断した。

なお、この 6 トレンチの調査成果から、南北方向の谷地形の東岸に当たって、1 トレンチで遺構が形成された基盤層は、この 6 トレンチまでは及ばないことが確認できた。

遺物は谷埋土から古墳時代の須恵器片や土師器片が出土した。

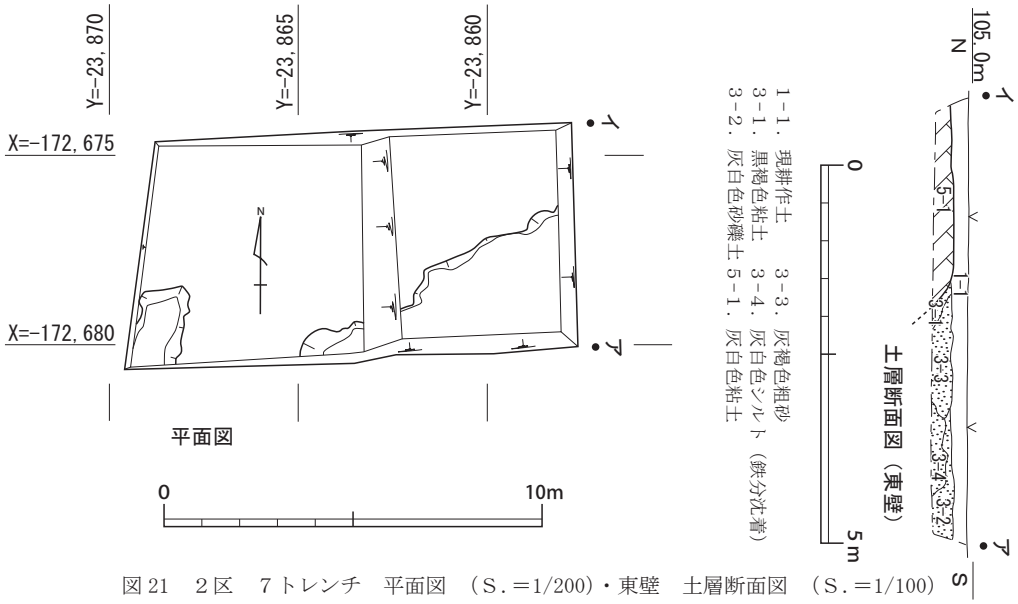


図21　２区　７トレンチ　平面図　（S.＝1/200）・東壁　土層断面図　（S.＝1/100）

７.７トレンチ（図４・図21）

２トレンチ南西端から西に約４mの地点に長さ 12 m、幅６mの東西に長いトレンチを設定した。図 21 の平面図に示したように、トレンチの中央付近より西側は、現在の耕作地造成によって段をなして下がっている。その高低差は約１mある。

南北に長い当該調査地は、基本的に各地点において東西側から中央に向かって下がる谷地形をなしているので、調査区の西端付近は全体地形では西側が高くなるのが通例である。しかし、この７トレンチは、調査区の西端にありながら、上記のように現地形でも西が低く東が高くなっていた。現状の地形ではこの低い部分に水路があって、谷状に落ち込んでいることがわかる。

この付近の旧地形を知るためには、当該トレンチの東西方向の断面図が不可欠であるが、現地調査によって作成された図面にはそれがなかった。しかし、図版７によって、トレンチ掘削状況を西方向からみると、造成による急な段とともに、表土直下に地山が存在していてそれが西に下る地形であったことがわかる。一方、平面図および東壁断面図を見ると、地山が南東方向に下っており、低い部分には谷埋土が堆積していることもわかる。

すなわち、当該地点は、西および南側が相対的に低くなる地形で、その高い部分が微高地となって、２トレンチで検出された表土直下の地山部分などに繋がるものとみられる。このような知見から周辺部の旧地形として、図５に示したように、２区内において微高地が東西の谷地形に挟まれて存在する状況を復原した。

７トレンチでは、遺物は出土しなかった。

８．８トレンチ（図４）

調査区の北西部での旧地形を確認するため、図４に示したように、７トレンチの北20ｍの地点に、長さ５ｍ、幅2.5ｍの東西に長いトレンチを設定した。掘削を開始すると、現耕作土層直下で地山が検出され、全体地形として南北方向の谷地形に含まれながらも、標高の高い地点があることがわかった。図５の旧地形の復原図は、このトレンチの調査成果も加味したものである。

８トレンチにおいて、遺物等は認められなかった。

第３節　３区

１．１トレンチ（図４・図22・図23・図24）

図４に示したように、３区の北東隅付近に長さ約30ｍの南北に長いトレンチを設定した。トレンチ幅は、南端から約20ｍまでを５ｍとし、それより北側は2.5ｍと狭いものにした。北端部での幅を狭くしたのは、その付近の東隣接地に民家が存在したので、掘削の影響等が住宅に及ばないように配慮したためである。

図22の平面図および図23の断面図に示したように、トレンチ北半では、北端付近に地山の高い部分があり、ここから南向きの斜面となって下がる谷地形の上端を検出した。すなわち、この上端より南側は東西方向の谷地形になっていたのである。さらに、この上端に対応する南岸の上端をここから南約12ｍの地点で検出した。

ところで、第２節第１項で述べたように、２区１トレンチの南端部で地山が南方向に下がる、東西方向の谷地形の上端を検出している。２区１トレンチとこの３区１トレンチは、市道を挟んで南北に位置しているが、この東西方向の谷地形の南岸に当たる北向きに下る斜面は、３区１トレンチの掘削が可能な範囲内においては検出することができなかった。このことから、この付近の旧地形は、現在、市道が設置されている付近に地山の高い部分があり、これより北と南の２箇所に平行して２条の東西方向の谷地形が存在しているとみられる。この３区１トレンチで検出した谷地形は、その南側のものに当たっている。

一方、谷地形の南外側に当たるトレンチ南半では、図23の土層断面図に示したように、現在の耕作に関わるとみられる１層の直下に４層となる40cmほどの厚みの暗灰色系統の砂礫や粘質土の流入堆積土がある。

４層は一気に堆積したものではなく、図23に示したように、４－１～３層に分層される。そのうちの４－３層上面で、図24に示したように、井戸１基を検出した。井戸の掘方の平面形はやや不整形な円形をしている。掘方の検出規模は、南北2.2ｍ、東西1.5ｍで、深さ30cmである。また、この井戸は曲物が用いられたもので、元は数段を積み重ねていたと思われるが、現状で残存しているのは２段であり、さらに原位置を保っていたのは最下段のみである。

最下段の曲物は直径35㎝、高さ15㎝で、北西外側に石がこの曲物に沿うように据えられてい

た。その上段には、南に約 25cm ずれた状態で、直径 34㎝、残存高さ 11㎝の曲物が検出された。上下段の曲物はほとんど重ならない状態であるから、上段の曲物が攪乱を受けていることは間違いない。しかし、どのような攪乱によってこのように上段のみが横方向に移動するのか、またその時期はいつ頃なのかなどについては明らかではない。最下段のみが原位置を保っていたのは、井戸が地表から深く掘り下げて造られる施設であるため、その最下段が攪乱の影響を免れたからと考えられる。いずれの曲物も残存状態が悪く、取り上げが困難であったため、下段の曲物（別表３－２－41）のみを持ち帰ったが、それも長さ 25cm 程度までの薄い板状になったものであった。

トレンチ１の出土遺物は、東西方向の谷の下端付近で庄内式期の高杯（104 － 35）が完形に近い状態で出土した。また、上端に近い箇所では古墳時代の須恵器杯蓋（105 － 56・58）や土師器壺（104 － 43 ～ 47・49）・甕（104・105 － 48・50・51）などが出土した。土器以外には、埴輪片（105 － 59）や滑石製品（106 － 64）、有孔円板（106 － 66）などもあった。

２．２トレンチ（図４・図 25・図 26）

１トレンチ南端から南に約３ｍの地点に長さ 32 ｍ、幅６ｍの南北に長いトレンチを設定した。２トレンチの北端部は現況では１トレンチと同じ水田内に当たるが、それより南は一段高い水田面になっている。

土層の堆積状況は、図 25 に見えるように、北端部では、１トレンチと同様に現代耕作土および整地層である１層下に、流入堆積土である２層および４層があり、地山に至っている。南半の標

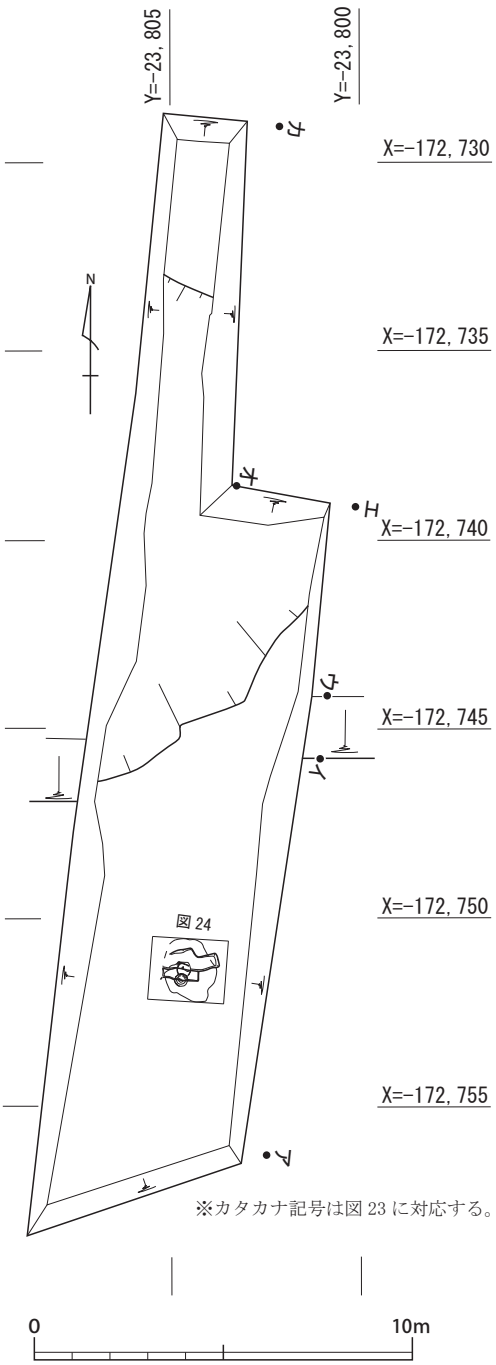
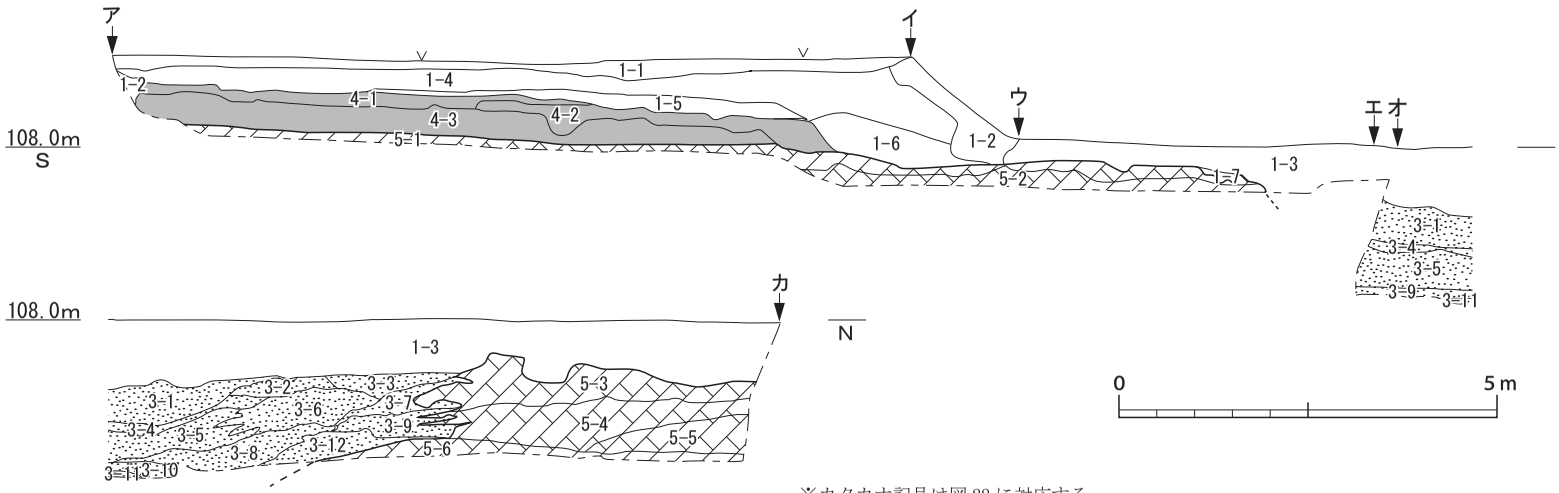


図 22　３区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）



※カタカナ記号は図 22 に対応する。

1－1．現耕作土
1－2．現代盛土
1－3．撹乱土
1－4．褐灰色砂質土
1－5．灰緑色砂質土
1－6．薄青灰色細砂（しまり良い）
1－7．灰色中砂から粗砂混じり粘質土
3－1．灰色砂礫
3－2．灰白色砂質土（鉄分まだらに沈着）
3－3．褐色砂質土（鉄分がまだらに沈着）
3－4．暗青灰色砂礫混じり粘質土
3－5．有機物堆積層
3－6．青灰色または褐色砂質土（やや粘性あり）
3－7．黄灰色シルト質粘土ブロックと暗灰色粘質土ブロックの混在層
3－8．青灰色砂礫（粗砂主体）
3－9．淡黒色砂礫混じり粘質土
（白礫多く含む、鉄分がまだらに沈着。また３－７層がブロック状に混入）
3－10．暗灰色砂礫（白色礫主体）
3－11．淡黒色粘土
3－12．黒色砂礫混じり粘質土
4－1．暗灰色砂礫
4－2．黒色砂礫混じり粘質土（白色礫多く含む、しまり良い）
4－3．灰緑色砂礫
5－1．薄暗赤色粘土
5－2．青灰色粘質土（白色礫含む）
5－3．明褐色礫混じり砂質土
5－4．明黄砂質土（暗灰色粘質土ブロック混じる）
5－5．橙色砂質土
5－6．青灰色砂礫

図 23　３区　１トレンチ　東壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）

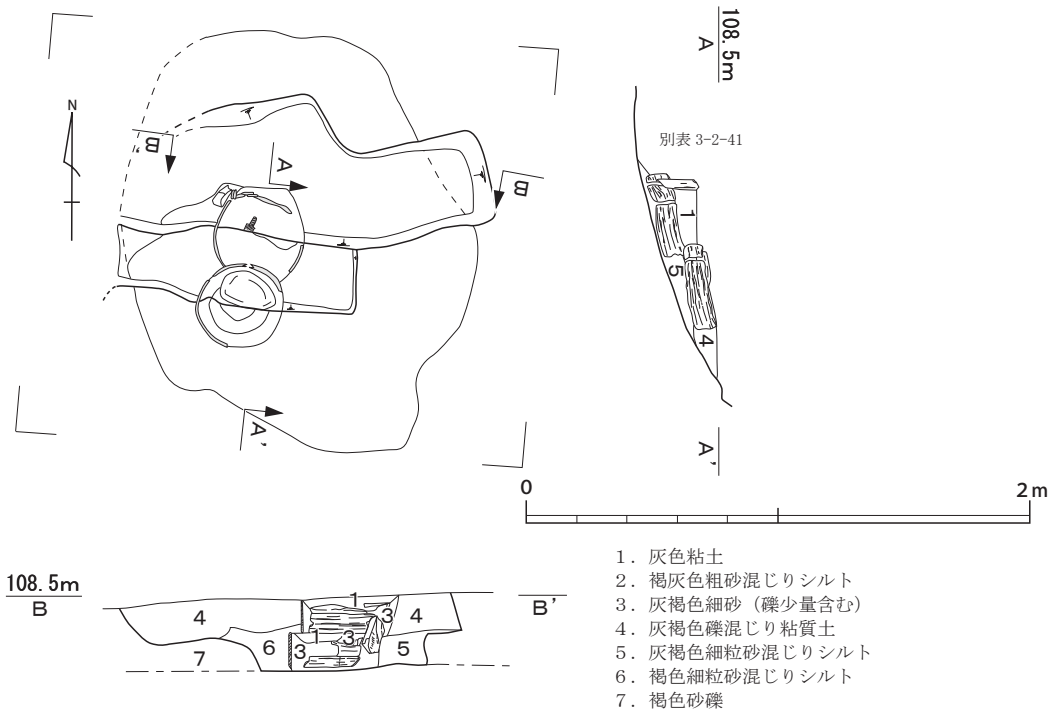


図 24　3 区　1 トレンチ　井戸　平面・立面図　（S．=1/30）

高の高い地点では、一部に整地のための盛土が行われていたが、基本的には地山上に 2 層および 4 層が堆積している状況であった。

遺物は、4 層から須恵器（121 － 1）などが出土したが、この範囲では遺構は認められなかった。しかし、2 トレンチの掘削は一旦ここで終えたが、後述する 3 区 3 トレンチで竪穴住居などの遺構を検出したことから、図 4 および図 26 に示したように、2 トレンチの南端に長さ 5.7 m、幅約 2.5 mの東西に長いトレンチを設け、さらにここから西に約 4.5 mの地点に長さ 13 m、幅最大 5.3 m の東西に長い別のトレンチを設定、掘削した。これらトレンチは 3 区 2 トレンチ拡張部とした。

拡張部の東半は後世の削平を受けていたが、西側のトレンチの南西隅で地山を掘り込む溝が検出された。この溝は、後述する第 2 － 2 次調査における 3 －南区北西隅で検出した溝 1 と繋がることがわかった。また、2 トレンチ拡張区の調査後の写真を図版 10 下によって確認すると、白線によって示された土坑らしきマークが写っている。しかし、全体平面図や遺構図等の図面には、この地点での土坑等の記録がなかった。したがって、ここではその詳細を提示することができないが、これらは、当初は遺構と認識されたものの、調査の進展よって、同一層における土色の違いなどであったと判断されたものと考えられるが、その経緯等は不明である。

3．3 トレンチ（図 4 ・図 27）

図 4 に示したように、3 区の南東隅付近で長さ約 28 m、幅 6 mの南北に長いトレンチを設定し

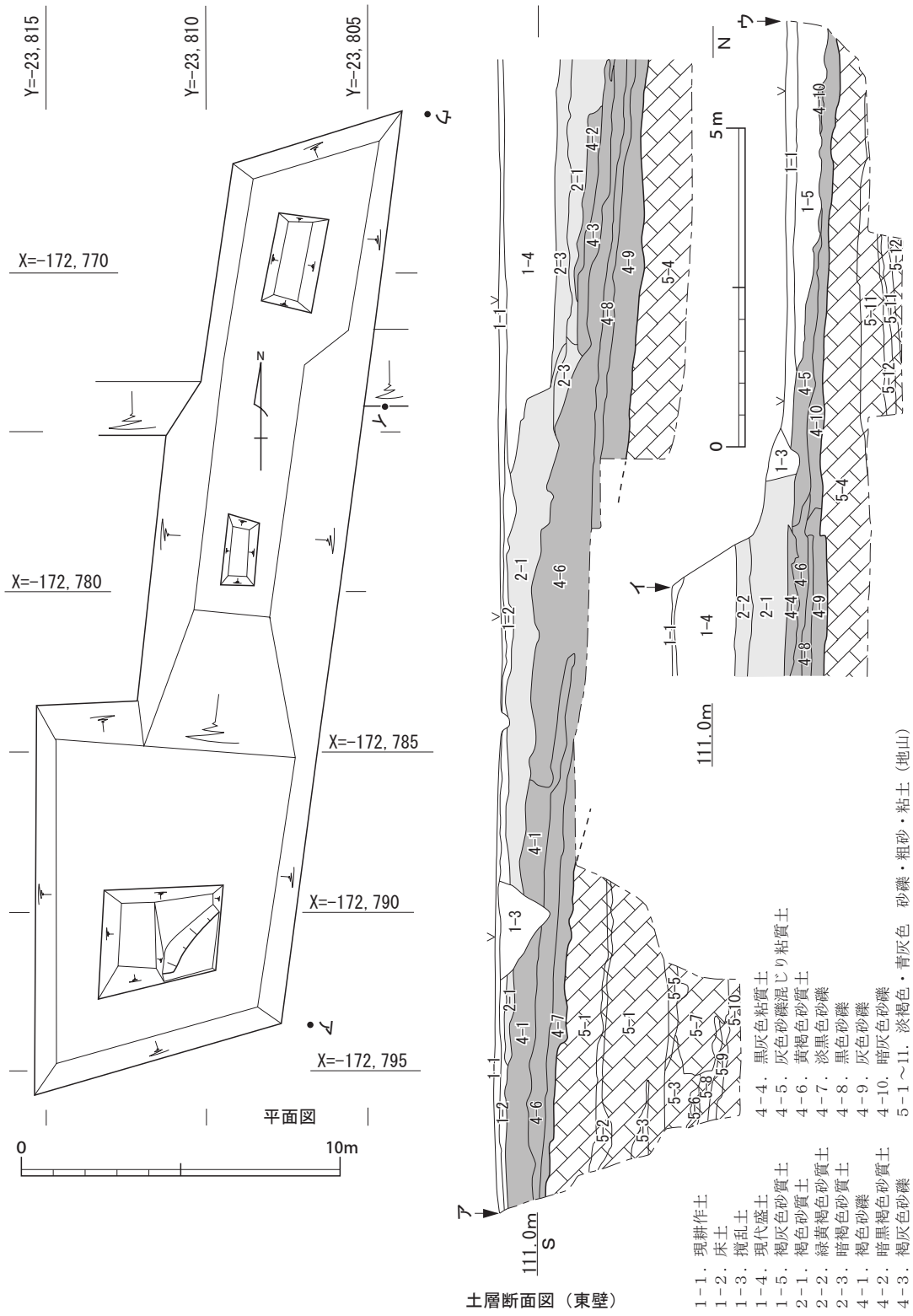


図 25　３区　２トレンチ　平面図　（S.＝1/200）・土層断面図　（S.＝1/100）

た。この地点は３区においては、最高所に当たる。当該トレンチは、全体的に現代の耕作地造成に伴う削平が著しかった。土層の堆積状況は、図 27 の土層断面図に示したように、現耕作土層である１層の直下で、流入堆積土である４層を確認した。４層の堆積は深いところで 60cm ほどで、これを除去すると地山に至る。

遺構は、地山面上で素掘溝・竪穴住居・ピット・土坑を検出した。なお、遺構の埋土は、第 12 －２次調査時にそれを除去することとしたため、今次調査ではその上面の検出を行ったのみである。したがって、これらの遺構に関しては、第５章第３節１項で詳述する。

また、３トレンチについては、上記の遺構や遺物分布の広がりを確認するために、図 27 に見えるように、当初トレンチの西側に東西方向の拡張部を２箇所に設けた。

北拡張部は、３トレンチ北西端から南に 4.6 mの地点の西側に設定した。途中重機の進入路の確保ために分断した箇所があるが、長さ 13 m、幅２mの大きさとした。

この北拡張区での遺構は、地山面上で竪穴住居とピットを検出した。

南拡張部は、３トレンチ南端付近の西側に東西 13 m、南北２mのトレンチを設定した。しかし、南拡張部では遺構・遺物は認められなかった。

遺物は南拡張部を除く４層中から、古墳時代の土師器などが出土した。

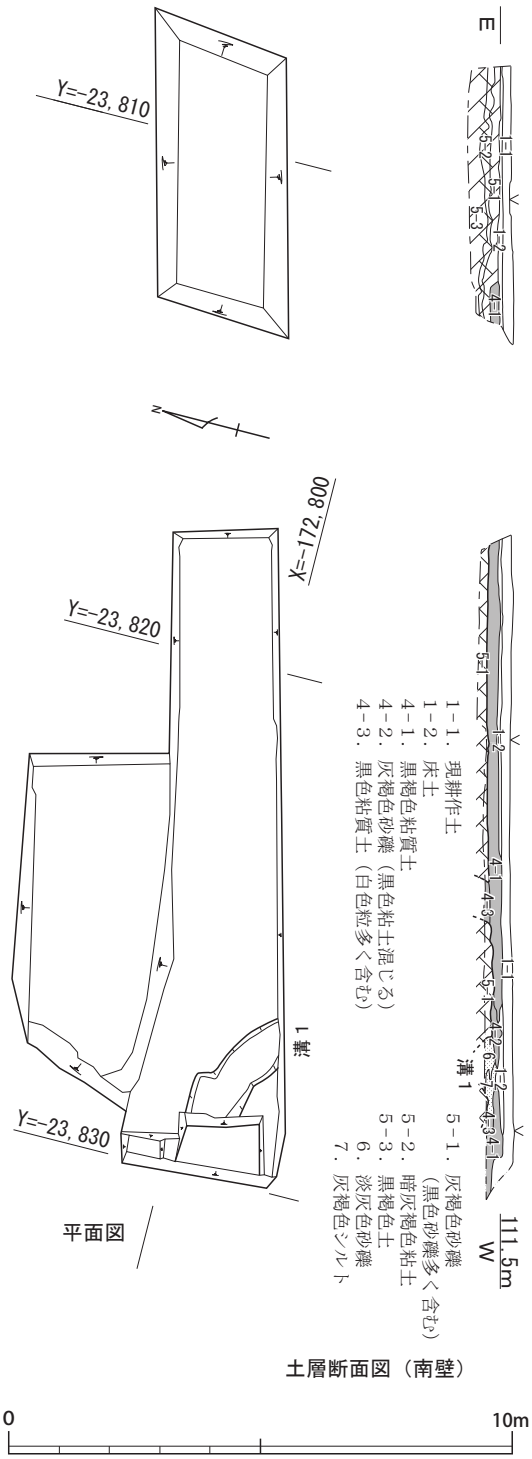


図 26　３区　２トレンチ拡張部　平面図・南壁　土層断面図　（S.＝1/150）

４．４トレンチ（図４・図 28）

前述のように、１トレンチの南半において東西方向の谷地形の南上端が検出され、その南側

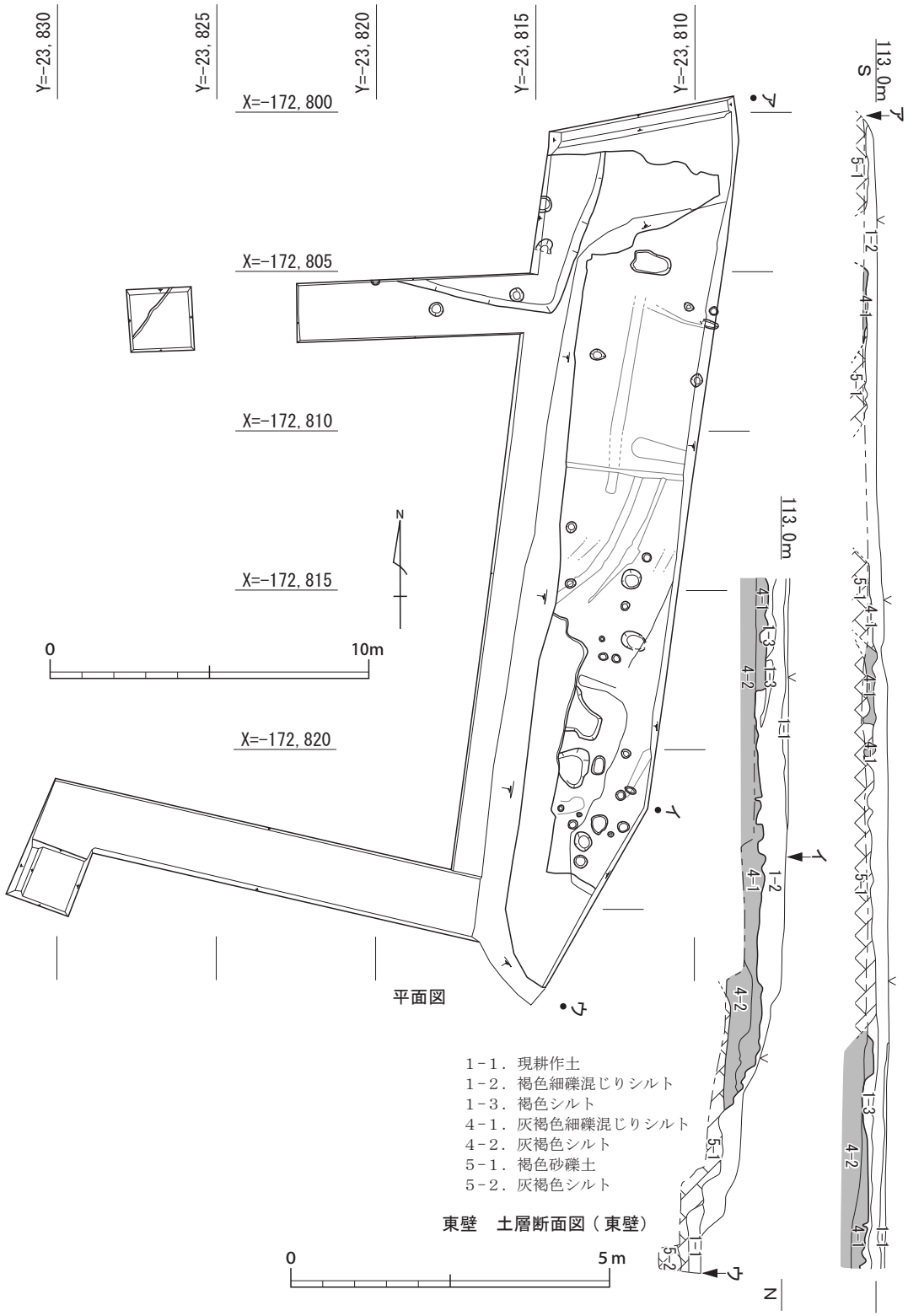


図27　３区　３トレンチ　平面図　（S.＝1/200）・土層断面図　（S.＝1/100）

の微高地では、遺構として、密度希薄ながら井戸１基が検出された。４トレンチは、その周囲での遺構の広がりを確認する目的で、図４に示したように、１トレンチの西側に設定したものである。４トレンチの規模は、図 28 の平面図に示したように、４m四方の大きさとした。

土層の堆積状況は、図 28 の土層断面図に示したように、現代耕作土である１層下に、流入堆積土である２層および４層を確認した。また、現地表面から 1.5 mほど下がった高さで、地山を検出した。なお、この地点では谷埋土である３層の堆積は認められなかった。

遺物は、４層から、古墳時代の土師器や須恵器の破片のほか瓦器片などが出土した。

５．５トレンチ（図４・図 29）

４トレンチから西に約２mの地点に、長さ 10.5 m、幅３mの南北に長いトレンチを設定した。

図 29 の土層断面図に示したように、トレンチの南半は現状の地表面から約 1.3 mの深さで、比較的平坦な地山面を検出した。対して、北半部では地山が北方向に下がる斜面を検出し、そこに谷埋土となる３層が堆積している状況を確認した。すなわち、この地点が、東西方向の谷地形の南岸に当たり、１トレンチで確認した東西方向の谷地形の南岸の延長部であることがわかった。

５トレンチ内における出土遺物は、上記の斜面の下端付近で弥生時代後期の壺（101 － 5）や庄内式期とみられる甕（102 － 18）などがほぼ完形で出土した。この状況は１トレンチと同様であった。一方、南半部では、特に遺構や遺物は認められなかった。

６．６トレンチ（図４・図 30）

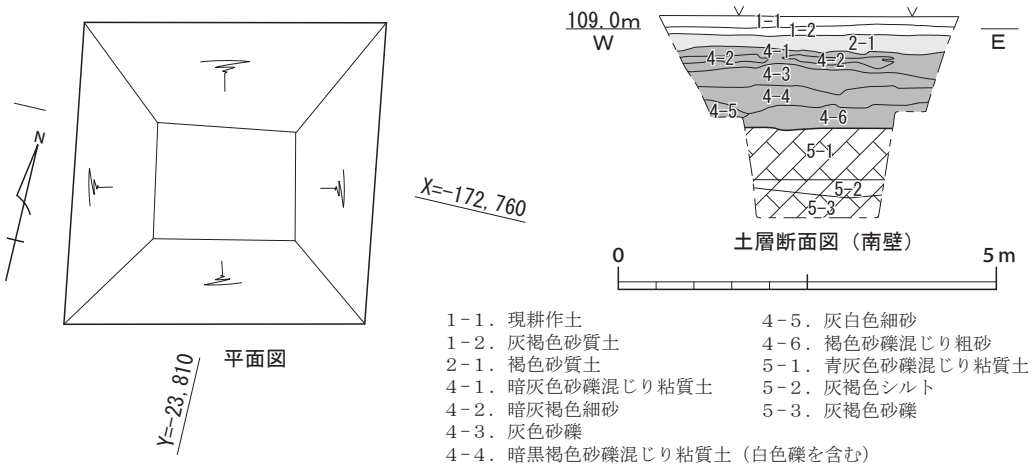
５トレンチから西に約 30 mの地点に長さ 10.5 m、幅４mの南北に長いトレンチを設定した。図４によって現状の地形を見ても、５トレンチとの間は南北方向の谷地形になっていることがわかる。つまりこの６トレンチのほか、次に述べる７トレンチ・８トレンチは南北方向の谷地形の西岸部での遺構の存否確認を目的にしたものである。

結果的に、この６トレンチでは、図 30 の土層断面図に示したように、現代の耕作土層である１層、流入堆積土である２層を除去すると、谷埋土層である３層が確認できたので、この地点は南北方向の谷地形の内側に含まれていることがわかった。このほか遺構は認められなかった。

遺物は３層中から、弥生時代後期の壺（102 － 10）や甕（103 － 29）庄内式期とみられる甕（102 － 15・19）などが出土した。

７．７トレンチ（図４・図 31）

図４に示したように、６トレンチから南西に約６mの地点におおむね一辺５mのほぼ方形のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、図 31 の土層断面図に示したように、耕作土層である１層、流入堆積土である２層を除去すると、その直下に谷埋土層である３層を検出した。すなわち、この



1－1．現耕作土
1－2．灰褐色砂質土
2－1．褐色砂質土
4－1．暗灰色砂礫混じり粘質土
4－2．暗灰褐色細砂
4－3．灰色砂礫
4－4．暗黒褐色砂礫混じり粘質土（白色礫を含む）
4－5．灰白色細砂
4－6．褐色砂礫混じり粗砂
5－1．青灰色砂礫混じり粘質土
5－2．灰褐色シルト
5－3．灰褐色砂礫

図 28　３区　４トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（S．＝1/100）

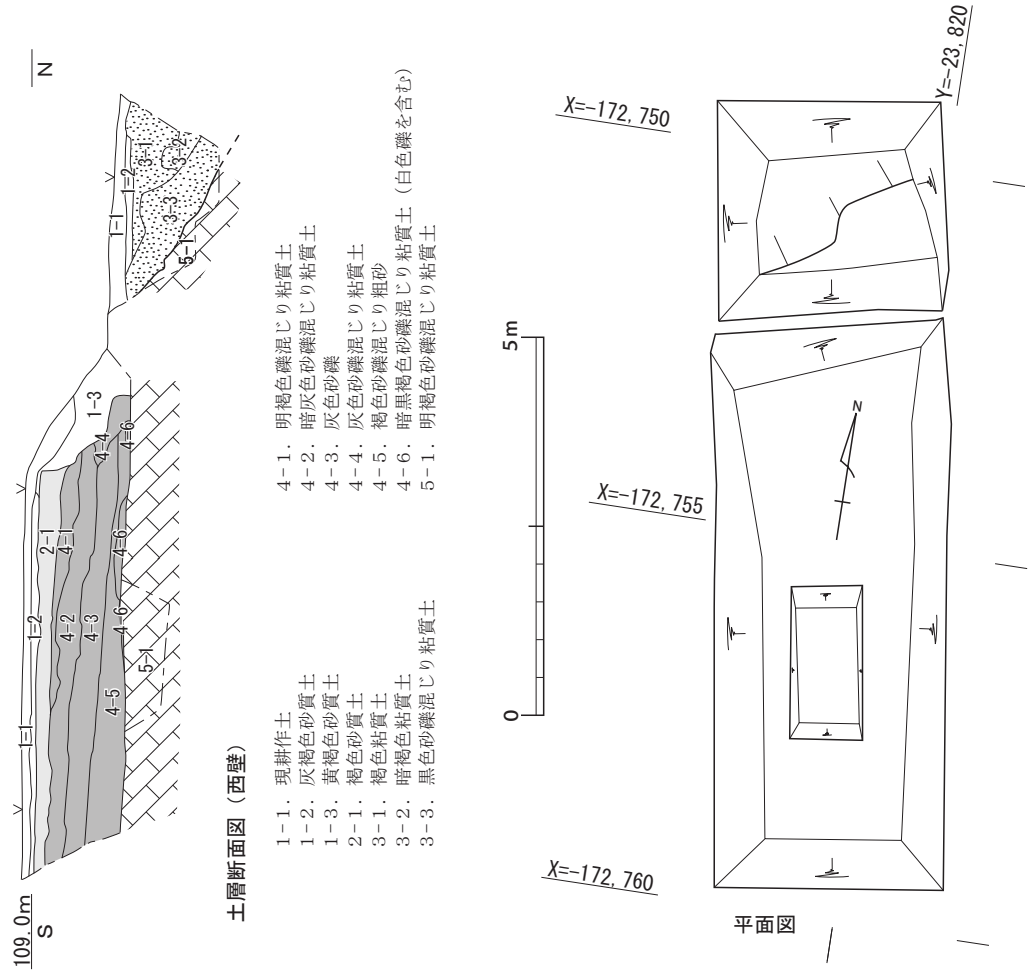


図 29　３区　５トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（S．＝1/100）

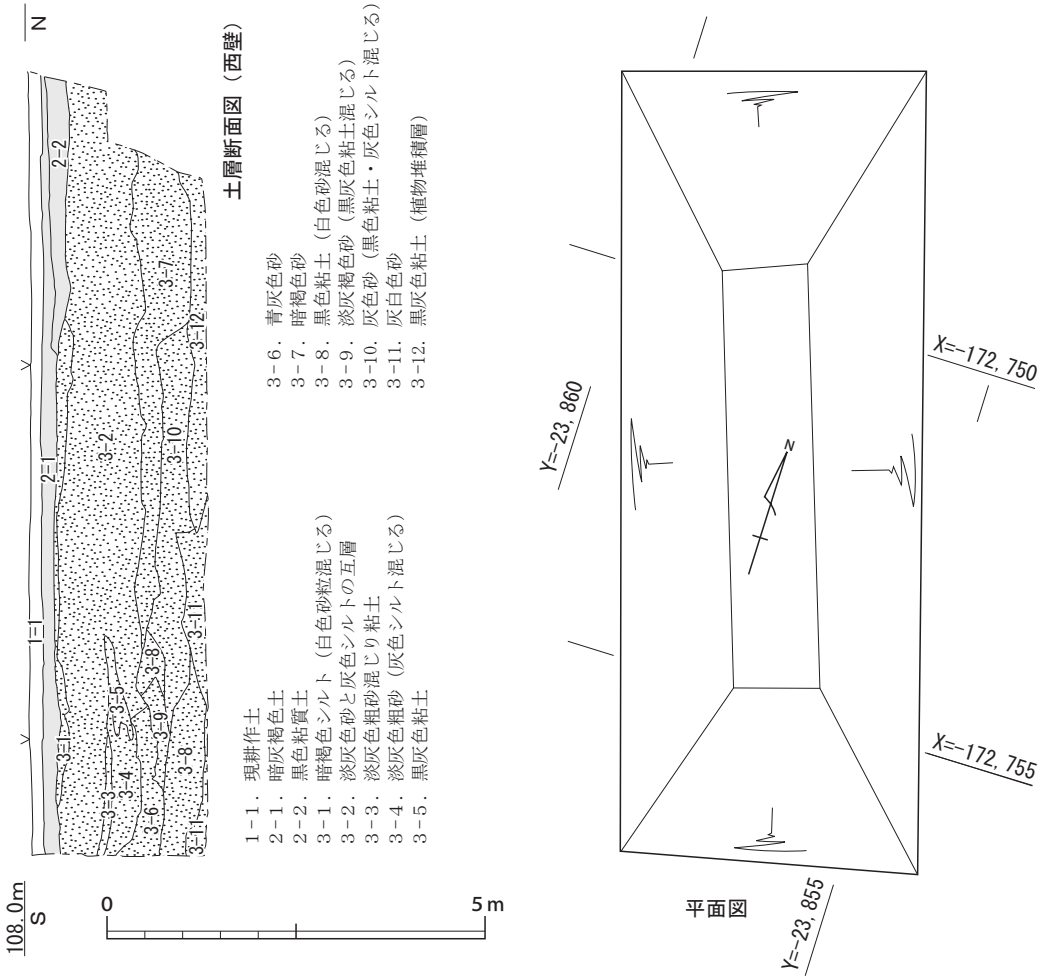


図 30　３区　６トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（S．=1/100）

地点も南北方向の谷地形の内側に含まれることを確認した。その他の人為的な遺構はなかった。

遺物は３層から、古墳時代とみられる土師器片のほか、平安時代とみられる土師器の杯（105 − 55）や、鎌倉時代とみられる瓦器椀（105 − 60）などが出土した。このことから、谷地形が最終的に埋没するのは、鎌倉時代以降であることことがわかった。

８．８トレンチ（図４・図 32）

７トレンチから南に約 30 mの地点に長さ４m、幅３mの東西にやや長いトレンチを設定した。土層の堆積状況は、図 32 の土層断面図に示したように、耕作土層である１層、流入堆積土である２層を除去すると、谷埋土層である３層が確認できた。すなわち、この地点も南北方向の谷地形の内側に含まれていることを確認した。遺構は認められなかった。遺物は谷埋土層となる３層から、土師器片や瓦器片が出土した。

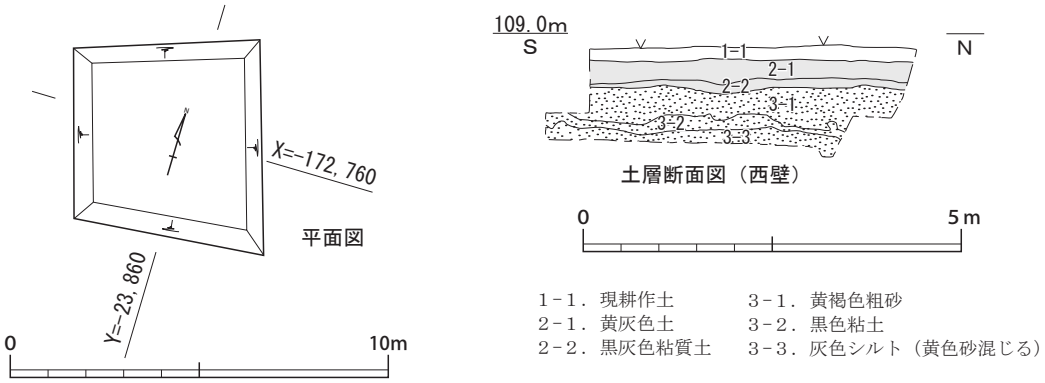


図 31　３区　７トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）

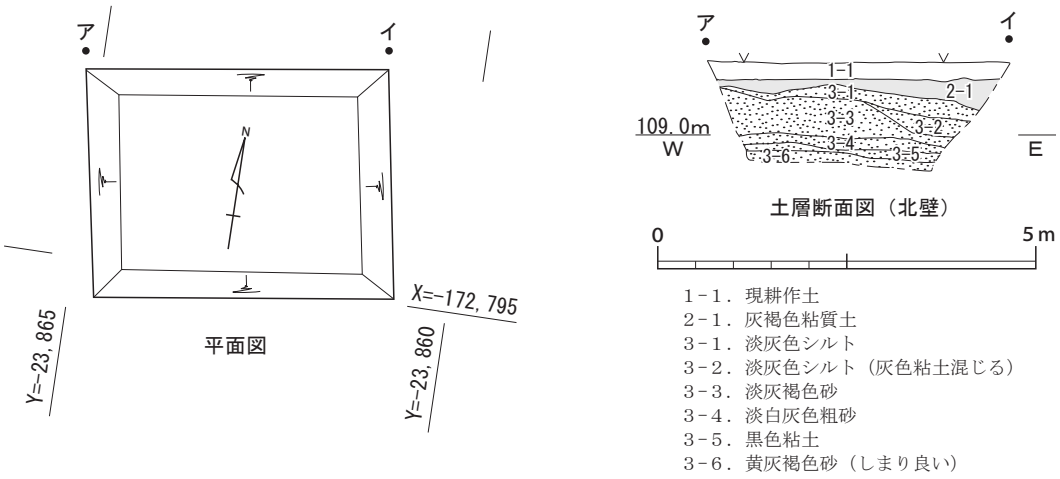


図 32　３区　８トレンチ　平面図・北壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）

第４節　４区

１．１トレンチ（図４・図 33）

３区と４区の東側には、図４に見えるように、南北方向に延びる丘陵尾根がある。その尾根上の大部分は今回の開発対象区外になるが、ここには、図３にもその位置を記したように、『奈良県遺跡地図』に巨勢山 643 号墳など４基の古墳が周知の埋蔵文化財として記載されている。このような状況から、同一尾根上の開発対象地にも古墳等が存在する可能性があるので、その存否を確認するために周辺を伐木し、長さ 4.7 m、幅３mの東西に長いトレンチを設定した。トレンチの東端は巨勢山 643 号墳の想定される墳頂部中心から西に約 13 mの地点である。

伐木後の地形の地形観察によれば、古墳が存在する徴候はなかった。そこで、トレンチを設定して掘削しさらに状況確認に努めた。腐葉土などを除去すると、図 33 に示したように、現地表面か

ら深さ約 60㎝で地山を検出した。結果的に、この地点では、遺構・遺物は認められなかった。

２．２トレンチ（図４・図 34）

１トレンチから南に約 25 mの地点の尾根線上で、地形が比較的平坦になる地点に長さ６m、幅２mの南北に長いトレンチを設定した。図 34 に示したように、１トレンチと同様に腐葉土などを除去すると、現地表面から深さ約 45㎝で黄灰色砂礫土の地山を検出した。ここでも、遺構・遺物は認められなかった。

３．３トレンチ（図４・図 35・図 36）

図４に示したように、４区北西隅付近に当初長さ 37.5 m、幅６mの南北に長いトレンチを設定し

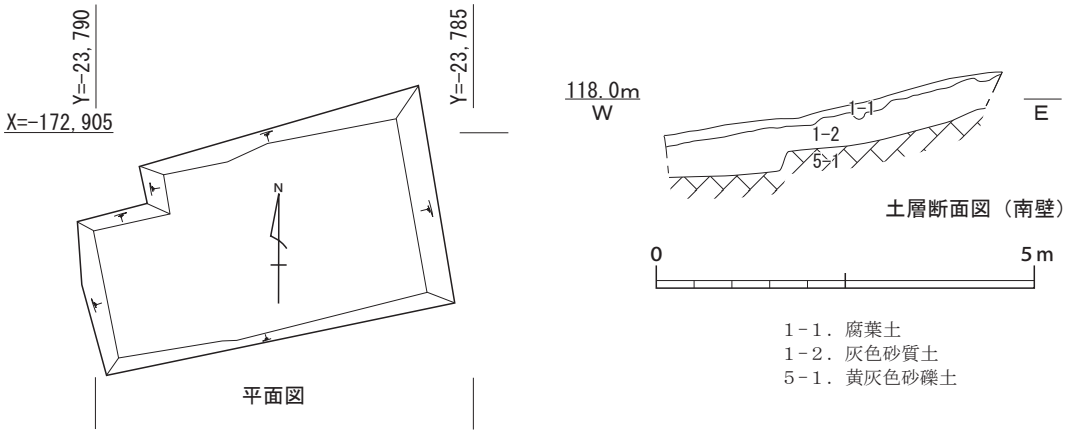


図 33　４区　１トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（S．＝1/100）

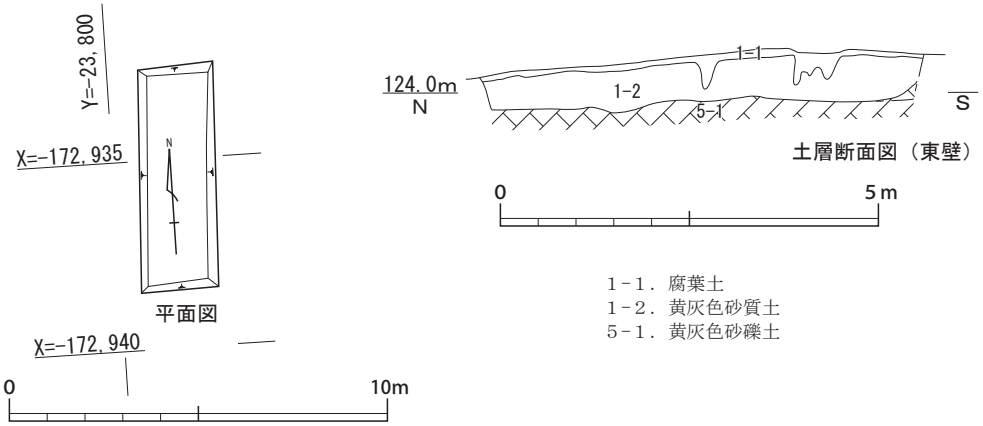


図 34　４区　２トレンチ　平面図　（S．=1/200）・東壁　土層断面図　（S．＝1/100）

た。トレンチの規模および形状は、図 35 に見えるように、南端部で東西に拡張したので、トレンチ南辺は最終的に東西方向の長さ 18 mになった。

このトレンチの中央付近で、北向きの谷地形の斜面の上端と、これに繋がる北東－南西方向になる谷地形の上端および斜面を検出した。これらは、図５に示したように、南北方向の谷地形の西岸に当たる。この上端より西側は、谷地形の外側の微高地になる。

谷地形の土層の堆積状況は、図 36 の土層断面図（南壁）に明瞭に表れている。これをみれば、耕作土である１層、流入堆積土である２層下に、谷埋土である３層が分厚く堆積していることがわかる。また、地山が東向き斜面となって急激に落ち込んでいることも見て取ることができる。

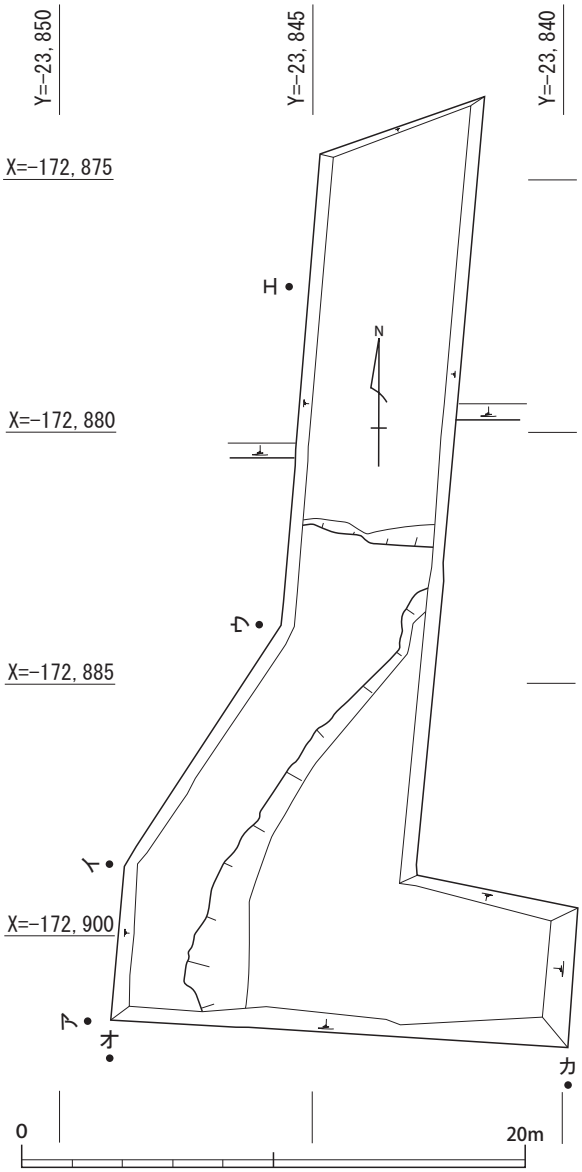


図 35　４区　３トレンチ　平面図　（S.＝1/300）

遺物はトレンチの南半で検出した谷地形の埋土から集中して出土している。特に、その上端付近での出土が顕著であった。それらは古墳時代の土師器片や須恵器片であったが、なかには、接合するとほぼ完形に復元できた土師器甑（51 － 28）や、出土時点でほぼ完形の須恵器杯身（51 － 29・31 など）などがあった。また、製塩土器が遺物袋（32cm × 38cm）１袋分出土した。細片化していたが、それらは少なくとも 20 個体は存在していたことがわかった。それらは図 55 に（55 － 100 ～ 121）として掲げている。そのほか、土器以外では板材などの木製品（別表３－２－87）などが出土した。年代がわかる土器などでは、古墳時代中期後半のものが目立った。

出土遺物として、上記のような残存状況の比較的良好なものが見られたことから、遺物が出土した谷地形上端の西側にあたる微高地に、何らかの遺構が存在することが考えられた。そこで、３トレン

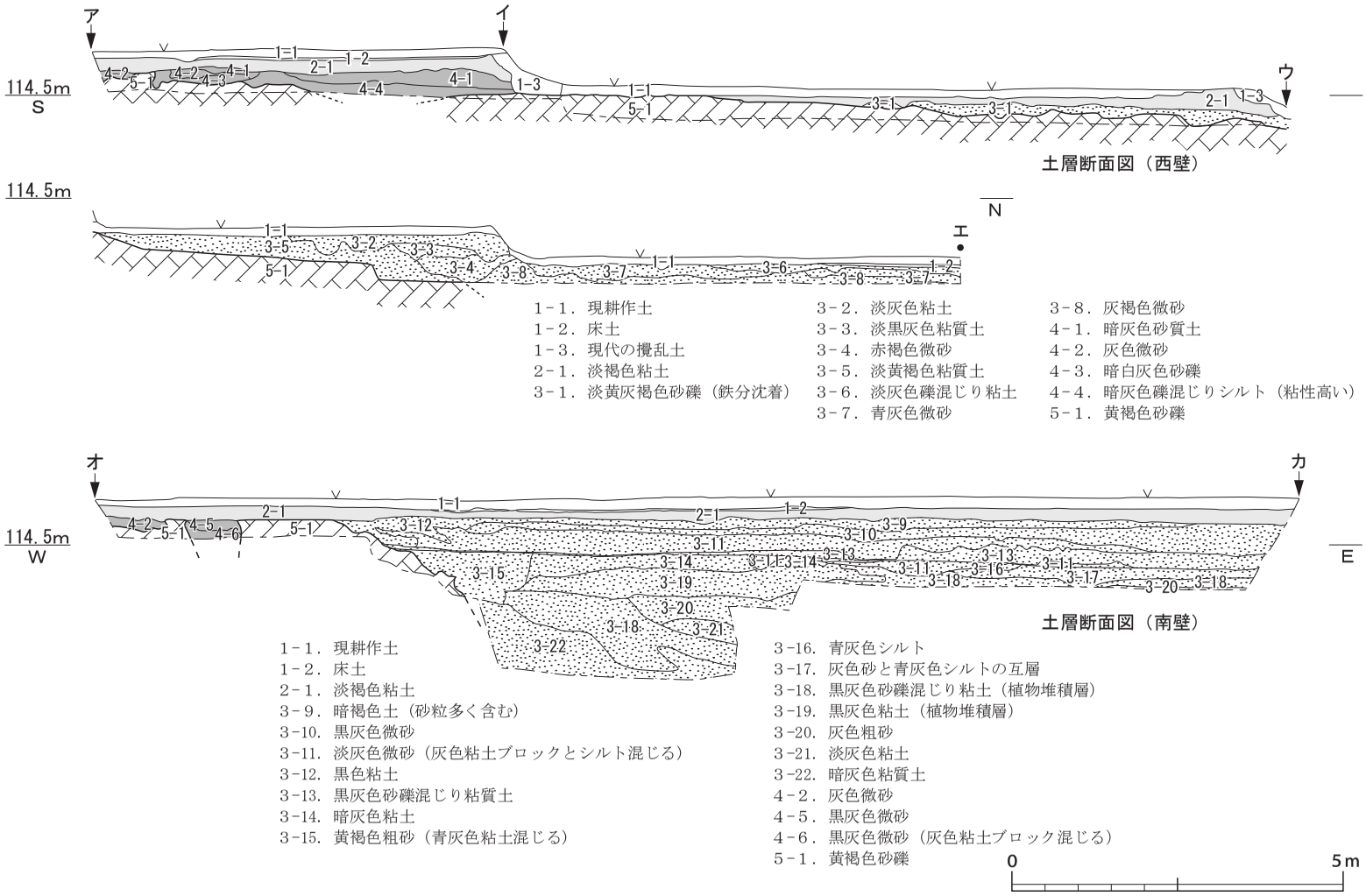


図 36　４区　３トレンチ　西壁・南壁　土層断面図　（S．＝1/100）

チ南半の西側に、図 35 に示したように、長辺 16 m、短辺 7 m、幅 5 mの台形状の西拡張部を設定、掘削した。結果的に、この地点では、比較的浅い地点に地山が存在して、素掘溝などがみられるところもあったが、それ以外に古墳時代などの遺構が存在する徴候は認められなかった。当該期の遺構は、存在するとしてもさらにその西側の調査区外に当たる高所であると判断される。

一方、この位置の東側にも東西 6 m、南北 6 m、の規模で拡張部を設けた。この東拡張部は主に谷地形の状況を探るとともに遺物の出土状況を確認するために掘削を行ったものであるが、遺物は出土しなかった。そのことによって、出土遺物が谷地形の上端付近の比較的狭い範囲に集中することがより明確になった。

なお、東拡張部は最大で深さ約 2.7 mまで掘削を行い、谷埋土の堆積を確認したものの、地山は検出できなかった。その深さで湧水量が増加し、トレンチ壁面が崩壊する可能性があったため、危険作業を避け、それ以上の掘削は行わなかった。

4．4 トレンチ（図 4 ・図 37）

図 4 に示したように、 3 トレンチ南端から南に約 10 mの地点に長さ 19 m、幅 6 mの南北に長いトレンチを設定した。 3 トレンチで検出した南北方向の谷地形の西上端の状態から、 4 トレンチでもその延長が検出されると想定した。しかし、土層の堆積状況は、図 37 の土層断面図に示したように、 1 層・ 2 層を除去すると深さ 30cm ほどで谷埋土である 3 層の上面に至った。トレンチ内においては、谷地形の法面が検出されなかったから、当該位置が谷地形の内側に当たることが確認できた。

遺物は 3 層中から、古墳時代とみられる土師器甕（49 － 10）・杯（50 － 23）のほか、須恵器片などが出土した。

5．5 トレンチ（図 4 ・図 38）

4 トレンチ南端から南に約 8 mの地点に一辺 3 mの規模のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、図 38 の土層断面図に示したように、 1 層・ 2 層を除去すると、谷埋土である 3 層の上面に至った。このトレンチでも、谷地形の法面に当たる地形が確認できなかったことから、当該地も南北方向の谷地形の内側に含まれることが確認できた。

遺物は谷埋土から、古墳時代とみられる須恵器片が少量出土した。

6．6 トレンチ（図 4 ・図 39）

5 トレンチ南端から南に約 8 mの地点に一辺 3 mの規模のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、図 39 の土層断面図に示したように、 1 層・ 2 層を除去すると、現地表面から、約 50cm の深さで谷埋土である 3 層の上面が検出された。この地点では、 4 ・ 5 トレンチと比較して 2 層がやや

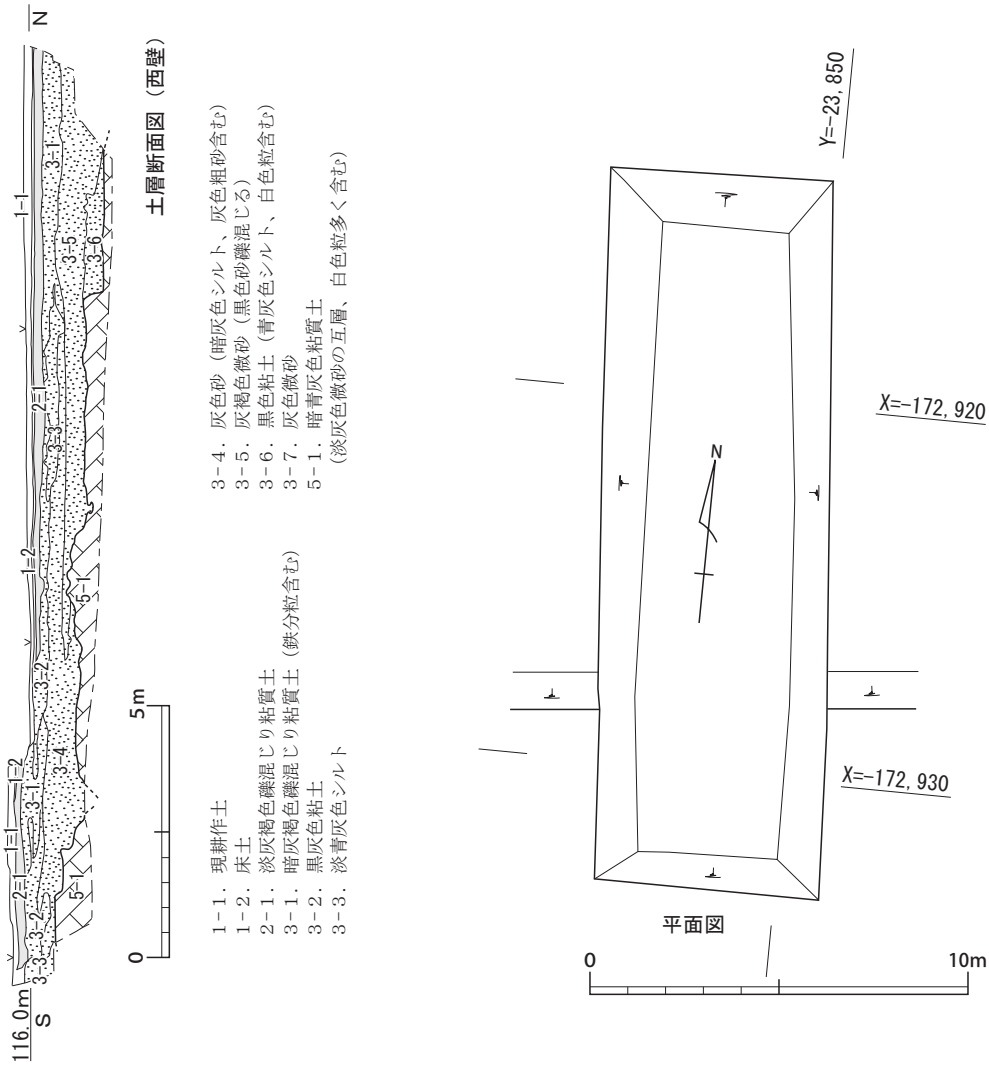


図 37　4 区　4 トレンチ　平面図　（S.＝1/200）・西壁　土層断面図　（S.＝1/150）

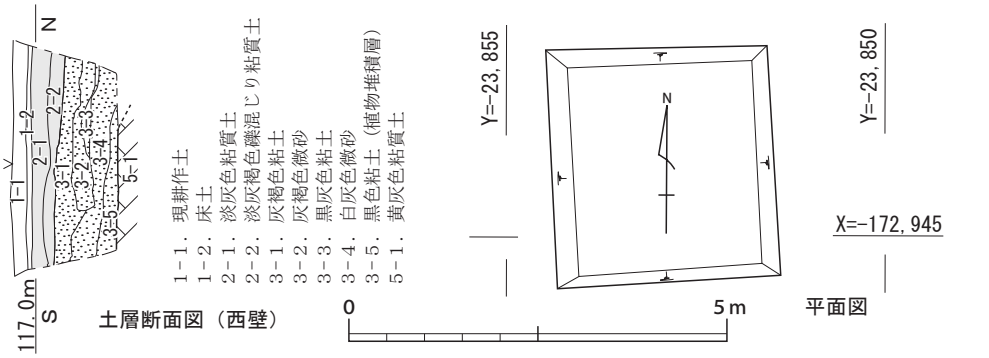


図 38　4 区　5 トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（S.＝1/100）

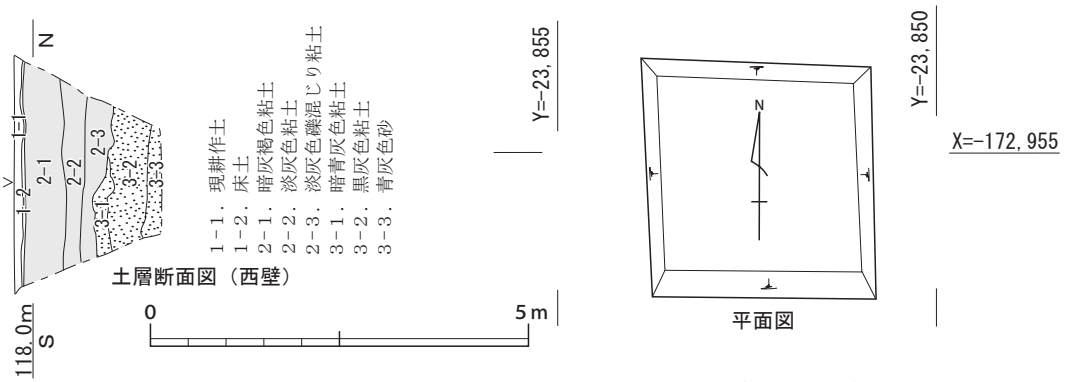


図 39　4 区　6 トレンチ　平面図・西壁　土層断面図　（S.＝1/100）

厚く堆積していた以外は、おおむね上記トレンチと同様の堆積状況である。

遺物は谷埋土から、古墳時代とみられる須恵器片が少量出土した。

7．7 トレンチ（図 4・図 40）

6 トレンチ南端から約 11 mの地点に長さ 10 m、幅 3 mの南北に長いトレンチを設定した。土層の堆積状況は、図 40 の土層断面図に示したように、1 層・2 層を除去すると谷埋土である 3 層の上面が検出された。この地点も南北方向の谷地形の内側に含まれることが確認できた。掘削深さは表土から 2.5 mほどを掘削したが、地山は検出されなかった。6 トレンチの成果と併せ考えると、南に行くほど谷地形が深くなっているとみられる。

遺物は 3 層から古墳時代とみられる須恵器片のほか、石製の巡方（55 － 123）が出土した。

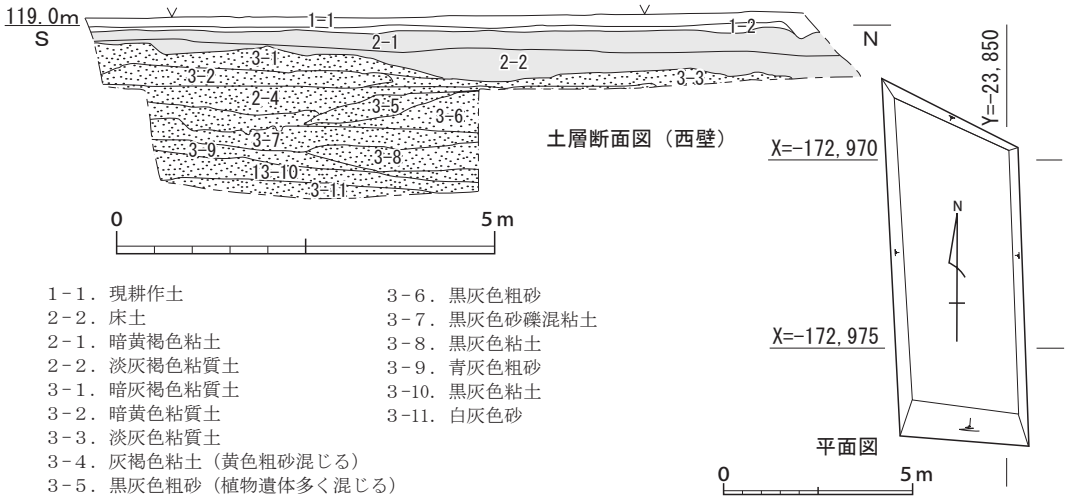


図 40　4 区　7 トレンチ　平面図　（S.＝1/200）・西壁　土層断面図　（S.＝1/100）

第５節　５区

図４で５区南東部を見ると、尾根が盛り上がって高まりになっている箇所があることがわかる。しかし、この地形の盛り上がりは、現代の土砂採取に伴う廃石によってできたものであることが確認できた。つまり、この地形は古墳などの遺跡とは関係するものではないことから、トレンチなどは設定していない。

１．１トレンチ（図４・図 41）

図４に示したように、５区北西隅付近に一辺４ｍのトレンチを設定した。土層の堆積状況は、図 41 に示したように、現耕作土層である１層を除去すると、その直下で谷埋土である３層が認められた。このことによって、この地点が南北方向の谷地形の内側に含まれることが確認できた。現地表面から深さ約 1.7 ｍまで掘削をすると、湧水量が増加したため、トレンチ壁面が崩壊する可能性があったので、この深さで掘削を中止した。遺構・遺物は認められなかった。

２．２トレンチ（図４・図 42）

図４に示したように、５区北東隅付近に長さ 42 ｍ、幅６ｍの南北に長いトレンチを設定した。土層の堆積状況は、図 42 の土層断面図に示したように、現耕作土層となる１層の直下で、谷埋土である３層が見られた。

谷埋土の厚みは最も深いところで３ｍ近くまで確認したが、多くの地点でその底を検出するには至らなかった。しかし、トレンチ南端で現地表面から深さ 1.4 ｍで地山を検出し、この地点で、地山が北東向きの斜面になっていることが確認できた。したがって、このトレンチの南端付近が地点が南北方向の谷地形の東岸に当たっていることがわかった。　遺物は３層から古墳時代とみられる土師器片や須恵器片のほか、近代の瓦片などが混在して出土した。

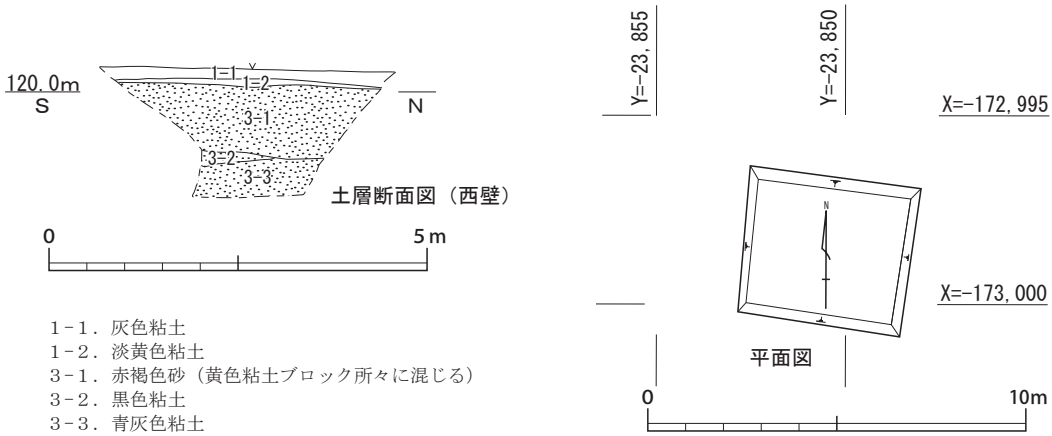


図 41　５区　１トレンチ　平面図　（Ｓ．＝1/200）・西壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）

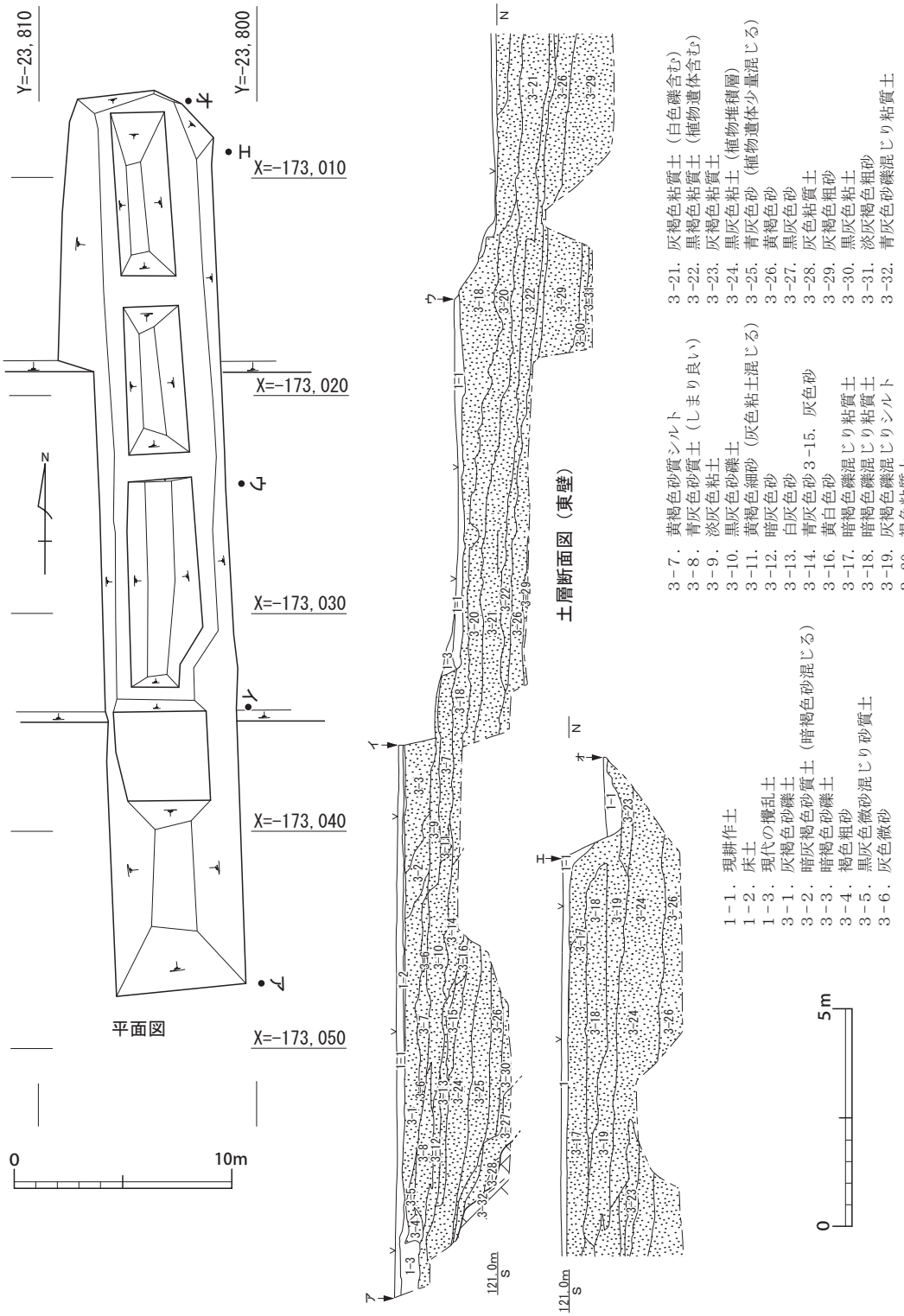


図42　5区　2トレンチ　平面図　（S.＝1/300）・東壁　土層断面図　（S.＝1/150）

３．３トレンチ（図４・図 43）

図４に示したように、２トレンチの南西端から南に約 19 mの地点で、南から延びる丘陵地形の先端部付近において地形が比較的平坦になる場所を選んで、長さ４m、幅２mのトレンチを設定した。丘陵上において古墳などの存否を確認するために設定したものである。

掘削を開始すると、比較的早い段階で表土直下において灰白色粘土層を確認した。この土層は現場で地山と認識されたことから、遺構・遺物は存在しないものとして、この地点における発掘調査を終了した。

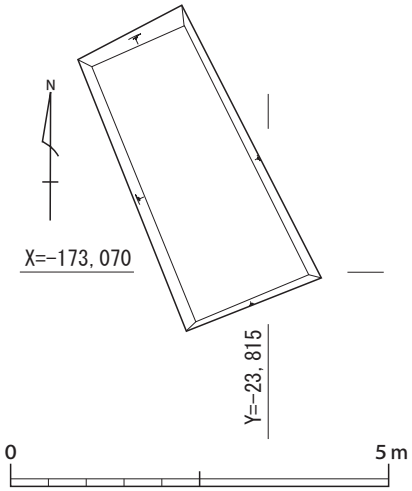


図 43　５区　３トレンチ　平面図　（S.＝1/100）

しかし調査終了後、工事車両の進入道路造成工事中に、この付近に横穴式石室をもつ古墳が存在することがわかった。その経緯は、第２章「調査の契機と経過」に述べた通りである。

巨勢山古墳群は、巨勢山丘陵の複雑に入り組んだ多数の尾根上を中心に 700 基を超える古墳群が造営されている。当該地は、巨勢山古墳群の一角に当たるが、この古墳は新たに確認されたものであるから、従前の巨勢山古墳群の通し番号の末尾に続けて、巨勢山 773 号墳と呼称することにした（奥田編 2015）。

現地調査において、この３トレンチを含めて周辺部には遺構がないと判断したことは、土層の認識を含めて、誤謬であった。後の検証によれば、当該トレンチには、古墳の墳丘端の一部が見られたはずであるが、トレンチ掘削時には気付かれなかったのである。その最大の要因は、巨勢山 773 号墳が南から延びてくる丘陵屋根の端部にあって、墳丘の北半に当たるおよそ 1/2 をすでに失っていたために、通有にみられる古墳とは残存状況が大きく異なっていたことにあると思われる。また、墳丘南側の区画として設けられた周溝は、より高所から流れ込んだ多量の土砂で埋没し、さらにその土砂は石室の上部も覆っていたらしい。このことにより尾根先端の地形の改変や周溝・石室の完全な埋没など、古墳の徴候は極めて捉え難い状況があった。しかしながら、そのような状況によって土層を見誤ったとすれば、それは予断をもって調査に臨んだ結果ともいえよう。このことは今後に向けて自戒としたい。

４．４トレンチ（図４・図 44）

図４に示したように、５区の中央付近に長さ 11 m、幅６mの南北に長いトレンチを設定した。トレンチの長軸方向は現地形の水田に合わせたため、おおよそ南西－北東方向になっている。土層の堆積状況は、現耕作土を除去すると谷埋土である３層があり、地山に至っている。地山は、トレ

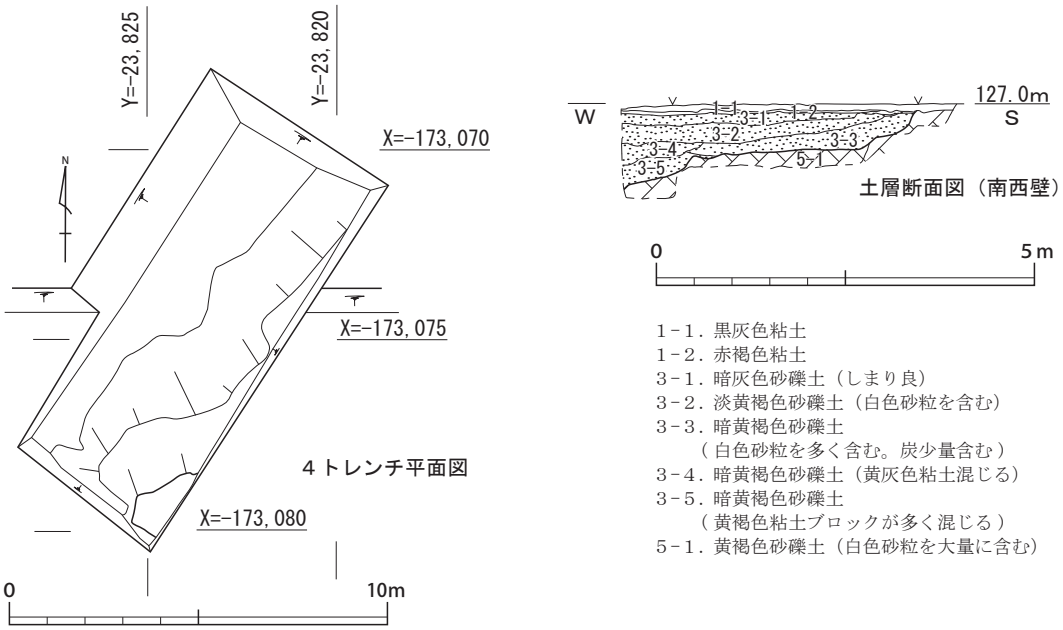


図 44　５区　４トレンチ　平面図　（S.＝1/200）・南西壁　土層断面図　（S.＝1/100）

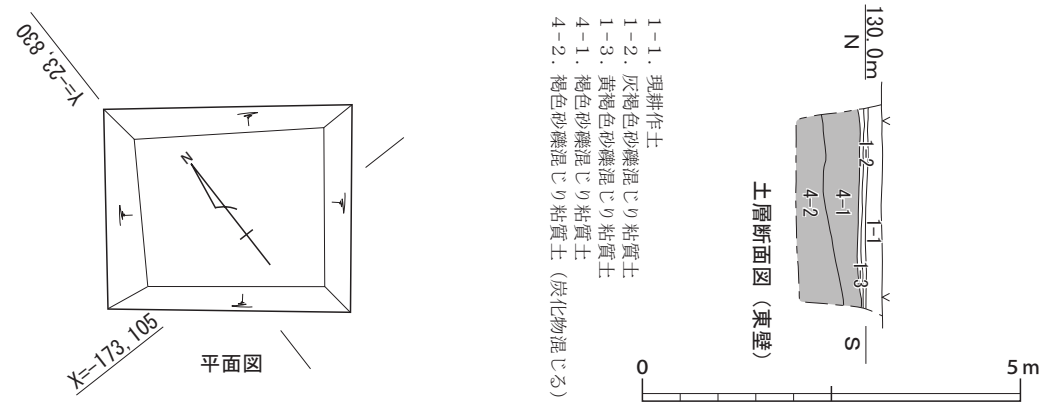


図 45　５区　５トレンチ　平面図・東壁　土層断面図　（S.＝1/100）

ンチ南東隅で現地表面から深さ約 1.4 mで検出したが、北西端では深くなっており、現地表面から深さ約 2.9 mになっていた。人工的な遺構は認められなかったが、遺物は３層から瓦器椀片などの中世の土器が出土した。

５．５トレンチ（図４・図 45）

図４に示したように、５区南半の中央付近に、一辺３mのトレンチを設定した。図 45 の断面図に見えるように、耕作床土直下で流入堆積土である４層を検出した。深さ 1.1 mまで掘削したが、

このトレンチでは地山を検出していない。遺構・遺物も認められなかった。

６．６・７・８トレンチ（図４・図46）

図４に示したように、トレンチ６は、５区南西隅付近で、南東から北西方向に下る傾斜地に造られた４段で構成される棚田に対して、等高線に直交するように棚田の最上段から北西方向に長さ21 m、幅２mの規模で設定したものである。トレンチ６においては、いずれの地点でも耕作土層直下で地山を検出した。この棚田の最下段の耕作土層直下で竹を組み合わせて作られた暗渠があった。この暗渠には塩ビパイプも一緒に埋設されており、現代のものであることがわかった。

暗渠からの流水量が多く、このトレンチでの調査が困難であったため、６トレンチの最も標高が低くなる西端部から北に９～10 m程離して、７トレンチ（３×３m）、８トレンチ（３×３m）を設定した。この２箇所のトレンチでも同様な暗渠が見られた。それ以外の遺構・遺物は、６～８トレンチのいずれにおいても認められなかった。

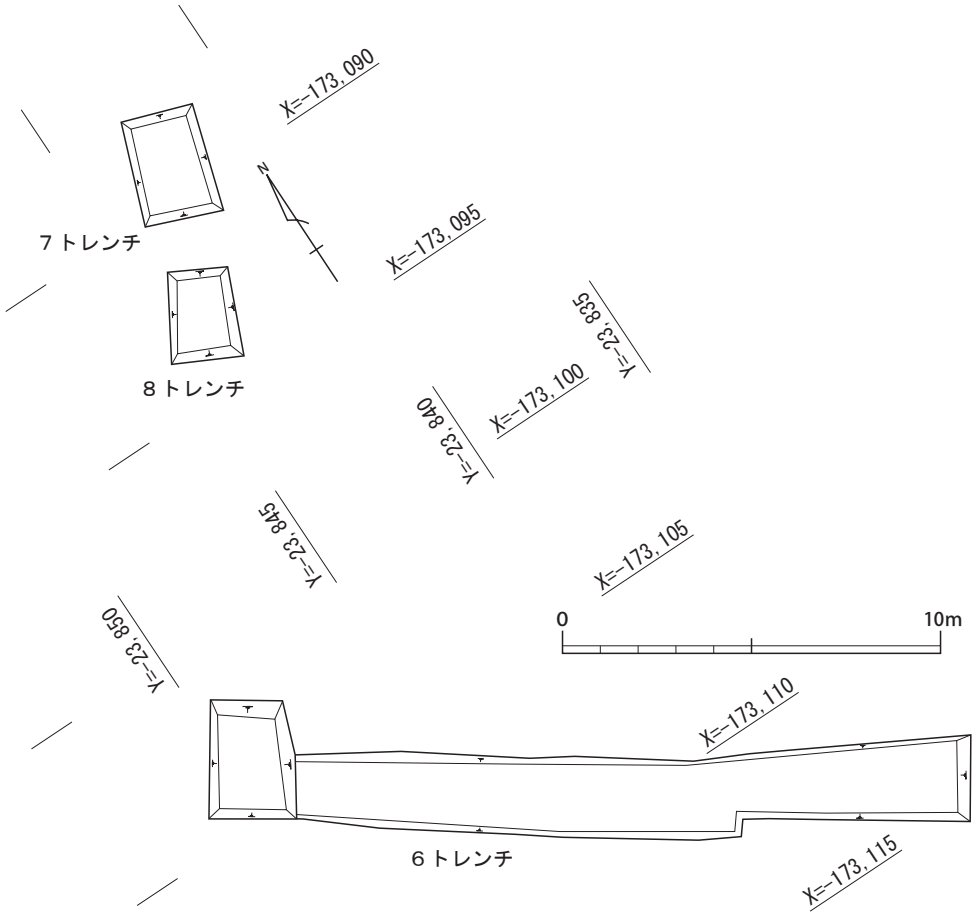


図46　５区　６・７・８トレンチ　平面図　（S.＝1/200）

第６節　遺物

遺物は、２区および３区に関しては、第 12 － 2 次調査として次年度に調査を行ったため、そこから出土したものは、第５章に記載することとした。ここでは、１区および４区から出土した遺物について、その概要を述べる。

１区および４区で出土した遺物のうち図化可能であったものを図 47 ～ 56 に掲げた。これらの形態や調整・大きさ等の詳細は、土器については別表１に、石器については別表２に観察表としてまとめてそれぞれ記したので、参照されたい。

１．１区出土遺物（図 47・図 48）

図 47・図 48 に１区谷地形から出土した遺物を掲載した。

（47 － 1）は弥生土器壺の底部である。外面には縦方向のヘラミガキを施す。内面には斜め方向のハケの後、ヘラミガキを施す。これらの特徴から畿内第Ⅰ様式に属する。

（47 － 2）は弥生土器甕の口縁部から体部である。外面には４条のヘラ描沈線を施し、内面にはナデを施す。これらの特徴から畿内第Ⅰ様式に属する。

（47 － 3）は弥生土器甕の口縁部から体部である。外面にはヘラミガキを施すが磨滅している。口縁端部は摘み上げる。内面にはナデを施し、体部外面、口縁部内面には煤が付着している。これらの特徴から畿内第Ⅳ様式に属する。

（47 － 4）は庄内式土器甕の口縁部から体部である。外面には指頭圧痕が残る。内面にはハケのち強いナデを施し、端部を上方に摘み上げる。これらの特徴から庄内１式に属する。

（47 － 5）は土師器皿である。口縁部外面には二段ナデを施し外反させる。内面はナデにより仕上げられる。指頭圧痕が残る。これらの特徴から平安時代中頃（10 世紀）に属する。

（47 － 6）は土師器羽釜である。外面に貼りつけられた鍔は一部欠損しており、下部には煤が付着する。また口縁部外面には指頭圧痕、内面にはナデがあり、端部に面を持つ。これらの特徴から室町時代（15 世紀後半）に属する。

（47 － 7）は須恵器杯身である。高台部を貼りつける。形態からみて奈良時代（８世紀）に属する。

（47 － 8）は東播系須恵器甕である。外面にはタタキを施す。口縁端部には強いナデを施す。鎌倉時代（13 世紀）に属する。

（47 － 9）は瓦器椀である。全体的に磨滅が激しいが体部内面にはヘラミガキがみられる。鎌倉時代（13 世紀）に属する。

（47 － 10）は瓦器椀の底部である。高台部は貼りつける。高台の形状から 12 世紀前半に属する。

（48 － 11 ～ 20）は石器である。（48 － 11 ～ 13・15・18）はサヌカイト、（48 － 16・17）は緑泥片岩、（48 － 14・19）は安山岩、（48 － 20）は砂岩を用いる。

（48 － 11）は石錐である。平面形は柳葉形、端部の断面形状は両端とも紡錘形を呈する。下端

部に回転痕が観察できる。

（48 － 12）は石錐の未成品もしくは削器である。木葉形の剥片の片側側縁部に細部調整を施す。鋭角になった一端にわずかに摩滅があり、石錐として利用された可能性がある。

（48 － 13）は楔もしくは削器である。両側縁部に細部調整を施すが密度は低く、片面調整の部分が残る。対向する側縁部の一部にわずかに刃潰れがみられる。石鏃の未成品の可能性もある。

（48 － 14）は石皿片である。敲打により窪んだ部分を有する。周縁部にはわずかに摩滅がみられ、削器などに利用された可能性がある。

（48 － 15）は削器である。方形を呈する板状の剥片の、隣り合う二辺に細部調整を施す。原礫面が残る。

（48 － 16）は石包丁片である。両端を欠失し、背部と刃部の一部、紐穴が 1 孔残る。刃部に穿孔痕が残っており、より大形のものから再成形されたものと思われる。

（48 － 17）は剥離した石包丁片である。端部に近い部分で、背部の一部が残る。残存する表面には研磨がみられる。

（48 － 18）は横長の剥片である。原礫面が残る。

（48 － 19）は石棒または石斧の基部である。横断面は楕円形を呈する。表面には全体に研磨が施されるが頂部は荒い成形の敲打が残される。欠損後に敲き石として使用された可能性がある。

（48 － 20）は扁平な楕円礫を素材とする敲き石の破片である。残存する両面の平坦面に広く磨面が形成される。周縁にも敲打痕が形成されている。

２．4 区出土遺物（図 49 ～ 56）

図 49 ～ 56 に 4 区谷地形から出土した遺物を掲載した。

（49 － 1 ）は東部瀬戸内系大形壺の口頸部である。受部外面には粘土帯を巡らし、複合口縁を作りだす。口縁端部には面を持つ。全体的にナデで仕上げる。これらの特徴から布留 1 式に属する。

（49 － 2 ）は弥生土器甕の体部から底部である。外面にはタタキメが残り、分割成形技法によってつくられている。これらの特徴から畿内第Ⅴ様式に属する。

（49 － 3 ）は土師器甕の口縁部から体部である。口縁端部が僅かに肥厚する。外面には縦方向のハケ、内面には粗い横方向のハケを施す。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（49 － 4 ）は土師器甕の口縁部から体部である。口縁端部は内側に僅かに肥厚する。体部外面には縦方向のハケ、内面はナデで仕上げる。また、内面には指頭圧痕が残る。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（49 － 5 ）は土師器甕の口縁部から肩部である。口縁端部は面を持つ。口縁部内面には粗い横方向のハケを施す。体部外面には縦方向のハケを施す。これらの特徴から古墳時代後期に属する。

（49 － 6 ）は土師器甕の口縁部から肩部である。口縁端部は面を持つ。口縁部から肩部には僅か

にハケメが残る。内面は指頭による押圧の後、ナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（49 － 7 ）は土師器甕の口縁部から肩部である。口縁端部は外側に僅かに肥厚する。肩部外面には縦方向のハケを施し、内面はナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（49 － 8 ）は土師器甕の口縁部から肩部である。口縁端部は面を持つ。肩部外面にはハケメが残る。内面はナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（49 － 9 ）は土師器甕の口縁部から肩部である。口縁端部はやや尖り気味で、口縁部内面にはハケを施す。肩部内外面はナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（49 － 10）は土師器甕である。口縁端部は肥厚し面を持つ。体部外面に縦方向のハケを施す。また、煤が付着する。これらの特徴から布留２式に属する。

（49 － 11）は土師器甕の口縁部から体部である。口縁端部は面を持つ。肩部外面には縦方向のハケを施す。内面はナデで仕上げる。古墳時代中期中頃に属する。

（50 － 12）は土師器甕の口縁部から体部である。口縁端部は僅かに面を持つ。体部外面には縦方向のハケ、口縁部内面には横方向のハケを施す。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（50 － 13）は大形の土師器鉢の口縁部から体部である。口縁部は肥厚し、端部に面を持つ。体部外面には縦方向のハケメが残る。これらの特徴からみて古墳時代後期に属する。

（50 － 14）は土師器小形鉢の口縁部から体部である。口縁端部が短く屈曲する。体部外面にはヘラミガキを施す。内面はナデで仕上げる。これらの特徴からみて古墳時代後期に属する。

（50 － 15）は土師器壺の口縁部から体部である。口縁下端部外面に爪形文を施す。内外面ともナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代中期に属する可能性がある。

（50 － 16）は土師器高杯の杯部である。口縁端部は短く外反する。体部外面下半にヘラケズリを施す。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（50 － 17）は土師器高杯の杯部である。口縁部は斜めに立ち上がる。全体的にナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代後期に属する。

（50 － 18）は土師器高杯の脚台部である。外面にナデを施し、内面にヘラケズリを行なう。シボリメがみられる。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（50 － 19）は土師器高杯の脚台部である。内外面にヘラケズリを施す。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（50 － 20）は土師器高杯の脚台部である。外面にナデ、内面にヘラケズリを施す。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（50 － 21）は土師器高杯の脚台部である。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。また、４方向透孔を持つ。これらの特徴から古墳時代中期に属する。

（50 － 22）は土師器高杯の脚台部である。外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。これ

らの特徴から古墳時代中期に属する。

（50 － 23）は土師器小形鉢である。底部から内湾して口縁部が立ち上がる。全体的にナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代後期に属する。

（50 － 24）は土師器小形鉢である。底部から内湾して口縁部が立ち上がる。体部から底部外面はハケで仕上げる。これらの特徴から古墳時代後期に属する。

（50 － 25）は土師器小形鉢である。底部から内湾して口縁部が立ち上がる。全体的にナデで仕上げる。これらの特徴から古墳時代後期に属する。

（50 － 26）は土師器甑もしくは鉢の把手である。全体的にナデで仕上げる。断面形は楕円形を呈する。古墳時代中期に属する。

（50 － 27）は土師器把手付鉢の把手である。体部にハケを施し、先端部はナデで仕上げる。断面形は楕円形を呈する。古墳時代中期に属する。

（51 － 28）は土師器甑である。側面の両側に把手が付く。牛角把手にはヘラによる切れ込みが残る。底部は中央に 1 箇所、その周辺に 5 箇所の楕円形の孔をあけている。体部外面は縦方向のハケの後、横方向のハケを施す。これらの特徴からみて古墳時代中期に属する。

（51 － 29 ～ 33）は須恵器杯身である。底部外面から体部外面にかけて回転ヘラケズリを施す。口縁部外面および内面全体はヨコナデで仕上げる。（51 － 31）は底部外面にヘラ記号がある。形態的特徴からみて、これらは TK47 型式に属する。

（52 － 34 ～ 55）は須恵器杯身である。（52 － 34 ～ 48・52・53 ～ 55）は底部外面から体部外面にかけて回転ヘラケズリを施す。口縁部外面および内面全体はヨコナデで仕上げる。（52 － 34 ～ 36）は TK47 型式、（52 － 37・38）は TK208 型式、（52 － 39 ～ 52）は MT15 型式、（52 － 53・54）は TK10 型式、（52 － 55）は TK43 型式に属する。

（52 － 56・57、53 － 60 ～ 76）は須恵器杯蓋である。（53 － 60 ～ 75）は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。口縁部から体部外面および内面全体はヨコナデで仕上げる。それぞれの形態から見て、（52 － 56･57、53 － 75･76）は TK23 型式 、（53 － 60 ～ 63･71 ～ 73）は MT15 型式、（53 － 64 ～ 70）は TK47 型式、（53 － 74）は TK10 型式に属する。

（52 － 58・59）は須恵器有蓋高杯の蓋である。天井部のつまみを欠失する。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。口縁部から体部外面および内面全体はヨコナデで仕上げている。それぞれの形態からみて TK23 型式に属する。

（53 － 77 ～ 82）は須恵器壺である。口縁端部は肥厚させる。頸部外面に、（53 － 77・78・80・82）は波状文を、（53 － 79）はカキメを施す。（53 － 81）は体部外面にタタキを施した後、カキメを施す。内面には指頭圧痕が残る。（53 － 77・82）は MT15 型式、（53 － 78・79・81）は TK10 型式、（53 － 80）は MT15 型式に属する。

（54 － 83 ～ 87）は須恵器甕である。（54 － 83）は体部に列点文、その上下に竹管文を施す。（54

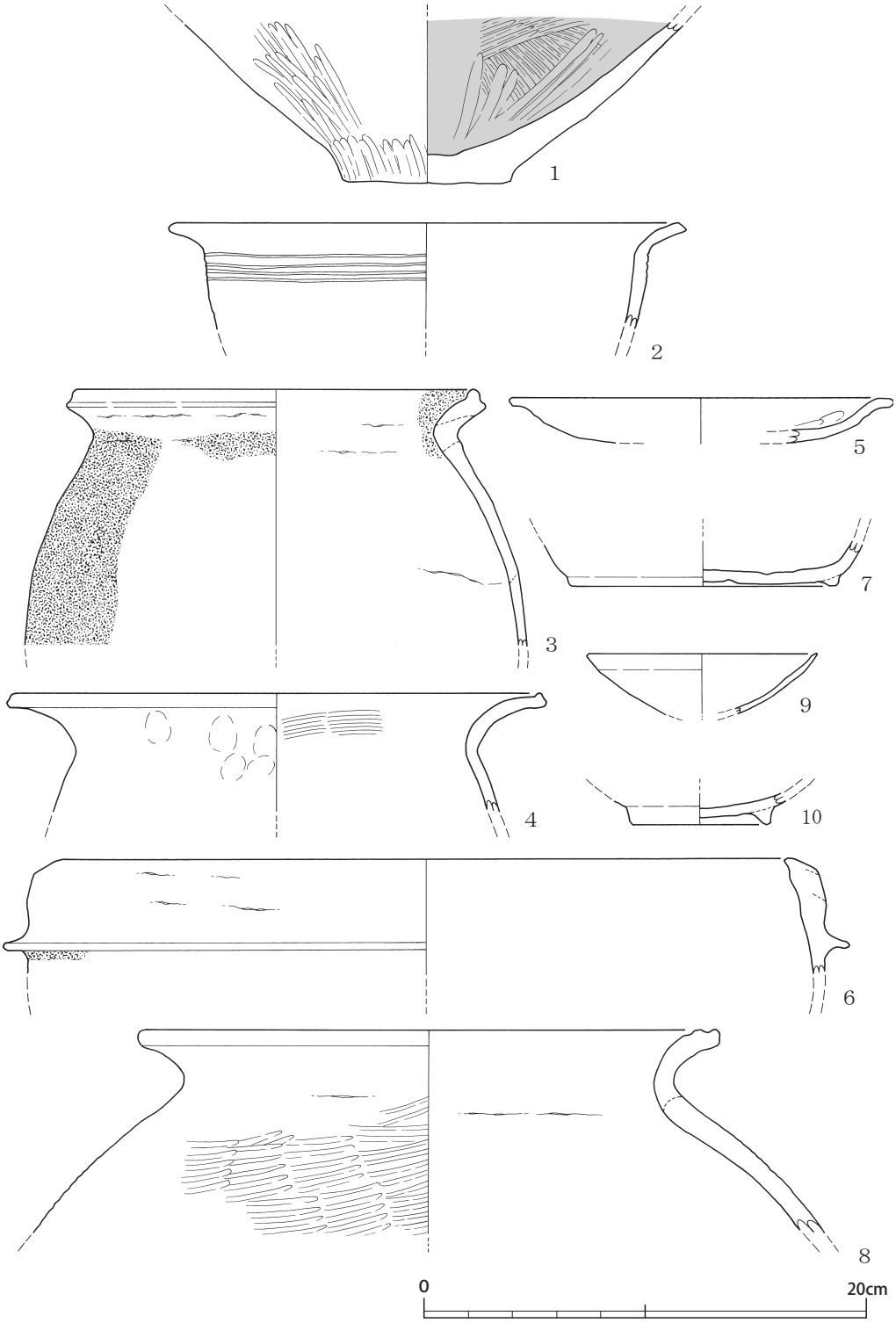


図 47　1 区　谷地形　出土遺物（1）（S.＝1/3）

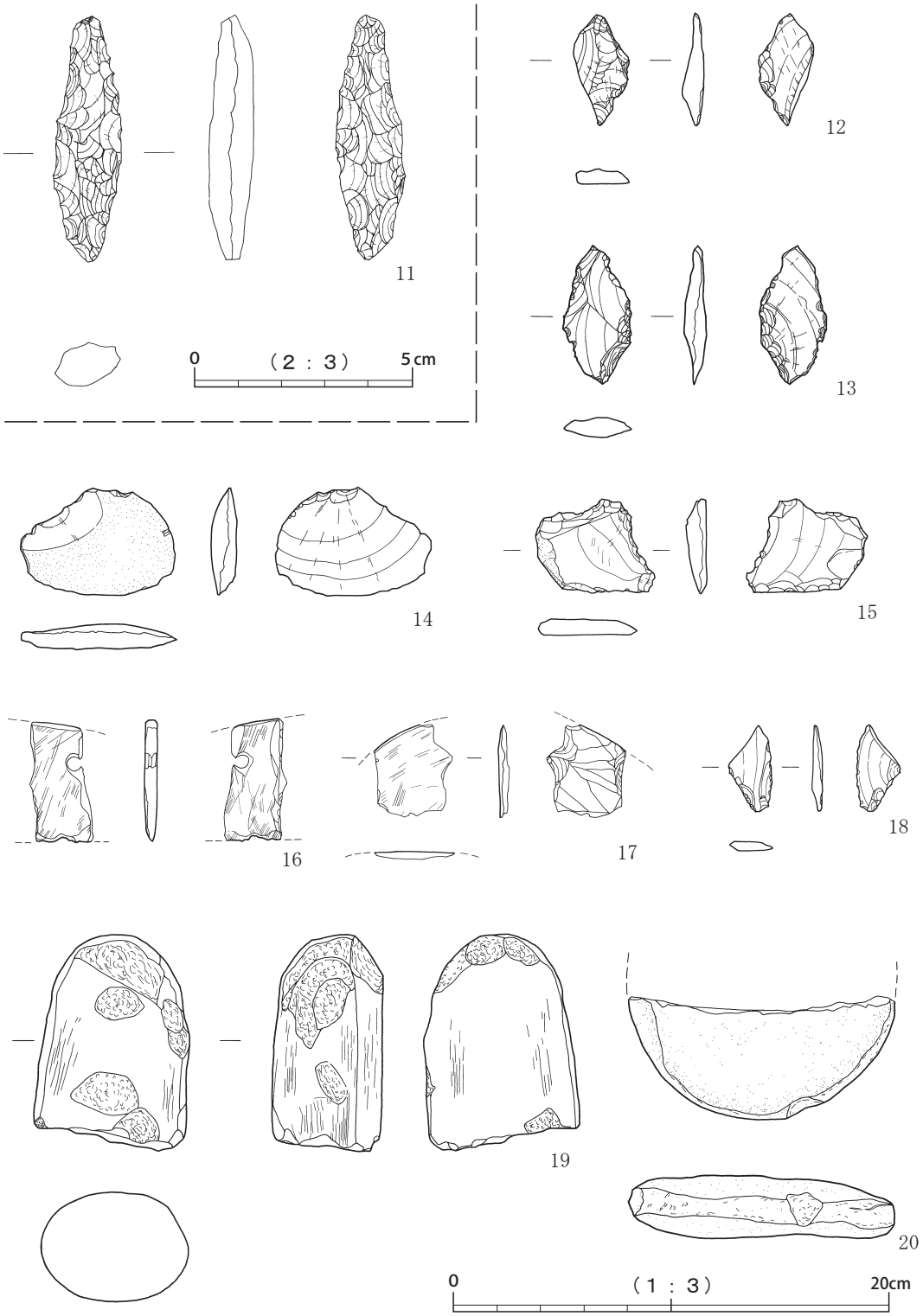


図 48　１区　谷地形　出土遺物（２）（S.＝2/3・1/3）

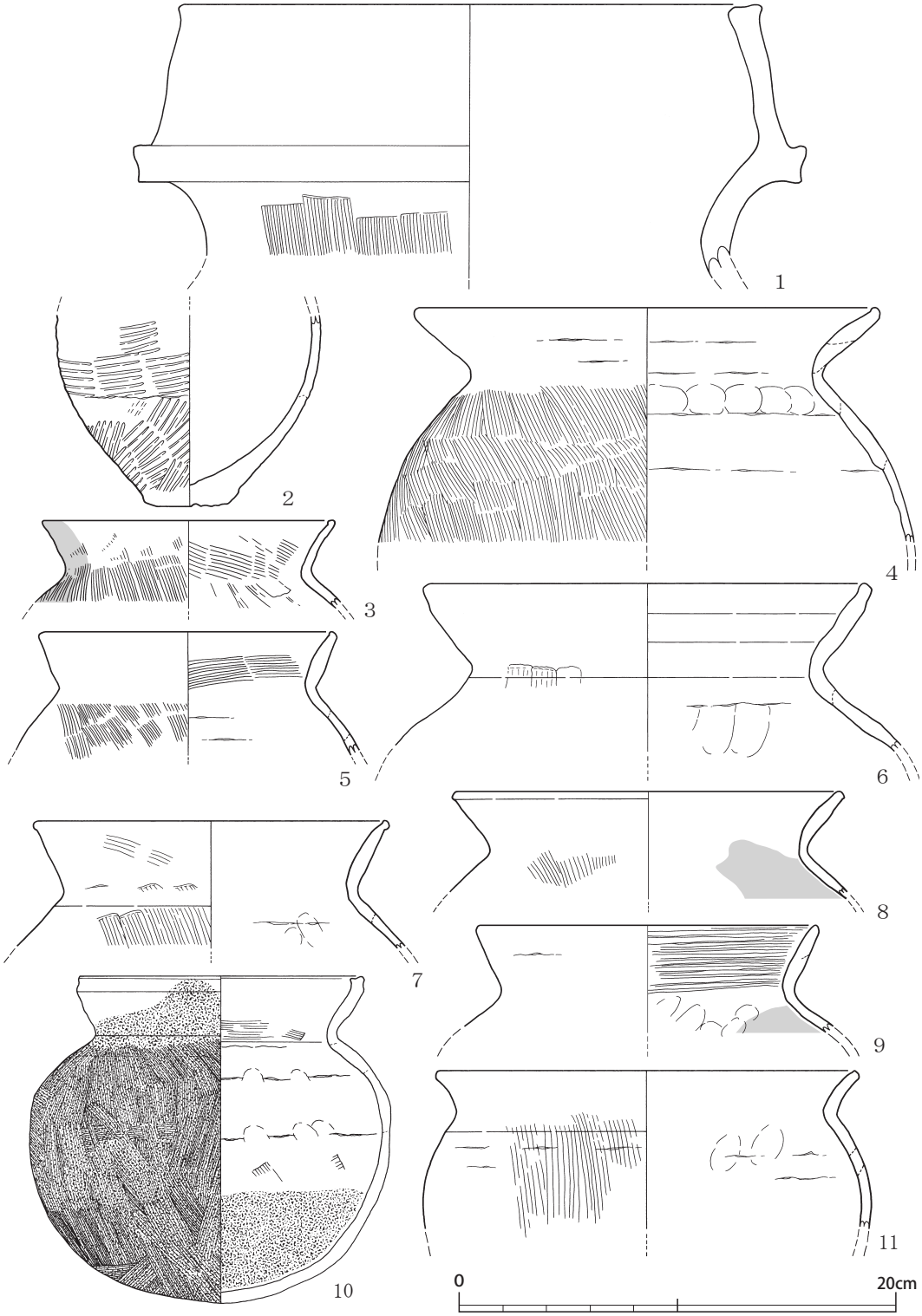


図 49　4 区　谷地形　出土遺物（1）（S.＝1/3）

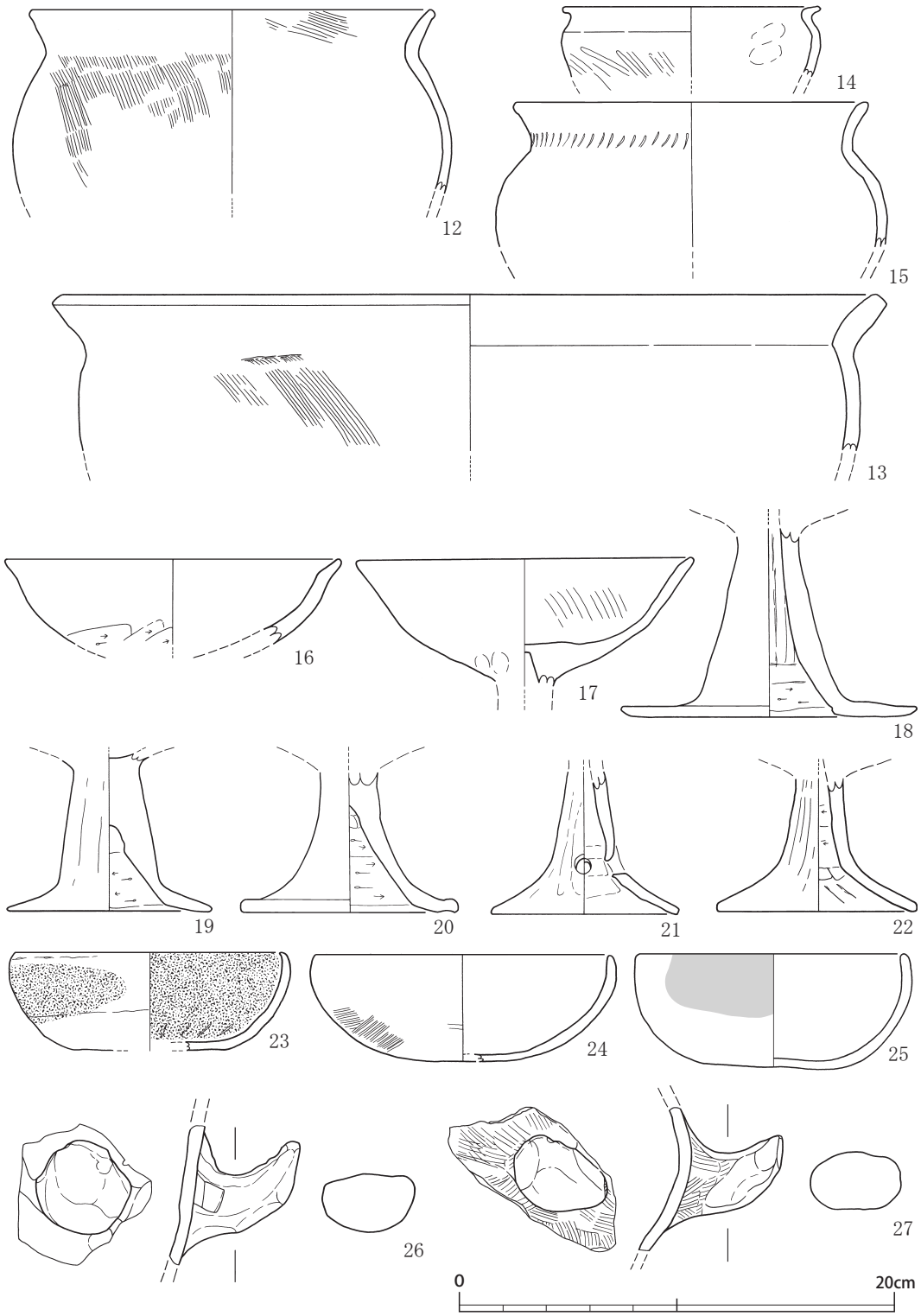


図 50　4 区　谷地形　出土遺物（2）（S.＝1/3）

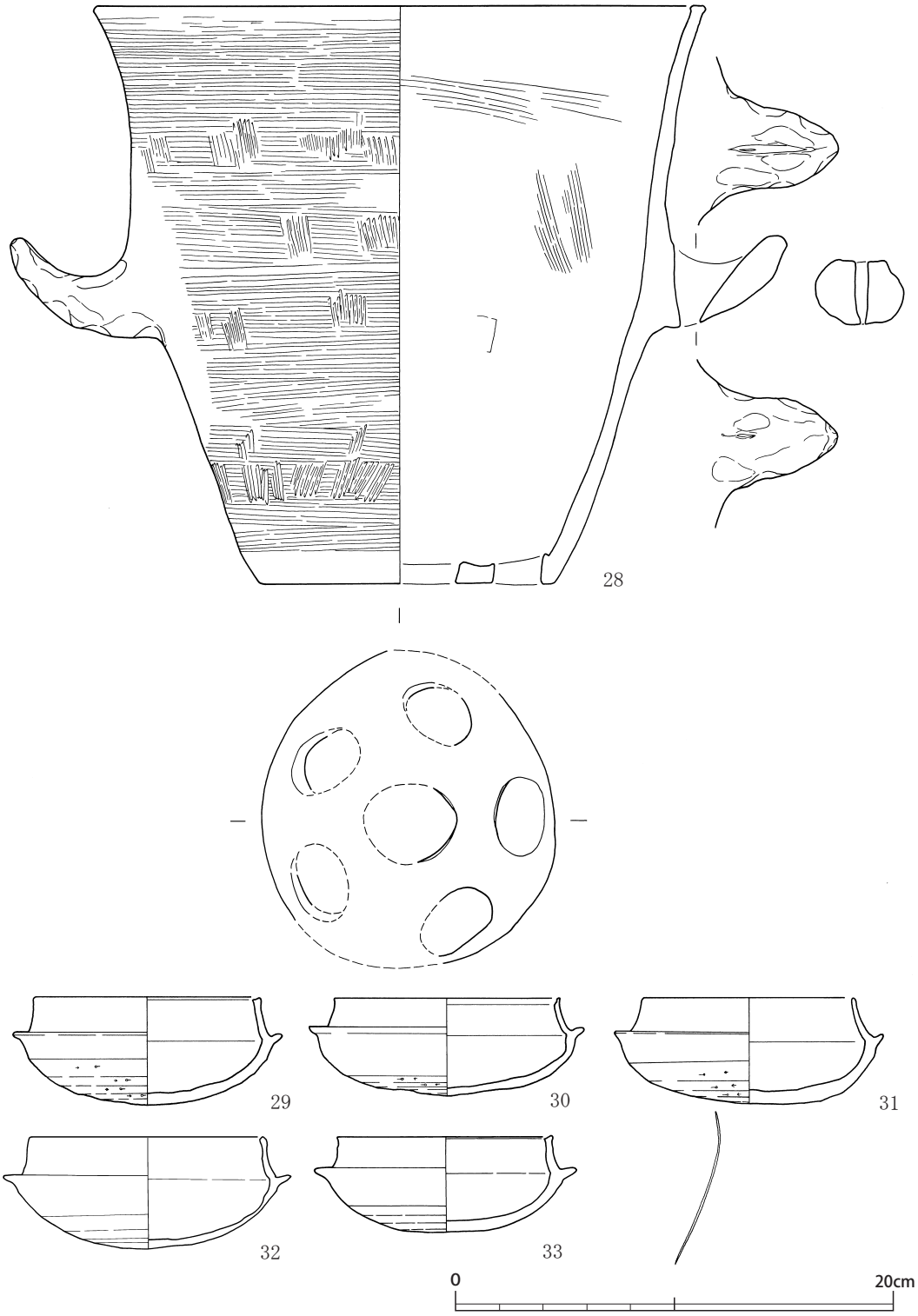


図 51　4 区　谷地形　出土遺物（3）（S.＝1/3）

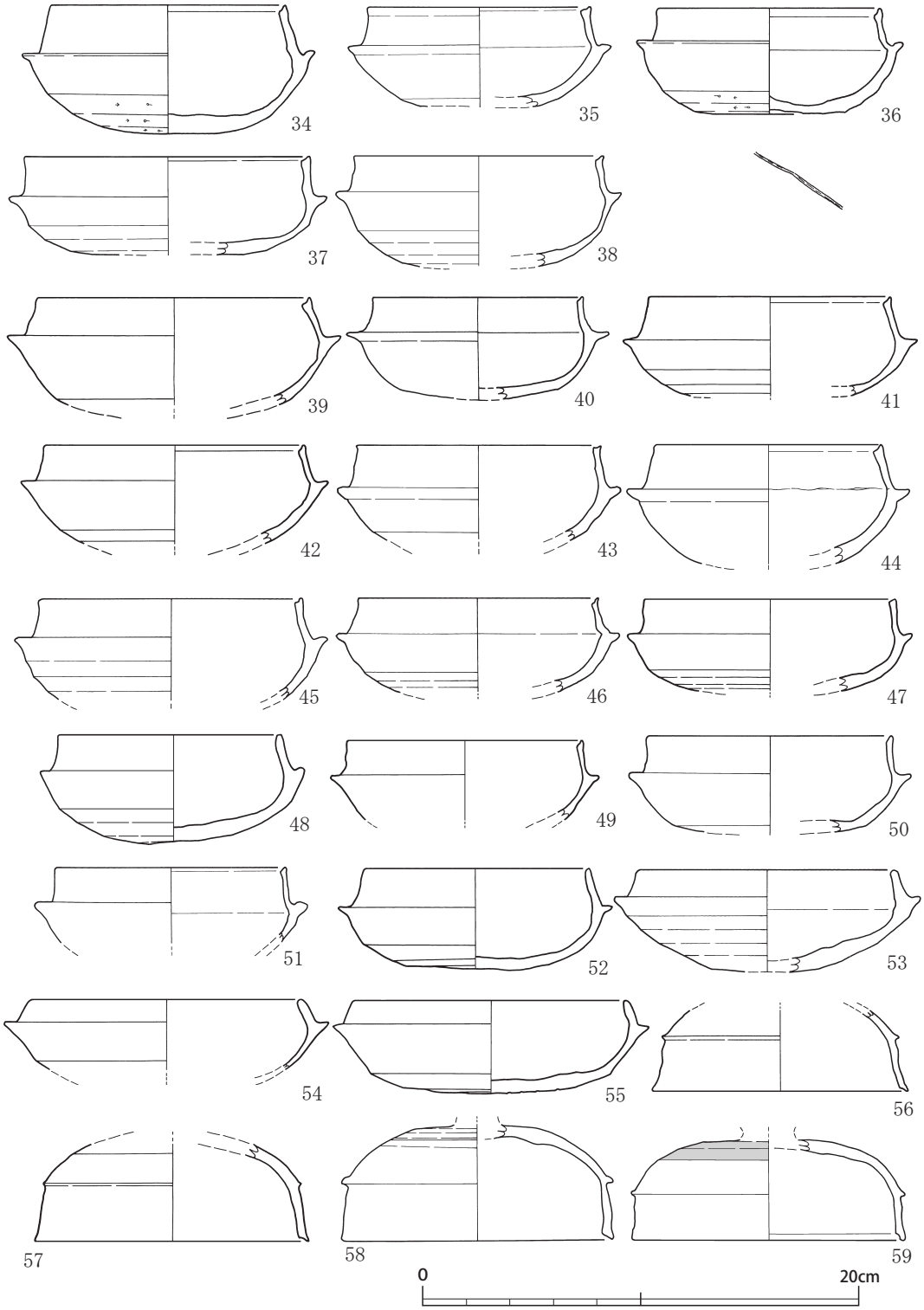


図 52　４区　谷地形　出土遺物（４）（S．=1/3）

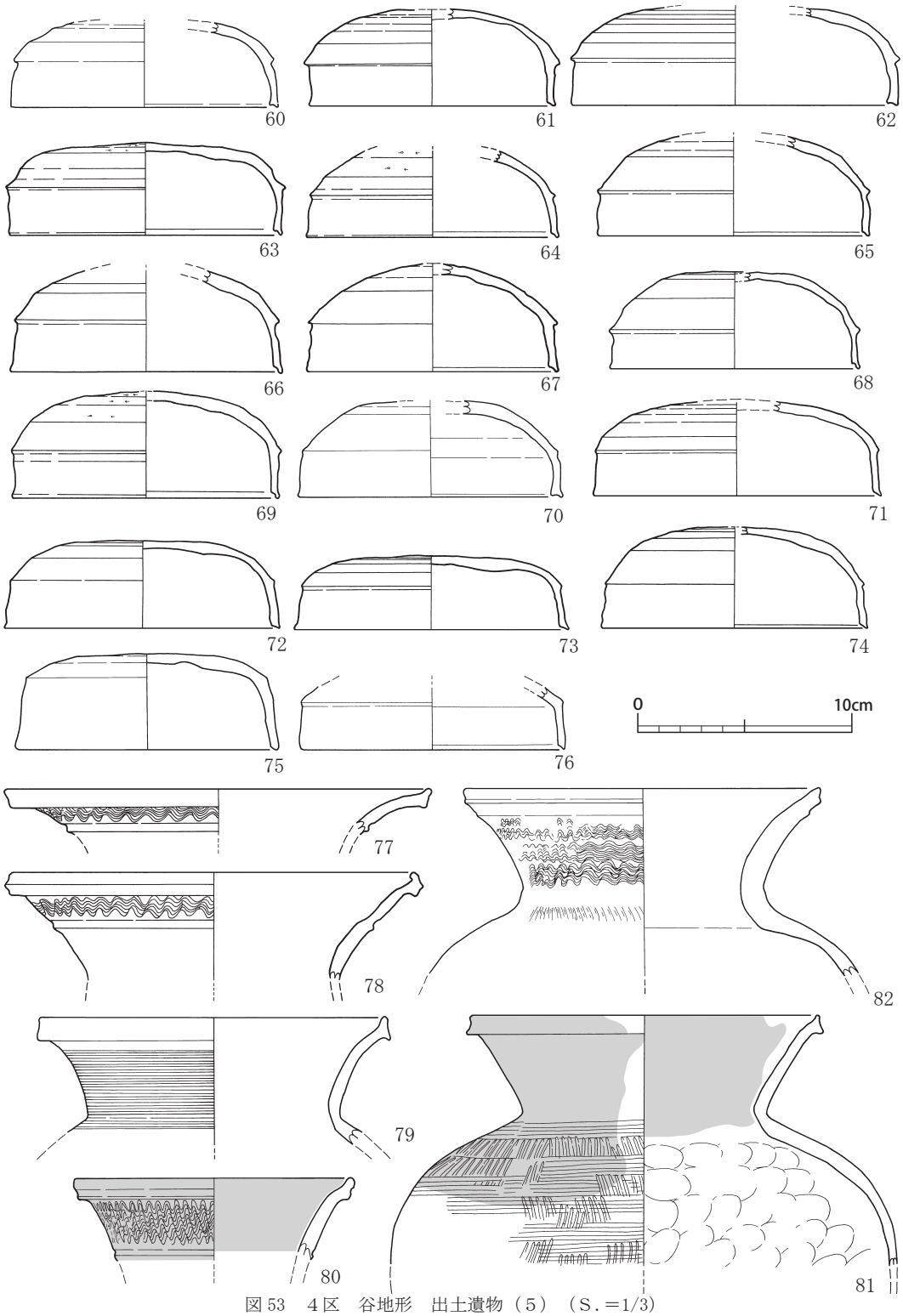


図 53　４区　谷地形　出土遺物（５）（S.＝1/3）

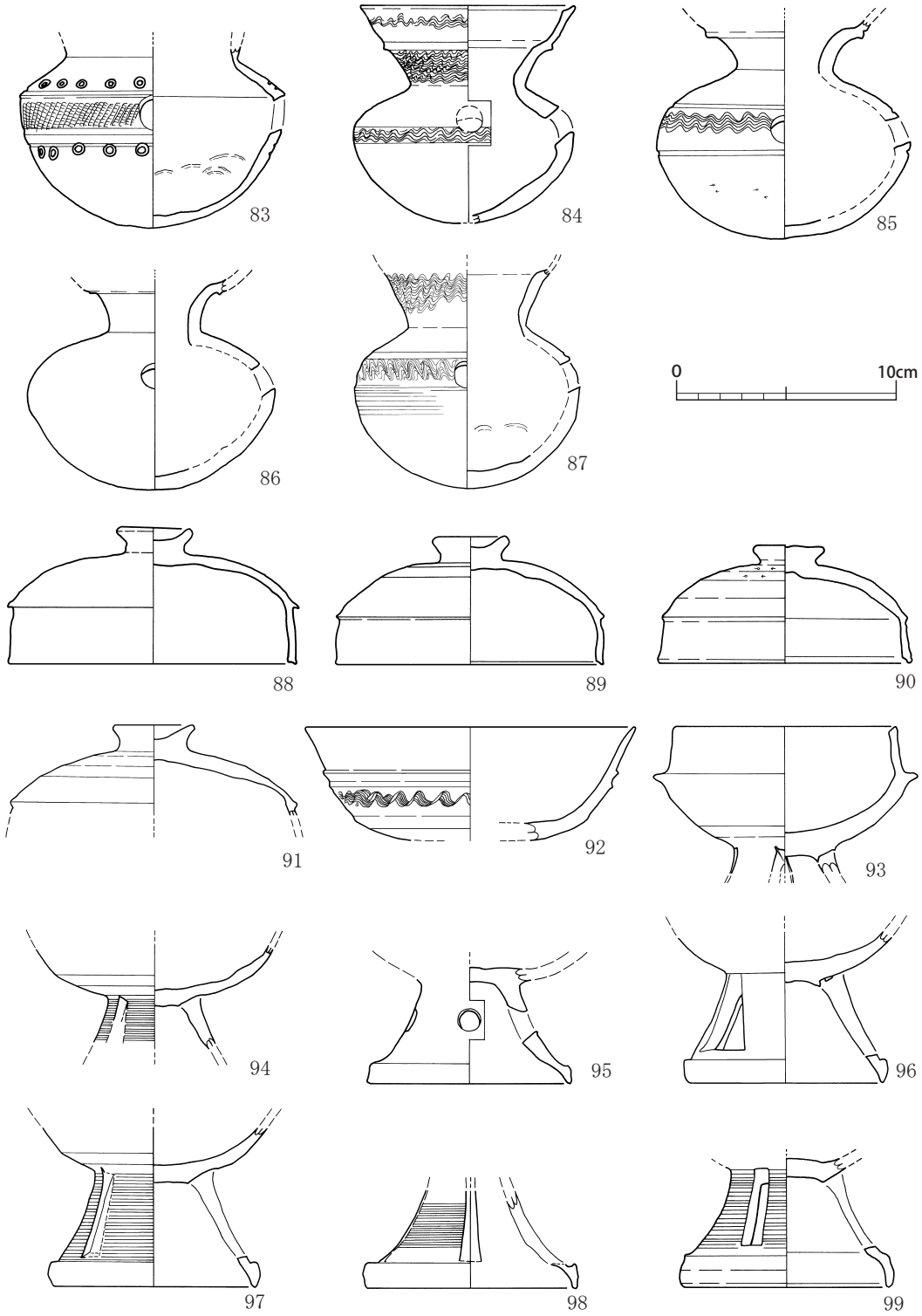


図 54　４区　谷地形　出土遺物（６）（S.＝1/3）

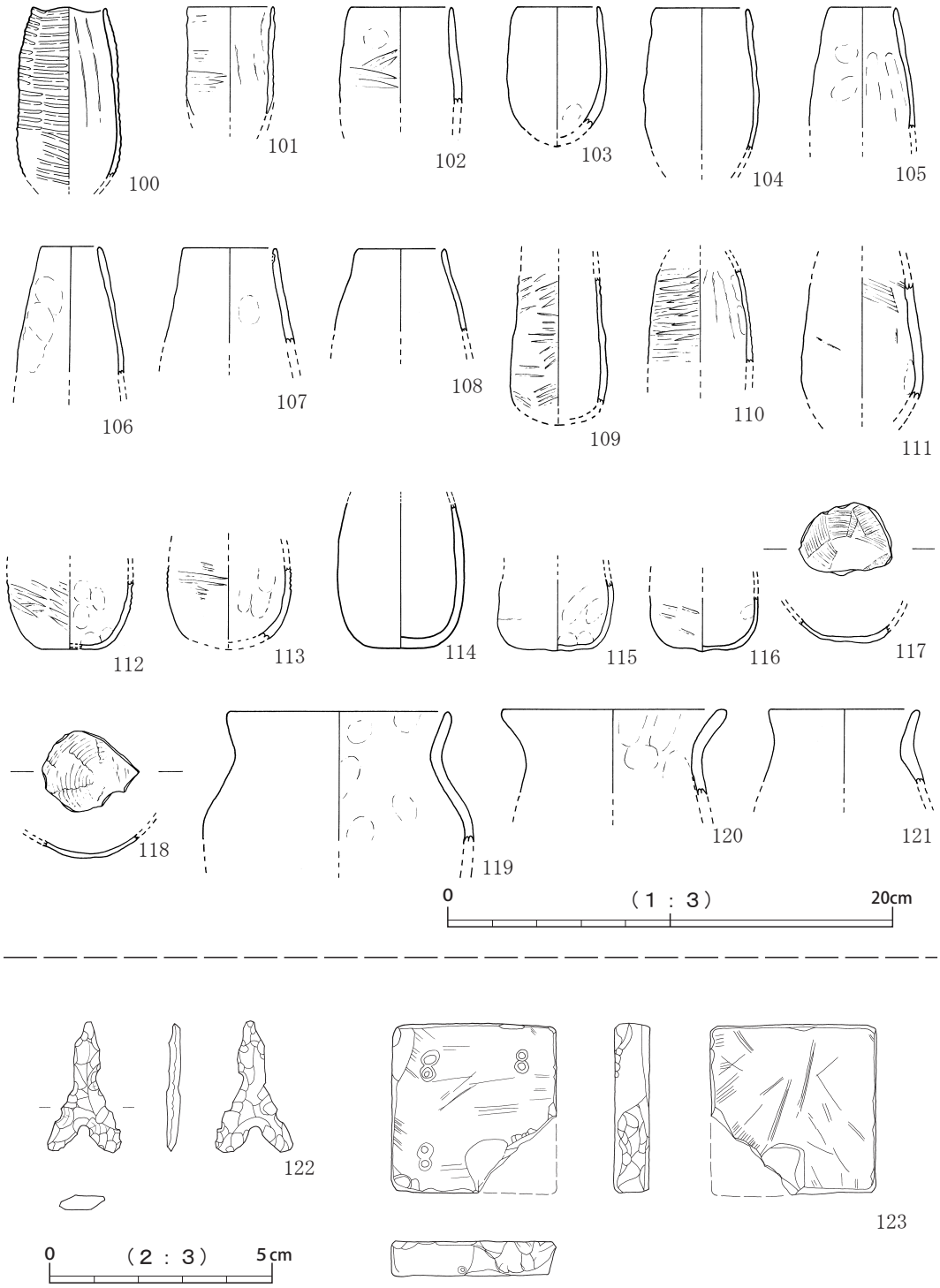


図 55　4 区　谷地形　出土遺物（7）（S.＝1/3・2/3）

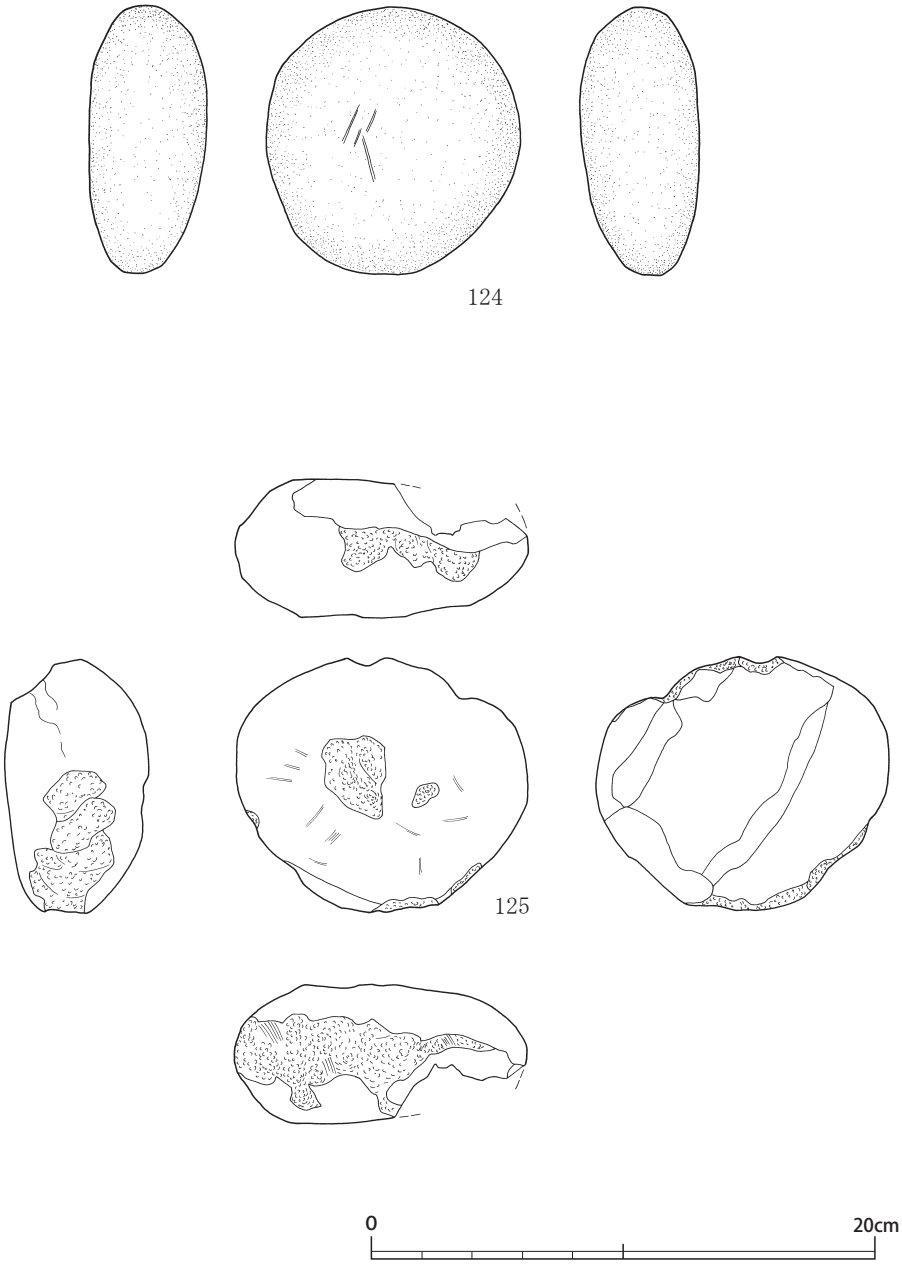


図 56　４区　谷地形　出土遺物（８）（S.＝1/3）

－ 84・85・87）は口縁部、頸部、体部外面に波状文を施す。（54 － 83・84・87）は TK23 型式、（54 － 85）は TK208 型式、（54 － 86）は TK73 型式に属する。

（54 － 88 ～ 99）は高杯およびその蓋である。（54 － 88 ～ 91）はつまみ部を有する有蓋高杯蓋である。（54 － 89・90）は天井部に回転ヘラケズリを施す。それ以外は全体をナデで仕上げる。

（54 － 92）は無蓋高杯杯部である。外面に波状文を巡らす。形態から見て TK23 型式に属する。

（54 － 93）は有蓋高杯の杯部である。全体的にナデで仕上げる。形態から見て TK23 ～ TK47 形式に属する。

（54 － 94 ～ 99）は高杯の脚台部で、杯底部が残っているものもある。いずれも全体的にナデで仕上げる。（54 － 94・97 ～ 99）は脚柱状部外面にカキメを施す。（54 － 95）には円形の透孔が 3 方向に施されている。ただし、その位置は通有のものとは異なっていて、対向する 2 箇所とこの 2 孔のほぼ中間に 1 孔を穿つものである。つまり一般には 4 方透しとなるものの 1 孔を欠いた状態になっている。この他は方形の透孔である。形態から見て TK23 ～ TK47 型式に属する。

（55 － 100 ～ 121）は製塩土器である。（55 － 100 ～ 116）は筒状を呈し、器壁は薄い。（55 － 100 ～ 102・109 ～ 113・116）は体部外面にタタキを施す。（55 － 111）は内面にハケを、（55 － 105・110）はナデを施す。（55 － 117・118）の底部内面にはクモの巣状ハケが見られる。特に（55 － 118）の内面のハケは貝殻条痕とみられる。（55 － 119 ～ 121）は甕状の形態を呈する。内面をナデで仕上げる。いずれも古墳時代中期中頃に属する。

（55 － 122・123、56 － 124・125）は石器である。（55 － 122）はサヌカイト、（55 － 123）は粘板岩、（56 － 124）は砂岩、（56 － 125）は安山岩を用いる。

（55 － 122）は凹基式石鏃である。断面形は紡錘形で、基部、先端部ともに長く作られる。

（55 － 123）は巡方である。板状の正方形に成形した石材を用いる。全面にわたって研磨がなされ、裏面に 2 孔 1 組の穿孔を四隅に配する。穿孔はどれも未通であり、穿孔作業中に欠損したため廃棄されたものと思われる。奈良時代～平安時代に属する。

（56 － 124）は扁平な円礫を素材とする磨石である。両面の平坦面は全体に敲打が見られ、その周縁には部分的に磨面が形成される。周縁にも帯状に敲打が形成されている。使用期間の短い成品もしくは再加工品と思われる。

（56 － 125）は扁平な円礫を素材とする敲き石もしくは磨石を転用した石錘である。残存する面の平坦面に敲打痕の集中が見られ、その周縁には広く磨面が形成される。全体の 1/4 を欠失してのち周縁の対向する 4 箇所に敲打による凹みを作り、紐をかけて使用されたものと思われる。

第 7 節　小結

第 12 － 1 次調査地は、今次調査対象地にできるだけ満遍なくトレンチを配置して、遺構や遺物散布の広がりを確認しようとしたものである。結果、今次調査地の中央部分は南北方向の南北方向

の谷地形が占めていて、その東西の微高地に遺構が存在している場合があることがわかった。

１区は、２トレンチで谷地形の西岸に当たる上端を検出したが、調査区の東端に近い１トレンチの範囲では、東岸を検出できなかった。しかし、２区以南では、直線的ではないが、谷地形の東岸が検出されているので、１区は南北方向の谷地形が東方向に開口していく、その開口部に当たっていることがわかる。１区では、このように旧地形を復原し得る資料を得たが、いずれのトレンチでも自然流路などを除いては、人工的な遺構は認められなかった。

２区から３区にかけて南北方向の谷地形に合流する東西方向の谷地形があったこともわかった。この東西方向の谷地形の北側に、谷に囲まれた微高地があって竪穴住居などの遺構を検出した。当該地周辺は丘陵裾部にあって幾多の小尾根が北に張り出す複雑な地形を呈している。それに対応する個々の谷は現状では埋没しているが、かつてはそこに水の流れもあって今よりもさらに起伏に富んだ地形であったと想定できる。

３区では、南東部が谷の外側に当たっていて、３トレンチで古墳時代の住居などの遺構を確認した。また、３区の出土遺物について目を引いたものとして、１トレンチと５トレンチで、自然遺構ながら東西方向の谷地形の下端付近で出土した弥生土器や庄内式土器の一群があった。

４区で南北方向の谷地形の外側に当たる部分は、西は３トレンチの西側、東は１・２トレンチを設定した尾根とその南の微高地である。特に、西側では、谷の東向きの傾斜面上に堆積した埋土から古墳時代の土器が出土したので、谷の上端西側で遺構などが存在を想定した。しかし調査区内ではその徴候は認められなかった。出土した遺物は巨勢山古墳群が所在する丘陵地から谷地形へ流れ込んできたものであろう。また、東側の丘陵地形の地点でも遺構が存在する徴候はなかった。

５区は、大部分が南北方向の谷地形の内側に当たることが確認できたので、同区の継続的な調査は必要ないと判断した。ただし、前述のように第 12 －１次調査終了後の道路建設工事中に、３トレンチの北側付近に横穴式石室墳が存在することがわかった。幸い同墳については結果的に発掘調査を実施できたが、調査地内における古墳の存在に気がつかなかったのは遺憾であった。

以上のトレンチ調査の結果を受けて、第 12 －２次調査として実施するべき調査区の設定範囲を決めた。１区から５区のうち、人工的な遺構の広がりを確認できなかった箇所については、第 12 －２次調査の対象としなかった。結果的に、弥生時代から古墳時代の遺構が確認された２区と３区を調査対象地とした。その際に、３区に関しては、谷地形の内側にあると判断された調査区西半は面的に拡張しないこととした。また、３区２トレンチが設定された地点も、明確な遺構や遺物が確認されなかったことから、この地点を掘削せずに、このトレンチを隔てて北側を３－北区、南側を３－南区として、第 12 －２次調査に臨んだ。

しかしながら、１区に関しては第２章で述べた通り、用地上の取得上の問題があったために、１区南半は今次調査では調査ができなかった。そこで、調査が可能な段階になってから、第 12 －３次・第 12 －４次調査として調査を実施したものである。

第５章　第 12 －２次調査の成果

第１節　２区

１．遺構（図４・図５・図 57）

図５・図 57 に見えるように、調査区の中央は南北方向の谷地形に当たり、南端には東西方向の谷地形がある。遺構のうち、弥生時代から古墳時代のものは、東半部ではこのような谷地形に囲まれた微高地で検出され、西半部では南北方向の谷地形の北西側上端の外側で検出された。

①谷地形（図５・図 57）

第３章で旧地形について総括して述べたように、今次調査地は、南北方向の谷地形が調査区の多くを占めている。２区では、第 12 －１次調査において、その西岸に当たる上端を３トレンチ中央付近・２トレンチ南端付近で、東岸にあたる上端を１トレンチ北端から３トレンチ東端付近で検出した。第 12 －２次調査においては、まず、図 57 に示したように、第 12 －１次調査で部分的に検出された谷地形の広がりを確認した。

これによると、南北方向の谷地形は調査区の中央付近を北東－南西方向に縦断していることがわかった。谷地形の上端の幅は 12 m程である。

さらに第 12 －１次調査１トレンチの南端で、東西方向の谷地形の北上端を検出しているので、今次調査地においてもその部分を拡張して地形のあり方を確認した。図 57 に示したように、上端が東西方向に延びていくことが確認できた。

②素掘溝（図 57）

素掘溝は、図 57 に示したように、調査区の中央から東半部において検出した。その分布密度は、南が高く北が低い傾向にある。素掘溝の方向は、南北方向と東西方向のいずれもが確認できる。切り合い関係は、ごく希に逆転している場合があるが、総じて南北方向の溝が古く東西方向の溝が新しくなっている。

また、これらの溝は、同一面で検出した様々な遺構のほか、谷地形とも切り合い関係があってそれらを切っているから、層位的に最も新しい遺構であることがわかる。素掘溝自体の深さは 10cm 程度と浅いものであったが、この面で検出した、後述するより古い遺構も上部が相当削平されている状態であったため、素掘溝による撹乱が大きなものになっている。

遺物は、コンテナ１箱分があり、その内訳は瓦器椀や土師器片などが大半を占めている。

③住居１（図 57 ～ 59）

住居１は、図 57 に示したように、２区の東端付近の中央部で検出した竪穴住居である。同一面で検出されたピットと切り合い関係があり、それらに切られている。竪穴の残存状況は、後述するように住居の中央の床面が遺構検出面より約 15cm 低くなっている。遺構の残存状況としては、その部分の床面は元の高さを保っているとみられるが、それ以外の床面は相当な削平を受けて当初の

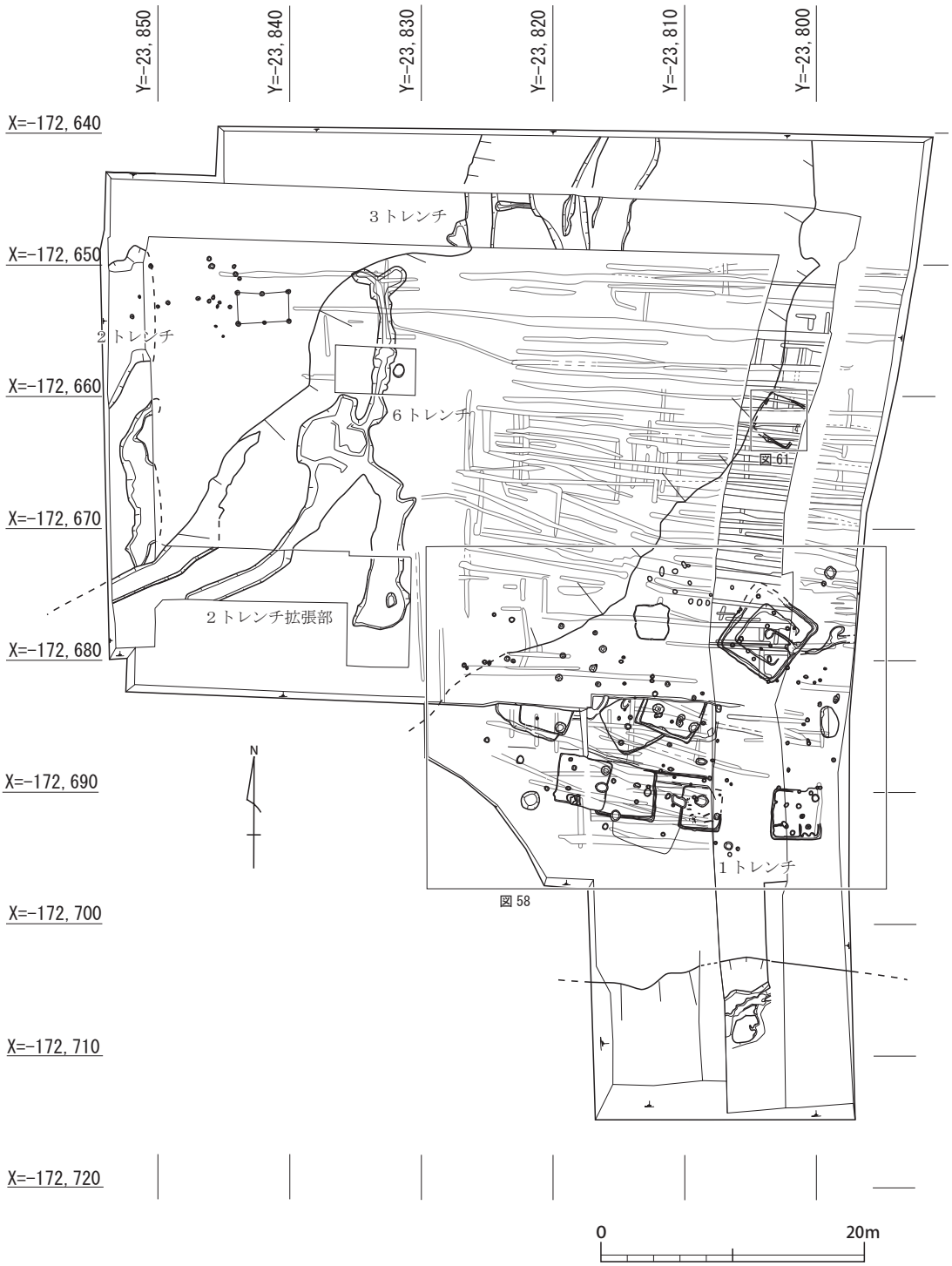
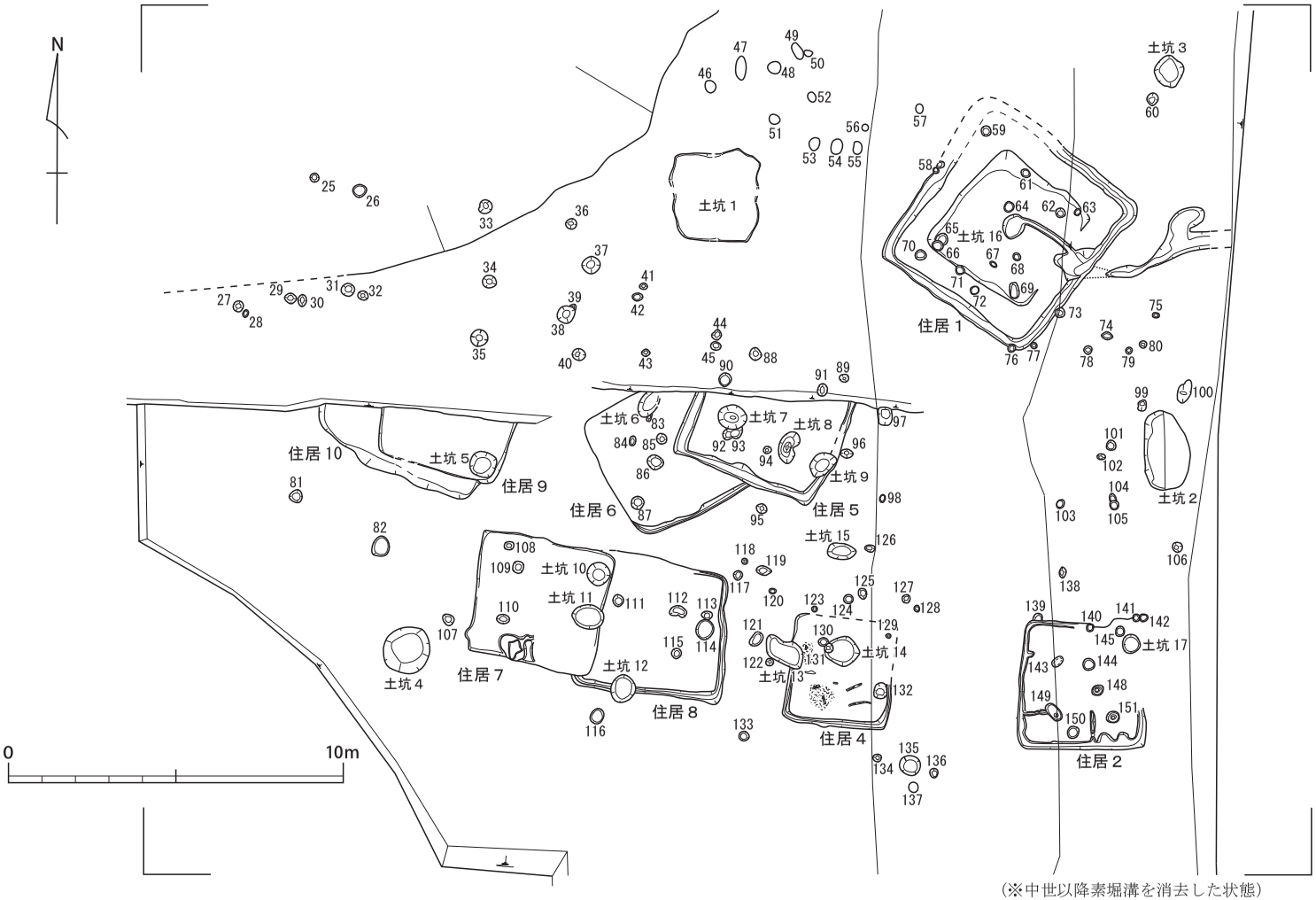


図 57　2 区　平面図　（S．=1/500）



(※中世以降素堀溝を消去した状態)

図58　2区　中央部　平面図　(S.=1/200)

高さより下がっているとみられる。また周壁溝は北西隅付近は残存しなかった。それでも、残存した溝のあり方からこの住居の平面プランは正方形を呈するとみられ、その規模は一辺約 5.5 mと復原できる。

図 59 に提示した断面図の原図には、溝等の埋土に関する情報が記されていなかったが、調査時のメモによると、周溝の埋土は黒褐色粘質土が堆積していた。壁溝の幅は検出地点によって異なるが 30 ～ 50cm 程度で、深さは比較的残存状況が良かったところで約 15cm である。

壁溝の内側は、上記のように中央部分が低くなっていて、住居の東辺を除く三方が、約 15cm ほど段をなして高くなっている。東側は、後述する排水施設などがある関係か、その段差が認められなかった。この三方の高まりは、いわゆる屋内高床部とみられる。屋内高床部の幅は約 80cm である。

住居内のピットは、図 59 に示したように、壁溝の内側に 13 基があるが、そのなかにはピット 65 とピット 66 のように切り合っているものがあるので、時期差がある遺構が混在していることがわかる。したがって、この住居に伴う柱穴を明確にして指摘することは難しい。屋内高床部より内側のピットのうち、ピット 61・63・65・69 は方形プランの住居床面の対角線上を意識した配置になっているとみえるので、主柱穴の可能性が考えられるが、定かではない。

なお、このような住居範囲内のピットの検出状況は、以下に記述する各住居でも同様であったので、ピットに関する記述および平・断面図の提示は一括して「⑭ピット」の項（86 頁）で行う。

次に、住居のほぼ中央で検出した土坑 16 について記述する。土坑 16 は平面形が、長径 74cm、64cm のほぼ正円形に近い形状で、深さは 15cm の浅い皿状を呈している。土坑埋土からは、炭化物が検出された。また、図 59 に示したように、この土坑に接続する長さ約 1.8 m、幅 40cm、深さ 30cm ほどの、北西－南東方向の溝を検出した。

この溝は、住居東辺の壁溝に接する長軸 1.3 m、短軸 90cm、深さ 30cm の不整三角形を呈する凹みに接続したのち、住居の外側で、東西方向に屈曲して長さ約 50cm のトンネル状遺構となり、さらにその先は現状では開削溝となって調査区外まで延びている。溝の方向が住居外で東西に屈曲するのは、現地形から見て、この部分が東方向に下がっているからであるとみられる。すなわち、溝は斜面の低い方に延びている。

このようなトンネル状遺構を伴って、住居の中央部の土坑から溝が延びる遺構は、大阪府八尾南遺跡の竪穴建物（岡本ほか 2008）の例が知られている。ただし、八尾南遺跡で検出された同様の遺構のうち、その状態がより明確であった竪穴建物９のトンネル状遺構の部分には、棒状の材を差し込んだ上に多量の枝やヨシ類の茎束が敷き詰められていた。これは、上部からの沈下を防止する目的とみられ、「暗渠内の通水に対する工法の一端」（岡本ほか 2008、第 1 分冊 229 頁）とされたが、このような施設は今次調査地で検出された土坑 16 に繋がる溝では確認できなかった。

また、土坑 16 では、焼土が検出されていないのであるが、やや深さが浅いことや埋土に炭化物が含まれていたことから、その性格については炉であった可能性も考えられる。その場合には、こ

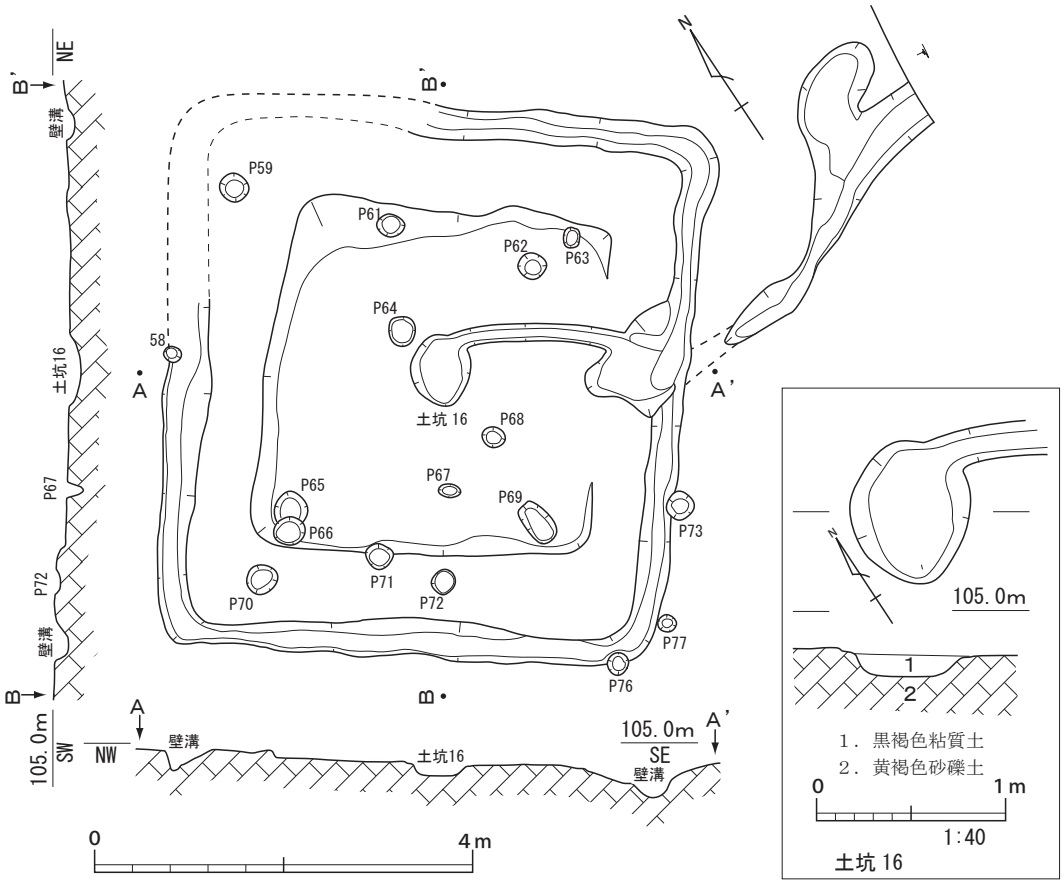


図59　２区　住居１　平面・断面図　（S.＝1/80）

のトンネル状の遺構およびそれに繋がる溝は煙道であったかもしれない。しかし、一方で、八尾南遺跡で検出された竪穴建物９の中央土坑は、３段に掘削されていてその中段に板材によって構成された箱状の構造物が載っていたことがわかっている。焼土が確認できない当該住居１の土坑 16 であるが、このような施設があったとすれば、出土した炭化物は必ずしも燃焼によって生じたのではなく、こうした有機質が遺存したものの可能性も考えられよう。

このようなことから、住居１の土坑16から延びるトンネル状遺構は、その性格が特定しにくいが、ここでは排水溝が暗渠になって住居外に延びていた、その一部を検出できたと考えたい。

遺物は、図 93 に示したように、（93 － 1 ～ 7）のような畿内第Ⅴ様式の甕の破片が出土した。このような出土遺物から、遺構の形成時期についても当該期であると考えられる。また、このほかにはミニチュア土器（93 － 8）や匙形土製品（93 － 9）などやや特異な遺物があった。

④住居２（図 57・図 58・図 60）

住居２は、調査区の南東部で検出した竪穴住居である。図 60 に見えるように、ピットと切り合い関係があり、北辺の壁周溝に接する位置のピット 139 は周溝に切られている。このように住居

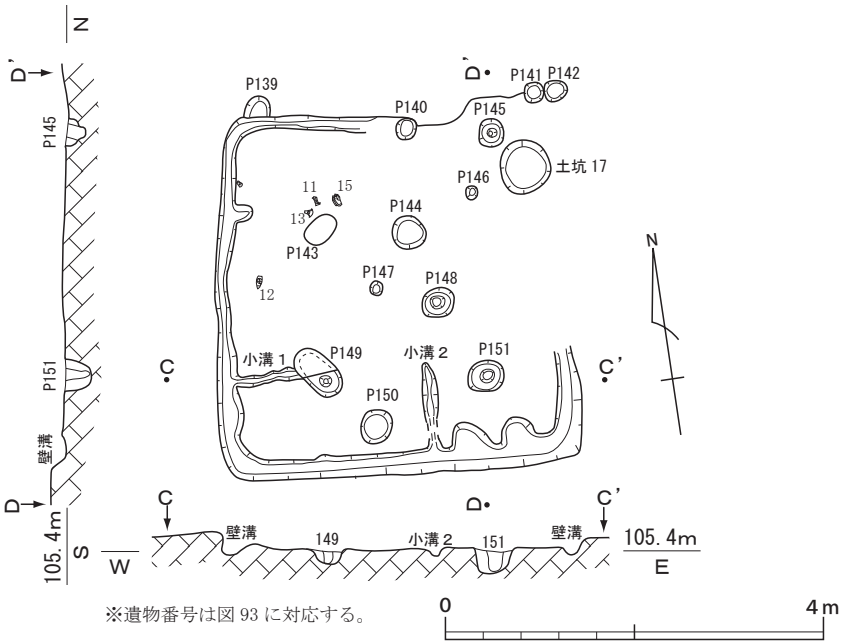


図60　２区　住居２　平面・断面図　（S.＝1/80）

２とその周辺のピットには形成時期に差があることが明確であるが、それらが同一面で検出されたため、住居内のピットであっても、それが住居に伴うものであることは確定できない。

住居は壁周溝によってその範囲が認識できる。壁周溝は、東辺および北辺の一部で削平のため検出できなかったが、残存した部分から住居の平面形は一辺約４mのほぼ正方形を呈することがわかる。壁周溝の検出規模はおおむね幅 35cm、深さ 17cm である。図 60 の C － C' 断面に辛うじて見えるように、壁周溝の内側と外側では上端の高さが異なっていて、内側が低くなっている。この状況から、住居が本来形成された遺構面の高さが削平によって下がっているとしても、内側の上端の高さは元の住居の床面の高さにほぼ近いと考えられる。したがって検出できた床面は当初の高さをおおむね保っているとみられる。また、この壁周溝の内側の低い部分に堆積した土は、竪穴住居の埋土として認識できるもので黒褐色粘質土が堆積していた。ピットの埋土は灰褐色砂礫土であった。

住居の北東部分は不分明であるが、住居の床面の範囲内でピットを８基検出した。このうち、ピット 148・149・151 では、図 79 のピット断面図に見えるように、埋土の土質の違いによって柱痕を認識できた。しかし、それらがこの住居に伴う主柱穴となるピットであったとしても、必ずしも住居の四隅に主柱穴として適当なピットを当てることができず、柱配置は不明確な残存状況である。また、ピット 143 は図 60 や図 79 でも下端の表現がない。調査時の原図には、このピットの埋土が 1 cm 未満の堆積であったとのメモが書き込まれていた。このため、ピットとしての深さをうまく検出できなかったというものである。これが実際にピットの痕跡であれば、上記のように当該住

居の床面の高さはほぼ元の高さを保っていたとみられるから、掘方を掘らずに柱材の下端を床面上に置くだけの簡易な設置法があったとも考えられるが、定かではない。

このほか、住居西辺と南辺からそれぞれ延びる小溝を２条検出した。小溝１は、住居西辺から延びてピット 149 に繋がっている。検出規模は長さ 62cm、幅 15cm、深さ６cm である。小溝２は、検出が困難な箇所もあったが、住居南辺からピット 148 に向かって延びるものとみられる。検出規模は、長さ 95cm、幅 18cm、深さ 12cm である。これらの溝は床面の一部に掘られた床面小溝、または区画溝と考えられる。このように明確に溝と判断できたのは２条であるが、このほかに住居西辺の北半で壁溝から東に向かって突出している箇所がある。これも本来は上記２条と同様の性格をもつ小溝であった可能性が考えられるが、残存状況が悪くうまく検出できていない。

また、図版 35 の住居２の全景写真に見えるように、住居北辺部付近に炭化物が集中する地点があった。その範囲は東西 0.9 m、南北 0.6 m程の分布になる。これは竈であった可能性が考えられるが、上部の構造などは、壁体などの痕跡なども確認できなかったため、詳細は不明である。

遺物は住居床面からは土師器片や須恵器片が出土した。そのなかには古墳時代中期前葉の陶質土器とみられる有蓋高杯蓋（93 － 15）があった。なお、図 60 に見えるように、住居２の北東角付近に土坑 17 が存在している。土坑 17 は、復原される壁周溝の位置からみて、住居２と直接には関係しないものと考えられるので、この遺構については、別途後述する。

住居２の形成時期は、出土遺物から、古墳時代中期前葉とみられよう。

⑤住居３（図 57・図 61）

住居３は、調査区北半の東端付近で検出した竪穴住居である。多くの部分で削平、攪乱を受けていたが、図 61 に示したように、幅約 15cm、深さ約 40cm の壁溝が部分的ではあるが検出できた。この残存した壁溝から復原すると、住居の平面プランは、一辺 3.5 mの正方形を呈するとみられる。

住居南東辺中央付近に、25cm × 48cm の範囲で炭化物が集中していた。これは竈であった可能性が考えられるが、上部の構造などは削平のため検出できず、詳細は不明になっている。そのほか、住居に伴う遺構は検出できなかった。

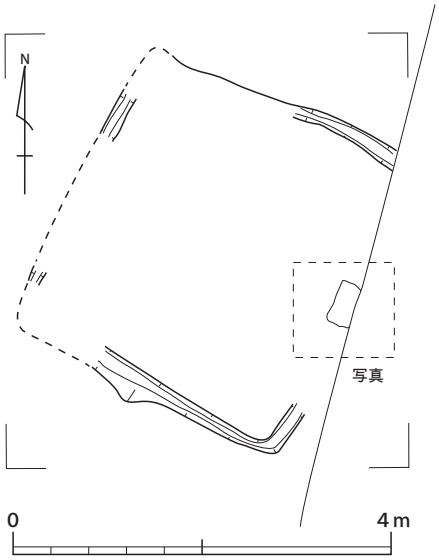
遺物は、埋土から遺物袋（18 × 25㎝）１袋分の土師器片が、炭化物集中範囲から高杯（93 － 19）が１点出土した。古墳時代中期中頃のものであろうか。

遺構の形成時期については、このような遺物から古墳時中期とみられる。

⑥住居４（図 57・図 58・図 62）

住居４は、図 58 に示したように、２区の南半中央部で住居跡が集中する範囲の南端部で検出した竪穴住居である。図 62 に見えるように、住居北東部が削平のため壁溝なども検出できていないが、残存した３辺の上端線から、住居の平面プランは正方形を呈することがわかる。その規模は一辺約 3.2 mである。また、南東隅で幅 22cm、深さ約 16cm の壁溝を検出した。埋土は、黒褐色粘質土が堆積していた。

住居の内側の範囲で検出したピットや土坑の位置は、図 62 に示した。ただし、これらは住居に伴うものであることは確定的ではない。ピット 132 は、東壁溝の中央付近でそれに接する位置に掘り込まれていた。長径 48cm、深さは 17cm を検出した。この位置や大きさからみれば、これが住居に伴うものあったとしても、柱穴ではなく貯蔵穴などの可能性も考えられる。ピット 130 とピット 131 は、径 30cm 前後の大きさであった。深さはピット 130 が 17cm、ピット 131 が



炭化物の集中部（竈か）の周辺写真（東から）

図 61　２区　住居３　平面図　（S.＝1/80）

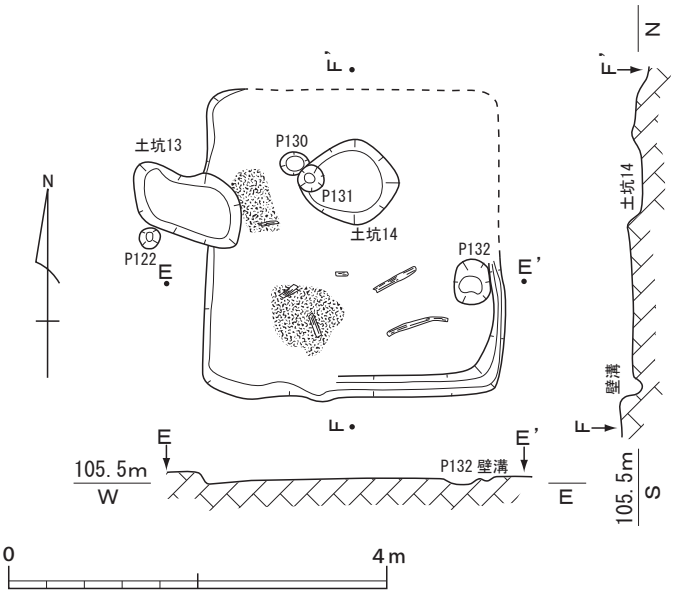


図62　２区　住居４　平面・断面図　（S.＝1/80）

28cm で、相接して検出された。特にピット 131 は、土坑 14 と切り合い関係があって、これを切っている。このことから、少なくともピットと土坑にはその形成に時期差が認められる。土坑 14 については別途後述する。これ以外に、主柱穴と特定できるようなピットは検出されなかった。

住居床面には炭化木材が多数認められた。また、図 62 にトーンで示した範囲で炭化物の分布が認められた。これらの炭化木材は元は建築材であったとみられることから、この住居は焼失住居の可能性が考えられる。ただし、検出した炭化木材の大きさは、大きいもので長さ 70cm、幅 6cm 程度の大きさがあったものの、いずれも残存状況があまり良好ではなく、その形状を辛うじて保っているという状態であった。

このほか、遺物は床面から出土したものはなかったために、住居の形成時期を特定することが難しい。ただし、床面で検出された土坑 14 は、後述するように、住居に先行する可能性がある。土坑 14 の埋土に混じって、古墳時代の土師器とみられる土器片が出土しているので、その場合にはこの住居 4 は古墳時代以降に形成されたと考えられる。

⑦住居 5（図 57・図 58・図 63）

住居 5 は、図 58 に示したように、調査区中央やや南寄りの住居跡が集中している範囲の中央付近で検出した。図 63 に見えるように、北半部が現水田耕作の造成に伴う削平を受けているため残存していなかったが、検出した部分から住居の平面プランは方形を呈することがわかる。住居 6 と切り合い関係があり、このことから住居 5 が新しいことがわかる。

住居 5 の規模は、不明な部分が多いが、検出した住居南辺の長さは 4.6 mであった。壁溝は住居の東・南・西の三方で、幅 30cm、深さ 15cm 程度のものを検出した。埋土は、黒褐色粘質土が堆積していた。

住居床面に当たる範囲で、土坑 3 基・ピット 3 基を検出した。図 63 に見えるように、土坑 9 は壁溝を切っているので、少なくとも土坑のすべてが住居に伴うものでないことは明らかである。また、土坑 7 はピット 92・93 と切り合い関係があるから、それらには形成時期差があることもわかる。いずれにしても住居に伴う土坑やピットをここでも特定することが難しい。ピットについては、主柱穴の位置を復原的に考えることも困難な検出状況となっている。

遺物は、住居内のピットから土師器片が数点出土した。

⑧住居 6（図 57・図 58・図 63）

住居 6 は、住居 5 と切り合い関係があり、それに切られている。検出し得た部分から、住居の平面プランは方形を呈するとみられ、その規模は一辺約 4 mと復原できる。ただし、現地で作成された原図（平面図）は、図 63 に見えるように、東辺においては壁溝が表現されているが、南から西辺は 1 本の線で示されていた。遺構の記録図面としては不適切な状態になっているが、この部分は、おそらく現地調査担当者が何らかの土質の違いを認識できたものの、段差がほぼない程に削平を受けていたものであると思われる。検出した壁溝は幅 22cm、深さ 11cm の規模であった。住居埋土

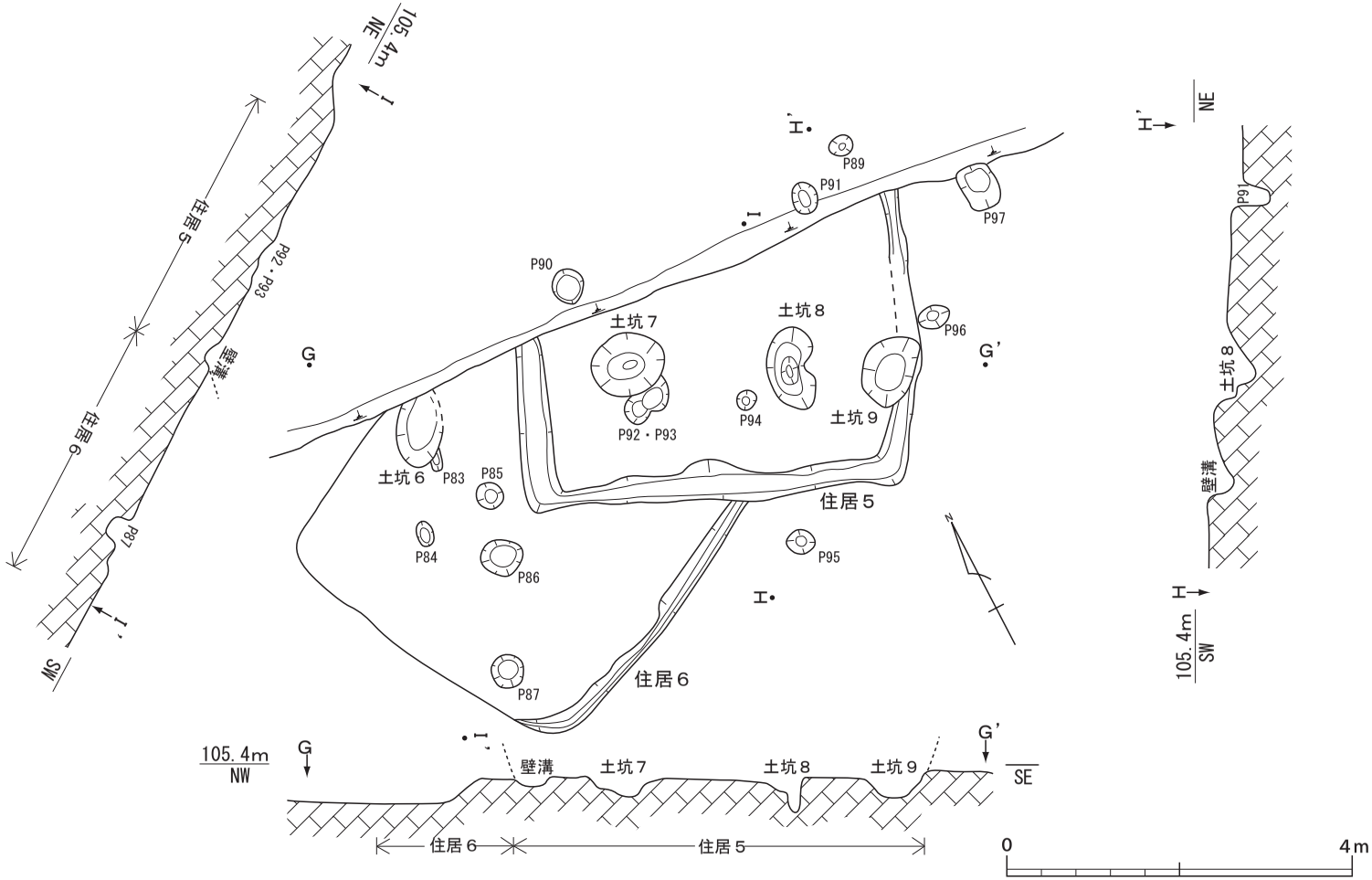


図63　２区　住居５・６　平面・断面図　（S.＝1/80）

として認識された土は、黒褐色粘質土であった。

住居床面に当たる範囲内で、ピット５基と土坑１基を検出した。図 63 に示したように、土坑６とピット 83 に切り合い関係があるので、ここでも土坑とピットに形成時期差があることがわかる。また、周辺地形の削平が著しいこともあって、主柱穴にあたるピットなどは定かではない。

遺物は、ピット埋土から土師器片が数点出土したほか、住居埋土から土師器片や石器片が数点出土した。

⑨住居７（図 57・図 58・図 64・図 65）

住居７は、図 58 に見えるように、調査区中央付近の住居跡が集中する範囲の南西端部で検出した竪穴住居である。住居８と切り合い関係があり、住居８の西辺を切っている。平面プランは正方形を呈し、その規模は一辺約 3.7 mである。埋土は、黒褐色粘質土が堆積していた。

住居に伴う遺構として、住居南辺西半で竈を検出した。竈は平面形が馬蹄形を呈して、住居内側すなわち北方向に焚口が開いていたとみられる。壁体は、図 65 の断面図に示したように、住居床面に白色砂礫を多く含んだ黒褐色粘土を 10 ～ 12cm 程度を盛り上げ、さらにその上に周囲を幅

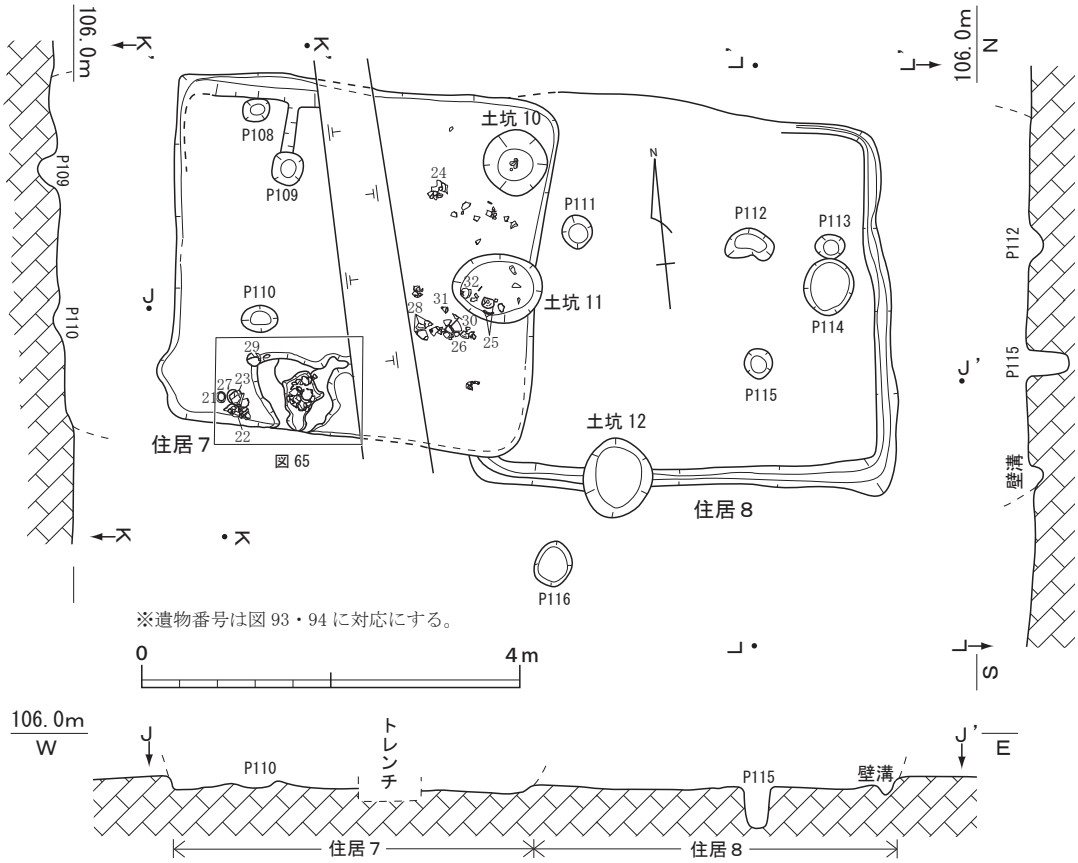


図 64　２区　住居７・８　平面・断面図　（S.＝1/80）

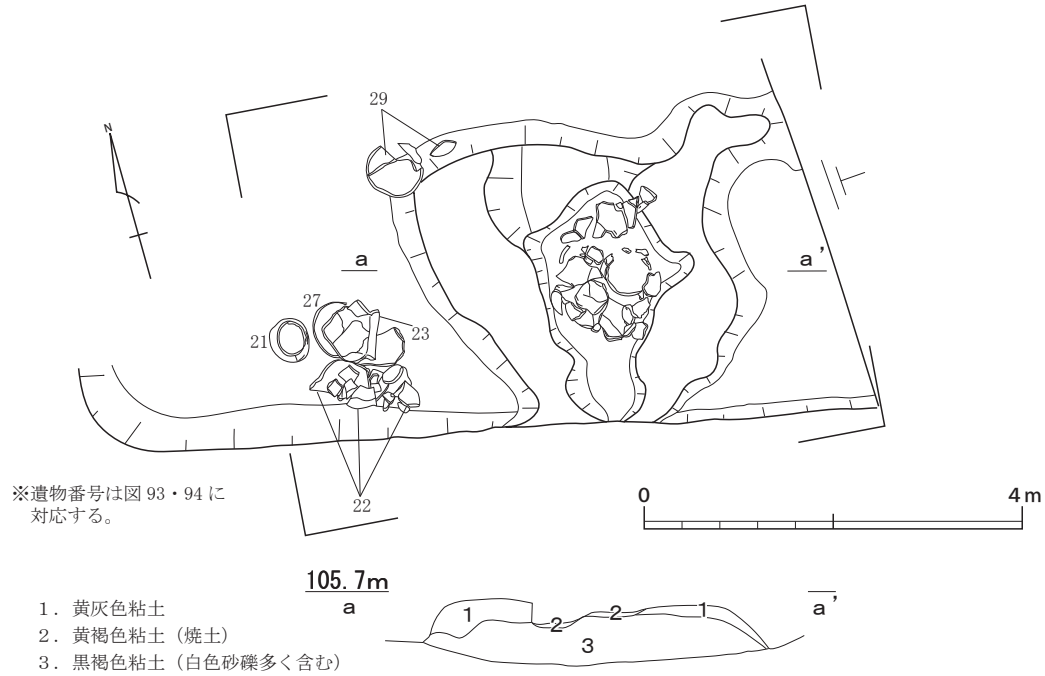


図 65　2 区　住居 7　竈　平面・断面図　（S．=1/20）

30cm 程度の帯状に黄灰色粘土を積み上げて内側を低くする構造になっている。その高さは現状では 4 ～ 6 cm 程になっているが本来はさらに高かったと思われる。

竈の規模は、不整形な形状であるため計測する地点で異なるが、外寸でおおむね 90cm 程度の範囲に築かれている。竈の内面に炭化物は見られなかったが、黄褐色の焼土が認められた。煙道は認められなかった。

竈の内側には、図 65 や図版 39・図版 40 に見えるように、相当な量の土器が出土した。しかし、それらの遺物については、整理棟に大量に搬入された遺物の中から、整理段階でそれを特定することができなかった。平面図や写真には輪状に割れた甕と思しき土器が、口縁もしくは底部を鉛直方向に向けた状態で置かれていることが窺われる。これは、支脚に転用された土器である可能性が考えられるもので、その残存寸法も一定の大きさがあったものと思われる。このような土器は仮に取り上げラベルを紛失したとしても現物を特定できる場合が多いが、今回は探索を繰り返したが見つけることができなかった。

また、住居の床面の範囲で、このほかの遺構としてピットや土坑を検出した。ほかの住居と同様に、これらの遺構が住居に確実に伴うものであるとの確信が持てなかったのであるが、上のような遺物取上およびその後の管理に関する問題は、住居東辺付近中央で検出した土坑 11 でも起こっていた。

土坑 11 は、図 64 に示したように、住居東辺を切っているので住居とは形成時期に差があり、その検出状況からは土坑 11 が新しいことになる。しかし、図 64 に出土状況を示している土坑 11

の埋土の上面から出土した土器は、その南西側で隣接して出土した住居床面上の遺物と年代差がないものである。この状況からは土坑 11 の現状での埋土の上面は住居床面と一致していると考えられ、そうであれば、遺構の検出状況に齟齬があって、土坑 11 が先行することになる。一方で、図版 39 の下段に、土坑 11 を半裁して埋土の一部が除去されている段階の写真を掲げている。これを見ると、土坑 11 の埋土中に土師器片が写っている。これは土坑 11 の形成年代を示す資料である。ところが、この土器についても、整理段階でそれを特定して抽出することができなかった。その原因は、発掘調査終了後、整理担当者に引き継がれる際などの混乱もあったのであろうが、ここに限っては現地調査で遺物出土状態の平面図が作成されおらず、その取上番号が必ずしも整理された形で付されていなかったことが大きいであろう。このことは、現地調査時における不手際と言わざるを得ない。

このようなことで、遺構の先後関係と、住居床面での遺物の出土状況を整合的に理解することは難しい。整理段階では、遺構間の切り合っている面積が少ないことから現地調査時に検出が困難であったのだろうと考え、床面での遺物出土状況を重視して土坑 11 が先行したものと考えた。したがって、土坑 11 の埋土上面で出土した（94 － 25・32）はこのような認識から、住居床面の遺物として扱っている。

出土遺物は、上記のほか、図 64 に示したように、竈の東側で集中している地点があった。それらを含め、住居 7 出土遺物のうち、図化可能であったものを図 93・図 94 に掲げた。これらはおおむね古墳時代中期前半頃のもので、遺構の形成時期も当該期に求められよう。

⑩住居８（図 57・図 58・図 64）

住居 8 は、図 58 に示したように、調査区中央付近の住居が集中する範囲の南端で検出した竪穴住居である。住居 7 と切り合い関係があり、住居 7 に切られている。このため、図 64 に示したように、住居の西辺が残存していなかった。残存部分からみると、住居の平面プランは東西 4.7 m、南北 3.8 m程の方形を呈することがわかる。埋土は黒色粘質土が堆積していた。なお、図 64 を見ると、住居の北辺について 1 本の線によって表現されている部分がある。残された原図をトレースしたものであるが、遺構平面図としては整合的ではない。その東側で検出された壁溝が西に行くほど削平を受けていて検出されなかったのであるが、この線は、上記の住居埋土としての黒色粘質土の分布する範囲を記録したものと思われる。壁溝の規模は、地点によって異なっているが、おおむね幅 20cm 程度、深さ 18cm 程度であった。

床面に当たる範囲でピット 5 基を検出した。これらについても、ほかの住居跡と同様に、確実に住居にともなうものを抽出することができない。ピットの配置からも主柱穴等の特定も困難である。住居南辺では、壁溝を切る土坑 12 を検出した。この切り合い関係から、土坑 12 と住居 8 には形成時期差があって、土坑 12 が新しいことがわかる。

遺物は、住居床面から土師器甕（95 － 33）が出土した。細分時期の特定が難しい遺物であるが、

遺構の切り合い関係がある住居７出土遺物と比較しても、大きく時期差があるものではないだろう。住居７と住居８は古墳時代中期前半のうちに、相次いで形成されたものと理解される。

⑪住居９（図 57・図 58・図 66・図 67）

住居９は、図 58 に示したように、調査区中央付近の住居跡が集中する範囲の西端付近で検出した竪穴住居である。図 58 や図 66 に見えるように、住居 10 と切合い関係があり、住居 10 の多くを切っている。北半部は、現耕作地の造成によって削平を受けていてまったく残存していない。しかし、検出し得た箇所から平面プランは一辺約 3.8 mの方形を呈するものであったことがわかる。埋土は、黒褐色粘質土の１層のみが認められた。住居の床面は遺構検出面から 70 ～ 80cm 下がったところで検出したので、２区の住居の中では比較的住居の埋土が残存していたものである。

住居の床面で、土坑５を検出した。土坑５は住居南東隅部にあって、住居の壁面下端に接する位置にあった。平面形は、径 75cm ほどの円形とみられるが、上端のラインがやや直線的なところがあり、方形のようにも見える。深さ 22cm である。

遺物の出土状況は、図 67 に示した。これらの遺物は、現場での取り上げカードではそのほとんどが「住居９・10」と記されていた。すなわち、現場では住居９と 10 の埋土が類似したために、その弁別が難しくそのどちらに伴うものか判断できなかったということである。しかし、この地点から出土した遺物のうち図化可能であったものを掲げた図 95 を見ると、（95 － 34・35）はこのほかの土器に比べると技法的に古い要素を残しており、遺物に時期差があるようにも思われる。出土遺物のうち、その出土位置が明確に記録できたものは、図 67 に示したように、（95 － 34・36・39・40）である。このうち、（95 － 36）と（95 － 39）は接した位置で出土し、他の２個体はそれぞれやや離れた位置で出土した。また、（95 － 40）は床面よりやや上位の埋土中から出土したが、その他は床面上での出土となっていた。このような出土状況からは、少なくとも（95 － 40）は一括遺物とは言えず住居が埋没する過程で入り込んだ可能性が考えられる。また、技法的に古い要素を示す（95 － 34）は、この住居９がこれよりも古い住居 10 と切り合い関係があることから、そうした古い遺構に伴うものが混入している可能性も全く比定できるものではない。

その場合でも、遺構の形成時期はこれらの出土遺物から布留０～１式期といえよう。

⑫住居 10（図 57・図 58・図 66）

住居 10 は、図 58 に示したように、調査区中央付近の住居跡が集中する範囲の西端付近で検出した竪穴住居である。住居９と切り合い関係があり、これに切られている。住居の北半は住居９と同様に後世の削平を受けて欠損していた。検出し得た部分から住居の平面プランは一辺約 5.2 m の方形を呈するとみられる。

遺構の形成時期は、住居９との関係から古墳時代前期以前とみられる。

⑬掘立柱建物（図 57・図 68）

掘立柱建物は、図 57 に示したように、調査区北西部で検出した。２区はその中央を南北方向の

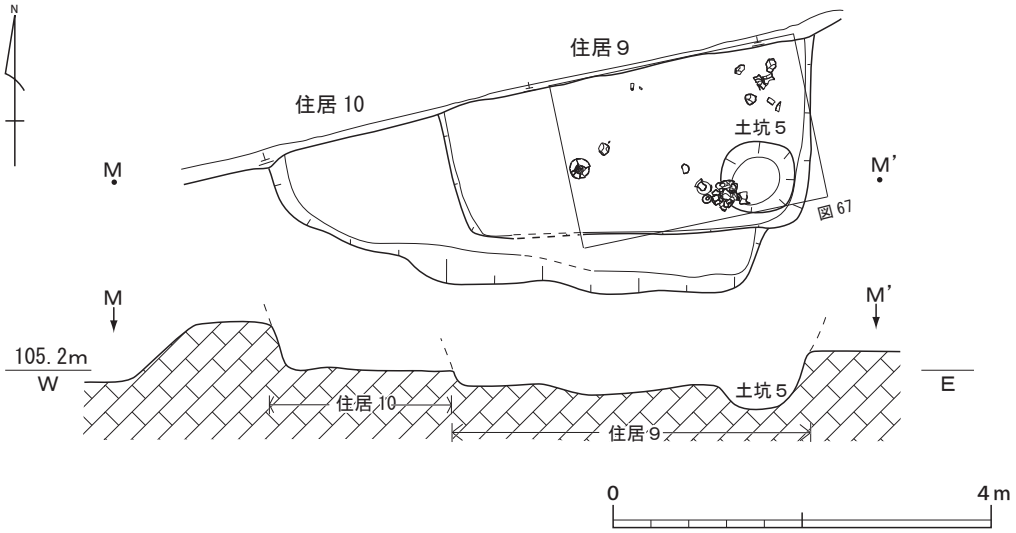


図 66　２区　住居９・10　平面・断面図　（S.＝1/80）

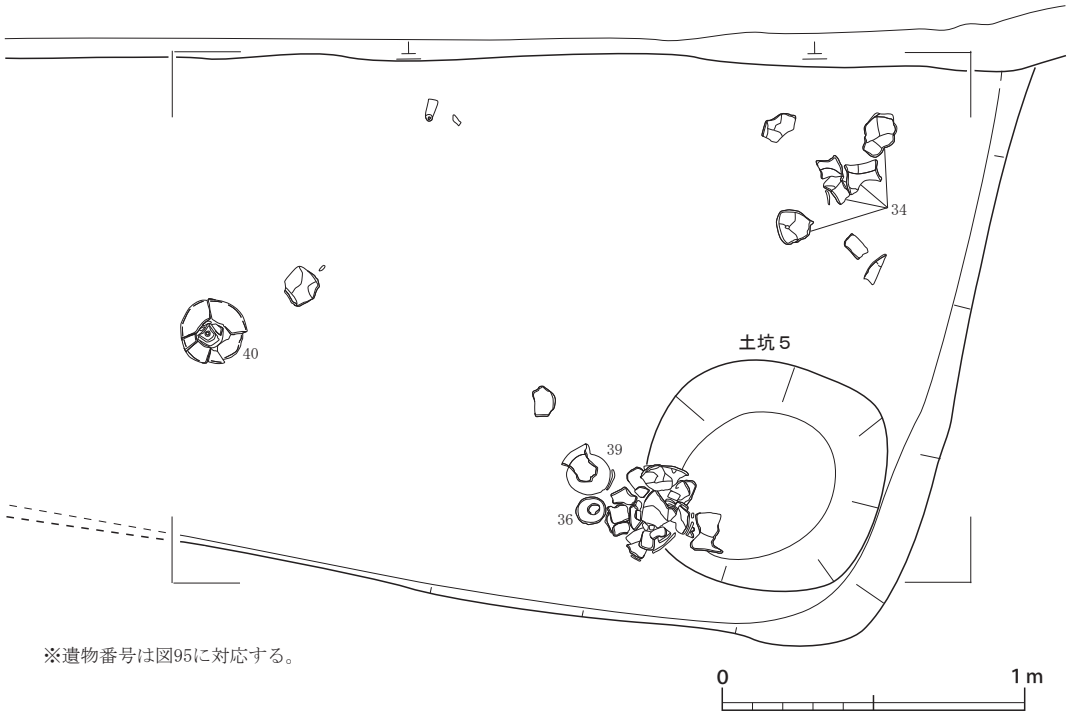


図 67　２区　住居９　土器出土状況　（S.＝1/25）

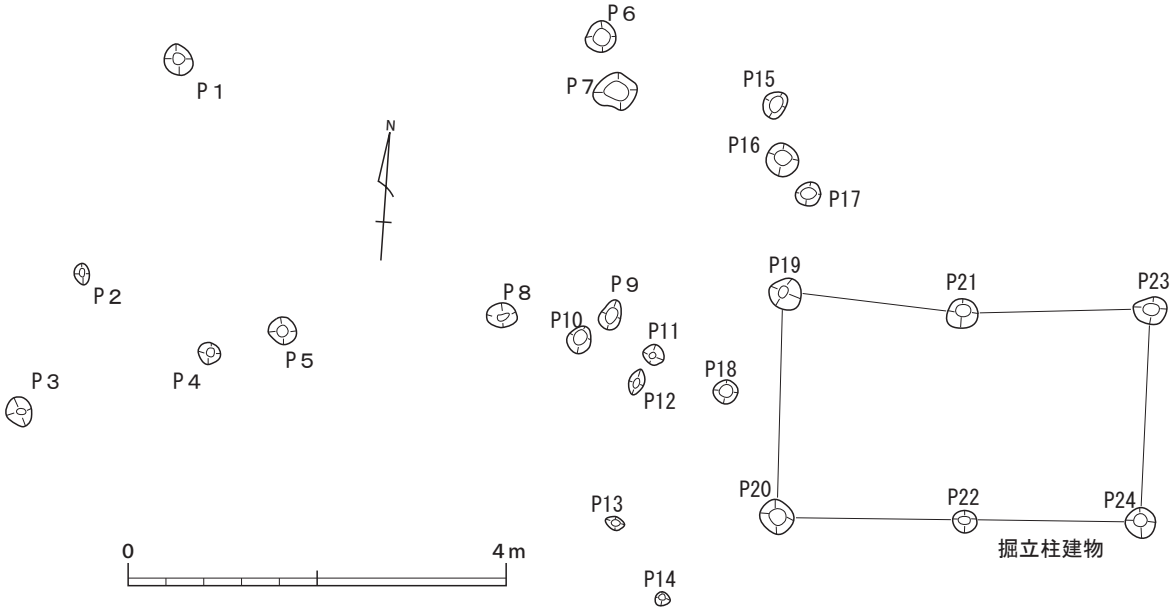


図 68　２区　北西部ピット群　平面図　（S.＝1/80）

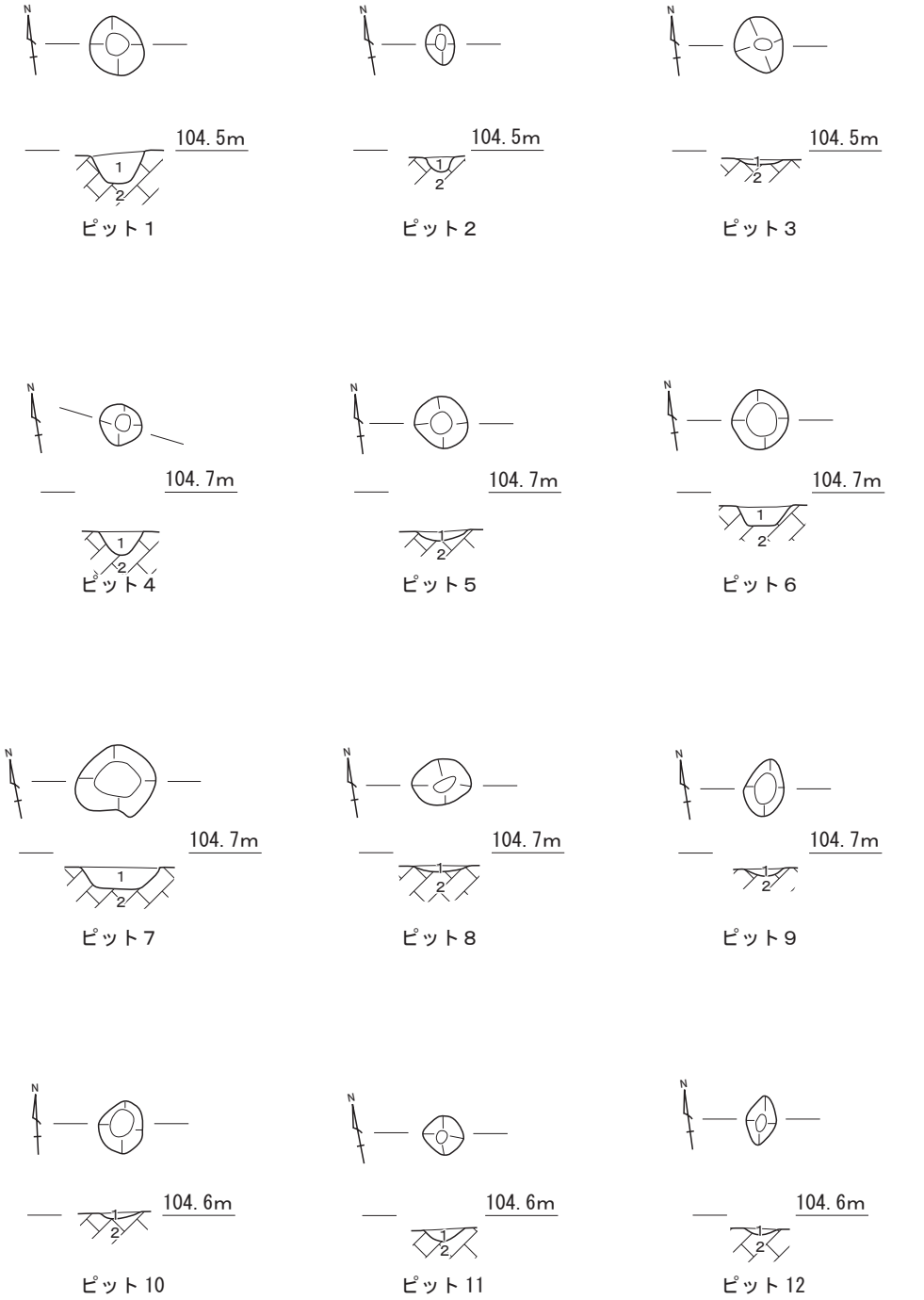
谷地形が縦断しており、その北西側と南東側に遺構が見られた。そのいずれの地点でも多くのピットが検出されているが、掘立柱建物を復原的に見い出せたのはこの１棟のみであった。

掘立柱建物は、図 68 に示したように、南北１間×東西２間の建物である。同図に見えるように、必ずも整然とした柱配置ではなく、北西隅に当たるピット 19 がやや北西方向に突出しているために、東辺の芯々間距離が 2.3 mであるに対して、西辺のそれは 2.4 mになっている。北辺・南辺は約 3.9 mであった。柱穴の規模は長径約 14cm ～ 35cm、短径約 22cm ～ 32㎝、深さは約５cm ～ 30cm である。その埋土はいずれも黒褐色粘質土である。

遺物は認められなかったため、遺構の形成時期がわからない。２区では、同一遺構面で弥生時代と古墳時代の遺構が検出されたが、それらの遺構埋土はいずれも黒褐色粘質土となっていて、埋土の違いからも時期を絞り込んでいくこともできない。このような状況から、当該建物の形成時期は、弥生時代から古墳時代という広い幅の中で考えざるを得ない。

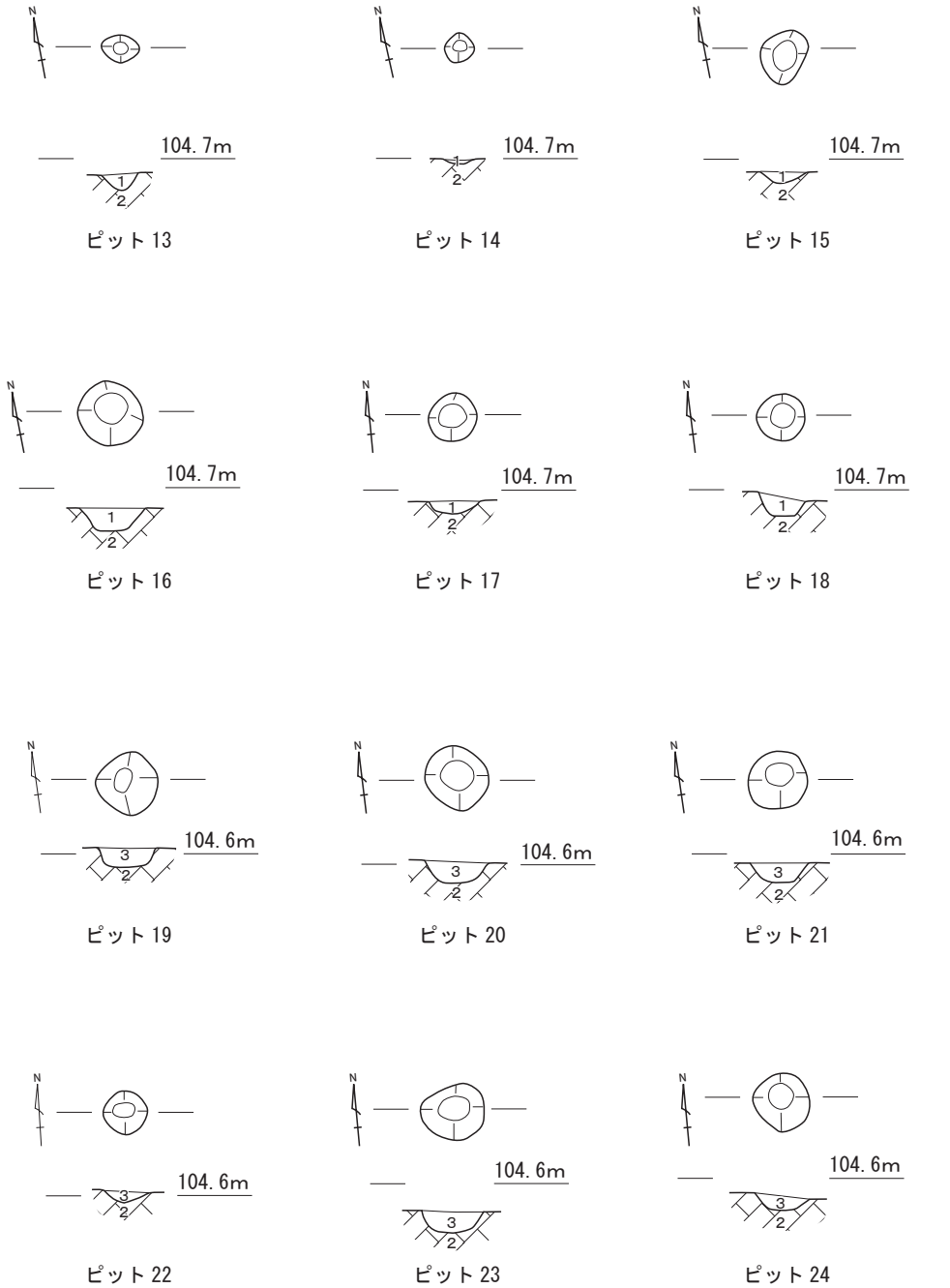
⑭ピット（図 57・図 58・図 69 ～ 79・表１）

ピットは、南北方向の谷地形を隔てた調査区東南部と北西部で 151 基を検出した。これらピットは、掘立柱建物を構成する柱穴や、竪穴住居に伴う柱穴が含まれていると思われる。しかし、掘立柱建物を復原的に見いだせたものは、上記の建物が唯一であった。また、住居に関しては、それぞれの住居に伴う柱穴を特定することは、前述のように、遺構面自体の残存状況やピット埋土の既述のような状態から困難であった。そのようなことから、ここでは図 69 ～ 79 に調査区において検出されたピットを網羅的に 1/40 の図面を示したものである。



１．暗褐色粘質土
２．黄褐色粘質土

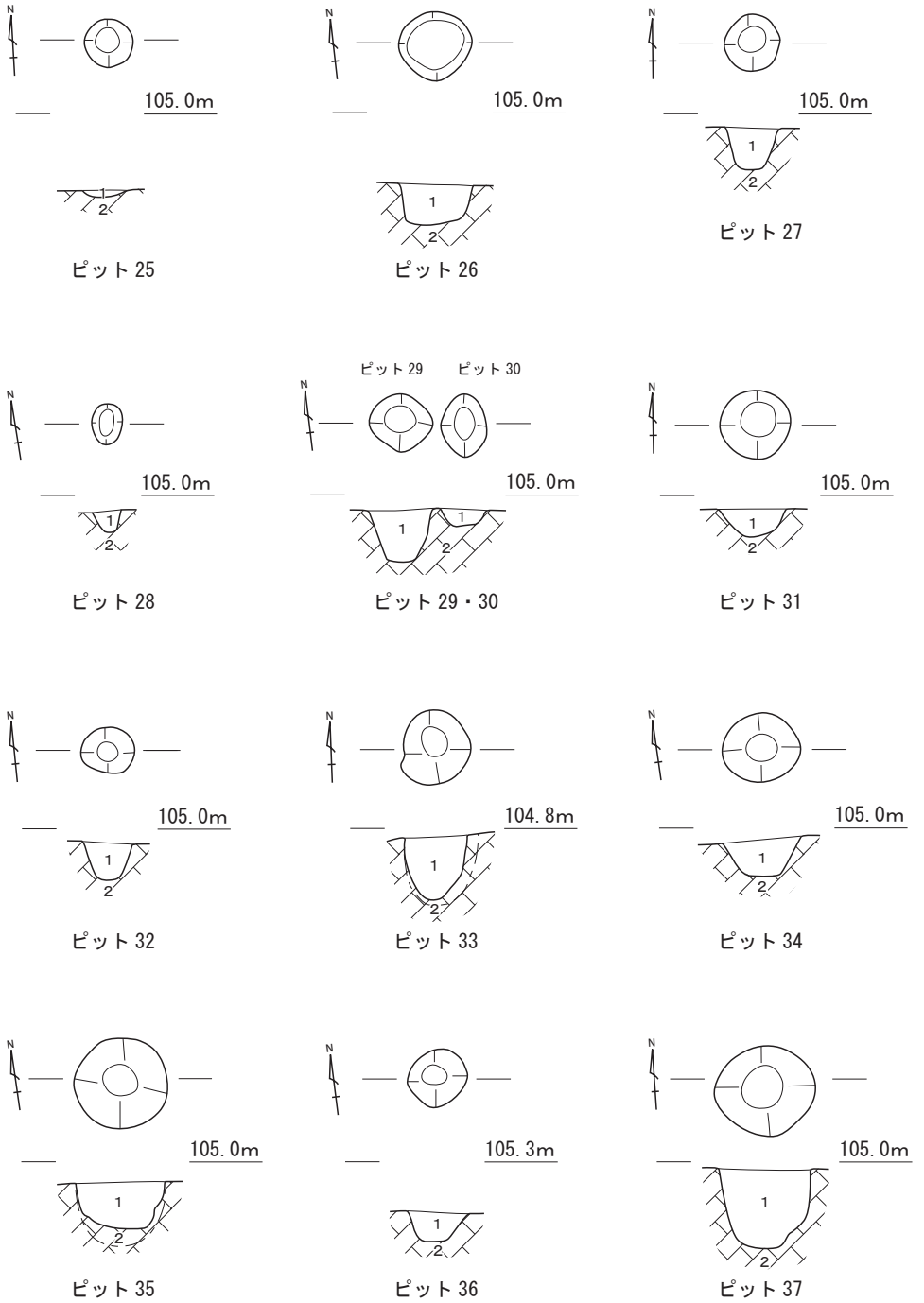
図 69　２区　ピット（１）　平面・断面図　（S．=1/40）



1．黒褐色粘質土
2．黄褐色粘質土
3．暗褐色粘質土

0　2m

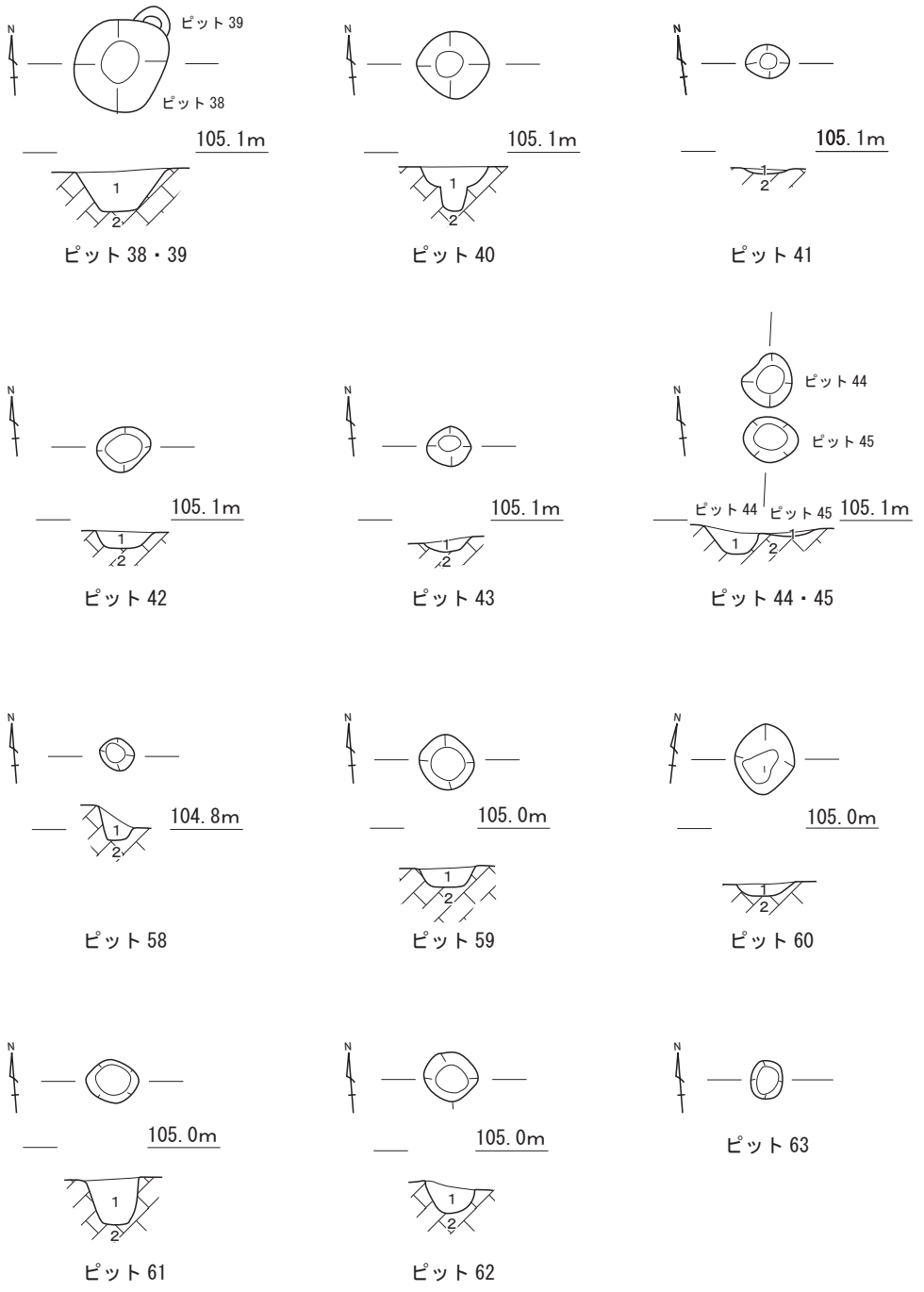
図 70　２区　ピット（２）　平面・断面図　（S．=1/40）



1．黒褐色粘質土
2．黄褐色粘質土

0　2m

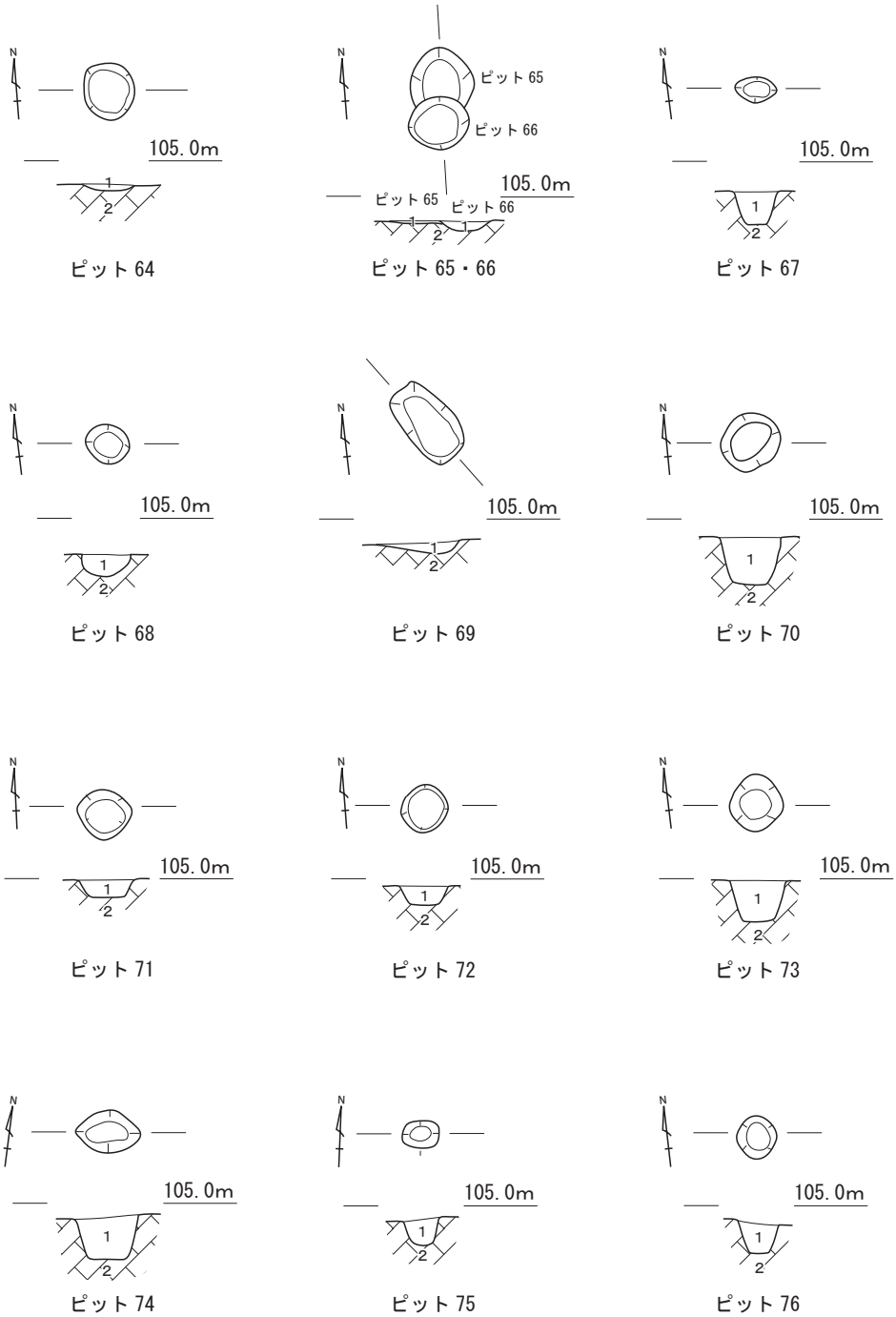
図 71　２区　ピット（３）　平面・断面図　（S.＝1/40）



1．黒褐色粘質土
2．黄褐色粘質土

0　2m

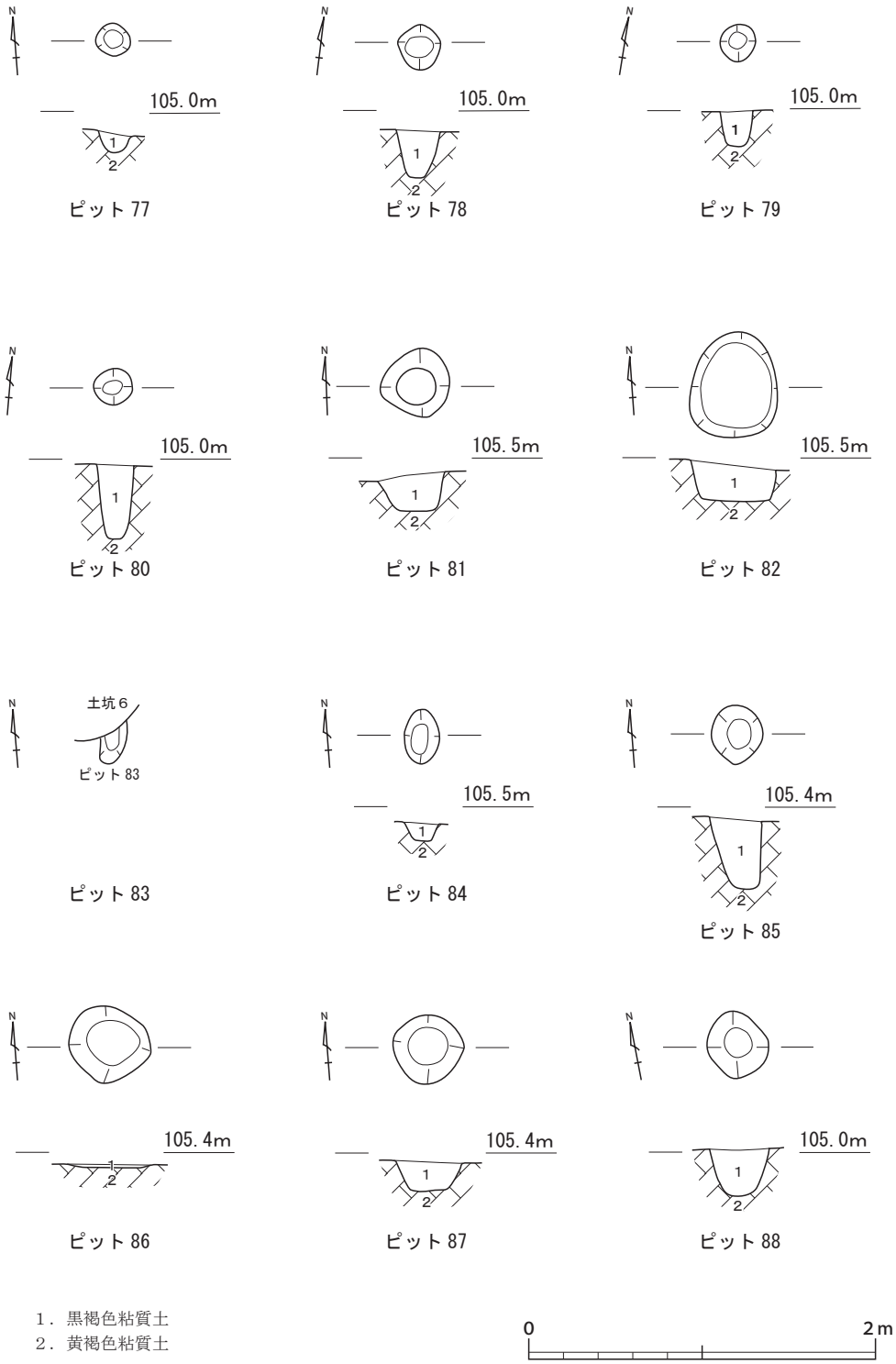
図 72　２区　ピット（４）　平面・断面図　（S.＝1/40）



1．黒褐色粘質土
2．黄褐色粘質土

0　2m

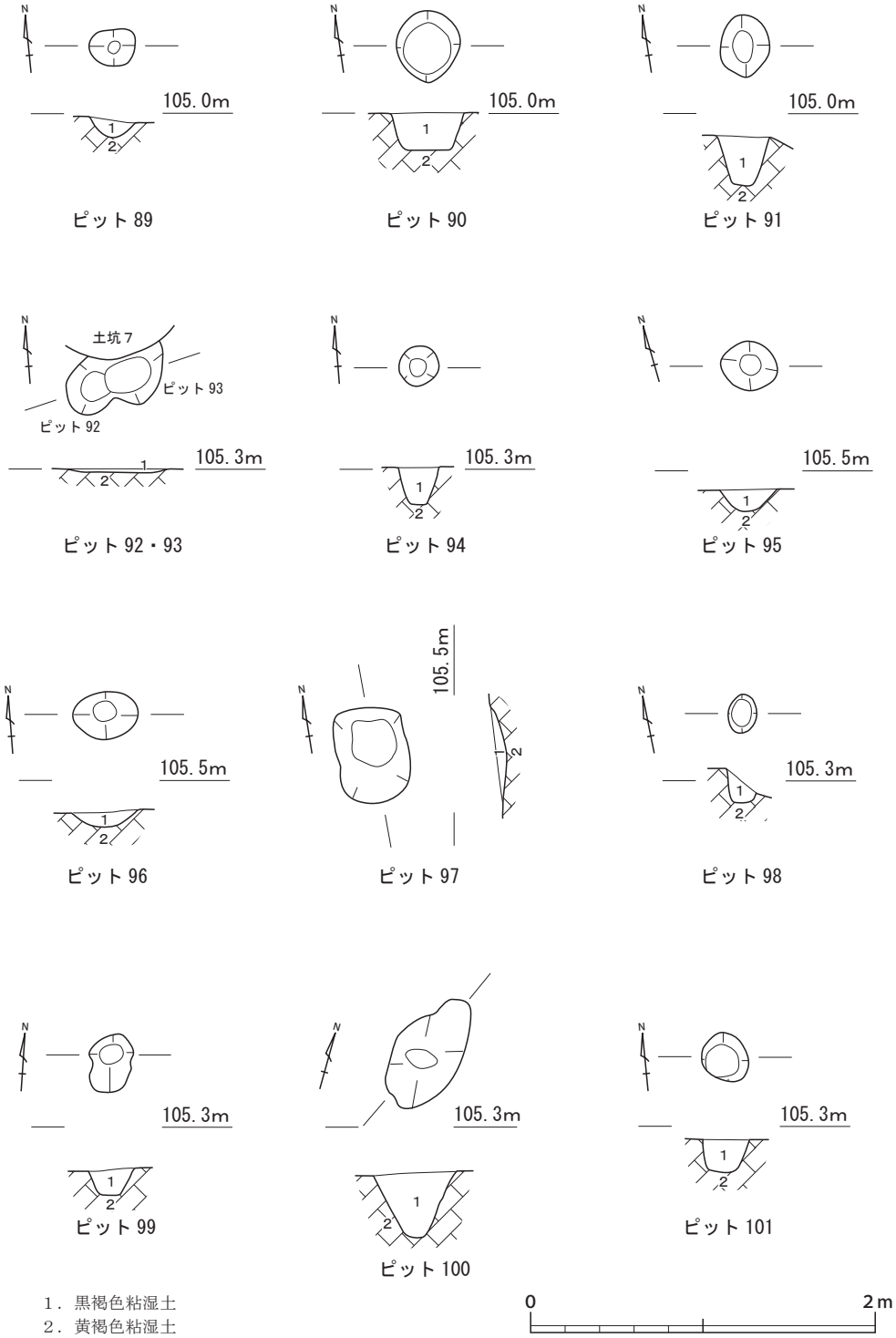
図 73　２区　ピット（５）　平面・断面図　（S．=1/40）



１．黒褐色粘質土
２．黄褐色粘質土

0　2m

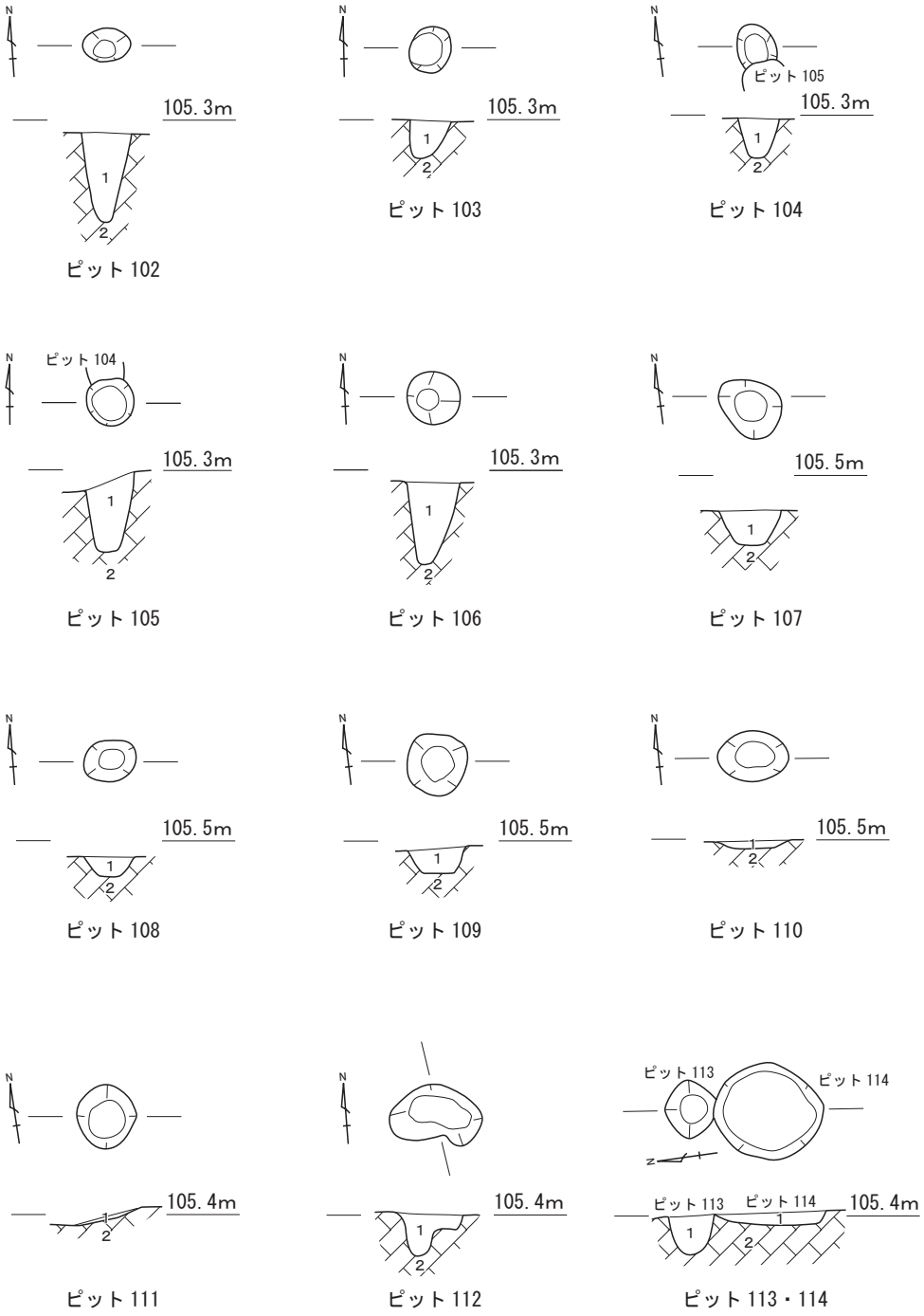
図 74　２区　ピット（６）　平面・断面図　（S.＝1/40）



１．黒褐色粘湿土
２．黄褐色粘湿土

0　2m

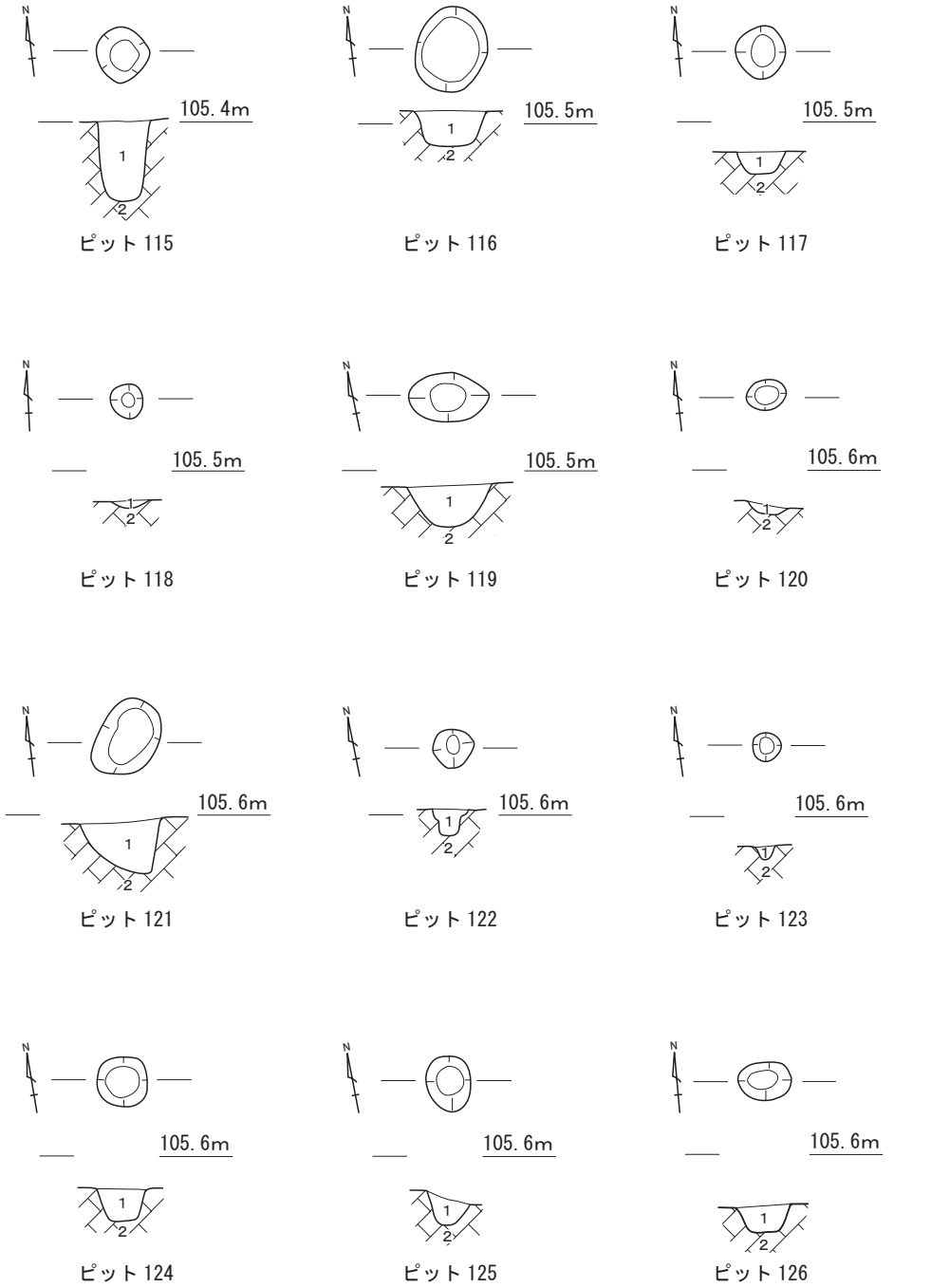
図 75　２区　ピット（７）　平面・断面図　（Ｓ．＝1/40）



1．黒褐色粘湿土
2．黄褐色粘湿土

0　2m

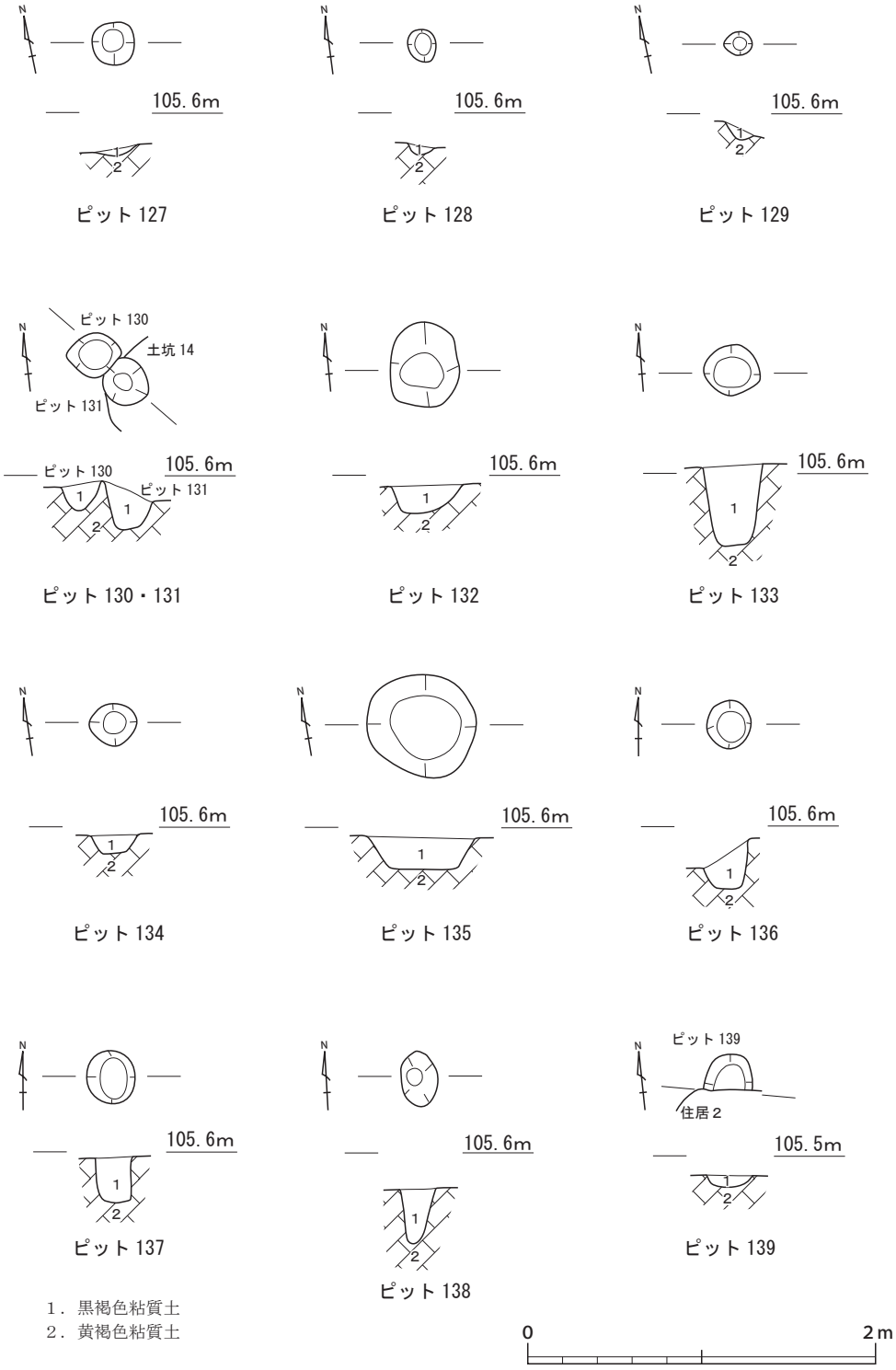
図 76　２区　ピット（８）　平面・断面図　（S．=1/40）



1．黒褐色粘湿土
2．黄褐色粘湿土

0　2m

図 77　２区　ピット（９）　平面・断面図　（S．=1/40）



１．黒褐色粘質土
２．黄褐色粘質土

図 78　２区　ピット（10）　平面・断面図　（Ｓ．＝1/40）

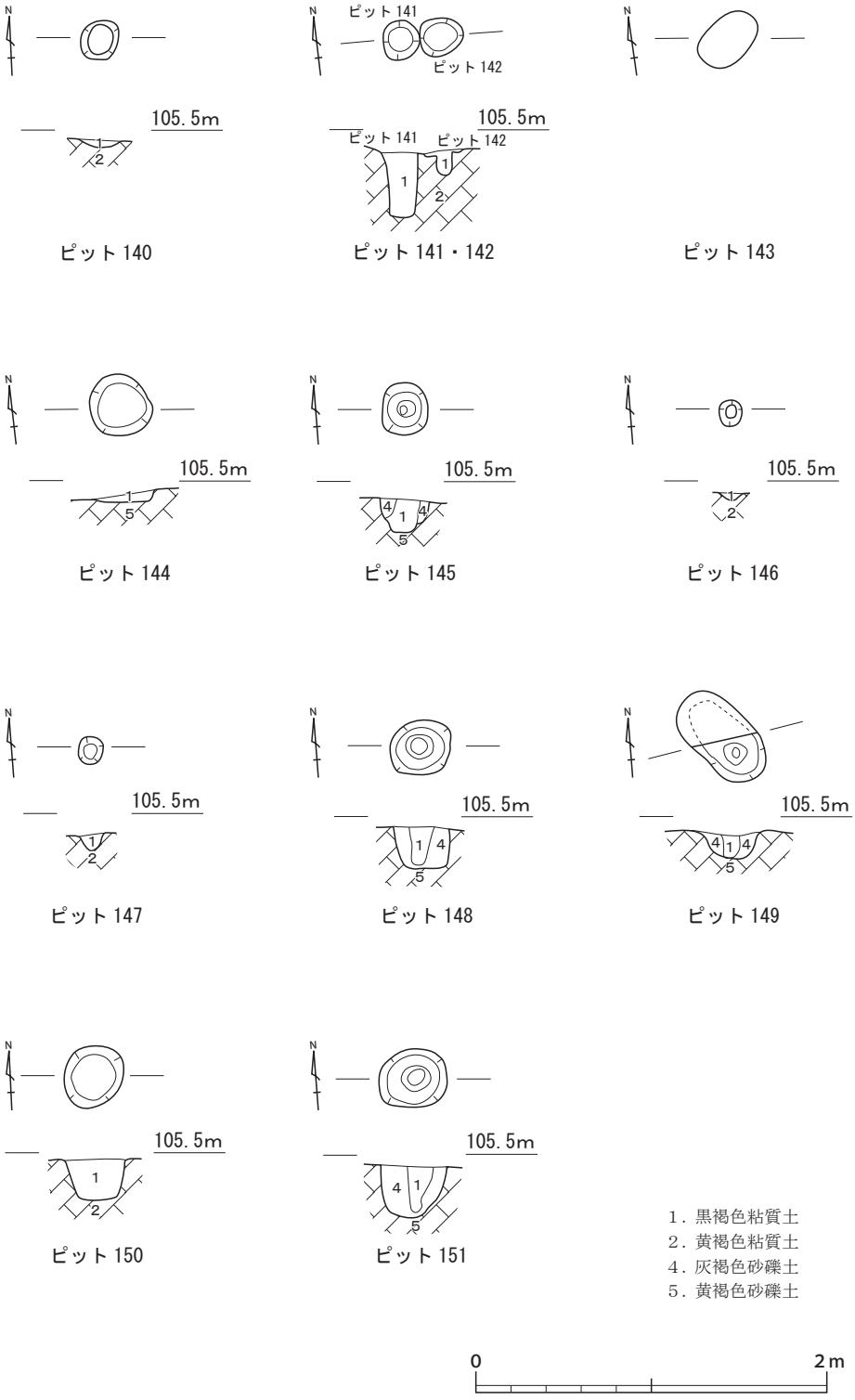


図 79　２区　ピット（11）　平面・断面図　（S．=1/40）

表1　2区　ピット1～151　計測表

ピット名称	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	ピット名称	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	ピット名称	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	34.0	29.0	18.0	51	36.0	7.0	-	102	27.0	18.0	50.0
2	23.0	15.0	8.0	52	30.0	24.0	-	103	26.0	22.0	20.0
3	32.0	27.0	3.0	53	38.0	30.0	-	104	28.0	21.0	23.0
4	24.0	22.0	13.0	54	46.0	34.0	-	105	30.0	28.0	44.0
5	30.0	26.0	5.0	55	36.0	24.0	-	106	30.0	29.0	46.0
6	33.0	29.0	11.0	56	20.0	18.0	-	107	38.0	28.0	20.0
7	45.0	36.0	11.0	57	28.0	13.0	18.5	108	29.0	24.0	11.0
8	34.0	26.0	3.0	58	20.0	16.0	19.0	109	35.0	33.0	15.0
9	32.0	22.0	4.0	59	31.0	27.0	12.0	110	41.0	29.0	5.0
10	30.0	24.0	3.0	60	38.0	32.0	8.0	111	36.0	31.0	2.0
11	23.0	20.0	7.0	61	30.0	23.0	26.0	112	52.0	27.0	23.0
12	28.0	16.0	3.0	62	31.0	27.0	15.0	113	33.0	22.0	22.0
13	20.0	15.0	10.0	63	22.0	18.0	-	114	60.0	54.0	8.0
14	16.0	15.0	2.0	64	32.0	28.0	22.5	115	30.0	14.0	46.0
15	30.0	24.0	5.0	65	(36.0)	34.0	2.0	116	48.0	38.0	20.0
16	37.0	34.0	12.0	66	34.0	30.0	5.0	117	30.0	26.0	13.0
17	27.0	25.0	7.0	67	23.0	15.0	18.0	118	20.0	18.0	4.0
18	27.0	26.0	13.0	68	25.0	23.0	12.0	119	46.0	28.0	24.0
19	35.0	32.0	11.0	69	48.0	27.0	7.0	120	22.0	16.0	8.0
20	37.0	32.0	12.0	70	34.0	31.0	26.0	121	46.0	33.0	31.0
21	34.0	32.0	11.0	71	30.0	26.0	10.0	122	22.0	21.0	15.0
22	24.0	22.0	7.0	72	27.0	26.0	11.0	123	16.0	15.0	8.0
23	35.0	30.0	12.0	73	32.0	28.0	23.0	124	30.0	28.0	17.0
24	32.0	30.0	10.0	74	35.0	24.0	24.0	125	32.0	24.0	19.0
25	28.0	26.0	4.0	75	21.0	14.0	16.0	126	30.0	21.0	16.0
26	40.0	38.0	23.0	76	24.0	22.0	18.0	127	26.0	24.0	7.0
27	32.0	30.0	24.0	77	21.0	18.0	14.0	128	20.0	16.0	7.0
28	23.0	16.0	13.0	78	26.0	24.0	26.0	129	17.0	14.0	11.0
29	36.0	31.0	29.0	79	22.0	20.0	21.0	130	32.0	28.0	17.0
30	36.0	25.0	10.0	80	22.0	20.0	43.0	131	28.0	26.0	28.0
31	40.0	38.0	15.0	81	41.0	38.0	23.0	132	48.0	39.0	17.0
32	30.0	25.0	19.0	82	60.0	50.0	23.0	133	32.0	28.0	46.0
33	43.0	37.0	34.0	83	(25.0)	15.0	-	134	26.0	24.0	10.0
34	43.0	38.0	21.0	84	31.0	20.0	11.0	135	62.0	56.0	19.0
35	52.0	50.0	26.0	85	33.0	28.0	40.0	136	28.0	24.0	28.0
36	32.0	29.0	17.0	86	47.0	41.0	2.0	137	21.0	16.0	26.0
37	56.0	50.0	44.0	87	40.0	38.0	18.0	138	32.0	20.0	32.0
38	58.0	48.0	24.0	88	39.0	32.0	26.0	139	41.0	28.0	7.0
39	(20.0)	-	-	89	27.0	21.0	13.0	140	23.0	22.0	4.0
40	40.0	37.0	25.0	90	42.0	34.0	21.0	141	21.0	20.0	37.0
41	25.0	19.0	2.0	91	37.0	27.0	28.0	142	23.0	22.0	14.0
42	32.0	24.0	10.0	92・93	62.0	(22.0)	2.0	143	36.0	24.0	-
43	25.0	22.0	8.0	94	25.0	22.0	24.0	144	36.0	32.0	7.0
44	30.0	24.0	16.0	95	32.0	28.0	12.0	145	29.0	27.0	19.0
45	31.0	25.0	4.0	96	38.0	27.0	10.0	146	15.0	12.0	4.0
46	38.0	32.0	-	97	56.0	41.0	9.0	147	16.0	14.0	10.0
47	72.0	30.0	-	98	23.0	17.0	19.0	148	34.0	32.0	23.0
48	27.0	26.0	-	99	35.0	23.0	16.0	149	60.0	32.0	16.0
49	52.0	26.0	-	100	72.0	39.0	38.0	150	38.0	32.0	23.0
50	30.0	18.0	-	101	30.0	24.0	19.0	151	39.0	33.0	29.0

ただし、図 58 の中央部北端付近に見えるピット 46 ～ 57 については、同図においても遺構の下端が表現できていない。これらの遺構は、トータルステーションでその位置や大きさを一定程度記録したものであるが、本来その後に進めるべき遺構の詳細図（現地で 1/20 のスケールで作成する原図）が作成されていなかった。これに伴う断面図も残されていなかった。また、図 72 ピット 63 については、原図の図面番号に混乱があって、対応する断面図を特定することができなかった。図 69 ～ 79 に、それらの遺構の詳細図を掲載していないのは、以上の事情による。

さて図 69 ～ 79 を見ると、検出されたピットは、径 30cm 前後を中心に径 20cm ～ 35cm のものが多い。深さは 2 cm ～ 52cm まであるが、 5 cm ～ 30cm のものが多い。埋土はすべてのピットに共通していて、黒褐色粘質土の 1 層のみが認められた。これらのピットの規模は表 1 に纏めているので参照されたい。

多くのピットでは出土遺物がなかったのであるが、なかには古墳時代とみられる土器が出土したものがあった。しかし、当該調査区では、弥生時代から古墳時代の遺構が同一面で検出されており、また、ピットの埋土の違いなども認定できる状態ではなかった。したがって、これらのピットの形成時期は、弥生時代から古墳時代という広い幅の中で考えざるを得ない。

⑮土坑 1 （図 57・図 58・図 80）

土坑 1 は、図 57・図 58 に見えるように、南北方向の谷地形の南岸で、遺構が集中する範囲の

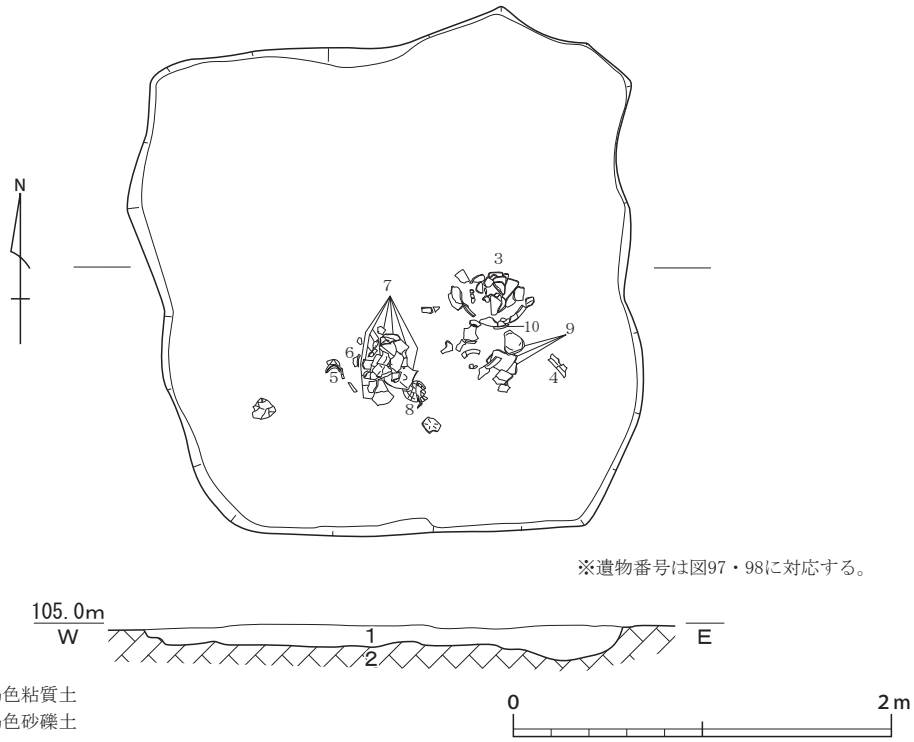


図 80　２区　土坑１　平面・断面図　（S．=1/40）

北端に近い位置で検出した。平面形は、図 80 に示したように、正方形を呈し、その規模は一辺約 2.8 m、深さ約 10 ～ 20cm である。その形状から竪穴住居の可能性も考えたが、壁溝や柱穴などの住居に伴う遺構が認められなかったことや規模が小さいことから、土坑とした。埋土は黒褐色粘質土で 1 層のみが認められた。

遺物は土坑中央から土師器壺（97 － 1 ～ 4 ・98 － 5 ）や高杯（98 － 6 ～ 8 ）、ミニチュア土器（98 － 9 ）などが出土した。

これらの土器がおおむね布留 3 ～ 4 式に当たることから、遺構の形成時期は古墳時代中期と考えられよう。

⑯土坑 2 （図 57・図 58・図 81）

土坑 2 は、図 58 に見えるように、南北方向の谷地形の南岸で、遺構が集中する範囲の東端付近で検出した。この地点は、調査区の東端にも当たっている。図 81 に平面・断面図を示したが、同図は西半の埋土が除去されている状態で、東半は埋土除去がなされていない。記録写真のデータを検索しても、図版 44 に示したように、東半の埋土が掘削されていない状態のものしか残されていなかった。現地調査において土坑 2 は埋土の除去が中途で終わってしまったようで、ここではその時点で作成された図面を提示できるのみとなっているものである。

土坑の平面形は楕円形を呈し、規模は長径 236cm、短径 137cm、深さ 22cm である。埋土は黒褐色粘質土 1 層である。遺物は南西隅付近で、古墳時代中期の土師器甕（98 － 10）などが出土した。遺構の形成時期については当該期に求められよう。

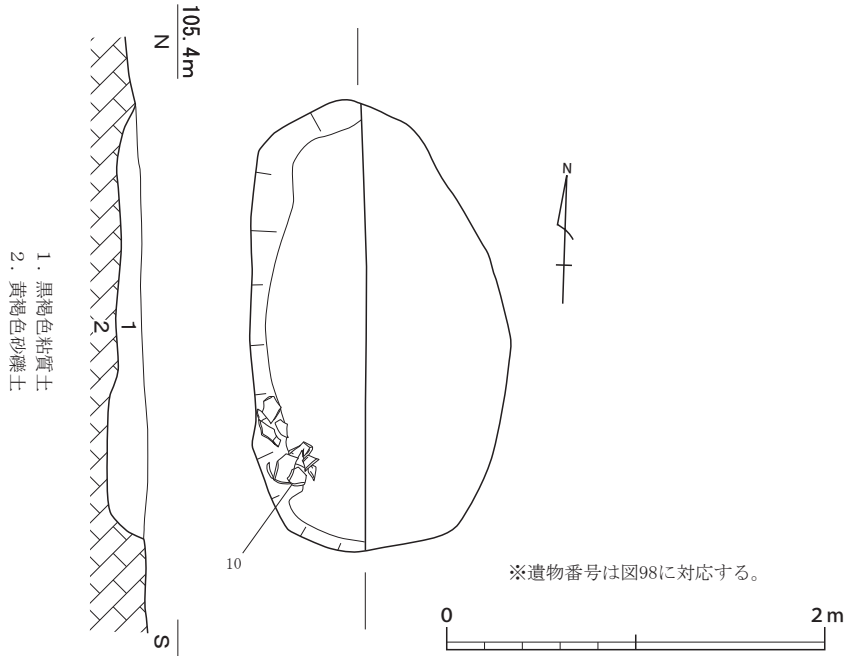


図 81　2 区　土坑 2　平面・断面図　（S．＝1/40）

⑰土坑３（図 57・図 58・図 82）

土坑３は、図 58 に示したように、南北方向の谷地形の南岸で、遺構が集中する範囲の北東端付近で検出した。調査区の東辺中央付近に当たっている。

図 82 に示したように、平面形は長径 92cm、短径 84cm の不整楕円形を呈する。北西部や北東部、南東部がやや直線的にも見えるので、方形を志向したのかもしれないが定かではない。深さは 17cm である。埋土は黒褐色粘質土１層であった。遺物は出土しなかったので、時期の特定が難しい。同一遺構面での検出であることから、弥生時代から古墳時代のいずれかに属するとみられる。

⑱土坑４（図 57・図 58・図 82）

土坑４は、図 58 に示したように、南北方向の谷地形の南岸で、遺構が集中する範囲の西端付近で検出した。図 82 に示したように、平面形は長径 139cm、短径 136cm の不整円形を呈する。深さは 16cm である。埋土は黒褐色粘質土１層であった。遺物は古墳時代とみられる土師器の小片が遺物袋にして１袋分が出土した。

⑲土坑５（図 57・図 58・図 66・図 67・図 82）

土坑５は、住居９の床面で検出された。「⑪住居９」の項を参照されたい。

⑳土坑６（図 57・図 58・図 63・図 82）

土坑６は、住居６の床面で検出された土坑である。「⑧住居６」の項でも記したように、ピット 83 と切り合い関係があることから、同様に床面で検出されている土坑とピットには時期差があって、いずれが住居に伴うものであるかなど、明確でないことが多い。しかしながら、土坑６の検出深さは後述するように３cm と極浅いものになっている。このように浅い土坑の用途は容易には推定しにくい。本来は、もっと深い土坑が掘られていたものが、住居埋土を除去するまで遺構の形状が検出できなかったのであれば、住居以前に掘削されてすでに埋まっていた土坑が、住居の形成時に掘削を受けたものとも考えられる。なお、その場合には、検出状況を重んじれば土坑６に切られるピット 83 も住居以前に形成されたことになる。

土坑６の平面形は、図 82 に示したように、長径 56cm 以上の楕円形であることはわかるが北端が削平を受けているので、詳細が不明である。深さは、同断面図に見えるように、約３cm となっている。土坑６の形成時期は、不詳ながら上記のような層位的な認識から、土師器がピットから出土する住居６より古いことになるから、この地点の他の遺構との時期を参考にすれば弥生時代と考えられるが、定かではない。

㉑土坑７（図 57・図 58・図 63・図 82）

土坑７は、図 63 に示したように、住居５の西半中央で検出した。規模は長径 86cm、短径 76cm、深さ 20cm で、平面形は不整円形を呈している。図 63 や図 82 に示したように、住居床面で検出されたピット 92・93 と切り合い関係があり、これらを切っている。ピットとの切り合い関係があることもあって、これが住居に伴うものであるかどうか、分明ではない。

㉒土坑８（図 57・図 58・図 63・図 82）

土坑８は、図 63 に示したように、住居５の検出東半中央付近で検出した。規模は長径 96cm、短径 40cm、深さ約 20cm で、平面形は東部が内彎する楕円形を呈している。底の形状が歪で、２段堀のようになっているが、それが意識的なものかどうか不明である。

㉓土坑９（図 57・図 58・図 63・図 82）

土坑９は、図 63 に示したように、住居５の東片部で検出した。住居の側溝と切り合い関係があるので、少なくとも住居に伴う遺構ではないことがわかる。土坑９は、長径 84cm、短径 60cm の不整楕円形を呈し、深さは約 20cm が検出された。住居５のピットからは、古墳時代と思しき土師器片が数点出土しているので、土坑９の形成時期は古墳時代以降であるかもしれないが、確定的ではない。

㉔土坑 10（図 57・図 58・図 64・図 82）

土坑 10 は、図 64 に示したように、住居７の北東隅部で検出した。他の遺構と同様にこれが住居に伴うものか否かは確定が難しい。ただし、図 64 にも見えるように、埋土の上面で土器片が検出されている。この高さは住居の床面の高さに一致するので、これが住居の床面に伴うものであれば、住居の床が成形される際に土坑 10 の埋土が削平されたことになる。すなわち、この場合には土坑 10 は住居７に先行することになる。

土坑 10 の平面形は、南西側、南東側の上端線がやや直線的であるために、方形を志向するかにも見えるが、全体としてみれば不整円形を呈するといえよう。規模は径約 68cm で、深さは 28cm である。遺物は、上記の埋土上面から出土したもの以外に、埋土中に含まれるものはなかった。

㉕土坑 11（図 57・図 58・図 64・図 83）

土坑 11 は、図 64 に示したように、住居７の東辺中央付近で検出された。同図を見れば、土坑 11 が住居の側溝を切っているので、土坑 11 が新しいことになる。しかし、「⑨住居７」の項でも記したように、土坑 11 の埋土上面から出土している土器がその西側で出土した住居床面の土器と年代差がなく、これらの遺物は住居床面に伴うものと理解した。

土坑 11 の平面形は長径 95cm、短径 72cm の楕円形を呈し、深さは 19cm である。出土遺物は、上記の埋土上面で検出された土器のほか、埋土中から土師器片が出土した。

㉖土坑 12（図 57・図 58・図 64・図 83）

土坑 12 は、図 64 に示したように、住居８の南辺部で検出した。住居８の壁溝と切り合い関係があって、これを切っている。

平面形は長径 85cm、短径 72cm の不整楕円形を呈する。深さは 12cm である。埋土は黒褐色粘質土１層が認められた。遺物は出土しなかったが、埋土から他の土坑と同様、古墳時代のものとみられる。

㉗土坑 13（図 57・図 58・図 62・図 83）

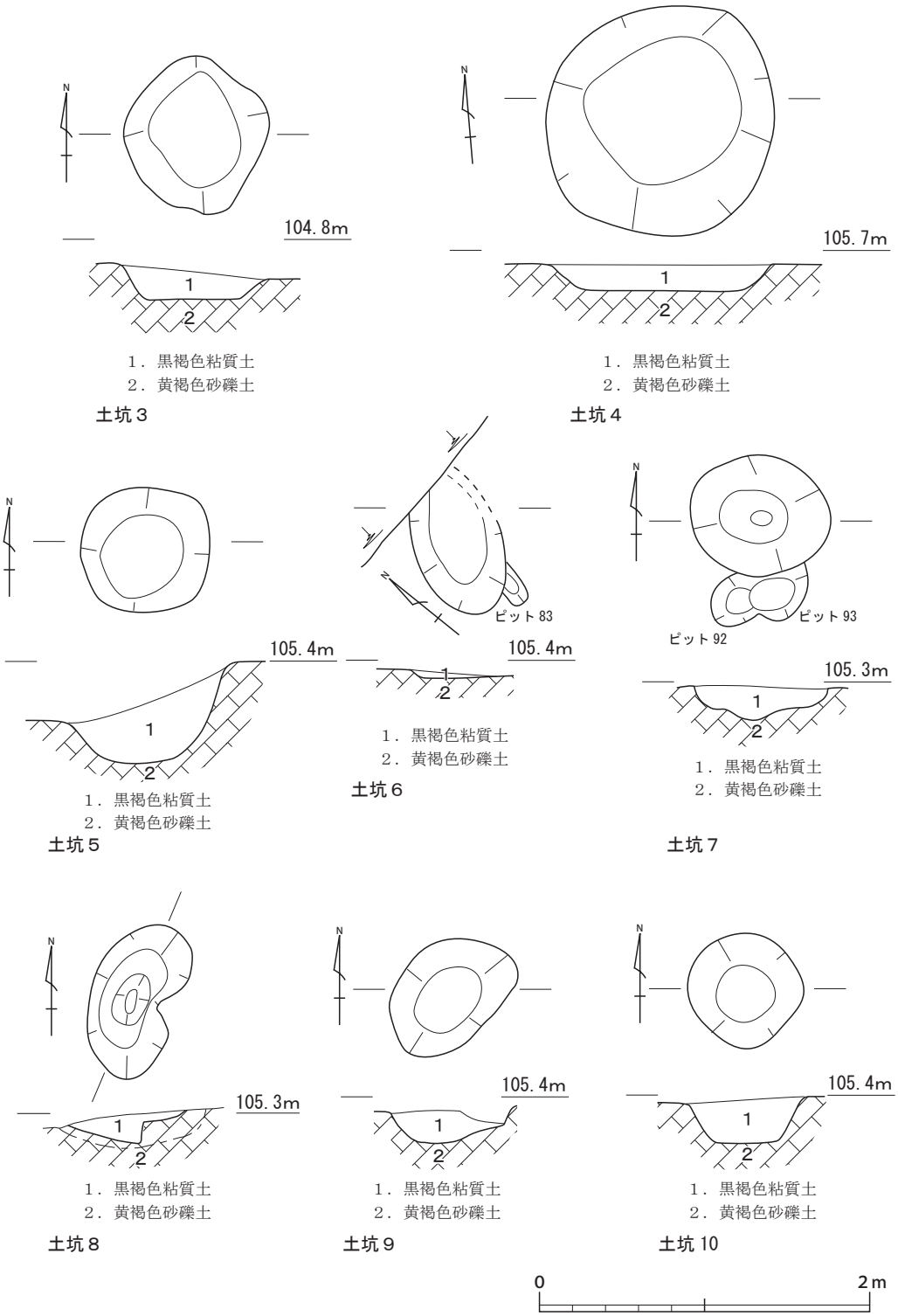


図 82　２区　土坑３～ 10　平面・断面図　（S．＝1/40）

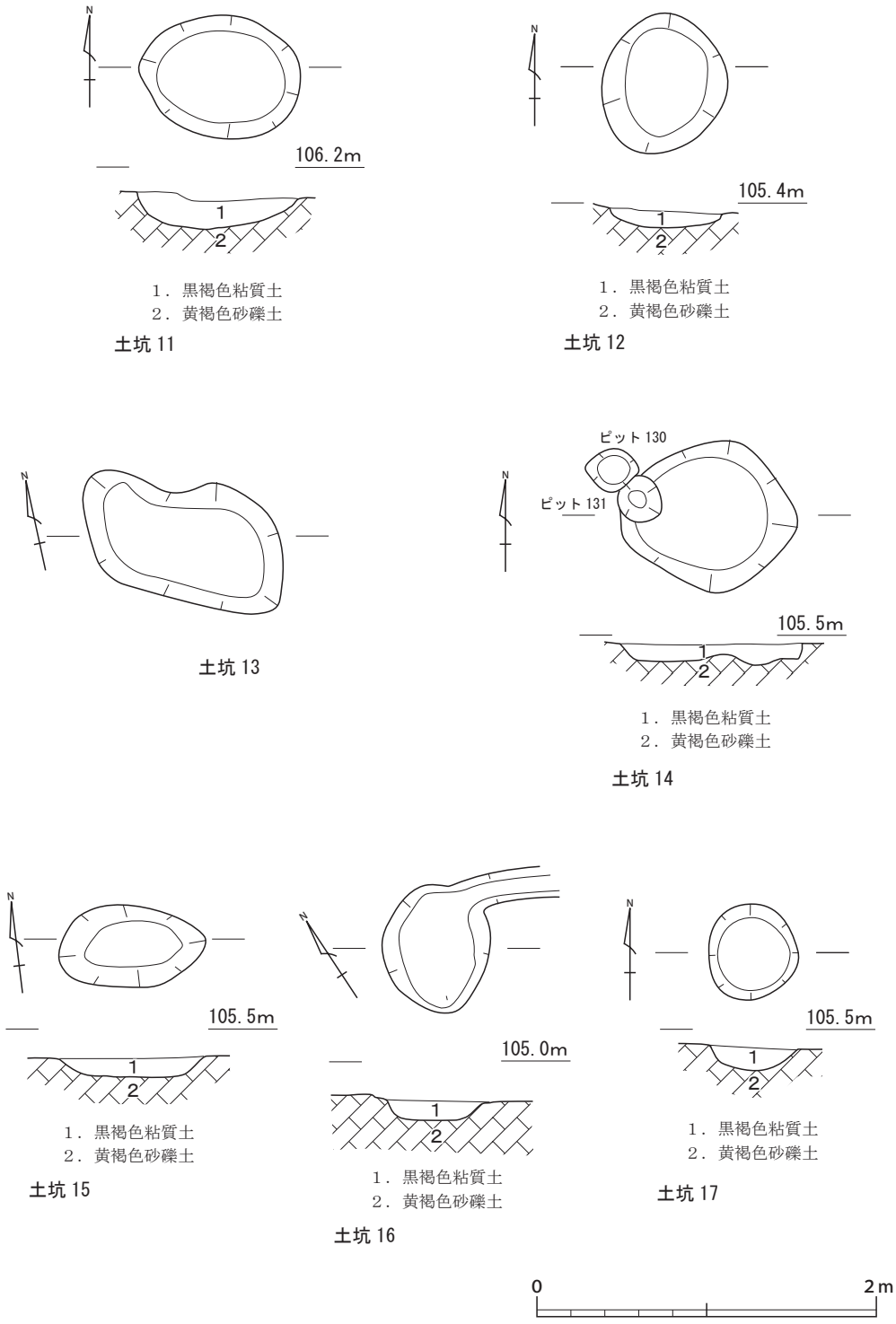


図 83　２区　土坑 11 ～ 17　平面・断面図　（S．＝1/40）

土坑 13 は、図 62 に示したように、住居 4 の東辺部で検出した。住居 4 と切り合い関係があって、これを切っている。図 83 に見えるように、東西に長い形状をしていて、その南・西・東の上端の線が直線状を呈しているので、全体として長方形を志向しているかに見えるものの、北側の線がやや内彎して歪になっているので、整然としたものではない。長軸 112cm、短軸 74cm、深さ約 10cm の規模である。埋土は黒褐色粘質土で 1 層のみが認められた。遺物が出土しなかったので、遺構の形成時期の特定が難しいが、前述のように、住居 4 が古墳時代以降の形成とみられるので、土坑 13 についても古墳時代以降ということになる。

㉘土坑 14（図 57・図 58・図 62・図 83）

土坑 14 は、図 62 に示したように、住居 4 の床面中央やや北寄りで検出された。同図や図 83 に示したように、ピット 131 と切り合い関係があって、切られている。ピットが住居に伴う柱穴であったとすれば、この土坑は住居 4 に先行する土坑であったことになる。

土坑 14 の平面形は、上端線のうち北東部、南東部、南西部がやや直線的で、全体としては隅丸方形の様相を呈しているが、いずれにせよ不整形な形状である。方形と見た場合の平面形は長軸 92cm、短軸 88cm 程の大きさで、深さは 12cm である。

出土遺物は、弥生時代の削器や古墳時代の土師器の壺片などがあった。

㉙土坑 15（図 57・図 58・図 83）

土坑 15 は、図 58 に示したように、 南北方向の谷地形の南岸で、遺構が集中する範囲の中央やや東寄りで検出した。平面形は、図 83 に示したように、長径 86cm、短径 48cm の楕円形を呈する。深さは 12cm である。出土遺物はなかった。

㉚土坑 16（図 57・図 58・図 59・図 83）

土坑 16 は、図 59 に示したように、住居 1 の床面で検出された土坑である。「③住居 1 」の項で前述したように、土坑 16 はトンネル状の遺構を伴う特異な機能を有したとみられる遺構である。規模、構造等については、「③住居 1 」の項を参照されたい。

㉛土坑 17（図 57・図 58・図 60・図 83）

土坑 17 は、図 60 に示したように、住居 2 の範囲内の北東隅付近で検出した。ただし、「④住居 2 」の項でも前述したように、住居 2 の復原される壁周溝の位置からみて、住居 2 とは直接には関係しないと考えられる。平面形は、図 83 に示したように、径約 55cm の不整円形を呈する。深さは 14cm である。出土遺物はなかった。

２．遺物（図 84 ～ 98）

２区で出土した土器・土製品・石器・石製品のうち図化可能であったものを図 84 ～ 98 に掲げた。これらの形態・大きさをはじめとする詳細は、土器については別表 1 に、石器・石製品については別表 2 に記したので参照されたい。

①谷地形出土遺物

図 84 ～ 87 に２区谷地形（東西方向）から出土した遺物を掲載した。

（84 － 1 ～ 11）は壺もしくは器台である。すべて弥生土器である。畿内第Ⅴ様式に属する。

（84 － 1 ）は広口壺もしくは器台の口縁部である。口縁端部に粘土帯を下方に貼りつけ、外面に擬凹線を巡らす。

（84 － 2 ）は直口壺の口縁部である。口縁端部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケを施す。

（84 － 3 ）は広口壺の口縁部から体部である。球形の体部から「く」の字に折れ曲がる口縁部を持つ。端部には強い横方向のナデを施す。体部外面には縦方向のタタキを施した後、ヘラミガキを行なう。頸部から口縁部にかけては横方向のヘラミガキを行なう。外面には煤が付着する。

（84 － 4 ～ 6 ）は器台の口縁部である。それぞれ口縁端部を肥厚させ、外面に円形浮文を貼りつける。（84 － 6 ）は口縁端部に擬凹線を 1 条巡らす。口縁部外面にはヘラミガキを施す。

（84 － 7 ～ 9 ）は短頸壺、（84 － 10・11）は壺である。（84 － 7 ・10）は体部外面に縦方向のハケを施す。（84 － 8 ）はヘラミガキを行なう。内面は（84 － 7・8・10）は板ナデを行ない、（84 － 9 ）は縦方向のハケを施す。（84 － 11）は内外面ともハケで仕上げる。（84 － 8 ・11）には人為的に開けられたと思われる穿孔が存在する。

（85 － 12 ～ 23・86 － 24・25・27 ～ 34）は甕である。（85 － 12 ～ 23、86 － 27・28・31 ～ 34）は弥生土器であり、畿内第Ⅴ様式に属する。（86 － 24・25・29・30）は庄内式土器であり、庄内 1 式に属する。

（85 － 12）は底部である。外面には指頭圧痕が残る、内面にはクモの巣状ハケみられる。外面には黒斑が残る。

（85 － 13）は口縁部である。端部に横方向のナデを施し、受け口状になる。

（85 － 14）は口縁部から体部である。体部外面にタタキメが残り、内外面に黒斑が残る。口縁部は「く」の字に外反する。

（85 － 15）は体部外面にタタキメが残り、内面はハケで仕上げる。口縁部は「く」の字に外反する。

（85 － 16）は体部外面にタタキメが残り、煤が付着する。内面はハケで仕上げる。口縁部は「く」の字に外反する。

（85 － 17）は体部外面にタタキメが残り、底部内面には放射状板ナデがみられる。口縁部は外傾して開く。

（85 － 18）は口縁部から体部である。体部外面にタタキメが残り、内面はハケで仕上げる。内外面に煤・炭化物が付着する。口縁部は「く」の字に外反する。

（85 － 19）は口縁部から体部である。体部外面にタタキメが残り、内面はハケで仕上げる。外面には煤が付着する。口縁部は「く」の字に外反する。

（85 － 20）は口縁部から体部である。体部外面にタタキを施した後、ハケを施す。内面はハケのちナデで仕上げる。口縁端部は横方向のナデを施す。

（85 － 21）は口縁部から体部である。肩部にハケを施す。体部にタタキメが残る。口縁部は「く」の字に屈曲し、端部は摘み上げる。内面には黒斑が残る。

（85 － 22）は口縁部から肩部である。肩部外面にタタキを施す。内面にハケを施す。口縁部は「く」の字に外反する。外面には煤が付着する。

（85 － 23）は口縁部から体部である。体部外面にタタキメが残り、内面はハケで仕上げる。口縁端部は丸みを帯びる。

（86 － 24）は口縁部から肩部である。肩部に細かいタタキを施す。口縁部は「く」の字に外反し、端部は摘み上げる。

（86 － 25）は口縁部である。口縁端部はやや丸みを帯びる。

（86 － 27）は体部から底部である。体部外面にタタキを施す。底部外面には指頭圧痕が残る。内面には炭化物が付着する。

（86 － 28）は口縁部である。端部はやや尖り気味である。

（86 － 29 ～ 34）は体部から底部である。（86 － 29）は内面に放射状板ナデを施す。（86 － 29・30・33）は外面に指頭圧痕が残る。（86 － 31）は外面にタタキメが残り、底部を穿孔する。（86 － 34）は内外面に黒斑が残る。

（86 － 26・35 ～ 37）は鉢である。すべて庄内 1 式に属する。

（86 － 26）は口縁部から体部である。体部から緩やかに外反気味に口縁部が伸びる。

（86 － 35）は大形の鉢の口縁部から体部である。口縁部は体部から直線的に短く立ち上がったのち、内湾気味に上方にのびる。体部内外面にヘラミガキを施す。

（86 － 36）は体部内外面にヘラミガキを施す。口縁部は「く」の字に外反する。

（86 － 37）は口縁部から体部である。体部内面にヘラミガキを施す。口縁部は「く」の字に屈曲し、端部は摘み上げる。

（86 － 38 ～ 40）は庄内式土器高杯である。内外面にヘラミガキを施す。庄内 1 式に属する。

（86 － 41 ～ 87 － 45）は弥生土器高杯の脚台部である。

（87 － 42・44・45）は外面にヘラミガキを施す。内面にはシボリメが見られる。（87 － 45）の内面には板ナデが残る。（86 － 41、87 － 43・45）は 4 箇所に穿孔する。畿内第Ⅴ様式に属する。

（87 － 46）は器種不明弥生土器である。鼓形の外形を呈し、体部に透孔が 4 孔施される。口縁部は外傾して開き、端部は横方向のナデにより面を持つ。内面は横方向のヘラミガキ、外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。弥生時代に属すると思われるが、該当する器種は不明である。

（87 － 47）は土師器甑である。分厚い平底の底部から、屈曲をもって立ち上がる体部はやや外傾する。楕円状の蒸気孔は花弁状に 5 つ穿たれる。内面はケズリのちナデ、外面はハケにより仕上

げられる。外面に黒斑が残る。古墳時代中期に属する。

（87 － 48 ～ 53）は石器である。すべてサヌカイトを用いる。

（87 － 48）は削器である。長辺に原礫面を残し、対向する側縁部に細部調整を施す。調整は片面のみである。

（87 － 49）は削器である。長辺の側縁部に片面のみ細部調整を施す。

（87 － 50）は剥片である。細部調整はみられず、敲打が集中する部分があり、楔形石器から剥離した可能性がある。

（87 － 51）は剥片である。長辺に原礫面を残す。細部調整はみられず、短辺の側縁部に敲打の集中があり、楔形石器の可能性がある。

（87 － 52）は剥片である。全体が白く風化する。細部調整はみられず、敲打が集中する部分があり、楔形石器から剥離した可能性がある。

（87 － 53）は剥片である。細部調整はみられず、敲打が集中する部分があり、楔形石器から剥離した可能性がある。

図 88 ～ 92 に２区谷地形（南北方向）から出土した遺物を掲載した。

（88 － 1 ～ 6 ・ 9 ）は弥生土器壺である。

（88 － 1 ）は緩やかに外反する口縁部である。口縁下端部を拡張し、外面に波状文を施す。内外面はナデにより仕上げる。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

（88 － 2 ）は大きく外反する口縁部である。面を持たせた端部に沈線による斜格子文を施す。外面に黒班が残る。畿内第Ⅲ様式に属する。

（88 － 3 ）は大きく外反する口縁部である。端部を上下に拡張させ、擬凹線を３条施す。口縁部上面には２孔１組の穿孔が２箇所残る。内外面とも表面に剥離があり調整は不明瞭である。畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属すると思われる。

（88 － 4 ）は端部を下方に拡張させ、面を持たせた口縁部である。下端には規則的に指頭による押圧を施す。擬凹線が３条残存する。２個１対の円形浮文が認められる。畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（88 － 5 ）は外反する口縁部である。端部を下方に拡張し、面を持たせる。口縁部外面には擬凹線が３条巡る。竹管文の施された円形浮文が２箇所に残る。畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（88 － 6 ）は緩やかに外反する壺の頸部である。２条の貼付突帯の上に刻目が施される。内外面はナデにより仕上げられる。畿内第Ⅰ様式の新しい段階に属する。

（88 － 9 ）は緩やかに外反する壺の口縁部である。端部を下方に拡張させ、横方向のナデにより面を持たせる。内面はナデ、外面はハケのちケズリにより仕上げられる。畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（88 － 10）は弥生土器器台である。端部は横方向のナデにより面を持つ。内面はハケのちナデ、

外面はナデのち綾杉状の列点文が施される。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属すると思われる。

（88 － 7 ・ 8 ・11）は弥生土器甕である。

（88 － 7 ）は平らな底部から外傾して立ち上がる甕の体部である。体部内面はハケ、外面は風化により調整不明である。内面には炭化物が付着し、また底部内外面に黒斑が残る。畿内第Ⅱ～Ⅲ様式に属する。

（88 － 8 ）は屈曲して外反する甕の口縁部である。端部には刻目、頸部には３条の沈線が残る。畿内第Ⅰ様式の新しい段階に属する。

（88 － 11）は甕の底部から体部である。器壁は外面のケズリにより体部・底部共に薄く作られ、ナデにより仕上げられる。底部は指頭による押圧によりわずかに張り出す。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

（88 － 12）は垂下口縁を持つ弥生土器高杯の口縁部である。上端と下端に凹線が施される。畿内第Ⅲの新しい段階～Ⅳ様式に属する。

（89 － 13）は土師器小形丸底壺である。器高における口縁部と体部の比率はほぼ同じで、口径は体部径より大きい。内外面とも横方向のヘラミガキを密に施す。口縁部と体部の接合部に施されたナデにより屈曲は鈍くなる。布留１式に属する。

（89 － 14 ～ 16）は高杯の脚台部である。

（89 － 14）は土師器である。屈曲をもって開く裾部を持ち、杯部は円板充填法により底部を接合する。杯底部にはハケメが放射状に残り、柱状部外面にはヘラミガキが残る。古墳時代中期に属する。

（89 － 15）は弥生土器である。柱状部外面には方形の穿孔が２段にわたり施されており、貫通するものと未通のものがある。内外面はナデにより仕上げられる。畿内第Ⅴ様式に属する。

（89 － 16）は土師器である。柱状部から屈曲をもって開く裾部を持ち、杯部は接合法により脚台部底部と接合する。内面はケズリのちナデ、裾部にはハケメが残る。外面はハケのちヘラミガキ、裾部はナデにより仕上げられる。布留３～４様式に属する。

（89 － 17）は軟質韓式系土器甕の口縁部から体部である。口縁端部は横方向のナデにより面を持ち、肩部はナデによりわずかな稜を持つ。体部には外面に格子タタキが施される。古墳時代中期中頃に属する。

（89 － 18 ～ 90 － 28）は須恵器である。

（89 － 18）は杯身である。口縁端部は内方へ傾斜する。底部は平底で、底体部のほぼ 1/2 を左回りにヘラケズリし、内外面ヨコナデにより仕上げられる。TK208 型式に属する。

（89 － 19）は杯蓋である。天井部は低く平坦で、稜は短く突出する。口縁端部は内方へ傾斜する。天井部はほぼ 1/2 を右回りにヘラケズリし、内外面ともヨコナデにより仕上げられる。TK208 型式に属する。

（89 － 20）は甕の口縁部である。外反する口縁は端部を上方に摘み上げる。頸部に 1 条の突帯を施し、その下に波状文を施す。TK10 型式に属する。

（89 － 21 ～ 23）は壺である。

（89 － 21）は長頸壺の口頸部である。外反する口縁部は面を持ち、端部を上方に摘み上げる。頸部に 2 条の突帯を施し、その上下に 3 帯の波状文を施す。TK73 型式に属する。

（89 － 22）は壺の口縁部から肩部である。短く外反する口縁部を持つ。無文であり、内面はハケのちナデ、外面は横方向のナデにより仕上げられる。TK73 型式に属する。

（89 － 23）は長頸壺である。丸底から続く肩の張る偏球状の体部に、外傾して立ち上がる口縁部を持つ。端部はナデにより丸く収められる。内面にナデを施し、外面はカキメが残る。底部内面、外面全体に自然釉が認められる。TK73 型式に属する。

（89 － 24・25）は𤮔である。ともに体部はやや扁平であり、体部最大径はやや上方に持つ。頸部は口縁との境に段を持ち、その下に波状文が施される。

（89 － 24）は体部外面中ほどにカキメ、底部はケズリにより仕上げられる。

（89 － 25）は体部中ほどに 2 条、下半に 1 条の凹線が施され、その間に波状文が施される。底部は手持ちヘラケズリにより仕上げられる。どちらも TK208 型式に属する。

（90 － 26）は有蓋高杯蓋である。中央部が凹む摘み部を持ち、天井部下端の稜は鋭く突出する。天井部には綾杉状の列点文が 2 段とその間に凹線が 1 条施される。TK73 型式に属する。

（90 － 27）は無蓋高杯である。杯部は椀形を呈し、口縁端部は内方へ傾斜する面をなす。杯部外面中ほどに突帯を持つ。脚台部には 4 方向に菱形の透孔、突帯が施される。杯部外面下半に右回りのヘラケズリが施され、内外面全体はナデにより仕上げられる。TK216 型式に属する。

（90 － 28）は器台の体部である。上部に壺形の装飾を載せ一体化する器台の、接合部にあたると思われる。上方に突出した貼付突帯の下端には凹線が残り、壺部分の体部には 1 条と 2 条の突帯、その間に幅 1.2cm で 9 条を 1 単位とする波状文が 2 帯施される。外面は自然釉がかかる。TK43 型式期に属すると思われる。

（90 － 29）は蓋形埴輪の笠の部分である。残存長 13.5cm、厚さは部位によって異なるがおおむね 1.5cm である。色調は淡灰色を呈する。外面に放射状表現と思われる線刻が施される。内面には工具による刺突が 3 箇所施される。形状と大きさなどから古墳時代中期に属する。

（90 － 30）は有孔土製円板もしくは紡錘車である。直径 4.4cm のほぼ正円をなし中央部に径 4 mm の小孔が穿たれる。全体にハケのちナデが施される。

（90 － 31 ～ 92 － 63）は石器・石製品である。（90 － 31 ～ 91 － 40、92 － 48 ～ 62）はサヌカイト、（91 － 41）は砂岩、（91 － 42）は安山岩、（91 － 43・44・47）は凝灰岩、（91 － 45・46）は結晶片岩、（92 － 63）は滑石を用いる。

（90 － 31）は平面二等辺三角形を呈する剝片である。両側縁部には片面にのみ細部調整がみら

れる。

（90 － 32）は凹基式石鏃の未成品である。両側縁の細部調整は片面のみで、先端部に向かっての調整途中に廃棄したものと思われる。

（90 － 33）は棒状の石錐である。両端に回転痕がみられ、一方を欠損して後、もう一方を錐部として加工・使用したものと思われる。錐部断面形はどちらも紡錘形を呈する。

（90 － 34）は削器である。長軸方向の測縁部に細部調整が施されるが一部を除いて片面のみである。使用痕はみられない。石鏃の未成品の可能性がある。

（96 － 35）は逆涙滴形の石錐未成品である。頂部に原礫面が残る。一方の側縁部には両面調整がみられるが、もう一方は片面のみである。錐部に向けての加工の前に廃棄したものと思われる。

（96 － 36）は逆涙滴形の石錐である。先行剥離面には原礫面を大きく残し、主剥離面には原礫から割り取る際の打点が残る。錐部の加工は粗く、偶発的にできた剥片の形状を利用したものと思われる。使用痕はみられない。錐部断面形は三角形を呈する。

（91 － 37）は削器である。原礫の残る横長剥片を用いている。細部調整により鋸歯縁をつくる。

（91 － 38）は楔形石器である。原礫面の残る一辺を除いた周縁部に細部調整を施す。使用による刃潰れが観察できる。

（91 － 39）は方形の剥片である。原礫面はみられない。ごく一部に細部調整がみられる。

（91 － 40）は楔形石器もしくは削器である。原礫面とこれに対向する側縁部に刃潰れがみられる。この他の側縁には細部調整が残る。

（91 － 41）は整った厚手の円礫を素材とする敲き石である。約 1/2 を欠失する。残存する両平坦面の中央に敲打の集中による凹みがみられ、その周辺は平滑な磨面が形成される。周縁の端部に近い部分にも、強い敲打痕が連続して見られる。

（91 － 42）は柱状石斧である。刃部の一部を欠失する。基部の片面に両端が摩耗により凹む部分があり、柄の装着痕と思われる。

（91 － 43・44・46・47）は砥石である。被熱痕跡がある方柱状の形状で、3 面ないし 4 面を砥面として使用している。砥面はかなり凹んでおり、高頻度で使用されたことが窺える。

（91 － 46）は、方形の板状を呈し、 4 面に砥面が形成される。柱状石斧の再加工品の可能性がある。

（91 － 47）は、方形の板状を呈し、 3 面に砥面としての利用がみられる。

（91 － 45）は柱状石斧と思われる。刃部と基部を欠失しているが、刃部の加工が一部に残る。

（92 － 48）は石核である。周縁部に原礫面の残る状況から素材は方形のブロック状の原礫であったと思われる。

（92 － 50・57・61）は楔形石器である。（92 － 50）は対向する 2 辺に刃潰れがみられる。（92 － 57）は 3 辺の測縁部に刃潰れがみられる。（92 － 61）はやや歪であるが対向する 2 辺に刃潰れ

がみられる。どちらも原礫面が大きく残る剝片を利用している。

（92 － 58）は石錐である。偶発的な縦長剝片の形状を利用して細部調整を行う。回転痕は不明瞭である。

（92 － 49・51 ～ 56・59・60・62）は剝片である。このうち原礫面の残るものは（92 － 51・52・54・59・62）であった。（92 － 60・62）には激しい風化がみられた。

（92 － 63）は滑石製の勾玉である。片面からの穿孔は貫通しており成品と思われるが、表面の研磨はごく粗い。

②住居出土遺物

図 93 ～ 95 に２区住居跡から出土した遺物を掲載した。

（93 － 1 ～ 9）は住居 1 の出土遺物である。土器はすべて弥生土器で畿内第Ⅴ様式の新しい段階に属する。

（93 － 1 ～ 3 ・ 5 ～ 7）は弥生土器甕の体部から底部である。（93 － 4）は甕もしくは壺の体部から底部である。

（93 － 1）は突出した底部から大きく球形に開く体部を持つ。底部は平底で、内外面はナデにより仕上げられる。

（93 － 2）は上げ底状の底部から外傾して開く体部が続く。底部と体部の屈曲は緩やかで、内面は放射状の板ナデ、外面はタタキにより仕上げられる。外面には黒斑が残る。

（93 － 3 ・ 5）は突出した底部から外傾して開く体部が続く。わずかに上げ底状を呈し、外面にはタタキが施される。（93 － 3）の内面には黒斑が残る。

（93 － 4）はわずかに上げ底状の底部から大きく開く体部が続く。底部と体部の屈曲は緩やかで、内面は放射状の板ナデ、外面はヘラミガキにより仕上げられる。

（93 － 6）は突出した底部から外傾して開く体部が続く。わずかに上げ底状を呈し、内外面ともナデにより仕上げられる。

（93 － 7）は突出した底部から球形に開く体部を持つ。底部は上げ底状になり、内面はクモの巣状ハケのちナデ、外面はタタキメが残るが風化により不明瞭である。

底部は全て輪台法による。

（93 － 8）は弥生ミニチュア土器壺の体部から底部である。わずかに凹む底部から、緩やかに立ち上がる体部を持ち、緩やかに頸部に向けて内傾する。内外面ともナデにより仕上げられる。他出土遺物の状況から同じく畿内第Ⅴ様式に属すると思われる。

（93 － 9）は匙形土製品である。手捏ねにより成形される。持ち手部分の断面形は円形を呈する。他出土遺物の状況から同じく畿内第Ⅴ様式に属する。

（93 － 10 ～ 18）は住居２の出土遺物である。

（93 － 10 ～ 14）は土師器高杯である。布留３～４式に属する。

（93 － 10）は椀形高杯の杯口縁部である。内外面はナデにより仕上げられる。

（93 － 11）は高杯の杯底部から脚柱状部である。脚台部は、中空の柱状部から屈曲をもって開く裾部を持つ。柱状部に透孔が 1 孔残る。杯部との接合は円板充填法による。杯体部内外面はナデ、脚柱状部外面にはケズリ、内面はナデにより仕上げられるがシボリメが残る。

（93 － 12）は有段高杯である。水平な杯底部から屈曲をもって開く口縁部が続く。わずかに残る脚台部は接合法により杯部に接合する。杯部内外面ともナデにより仕上げられる。

（93 － 13）は中空の柱状部から緩やかに開く裾部が続く。内外面ともナデにより仕上げられる。内面にはシボリメが残る。

（93 － 14）は大きく開く裾部である。器壁は薄く丁寧な作りである。

（93 － 15 ～ 18）は須恵器である。すべて TK73 型式に属する。

（93 － 15）は有蓋高杯蓋である。つまみ部を欠失する。天井部と口縁部の境の稜は鋭く突出し、天井部には 2 段の列点文およびその間に配される 1 条の凹線による綾杉状の文様が施されている。

（93 － 16・17）は杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は短く突出する。口縁部は外方にやや開く。（93 － 16）は天井部の 1/2 を右回りにヘラケズリし、内外面ともヨコナデにより仕上げられる。

（93 － 18）は壺もしくは𤮈である。頸部から屈曲をもって開く口縁部を持つ。頸部には波状文が残り、内面に自然釉がかかる。

（93 － 19）は住居 3 から出土した土師器高杯である。杯部は口縁部と底部の接合部にわずかに段を持つ。口縁部内面には横方向のヘラミガキが施される。また内外面に赤彩が残る。古墳時代中期中頃に属する。

（93 － 20 ～ 94 － 32）は住居 7 から出土した遺物である。すべて布留 3 ～ 4 式に属する。

（93 － 20）は壺の口縁部から体部である。扁球形の体部に外傾する口縁部がつく。内外面ともナデにより仕上げられる。体部外面に黒斑が残る。接合部の屈曲はあまく、器壁は厚い。

（93 － 21）は壺の体部から底部である。わずかな残存部からみると、頸部は体部から緩やかに続くらしい。体部中ほどに焼成前穿孔が施される。内外面とも風化が激しく、調整は不明瞭である。須恵器の𤮈を模したものと思われる。

（93 － 22 ～ 94 － 24）は甕である。

（93 － 22）は丸底の底部からやや下膨れ気味の球形の体部が続く。口縁部との接合部の屈曲は緩やかで、口縁端部は横方向のナデにより面を持つ。体部内面はケズリ、外面はハケにより仕上げられる。口縁部内面の一部と、体部中ほどから底部にかけて内外面ともに黒斑が残る。

（94 － 23）は肩の張る球形の体部からにぶい屈曲をもって開く口縁部を持つ。口縁端部は丸く収まる。体部内面はケズリ、外面はハケにより仕上げられる。

（94 － 24）は口縁部から体部である。球形の体部から屈曲をもって開く口縁部を持つ。口縁端部は丸く収められる。内外面ともナデにより仕上げられる。体部外面中ほどに黒斑が残る。

（94 － 25 ～ 32）は高杯である。

（94 － 25）は緩やかに外反気味に開く杯部を持ち、口縁端部は丸く収まる。挿入付加法により杯部と接合する脚柱状部は、屈曲をもたずに裾部に続く。杯部内外面はハケにより仕上げられる。脚台部外面はヘラミガキが施される。杯部内外面に黒斑が残る。

（94 － 26・27）は杯部である。水平面を有する体部から緩やかに外傾する口縁部が続く。口縁端部は丸く収まる。脚台部は挿入付加法により接合する。内外面はナデにより仕上げられる。（94 － 26）は杯部外面に黒斑が残る。

（94 － 28）は杯部である。緩やかに外反気味に開く口縁部を持ち、口縁端部は丸く収まる。脚台部は挿入付加法により底部と接合する。杯部外面はハケ、内面はナデにより仕上げられる。

（94 － 29）は杯部である。水平面を有する底部から内湾気味に立ち上がる口縁部が続く。口縁端部はナデにより丸く収まる。脚台部との接合は挿入付加法による。

（94 － 30）は外傾して開く口縁部である。口縁端部は丸く収まる。内外面はナデにより仕上げられる。杯部内外面に黒斑が残る。

（94 － 31・32）は緩やかに開く中空の脚台部である。ともに内面にシボリメが残る。（94 － 31）は挿入付加法により底部と接合する。（94 － 32）は外面にヘラミガキが施される。

（95 － 33）は住居８より出土した土師器甕である。丸底の底部からやや肩の張った体部は球形を呈し､にぶい屈曲をもって外傾する口縁部が続く。口縁端部は丸く収まる。底部内面は縦方向の、体部内面には横方向のケズリが施される。外面は全体をナデにより仕上げる。体部から底部内外面に煤・炭化物が残る。

（95 － 34 ～ 41）は住居９から出土した。すべて土師器であり、布留０～１式に属する。

（95 － 34）は甕形の製塩土器である。輪台法を用いたドーナツ状の底部から紡錘形の体部が緩やかに立ち上がる。やや内湾する口縁部がこれに続く。体部から頸部外面にかけてタタキが施され、内面は全体をナデにより仕上げる。体部外面下半に煤が付着、全体が二次被熱により赤変する。

（95 － 35）は器台である。短い柱状の体部から屈曲をもって開く裾部を持つ。内面はナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。透孔が３孔残る。

（95 － 36 ～ 38）は小形丸底壺である。

（95 － 36）は球形の体部に屈曲をもって開く口縁部を持つ。口縁部内面・外面全体を横方向のヘラミガキにより仕上げる。口縁部径は体部径より大きくなる。

（95 － 37）は外傾する口縁部である。内外面とも風化が激しく調整は不明である。

（95 － 38）は扁球形の体部から明瞭な屈曲をもって開く口縁部を持つ。口縁部内面・外面全体を横方向のヘラミガキ、底部外面を縦方向のヘラミガキにより仕上げる。口縁部径は体部径より大きくなる。

（95 － 39）は甕である。やや肩の張る球形の体部から、屈曲をもって開く口縁部は接合部のナ

デによりやや内湾気味になる。口縁端部は丸く収まる。体部内面はケズリ、外面はハケにより仕上げられる。体部から底部外面に黒斑が残る。

（95 － 40）は高杯である。杯部は水平な底部から外傾して開く口縁部を持つ。口縁端部は上方に摘み上げられる。脚台部は下方に開く柱状部から屈曲して開く裾部に繋がる。調整は杯部内外面と脚部外面を横方向のヘラミガキにより仕上げる。杯部内外面に赤彩が施される。また全体に黒斑が残っている。

（95 － 41）は小形器台脚台部である。内面をナデ、外面を横方向のヘラミガキにより仕上げられる。裾端部は丸く収まる。

③ピット・土坑出土遺物

図 96 ～ 98 に２区のピットや土坑、住居以外の遺構から出土した遺物を掲載した。

（96 － 1 ）はピット 121 から出土した土師器甕である。球形の体部から外反して開く口縁部が続く。口縁端部は丸く収める。風化が激しく、内外面の調整は不明である。体部から底部外面に黒斑が残る。器壁は薄いが底部は厚く、口縁部と体部の接合部の屈曲も鈍いことなどから布留３式に属する。

（96 － 2 ）はピット 80 から出土した土師器鉢である。丸底の底部から緩やかに開く口縁部が続く。内外面は全体をナデにより仕上げる。布留３式に属する。

（97 － 1 ～ 98 － 9 ）は土坑 1 から出土した。すべて土師器であり、布留３～４式に属する。

（97 － 1 、98 － 5 ）は大形の土師器壺である。

（97 － 1 ）は球形の体部と外反気味に開く口縁部を持つ。接合部の屈曲はやや鋭い。口縁端部は内側に肥厚させ、横方向のナデにより水平に面を持たせる。体部内面はケズリのちナデ、外面はナデにより仕上げる。体部外面中ほどに黒斑が残る。

（98 － 5 ）も同じく球形の体部を持つと思われる。外傾して立ち上がる口縁部との接合部は、ナデにより鈍くなる。口縁端部は内側に肥厚させ、横方向のナデにより水平に面を持たせる。内面はケズリのちナデ、外面はハケにより仕上げる。

（97 － 2 ）は甕の口縁部から肩部である。肩の張る体部から外傾して開く口縁部を持つ。接合部の屈曲は鈍い。やや内湾気味の端部は丸く収められ、体部内面をケズリ、外面をナデにより仕上げる。

（97 － 3 ）は二重口縁壺の口縁部から肩部である。肩の張る体部にやや外傾しながら開く口縁部を持つ。端部は丸く収める。体部内面はケズリ、外面全体はナデにより仕上げる。

（97 － 4 ）は土師器甕の口縁部から肩部である。屈曲をもって体部に接合する口縁部はやや内湾気味に開く。口縁端部はナデにより丸く収まる。体部内面はケズリ、外面はナデにより仕上げられる。

（98 － 6 ～ 8 ）は高杯である。

（98 － 6 ）は短く外反する口縁部を持つ。端部はナデにより尖り気味になる。

（98 － 7 ）は口径 23cm を測る大形高杯の杯部である。広い水平面を有する底部から緩やかに外

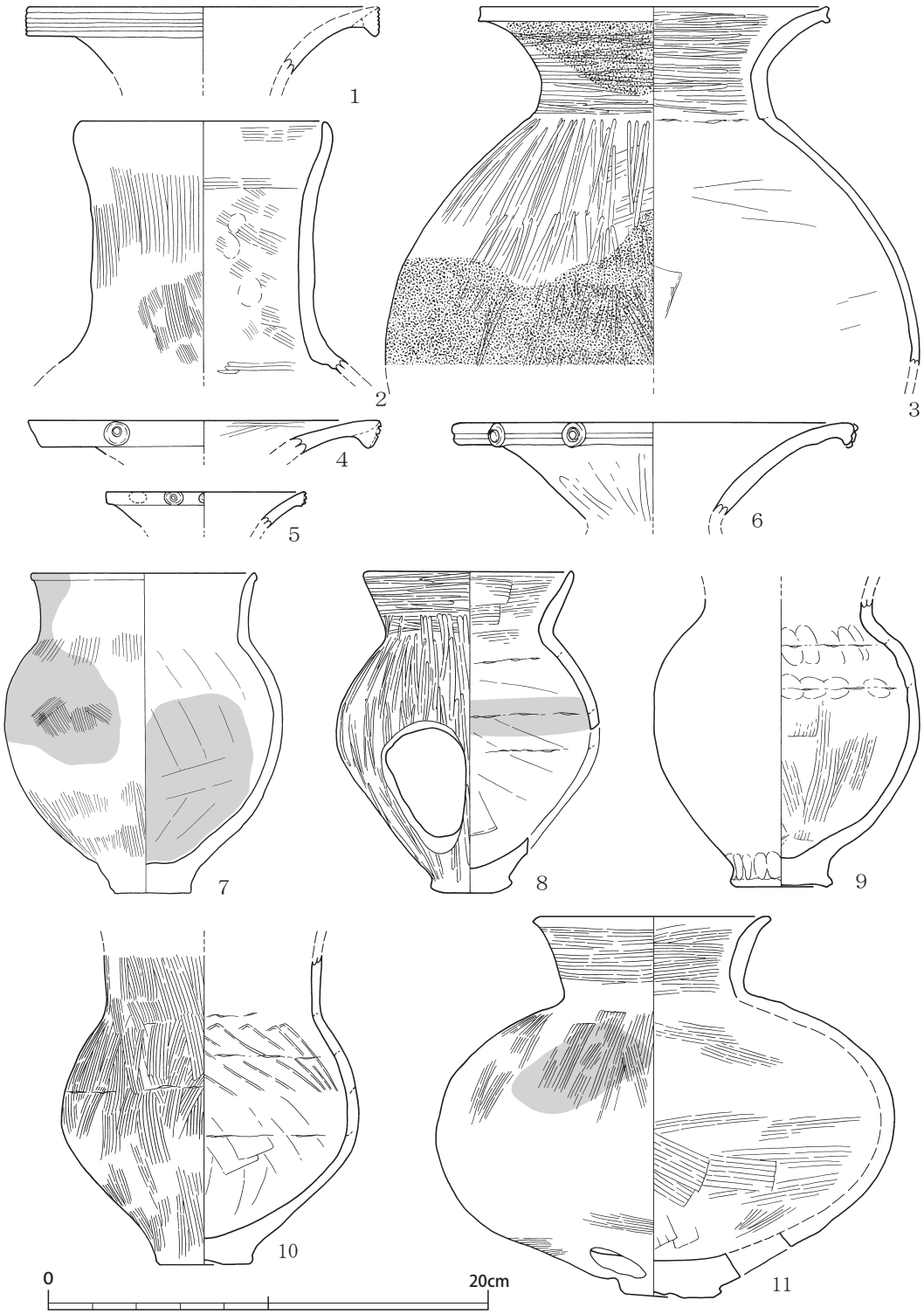


図 84　２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（１）（S.＝1/3）

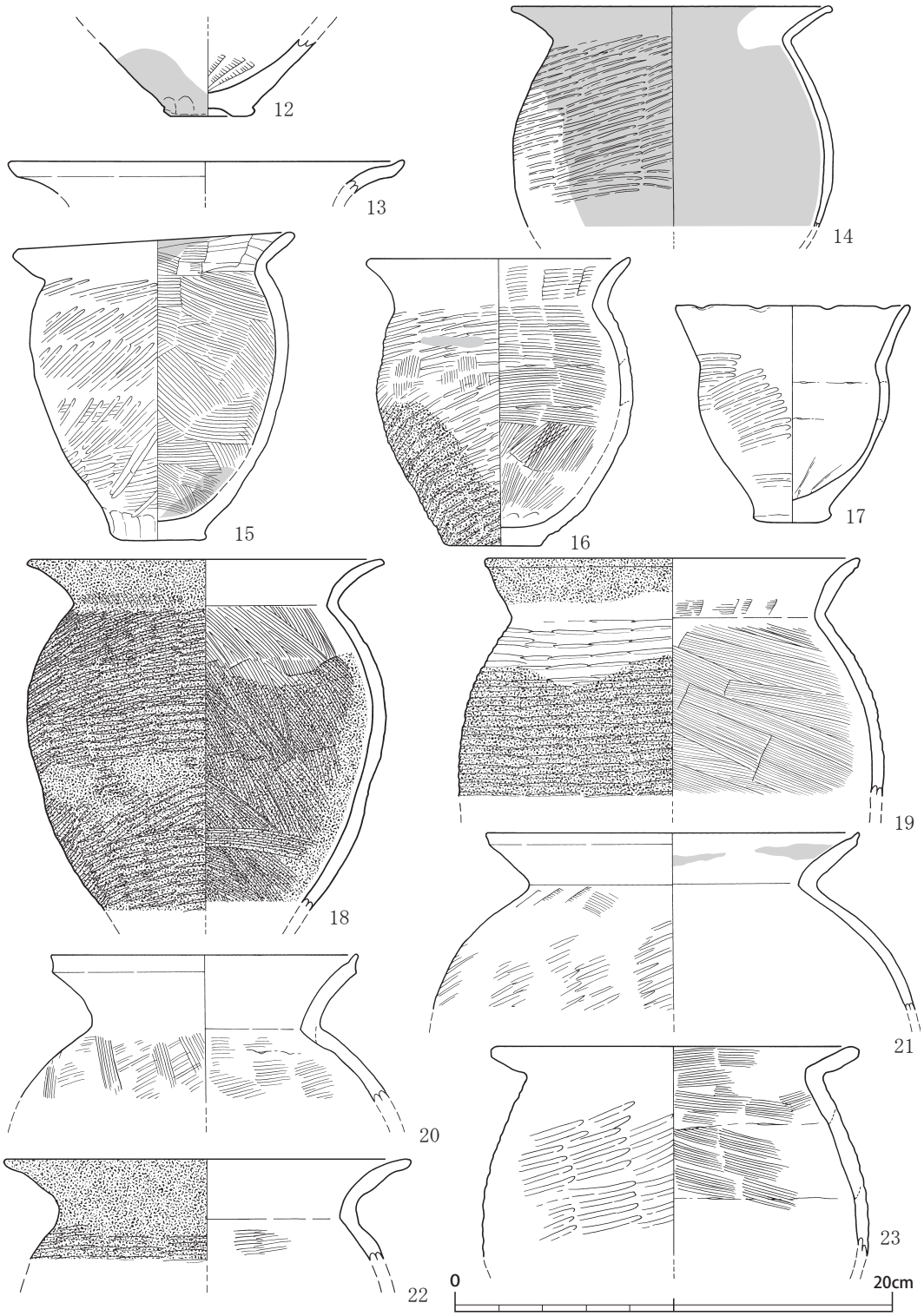


図85　２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（２）（S.＝1/3）

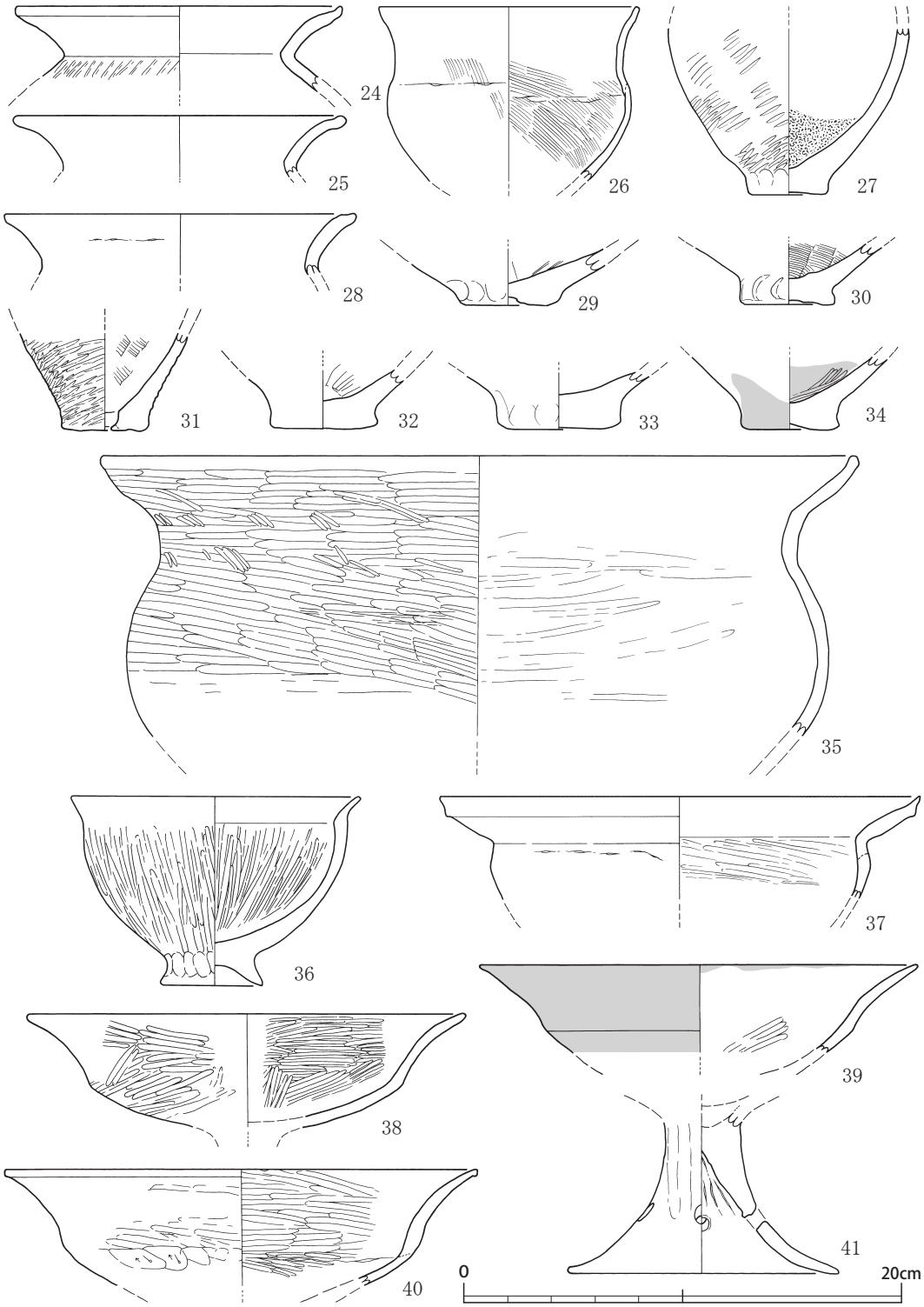


図 86　２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（３）（S.＝1/3）

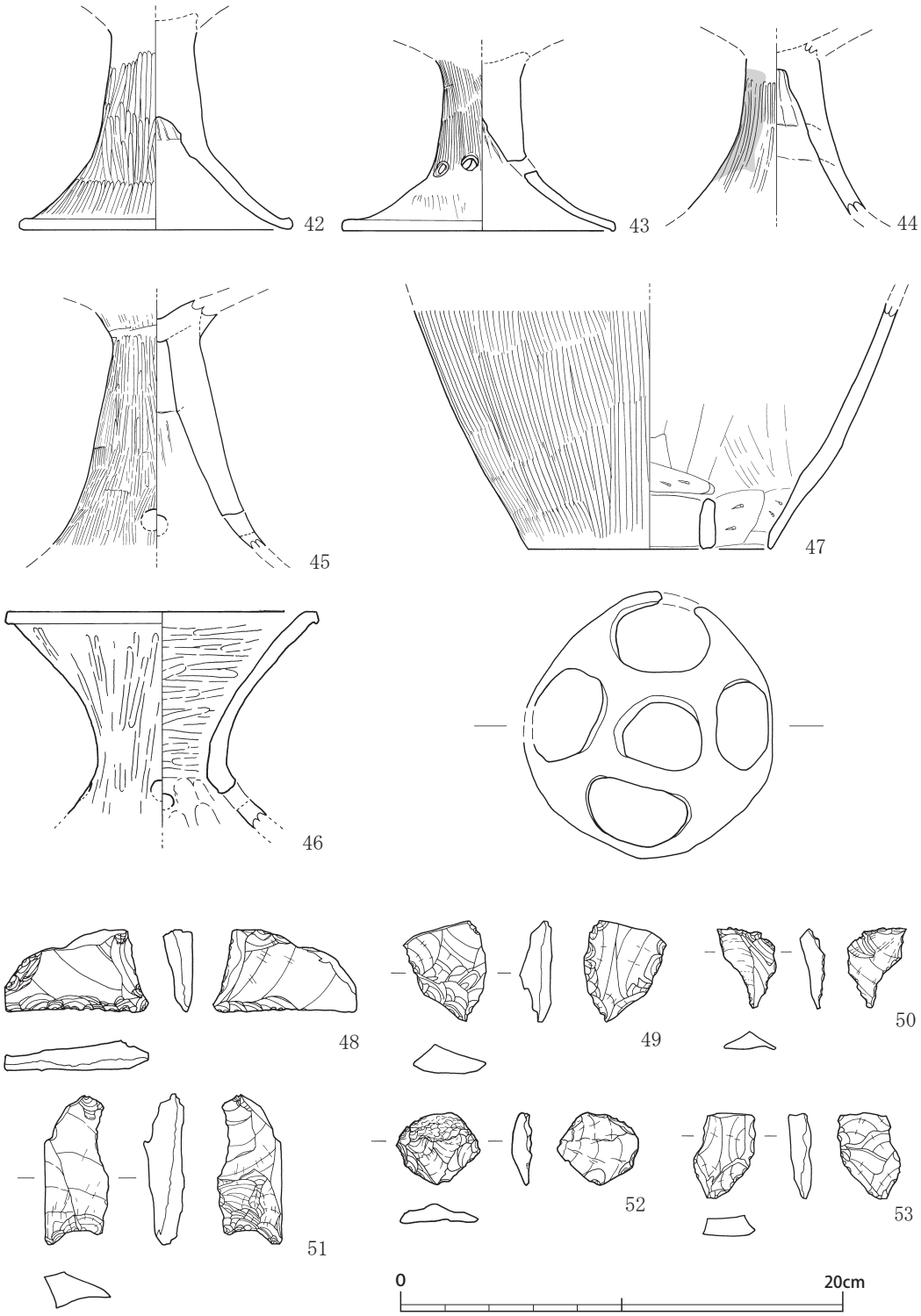


図 87　２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（４）（S.＝1/3）

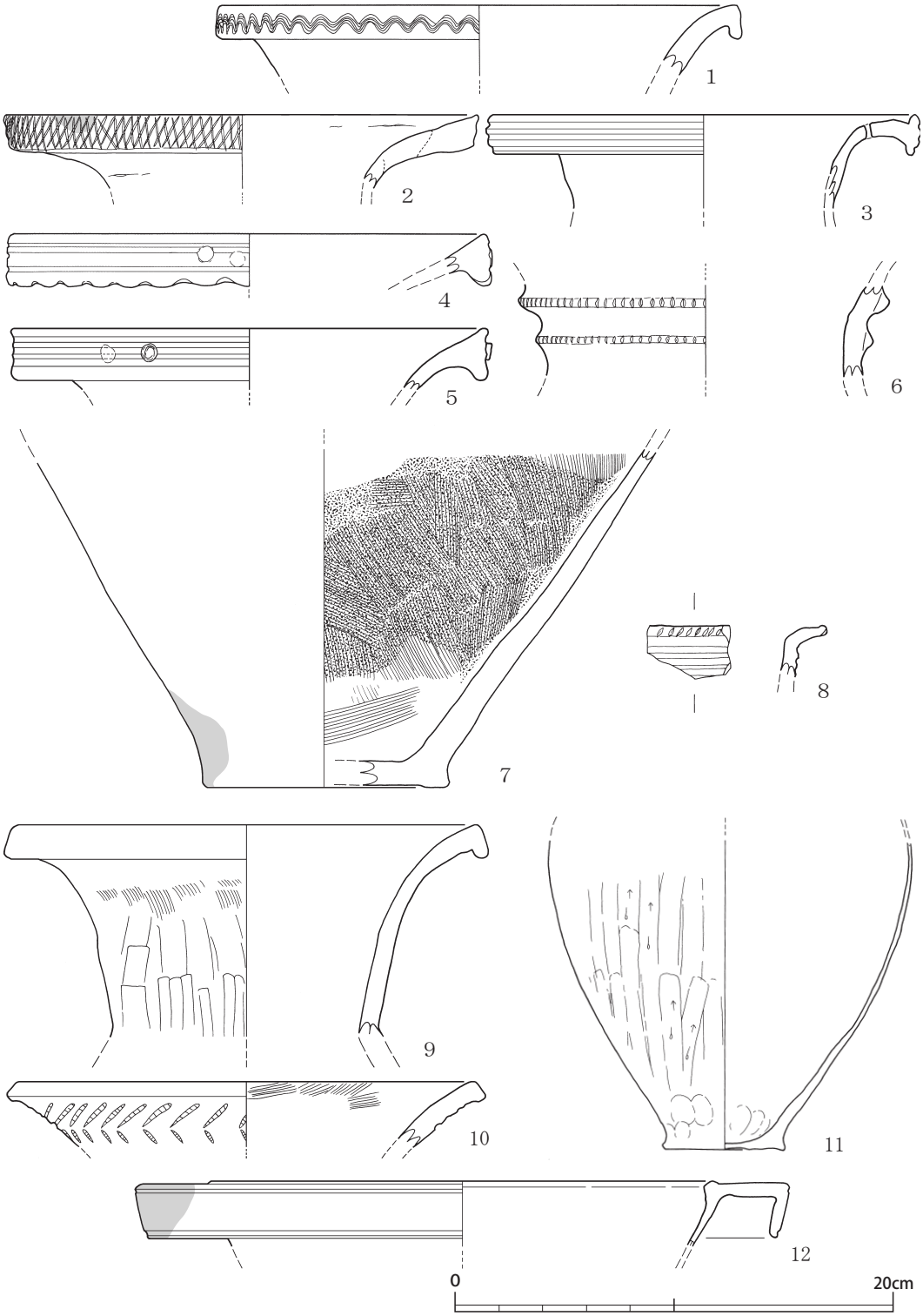


図 88　２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（１）（S.＝1/3）

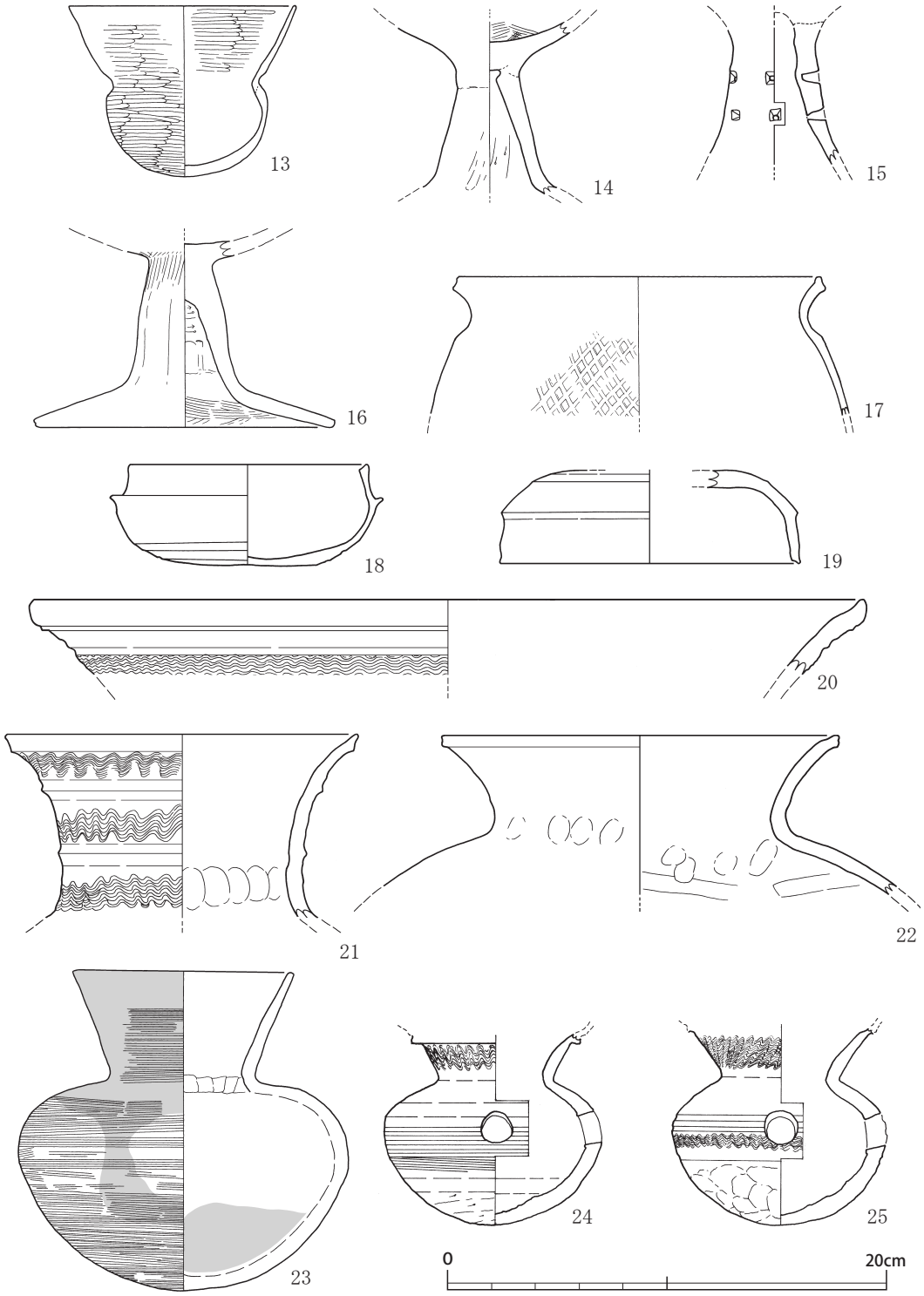


図 89　２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（２）（S.＝1/3）

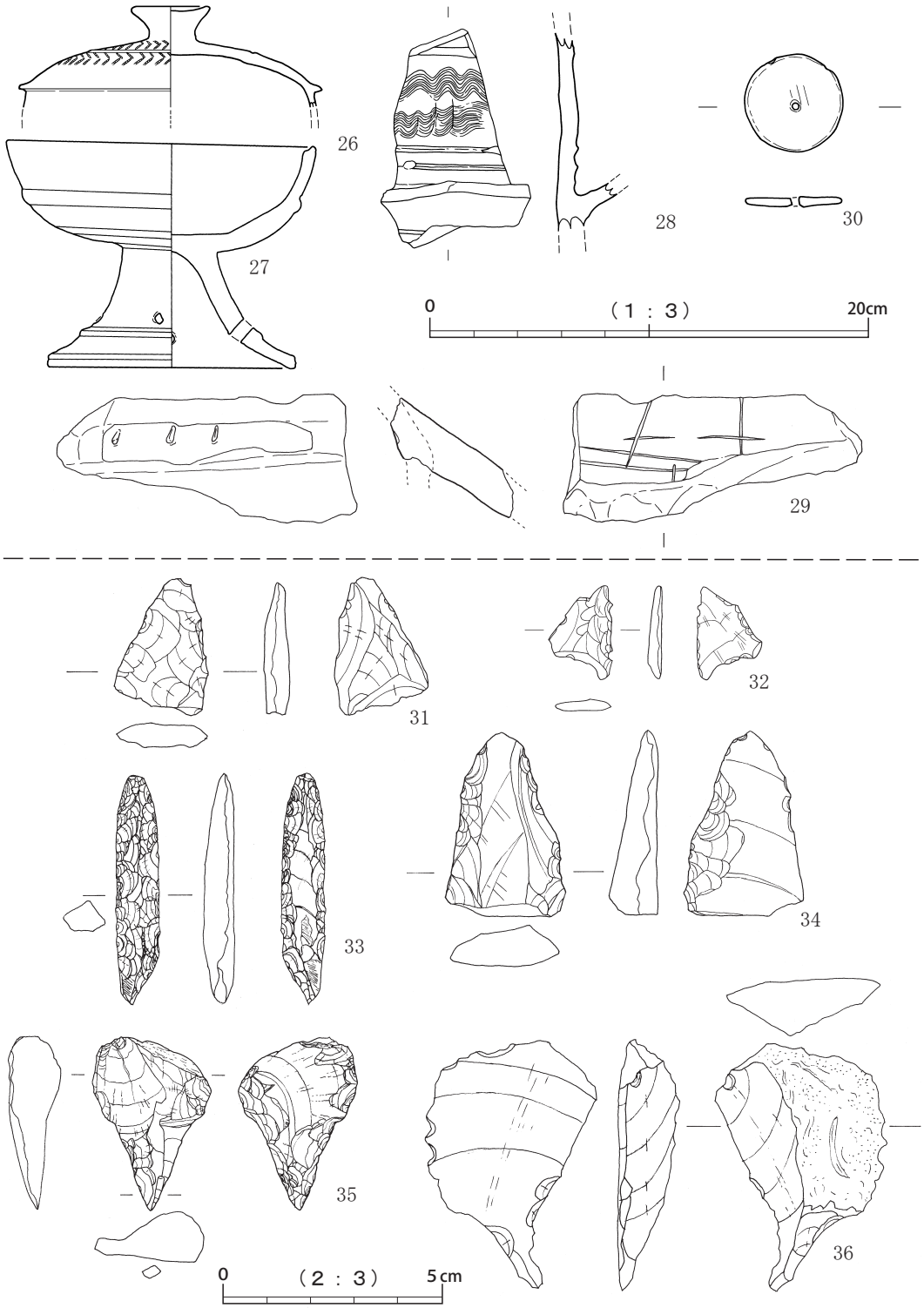


図 90　２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（３）（S.＝1/3・2/3）

図 91　２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（４）（S.＝1/3）

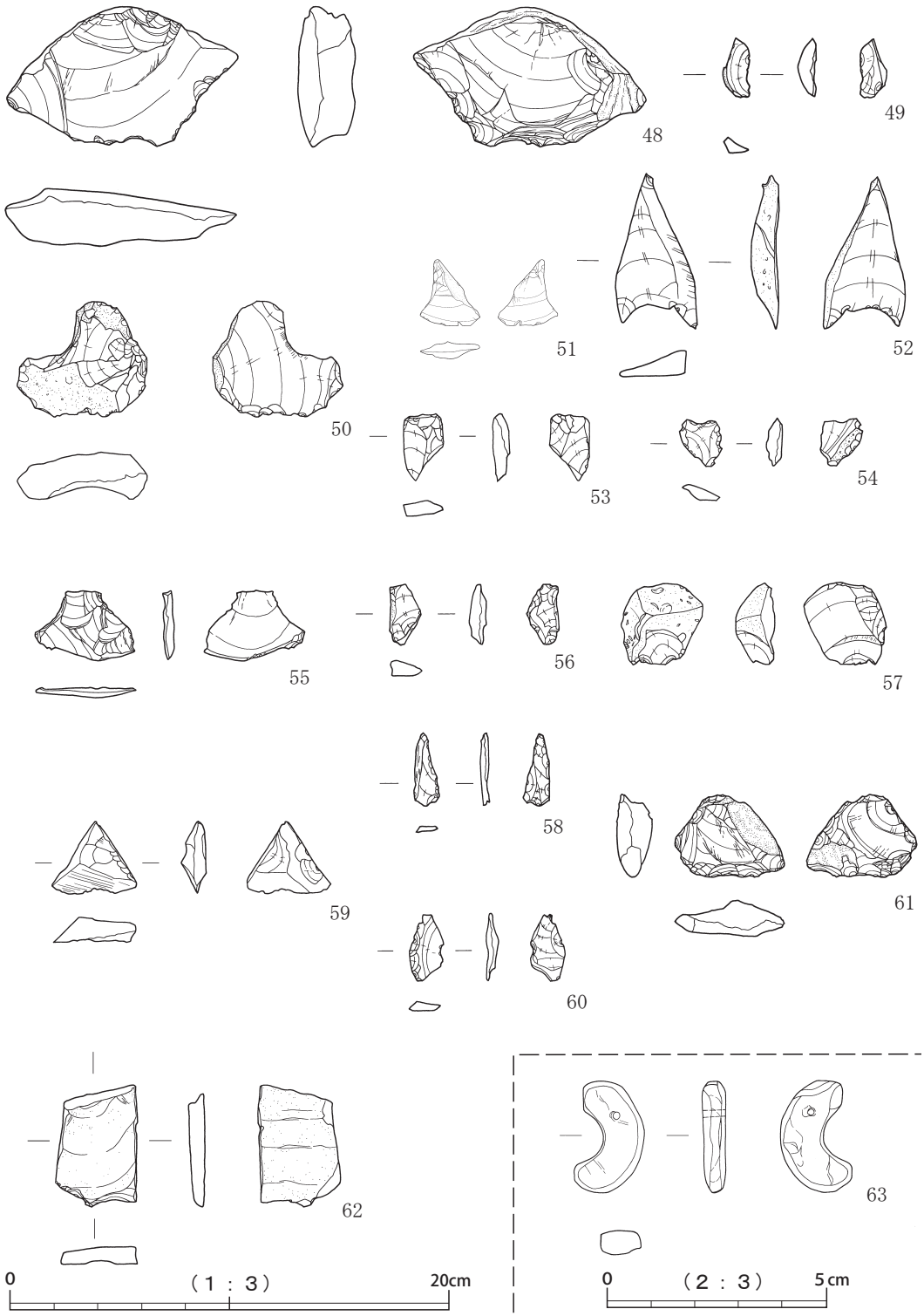


図 92　２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（５）（S.＝1/3・2/3）

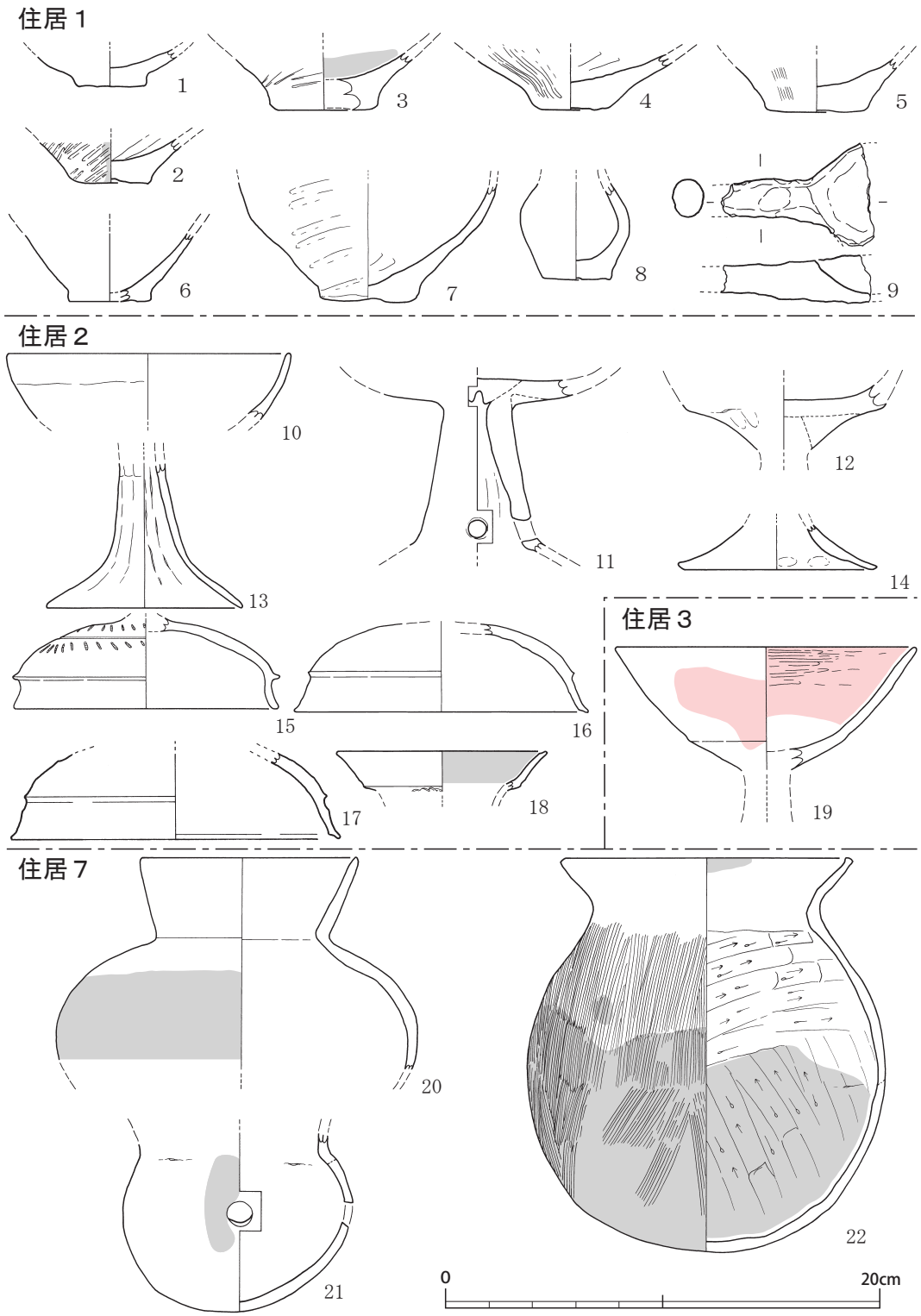


図 93　２区　住居　出土遺物（１）（S．=1/3）

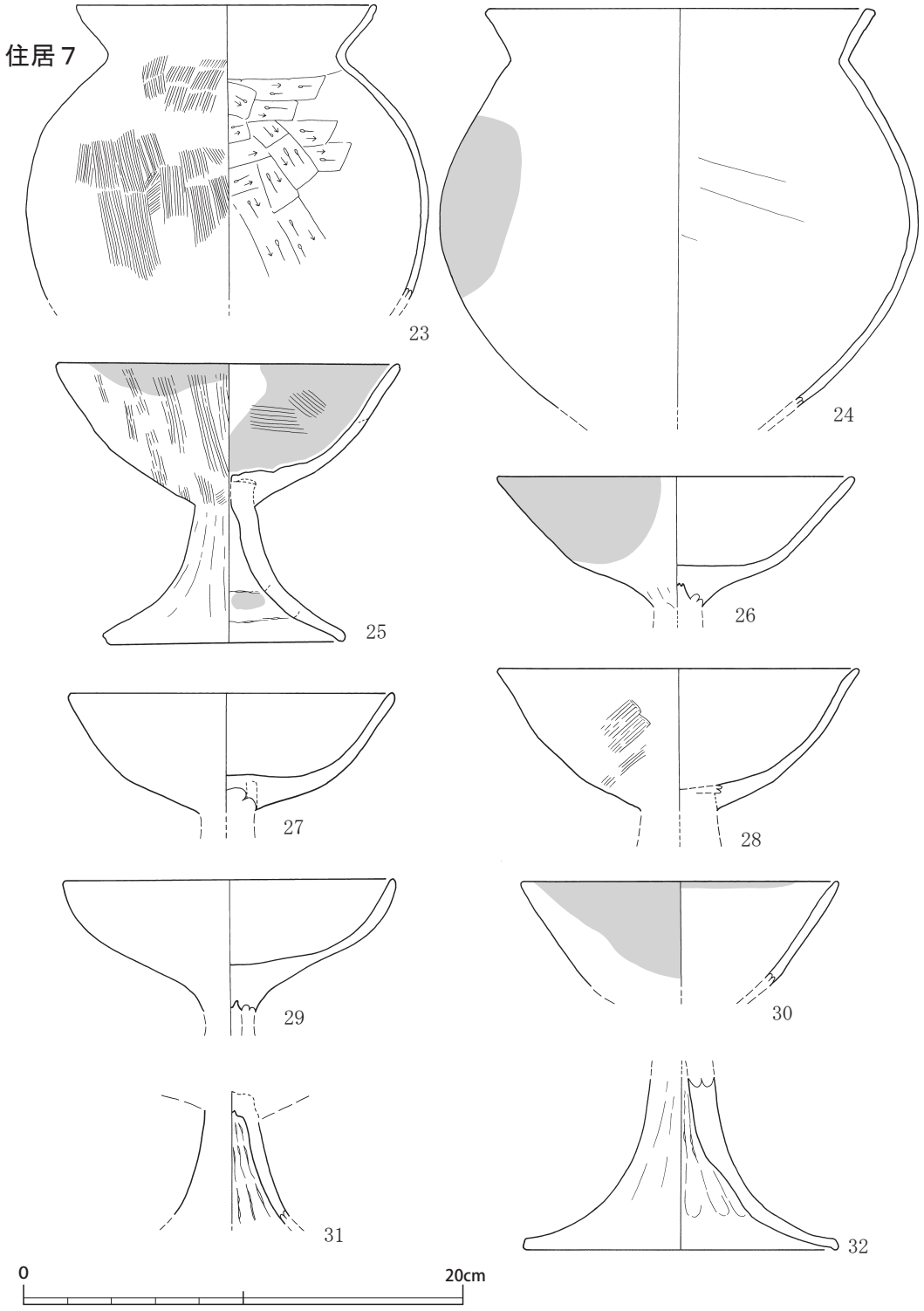


図 94　２区　住居　出土遺物（２）（S.＝1/3）

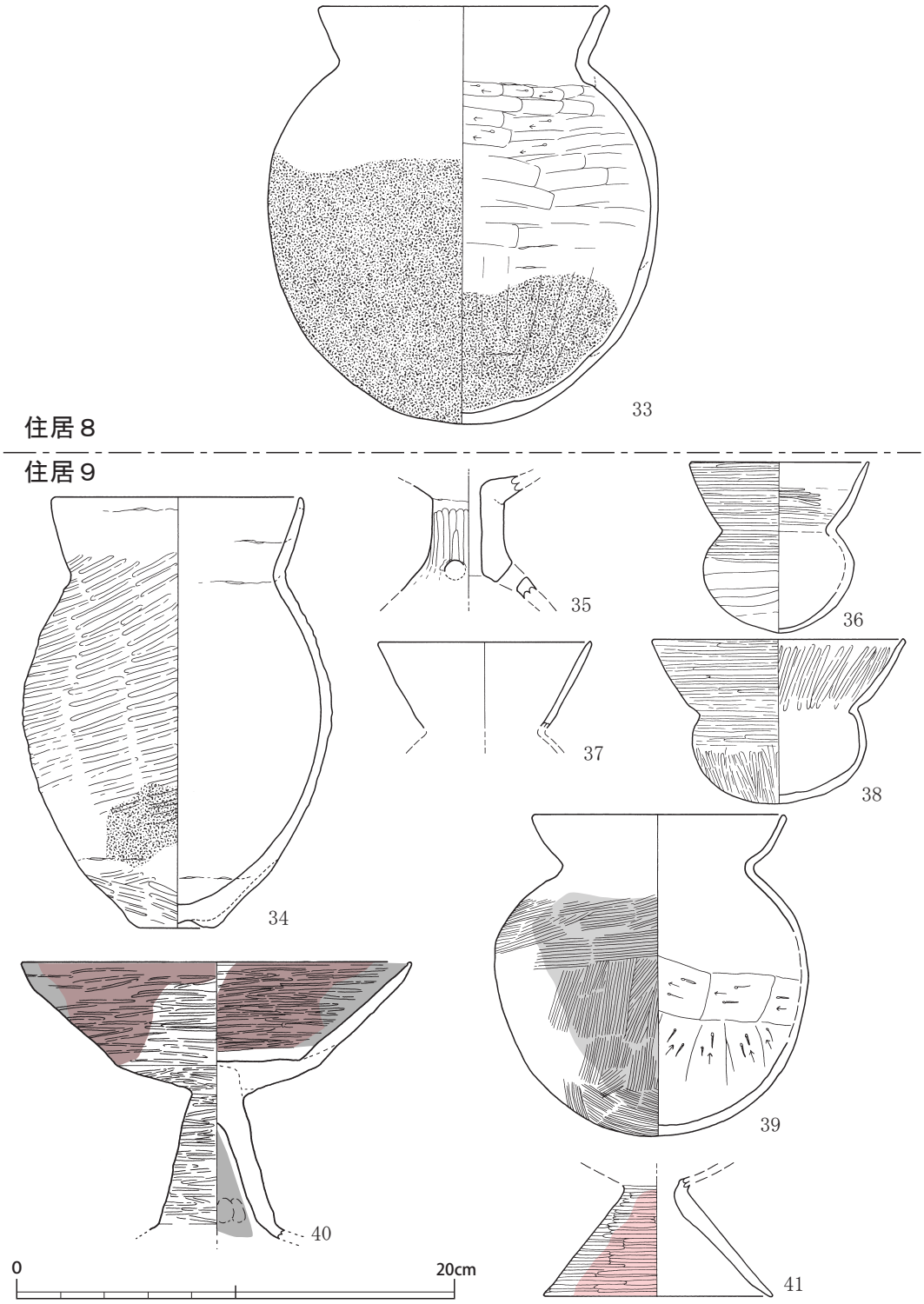


図 95　２区　住居　出土遺物（３）（S.＝1/3）

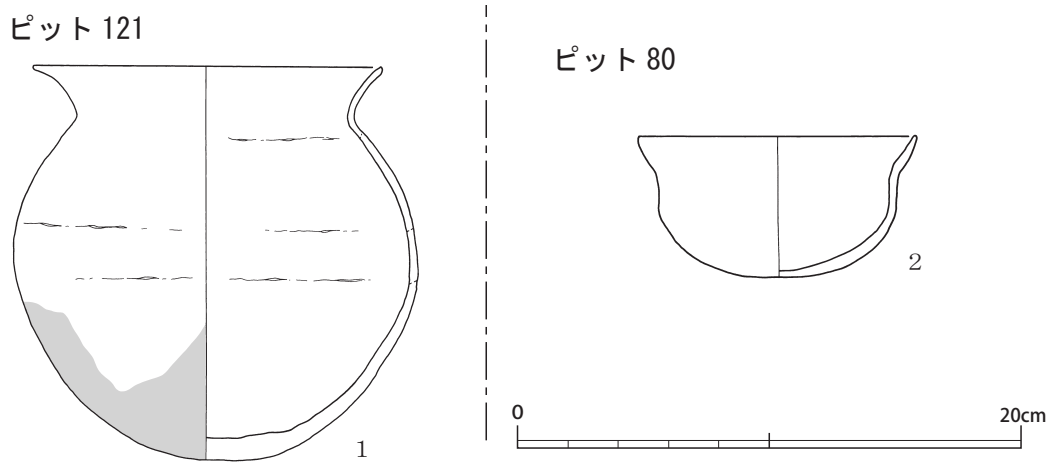


図 96　２区　ピット　出土遺物　（S.＝1/3）

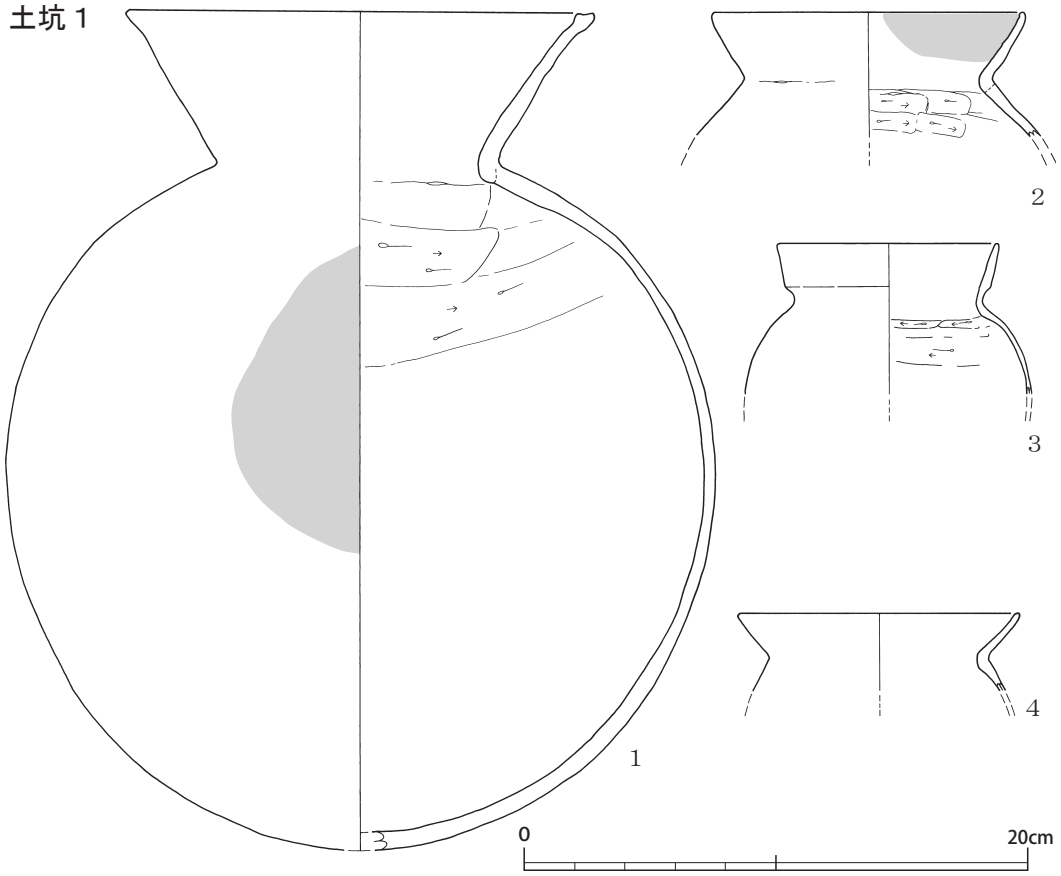


図 97　２区　土坑　出土遺物（1）（S.＝1/3）

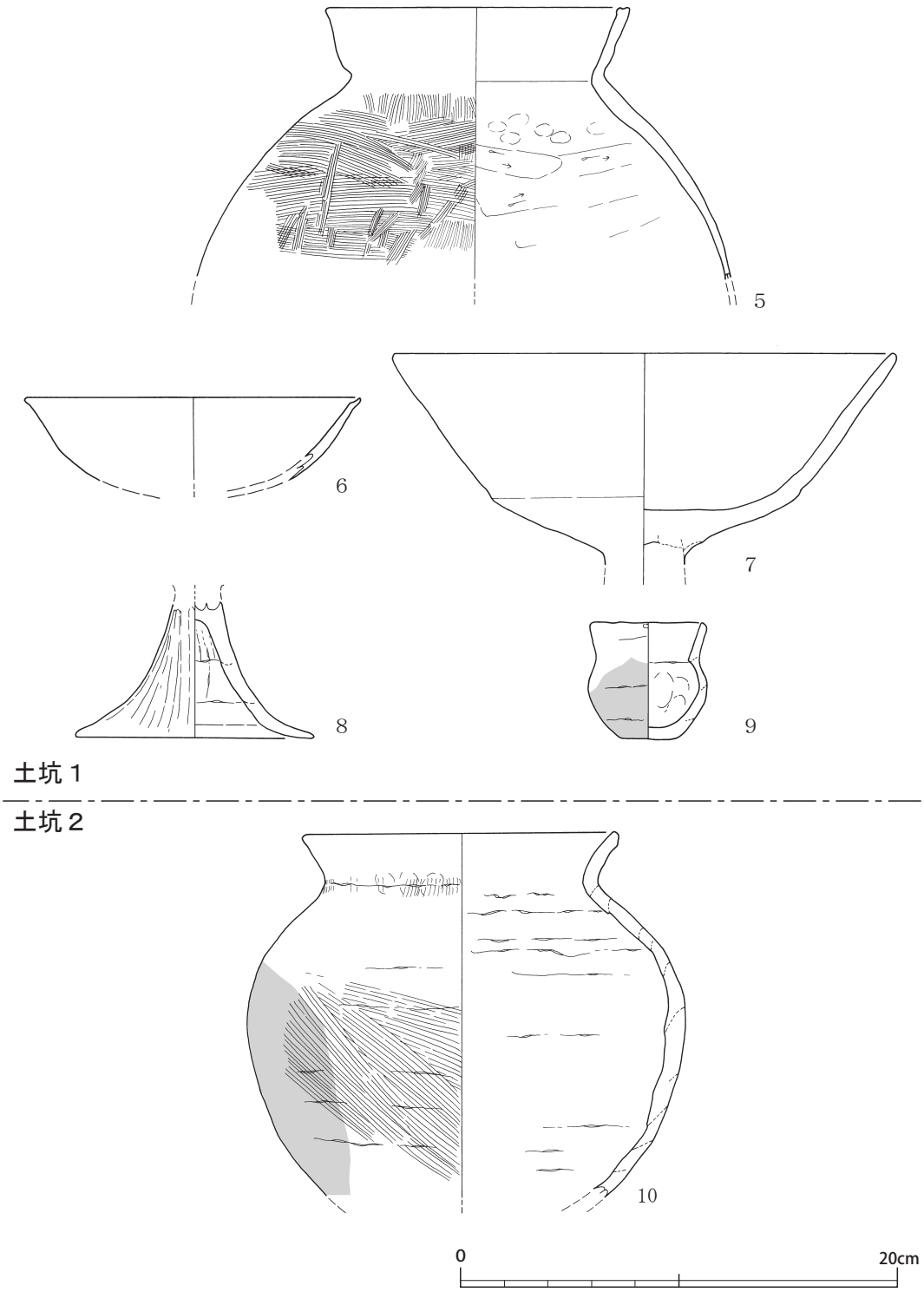


図 98　２区　土坑　出土遺物（２）（S.＝1/3）

傾する口縁部が続き、接合部はわずかに稜を持つ。口縁端部は丸く収める。杯部と脚台部の接合には円板充填法が用いられる。内外面はナデにより仕上げられる。

（98 － 8）は屈曲を持たずに緩やかに広がる脚台部である。端部はナデにより丸く収まる。内面はナデ、シボリメが残り、外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。

（98 － 9）は小形粗製壺である。平底の底部からやや肩の張る体部、緩やかに外傾する口縁部が続く。口縁端部はナデにより丸く収められる。体部内面には指頭圧痕が残る。

（98 － 10）は土坑２から出土した土師器壺の口縁部から体部である。肩の張る体部に短く外反する口縁部が続く。接合部の屈曲は鈍い。口縁端部は丸く収まる。体部内面をナデ、外面はハケのちナデにより仕上げられる。器面には粘土紐接合痕が複数残り、粗いつくりである。体部外面に黒斑が残る。古墳時代中期に属する。

第２節　３－北区

１．遺構（図４・図５・図 99・図 100）

図４に示したように、３区の北東端に東西約 21 m、南北約 26 mの調査区を設定し、３－北区とした。対象面積は 540㎡である。当該地は、図５に見えるように、東西方向の谷地形に当たっている。第 12 － 1 次調査１トレンチでは、その谷埋土から残存状況の良好な遺物が多数出土した。

図 99 に見える調査区の北東隅部および南端部は谷地形の岸に当たる部分で、ここでは攪乱土および盛土の直下で地山を検出した。谷埋土はこの地山に挟まれる中央部で確認したものである。谷地形の上端の形状は、北岸は北西－南東方向に延び、南岸は南西－北東方向に延びている。つまり、この部分の谷の平面形状は東が狭く、西が広い「ハ」字形をしている。今次調査地全体の地形は、図５に示しているように、当調査区の西側に南北方向の大きな谷地形が存在しているので、この地点は、南北方向の谷地形との合流点付近に当たるためこのような形状をするものであろう。

なお、この谷地形の埋土を除去していくと、後述するように、多くの遺物のほか柵とみられる遺構（以下、柵状遺構）も部分的にではあるが、検出された。しかしながら、地形自体は人工的なものではなく自然地形である。柵状遺構が検出された深さは現地表面下 2.7 mの地点で、この時点でそれ以上の掘削は危険作業になると判断し、掘削を止めた。したがって、この深さまでの遺物の採取および遺構の検出に努めたが、この谷地形はすべての埋土を除去したものではない。

柵状遺構は、図 99 に示したように、検出した谷地形のほぼ中央部に位置し、想定する谷筋の方向とおおむね平行する方向に延びている。その高さは、検出した谷地形の最深部であるが、谷地形の底ではない。谷地形は上流からの堆積土で徐々に埋まっていったと想定できるが、その過程で何度か谷底が形成され、そのたびに必要に応じてこのような施設が造られたものとみられる。

柵状遺構の細部の状況は、図 100 に示した。横木として、径３～５cm 程度、長さ 200cm 程度までの半裁材もしくは板材が少なくとも３本残存していた。これを固定するための杭は、径３～

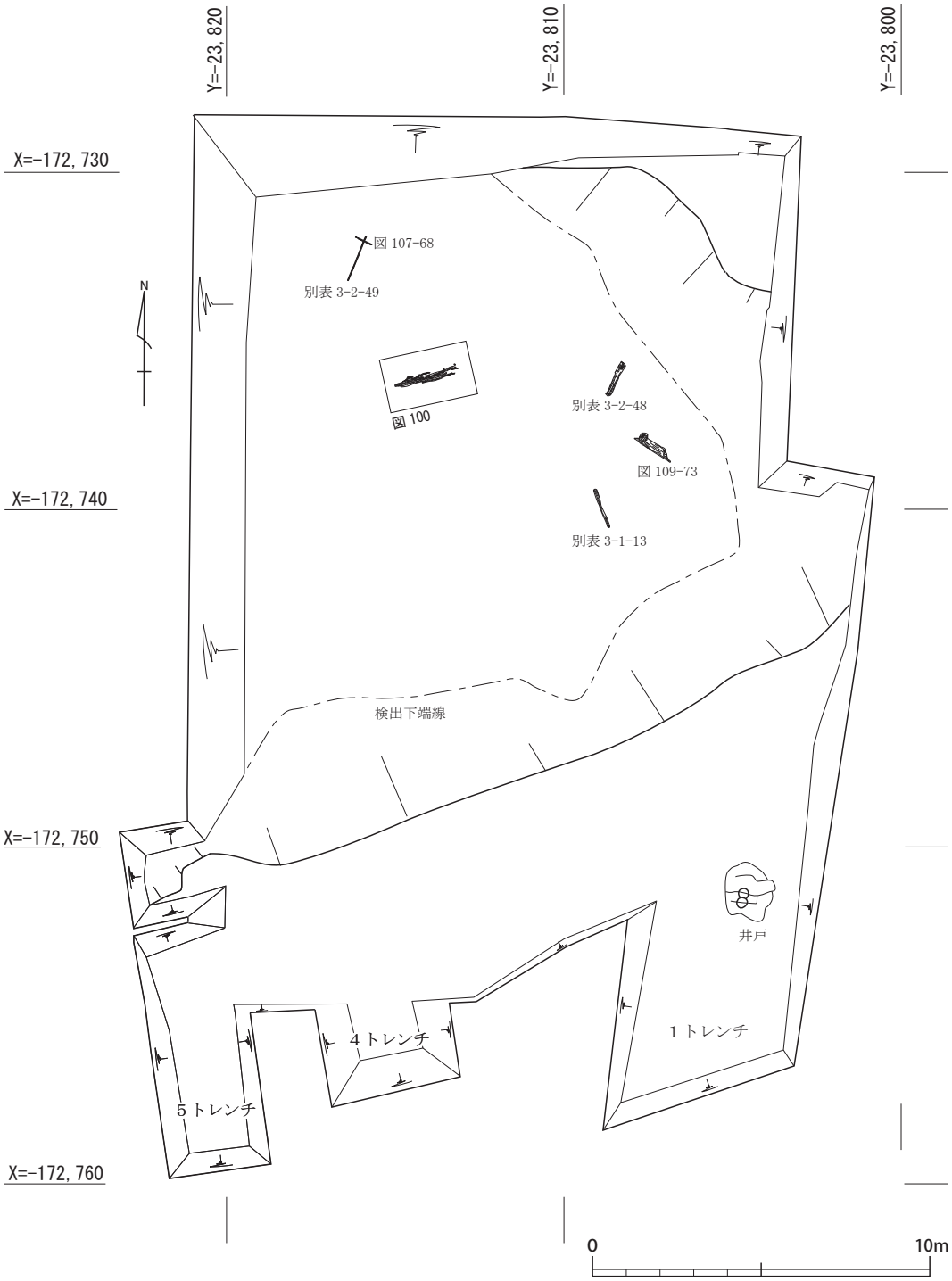


図 99　3－北区　全体図　（S.＝1/200）

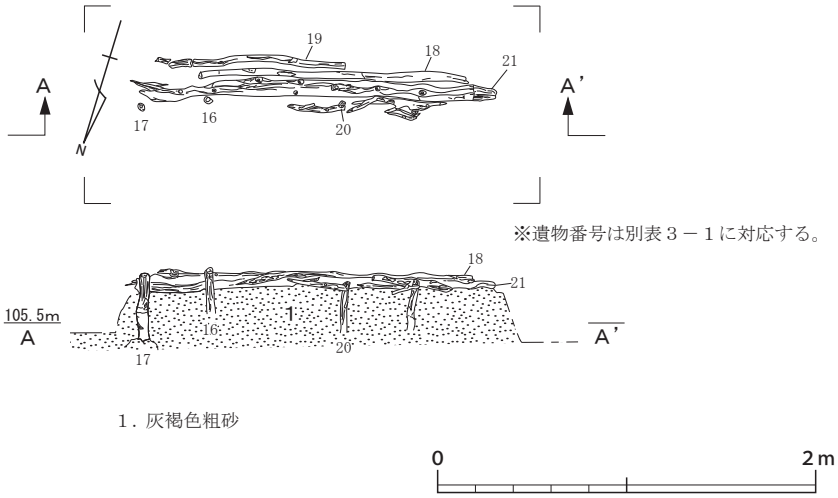


図 100　３－北区　柵状遺構　平面・立面図　（S.＝1/40）

5cm 程度までのものが 4 本検出された。谷の埋没過程の中途で形成されたこのような施設であるが、おそらく全体の極一部分しか残っていないという状況の悪さや、谷地形の谷筋に対しておおむね平行して延びているという設置のあり方から、その機能を含めて詳細を知ることは困難であった。谷の埋没過程で一旦この部分に斜面法面が形成されていたとすれば、今、柵状遺構と呼んでいるこの遺構が、護岸施設であった可能性も考えられよう。また、その形成時期については、谷埋土出土遺物が、後述するように、弥生時代から古墳時代にかけての時期幅があることから、同様の幅の中にあって特定することが難しい。

谷埋土から出土した遺物は、その上位からは主に古墳時代中期の須恵器や土師器が出土した。また、これらの土器と近い位置で、木製品が多数出土した。その多くは、柱材や枘穴があいている板材などの建築部材である。そのほかにも刀形木製品（107 － 68）や、両端に軸状の突起がある木製品や底部に台が付いている槽（109 － 73）、などがあった。下層では弥生時代後期の長頸壺（101 － 7）や甕（103 － 21）などがほぼ完形に近い状態で出土した。また谷埋土中からは、特異な遺物として車輪石（106 － 64）や家形埴輪（105 － 59）の破片も出土した。当該調査地に南接する巨勢山丘陵上には巨勢山古墳群が展開しており、そのような墓域からの流入土が谷地形に流れ込んだ可能性などが考えられよう。

２．遺物（図 101 ～ 109）

３－北区谷地形から出土した土器・土製品・石器・石製品・木器・木製品のうち図化可能であったものを図 101 ～ 109 に掲げた。これらの形態・大きさをはじめとする詳細は、土器・土製品に

ついては別表１に、石器・石製品については別表２に、木器・木製品については別表３にそれぞれ記したので参照されたい。

（101 － 1 ～ 102 － 13）は壺である。（101 － 1 ～ 3）は庄内式土器であり、庄内１～２式に、（101 － 4 ～ 102 － 11・13）は弥生土器であり、畿内第Ⅴ様式に属する。

（101 － 1）は長頸壺の口縁部から肩部である。肩部から直立してのびる頸部を持ち、大きく外反して開く口縁部が続く。端部は横方向のナデにより面を持つ。体部内面には指頭圧痕、頸部内面には横方向のハケメが残り、口縁部は内外面ともナデにより仕上げられる。頸部外面には縦方向のハケメが残る。

（101―２・３）は二重口縁壺である。（101 － 2）は球形を呈する体部でその肩部にあたる。外面はヘラミガキ調整の後、肩部に直線文１条、波状文が２条施される。内面はハケにより仕上げられる。指頭圧痕が残る。

（101 － 3）は頸部である。粘土紐貼付により突帯をつくりだし、上から刻目を施す。内外面ともナデにより仕上げる。

（101 － 4）は口縁部である。口縁端部を上下に拡張し面を持たせ、その下半に斜格子文を巡らせる。内面はナデにより仕上げる。

（101 － 5）は注口部を持つ長頸壺である。ドーナツ状を呈する底部から扁球状の体部が続き、頸部はやや内湾気味に立ち上がる。内面はナデ、底部内面にはクモの巣状のハケメが残り、外面全体に縦方向のヘラミガキが施される。

（101 － 7）は長頸壺である。平底の底部から屈曲をもって開く球形の体部を持つ。外反しながら立ち上がる頸部との接合部の屈曲はなだらかである。口縁端部は丸く収められる。内面は下半はハケ、上半はナデにより仕上げられる。外面全体はハケのちナデが施され、肩部にヘラ工具による縦方向の線刻（10 本）、底部に焼成後穿孔が２箇所みられる。内面全体に黒斑が残る。

（101 － 6・8、102 － 9・11・13）は壺である。

（101 － 6）は肩の張る扁球形の体部である。底部内面はヘラミガキ、体部内面はハケ、頸部内面にはヘラミガキが残る。外面全体は縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。被熱痕があり、器壁には剝離が多くみられる。底部から体部外面には煤が付着する。

（101 － 8）は頸部から体部である。頸部は短く、そのまま外反する口縁部に続く。底部から体部内面にはハケが施され、体部外面はハケのちナデ、頸部から口縁部は縦方向のち横方向のハケにより仕上げられる。外面には底部から体部上半、口縁部に煤が付着している。

（102 － 9）は口縁部から肩部である。直立気味に立ち上がる頸部と大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部はナデにより丸く収まる。体部内面はハケのちナデ、体部外面は横方向のタタキ、頸部は縦方向のハケにより仕上げられる。

（102 － 11）は輪台法によるドーナツ状の底部から屈曲をもって開く球形の体部を持つ。やや

外反しながら立ち上がる短い頸部と、大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は丸く収められる。体部内面はハケ、頸部から口縁部はナデにより仕上げられる。外面は底部から体部はタタキ、体部上半から頸部にかけてタタキのちハケが施される。竹管文が肩部に２箇所みられる。底部から体部下半に黒斑が残る。

（102 － 13）は口縁部から頸部である。直立してのびる頸部に外反してひらく口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより面を持つ。口縁部内外面はヘラミガキにより仕上げられる。頸部内面に指頭圧痕がのこる。

（102 － 10）は二重口縁壺の口縁部から頸部である。外反して開く頸部に大きく開く口縁部がつく。口縁端部は強い横ナデにより面を持つ。内面は全体にナデ、外面は頸部に縦方向のハケのちナデにより仕上げられる。

（102 － 12）は大形二重口縁を持つ、外来系の壺の口縁部から頸部である。外反する頸部の上面に内傾する口縁部が接合する。頸部と口縁部の境に突帯を巡らせ、ナデにより面を持たせる。口縁端部はわずかに外反し、ナデにより丸く収められる。内面はハケのちナデ、外面全体はハケにより仕上げられる。讃岐・阿波地方の影響を受けたものである。端部が外反することから庄内１～２式に属する。

（102 － 14 ～ 103 － 25）は甕である。すべて庄内式期に属する弥生系甕である。庄内１～２式に属する。

（102－14）は口縁部から体部である。体部上半よりやや下がった位置に最大径を持ち、大きく外反する口縁部が接合する。接合部の屈曲は内面においては明瞭であるが、外面では屈曲部に粘土を貼付け撫でつけるために鈍くなる。口縁部は肥厚せず、端部は横方向のナデにより面を持つ。底部から体部内面はハケ、体部外面はタタキにより仕上げられる。肩部にヘラ状工具による縦方向の線刻（長さ１cm）が横方向に連続して施されるが、一巡しない。体部外面及び口縁部に煤が付着する。

（102 － 15）は口縁部から体部である。上半よりやや下がった位置に最大径を持ち、外反する口縁部が接合する。接合部の屈曲は内外面ともに明瞭である。口縁部は肥厚せず、端部は横方向のナデにより面を持つ。体部内面はハケのちナデ、体部外面はタタキにより仕上げられる。体部外面に煤が付着する。

（102 － 16）は小形甕の口縁部から体部である。体部は中程に最大径を持ち、大きく外傾する口縁部が接合する。接合部の屈曲は内外面ともに明瞭で、端部は横方向のナデにより丸く収まる。体部から口縁部内面はナデ、体部外面はタタキのちナデにより仕上げられる。

（102 － 17）は小形甕である。口縁部と体部の接合は不明瞭で、口縁部は不整形である。端部は尖り気味に終わる。体部内面はハケのちナデ、体部外面はタタキのちナデにより仕上げられる。

（102 － 18）は小形甕である。上半に最大径を持つ体部に続き、外傾する口縁部が接合する。接

合部の屈曲は内面においては明瞭であるが、外面では屈曲部をなでつけるために鈍くなる。口縁部は中ほどでやや肥厚し、端部は横方向のナデにより丸く収まる。体部から口縁部内面はナデ、体部外面はタタキのちナデにより仕上げられる。

（102 － 19）は小形甕の口縁部から体部である。肩の張る球形の体部を持ち、大きく外傾する口縁部が接合する。接合部の屈曲は内外面ともに明瞭で、口縁部は中ほどでやや肥厚し、端部は横方向のナデにより面を持つ。体部から口縁部内面はハケのちナデ、体部外面はタタキのちナデにより仕上げられる。

（102 － 20）は小形甕の口縁部から体部である。肩の張る球形の体部を持ち、大きく外傾する口縁部が接合する。接合部の屈曲は内外面ともに明瞭で、口縁部は中ほどでやや肥厚し、端部は横方向のナデにより上面に面を持つ。体部から口縁部内面はナデ、体部外面はタタキにより仕上げられる。体部外面中ほどに煤が付着する。

（103 － 21）は底部に輪台法を用いる。上半に最大径を持つ体部に外反する口縁部が接合する。接合部の屈曲は内外面ともに明瞭で、口縁部は中ほどで肥厚し、端部はナデにより丸く収める。底部から体部内面はハケ、体部外面はタタキにより仕上げられる。体部内外面に煤が付着する。

（103 － 22）は輪台法によるドーナツ状の底部から、上半に最大径を持つ体部が続く。大きく外反する口縁部が接合する。接合部の屈曲は器壁が肥厚するため内外面ともに鈍く、端部は横方向のナデにより外面に面を持つ。底部から体部内面はハケ、体部外面はタタキにより仕上げられる。体部から口縁部外面に煤が付着する。

（103 － 23）は口縁部から体部である。口縁部は外反する。接合部の屈曲は内外面ともに鈍く、端部は横方向のナデにより上方に摘まみあげて面を持たせる。体部から口縁部内面はナデ、体部外面はタタキにより仕上げられる。

（103 － 24）は小形甕である。口縁部上半と底部を欠失する。体部は中程に最大径を持ち、口縁部との接合部の屈曲は内外面ともに鈍い。体部から口縁部内面はナデ、肩部外面はタタキのちナデにより仕上げられる。体部内面に黒斑が残る。

（103 － 25）は口縁部から肩部である。肩の張る体部から大きく外反する口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより丸く収まる。接合部の屈曲は内外面とも鈍い。肩部内面はハケのちナデ、外面全体はナデにより仕上げられる。

（103 － 26）は庄内式土器鉢の口縁部である。大きく外傾して開く口縁部を持ち、端部はナデにより尖り気味に終わる。内面はナデ、外面はハケのちナデにより仕上げられる。器壁が薄く、胎土が精良なことから庄内１～２式に属する。

（103 － 27）は弥生土器甕の口縁部である。外傾して開く口縁部の、端部には刻目が施される。内外面はナデにより仕上げられる。畿内第Ⅴ様式に属する。

（103 － 28）は弥生土器甕の底部から体部である。輪台法によりドーナツ状を呈する底部はや

や外側に張り出し、屈曲をもって立ち上がる体部を持つ。内面はハケ、外面はタタキのちナデにより仕上げられる。畿内第Ⅴ様式に属する。

（103－29） は弥生土器の底部から体部である。上げ底状を呈する底部から緩やかに立ち上がる体部が続く。内外面全体はナデにより仕上げられる。外面に黒斑が残る。畿内第Ⅳ～Ⅴ様式に属する。

（103 － 30）は弥生土器壺の底部から体部である。上げ底状を呈する底部から大きく開く体部が続く。内外面全体はナデにより仕上げられる。外面に黒斑が残る。畿内第Ⅳ～Ⅴ様式に属する。

（103 － 31）は弥生土器鉢である。輪台法によりドーナツ状を呈する底部から屈曲をもって立ち上がる体部を持つ。内面はハケ、外面はナデにより仕上げられる。底部外面に指頭圧痕が残る。畿内第Ⅴ様式に属する。

（103 － 32）は庄内式土器有孔甕もしくは鉢の底部から体部である。平底の底部に焼成前穿孔が施される。内面はナデ、外面はタタキにより仕上げられる。庄内１～２式に属する。

（104 － 34）は二重口縁を呈する庄内式土器壺もしくは器台の口縁部である。大きく開く口縁部は屈曲を持ち、外面には竹管文が３箇所施される。内外面はナデにより仕上げられる。庄内式期に属する。

（104 － 33・35 ～ 39）は高杯である。

（104 － 33）は大形の庄内式土器高杯である。杯部は深皿状を呈し、口縁部は大きく外反する。口縁部と底部の接合部は明確な稜を持ち、口縁端部は丸く収める。外面はナデおよび縦方向のヘラミガキにより、内面は横方向のハケのち縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。小形化が進む以前のものであり、庄内１式に属すると思われる。

（104 － 35）は大形の庄内式土器高杯である。広い水平面を有する底部に外傾して開く口縁部が続き、接合部は明確な稜を持つ。口縁端部は上方に肥厚して突出気味になる。底部と脚台部の接合には接合法が用いられ、屈曲を持たず下方に大きく広がる裾部を持つ。杯部内外面全体はナデ、脚台部内面はケズリ、裾部内面はハケにより仕上げられる。庄内１式に属する。

（104 － 36）は土師器高杯の脚台部である。長い柱状の脚台部は中実で、屈曲をもって開く裾部を持つ。外面はヘラミガキ、内面はケズリのちハケが施される。古墳時代後期前半に属する。

（104 － 37）は弥生土器高杯もしくは鉢の脚台部である。緩やかに開く裾部を持ち、上下２段にわたって穿孔が施される。上段は２孔、下段は３孔が残る。内面はナデ、外面はヘラミガキにより仕上げられる。畿内第Ⅴ様式に属する。

（104 － 38）は土師器高杯の脚台部である。緩やかに開く中空の柱状部に、屈曲をもって開く裾部を接合する。裾部に穿孔が３孔残る。柱状部の外面はヘラミガキ、内面はケズリのちナデにより仕上げられる。古墳時代中期中頃に属する。

（104 － 39）は土師器高杯の脚台部である。長い柱状の脚台部は中実で、緩やかに開く短い裾

部を持つ。外面はヘラミガキ、内面はケズリが施される。古墳時代後期前半に属する。

（104 － 40）は弥生土器蓋である。突出して中央部が凹むつまみ部に屈曲をもって広がる天井部がつながる。内面はケズリのちハケ、外面はナデにより仕上げられる。つまみ部外面には指頭圧痕が残る。外面全体に被熱による赤変がみられる。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

（104 － 41）はミニチュアの弥生土器鉢である。平底の底部から続く体部は外上方にやや広がる。口縁部は内湾する。手捏ねで成形されており内外面とも指頭圧痕が残る。底部から体部外面にかけて黒斑が残る。他出土遺物と時期を同じくすると思われる。

（104 － 42）はミニチュアの弥生土器壺である。上げ底状の底部から体部上半に最大径を持つ体部が続き、口縁部は内傾する。口縁端部は尖り気味に終わる。底部外面・口縁部外面に黒斑が残る。他出土遺物と時期を同じくすると思われる。

（104 － 43 ～ 47・49）は土師器壺である。

（104 － 43）は壺である。外傾して開く口縁部である。口縁端部は丸く収まる。内面はハケのち横方向のナデ、外面は風化のため調整不明瞭である。内面全体に煤が付着する。古墳時代中期中頃に属する。

（104 － 44）は小形丸底壺の底部から体部である。体部は中程よりやや上方に最大径を持つ。内面に付着物（漆？）があるため調整は不明瞭であるが一部ナデが観察できる。外面は風化が激しいが横方向のヘラミガキが体部上半に残る。付着物は口縁部の破断面にもおよび、口縁部が欠失して後にも利用されたと思われる。布留１式に属する。

（104 － 45）は短頸壺の口縁部である。外傾して開く口縁部は上方に横方向のナデによる面を持つ。体部との接合部の屈曲は強いナデにより鈍くなり、口縁部にわずかに稜を持つ。内外面全体をナデにより仕上げる。口縁部外面に黒斑が残る。布留３～４式に属する。

（104 － 46）は短頸壺の口縁部である。口縁部は横方向のナデにより端部を内側に肥厚させ、外面をシャープに仕上げる。体部との接合部の屈曲は強いナデにより鈍くなり、口縁部にわずかに稜をもたらす。内外面全体をナデにより仕上げる。布留３～４式に属する。

（104 － 47）は直口壺の口縁部から体部である。球形の体部から直立気味に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部と体部の接合部の屈曲は鈍い。口縁端部は内側に肥厚させ、外面をシャープに仕上げる。体部内面はケズリ、口縁部内面は横方向のハケ、体部外面は縦方向のハケにより仕上げられる。口縁部外面に黒斑が残る。古墳時代中期中頃に属する。

（104 － 49）は短頸壺の口縁部である。やや内湾する形態で、端部は横方向のナデにより丸く収める。内外面をナデにより仕上げる。古墳時代中期中頃に属する。

（104 － 48・111 － 50・51）は土師器甕である。

（104 － 48）は口縁部から体部である。肩の張る球形の体部から外傾して開く口縁部が続く。接合部の屈曲は外面では明瞭だが内面では鈍い。口縁端部は内側をやや肥厚させ、横方向のナデによ

り上方に面を持つ。内面全体はナデ、体部外面はハケにより仕上げられる。布留３～４式に属する。

（105 － 50）は口縁部から体部である。下膨れの体部にやや外反する口縁部がなだらかに接合する。口縁端部は横方向のナデにより面を持つ。体部内面はケズリのちハケ、外面全体はナデにより仕上げられる。体部内面に黒斑、体部外面および口縁部に煤が付着する。古墳時代後期に属する。

（105 － 51）は口縁部から肩部である。接合部の屈曲は鈍い。口縁端部は横方向のナデにより丸く収まる。内外面はハケのちナデにより仕上げられる。古墳時代中期中頃に属する。

（105 － 52）は土師器高杯の杯部である。水平部を持つ底部から緩やかに立ち上がる口縁部が続く。底部と口縁部の接合は内外面ともに稜を持たず、口縁端部は横方向のナデにより丸く収める。古墳時代中期中頃に属する。

（105 － 53）は小形器台の脚台部である。受部に直接円錐形の脚台部がつくもので、接合部に明瞭な稜を持つ。内面はハケのちナデ、外面は横方向のヘラミガキにより丁寧に仕上げられる。外面全体に赤彩が施される。布留０～１式に属する。

（105 － 54）は小形の土師器鉢である。平らな面を持つ底部から内湾する体部・口縁部が立ち上がる。口縁端部は横方向のナデにより丸く収められる。古墳時代後期に属する。

（105 － 55）は土師器杯である。平らな面を持つ底部から続く体部・口縁部が外上方に大きく開く。口縁端部は横方向のナデによりやや外反する。内面全体はナデ、口縁部外面には横方向のナデが２段にわたって施される。平安時代前期～中期に属する。

（105 － 56 ～ 58）は須恵器である。すべて杯蓋である。

（105 － 56）はやや凹み気味の天井部を持ち、口縁部との間に稜を持つ。口縁部は稜からほぼ真下に垂下し、口縁端部は内側に傾斜して面を持つ。天井部外面のほぼ 1/2 に回転ヘラケズリが施される。ロクロ回転方向は右回りで、外面全体に自然釉がかかる。MT15 型式に属する。

（105 － 57）は平坦気味の天井部を持ち、口縁部との間にわずかに稜を持つ。口縁部は稜からやや開き気味に垂下し、口縁端部は内側に傾斜して面を持つ。天井部外面のほぼ 4/5 に回転ヘラケズリが施され、ロクロ回転方向は右回りである。TK216 型式に属する。

（105 － 58）は丸みをおびた天井部を持つ。天井部と口縁部との間に稜はなく、やや内湾する口縁部は横方向のナデにより尖り気味に終わる。天井部外面全体に回転ヘラケズリが施され、ヘラによる線刻が施される。TK10 型式に属する。

（105 － 59）は家形もしくは囲形埴輪の一部と思われる。高さ 4.5cm、幅 9.4cm が残存している。厚さは 1.8cm である。ハケメが残る面とナデにより仕上げられる面を有する。全体に赤彩が施される。古墳時代前期～中期に属する。

（105 － 60）は瓦器椀である。口縁端部は横方向のナデによりわずかに外反し、口縁端部内面に段を有する「大和型」である。内面には同心円状の暗文風ヘラミガキが施され、外面はナデにより仕上げられるが、指頭圧痕が残る。鎌倉時代（13 世紀末）に属する。

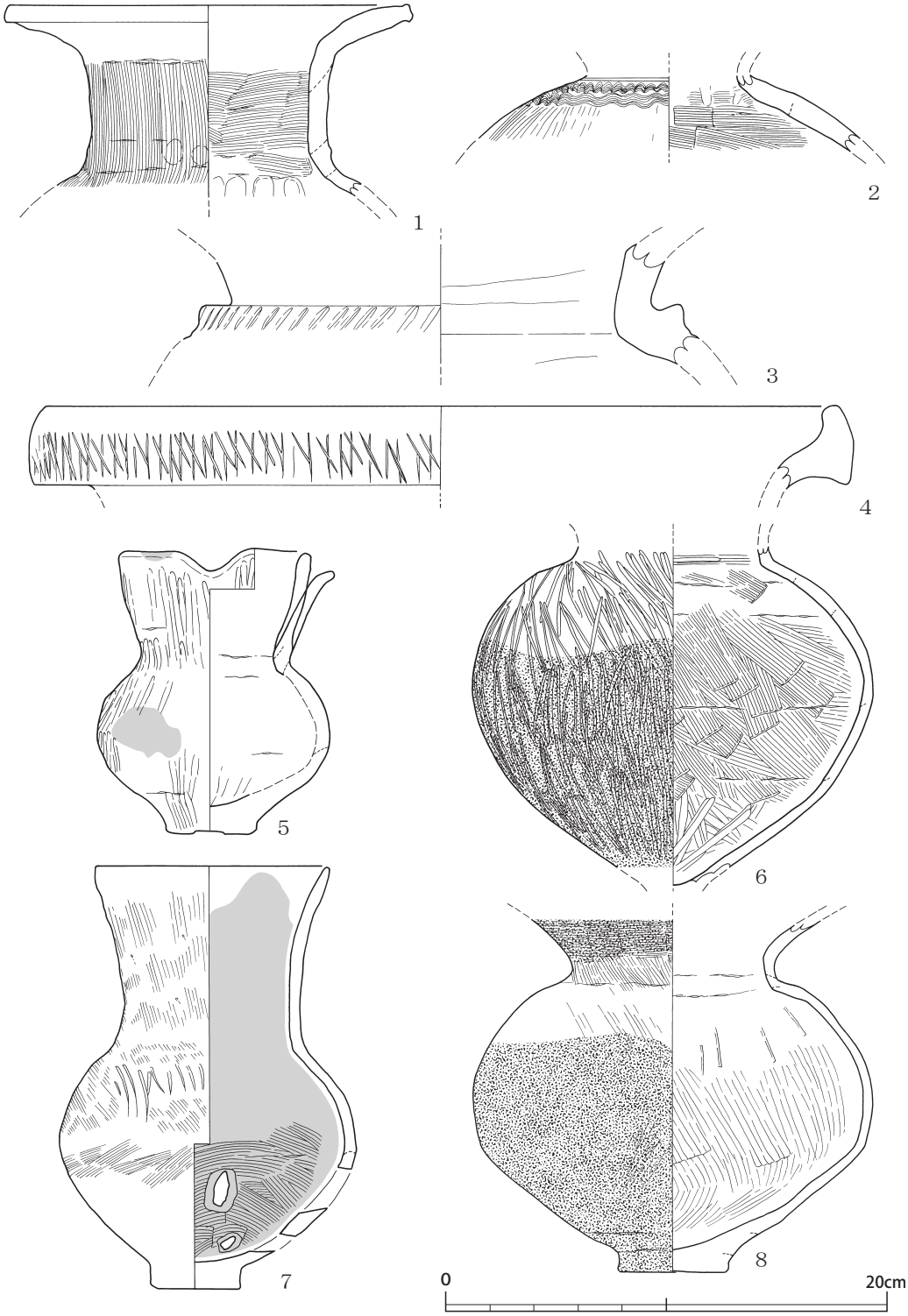


図 101　3－北区　谷地形　出土遺物（1）（S.＝1/3）

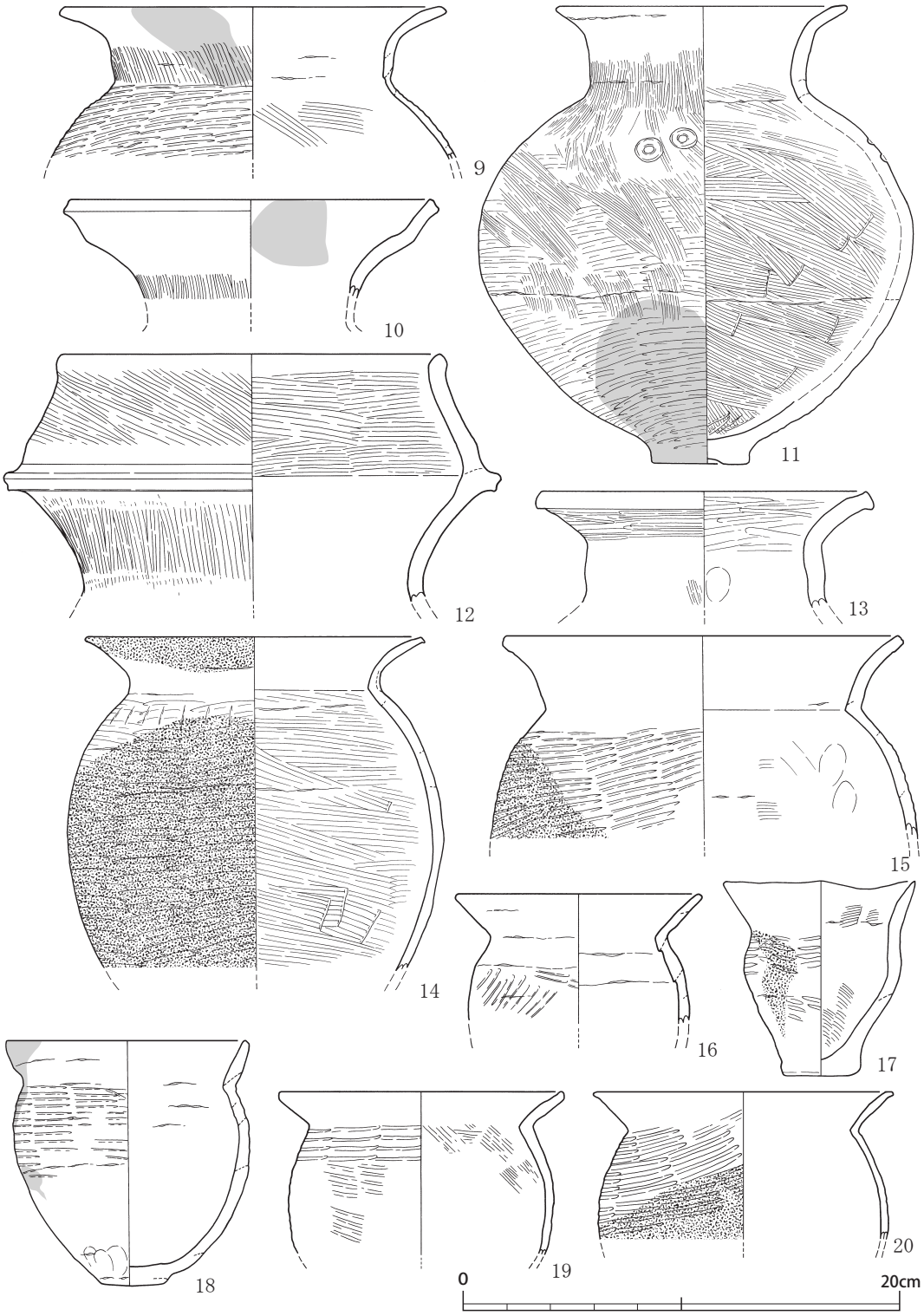


図 102　３－北区　谷地形　出土遺物（２）（S.＝1/3）

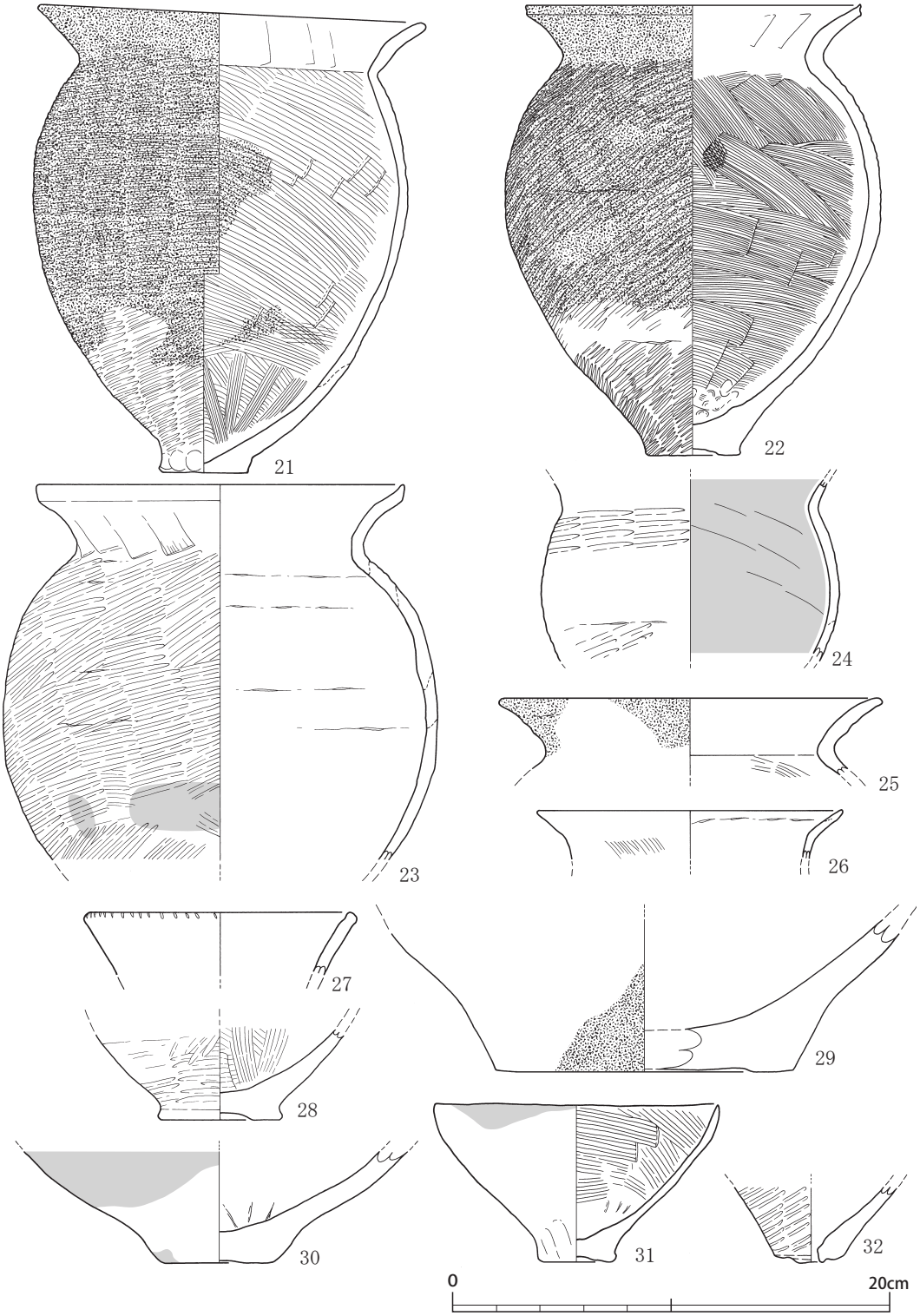


図 103　３－北区　谷地形　出土遺物（３）（S.＝1/3）

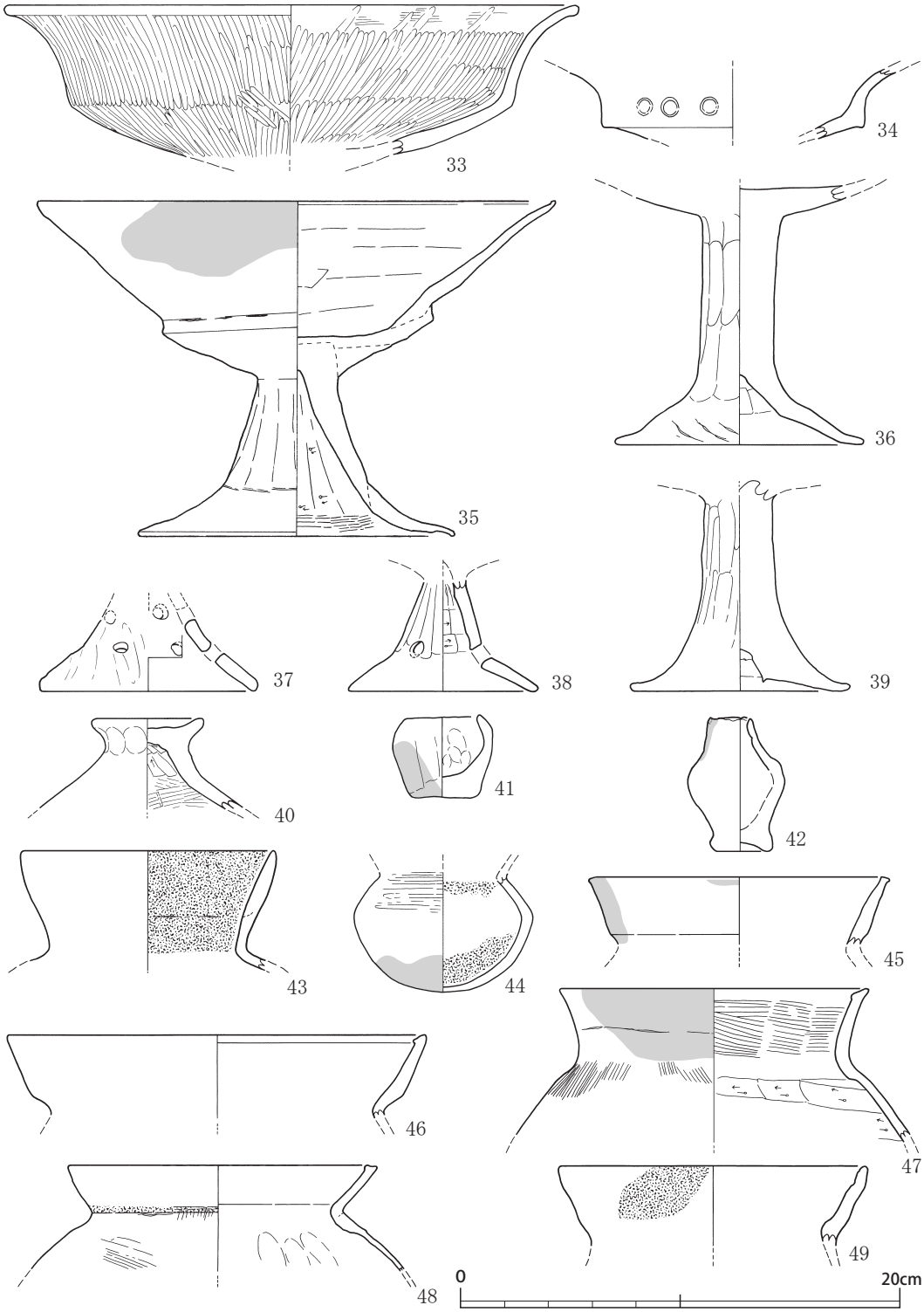


図 104　３－北区　谷地形　出土遺物（４）（S.＝1/3）

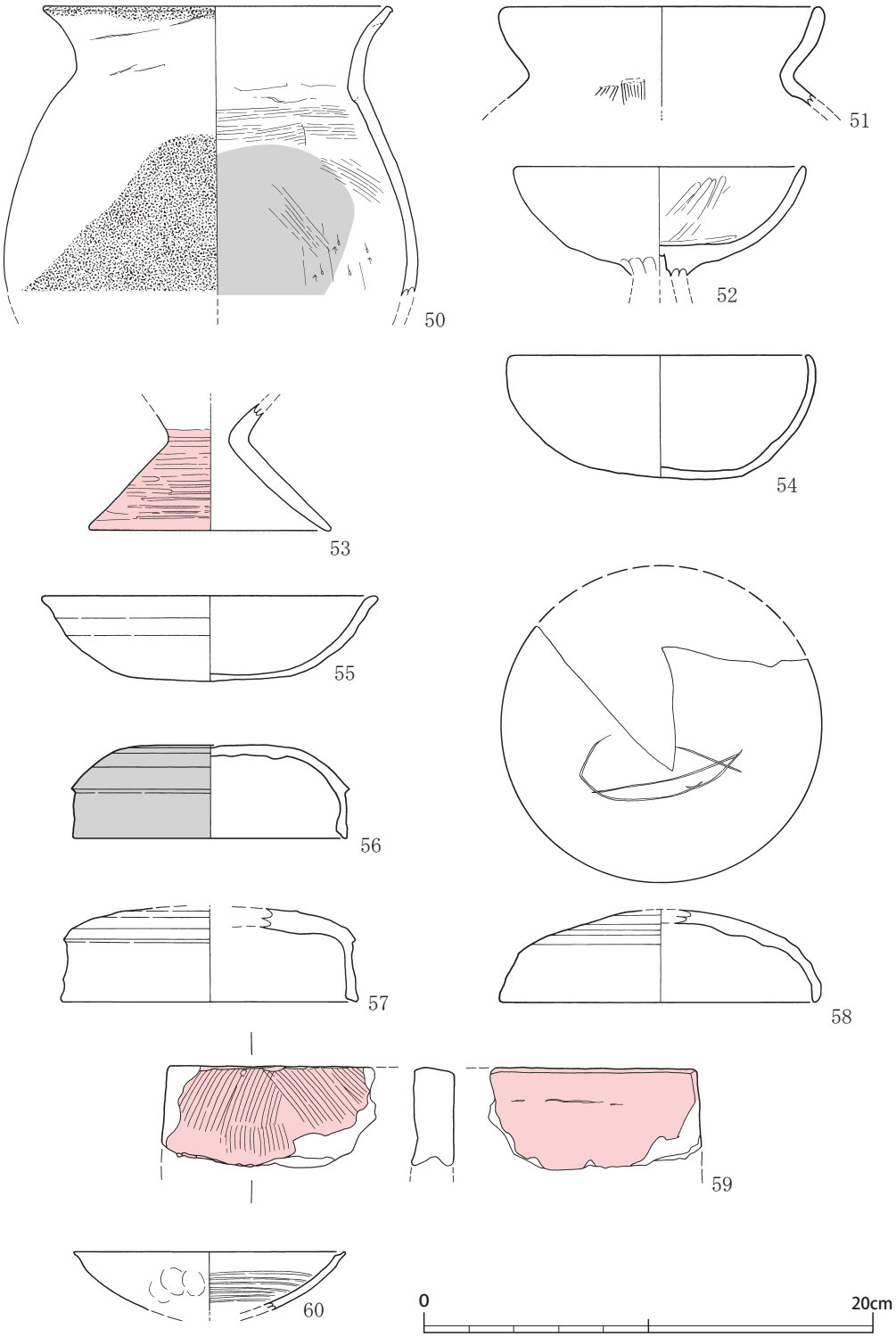


図 105　３－北区　谷地形　出土遺物（５）（Ｓ．＝1/3）

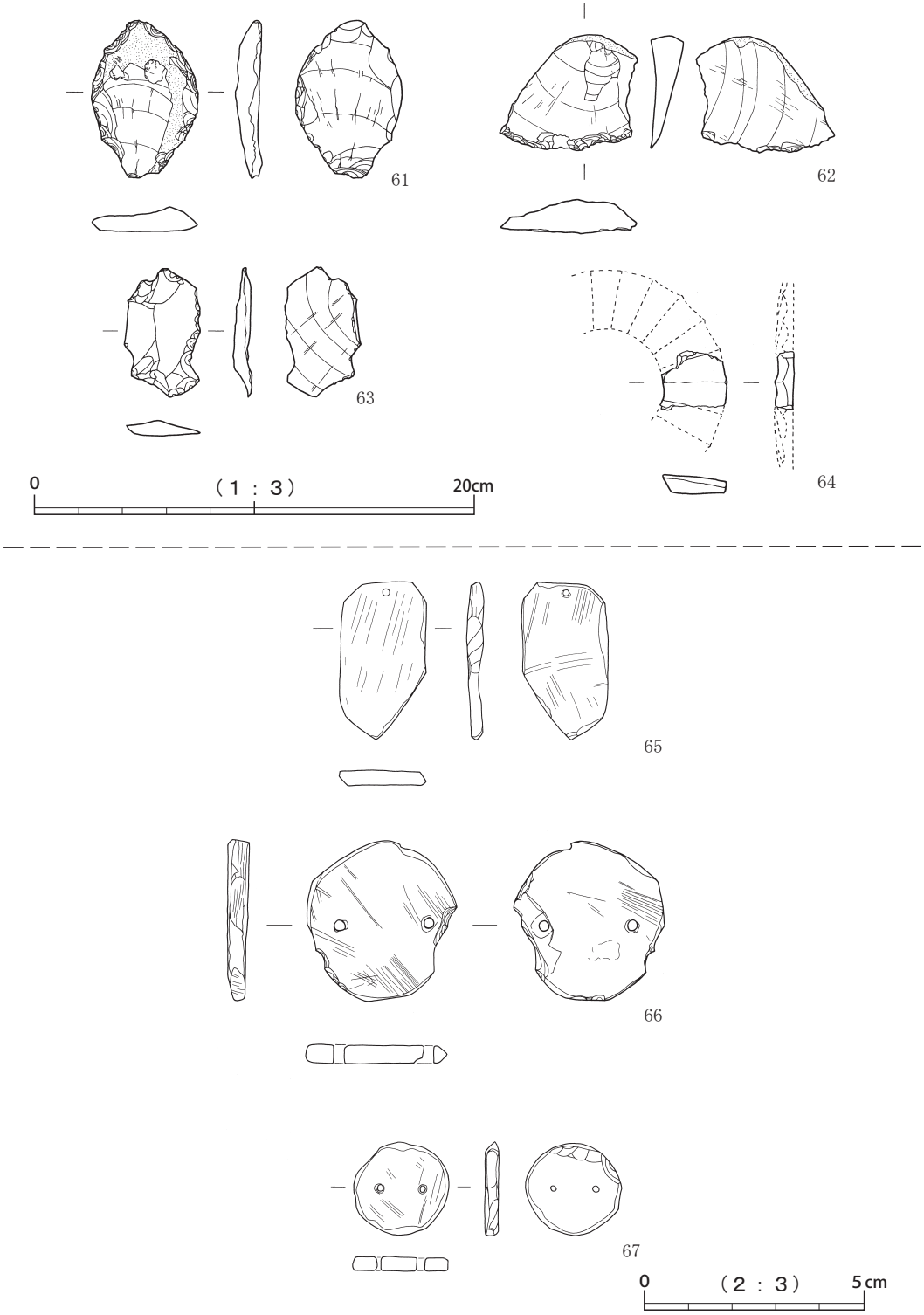


図 106　3－北区　谷地形　出土遺物（6）（S.＝1/3・2/3）

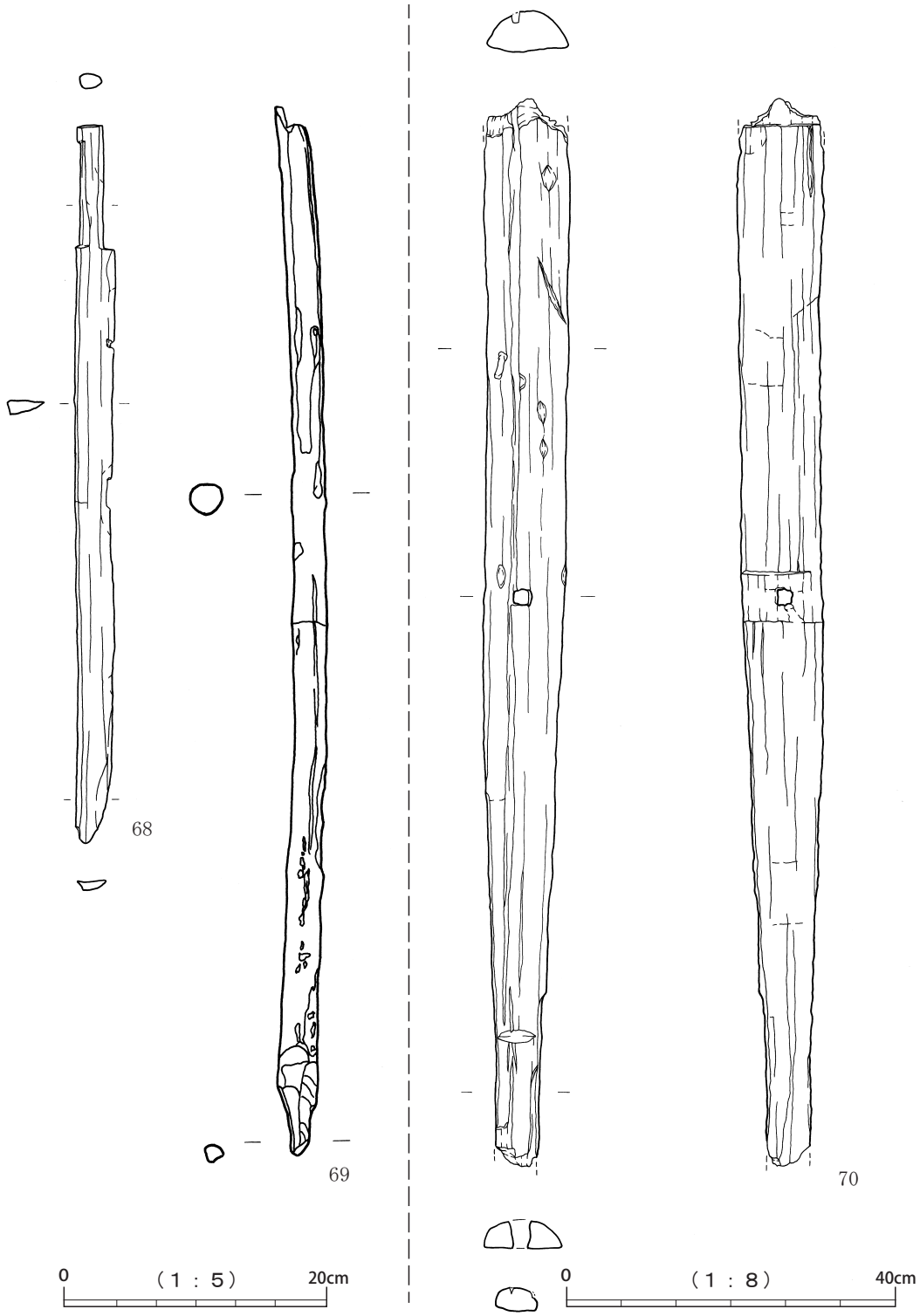


図 107　３－北区　谷地形　出土遺物（７）（S.＝1/5・1/8）

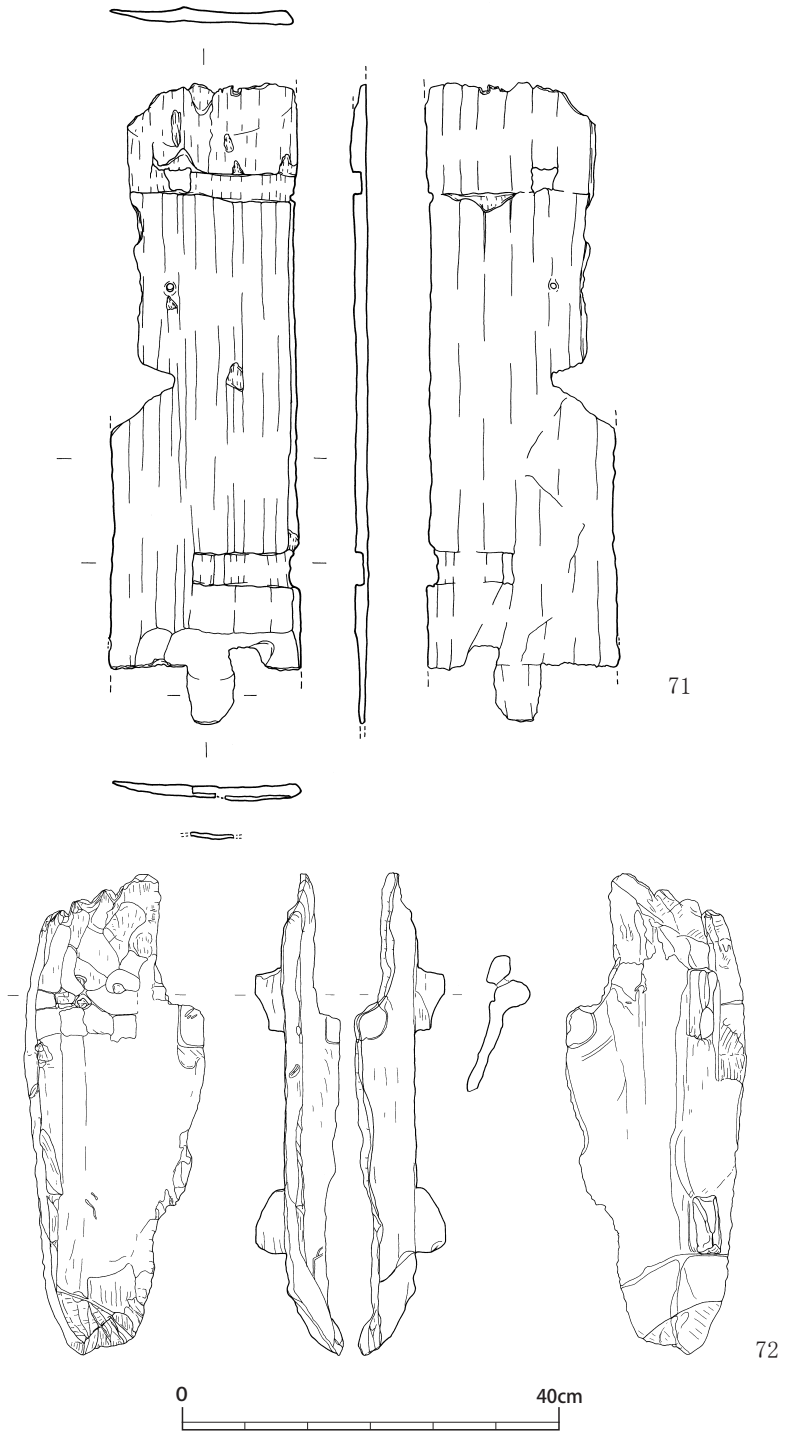


図 108　３－北区　谷地形　出土遺物（８）（S.＝1/8）

図 109　３－北区　谷地形　出土遺物（９）（Ｓ．＝1/8）

（106 － 61 ～ 67）は石器である。（106 － 61 ～ 63）はサヌカイト、（106 － 64）は緑色擬灰岩、（106 － 65・67）は滑石、（106 － 66）は片岩を用いている。

（106 － 61・62）は削器である。（106 － 61）は平面形が木葉形を呈する板状の剝片の周縁部に細部調整を施す。先行剝離面には原礫面が残る。（106 － 62）は方形状の原礫から割られた剝片の一辺に細部調整を施す。どちらも全体が白く風化している。

（106 － 63）は剝片である。一部に原礫面が残る。

（106 － 64）は車輪石の破片である。放射状に施された稜線のうちの３箇所が残る。わずかな残存部から復原すると、外径 10.5cm、穿孔径５cm 程となる

（106 － 65）は剣形滑石製模造品である。１孔を穿つ。

（106 － 66・67）は有孔円板である。円板状に加工した石材に２箇所の穿孔を施す。

（107 － 68 ～ 109 － 73）は木器である。

（107 － 68）は刀形木製品である。刀身部の断面形は楔形を呈し、先端に向かって薄くなっており、峰と刃の区別がみられる。柄の断面は楕円形で、刀身との間には関がつくられ、柄頭が作り出されるなど写実的な加工が多く施される。縦木取りで板目材を用いている。

（107 － 69）は弓である。一端を欠失する。残存する端部には弓弭を作り出す。丸木を利用しており、樹皮が残存する。

（107 － 70）は柱状の建築部材である。縦木取りで芯持ちの柾目材であり、半裁した一木の樹皮を除去したものを用いる。木裏にあたる部分に木目に直交する形で数箇所幅広の枘を彫り、中央に方形の穿孔を施す。長軸方向の両端を欠失する。

（108 － 71）は板状の建築部材である。縦木取りの柾目材と思われる。木目に直交する形に彫られた枘が２箇所残る。

（108 － 72、109 － 73）は木槽である。（108 － 72）は底部に４個の短い脚をつくりだす。樹皮は遺存しない。約 1/2 を欠失する。表面には広範囲に炭化がみられ、破断面にも及ぶ。欠損後に火を受けたことがうかがえる。

（109 － 73）は四隅上部に持ち手となる突出部をつくりだす。樹皮は遺存しない。約 3/4 を欠失する。どちらも一木造りで縦木取りの柾目材と思われる。

第３節　３－南区

１．遺構（図 110）

図４に示したように、３区内に東西約 29 m、南北約 36 mの調査区を設定し、３－南区とした。対象面積は 1,029㎡である。遺構は地山上面で検出された。田畑の造成などによる改変が著しく、削平を受けているものも多いが、竪穴住居３棟、溝２条、土坑８基、ピット群等を検出した。これらの遺構の形成時期は古墳時代中期を中心とするものである。

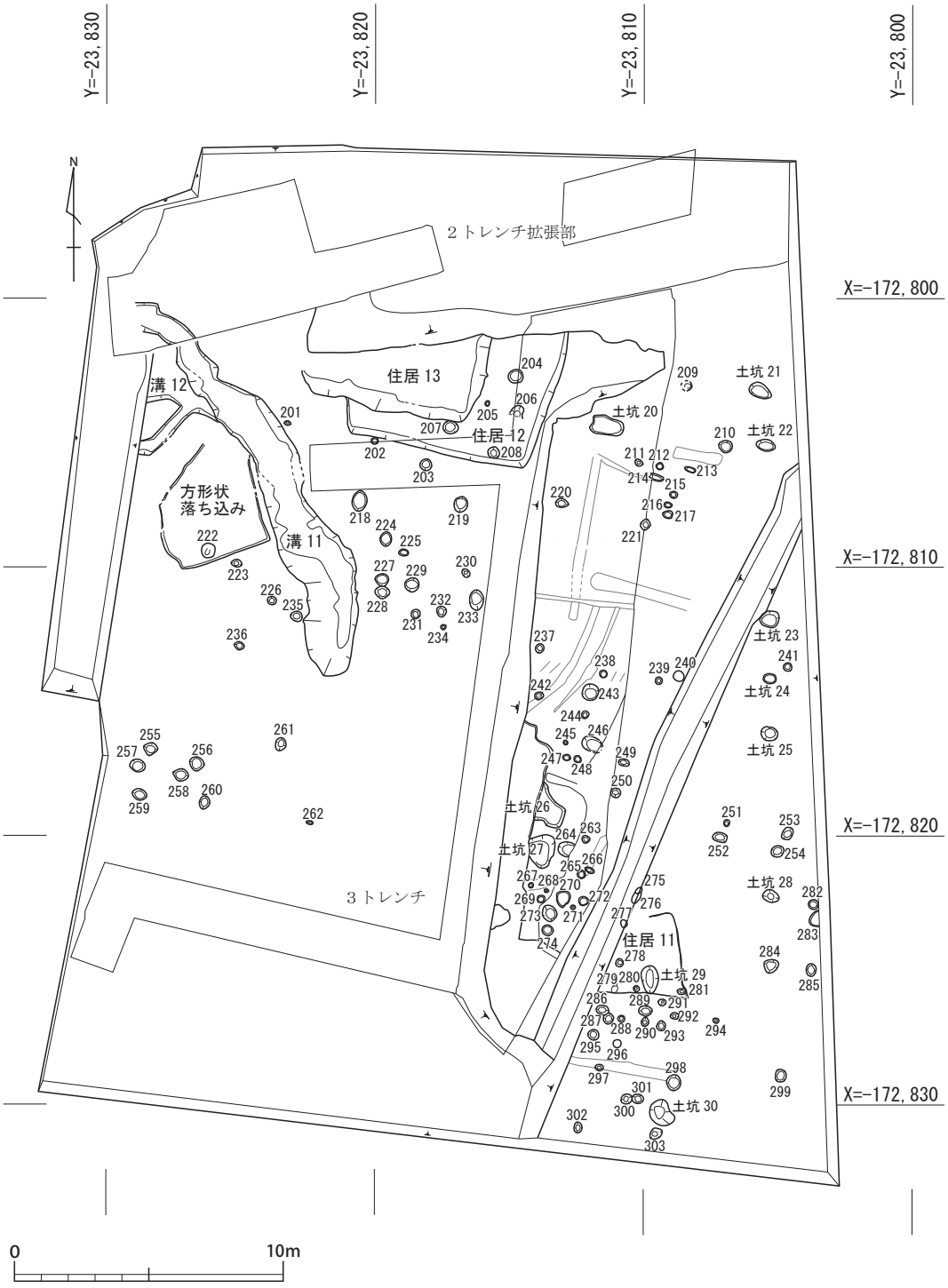


図 110　3－南区　平面図　（S.＝1/250）

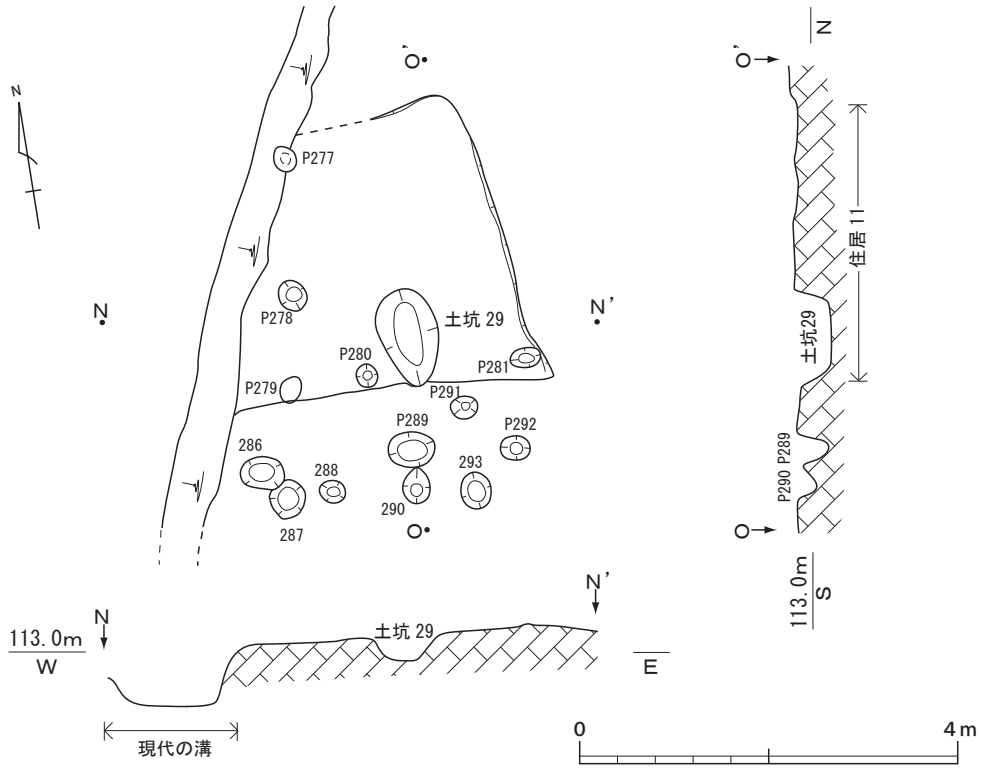


図 111　３－南区　住居 11　平面・断面図　（S.＝1/80）

①住居 11（図 110・図 111）

住居 11 は、図 110 に示したように、調査区南東部で検出した竪穴住居である。住居 11 は他の遺構と比較しても、削平が著しかったために、床面から遺構検出面までの高さが低い。住居の東辺と南辺、および北辺の一部が検出できたが、西辺は後世の開削溝によって削平されていた。しかし、図 111 に見えるように、検出し得た部分から住居の平面プランは方形を呈することがわかる。その規模は、一辺約３ｍと復原できる。

２区と同様に、総じて３－南区においても遺構検出面から住居の床面までが数 cm ほどしか残存しておらず、その状況が不分明なものが多い。この住居 11 においても、埋土は暗褐色粘質土の１層が認められたのみである。

住居の床面の範囲内でピットを５基検出した。しかし、床面の比較的残存状況がよい北西部においてはピットが検出されていない状況や、ピット 279 のようにほぼ輪郭がとらえられたが深さをもたないものなどがあり、いずれが主柱穴であるのか判断が難しい。

また、住居南壁中央付近で土坑 29 を検出した。土坑の規模は、長径 104cm、短径 62cm、深さ 40cm である。この土坑の南隅部が住居 11 の南辺をわずかに切っているので、土坑 29 は住居 11 よりも新しいことがわかる。このような遺構の切り合い関係があることも、床面の範囲内で検出さ

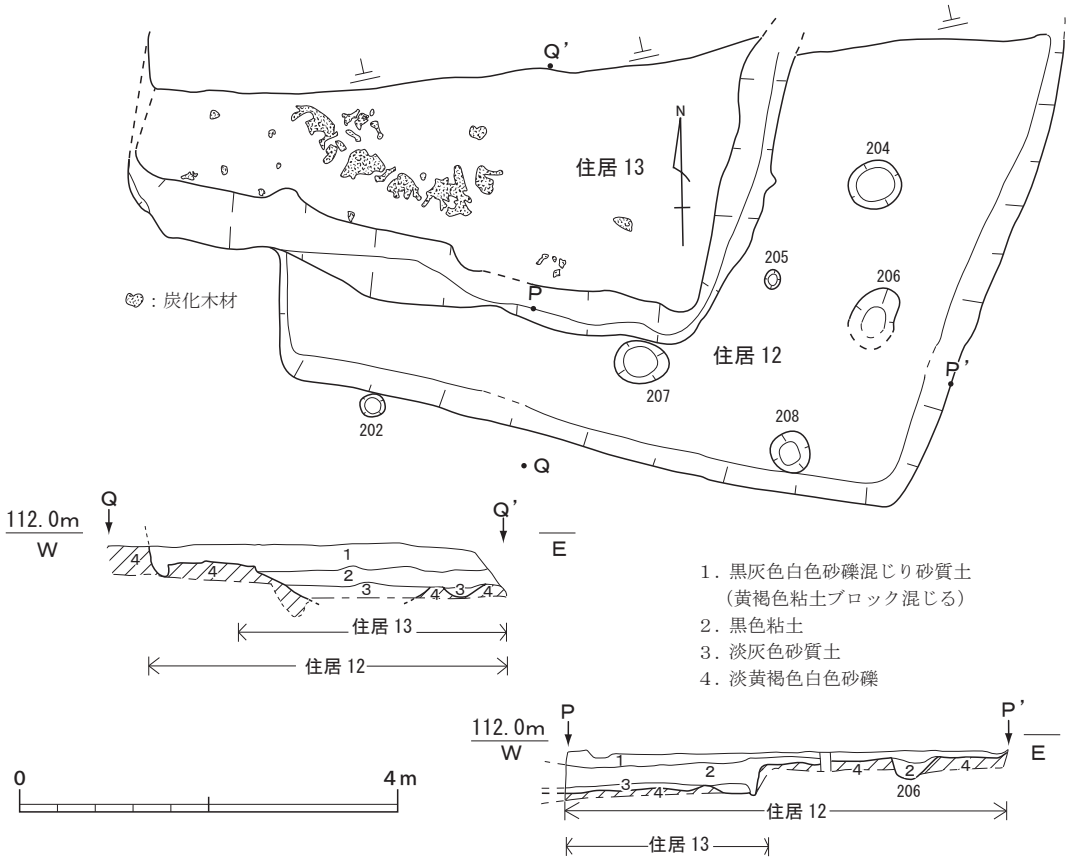


図 112　３－南区　住居 12・13　平面・断面図　（S.＝1/80）

れたピットを直ちに住居に伴うと見なしえない理由でもある。

遺物は住居床面上で、小型丸底壺（122 － 1 ・ 2）や高杯（122 － 3）などの布留３式の土器が出土した。これらは床面の北東部に集中していたものである。

このような遺物から、遺構の形成時期は古墳時代中期前半に求められよう。

②住居 12（図 110・図 112）

住居 12 は、図 110 に示したように、調査区北半の中央付近で検出した竪穴住居である。図 112 に見えるように、住居 13 と切り合い関係がある。住居 12 と住居 13 の床面の比高差は、同のＰ－Ｐ' 断面図に見えるように、25cm 程あって住居 12 のほうが浅い。ただ、断面図には住居住居 13 の壁面の立ち上がりが記録されておらず、しかも、住居 12 の床面の高さが住居 13 の範囲において同じ高さで延長しない。これは、異なる時期の深さが異なる２つの遺構が切り合っている状況としては、整合性がない。このことは、現地調査において時期の異なる２つの遺構の埋土がおそらく一気に除去され、断面図の作成の際にもその切り合い関係がそこに反映されていないということである。また、ここでは提示していないが、埋土除去前の平面検出時点での写真が調査記録

として残された。その写真には遺構の外郭が白い線で示されていたが、その切り合い部分については未確定のまま撮影されていた。遺物の取上に際しても、住居 12 と住居 13 の区別がつけられておらず、一括して取り上げられていた。図 123 にはそのうち図化可能であったものを掲げたが、元々出土点数が少なく、出土した遺物についても出土遺構の年代差を考え得るほど型式変化のあるものではなかった。

こうした状況から、現状では、今住居 12 と住居 13 の先後関係を決めることができなくなっている。

ただし、両遺構の形成時期については、上記の遺物はいずれも古墳時代中期から後期のものであるから、この 2 基の住居は当該期において、先後関係をもちつつ形成されたものと推測される。

さて、住居 12 は、図 112 に示したように、その北西部が住居 13 と重なっており、北半部もこれとは別の後世の削平があって欠損している。そのようなかで南辺の上端が検出できており、その長さは東西方向 6.8 mである。南北方向は、東辺の上端の検出長が 5.3 mとなっている。そして、これらの各辺が直線的に延びることから元の平面形は方形プランであったことが窺い知れる。

また、住居に伴う遺構としてピット 204 ～ 208 の 5 基がある。ピットの規模は、ピット 205 が小さいが、他はおおむね長径 40 ～ 60cm ほどであることから、これらは住居に伴う柱穴であった可能性が考えられる。

③住居 13（図 110・図 112）

住居 13 は、住居 12 と切り合い関係があるが、上記のようにその先後関係は不明である。北半部は住居 12 と同様の削平を受けており、大部分が欠損している。ただし、直線状を呈する南辺が検出できたことから、住居の平面プランは方形であることがわかる。南辺の長さは 6.2 mで、西辺の検出長は北方向は 3.4 mである。遺構の各辺は溝状を呈しているので、元は壁溝が巡っていたとみられる。

また、図 112 に見えるように、住居の埋土中に炭化木材が検出された。しかし、これは床面の直上での検出ではなかったので、この住居の元の上屋の構造物に起因するものであるかなどその生成原因は確定的ではない。その他の遺物は住居 12 のものと区別されない状況で取り上げられていたのであるが、これらから、住居 13 の形成時期は古墳時代中期から後期の幅の中で考えられる。

④方形状落ち込み（図 110・図 113）

「方形状落ち込み」とした遺構は、図 110 に示したように、調査区の北西部で検出された。現地調査では「住居」と認識され出土遺物もそのような名称で取り上げられていた。それは、当該遺構の形状が、図 113 に示したように、落ち込み上端の東辺・南辺・西辺がおおむね直線状になり、平面的な形状がコ字状を呈するために、この部分のみを取り上げれば平面プランが方形の住居跡のように見えるためであろう。規模も、南辺の長さが 3.5 m程であるので、住居跡としても大きな違和感がない。しかしながら、西辺から北辺にかけては、直角ではなく斜めに屈曲していて、東辺に

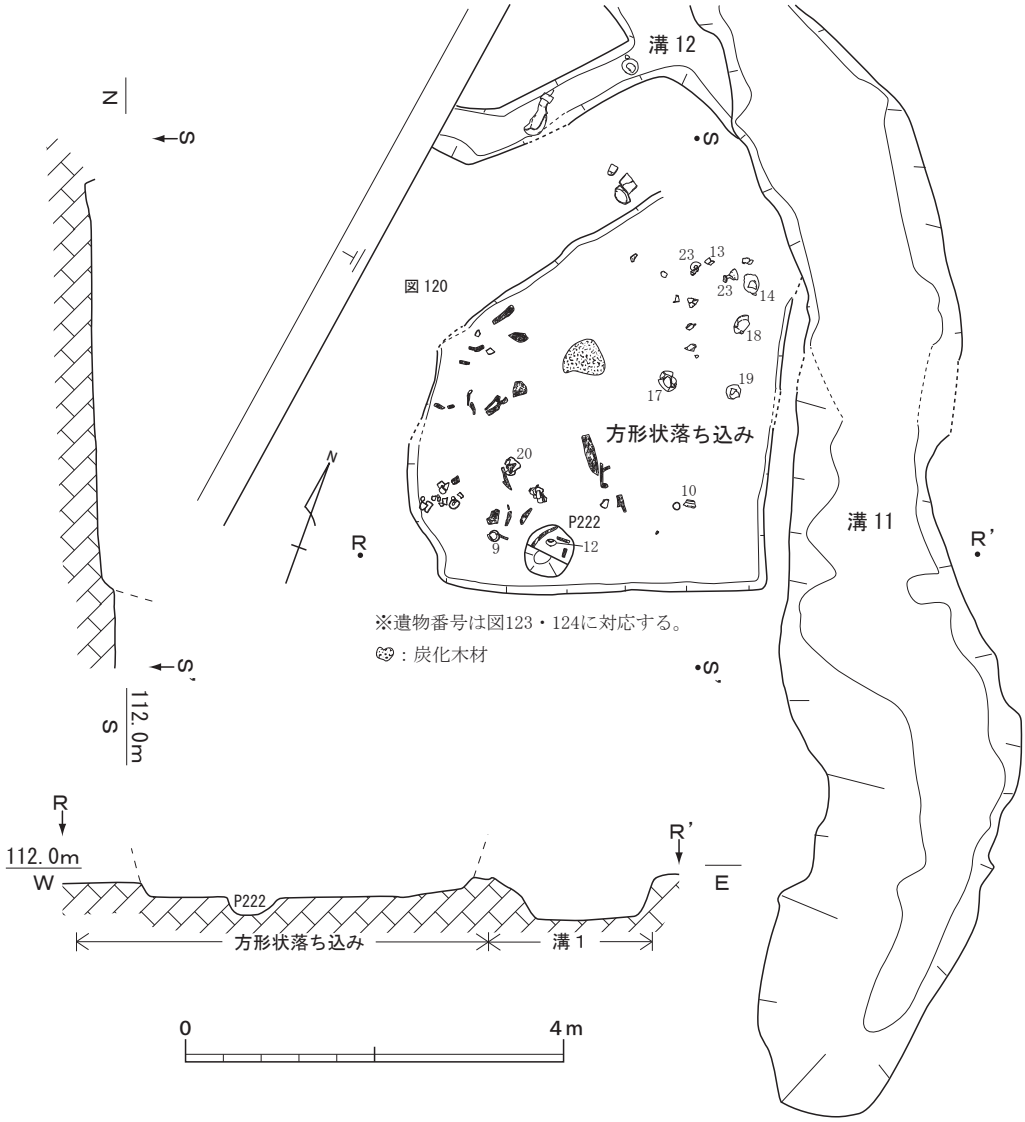


図 113　３－南区　方形状落ち込み　平面・断面図　（S.＝1/80）

繋がっていない。すなわち、図 113 に見えるように、北東部で遺構が閉じないで開いている。また、遺構の底面で検出した遺物の分布についても、住居跡であった場合に想定される方形プランの範囲からは逸脱して北東方向に広がっている。遺構の検出底にはピット 222 があるが、それ以外の柱穴に当たるようなピットが認められないという状況もある。

このようなことから、当該遺構は住居跡の可能性がないとは言えないが、通有の住居跡とも異なることから、その性格は不分明なものとして「方形状落ち込み」とした。

規模は、東西最大 3.8 m、南北最大検出長 4.2 mである。埋土は暗褐色粘質土の 1 層が認められた。遺構底は黄褐色砂礫土の地山を平坦に削って作られている。その底から、図 113 に示したよ

うに、炭化木材が出土した。炭化木材は残存状況があまり良くなく、大きいものでも長さ 50cm、幅 10cm の大きさである。この遺構が住居跡であれば、これらの炭化木材は元は建築材であったと考えられるが、遺構の性格が定かではないためにこの点についても不明である。

ピット 222 は、遺構の南辺付近で検出した。図 115 に示したように、平面形は長径 52cm、短径 47cm の不整円形を呈する。図 113 や図 115 に見えるように、現地調査では、まず南西部側の埋土を除去してその状態を平面図化しているが、その後の完掘状態の記録が残っていなかった。遺構断面図も作成された形跡がなかった。ただし、埋土に関する情報およびレベル高の数値が平面図に書き込まれていた。これによれば、埋土は褐色粘質土で、検出深さは 17cm である。また、このピット 222 が、方形状落ち込みの埋土の上面で検出されたものではないから、少なくともこれに後続する可能性は低いが、これに伴うものであるか、先行するものであるかなどは不詳である。

上記の炭化木材以外の遺物は、遺構底に散在している状況であった。それらの多くは土器破片であって、そのうち図化可能であったものを図 123・図 124 に掲げた。同図に見えるように、布留３式の土器が大半を占めている。したがって、遺構の形成時期は当該期に求められよう。

⑤ピット（図 110・図 114 ～ 118）

ピットは、3 －南区全体で 103 基を検出した。そのうち、個別の平面の詳細な記録があった 101 基について図 114 ～ 118 に平面図を掲げ、計測表は表 2 として示した。なお、同図において、各遺構の断面図を示し得なかったのは以下の事情による。

現地調査において断面図が作成された遺構は 103 基中 32 基しかなかった。一方で平面図にはレベル高などが注記されていたが、作成された断面図と平面図に書かれた絶対高の間に乖離があって整合性がない状態であった。このために、現地で作成された断面図についてもここでは提示できなったのである。表 2 に示した深さに関するデータは、平面図に示された相対的な数値を元にして作成したものである。

さて、図 114 ～ 118 および表 2 を見ると、ピットは長径 20 ～ 30cm のものが多く、中には、60cm 程度のものが数基あるという状況である。埋土は、平面図に書かれた注記によれば、いずれもが暗褐色粘質土あった。遺構は地山に対して掘り込まれている。

これらのピットの多くは遺物が出土しなかったため、遺物から形成時期を明らかにすることができない。多くのピットは古墳時代のものと思われる。しかし、同様の埋土を呈するピット 209 から瓦器（125 － 1 ）が出土した。ピット 214 からも同様の瓦器が出土したほか、ピット 253 からは黒色土器（125 － 13）や土釜（126 － 14）が出土した。このことからすれば、埋土だけを見てすべてを古墳時代のピットと認識することはできない。

⑥土坑 20（図 110・図 119）

土坑 20 は、図 110 に示したように、調査区北東部の中央付近で検出した。平面形は、長径 124cm、短径 66cm の不整楕円形を呈する。図 119 には断面図を提示していないが、これは現地

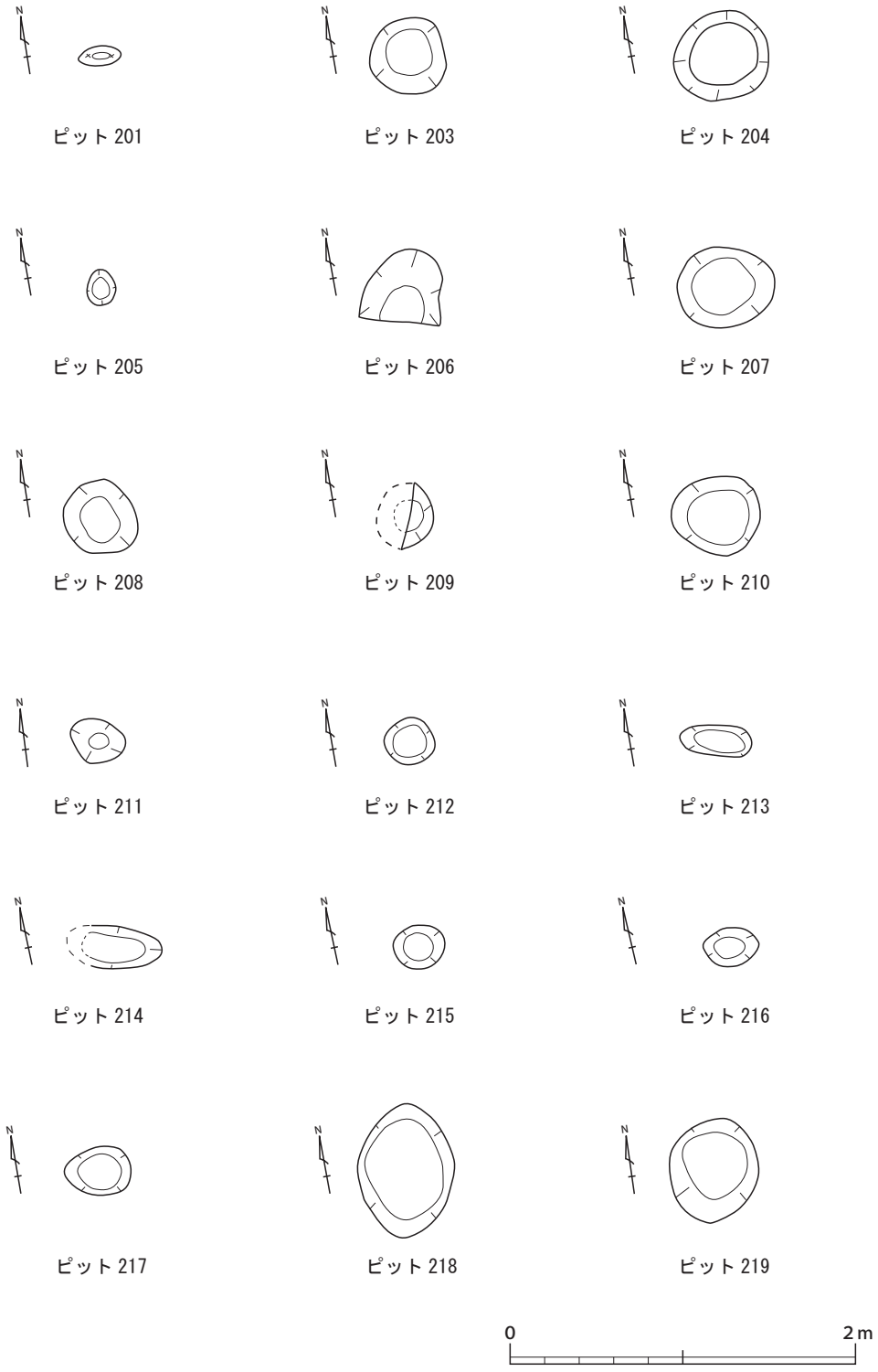


図 114　３－南区　ピット（１）　平面図　（S.＝1/40）

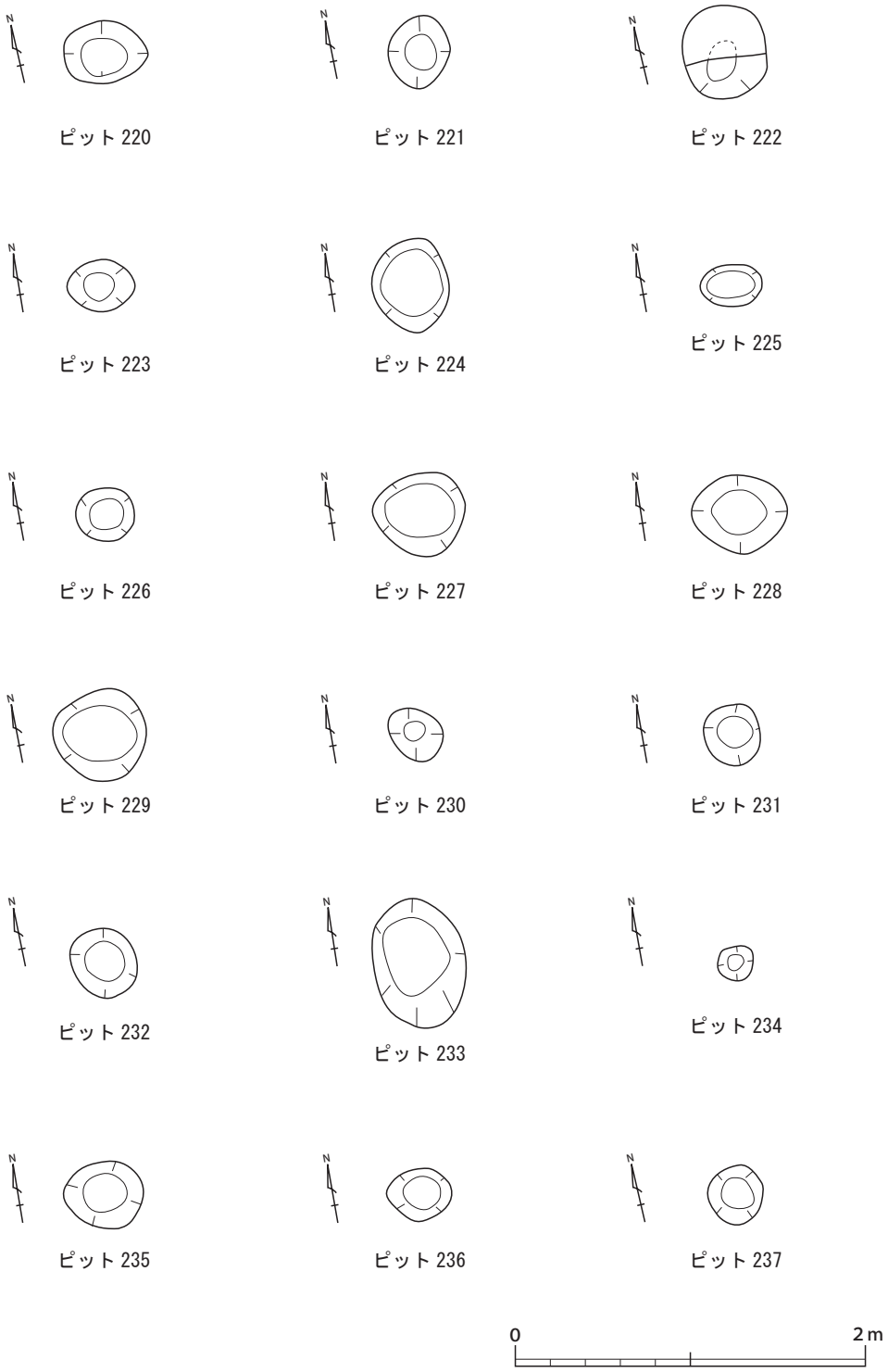


図 115　３－南区　ピット（２）　平面図　（S.＝1/40）

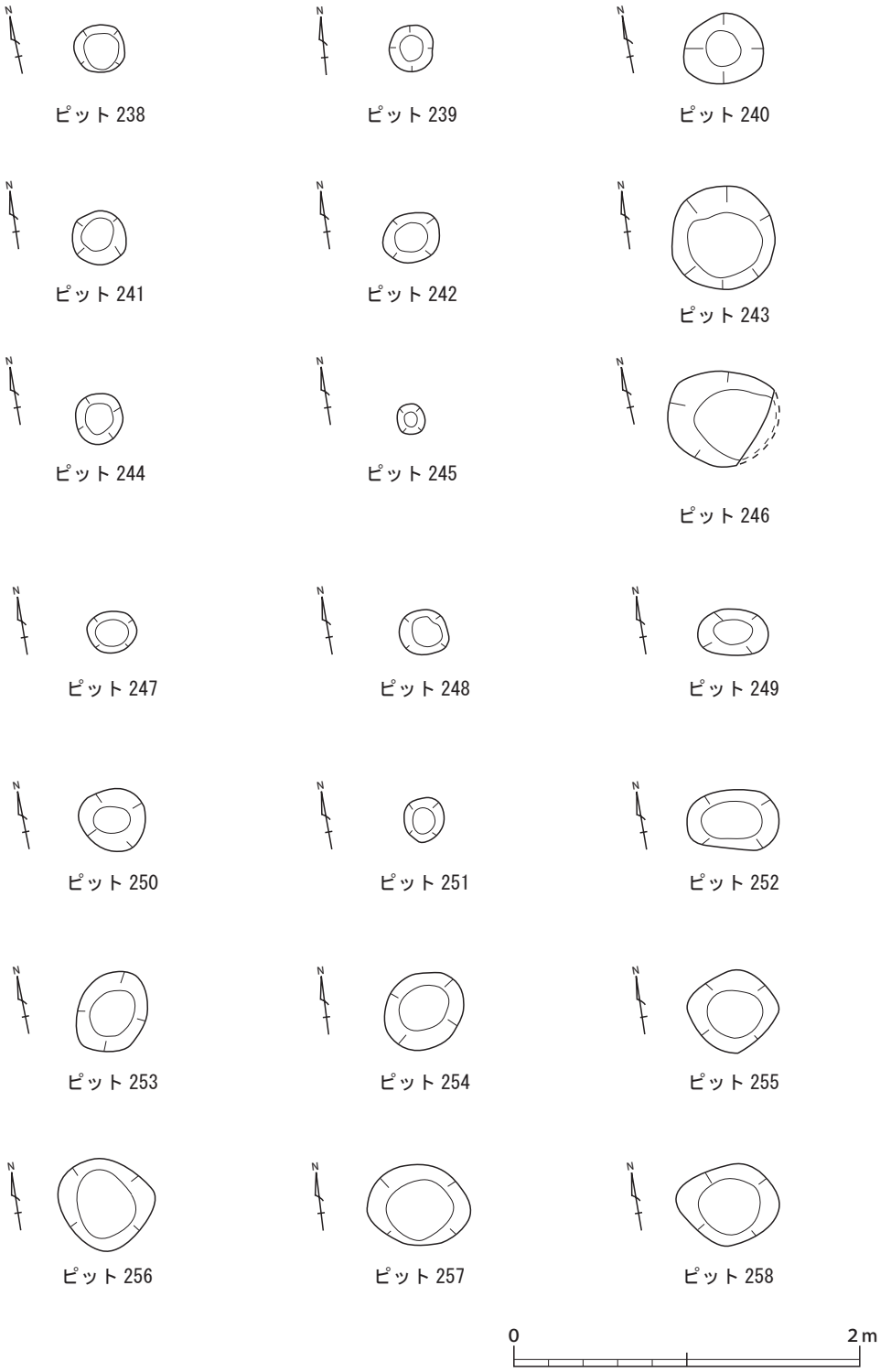


図 116　３－南区　ピット（３）　平面図　（S.＝1/40）

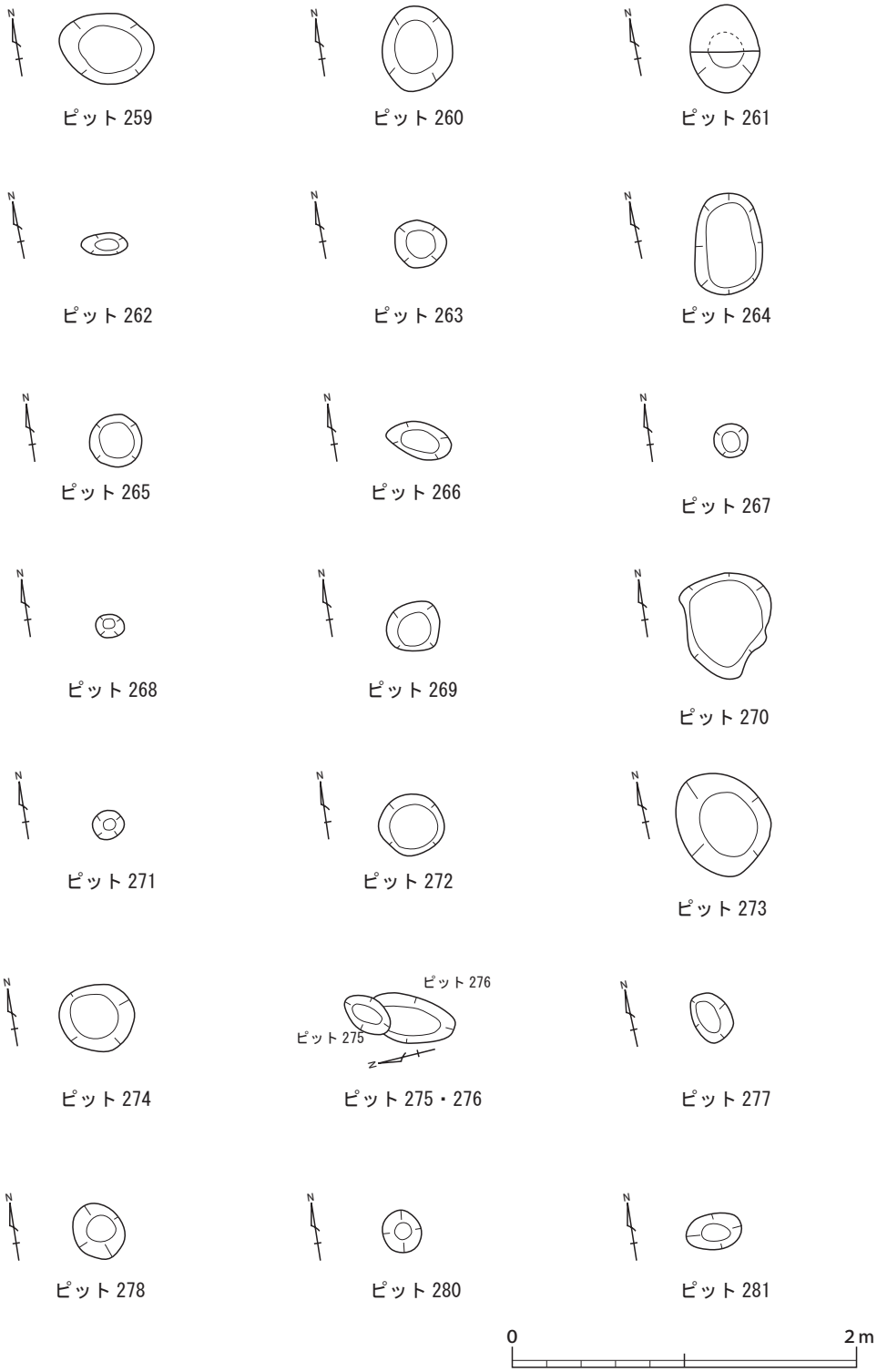


図 117　３－南区　ピット（４）　平面図　（S.＝1/40）

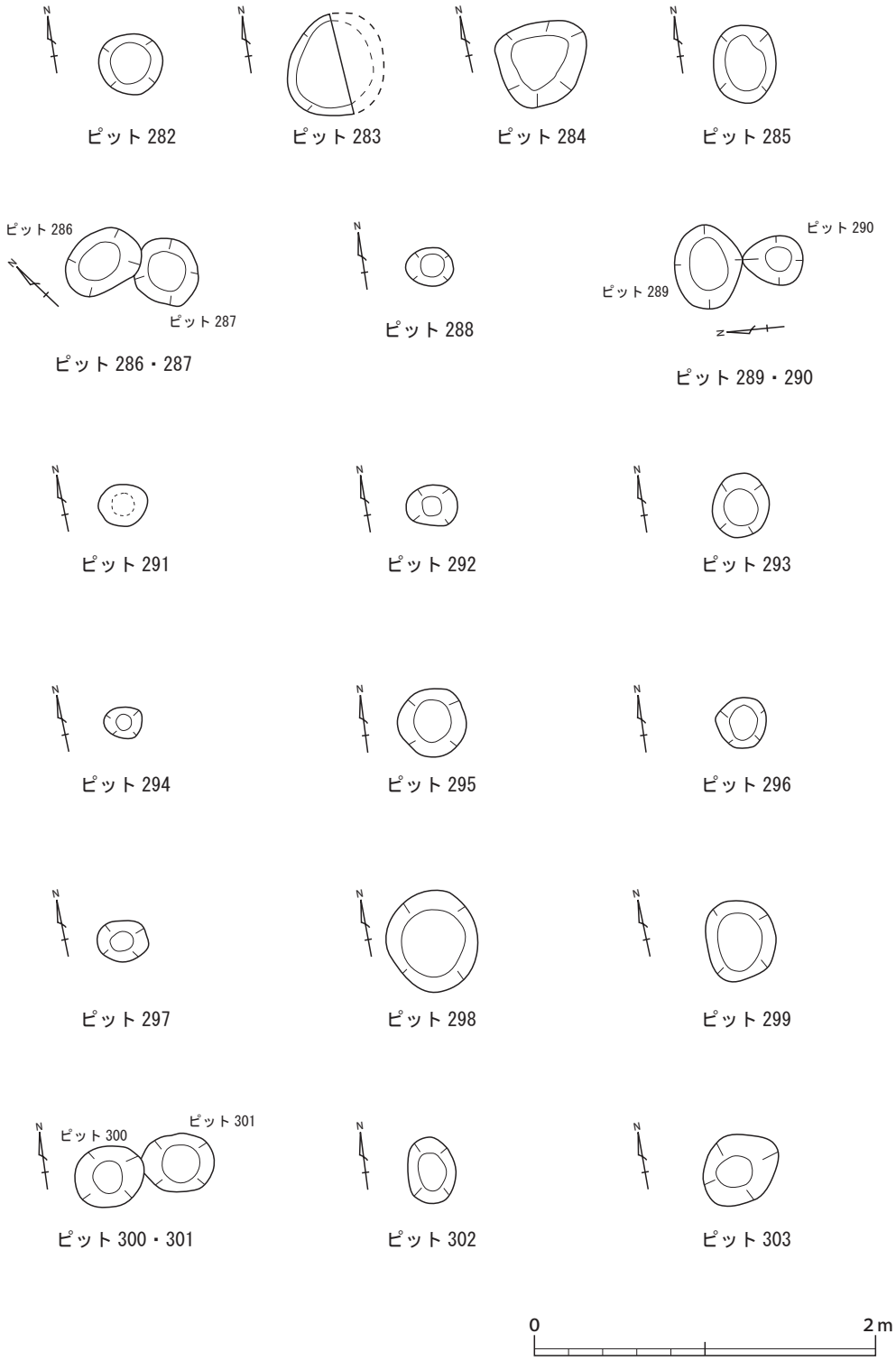


図 118　３－南区　ピット（５）　平面図　（S.＝1/40）

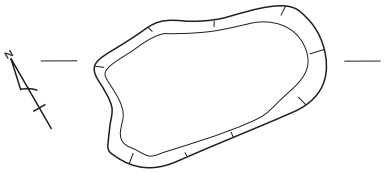
表２　３－南区　ピット 201 ～ 303　計測表

ピット名称	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	ピット名称	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	ピット名称	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
201	25.0	11.0	20.0	236	37.0	29.0	18.0	271	18.0	16.0	13.0
202	27.0	25.0	-	237	34.0	30.0	17.0	272	38.0	35.0	25.0
203	46.0	44.0	12.0	238	31.0	28.0	10.0	273	60.0	51.0	7.5
204	56.0	52.0	31.0	239	27.0	24.0	5.0	274	44.0	38.0	12.5
205	21.0	17.0	14.0	240	47.0	40.0	12.0	275	30.0	20.0	14.0
206	(42.0)	42.0	33.0	241	32.0	30.0	16.0	276	(48.0)	28.0	25.0
207	57.0	46.0	20.0	242	34.0	28.0	14.0	277	30.0	22.0	17.0
208	45.0	40.0	34.0	243	61.0	59.0	18.0	278	28.0	19.0	7.0
209	38.0	(32.0)	27.0	244	30.0	28.0	12.0	279	15.0	12.0	-
210	52.0	46.0	26.0	245	18.0	16.0	13.0	280	23.0	21.0	10.0
211	32.0	25.0	14.0	246	54.0	50.0	14.0	281	32.0	21.0	13.0
212	28.0	27.0	6.0	247	28.0	24.0	13.5	282	38.0	36.0	9.0
213	42.0	18.0	8.0	248	30.0	26.0	10.5	283	(60.0)	55.0	8.0
214	(54.0)	24.0	14.0	249	40.0	26.0	5.0	284	56.0	49.0	23.0
215	30.0	26.0	12.0	250	39.0	35.0	16.0	285	46.0	36.0	17.0
216	32.0	22.0	13.0	251	26.0	22.0	19.0	286	46.0	34.0	19.0
217	40.0	28.0	8.0	252	52.0	34.0	13.0	287	40.0	37.0	4.0
218	80.0	56.0	9.0	253	50.0	40.0	50.0	288	28.0	22.0	23.0
219	61.0	50.0	30.0	254	50.0	43.0	20.0	289	50.0	38.0	20.0
220	48.0	36.0	15.0	255	54.0	44.0	23.0	290	35.0	28.0	48.5
221	42.0	34.0	57.0	256	55.0	48.0	25.0	291	29.0	25.0	6.0
222	54.0	47.0	17.0	257	60.0	46.0	35.0	292	30.0	22.0	19.0
223	40.0	29.0	13.0	258	60.0	46.0	38.0	293	38.0	33.0	21.0
224	54.0	43.0	18.0	259	54.0	41.0	27.0	294	23.0	18.0	8.0
225	36.0	23.0	20.0	260	50.0	41.0	9.0	295	41.0	39.0	28.0
226	34.0	30.0	7.0	261	50.0	40.0	18.0	296	30.0	29.0	13.0
227	51.0	48.0	21.0	262	28.0	13.0	20.0	297	29.0	26.0	21.0
228	55.0	44.0	27.0	263	30.0	28.0	12.0	298	60.0	52.0	47.0
229	53.0	51.0	20.0	264	59.0	38.0	41.0	299	47.0	40.0	35.0
230	34.0	26.0	12.0	265	31.0	30.0	11.0	300	42.0	36.0	49.0
231	36.0	32.0	11.0	266	38.0	20.0	24.0	301	42.0	34.0	12.0
232	42.0	36.0	21.0	267	20.0	19.0	6.0	302	38.0	28.0	22.0
233	74.0	52.0	27.0	268	17.0	13.0	5.0	303	49.0	39.0	23.0
234	20.0	19.0	13.0	269	33.0	28.0	8.0				
235	46.0	37.0	12.0	270	62.0	46.0	19.0				

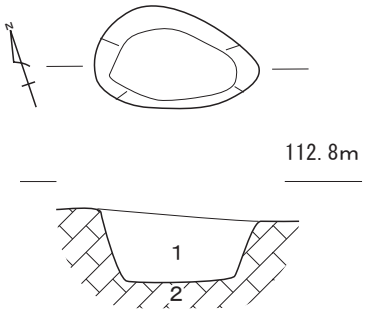
において図面が作成されていなかったためである。深さは約 30cm であった。埋土は、平面図等に記された注記によれば、黒褐色粘質土である。

遺物は、図 127 および図 128 上段に示したように、土師器片が比較的多く出土した。これらの遺物出土状況の図面は、現地調査において作成されていたのであるが、今回整理作業で見直していたところ、図面に不整合な点が多々あることがわかった。とりわけ、図面に表現された遺物と実際に取り上げられた遺物の突合ができない状態になっていため、ここではその出土状況図面を提示することができなかった。

ただし、遺物を見るとこれらは布留３～４式期に収まるため、遺構の形成時期は古墳時代の中期のであると考えられよう。

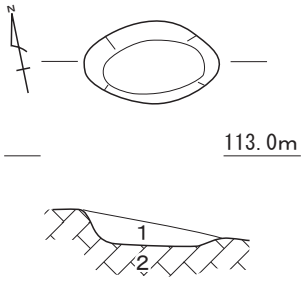


土坑 20



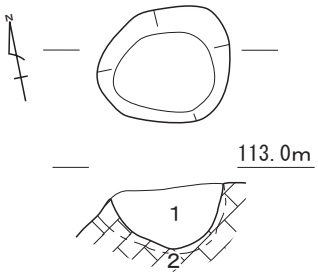
1．黒褐色粘質土
2．褐色砂礫土

土坑 21



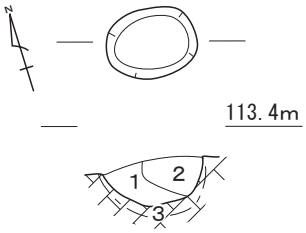
1．黒褐色粘質土
2．褐色砂礫土

土坑 22



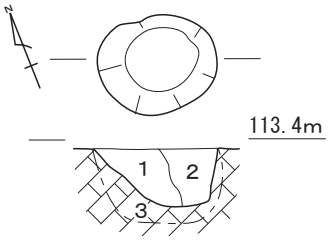
1．黒褐色粘質土
2．褐色砂礫土

土坑 23



1．黒褐色粘質土
2．黄灰色粘土
3．褐色砂礫土

土坑 24



1．黒褐色粘質土
2．黄褐色粘質土
3．褐色砂礫土

土坑 25

図 119　３－南区　土坑 20 ～ 25　平面・断面図　（S．=1/40）

⑦土坑 21（図 110・図 119）

土坑 21 は、図 110 に示したように、調査区の北半の東辺付近で検出した。図 119 に示したように、規模は長径 88cm、短径 52cm、深さ 36cm で、平面形は不整楕円形である。埋土は暗褐色粘質土１層であった。遺物は出土しなかったが、埋土のあり方が他の土坑と同様であることから、古墳時代のものとみられる。

⑧土坑 22（図 110・図 119）

土坑 22 は、図 110 に示したように、調査区北半の東辺付近で検出した。土坑 21 から南に 1.5 mの地点に当たる。図 119 に示したように、規模は長径 72cm、短径 44cm、深さ 14cm で、平面形は不整楕円形を呈する。埋土は暗褐色粘質土 1 層が認められた。

遺物は時期がさかのぼる（128 － 8 ）のほか、土師器壺（128 － 9 ）や土師器高杯（128 － 10 ～ 14）などが出土した。時期が比較的特定しやすい器種である高杯によれば、古墳時代中期前半頃かと思われる。遺構の形成時期も当該期に求められよう。

⑨土坑 23（図 110・図 119）

土坑 23 は、図 110 に示したように、調査区中央のやや北寄りの東辺付近で検出した。平面形は、図 119 に示したように、長径 66cm、短径 62cm の不整円形を呈する。深さは 32cm である。埋土は暗褐色粘質土 1 層が認められた。

遺物は出土しなかったが、埋土のあり方が他の土坑と同様であることから、古墳時代のものとみられる。

⑩土坑 24（図 110・図 119）

土坑 24 は、図 110 に示したように、調査区中央の東辺付近で検出した。土坑 23 の南 1.8 mに位置している。平面形は、図 119 に示したように、長径 48cm、短径 36cm の不整楕円形を呈する。深さは 25cm である。埋土は暗褐色粘質土 1 層が認められた。遺物は古墳時代中期頃の甕（128 － 15）や壺（128 － 16）といった土師器をはじめ、須恵器なども出土している。これらの遺物から、遺構の形成時期についても当該期とみられる。

⑪土坑 25（図 110・図 119）

土坑 25 は、図 110 に示したように、調査区中央部の東辺付近で検出した。土坑 24 の南 1.5 m に位置している。平面形は、図 119 に示したように、長径 64cm、短径 52cm の不整円形を呈する。深さは 31cm である。埋土は、図 119 の断面図に示したように、土坑断面の中央付近で縦に 2 層分かれ、西側が黒褐色粘質土、東側が黄褐色粘質土であった。

遺物は古墳時代とみられる土師器片が数点出土した。

⑫土坑 26（図 110・図 120）

土坑 26 は、図 110 に示したように、調査区の南半中央部付近で検出した。図 110 や図 120 に見えるように、遺構の西半が後世の削平を受けている。このため全形の把握ができないが、残存部

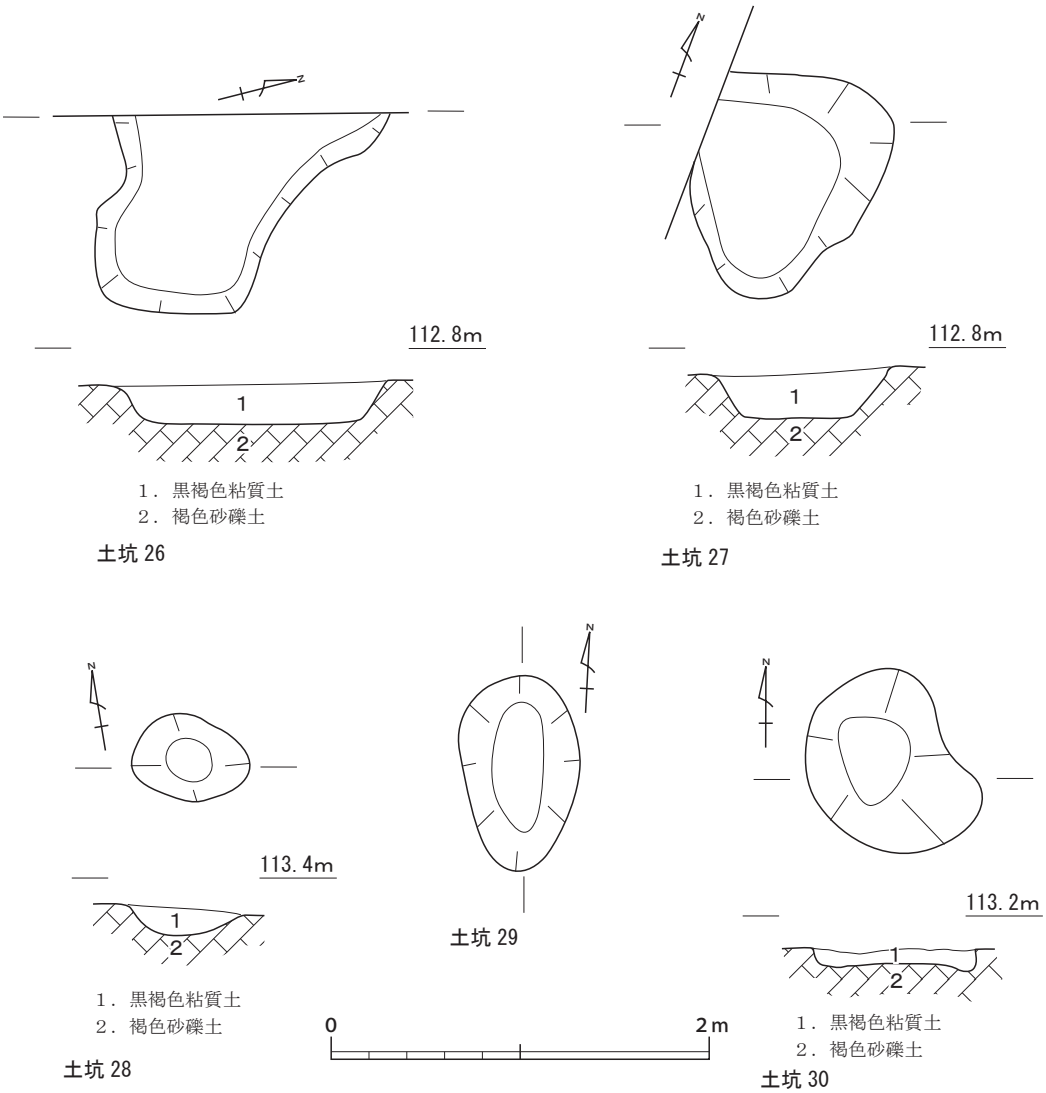


図 120　３－南区　土坑 26 ～ 30　平面・断面図　（Ｓ．＝1/40）

分からは、長軸検出長 146cm、短軸 109cm の歪な方形を呈するように見える。深さは 20㎝である。埋土は黒褐色粘質土層で 1 層のみが認められた。

遺物は北西隅で土師器片が集中した状態で出土した。現場で作成された遺物出土状態の略図には、10 片あまりの土器片が出土したと記録されている。しかし取上ラベル等に混乱があり、整理段階では整理棟に搬入された遺物の中で、土坑 26 出土遺物を特定することができない状態になっていた。そのため、現状ではこの土坑からどのような遺物が出土したのか不明である。

⑬土坑 27（図 110・図 120）

土坑 27 は、図 110 に示したように、調査区の南半中央部付近で検出した。土坑 26 の南に近接する位置にあり、土坑 26 と同様に遺構の西半を後世の攪乱によって削平されている。このため、

正確な形状を知り得ないが、図 120 に示した平面図を見れば、長軸 120cm、短軸 100cm 強の隅丸三角形を呈する。深さは 21cm である。

遺物は出土しなかったが、埋土のあり方が他の土坑と同様であることから、遺構の形成時期は古墳時代とみられる。

⑭土坑 28（図 110・図 120）

土坑 28 は、図 110 に示したように、調査区南半で東辺にほど近い近い地点で検出した。規模は、図 120 に示したように、長径 64㎝、短径 44cm で、平面形は楕円形を呈する。深さ 21㎝である。埋土は黒褐色粘質土層で 1 層のみが認められた。

遺物は出土しなかったが、埋土のあり方が他の土坑と同様であることから、遺構の形成時期は古墳時代とみられる。

⑮土坑 29（図 110・図 111・図 120）

土坑 29 は、図 110・図 111 に示したように、住居 11 の床面の範囲内にあってその南辺に当たる位置で検出された。住居 11 は調査区の南東部で検出されている。

土坑 29 の平面形は、図 120 に示したように、長径 104cm、短径 62cm の不整楕円形を呈している。深さは 40cm であった。なお、図 120 には土坑 29 の断面図を提示していない。原図平面図には遺構の上端と下端にその相対的なレベル高が書き込まれていたが、それによると深さ 40cm になる。ただ、断面図も作成されていたのであるが、それによれば深さ 8 cm 程度となっていた。いずれが正しいのか俄に判断しがたいが、ここでは、整合性がない 2 枚の図面うち、完掘段階で作成されたとみられる平面図に記された数値を示した。

遺物の出土がなかったが、「①住居 11」の項でも記したように、土坑 29 は住居 11 と切り合いがあって、住居 11 をわずかに切っている。したがって、土坑 29 の形成時期は、住居 11 に後続することになるので、古墳時代中期を遡ることはないとみられる。

⑯土坑 30（図 110・図 120）

土坑 30 は、図 110 に示したように、調査区の南東部、南端付近付で検出した。規模は、図 120 に示したように、長径 98cm、短径 85cm、深さ 10cm である。平面形は歪な楕円形を呈する。埋土は黒褐色粘質土 1 層のみが認められた。

遺物は、庄内 1 ～ 2 式の甕（128 － 18）などが出土した。遺構の形成時期は、当該期とみられる。

⑰溝 11（図 110・図 113）

溝 11 は、図 110 に示したように、調査区の北西部で検出した。方形状落ち込みの北東側にあって、北西－南東方向に延びている。幅約 1.7 m、深さ 50cm で、長さは 11.5 m以上を検出した。第 12 － 1 次調査 3 区 2 トレンチ拡張部で検出された部分を経て調査区外へ続いている。現地調査では、埋土の状況等に関する図面等の記録類が残されなかったために、ここに断面図等を提示することができない。

遺物は、図 129 に掲げた土器ほか、須恵器片や土師器片などが出土した。実測図を掲げた土器はおおむね古墳時代中期頃とみられる。遺構の埋没時期についても当該期と考えられよう。

⑱溝 12（図 110・図 113）

溝 12 は、図 110 に示したように、調査区北西隅部で検出した。検出部分は、北東－南西方向と北西－南東方向に分かれる分岐点付近に当たっている。北東－南東方向の溝は幅 45cm 程の規模である。検出部分の東側は、図 110 や図 113 に示したように、溝 11 と切り合い関係があって、溝 11 に切られている。

遺構の形成時期は、この切り合い関係から溝 1 に先行することが分かる。出土遺物の数量は総じて少ないが、そのうち図 129 に掲げたように、韓式系土器甕（129 － 5）が出土したことは注目される。

２．遺物

３－南区で出土した土器・石器・石製品のうち図化可能であったものを図 121 ～ 129 に掲げた。これらの形態・大きさをはじめとする詳細は、土器・土製品については別表 1 に、石器・石製品については別表 2 にそれぞれ記したので参照されたい。

①流入土出土遺物

図 121 に３－南区の流入土から出土した遺物を掲載した。

（121 － 1）は須恵器杯身である。立ち上がりは短く内傾し、口縁端部は尖り気味に終わる。受け部は水平に突出する。底体部は 1/3 に回転ヘラケズリを施す。TK43 型式に属する。

（121 － 2）は須恵器有蓋高杯蓋である。やや丸みを帯びた形状で、天井部の 1/2 に回転ヘラケズリが施される。つまみは中心が凹む。天井部と口縁部の境には稜を持たず、やや外側に張り出した口縁部の、端部は丸く収められる。TK10 型式に属する。

（121 － 3）はサヌカイトを用いた削器もしくは楔形石器である。周縁部に調整痕があり、丸く潰れる部分がみられる。一部に原礫面が残る。

（121 － 4）は方柱状の砂岩を用いた砥石である。1/2 以上を欠失する。砥面は３面にわたる。

（121 － 5）は滑石を用いた有孔円板である。円板状に加工した石材に２箇所の穿孔を施す。

（121 － 6）は緑泥片岩を用いた勾玉である。板状に研磨した石材を成形し、1 箇所の穿孔を施す。

②住居出土遺物

図 122・図 123 上段に３－南区の住居跡から出土した遺物を掲載した。

（122 － 1 ～ 3）は住居 11 から出土した。すべて土師器であり、布留３式に属する。

（122 － 1 ・ 2）は土師器小形丸底壺である。体部中ほどに最大径を持ち、短く外傾する口縁部を持つ。端部は横方向のナデにより丸く収められる。頸部の屈曲にはナデが施され、内外面とも鈍くなる。（122 － 1）は内外面ともに全体がナデにより仕上げられる。（122 － 2）は内面をナデ、

底部外面にヘラケズリが施される。

（122 － 3）は土師器高杯である。広い水平面を有する底部に外反して開く口縁部が続く。接合部は稜を持たず、口縁端部はやや尖り気味に丸く収める。底部と脚台部の接合には接合法が用いられ、屈曲をもって下方に大きく広がる裾部を持つ。杯部内外面は風化により調整不明、脚台部から裾部外面はヘラミガキ、内面は指頭圧痕が残る。

（123 － 4 ～ 8）は住居 12・13 から出土した。

（123 － 4）は朝顔形埴輪である。外傾して大きく開く口縁部の外面に突帯が 1 条張り付けられる。内外面ともハケにより仕上げられる。古墳時代中期～後期に属する。（123 － 5）は土師器の把手である。断面形は不整円形を呈する。接合部にはハケを施す。古墳時代中期中頃から後期に属する。

（123 － 6）は板状の長方形を呈するサヌカイト剝片である。全体に風化が激しい。（123 － 7）は砂岩製の磨石である。（123 － 8）は泥岩製の砥石である。方柱状を呈し、８面にわたって砥面が形成される。素材の肌理は細かく、仕上げに使用したと思われる。

③方形状落ち込み出土遺物

図 123 下段および図 124 に方形状落ち込み遺構から出土した遺物を掲載した。すべて土師器であり、布留３式に属する。

（123 － 9 ・10）は土師器二重口縁壺である。（123 － 9）はやや外傾気味に開く口縁部で、端部は横方向のナデにより丸く収められる。頸部と口縁部、頸部と体部の接合部の屈曲はナデにより鈍くなる。体部内面はケズリ、口縁部内外面はナデにより仕上げられる。（123―10）は外反する頸部に直立する口縁部が続く。口縁端部は外側に肥厚し、横方向のナデにより水平部に面を持つ。内外面全体はナデにより仕上げられる。内面全体に黒斑が残る。

（123 － 11 ～ 13）は土師器小形丸底壺である。（123 － 11）は体部上半に最大径を持つ。口縁部はやや内湾気味に開き、口縁端部は尖り気味に終わる。体部の接合部の屈曲はナデにより鈍くなる。体部内面はケズリのちナデで、指頭圧痕が残る。体部から底部外面はケズリのちナデ、肩部はハケのちナデにより仕上げられる。体部から底部外面に黒斑が残る。

（123 － 12）は体部中ほどに最大径を持つ。外傾して開く口縁部を持ち、口縁端部はナデにより尖り気味に終わる。体部の接合部の屈曲は強いナデにより鈍くなる。体部内面はケズリのちナデ、口縁部はハケ、外面全体はハケにより仕上げられる。

（123 － 13）は体部のやや下半に最大径を持つ。外傾して開く口縁部を持ち、口縁端部はナデにより丸く収められる。体部の接合部の屈曲は強いナデにより鈍くなる。体部内面はケズリ、口縁部はナデ、外面全体はナデにより仕上げられる。

（124 － 14 ～ 15）は土師器壺である。

（124 － 14）は短頸壺である。丸底の底部から中ほどに最大径を持つ球形の体部が続く。口縁部はやや外反気味になり、口縁端部はナデにより丸く収められる。体部と口縁部の接合の屈曲はナ

デにより鈍くなる。体部・底部内面はナデで仕上げられるが、指頭圧痕と粘土紐接合痕が明瞭に残る。外面はハケのちナデにより仕上げられる。

（124 － 15）は小形壺である。やや肩の張る体部に外傾して開く口縁部が続く。口縁端部はナデにより丸く収められる。体部と口縁部の接合の屈曲はナデにより鈍くなる。内面全体はナデ、体部外面はケズリのち縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。

（124 － 16）は軟質韓式系土器である。平底の底部から緩やかに内湾する体部が立ち上がる。内面全体はナデ、外面はハケにより仕上げられる。

（124 － 17 ～ 23）は土師器高杯である。

（124 － 17）は皿状の杯底部から外反する口縁部が続く。その接合部は稜を持つ。口縁端部は丸く収められる。底部と脚台部の接合は円板充填法が用いられる。内外面ともにハケのちナデにより仕上げられる。

（124 － 18）は緩やかに外傾する口縁部が続く。口縁部と杯底部の接合部は稜を持たない。口縁端部はナデにより丸く収められる。底部と脚台部の接合は挿入法が用いられる。内外面ともに摩耗により調整不明である。

（124 － 19）は水平面を持つ底部に緩やかに外反して開く口縁部が続く。接合部は稜を持たず、口縁端部はナデにより丸く収められる。底部と脚台部の接合は挿入法が用いられる。内外面ともにハケのちナデにより仕上げられる。

（124 － 20）は水平面を持つ底部に緩やかに外傾して開く口縁部が続く。接合部は稜を持たず、口縁端部はナデにより丸く収められる。杯部と脚台部の接合は挿入法が用いられる。脚台部は中空の柱状部から屈曲をもって開く裾部が続く。杯部内外面ともに摩耗により調整不明。脚台部は柱状部内面にシボリメが残り、外面はヘラミガキが施される。杯部内面・脚台部外面に黒斑が残る。

（124 － 21）は外傾する口縁部である。口縁部と杯底部の接合部は稜を持たず、口縁端部はナデにより丸く収められる。杯部内面はナデ、外面はケズリのちナデにより仕上げられる。

（124 － 22）は脚台部で、中空の柱状部から屈曲をもって開く裾部が続く。裾端部はナデにより丸く収められる。内外面とも風化が激しく、調整は不明瞭である。外面にわずかにハケメが残る。

（124 － 23）は、杯部は水平面を持つ底部から緩やかに外反する口縁部が続く。口縁部と底部の接合部は稜をもたず、口縁端部はナデにより丸く収められる。杯部と脚台部の接合は挿入方が用いられる。脚台部は中空の柱状部から屈曲をもって開く裾部が続く。杯部内面はハケ（不明瞭）のちナデ、外面はナデ。脚台部は、柱状部内面はケズリ、外面はヘラミガキのちナデ。裾部内面はハケ（不明瞭）のちナデ、外面はヘラミガキにより仕上げられる。

④ピット・土坑出土遺物

図 125・図 126 に 3 －南区のピットから出土した遺物を掲載した。

（125 － 1 ）はピット 209 から出土した瓦器椀である。高台部は高くわずかに外に張り出し、口

縁部内面に段を持つ「大和型」である。風化のため調整は不明瞭であるが、内外面ともに密にヘラミガキが施されていたものと思われる。平安時代後期（11 世紀）に属する。

（125 － 2・3）はピット 210 から出土した。ともに庄内式土器であり、庄内 1 ～ 2 式に属する。

（125 － 2）は壺の口縁部である。大きく外反し、口縁端部は肥厚させ外面に面を持たせる。端面の上端に刻目を施す。また、端面には竹管文を施した粘土小円盤を貼り付けて円形浮文としている。口縁部上面には 2 帯の波状文を巡らせて装飾している。器表面の調整は、内面は横方向のヘラミガキ、外面にはハケのちナデを施す。

（125 － 3）は二重口縁壺の口縁部である。端部は横方向のナデにより面を持ち、口縁部の屈曲部には突帯を貼り付ける。内外面ともにナデにより仕上げられる。

（125 － 4 ～ 6）はピット 245 から出土した。すべて土師器甕であり、布留 2 ～ 3 式に属する。

（125 － 4）は口縁部から肩部である。口縁端部はナデにより丸く収められる。接合部の屈曲は明瞭であるが鋭角ではない。内外面全体風化により調整不明。

（125 － 5）は口縁部から肩部である。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は横方向のナデにより内側に肥厚させて丸く収める。口縁部と体部の接合部分の屈曲はナデにより鈍くなる。内外面全体をナデにより仕上げる。

（125 － 6）は口縁部から肩部である。口縁部は内湾しながら外に開く。口縁端部は外側にわずかに拡張させ、ナデにより水平な面とする。内外面全体をナデにより仕上げる。

（125 － 7 ・ 8）はピット 246 から出土した。ともに TK23 型式に属する。

（125 － 7）は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部との間にわずかに稜を持つ。口縁部は稜よりわずかに張り出して垂下し、口縁端部は内側に肥厚して面を持つ。天井部外面 3/4 に回転ヘラケズリが施される。ロクロ回転方向は右回りである。

（125 － 8）は須恵器𤮔である。体部は中程のやや上方に最大径を持ち、穿孔が施される。頸部は口縁部との境に段を持ち、外傾して開く口縁部が続く。底部外面には格子目状のタタキ、体部外面の穿孔部分に 2 条の凹線と、その間に波状文を施す。口縁部外面と頸部外面にそれぞれ波状文が施される。

（125 － 9・10）はピット 250 から出土した。ともに土師器壺である。わずかに外傾する口縁部で、端部は横方向のナデにより薄くなり、丸く収められる。内外面はナデにより仕上げられる。古墳時代中期中頃に属する。

（125 － 11 ～ 126 － 14）はピット 253 から出土した。すべて平安時代後期に属する。

（125 － 11）は土師器羽釜である。肩の張らない体部から短く屈曲して開く口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより面を持ち、体部内面はケズリ、外面はナデにより仕上げられる。

（125 － 12）は瓦器椀である。口縁端部付近は強いヨコナデによりわずかに外反し、端部は不明瞭な面をなす。炭素の吸着が甘く、内外面とも明黄褐色を呈す。

（125 － 13）は黒色土器である。内面のみ黒色を呈するいわゆる「黒色土器Ａ類」である。口縁端部は内側に段を持ち、端部付近の外面は横方向のナデによりわずかに外反する。杯部内面を密なヘラミガキ、外面はナデにより仕上げられる。

（126 － 14）は土師器羽釜である。球形に近い体部の中程よりやや上方に、水平にのびる幅広の鍔を持つ。内面を工具によるナデ、外面全体をナデにより仕上げる。内外面とも黒斑が残る。

（126 － 15）はピット 263 から出土した、土師器高杯の脚台部である。中空の脚台部から屈曲をもって開く裾部が続く。脚台部内面はわずかにシボリメが残り全体にナデを施す。外面はヘラミガキ、裾部外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられる。布留２～３式に属する。

（126 － 16・17）はピット 264 から出土した。（126 － 16）は土師器高杯である。椀形の杯部は口縁端部を横方向のナデによりわずかに外反させる。底部と口縁部の接合部にわずかな稜を持ち、脚台部との接合には円板充填法が用いられる。古墳時代中期に属する。

（126 － 17）は砂岩製の石鍬もしくは石斧の欠損品である。全体に研磨があり、頂部に敲打の集中する部分がみられる。刃部は縦方向の打撃もしくは使用により欠失する。一部被熱のため赤変する。

（126 － 18・19）はピット 274 から出土した。（126 － 18）は片岩である。断面不整楕円形を呈する棒状の石材で目立った加工痕は観察できない。（126 － 19）はサヌカイト製の楔もしくは石錐の未成品である。背面に大きく原礫面を残す。腹面にのみ細部調整があり、刃潰れなどの使用痕は観察できない。

（126 － 20）はピット 289 から出土した土師器甕である。球形の体部にやや内湾気味に外に開く口縁部が続く。口縁端部は内側に肥厚させ、横方向のナデにより外面をシャープに仕上げる。体部と口縁部の接合部はナデにより鈍くなる。布留３～４式に属する。

図 127・図 128 に３－南区の土坑から出土した遺物を掲載した。

（127 － 1 ～ 127 － 7）は土坑 20 から出土した。すべて土師器であり、布留２～３式に属する。

（127 － 1）は壺である。やや肩の張る長胴気味の体部に外傾する口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより尖り気味に終わる。体部と口縁部の接合部分はナデにより鈍くなる。内外面ともにナデにより仕上げられるが、体部は粘土紐接合痕、指頭圧痕が全体に複数残る。

（127 － 2 ～ 128 － 7）は高杯である。

（127 － 2）は脚台部で、緩やかに開く中空の柱状部に屈曲をもって大きく開く裾部が接合する。柱状部内面はシボリメが残り、裾部内面にはヘラミガキが施される。脚台部から裾部外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられる。

（127 － 3）は、杯部は広い水平部を有する底部から外反する口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより尖り気味に終わる。杯底部と口縁部の接合部は内外面とも稜を持つ。杯部と脚台部の接合には接合法が用いられる。器表面の調整は、杯部内外面は横方向のヘラミガキ、脚柱状部外面

には縦方向のヘラミガキが施される。また脚柱状部内面にはシボリメ、柱状部と裾部との接合部に指頭圧痕が残る。外面全体に黒斑が残る。

（128 － 4）は、杯部は浅い椀形の底部に屈曲をもって大きく外反する口縁部が続く。杯部と脚台部の接合には円板充填法が用いられる。脚台部は中空の柱状部に大きく開く裾部が接合する。裾端部は横方向のナデにより面を持つ。杯部内面はナデ、外面にはハケのちナデが施される。脚台部は、柱状部内面はシボリメが残るものの丁寧にケズリが施され、裾部内面はハケにより仕上げられる。脚台部外面にはヘラミガキが施される。

（128 － 5）は、杯部は水平面を持つ底部に緩やかに接合する口縁部を持つ。杯部と脚台部の接合には挿入付加法が用いられる。脚台部は中空の柱状部に屈曲をもって開く裾部が続く。器表面の調整は、杯部内外面はナデにより、脚台部は柱状部外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。柱状部内面にはシボリメが残る。

（128 － 6）は中空の脚柱状部から屈曲をもたずに開く裾部が続く。杯部と脚台部の接合に挿入付加法が用いられた痕跡がみられる。柱状部外面はヘラミガキのちナデにより仕上げられる。内面にはシボリメが残る。

（128 － 7）は中空の脚柱状部から屈曲をもって開く裾部が続く。裾端部はナデにより尖り気味に終わる。杯部と脚台部の接合には接合法が用いられる。柱状部外面は縦方向、裾部外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられる。柱状部内面にはシボリメが残る。

（128 － 8 ～ 14）は土坑 22 から出土した。（128 － 9 ～ 14）は土師器であり、古墳時代後期前半に属する。（128 － 8）は弥生土器であり、畿内第Ⅰ様式に属する混入品である。

（128 － 8）は弥生土器甕である。体部中ほどに最大径を持ち、緩やかに短く外傾する口縁部が続く。全体に風化が激しく端部にわずかに刻目が観察できるが、調整などは不明瞭である。

（128 － 9）は壺である。外傾して開く口縁部を持ち、端部はわずかに内湾する。口縁端部は横方向のナデにより丸く収められる。口縁部と体部の接合部の屈曲はナデにより鈍くなる。内外面全体をナデにより仕上げる。口縁部外面に煤が付着する。

（128 － 10 ～ 14）は高杯である。

（128 － 10）は裾部である。裾端部は横方向のナデにより面を持つ。内外面はハケのちナデ、外面には部分的にヘラミガキがみられる。

（128 － 11）は小形高杯である。水平面を有する体部からやや内湾気味の口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより丸く収められる。底部と口縁部の接合部分の屈曲はナデにより鈍くなる。脚台部の接合には接合法が用いられ、接合部付近には指頭圧痕が残る。杯部内外面はナデにより仕上げられる。杯部外面に黒斑が残る。

（128 － 12）は稜をもたない椀形の杯部を持つ。口縁端部は横方向のナデにより丸く収められる。底部と脚台部の接合には挿入付加法が用いられ、脚台部内面には丁寧なケズリが施される。内外面

流入土

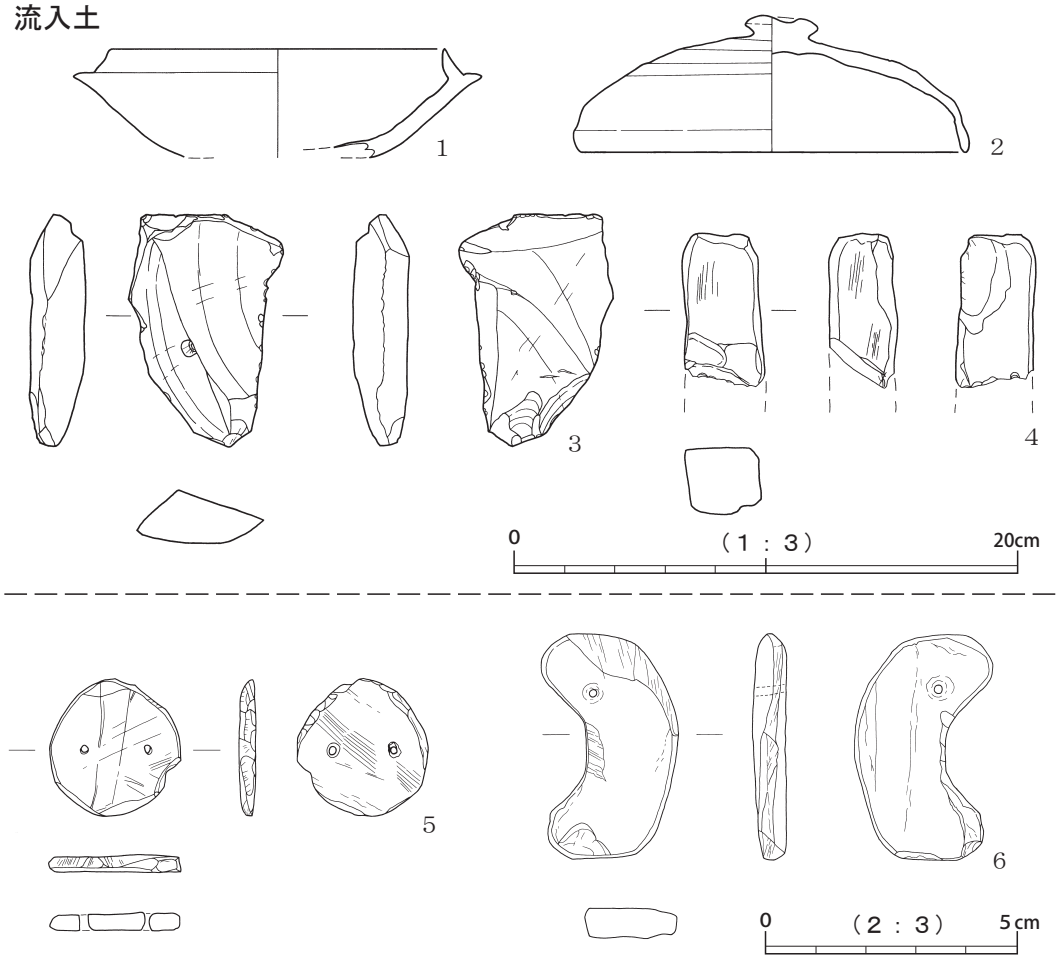


図 121　３－南区　流入土　出土遺物　（S.＝1/3・2/3）

住居 11

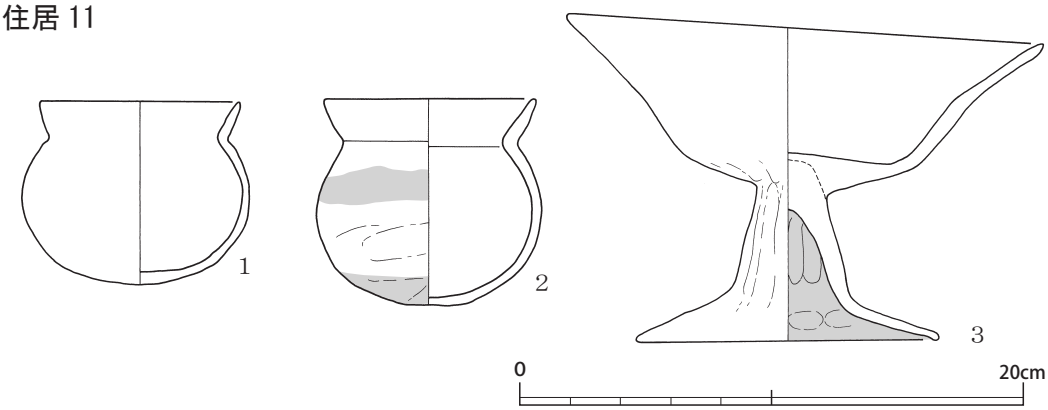


図 122　３－南区　住居　出土遺物（１）（S.＝1/3）

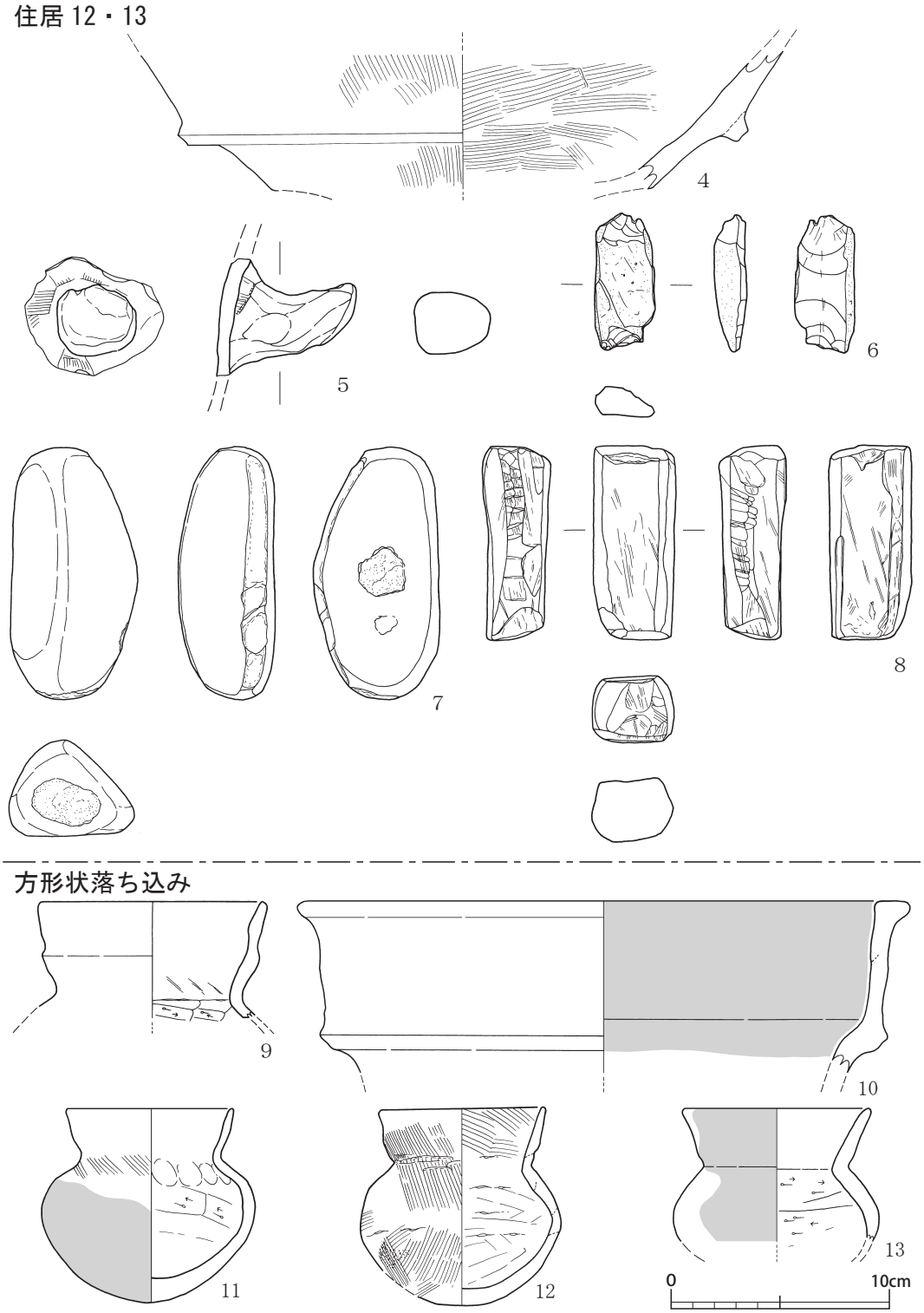


図 123　３－南区　住居　出土遺物（２）・方形状落ち込み　出土遺物（１）（Ｓ．＝1/3）

方形状落ち込み

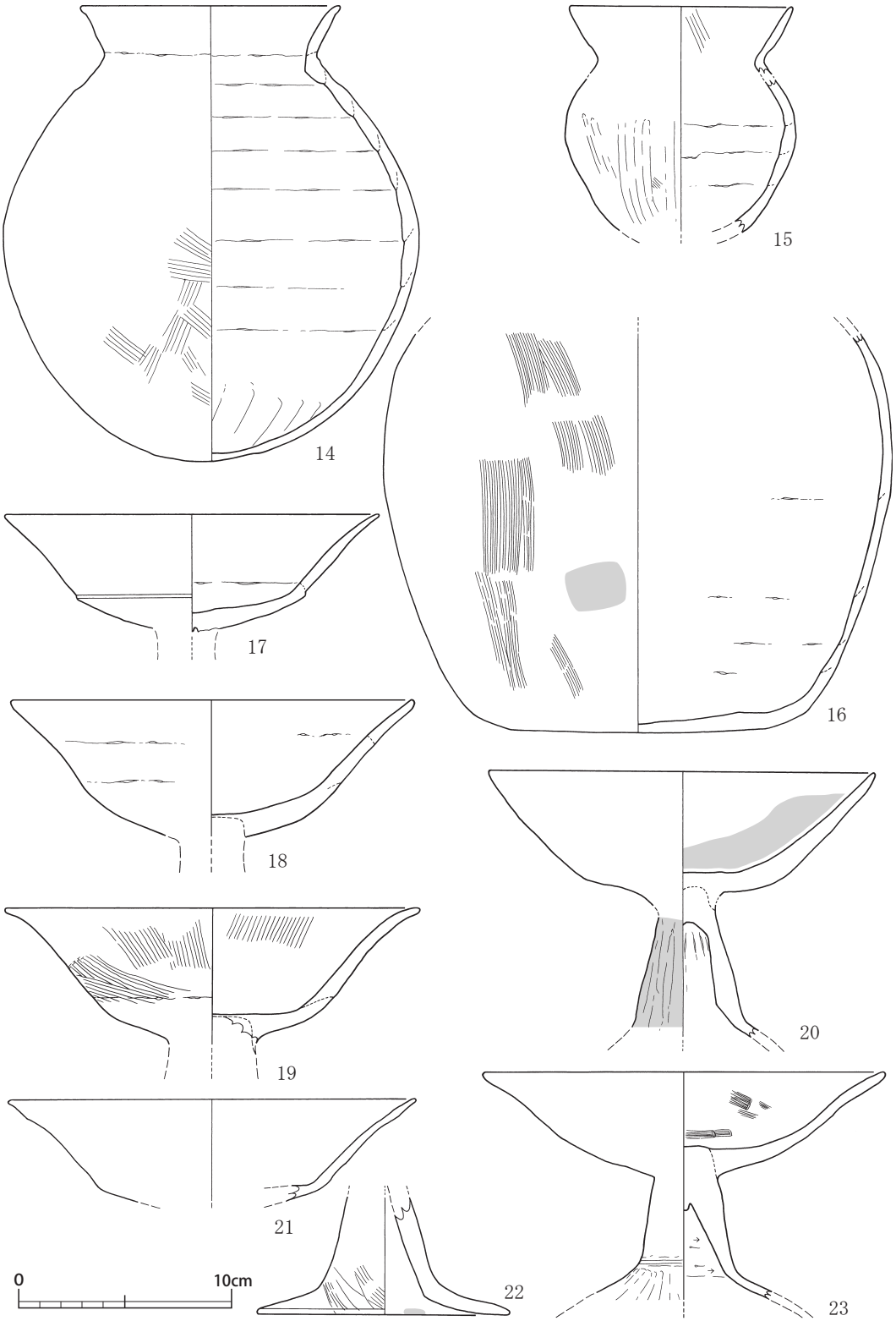


図 124　３－南区　方形状落ち込み　出土遺物（２）（Ｓ．＝1/3）

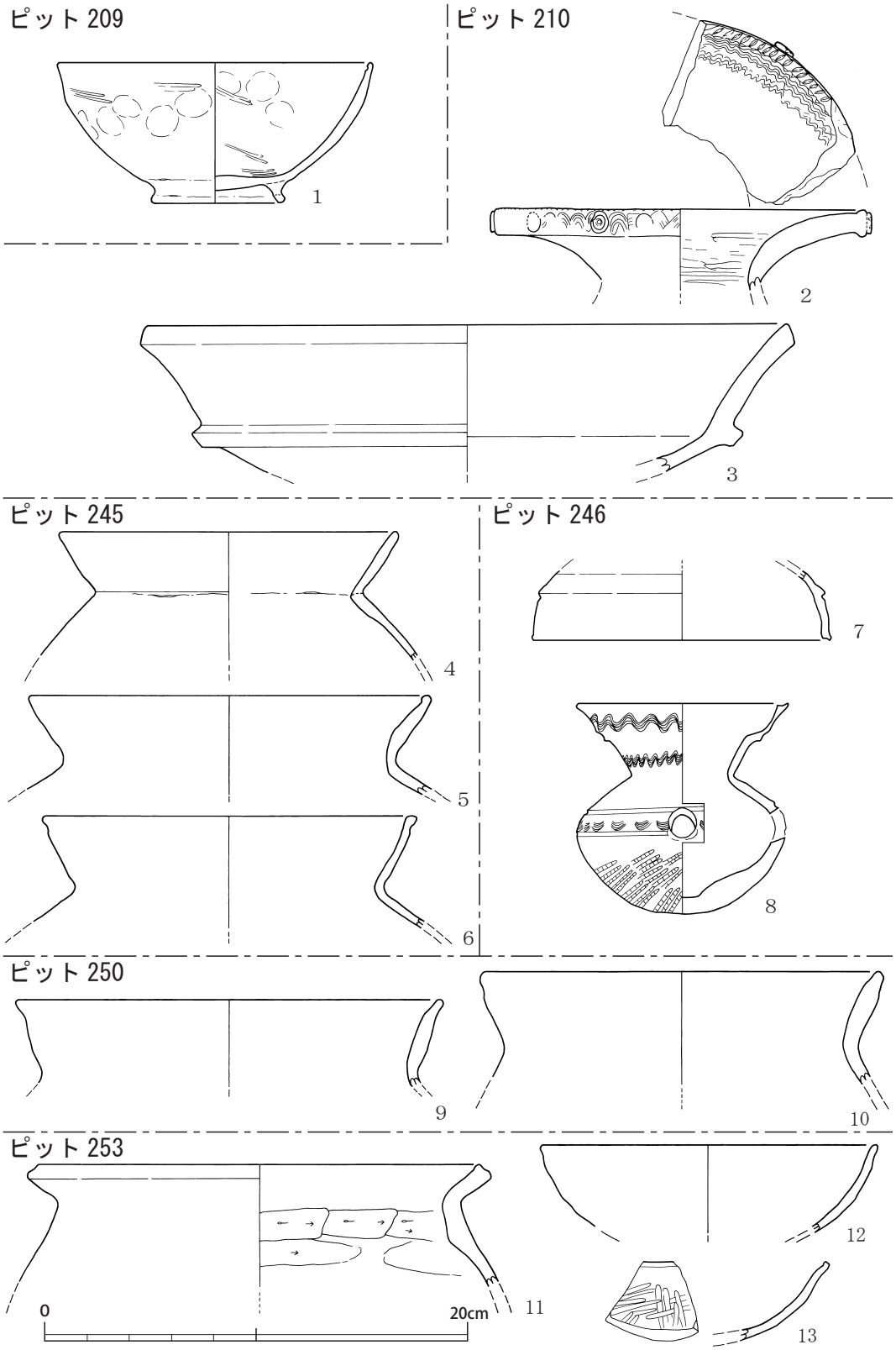


図 125　３－南区　ピット　出土遺物（１）（S.＝1/3）

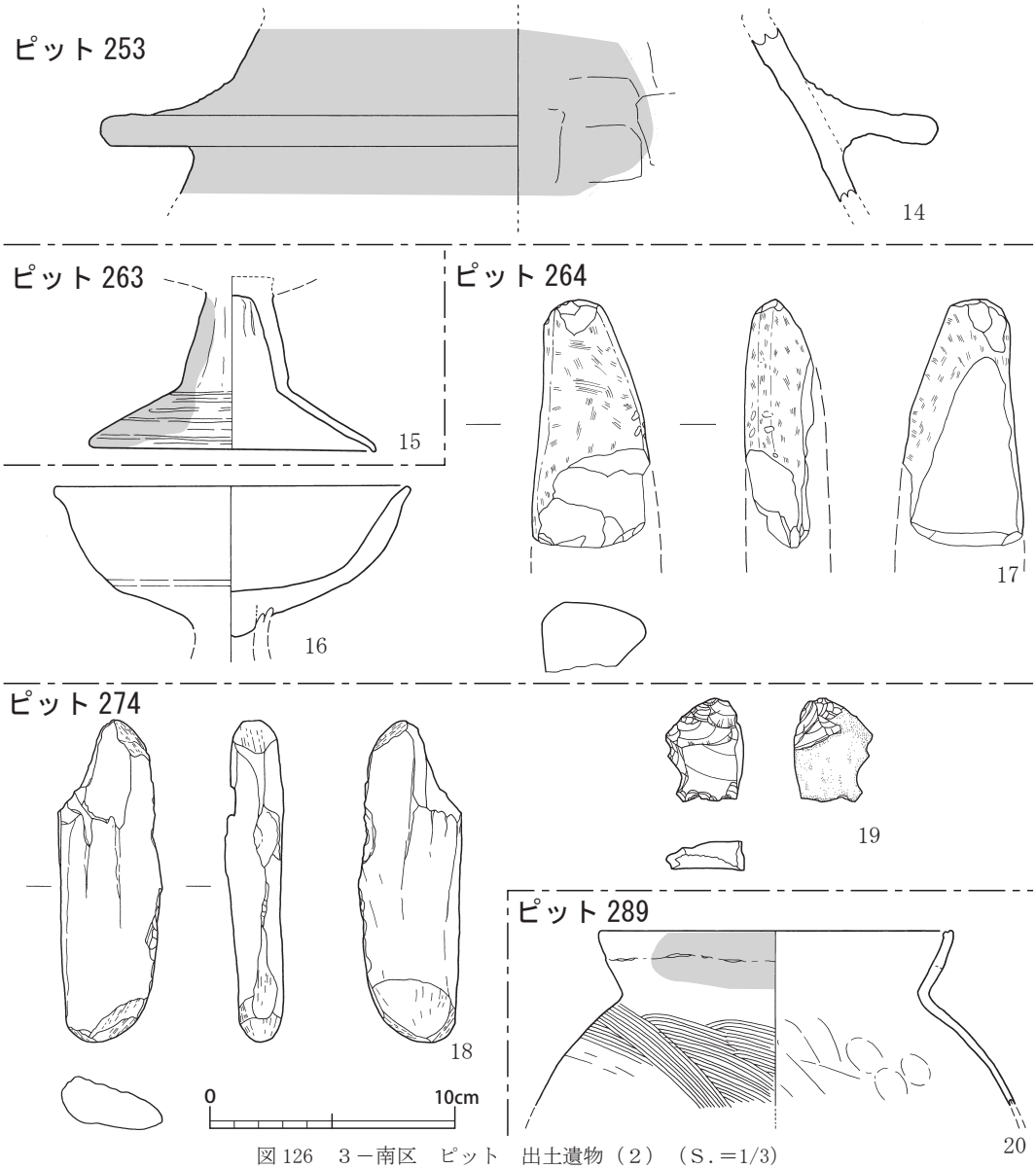


図 126　３－南区　ピット　出土遺物（２）（S.＝1/3）

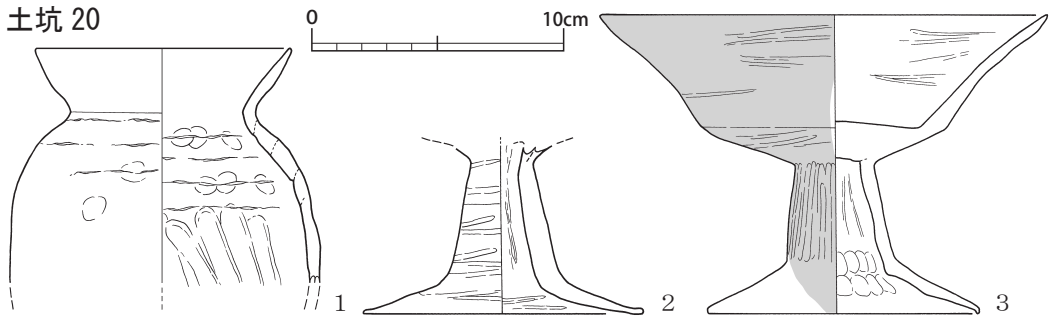


図 127　３－南区　土坑　出土遺物（１）（S.＝1/3）

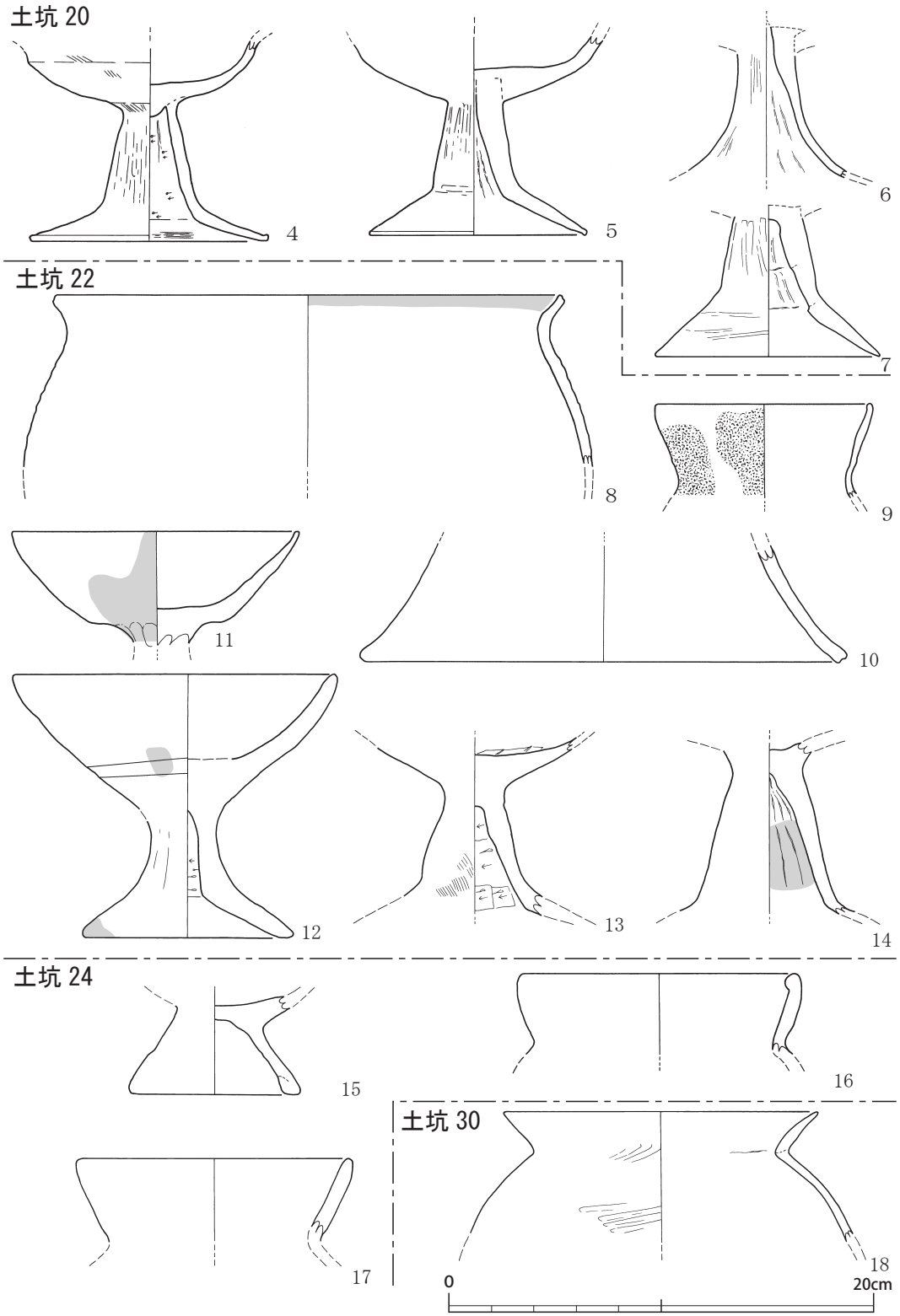


図 128　３－南区　土坑　出土遺物（２）（S.＝1/3）

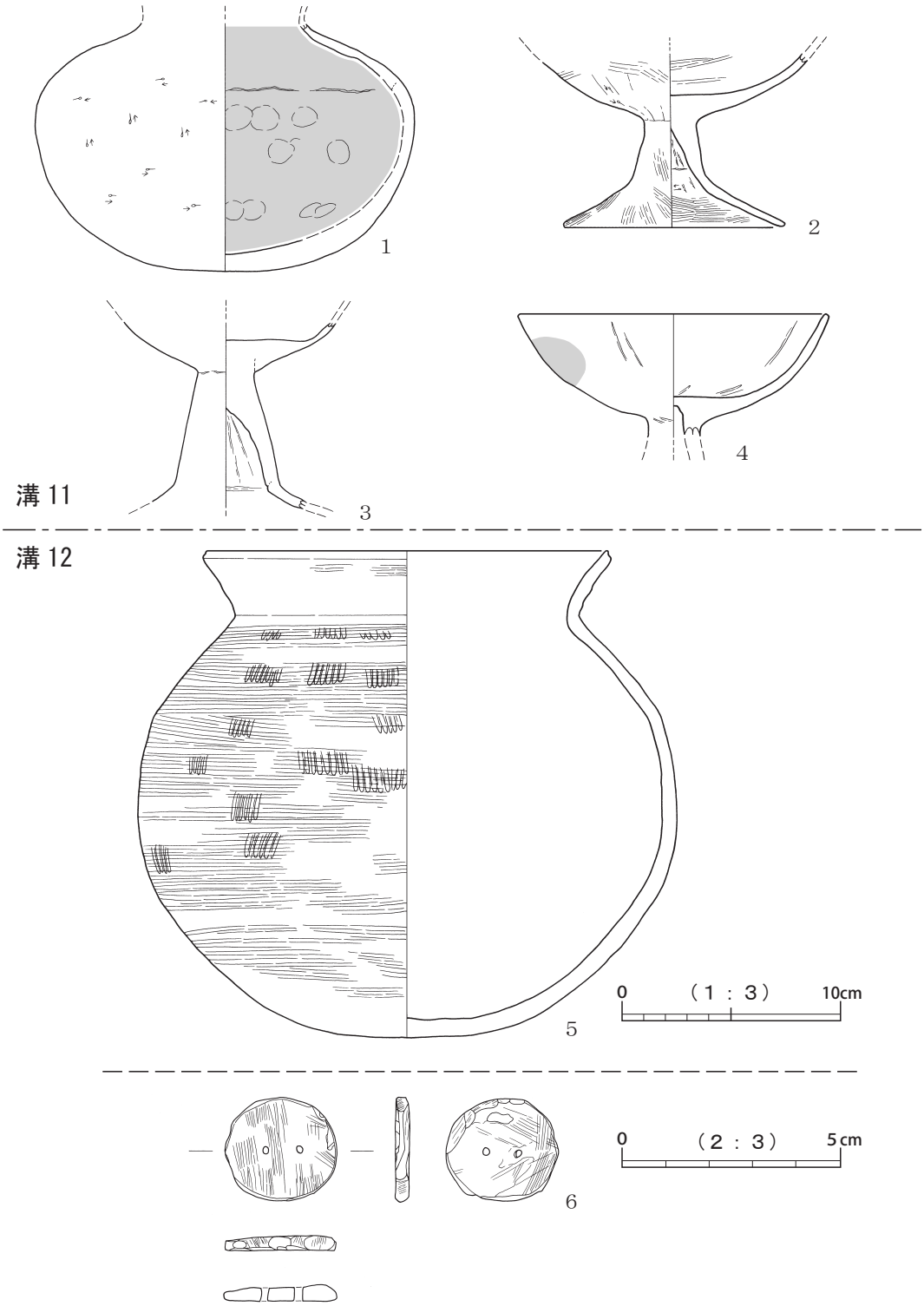


図 129　3－南区　溝　出土遺物　（S.＝1/3・2/3）

はナデにより仕上げられる。器壁が厚く全体に鈍い印象を持つ。杯部と裾部外面に黒斑が残る。

（128 － 13）は杯底部から脚柱状部である。杯部と脚台部の接合には挿入付加法が用いられる。脚台部内面には丁寧なケズリが施される。杯底部内外面はハケのちナデにより仕上げられる。

（128 － 14）は中空の脚柱状部である。内面にはシボリメが残り、全体はナデにより仕上げられる。

（128 － 15 ～ 17）は土坑 24 から出土した。すべて土師器であり、古墳時代中期中頃に属する。

（128 － 15）は脚台付甕の脚台部である。ハの字に張り出す脚台部の、端部は内側に折り返して肥厚させる。内外面ともにナデにより仕上げられる。東海地方の影響を受ける外来系土器である。

（128 － 16）は土師器壺の口縁部である。口縁端部は内側に肥厚させ、横方向のナデにより丸められる。

（128 － 17）は土師器壺の口縁部である。外傾して開く口縁部で、端部は横方向のナデにより丸く収められる。

（128 － 18）は土坑 30 から出土した庄内式土器甕である。肩の張る球形の体部に明瞭な屈曲をもって外反する口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより丸く収められる。内面全体はナデ、体部外面はタタキのちナデにより仕上げられる。庄内 1 ～ 2 式に属する。

⑤溝出土遺物

図 129 に 3 －南区の溝から出土した遺物を掲載した。

（129 － 1 ～ 4 ）は溝 11 から出土した。すべて土師器であり、古墳時代中期中頃に属する。

（129 － 1 ）は壺である。丸底から立ち上がる扁球形の体部は、最大径を体部上半に持つ。口縁部との接合部分の屈曲はナデにより鈍くなる。内面はナデ、指頭圧痕が複数残る。外面は不定方向のケズリにより仕上げられる。底部から体部の内面に黒斑が残る。

（129 － 2 ～ 4 ）は土師器高杯である。

（129 － 2 ）は水平面を持つ杯底部から緩やかに開く口縁部が続く。底部と口縁部の接合部は稜をもたず、杯部と脚台部の接合には挿入付加法を用いる。脚柱状部は短く中空で、屈曲をもって広がる裾部を持つ。杯部内面はヘラミガキ、外面はケズリのちハケの上からナデにより仕上げる。柱状部内面はケズリ、裾部はハケ、外面はハケのちナデにより仕上げられる。

（129 － 3 ）は水平面を持つ杯底部から緩やかに開く口縁部が続く。底部と口縁部の接合部は稜をもたず、杯部と脚台部の接合には挿入付加法を用いる。脚柱状部は中空で、わずかに中央が膨らむ。屈曲をもって広がる裾部を持つ。内外面ともに風化が激しいため調整等は不明瞭であるが、柱状部内面はシボリメが観察できる。

（129 － 4 ）は水平面を持つ杯底部から緩やかに開く口縁部が続く。底部と口縁部の接合部は稜をもたず、底部と脚台部の接合には挿入付加法を用いる。内外面ともに風化が激しいため不明瞭であるが縦方向のヘラミガキが部分的に観察できる。杯部外面に黒斑が残る。

（129 － 5 ・ 6 ）は溝 12 から出土した。

（129 － 5）は軟質韓式系土器甕である。球形の体部に外反して開く口縁部が続く。口縁端部は横方向のナデにより面をもつ。内面全体は風化が激しく不明瞭で、底部から体部外面はタタキのちカキメが施される。調整法は韓式系土器に倣ったものであるが、類似する器形は見当たらず、在地化のすすんだ韓式系土器であるといえよう。古墳時代中期前半に属する。

（129 － 6）は片岩製の有孔円板である。円板状に加工した石材に２箇所の穿孔を施す。

第４節　小結

２区では、自然地形である谷地形のほか、人為的遺構として住居跡、掘立柱建物、ピット群、土坑などを検出した。３－北区では、東西方向の谷地形を検出した。またその埋土中に構築された柵状遺構を検出した。３－南区では、住居跡のほか、土器が比較的多く出土する落ち込み、ピット、土坑などを検出した。

それらは残存状況や検出状況が良好ではなく、また遺物が出土しない場合も多いために、その形成時期を特定することは容易ではなかった。しかし、弥生時代の遺構が少数存在したが、その多くは古墳時代のものとみられる。

すなわち、この地点は、谷地形で囲まれる微高地に古墳時代の住居等が営まれる居住域が存在することが明らかになった。

第６章　第 12 －３次調査の成果

第１節　１区４トレンチ

図４に示したように、１区南端から北に約 30 mの地点に長さ４m、幅 2.5 mの東西にやや長いトレンチを設定した。

図 130 に示したように、耕作土層である１層、整地土層である２層の順に除去すると、暗褐色シルト層が見られた。同層は 10 ～ 20cm 程度の厚みのものであるが、トレンチの中央付近では、その直下に地山が存在した。耕土、床土の厚みは 40cm ばかりであったから、この部分での地山までの現地表面からの深さは 50 ～ 60cm 程度である。ただし、この地山はトレンチの東西で深く下がって行き、ここには、シルト、細砂、砂礫などが堆積していた。このような土層は、基本層序の３層にあたる南北方向の谷地形の埋土の一部であると考えられる。

このトレンチでは、これ以外の人工的な遺構は認めれず、遺物も出土しなかった。

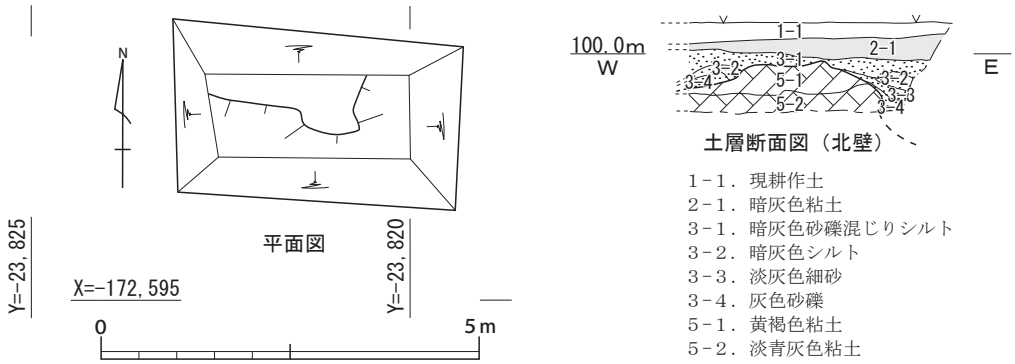


図 130　１区　４トレンチ　平面図・北壁　土層断面図　（Ｓ．＝1/100）

第２節　１区５トレンチ

図４に示したように、１区南端付近に長さ 14.5 m、幅４mのトレンチを設定した。

図 131 に示したように、トレンチの中央付近では、深さ約 1.3 ～ 1.4 m付近で黄褐色粘土の地山が見られた。ただしトレンチ内の東西端では地山が深くなっており､その上面を検出していない。

土層の堆積状況は、現耕作土を除去すると、砂、シルト、粘質土などが互層になっていた。そのような堆積は現地表面から約 80cm 下（標高 99.6 m付近）で二分されるようで、それより上位は、灰色系統の砂や砂混じりのシルトとなっている。一方それよりも下位は、最下層で砂の堆積が見られるがシルトから粘土が主体になっている。これらは南北方向の基本層序の３層にあたる谷地形の埋土である。

これ以外の人工的な遺構は認められなかったが、遺物は古墳時代とみられる土師器の小片や須恵器の小片が遺物袋１袋分出土した。

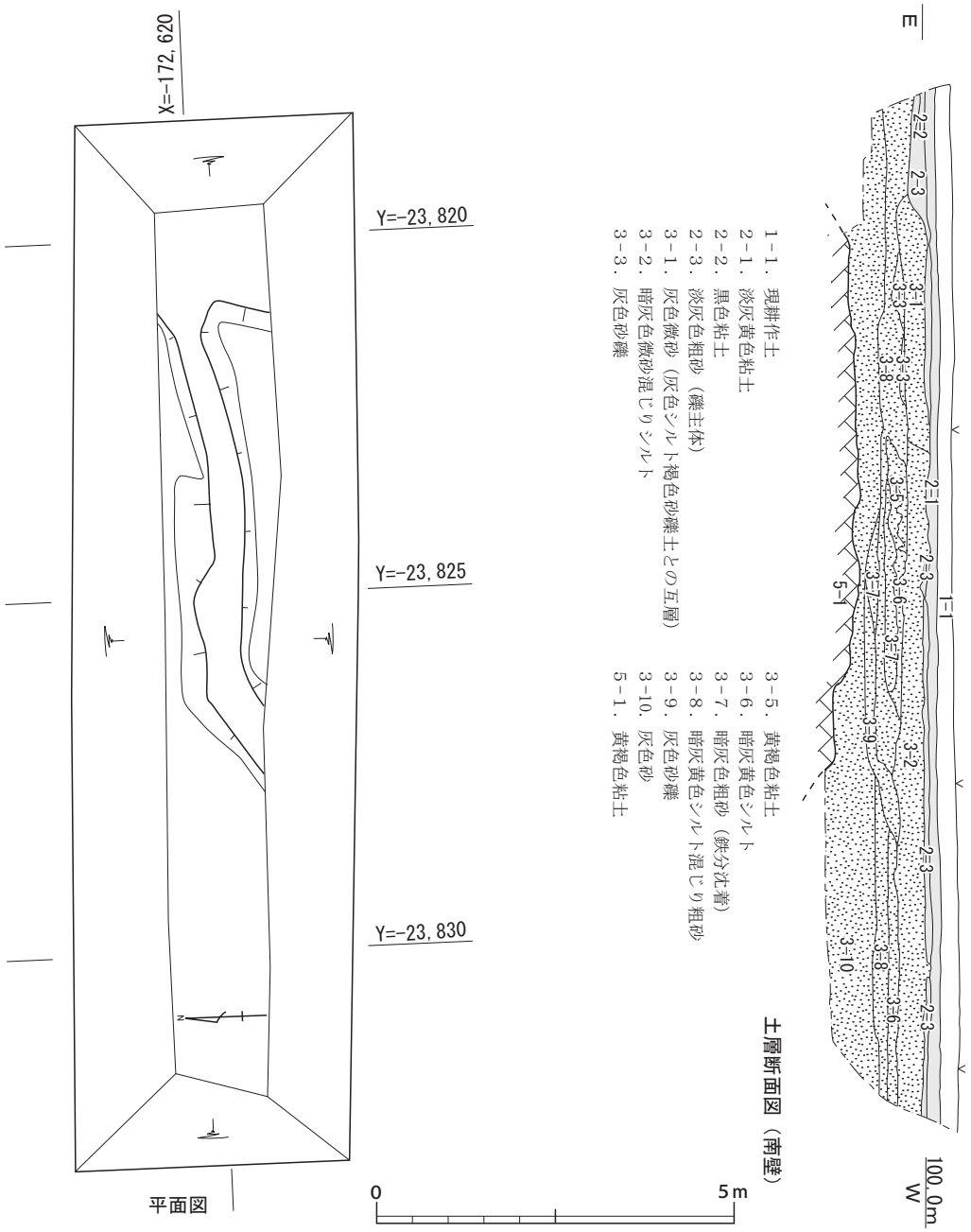


図 131　1 区　5 トレンチ　平面図・南壁　土層断面図　（S.＝1/100）

第３節　小結

1 区 4 トレンチと 5 トレンチともに耕作土層直下で谷埋土層を検出した。すなわち、当該地が南北方向の谷地形の内側に含まれることを確認した。このことは、第 12 － 1 次調査結果に符合するものである。

第７章　第 12 － 4 次調査の成果

第１節　１区６トレンチ

図４に示したように、１区の南半東寄りに設定したトレンチである。トレンチの北端と南端に当たる位置に６m四方のトレンチを設定し、その間を長辺 16 m、短辺 3.8 mのトレンチで繋いで一つのトレンチとした。

図 132 に示したように、耕作床土を除去するとその直下に２層である暗灰色粘質土層を基盤とする、南北に平行して掘削された素掘溝を検出した。さらにこの２層を除去すると、粘質土・シルト・砂質土・砂礫土などが入り混じった状態となる谷地形埋土（３層）がみられた。

また、地山は、図 132 の断面図に見えるように、最も高いところで現地表下 90cm の地点で検出したが、同図の平面図に示しているように、トレンチの南端付近では、それが南向きに下がっていく斜面およびその上端を検出した。この地点の谷地形は、これまでの調査成果から谷筋が南北方向に延びる地形であるとの認識であったが、この上端ラインは東西方向に延びているので、南北方向の谷地形とは直交している。そこで、調査区の周辺地形を図４によって改めて見てみると、当該トレンチが所在する１区南端のすぐ南側、すなわち１区と２区の境界は東西方向の深い谷になって流路が形成されていることがわかる。この状況から、この地点の地山の南方向への傾斜は、元の地形としてこの付近に東西方向の流路が存在しており、それぞれが幾分か埋没している状況であると理解できる。また、このような東西方向の流路の北岸に当たる上端線は、後述する 10 トレンチでも検出されたところであり、当該トレンチの上端線はその延長部に当たるものである。

南北方向の谷地形と東西方向の流路の先後関係は、平面的には明確に押さえることができなかったが、図 132 の断面図を見ると、トレンチ南端付近で地山が落ち込んでいく傾斜変換点付近から、北方向に斜めに立ち上がっていく、3-5 層と 3-13 層の分離線が見えている。これが、東西方向の流路の法面であれば、南北方向の谷地形が埋没した後に、東西方向の流路が形成されたことになる。このことは、現在なお流路が埋没せずに機能している現況や、後述する 10 トレンチにおける層位的理解と符合している。遺物は、古墳時代後期頃の須恵器が２点、谷埋土の上層から出土した。

第２節　１区７トレンチ

図４に示したように、１区のうち第 12 － 4 次調査地の北東隅に６m四方のトレンチを設定した。図 133 に見えるように、耕作床土下の暗灰褐色粘質土を除去すると、黄褐色粗砂、淡黄褐色砂礫の互層である谷埋土層が認められた。これは南北方向の谷地形の埋土なる３層である。

地山の確認は、トレンチの南半サブトレンチを設けることで行った。長さ５m、幅２mのサブトレンチを掘削したところ、現地表面から 80㎝の高さで青灰色粘土の地山を確認した。

遺物は谷埋土層から土師器片が遺物袋１袋分出土した。

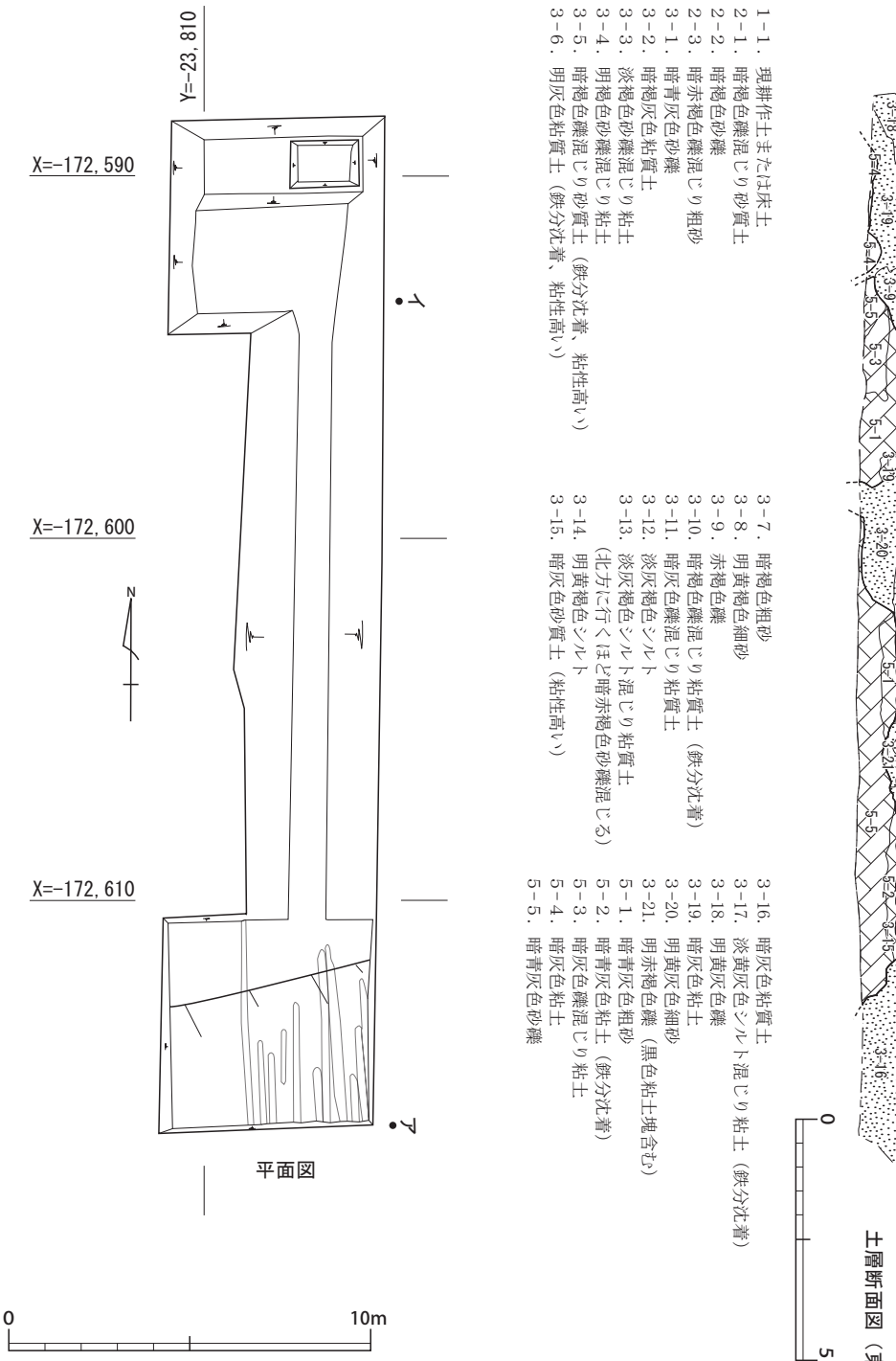
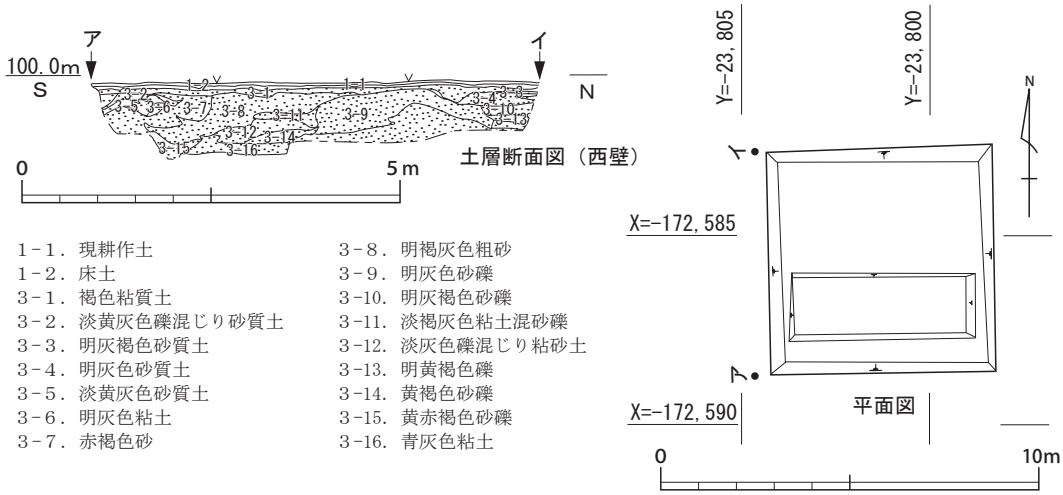


図 132　1 区　6 トレンチ　平面図　（S.＝1/200）・東壁　土層断面図　（S.＝1/150）



1-1．現耕作土
1-2．床土
3-1．褐色粘質土
3-2．淡黄灰色礫混じり砂質土
3-3．明灰褐色砂質土
3-4．明灰色砂質土
3-5．淡黄灰色砂質土
3-6．明灰色粘土
3-7．赤褐色砂
3-8．明褐灰色粗砂
3-9．明灰色砂礫
3-10．明灰褐色砂礫
3-11．淡褐灰色粘土混砂礫
3-12．淡灰色礫混じり粘砂土
3-13．明黄褐色礫
3-14．黄褐色砂礫
3-15．黄赤褐色砂礫
3-16．青灰色粘土

図 133　１区　７トレンチ　平面図　（S．＝1/100）・西壁　土層断面図　（S．＝1/200）

第３節　１区８トレンチ

図４に示したように、１区の第 12 － ４次調査地東端付近の中央で、６ｍ四方のトレンチを設定した。現地表面から 30㎝掘り下げたところで暗褐色粗砂を確認した。これは南北方向の谷地形の埋土であり、当該地点も南北方向の谷地形の内に当たると判断できたため、これ以上の掘削は行わなかった。

遺物は土師器片や瓦器片が５点ほど出土した。

第４節　１区９トレンチ

図４に示したように、１区の第 12 － ４次調査地南東端で、６ｍ四方のトレンチを設定した。耕作床土下の暗灰褐色粘質土を除去後、トレンチ東半で東西方向の素掘溝２条を検出した。

この素掘溝は灰白色粗砂上面に掘られたものであるが、この土層は東西方向の谷埋土の上層と対応する。またトレンチ北半で２×５ｍのサブトレンチを設定し掘削を行ったところ、この灰白色粗砂層は約 90㎝の厚みがあることがわかり、その下層に暗青灰色粘質土が堆積することを確認した。この暗青灰色粘質土は東西方向の流路埋土の下層と対応する。同層は厚さ 1.1ｍ以上確認したが、この時点で湧水量が増えたので危険作業を避けるために掘削を中止した。

遺物は、この流路埋土から土師器片が出土した。

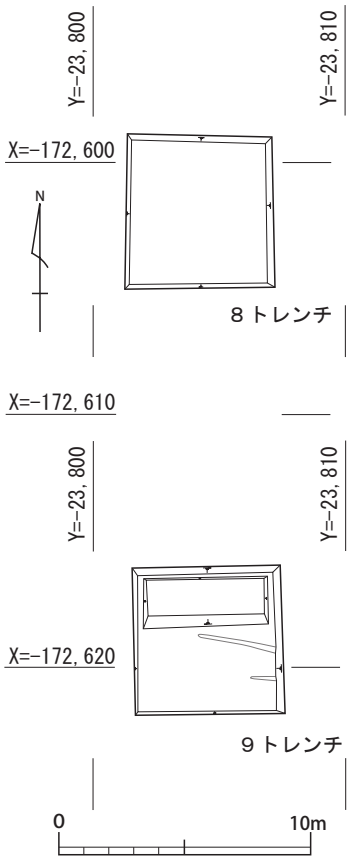


図 134　１区　８・９トレンチ
平面図（S．＝1/300）

第５節　１区 10 トレンチ

１．遺構

図４に示したように、１区の第 12 － 4 次調査地西半に、東西 35 m、南北 36 mのトレンチを設定し、10 トレンチとした。

図 136 に示したように、１層である耕作床土を除去すると、その直下で２層である暗灰褐色粘質土層が堆積していた。この２層上面で、図 135 に示したように、南北方向に平行して掘削された多数の素掘溝を検出した。

この暗灰褐色粘質土層は厚さ 20cm ほどのものであったが、これを除去すると、調査区の中央付近から北西部にかけて黄褐色粘質土の地山が検出された。つまり、地山の高さは、現耕作土面からは 50cm 程度までと比較的浅い地点に存在した。

図 135 に見える調査区の東端部は南北方向の谷地形に当たっており、調査区北東端から西に 10 mの地点から調査区南東隅の方向、すなわち北西－南東方向に谷の上端が形成されていて、これより東側は斜面となって下っている。一方、調査区の南端には、これとは別に東西方向の流路が存在した。南北方向の谷地形と東西方向の流路の埋土は、調査区の南東隅付近で切り合い関係が確認でき、東西方向の流路が新しい。埋土の土質・色調は、南北方向の谷地形は暗褐色粘質土であり、東西方向の流路のそれは、２層に大別でき、上層は灰白色粗砂で下層は暗青灰色粘質土である。

このほか、地山面上で検出した遺構は、東西方向の素掘溝 10 数条のほか、土坑２基があった。

①土坑 40（図 135・図 137）

土坑 40 は、図 135 に示したように、調査区中央やや西寄りで検出した。平面形は、図 137 に示したように、長軸 2.42 m、短軸 1.92 mは不整円形を呈する。深さは 52cm である。なお、図 137 に見えるように、土坑北西部が張り出して窪みができている。長軸 1.04 m、短軸 54cm ほど不整楕円形を呈して、これは元は別の土坑が存在したものであるかもしれない。

土坑 40 の埋土は、粘質土や礫などがブロック塊状に堆積しているので、人為的に埋め戻された様子が窺える。

遺物は埋土中に弥生土器や須恵器が混在している状況であった。

②土坑 41（図 135・図 137）

土坑 41 は、図 135 に示したように、調査区南半、中央付近で検出した。平面形は、図 137 に示したように、長さ 1.8 m、幅 96cm の不整形な楕円形を呈する。深さは 85cm を検出した。土坑 41 は、東西方向の流路の南向きの法面上に掘られていた。流路の上端付近に位置することから、その性格について、流路と何らかの関係があるかもしれないが、定かではない。埋土は砂が水平に堆積していることから、流路の水位上昇によって自然に埋まったと考えられる。

遺物は、瓦器、土師器、埴輪が混在して出土した。

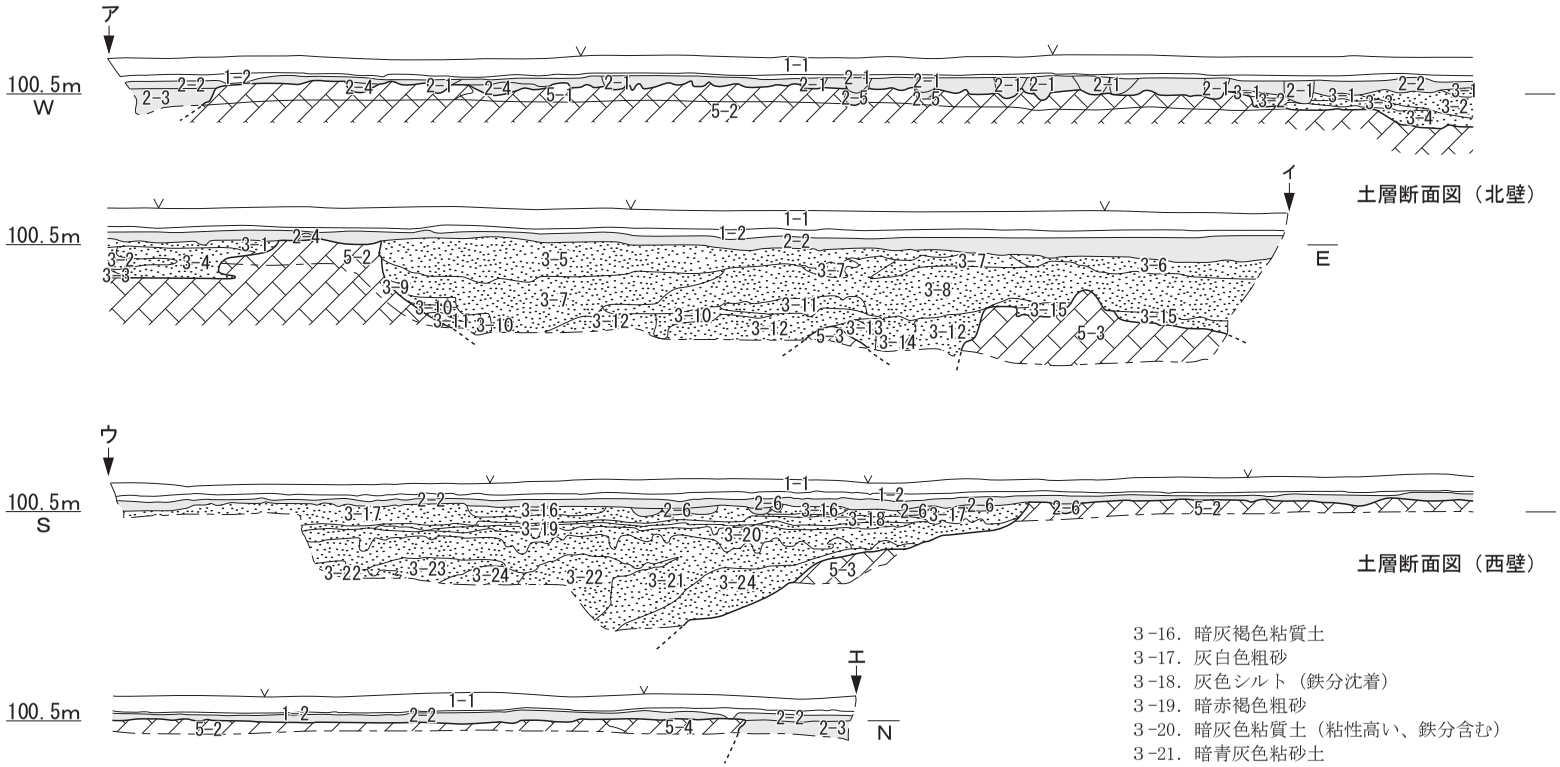
図 135　１区　10 トレンチ　平面図　（S.＝1/250）

第６節　遺物

１区６トレンチから 10 トレンチの遺物は、素掘溝から土師器片、須恵器片、瓦器片、磁器片、サヌカイト片が出土した。南北方向の谷地形の埋土、東西方向の流路、土坑から弥生土器片、埴輪片、土師器片、須恵器片、瓦器片、サヌカイト片などが出土した。そのうち図化可能であった２点を図 138 に図示した。

（138 － 1）は１区６トレンチから出土した弥生土器甕である。短く外反する口縁部を持つ。口縁端部には刻目、体部にはヘラ描沈線が３条残る。畿内第Ⅰ様式の新しい段階に属する。

（138 － 2）は１区 10 トレンチから出土した朝顔形埴輪である。残存長約８cm。須恵質で濃灰色を呈する。内面はハケのちナデ、外面は縦方向のハケのちナデにより仕上げられる。古墳時代中期に属する。



1-1．暗灰色粘質土
1-2．橙褐色粘質土
2-1．暗褐色粘質土
2-2．暗灰褐色粘質土
2-3．灰色礫砂
2-4．灰色粗砂
2-5．褐色粘質土（白色粘土粒、鉄分少々含む）
2-6．暗灰褐色粘質土（鉄分まだらに見られる）

3-1．暗灰褐色粘質土（鉄分含む）
3-2．暗灰色粘砂土
3-3．灰色礫
3-4．明黄褐色粘質土
（粘性が高い、鉄分含む）
3-5．暗褐色粘質土
3-6．暗灰色シルト
3-7．灰色礫砂

3-8．暗灰褐色シルト
3-9．暗橙褐色粘質土
3-10．暗灰褐色シルト
3-11．明褐色粘土
3-12．暗灰色礫
3-13．褐色礫
3-14．暗青灰色シルト
3-15．暗灰色粘質土

3-16．暗灰褐色粘質土
3-17．灰白色粗砂
3-18．灰色シルト（鉄分沈着）
3-19．暗赤褐色粗砂
3-20．暗灰色粘質土（粘性高い、鉄分含む）
3-21．暗青灰色粘砂土
3-22．暗赤褐色粗砂（鉄分含む）
3-23．暗青灰色シルト
3-24．暗青灰色砂土
5-1．明灰色粘質土
5-2．黄褐色粘質土（白色粘土粒多量に含む）
5-3．暗青灰色粘質土（白色粘土粒多量に含む）
5-4．灰色粘質土（粘性が高い）

0　5m

図 136　1 区　10 トレンチ　北壁・西壁　土層断面図　（S.＝1/100）

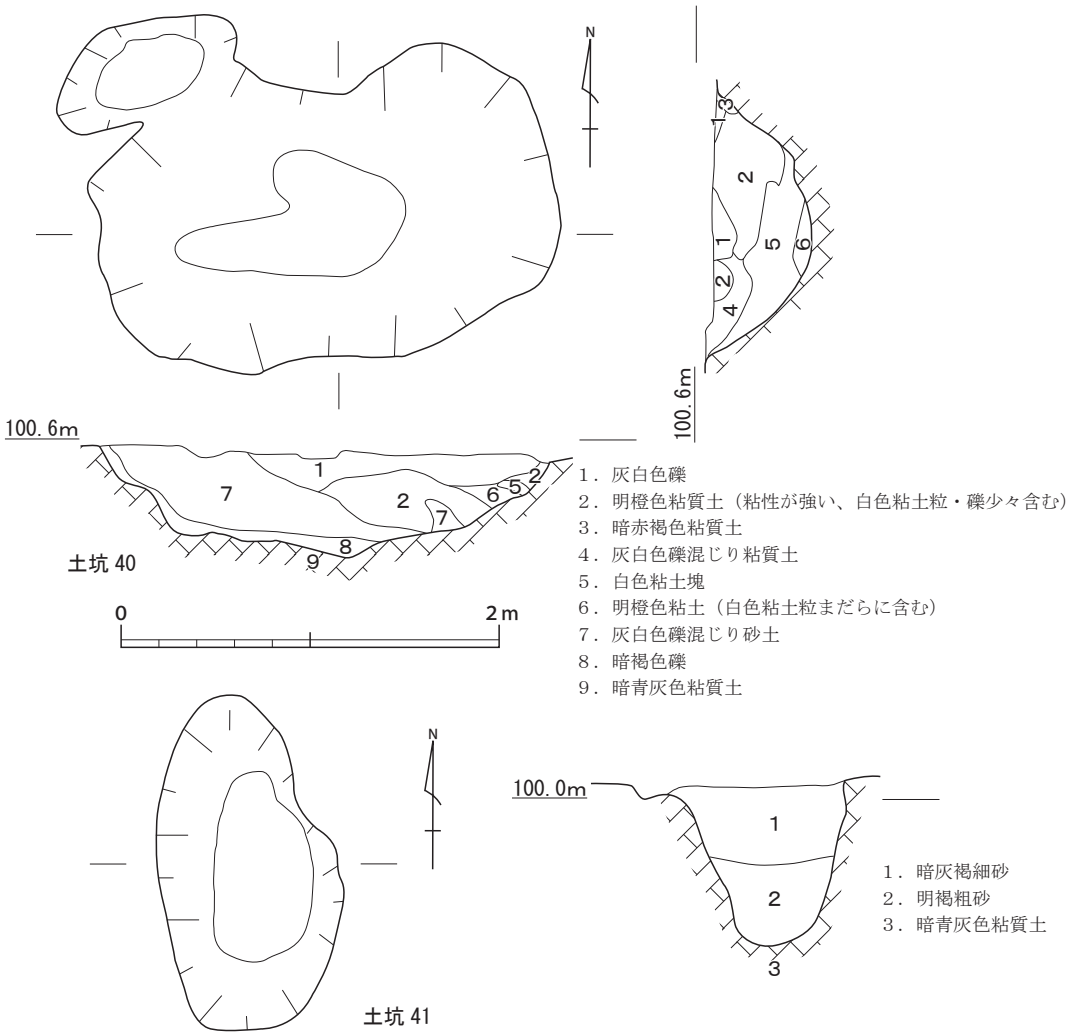


図 137　1 区　10 トレンチ　土坑　平面・断面図　（S.＝1/40）

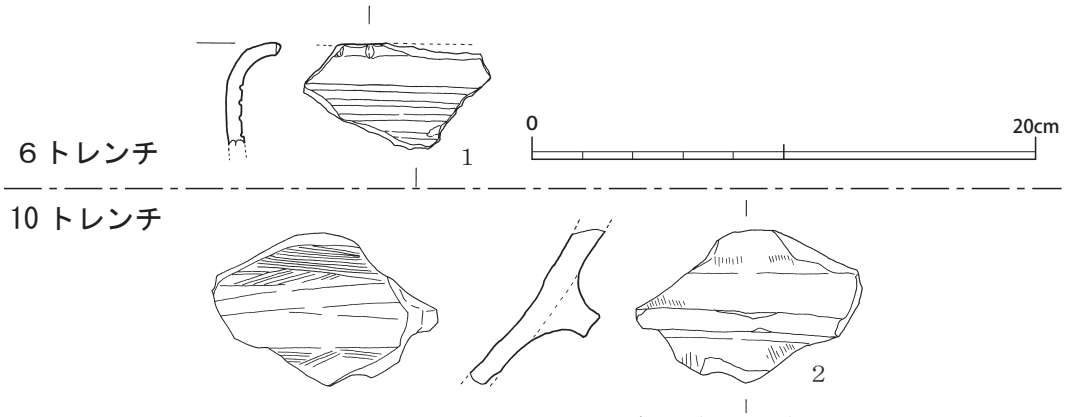


図 138　1 区　6・10 トレンチ　出土遺物　（S.＝1/3）

第７節　小結

１区 10 トレンチでは、南北方向の谷地形の西岸に当たる上端を検出した。一方調査区南端では、東西方向の流路が存在していた。この東西方向の流路は、調査区南東隅付近での埋土の切り合い関係から、南北方向の谷地形の埋没後に形成されたことが確認できた。また調査区の中央付近から北西部にかけて土坑や自然流路などを検出した。

１区６トレンチでは、調査区南端で 10 トレンチ南端で検出した東西方向の流路に繋がる東西方向の流路の延長を検出した。これより北側では南北方向の谷地形となっている。また、調査区内において南北方向の谷地形の東岸を検出することはできなかったが、これは第 12 － 1 次調査において、１区内では東岸を検出できなかったことと符合する。

第８章　まとめ

中西遺跡における今次発掘調査は、５地区に区分して行った。調査地の大部分は南北方向の谷地形が占めていた。

検出した人為的な遺構は以下の通りである。

住居跡　13　（２区 10、３－南区３）

掘立柱建物　1　（２区）

ピット　254　（２区 151、３－南区 103）

土坑　30　（１区２、２区 17、３－南区 11）

方形状落ち込み　1　（３－南区）

柵状遺構　1　（３－北区）

井戸　1　（３－北区）

これらの遺構の形成年代は、遺物が出土しない場合が多く、また残存状況や検出状況が良好でないために、明確に特定できないものが少なくなった。しかし、調査区全体から出土する土器の年代は、弥生時代から古墳時代ものが多かったことから、一部を除いてはおおむねこの年代に収まるものと考えられる。

弥生時代の遺構としては、２区で検出した住居１が特筆される。床面の中央に土坑を掘り、そこからトンネル状の遺構が住居の外側にまで延びているというものであった。これ以外には、庄内式の土器が出土する土坑 30（３－南区）があったが、多くの住居・ピット・土坑などの遺構は、古墳時代に形成されたものとみられる。ただし、古墳時代の中にあっても、前期、中期、後期のそれぞれの時期の土器が確認される場合もあったから、同一の時期ではなく、この調査地では、弥生時代後期から古墳時代後期頃まで、比較的長い期間に集落が営まれていたとみられよう。

また、今次調査では、遺構だけではなく出土遺物のあり方からこのような集落域の広がりが推定

できる場合もあった。すなわち、谷地形から出土する土器群である。各地区の谷地形を覆う埋土からは、弥生時代後期から古墳時代後期頃までの土器が多く出土した。なかには完形に近いものもあったことから、それらは比較的近い地点から谷に流れ込んだと考えられた。このようなことから、例えば弥生時代の遺構として明確なものは少なかったが、実際にはこの谷を取り巻く丘陵部には、当該期の集落がさらに展開していたと想定できる。

また、谷埋土や流入土には、埴輪片のほか、緑色凝灰岩製石釧・滑石製勾玉、同有孔円盤などの出土がみられることも注目できる。これらの石製品は集落の中で祭祀具として使用されたのかもしれないが、当該地が巨勢山古墳群が占地する丘陵部の先端に位置することから、元は古墳の副葬品であった可能性も考えられよう。

さて、今次調査地の周辺での遺跡を改めてみてみると、近年の発掘調査で、国道 309 号線より北側の地区で、弥生時代の水田遺構が広大な面積で広がることが確認されている。また調査地の西約 500 mの地点には、中期前葉に築造された大形前方後円墳である室宮山古墳が存在している。それぞれに重要な遺跡であるが、今次調査で検出された遺構の時期は、いずれもその年代を含んでいる。すなわち、中西遺跡における水田のうち弥生時代後期の水田が造営された時期や、室宮山古墳が築造された古墳時代中期前葉頃に、この地に集落が営まれていたということである。このことは同時代の遺跡として注目できるが、ただし、その割に今次調査では検出遺構がなお希薄である。これは、本来存在した遺構が削平等により検出されなかったのか、水田造営者の居住域や古墳築造に関わった人々の居住域はさらに別の場所にあるのか、その場合には、今次調査地の集落はどのように位置づけできるのかなど、検討するべき課題は多い。

〈参考文献〉

秋山日出雄・網干善教　1959　『室大墓』(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十八冊)
網干善教　1959　「御所市大字室　みやす塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十二輯
網干善教　1961a　「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺古墳」及び「水泥塚穴古墳」の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄録報』第十四輯
網干善教　1961b　「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編)』第四集
梅原末治　1922　「大和御所附近の遺蹟研究」『歴史地理』第参拾九巻　第四號　日本歴史地理學會
近江俊秀編　1993　『鴨神遺跡－第２～４次調査－』(『奈良県文化財調査報告書』第 66 集)
岡田憲一　2011　「秋津遺跡第４次調査」『奈良県遺跡調査概報　2010 年度』第二分冊
岡田憲一編　2017　『中西遺跡Ⅰ－京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う調査報告書（８）－』(『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第 123 冊)
岡田憲一・松岡淳平　2012　「秋津遺跡第５次調査」『奈良県遺跡調査概報　2011 年』第二分冊
岡田憲一・絹畠歩・中東洋行　2013　「秋津遺跡第６次調査」『奈良県遺跡調査概報　2012 年』第一分冊
岡田憲一・木村理恵　2015　「秋津遺跡第７－３次調査」『奈良県遺跡調査概報　2014 年』第一分冊
岡田憲一・中野咲　2015　「秋津遺跡第７－１次・７－２次調査」『奈良県遺跡調査概報　2013 年』第二分冊
岡田雅彦編　2013　『観音寺本馬遺跡Ⅰ（観音寺Ⅲ区）－京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う調査報告書（4）－』(『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第 113 冊)

岡本茂史ほか　2008 『八尾南遺跡－大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（『（財）大阪府文化財センター発掘調査報告書』第 172 集 ）
奥田智子編　2015 『巨勢山古墳群Ⅶ－京奈和自動車道建設に係る巨勢山 773 号墳の発掘調査－』（『御所市文化財調査報告書』第 47 集）
小栗明彦　2002 「御所市　中西遺跡　第４次調査報告書」『奈良県遺跡調査概報　2001 年度』第三分冊
小栗明彦　2003 「御所市　中西遺跡　第５次調査」『奈良県遺跡調査概報　2002 年度』第二分冊
金澤雄太　2014 「宮山北１号墳」『大和を掘る 32 － 2013 年度発掘調査速報展－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
金澤雄太　2015 「條ウル神古墳」『大和を掘る 33 － 2014 年度発掘調査速報展－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
河上邦彦　2001 「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史－村川行弘先生頌寿記念論集－』大阪経済法科大学出版部
河上邦彦・木下亘　2004 『巨勢寺』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第 87 冊）
北中恭裕編　2007 『極楽寺ヒビキ遺跡』（『奈良県文化財調査報告書』第 122 集）
絹畠歩　2015 「秋津遺跡第８次調査」『奈良県遺跡調査概報　2013 年度』第二分冊
絹畠歩・岩越陽平・西川加奈子　2017 「中西遺跡第27－１・27－２次調査」『奈良県遺跡調査概報　2016 年度』第一分冊
絹畠歩・西川加奈子・松吉祐希　2015 「秋津遺跡第９－２次調査」『奈良県遺跡調査概報　2014 年度』第一分冊
木許守　1990 『中西遺跡－第２次調査報告－』（『御所市文化財調査報告書』第９集）
木許守　1991 『中西遺跡－第３次調査報告－』（『御所市文化財調査報告書』第 10 集）
木許守　2005 『中西遺跡－第７次調査報告－』（『御所市文化財調査報告書』第 29 集）
木許守・藤田和尊　1996 『室宮山古墳範囲確認調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第 20 集』）
木許守編　1992 『鴨都波　11 次　発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第 11 集）
木許守編　2007 『巨勢山古墳群Ⅵ』（『御所市文化財調査報告書』第 30 集）
木許守・小泉翔太・村島有紀編　2017 『玉手遺跡』（『御所市文化財調査報告書』第 52 集）
木許守・西村慈子編　2015 『観音寺本馬遺跡』（御所市文化財調査報告書』第 48 集）
楠本哲夫編　1978 「御所市掖上鑵子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977 年度』
御所市教育委員会　1989 『ゴルフ場開発事業に伴う　第１回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
御所市教育委員会　1990 『ゴルフ場開発事業に伴う　第２回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
御所市教育委員会　2009 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅱ』（『御所市文化財調査報告書』第 35 集）
御所市教育委員会　2010 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ』（『御所市文化財調査報告書』第 37 集）
御所市教育委員会　2011 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅳ』（『御所市文化財調査報告書』第 40 集）
御所市教育委員会編　2003 『古代葛城とヤマト政権』　学生社
古代の土器研究会編　1992 『古代の土器（１）　都城の土器集成』
小林行雄編　1968 『弥生土器集成』　東京堂出版
阪本晋通編　2002 『鴨都波 16 次発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第 27 集）
佐々木健太郎　2012 『名柄遺跡　第６次　発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第 41 集）
佐藤小吉　1916 「権現堂古墳」『奈良県史蹟勝地調査會報告書』第三回　奈良縣
佐原眞　1968 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編２　日本考古学協会
島本一　1938 「琴柱形石製品の新例」『考古學雑誌』第二十八巻　第六號　考古學會
十文字健編　2007 『ドンド垣内古墳群』（『奈良県文化財調査報告書』第 119 集）
白石太一郎　1974 「御所市石川古墳群」『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会
白石太一郎・河上邦彦・亀田博・千賀久編　1976『葛城・石光山古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊）
末永雅雄　1932 「南葛城郡葛城村西北窪　和田山古墳」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』第二輯　奈良縣

鈴木一議編　2014 『観音寺本馬遺跡Ⅱ（観音寺Ⅱ区）－京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う調査報告書（５）－』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第 114 冊）
関川尚功　1989 「室大墓古墳外堤部発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第２分冊
高橋健自　1919 「南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回　奈良縣
田辺昭三　1966 『須恵邑古窯址群』Ⅰ（『研究論集』第 10 号）平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981 『須恵器大成』 角川書店
中世土器研究会編　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』
寺沢　薫編　1986 『矢部遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 49 冊）
豊岡卓之　1989 「鴨都波遺跡第７次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第１分冊
奈良県教育委員会　1980 「新宮山古墳」『奈良県指定文化財－昭和 54 年度版－』
濱口芳郎　2008「（29）中西遺跡（第９次調査）」『平成５～ 19 年度　市内遺跡発掘調査』（『御所市文化財調査報告書』第 34 集）
坂靖編　1996 『南郷遺跡群Ⅰ』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 69 冊）
坂靖編　2000 『南郷遺跡群Ⅳ』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第 76 冊）
平岩欣太　2012 『観音寺本馬遺跡』（『橿原市埋蔵文化財調査報告』第１冊）
廣岡孝信　2002 「北窪遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2001 年度』第三分冊
廣岡孝信　2006 「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報　2005 年度』第二分冊
廣岡孝信・十文字健　2005 「北窪遺跡 2004 －第１次調査　伏見遺跡 2004 －第１・２次調査」『奈良県遺跡調査概報　2004 年』 第二分冊
藤田和尊　1987 「御所市・小林遺跡の調査」『季刊明日香風』第 23 号　財団法人飛鳥保存財団
藤田和尊　1991 「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42（1989 年度版）　日本考古学協会
藤田和尊　1992 「護岸材について」『鴨都波　12 次　概報』（『御所市文化財調査報告書』第 12 集）
藤田和尊　1994 『楢原遺跡Ⅰ』（『御所市文化財調査報告書』第 17 集）
藤田和尊・木許守　1999 『台風７号被害による室宮山古墳出土遺物』（『御所市文化財調査報告書』第 24 集）
藤田和尊編　1985 『巨勢山境谷 10 号墳発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第４集）
藤田和尊編　1987 『巨勢山古墳群Ⅱ－御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査１－』（『御所市文化財調査報告書』第６集）
藤田和尊編　2002 『巨勢山古墳群Ⅲ』（『御所市文化財調査報告書』第 25 集）
藤田和尊・尼子奈美枝編　1992 『鴨都波　12 次　概報』（『御所市文化財調査報告書』第 12 集）
藤田和尊・木許守編　2001 『鴨都波１号墳　調査概報』学生社
前園実知雄・関川尚功・中井公　1978 「御所市朝妻廃寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977 年度』
松田真一　1997 『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
松田真一・近江俊秀・清水昭博　1993 「御所市高宮廃寺について」『青陵』第 83 号　奈良県立橿原考古学研究所
松吉祐希　2015 「秋津遺跡第９- １次調査」『奈良県遺跡調査概報　2013 年度』第二分冊
本村充保　2015 「中西遺跡第 21 次調査」『奈良県遺跡調査概報　2013 年度』第二分冊
本村充保編　2017 『観音寺本馬遺跡Ⅲ（観音寺Ⅰ区）－京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う調査報告書（７）－』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第 121 冊）
本村充保・中野咲　2010 「今出遺跡（池之内地区）」『奈良県遺跡調査概報　2009 年度』第三分冊
本村充保・中野咲　2013 「中西遺跡第 18 次調査」『奈良県遺跡調査概報　2012 年度』第一分冊
本村充保・前田俊雄・中野咲・杉山拓己・佐々木芽依　2017 「中西遺跡第 26 次調査」『奈良県遺跡調査概報　2015 年度』第二分冊
米川仁一・菊井佳弥　2010 「秋津遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2009 年度』第三分冊

別　表

別表１　出土土器　観察表（影山美智与・千喜良敦）……195
別表２　出土石器・石製品　観察表（影山美智与）……243
別表３　出土木製品・木器等　一覧表
　１．護岸材　一覧表（井ノ上佳美）……249
　２．護岸材以外の木製品等　一覧表　（井ノ上佳美）……250

別表１　出土土器　観察表

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
47 － 1 弥生土器　壺 １区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　7.3cm 底径　7.7cm（底部残存） ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ハケ（４条 /cm）のちヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ 内面　ハケ（４条 /cm）のちヘラミガキ	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色～ 10YR2/1 黒色 ・10YR6/2 灰黄褐色～ 10YR2/1 黒色	・畿内第Ⅰ様式 ・内面全体に黒斑残る
47 － 2 弥生土器　甕 １区　３トレンチ　谷地形	口径　22.6cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.8cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ヘラ描沈線４条、ナデ 内面　ケズリ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・5YR6/6 橙色～ 7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・畿内第Ⅰ様式
47 － 3 弥生土器　甕 １区　３トレンチ　谷地形	口径　17.9cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　11.5cm 底径　－ ・外面　ナデ、ヘラミガキ（摩滅）、ヘラ描沈線１条 内面　ハケ（４条 /cm）のちナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石含む	・7.5YR5/4 にぶい褐色 ・5YR6/4 にぶい橙色～ 5YR2/1 黒色	・畿内第Ⅳ様式 ・口縁部～体部内外面に煤付着
47 － 4 庄内式土器　弥生系甕 １区　１トレンチ　谷地形	口径　23.4cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　5.4cm 底径　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ハケ（５条 /cm）のち強いナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・庄内１式
47 － 5 土師器　皿 １区　３トレンチ　谷地形	口径　17.0cm（残存 1/3 からの回転復原） 残存高　2.0cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・平安時代中頃（10 世紀）
47 － 6 土師器　羽釜 １区　１トレンチ　谷地形	口径　32.6cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　5.3cm 底径　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y7/3 浅黄色～ 10YR7/6 明黄褐色 ・2.5Y7/3 浅黄色～ 10YR7/6 明黄褐色	・室町時代（15 世紀後半） ・鍔部外面下部に煤付着
47 － 7 須恵器　杯身 １区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　2.0cm 底径　12.0cm（残存 1/3 からの回転復原） ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	密	・7.5 Y 7/1 灰白色 ・5 Y 7/2 灰白色	・奈良時代（８世紀） ・全体に摩耗
47 － 8 須恵器　甕 １区　３トレンチ　谷地形	口径　25.6cm（口縁部残存 1/8 からの回転復原） 残存高　9.2cm 底径　－ ・外面　強いナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・　－	良好	密	・N6/0 灰色 ・N5/0 灰色	・鎌倉時代（13 世紀） ・東部播系須恵器 ・ロクロ回転方向左回り
47 － 9 瓦器　椀 １区　１トレンチ　谷地形	口径　10.3cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　2.7cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキ ・　－	良好	密	・2.5Y7/1 灰白色～ 2.5Y7/3 浅黄色 ・2.5Y7/1 灰白色～ 2.5Y7/3 浅黄色	・鎌倉時代（13 世紀）

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
47 － 10 瓦器　椀 １区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　1.4cm 底径　6.0cm（残存 1/3 からの回転復原） ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキ	良好	密	・N4/0 灰色 ・N5/0 灰色	・12 世紀前半
49 － 1 土師器　二重口縁壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　26.2cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　12.4cm 底径　－ ・外面　ナデ、ハケ（７～８条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（７～８条 /cm）のちナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、雲母含む	・2.5Y7/2 灰黄色 ・2.5Y7/2 灰黄色	・布留１式 ・東部瀬戸内系
49 － 2 弥生土器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　8.8cm 底径　3.8cm ・－ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・7.5YR6/8 橙色 ・5YR5/6 明赤褐色	・畿内第Ｖ様式
49 － 3 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　13.2cm（残存から 1/4 の回転復原） 残存高　4.0cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ハケ（６条 /cm） ・外面　ハケ（10 条 /1.4cm） 内面　ヘラケズリ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・古墳時代中期 ・口縁部外面に黒斑残る
49 － 4 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　21.0cm（残存 1/3 からの回転復原） 残存高　10.0cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ハケ（６条 /cm） ・外面　ハケ（８条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y7/3 浅黄色	・古墳時代中期
49 － 5 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　13.0cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　5.6cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ハケ（７～８条 /cm） ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・古墳時代後期
49 － 6 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　19.8cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　7.6cm（全体 1/6 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（10 条 /cm） 内面　指頭圧痕のちナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、雲母含む	・10YR3/4 暗褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・古墳時代中期 ・生駒西麓産
49 － 7 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　15.8cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　5.7cm 底径　－ ・外面　ハケ（7 条 /cm）、ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR7/3 にぶい橙色 ・10YR7/3 にぶい橙色	・古墳時代中期
49 － 8 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　17.4cm 残存高　4.5cm（全体 1/6 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（６条 /cm） 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR5/2 灰黄褐色～ 10YR4/1 褐灰色	・古墳時代中期 ・体部内面に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
49 ー 9 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　15.2cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　4.9cm 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ハケ（５条 /cm） ・外面　ナデ 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・古墳時代中期 ・体部内面に黒斑残る
49 ー 10 土師器　甕 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　12.8cm（残存 2/5 からの回転復原） 残存高　14.9cm（頸部以下完形） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ハケ（５条 /cm）のちナデ ・外面　ハケ（９～ 10 条 /cm） 内面　指頭圧痕、ナデ、ハケ（５条 /cm） ・外面　ハケ（９～ 10 条 /cm） 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ	良好	φ１mm 以下の長石、雲母、赤色斑粒含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR6/2 灰黄褐色	・布留２式 ・底部内面、口縁部から底部外面に炭化物、煤付着
49 ー 11 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　18.9cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　7.2cm（全体 1/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ ・外面　ハケ（６条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR7/3 にぶい橙色 ・10YR5/2 灰黄褐色	・古墳時代中期中頃
50 ー 12 土師器　甕 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　18.3cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　8.4cm（全体 3/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ハケ（５条 /cm） ・外面　ハケ（５条 /cm）、ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・古墳時代中期
50 ー 13 土師器　鉢 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　37.2cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　7.1cm 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・古墳時代後期
50 ー 14 土師器　小形鉢 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.4cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.2cm（全体 1/5 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR4/2 灰黄褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・古墳時代後期
50 ー 15 土師器　壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　16.0cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　6.6cm 底径　ー ・外面　ナデ、下端部に爪形文（２～３本 /cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR5/2 にぶい灰黄褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・古墳時代中期
50 ー 16 土師器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　15.2cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　3.9cm（全体残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ヘラケズリ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・古墳時代中期

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
50 － 17 土師器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　15.2cm（残存 5/6 からの回転復原） 残存高　5.9cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ、ハケ（３条 /cm） ・外面　ナデ 内面　ナデ、ハケ（３条 /cm） ・　－	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色・10YR4/2 灰黄褐色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・古墳時代後期
50 － 18 土師器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　8.6cm（脚台部残存 2/5 からの回転復原） 裾部径　10.6cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　シボリメ、ナデ、ヘラケズリ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y7/2 灰黄色 ・2.5Y7/2 灰黄色	・古墳時代中期
50 － 19 土師器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　7.1cm（脚台部残存 7/12 からの回転復原） 裾部径　9.2cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ、ヘラケズリ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・5YR5/8 明赤褐色 ・5YR5/8 明赤褐色	・古墳時代中期
50 － 20 土師器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径 残存高　6.3cm（脚台部残存 3/10 からの回転復原） 裾部径　10.0cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ、ヘラケズリ	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/3 にぶい黄色	・古墳時代中期
50 － 21 土師器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　6.5cm（脚台部残存 5/6 からの回転復原） 裾部径　8.5cm ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・5YR6/6 橙色 ・5YR6/6 橙色	・古墳時代中期 ・透孔（円形）４孔
50 － 22 土師器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　6.1cm（脚台部残存 7/12 回転復原） 裾部径　8.9cm ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラケズリ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・古墳時代中期
50 － 23 土師器　小形鉢 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　11.9cm（残存 1/2 からの回転復原） 残存高　4.45cm 底径　6.9cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　板ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒、微砂の雲母含む	・5YR5/2 灰黄褐色 ・10YR3/1 黒褐色	・古墳時代後期 ・杯部内外面に炭化物付着
50 － 24 土師器　小形鉢 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　13.5cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　5.2cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（５条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ハケ（５条 /cm） 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・古墳時代後期

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
50 － 25 土師器　小形鉢 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.0cm 残存高　5.2cm（完形） 底径　5.2cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、微砂の雲母を含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・古墳時代後期 ・杯部外面に黒斑残る
50 － 26 土師器　甑もしくは鉢（把手） ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　6.1cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　指頭圧痕、ナデ 内面　指頭圧痕、ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・7.5YR6/6 橙色 ・5YR6/6 にぶい橙色	・古墳時代中期
50 － 27 土師器　把手付鉢（把手） ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　5.2cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ナデ、ハケ（５条 /cm） 内面　指頭圧痕、ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/3 にぶい黄色	・古墳時代中期
51 － 28 土師器　甑 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　27.4cm 残存高　26.2cm（全体 4/5 残存） 底径　13.4cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　縦方向のハケ（５条 /cm）のち横方向のハケ（５条 /cm）。把手指頭押圧、ナデ、ヘラ状工具による切れ込み(貫通) 内面　ハケ（４条 /cm）のちナデ ・外面　ナデ 内面　ハケ（４条 /cm）のちナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・5YR6/6 橙色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・古墳時代中期 ・蒸気孔中央１ヶ所、その周囲に５カ所あり
51 － 29 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.2cm（4/5 残存） 器高　4.9cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	φ２mm 以下の長石、黒色砂粒含む	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部に降灰あり
51 － 30 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.2cm（残存 2/5 からの回転復原） 器高　4.4cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
51 － 31 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　9.5cm（9/10 残存） 器高　4.9cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・体部から底部外面にヘラ記号あり

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
51 － 32 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.6cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　5.0cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N7/0 灰白色 ・N7/0 灰白色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
51 － 33 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　9.8cm（残存 1/5 からの回転復原） 器高　4.3cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 － 34 須恵器　杯身 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　10.7cm（ほぼ完形） 残存高　4.8cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・体部から底部外面に自然釉 ・受部に重ね焼き時の破片付着
52 － 35 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.2cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.5cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・底部外面にヘラ記号あり？
52 － 36 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.0cm（残存 2/5 からの回転復原） 器高　4.8cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・底部外面にヘラ記号あり
52 － 37 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.9cm 残存高　4.4cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N4/0 灰色 ・10YR5/1 褐灰色	・TK208 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 － 38 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.3cm（残存 5/12 からの回転復原） 残存高　5.0cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・5Y6/1 灰色	・TK208 型式 ・ロクロ回転方向左回り

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
52 － 39 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.4cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.9cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 － 40 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　9.6cm 残存高　4.6cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・底部外面にヘラ記号？ ・底部外面に降灰
52 － 41 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.0cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.5cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・底部外面に降灰 ・受部に重ね焼き時の痕跡あり、一部自然釉付着
52 － 42 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.8cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.5cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 － 43 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径 11.2cm 残存高　4.0cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N6/0 灰色 ・10Y6/1 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 － 44 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.4cm 残存高　5.4cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 － 45 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.9cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.5cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 － 46 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.0cm 残存高　4.2cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・7.5YR5/1 褐灰色～10YR5/1 褐灰色 ・7.5YR5/1 褐灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
52 ー 47 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.4cm 残存高　4.2cm（全体 3/10 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・5Y6/1 灰色 ・2.5Y6/1 黄灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向右回り
52 ー 48 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.1cm（3/4 残存） 残存高　4.9cm（全体 9/10 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・5Y6/1 灰色 ・5Y6/1 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向右回り
52 ー 49 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.7cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.5cm（全体 1/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N7/0 灰白色～ N4/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・体部外面に降灰あり
52 ー 50 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.2cm 残存高　4.3cm（全体 1/10 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ	良好	φ２mm 以下の長石、黒色砂粒含む	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 ー 51 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.5cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　3.4cm（全体 1/10 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向不明
52 ー 52 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.4cm 器高　4.6cm（全体 4/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N7/0 灰白色～ N5/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・体部～底部外面に降灰 ・底部外面に溶着物付着
52 ー 53 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.7cm 残存高　4.6cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・5Y6/1 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 ー 54 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.2cm 残存高　3.2cm（全体 1/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N6/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向右回り

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
52 ー 55 須恵器　杯身 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.3cm（残存 2/5 からの回転復原） 器高　4.2cm 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK43 型式 ・ロクロ回転方向右回り
52 ー 56 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.6cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.6cm 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー ・　ー	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り
52 ー 57 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.4cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　4.4cm 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N7/0 灰白色 ・N7/0 灰白色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・体部外面に灰をかぶる
52 ー 58 須恵器　高杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.2cm（残存 5/12 からの回転復原） 残存高　5.2cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N5/0 灰色 ・N4/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・天井部に摘み部の接合痕跡あり
52 ー 59 須恵器　高杯蓋 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　12.4cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.5cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N6/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・天井部外面に自然釉付着 ・天井部に摘み部の接合痕跡あり
53 ー 60 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.2cm 残存高　3.9cm（全体 1/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N5/0 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 ー 61 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.2cm（残存 2/5 からの回転復原） 残存高　cm（全体残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N7/0 灰白色～ N5/0 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部～天井部外面に降灰あり
53 ー 62 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　15.0cm 残存高　4.0cm（全体 3/10 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・7.5Y5/1 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部／天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
53 － 63 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.6cm（残存 2/5 からの回転復原） 残存高　4.3cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、黒色砂粒含む	・5Y6/1 灰色 ・N7/0 灰白色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部外面に降灰あり
53 － 64 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.6cm（残存 3/10 からの回転復原） 残存高　4.0cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N4/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 65 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.4cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.7cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 66 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.5cm 残存高　4.7cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部～体部外面に降灰あり
53 － 67 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.8cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　5.0cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N4/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 68 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.5cm（残存 2/5 からの回転復原） 残存高　4.5cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N6/0 灰色～7.5Y5/2 灰褐色 ・N6/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向右回り
53 － 69 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.4cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.5cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石含む	・N6/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 70 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.2cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.4cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・2.5Y7/1 灰白色 ・N7/0 灰白色	・TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
53 － 71 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　13.3cm 残存高　4.4cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色～ 2.5Y5/4 にぶい赤褐色 ・N5/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 72 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.7cm 残存高　4.1cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向右回り
53 － 73 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.8cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　3.4cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・2.5Y5/1 褐灰色～ N6/0 灰色 ・7.5YR6/1 褐灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 74 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.3cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　4.7cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	やや密	・7.5Y6/1 灰色 ・N6/0 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向右回り
53 － 75 須恵器　杯蓋 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　12.1cm 残存高　4.4cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N6/0 灰白色 ・N6/0 灰白色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 76 須恵器　杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.2cm 残存高　2.8cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部～体部外面に降灰あり
53 － 77 須恵器　壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　19.6cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　2.1cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ、波状文（14 条 /1.7cm）、沈線文（１条） 内面　ヨコナデ ・　－ ・　－	良好	密	・5Y5/1 灰色 ・5Y5/1 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 78 須恵器　壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　18.6cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　5.0cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ、波状文（８条 /cm）、沈線文（１条）、カキメ（７条 /cm） 内面　ヨコナデ ・　－ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁端部に降灰あり

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
53 － 79 須恵器　壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　16.0cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　5.8cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、カキメ（９条 /cm） 内面　ナデ、ヨコナデ ・　－ ・　－	良好	密	・2.5Y6/1 黄灰色～ 10Y5/1 灰色 ・N6/0 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向左回り
53 － 80 須恵器　壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.7cm（残存 1/12 からの回転復原） 残存高　3.7cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ、波状文（条数不明） 内面　ヨコナデ ・　－ ・　－	良好	密	・5Y4/1 灰オリーブ色 ・5Y5/2 灰オリーブ色	・MT15 型式 ・全面に自然釉付着のため、ロクロ回転方向不明
53 － 81 須恵器　壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　16.1cm（残存 1/2 からの回転復原） 残存高　11.7cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　タタキ（３条 /cm）のちカキメ（３条 /0.5cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	密	・7.5YR6/1 褐灰色 ・N4/0 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部から体部内外面に自然釉付着
53 － 82 須恵器　壺 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　16.6cm（残存 2/5 からの回転復原） 残存高　8.5cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ、凹線文１条、波状文（８～９条 /cm が３本） 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・2.5Y7/1 灰色 ・5Y6/1 黄灰色	・MT15 型式 ・全体に摩耗のため、ロクロ回転方向不明
54 － 83 須恵器　瓶 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　8.1cm（頸部以下 4/5 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　列点文（９～ 10 条 /cm）、竹管文 内面　ヨコナデ ・外面　タタキ、ヘラケズリのちナデ 内面　タタキのちナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・頸部から肩部外面と底部内面に自然釉付着
54 － 84 須恵器　瓶 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　9.6cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　9.8cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ、波状文（6 条 /0.5cm、13 条 /1.3cm） 内面　ヨコナデ ・外面　波状文（６条 /0.6cm）、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリのちナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向右回り
54 － 85 須恵器　瓶 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　9.8cm（口縁部のみ欠損） 底径　－ ・　－ ・外面　沈線文２条、波状文（９条 /cm）、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・N6/0 灰色～ 5YR5/1 褐灰色 ・N6/0 灰色	・TK208 型式 ・ロクロ回転方向左回り
54 － 86 須恵器　瓶 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　9.5cm（口縁部のみ欠損） 底径　－ ・　－ ・外面　沈線文１条（頸部）、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部の打ち欠き？ ・頸部、底部内面と肩部外面に自然釉付着

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
54 － 87 須恵器　瓹 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　9.8cm（頸部以下完形） 底径　－ ・外面　波状文（15 条 /1.3cm） 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、カキメ（５条 /cm）のち沈線文２条、波状文（６条 /cm） 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　タタキのちナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・N4/0 灰色 ・N4/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向右回り
54 － 88 須恵器　高杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　13.0cm 残存高　6.2cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、ナデ（つまみ） 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N4/0 灰色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
54 － 89 須恵器　高杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　12.0cm（残存 1/6 からの回転復原） 残存高　5.8cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ、ナデ（つまみ） 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
54 － 90 須恵器　高杯蓋 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　11.4cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　5.2cm 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ、ナデ（つまみ） 内面　ヨコナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石含む	・N5/0 灰色 ・N4/0 灰色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・外面にゴマ状に降灰
54 － 91 須恵器　高杯蓋 ４区　４トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　4.0cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・5Y6/1 灰色 ・5PB6/1 青灰色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り
54 － 92 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　15.0cm 残存高　7.1cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　波状文（６条 /0.8cm） 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N6/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り
54 － 93 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.0cm 残存高　6.6cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	須恵器	密	・N6/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・透孔（方形）３孔
54 － 94 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　4.7cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・外面　カキメ（８条 /cm） 内面　ヨコナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・透孔（方形）３孔

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
54 － 95 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　5.3cm（3/10（脚台部のみ完形）） 裾部径　9.0cm ・　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N8/0 灰白色 ・7.5Y7/1 灰白色 ・N8/0 灰白色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・透孔（円形）３孔 ・脚台部外面に降灰
54 － 96 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　6.8cm（全体 1/5 残存） 裾部径　8.8cm ・　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N7/0 灰白色 ・N7/0 灰白色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・透孔（方形）３孔
54 － 97 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　7.1cm（全体 1/10 残存・脚台部 1/4） 裾部径　9.1cm ・　－ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・外面　カキメ（６条 /cm）、ヨコナデ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N7/0 灰白色 ・N7/0 灰白色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・透孔（方形）３孔
54 － 98 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　3.8cm（全体 3/10 残存） 裾部径　9.5cm（裾部残存 1/4 からの回転復原） ・　－ ・　－ ・外面　ヨコナデ、カキメ（７条 /cm） 内面　ヨコナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・透孔（方形）４孔
54 － 99 須恵器　高杯 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　5.8cm（全体 1/4 残存） 裾部径　8.8cm ・　－ ・　－ ・外面　カキメ（７～８条 /cm）、ヨコナデ 内面　ヨコナデ	良好	φ１mm 以下の長石 含む	・N7/0 灰白色 ・N7/0 灰白色	・TK23 ～ TK47 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・透孔（方形）３孔
55 － 100 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　3.4cm 残存高　7.8cm（破片） 底径　－ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　シボリメ、ナデ、指頭圧痕 ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　シボリメ、ナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	密	・7.5YT4/4 褐色 ・7.5YR5/6 明褐色	・古墳時代中期中頃
55 － 101 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　3.8cm 残存高　4.8cm（全体 1/4 残存） 底径　－ ・外面　タタキ（条数不明） 内面　シボリメ、ナデ ・外面　タタキ（条数不明） 内面　シボリメ、ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の赤色斑粒含む	・7.5YR8/2 灰白色 ・7.5YR8/2 灰白色	・古墳時代中期中頃
55 － 102 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　4.6cm 残存高　4.3cm（全体 1/4 残存） 底径　－ ・外面　指頭圧痕 内面　ナデ ・外面　指頭圧痕、タタキ（２条 /cm） 内面　ナデ ・　－	良好	φ４mm 以下の長石含む	・5YR7/3 にぶい橙色 ・5YR7/4 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃
55 － 103 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　3.6cm 残存高　4.9cm（全体 1/3 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	やや粗　φ２mm 以下の長石含む	・5YR7/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
55 ー 104 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　4.2cm 残存高　6.3cm（全体 1/6 残存） 底径　ー ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ ・　ー	良好	密	・5YR6/3 にぶい橙色 ・7.5YR8/2 灰白色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
55 ー 105 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　3.0cm 残存高　5.4cm（全体 3/4 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y4/1 黄灰色 ・2.5Y3/1 黒褐色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
55 ー 106 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　2.6cm 残存高　5.6cm（不明） 底径　ー ・外面　指頭圧痕、ナデ 内面　ナデ ・外面　指頭圧痕、ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の赤色斑粒含む	・5YR8/3 淡橙色 ・5YR7/3 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
55 ー 107 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　4.0cm 残存高　4.2cm（全体 3/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　ー	良好	密	・2.5YR7/4 淡赤褐色 ・7.5YR8/2 灰白色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
55 ー 108 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　3.8cm 残存高　3.7cm（全体 1/3 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の赤色斑粒含む	・7.5YR8/3 浅黄橙色 ・5YR8/3 淡橙色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
55 ー 109 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　ー 残存高　5.8cm（不明） 底径　ー ・　ー ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石 含む	・2.5Y8/1 灰白色 ・2.5Y8/1 灰白色	・古墳時代中期中頃
55 ー 110 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　ー 残存高　4.6cm（不明） 底径　ー ・　ー ・外面　タタキ（２条 /cm） 内面　シボリメ、ナデ、指頭圧痕 ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、チャート含む	・7.5YR7/3 にぶい橙色 ・7.5YR6/3 にぶい褐色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
55 ー 111 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　ー 残存高　5.4cm（不明） 底径　ー ・　ー ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　板ナデ、ハケ（３条 /0.5cm）、シボリメ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、チャート含む	・5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・内外面に被熱痕あり

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
55 － 112 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　3.1cm（全体 1/4 残存） 底径　2.6cm ・　－ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ２mm 以下の長石含む	・5YR6/4 にぶい橙色 ・5YR5/4 にぶい赤褐色	・古墳時代中期中頃 ・内外面に被熱痕あり
55 － 113 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　3.3cm（全体 1/3 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ１mm 以下の長石含む	・7.5YR7/2 明褐灰色 ・7.5YR7/3 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・内外面に被熱痕あり
55 － 114 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　6.5cm（破片） 底径　4.2cm ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	粗	・7.5YT5/4 にぶい褐色 ・7.5YR5/4 にぶい褐色	・古墳時代中期中頃
55 － 115 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　3.1cm 底径　3.2cm（底部のみ） ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	やや粗 φ４mm 以下の長石含む	・7.5YR8/3 浅黄橙色 ・5YR7/4 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃
55 － 116 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　3.4cm 底径　2.4cm（底部 2/3 からの回転復原） ・　－ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ	良好	φ１～５mm 以下の長石含む	・2.5Y6/1 黄灰色 ・2.5Y6/1 黄灰色	・古墳時代中期中頃
55 － 117 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　1.0cm 底径　－ ・　－ ・　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ケズリ、クモの巣状ハケ（５～６条 /0.5cm）	良好	φ４mm 以下の長石含む	・7.5YR6/3 にぶい橙色 ・7.5YR6/3 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
55 － 118 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　0.8cm 底径　－ ・　－ ・　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　クモの巣状ハケ	良好	φ１mm 以下の赤色斑粒含む	・2.5YR7/4 淡赤橙色 ・5YR7/3 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・内外面に被熱痕あり ・クモの巣状ハケは、貝殻状条痕による
55 － 119 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　9.6cm 残存高　5.8cm 底径　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	φ４mm 以下の長石、φ１mm 以下の赤色斑粒含む	・7.5YR8/2 灰白色 ・7.5YR8/2 灰白色	・古墳時代中期中頃 ・口縁部内外面に被熱痕あり ・小形丸底壺を転用か
55 － 120 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　10.0cm 残存高　3.7cm（全体 1/6 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	φ２mm 以下の長石含む	・5YR6/3 にぶい橙色 ・2.5YR6/4 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・内外面に被熱痕あり

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
55 － 121 土師器　製塩土器 ４区　３トレンチ　谷地形	口径　6.6cm 残存高　3.3cm（不明） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の赤色斑粒含む	・7.5YR7/2 明褐灰色 ・5YR7/2 明褐灰色	・古墳時代中期中頃 ・外面に被熱痕あり
84 － 1 弥生土器　広口壺もしくは器台 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　15.8cm 残存高　3.0cm 底径　－ ・外面　ナデ、擬凹線文５条 内面　調整不明 ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の赤色斑粒含む	・5YR8/3 淡橙色 ・10YR8/4 浅黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・被熱による剝離あり
84 － 2 弥生土器　直口壺 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　11.0cm 残存高　11.0cm（全体 4/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、ハケ（６条 /cm） 内面　ナデ、ハケ（６条 /cm）のちナデ、指頭圧痕 ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英１mm 以下の雲母含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・2.5Y5/2 暗灰黄色	・畿内第Ⅴ様式
84 － 3 弥生土器　広口壺 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　15.6cm 残存高　16.2cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　タタキ（3 条 /cm）のちヘラミガキ（下半部ナデ） 内面　板ナデ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、φ１mm 以下の雲母含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部、体部外面に煤付着
84 － 4 弥生土器　器台 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　15.8cm 残存高　1.5cm（全体 1/10 未満） 底径　－ ・外面　ナデ、円形浮文 内面　ヘラミガキのちナデ ・　－ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、石英、チャート、雲母含む	・10YR6/3 にぶい黄褐色 ・10YR6/3 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅴ様式
84 － 5 弥生土器　器台 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　9.0cm 残存高　1.6cm（全体 1/10 未満残存） 底径　－ ・外面　ナデ、円形浮文 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR8/3 浅黄橙色 ・5YR7/6 橙色	・畿内第Ⅴ様式
84 － 6 弥生土器　器台 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　17.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.3cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ヘラミガキ、円形浮文、擬凹線文１条 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/3 にぶい黄色	・畿内第Ⅴ様式
84 － 7 弥生土器　短頸壺 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　10.0cm 残存高　14.4cm（全体 4/5 残存） 底径　3.5cm ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　板ナデのちナデ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　板ナデのちナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母、チャート含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部から体部外面、体部から底部内面に黒斑残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
84 － 8 弥生土器　短頸壺 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　9.2cm　－ 残存高　14.5cm（全体 4/5 残存） 底径　3.8cm ・外面　ヘラミガキ 内面　ハケ（６条 /cm） ・外面　ヘラミガキ 内面　板ナデ ・外面　ヘラミガキ、ナデ 内面　板ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR7/2 にぶい黄橙色 ・10YR7/2 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・体部に焼成後の穿孔あり ・体部内面に黒斑残る
84 － 9 弥生土器　短頸壺 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　13.0cm（全体 3/5 残存） 底径　4.1cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　指頭圧痕、ハケ（６条 /cm） ・外面　指頭圧痕、ナデ 内面　ハケ（６条 /cm）	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/1 褐灰色	・畿内第Ⅴ様式
84 － 10 弥生土器　壺 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　13.9cm（全体 3/5 残存） 底径　4.1cm ・外面　ハケ（６条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ハケ（６条 /cm） 内面　ナデ、板ナデ ・外面　ナデ 内面　板ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・2.5Y7/2 灰黄色	・畿内第Ⅴ様式
84 － 11 弥生土器　壺 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　10.4cm 残存高　17.2cm（ほぼ完形） 底径　4.0cm ・外面　ハケ（６条 /cm） 内面　ハケ（６条 /cm） ・外面　ハケ（６条 /cm）、ナデ 内面　ハケ（７条 /cm） ・外面　ハケ（６条 /cm）、ナデ 内面　ハケ（７条 /cm）	良好	φ１mm 以下の長石、雲母、角閃石含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR5/2 灰黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・底部に焼成後の穿孔あり ・体部外面に黒斑残る ・生駒西麓産
85 － 12 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　3.3cm（全体 1/10 未満残存） 底径　3.8cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　クモの巣状ハケ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母、チャート含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・10YR5/2 灰黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・ドーナツ底 ・底部外面に黒斑残る
85 － 13 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　17.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　1.5cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、石英含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・7.5YR6/3 にぶい褐色	・畿内第Ⅴ様式
85 － 14 弥生土器　甕 ２区　谷地形	口径　14.2cm 残存高　10.0cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（４条 /cm） 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石含む	・7.5YR3/1 黒褐色～7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR3/1 黒褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部、体部内外面に黒斑残る
85 － 15 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　12.4cm（口縁部残存 5/6 からの回転復原） 残存高　14.0cm（ほぼ完形） 底径　4.2cm ・外面　ナデ 内面　ハケ ・外面　タタキ（３条 /cm）、ナデ 内面　ハケ（５条 /cm） ・外面　タタキ（３条 /cm）、ナデ 内面　ハケ（５条 /cm）	良好	φ１mm 以下の長石、雲母含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部、底部内面に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	・口縁部（口頸部） 大きさと、調整・施文 ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
85 ー 16 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　11.8cm（口縁部欠損） 残存高　13.0cm（7/10 残存） 底径　4.2cm ・外面　ナデ 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・外面　タタキ（７～８条 /cm）、一部ハケ（７条 /cm） 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・外面　ナデ、タタキ 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ２mm 以下の石英、長石、雲母、赤色斑粒含む	・5YR7/6 橙色 ・5YR5/3 にぶい赤褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・体部から底部外面に煤付着
85 ー 17 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　10.6cm（口縁部残存 1/3 からの回転復原） 残存高　9.8cm（全体 4/5 残存） 底径　3.6cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　放射状板ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・生駒西麓産
85 ー 18 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　16.0cm 残存高　11.0cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ナデ、ハケ（５条 /cm） 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm）のち一部ナデ 内面　ハケ（７条 /cm） ・　ー	良好	φ３mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・2.5YR6/6 橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・外面に被熱による剝離あり ・内外面全体に煤・炭化物付着
85 ー 19 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　17.0cm（口縁部残存 1/2 からの回転復原） 残存高　10.9cm ・外面　ナデ 内面　ハケ（７～８条 /cm）のちナデ ・外面　タタキ（３～４条 /cm） 内面　ハケ（７～８条 /cm） ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、石英含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR6/2 灰黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部、体部外面に煤付着
85 ー 20 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　13.8cm 残存高　6.5cm（全体 1/5 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３～４条 /cm）のちハケ（７～８/ cm）のちナデ 内面　ハケ（７～８条 /cm）のちナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母、赤色斑粒、チャート含む	・2.5YR7/8 橙色 ・2.5YR6/8 橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・はね上げ口縁 ・口縁部に被熱痕あり
85 ー 21 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　17.0cm 残存高　8.0cm（全体 1/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（４条 /cm）のちナデ、タタキ（２条 /cm） 内面　ナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母含む	・2.5YR6/3 にぶい黄色 ・2.5YR6/3 にぶい黄色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部内面に黒斑残る
85 ー 22 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　18.6cm 残存高　4.5cm（全体 1/10 未満残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ハケ（５条 /cm）のちナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、石英、チャート含む	・10YR7/4 にぶい黄褐色 ・10YR7/4 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部から体外面に煤付着
85 ー 23 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　16.2cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　9.5cm（全体 1/5 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ハケ（７条 /cm） ・外面　タタキ（２条 /cm） 内面　ハケ（７条 /cm） ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、石英含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/4 にぶい黄色	・畿内第Ⅴ様式

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
86 ー 24 庄内式土器　甕 ２区　谷地形	口径　14.7cm 残存高　3.6cm（全体 1/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、チャート含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・庄内１式
86 ー 25 庄内式土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　14.6cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　2.7cm 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、雲母、赤色斑粒含む	・5YR5/4 にぶい赤褐色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・庄内１式
86 ー 26 庄内式土器　鉢 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　11.8cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　7.9cm（全体 3/10 残存） 底径　ー ・外面　ハケ（７条 /cm）のちナデ 内面　ナデ、ハケ（８条 /cm） ・外面　ナデ 内面　ハケ（８条 /cm） ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・庄内１式 ・生駒西麓産
86 ー 27 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　ー 残存高　7.5cm（残存 2/5 底部のみ） 底径　3.9cm ・　ー ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm）、ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英含む	・7.5YR6/6 橙色 ・10YR4/2 灰黄褐色	・畿内第Ｖ様式 ・底部内面に炭化物付着
86 ー 28 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　15.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　2.7cm　ー 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ３mm 以下の長石、石英含む	・10YR5/2 灰黄褐色 ・10YR5/2 灰黄褐色	・畿内第Ｖ様式 ・口縁部外面に煤付着
86 ー 29 庄内式土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　ー 残存高　1.9cm（全体 1/10 残存・底部のみ） 底径　3.5cm ・　ー ・外面　ナデ 内面　板ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　放射状板ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5Y6/4 にぶい橙色 ・5Y2/1 黒色	・庄内１式 ・ドーナツ底
86 ー 30 庄内式土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　ー 残存高　2.7cm 底径　4.1cm（底部のみ） ・　ー ・外面　ナデ、ヘラケズリ 内面　ハケ（６条 /cm） ・外面　ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕 内面　クモの巣状ハケ（６条 /cm）	良好	φ２mm 以下の長石含む	・2.5Y6/2 灰黄色 ・2.5Y6/2 灰黄色	・庄内１式
86 ー 31 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　ー 残存高　4.2cm（全体 1/10 以下残存） 底径　3.8cm ・　ー ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母、赤色斑粒、チャート含む	・7.5YR4/4 褐色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・畿内第Ｖ様式 ・底部に内側からのヘラ状工具による焼成前穿孔１孔

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
86 － 32 弥生土器　甕 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　2.6cm（全体 3/20 残存） 底径　4.9cm ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　板ナデ	良好	φ３mm 以下の長石、チャート含む	・10YR5/4 にぶい黄褐色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ｖ様式
86 － 33 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　2.4cm 底径　5.6cm（底部 3/4 残存） ・　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・2.5Y5/2 暗灰黄色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・畿内第Ｖ様式
86 － 34 弥生土器　甕 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　3.2cm（全体 1/10 残存） 底径　4.6cm ・　－ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・N1.5/0 黒色	・畿内第Ｖ様式 ・ドーナツ底 ・底部内外面に黒斑残る
86 － 35 庄内式土器　鉢 ２区　谷地形	口径　34.2cm 残存高　12.7cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒、チャート含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・庄内１式
86 － 36 庄内式土器　鉢 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　13.1cm 残存高　8.5cm（完形） 底径　4.6cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキのちナデ、指頭圧痕 内面　ヘラミガキ、ナデ	良好	φ１mm の長石含む	・10YR8/4 浅黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・庄内１式
86 － 37 庄内式土器　鉢 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　22.0cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.7cm（全 3/20 体残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・2.5Y5/2 暗灰黄色 ・2.5Y5/2 暗灰黄色	・庄内１式 ・はね上げ口縁
86 － 38 庄内式土器　高杯 ２区　谷地形	口径　19.8cm 残存高　5.1cm（全体 3/5 残存） 底径　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・2.5Y6/3 黄色～10YR5/6 黄褐色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色～ 10YR4/4 橙色	・庄内１式
86 － 39 庄内式土器　高杯 ２区　谷地形	口径　19.8cm（口縁部残存 1/12/ からの回転復原） 残存高　4.0cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　調整不明 内面　ナデ ・外面　調整不明 内面　ヘラミガキ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英含む	・7.5YR2/1 黒色 ・7.5YR7/6 橙色	・庄内１式 ・杯部外面に黒斑残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
86 － 40 庄内式土器　高杯 ２区　谷地形	口径　21.4cm（口縁部残存 1/12/ からの回転復原） 残存高　4.9cm 底径　－ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母含む	・2.5Y6/4 にぶい黄色 ・7.5YR5/6 明褐色	・庄内１式
86 － 41 弥生土器　高杯 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　7.2cm（脚台部のみ残存） 裾部径　12.1cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　シボリメ、ナデ	良好	φ３mm 以下の長石、雲母含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・透孔（円形）４孔
87 － 42 弥生土器　高杯 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　9.55cm（全体 2/5 残存） 裾部径　11.9cm（脚台部残存 1/12 からの回転復原） ・　－ ・　－ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　シボリメ、ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母、赤色斑粒含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式
87 － 43 弥生土器　高杯 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　7.6cm（全体 3/10 残存） 裾部径　12.7cm ・　－ ・　－ ・外面　ハケ（８～９条 /cm）、ハケ（５条 /cm）のちナデ 内面　シボリメ、ハケ（６条 /cm）のちナデ	良好	φ３mm 以下の長石含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・透孔（円形）４孔
87 － 44 弥生土器　高杯 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　7.8cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　シボリメ、ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y6/2 灰黄色 ・2.5Y5/2 暗灰黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・脚台部外面に黒斑残る
87 － 45 弥生土器　高杯 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　11.2cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ、（下半部）のちハケ（６条 /cm） 内面　シボリメ、板ナデ、ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・透孔（円形）４孔
87 － 46 弥生土器　器種不明 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　13.7cm 残存高　9.9cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ、ナデ ・　－	良好	やや粗 φ５mm 以下の長石、φ１mm 以下の雲母含む	・10YR にぶい黄褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・弥生時代に属すると思われる ・透孔（円形）４孔
87 － 47 土師器　甑 ２区　１トレンチ　谷地形	口径　－ 残存高　11.1cm 底径　11.1cm（底部のみ） ・　－ ・外面　ハケ（５条 /cm） 内面　ケズリのちナデ ・外面　ハケ（５条 /cm） 内面　ケズリのちナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5Y6/6 橙色	・古墳時代中期 ・蒸気孔５孔

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
88 － 1 弥生土器　壺 ２区　谷地形	口径　23.1cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.2cm（全体 3/20 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、波状文（３条 /0.5cm） 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母、チャート含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅲ～Ⅳ様式
88 － 2 弥生土器　壺 ２区　谷地形	口径　21.4cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.3cm 底径　－ ・外面　ナデ、斜格子文 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・2.5Y7/3 浅黄色	・畿内第Ⅲ様式 ・口縁部外面に黒斑残る
88 － 3 弥生土器　壺 ２区　谷地形	口径　19.2cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.2cm 底径　－ ・外面　不明、擬凹線文３条 内面　不明 ・　－ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、石英、チャート含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/3 にぶい黄色	・畿内第Ⅴ様式の新しい段階 ・口縁部に２孔１組の穿孔が２ヶ所にあり
88 － 4 弥生土器　壺 ２区　谷地形	口径　21.4cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　2.4cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　不明、擬凹線文３条、円形浮文 内面　不明 ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR5/4 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅴ様式の新しい段階
88 － 5 弥生土器　壺 ２区　谷地形	口径　21.4cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　2.8cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、擬凹線文３条、竹管文が施された円形浮文 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅴ様式の新しい段階
88 － 6 弥生土器　壺 ２区　谷地形	口径　－（破片） 残存高　4.1cm 底径　－ ・外面　ナデ、貼付突帯（２列）、刻目 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、石英含む	・7.5YR6/6 橙色 ・10YR5/4 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅰ様式の新しい段階
88 － 7 弥生土器　甕 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　15.2cm（全体 2/5 残存） 底径　10.6cm（底部 3/4 残存） ・　－ ・外面　調整不明 内面　ハケ（７条 /cm）、指頭圧痕 ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母、チャート含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅱ～Ⅲ様式 ・底部外面に黒斑残る ・体部内面に炭化物付着
88 － 8 弥生土器　甕 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　2.6cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　刻目（口縁端） 内面　ナデ、指頭圧痕（口縁端）、ナデ ・外面　沈線３条 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、チャート含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR6/2 灰黄褐色	・畿内第Ⅰ様式の新しい段階

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
88 － 9 弥生土器　壺 ２区　谷地形	口径　20.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　9.6cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ（口縁端）ハケ（７条 /cm）のちヘラケズリ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、石英、チャート、赤色斑粒含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式の新しい段階
88 － 10 弥生土器　器台 ２区　谷地形	口径　20.7cm（口縁部残存 1/12 以下からの反転復原） 残存高　3.0cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　綾杉状の列点文 内面　ハケ（５条 /cm）のちナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅲ～Ⅳ様式
88 － 11 弥生土器　甕 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　14.0cm（全体 1/2 残存） 底径　5.4cm ・　－ ・外面　ヘラケズリ 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・畿内第Ⅲ～Ⅳ様式
88 － 12 弥生土器　高杯 ２区　谷地形	口径　22.8cm 残存高　2.9cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR8/3 浅黄橙色	・畿内第Ⅲ様式の新しい段階～Ⅳ様式 ・口縁部外面に黒斑残る
89 － 13 土師器　小形丸底壺 ２区　谷地形	口径　10.2cm（口縁部 5/8 残存） 残存高　7.7cm（7/10 残存） 底径　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・5YR7/6 橙色 ・5YR7/8 橙色	・布留１式
89 － 14 土師器　高杯 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　7.7cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ハケ（４条 /cm） ・外面　ヘラミガキ？ 内面　ケズリ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・2.5YR5/8 明赤褐色 ・5YR6/8 橙色	・古墳時代中期 ・円板充填法による接合
89 － 15 弥生土器　高杯 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　6.4cm（全体 1/5 残存） 底径　－　（柱状部のみ） ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・脚台部に方形穿孔８孔（上下段４孔づつ、うち上段３孔は未貫通）あり
89 － 16 土師器　高杯 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　8.4cm（脚台部のみ） 裾部径　13.6cm ・　－ ・　－ ・外面　ハケ（条数不明）のちヘラミガキ、ナデ 内面　ケズリのちナデ、ハケ（５条 /cm）	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/3 にぶい黄色	・布留３～４式 ・接合法による接合

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
89 ー 17 軟質韓式系土器 甕 ２区　谷地形	口径　16.4cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　6.2cm（全体 1/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　格子目タタキ（２条 /cm） 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y8/3 淡黄色 ・2.5Y8/3 淡黄色	・古墳時代中期中頃
89 ー 18 須恵器　杯身 ２区　谷地形	口径　10.8cm（口縁部残存 1/2 からの回転復原） 残存高　4.6cm（全体 4/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK208 型式 ・ロクロ回転方向右回り
89 ー 19 須恵器　杯蓋 ２区　谷地形	口径　13.5cm 残存高　4.2cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	良好	密	・7.5Y6/1 灰色 ・N6/0 灰色	・TK208 型式 ・ロクロ回転方向左回り
89 ー 20 須恵器　甕 ２区　谷地形	口径　37.6cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　3.4cm 底径　ー ・外面　ヨコナデ、波状文（５条 /cm） 内面　ヨコナデ ・　ー ・　ー	良好	密	・N4/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向左回り
89 ー 21 須恵器　長頸壺 ２区　谷地形	口径　16.9cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　8.3cm 底径　ー ・外面　ヨコナデ、波状文３帯（９条・７～９条・９条 / cm）、突帯２条 内面　ヨコナデ、指頭圧痕 ・　ー ・　ー	良好	密	・N6/0 灰色 ・N7/0 灰白色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向右回り
89 ー 22 須恵器　壺 ２区　谷地形	口径　17.8cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　7.2cm（全体 3/10 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ、指頭圧痕 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、指頭圧痕 内面　ハケ（11 条 /cm）のちナデ ・　ー	良好	密	・7.5Y7/1 灰白色 ・7.5Y6/1 白色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向左回り
89 ー 23 須恵器　長頸壺 ２区　谷地形	口径　10.0cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　14.4cm 底径　ー ・外面　ヨコナデ、カキメ（10 条 /cm） 内面　ヨコナデ ・外面　カキメ（10 条 /cm） 内面　ケズリ、ナデ ・外面　カキメ（10 条 /cm） 内面　ナデ	良好	密	・10YR4/1 褐灰色 ・N5/0 灰色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部から体部外面と底部内面に自然釉付着
89 ー 24 須恵器　瓶 ２区　２トレンチ拡張部　谷地形	口径　ー 残存高　8.8cm（全体 2/3 残存） 底径　ー ・外面　波状文（８条 /cm） 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、カキメ（６条 /cm） 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ナデ ・内面　未調整	良好	φ２mm 程度の長石含む	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK208 型式 ・ロクロ回転方向左回り

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
89 － 25 須恵器　瑕 ２区　２トレンチ拡張部　谷地形	口径　－（口縁部のみ欠損） 残存高　8.8cm 底径　－ ・外面　波状文（16 条 /1.5cm） 内面　ヨコナデ ・外面　凹線文３条、波状文（８条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ヘラケズリ 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ２mm 程度の長石含む	・N4/0 灰色 ・N4/0 灰色	・TK208 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・口縁部、底部内面、肩部外面に自然釉付着
90 － 26 須恵器　高杯蓋 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　4.5cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　綾杉状列点文２段、凹線文 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・7.5Y5/1 灰色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向左回り
90 － 27 須恵器　高杯 ２区　谷地形	口径　13.8cm 残存高　10.1cm（全体 4/5 残存） 裾部径　11.1cm ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、回転ヘラケズリ、突帯１条 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ、突帯１条 内面　ヨコナデ	良好	密	・N6/0 灰色 ・2.5YR8/2 灰白色	・TK216 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・透孔（菱形）４孔
90 － 28 須恵器　器台 ２区　谷地形	口径　－ 残存高　8.9cm（全体 3/20 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ナデ、突帯、波状文（９条 /cm） 内面　ナデ ・　－	良好	密	・7.5Y3/1 オリーブ黒色 ・5Y5/1 灰色	・TK43 型式 ・外面に自然釉付着のため、ロクロ回転方向不明
93 － 1 弥生土器　甕 ２区　住居１	口径　－ 残存高　1.7cm（底部のみ） 底径　3.0cm ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ｖ様式
93 － 2 弥生土器　甕 ２区　住居１	口径　－ 残存高　2.0cm（底部のみ） 底径　3.3cm ・　－ ・外面　タタキ（４条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　放射状板ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y7/3 浅黄色 ・2.5Y7/3 浅黄色	・畿内第Ｖ様式 ・底部外面に黒斑残る
93 － 3 弥生土器　甕 ２区　住居１	口径　－ 残存高　2.6cm（全体 1/5 残存底部のみ） 底径　5.0cm ・　－ ・外面　タタキ（２条 /0.5cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ３mm 以下の長石、石英含む	・5YR5/6 明赤褐色 ・10YR3/1 黒褐色	・畿内第Ｖ様式 ・底部内面に黒斑残る
93 － 4 弥生土器　甕もしくは壺 ２区　住居１	口径　－ 残存高　2.5cm（底部のみ） 底径　3.0cm ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　放射状板ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、チャート含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR5/1 褐灰色	・畿内第Ｖ様式 ・ドーナツ底 ・底部内面に黒斑残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
93 － 5 弥生土器　甕 ２区　住居１	口径　－ 残存高　2.4cm（底部のみ 1/5 残存） 底径　4.7cm ・　－ ・外面　ハケ（７条 /cm）のちタタキ（２条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ハケ（７条 /cm）のちタタキ（２条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ２mm 以下の長石、チャート含む	・2.5YR5/4 にぶい赤褐色 ・2.5Y5/1 黄灰色	・畿内第Ⅴ様式
93 － 6 弥生土器　甕 ２区　住居１	口径　－ 残存高　3.1cm（底部 1/4 残存） 底径　3.7cm ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英含む	・2.5Y6/4 にぶい黄色 ・2.5Y6/4 にぶい黄色	・畿内第Ⅴ様式
93 － 7 弥生土器　甕 ２区　住居１	口径　－ 残存高　5.4cm（底部のみ） 底径　4.3cm ・　－ ・外面　タタキ（２条 /cm） 内面　ハケ（９条 /cm）のちナデ ・外面　ナデ 内面　クモの巣状ハケ（９条 /cm）のちナデ	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・ドーナツ底
93 － 8 弥生土器　ミニチュア土器 ２区　住居１	口径　－ 残存高　4.4cm（口縁部欠損） 底径　3.1cm ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/3 にぶい黄色	・畿内第Ⅴ様式
93 － 9 匙形土製品 ２区　住居１	口径　－ 残存高　6.4cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・畿内第Ⅴ様式
93 － 10 土師器　高杯 ２区　住居２	口径　13.1cm 残存高　3.0cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式 ・椀形高杯
93 － 11 土師器　高杯 ２区　住居２	口径　－ 残存高　7.0cm（杯部一部と柱状部のみ） 底径　－ ・　－ ・外面　ケズリ、ナデ 内面　シボリメ、ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英含む	・5YR6/8 橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留３～４式 ・円板充填法が用いられる ・透孔（円形）１孔が残存
93 － 12 土師器　高杯 ２区　住居２	口径　－ 残存高　2.9cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式 ・有段高杯 ・接合法が用いられる

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
93 － 13 土師器　高杯 ２区　住居２	口径　－ 残存高　6.5cm（全体 1/2 残存） 裾部径　9.0cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ、シボリメ	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留３～４式
93 － 14 土師器　高杯 ２区　住居２	口径　－ 残存高　2.0cm（全体 1/10 残存） 裾部径　9.1cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　指頭圧痕、ケズリ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・5YR6/8 橙色 ・5YR6/8 橙色	・布留３～４式
93 － 15 須恵器　有蓋高杯蓋 ２区　住居２	口径　12.1cm（口縁部残存 1/2 からの回転復原） 残存高　4.1cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　凹線１条、綾杉状の列点文 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・7.5YR5/1 褐灰色 ・2.5Y6/1 黄灰色	・TK73 型式 ・つまみ部の接合痕あり
93 － 16 須恵器　杯蓋 ２区　住居２	口径　13.4cm 残存高　4.0cm（全体 1/4 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・7.5Y6/1 灰色 ・5Y6/1 灰色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向右回り
93 － 17 須恵器　杯蓋 ２区　住居２	口径　15.1cm 残存高　3.9cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・N5/0 灰色 ・5Y5/0 灰色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向右回り
93 － 18 須恵器　壺もしくは瓶 ２区　住居２	口径　9.4cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　1.8cm（全体 1/7 残存） 底径　－ ・外面　ヨコナデ、波状文？ 内面　ヨコナデ ・　－ ・　－	良好	密	・5Y6/1 灰色 ・5Y6/1 灰色	・TK73 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・口縁部内面に自然釉付着
93 － 19 土師器　高杯 ２区　住居３	口径　13.8cm（口縁部残存 1/3 からの回転復原） 残存高　5.5cm 底径　－ ・外面　ヘラミガキ、ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y7/3 浅黄色 ・2.5Y7/3 浅黄色	・古墳時代中期中頃 ・杯部内外面に赤彩あり
93 － 20 土師器　壺 ２区　住居７	口径　10.1cm 残存高　19.7cm（全体 1/3 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・5YR7/6 橙色 ・5YR7/6 橙色	・布留３～４式 ・体部外面に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
93 － 21 土師器　壺 ２区　住居７	口径　－ 残存高　8.0cm（全体 1/3 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・外面　調整不明 内面　調整不明	不良	φ３mm 以下の長石、石英含む	・5YR7/8 橙色 ・7.5YR8/8 橙色	・布留３～４式 ・焼成前穿孔あり ・体部外面に黒斑残る ・須恵器の甕を模したもの
93 － 22 土師器　甕 ２区　住居７	口径　13.0cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　18.0cm（7/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（９条 /cm） 内面　ケズリ ・外面　ハケ（９条 /cm） 内面　ケズリ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母、赤色斑粒含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色～ 2.5Y5/1 黄灰色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色～ 2.5Y5/1 黄灰色	・布留３～４式 ・口縁部内面に黒斑あり ・体部から底部内外面に黒斑残る
94 － 23 土師器　甕 ２区　住居７	口径　13.4cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　13.3cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（８条 /cm） 内面　ケズリ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート、赤色斑粒含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・布留３～４式
94 － 24 土師器　甕 ２区　住居７	口径　17.2cm 残存高　18.0cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　板ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒、チャート含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式 ・体部外面に黒斑残る
94 － 25 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　15.3cm（口縁部 7/12 残存） 残存高　12.7cm（全体 4/5 残存） 裾部径　11.0cm ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・外面　ハケ（７条 /cm）、ナデ、ヘラミガキ 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ、ナデ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・布留３～４式 ・挿入付加法が用いられる ・杯部内外面に黒斑残る
94 － 26 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　16.3cm 残存高　5.9cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、石英、チャート、赤色斑粒含む	・5YR7/8 橙色 ・5YR7/8 橙色	・布留３～４式 ・挿入付加法が用いられる ・杯部外面に黒斑残る
94 － 27 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　14.8cm 残存高　5.4cm（杯部のみ 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	・5YR5/6 明赤褐色 ・5YR6/6 橙色	・布留３～４式 ・挿入付加法が用いられる
94 － 28 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　16.2cm 残存高　6.4cm（全体 1/3 残存） 底径　－ ・外面　ハケ（８条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ハケ（８条 /cm） 内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・5YR6/6 橙色 ・5YR6/6 橙色	・布留３～４式 ・挿入付加法が用いられる

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
94 － 29 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　15.0cm 残存高　5.9cm（全体 7/20 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、石英、チャート、赤色斑粒含む	・5YR7/8 橙色 ・5YR7/8 橙色	・布留３～４式 ・挿入付加法が用いられる
94 － 30 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　14.3cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　7.8cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR5/6 明褐色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式 ・杯部内外面に黒斑残る
94 － 31 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　－ 残存高　5.9cm 底径　－ ・　－ ・　－ ・外面　ヘラケズリのちナデ 内面　シボリメ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・布留３～４式 ・挿入付加法が用いられる
94 － 32 土師器　高杯 ２区　住居７	口径　－ 残存高　7.8cm（全体 1/3 残存） 裾部径　14.4cm ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　シボリメ	良好	φ３mm 以下の石英、チャート、赤色斑粒含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留３～４式
95 － 33 土師器　甕 ２区　住居８	口径　13.0cm 残存高　18.9cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリ ・外面　ナデ 内面　ケズリ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・5YR5/4 にぶい赤褐色 ・5YR6/6 橙色	・布留３～４式 ・体部外面、底部内外面に煤、炭化物付着
95 － 34 土師器　甕形製塩土器 ２区　住居９	口径　11.2cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　19.5cm（全体 1/3 残存） 底径　3.5cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の赤色斑粒含む	・10YR7/2 にぶい黄橙色 ・2.5YR7/3 淡赤橙色	・布留０～１式 ・全体二次被熱により赤変 ・ドーナツ底
95 － 35 土師器　器台 ２区　住居９	口径　－ 残存高　5.5cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留０～１式 ・透孔（円形）３孔
95 － 36 土師器　小形丸底壺 ２区　住居９	口径　8.2cm（口縁部 5/6 残存） 残存高　7.7cm（ほぼ完形） 底径　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ヘラケズリ 内面　ナデ	良好	密	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留０～１式

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
95 － 37 土師器　小形丸底壺 ２区　住居９	口径　9.6cm（口縁部 11/12 残存） 残存高　3.9cm 底径　－ ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・　－ ・　－	良好	密	・5YR5/6 明赤褐色 ・5YR6/6 橙色	・布留０～１式
95 － 38 土師器　小形丸底壺 ２区　住居９	口径　11.4cm（口縁部 5/6 残存） 残存高　8.4cm（9/10 残存） 底径　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・5YR6/6 橙色～10YR7/6 明黄褐色 ・5YR6/6 橙色～10YR7/4 にぶい黄橙色	・布留０～１式
95 － 39 土師器　甕 ２区　住居９	口径　11.7cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　14.6cm（4/5 体残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（10 条 /cm） 内面　ナデ、ケズリ ・外面　ハケ（10 条 /cm） 内面　ケズリ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・布留０～１式 ・体部から底部外面に黒斑残る
95 － 40 土師器　高杯 ２区　住居９	口径　17.7cm 残存高　12.5cm（9/10 残存） 底径　－ ・外面　ヘラミガキ、ナデ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ、ナデ 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・2.5Y5/8 明赤褐色 ・2.5Y5/8 明赤褐色	・布留０～１式 ・杯部内外面と脚台部外面に赤彩あり
95 － 41 土師器　小型器台 ２区　住居９	口径　－ 残存高　5.4cm（全 2/5 体残存） 裾部径　10.3cm ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の赤色斑粒含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・布留０～１式 ・脚台部外面に黒斑残る
96 － 1 土師器　甕 ２区　ピット 121	口径　13.7cm 残存高　13.5cm（9/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ３mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・5YR6/6 橙色 ・5YR6/4 にぶい橙色	・布留３式 ・底部外面に黒斑残る
96 － 2 土師器　鉢 ２区　ピット 80	口径　11.0cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　5.5cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・布留３式
97 － 1 土師器　大型壺 ２区　土坑１	口径　18.4cm 残存高　33.1cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリのちナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリのちナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、チャート含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式 ・体部外面に黒斑残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
97 － 2 土師器　甕 ２区　土坑１	口径　12.2cm（口縁部残存 5/12 からの回転復原） 残存高　4.9cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・布留３～４式 ・口縁部内面に黒斑残る
97 － 3 土師器　二重口縁壺 ２区　土坑１	口径　8.6cm 残存高　6.0cm 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式 ・山陰系
97 － 4 土師器　甕 ２区　土坑１	口径　11.0cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　3.0cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・布留３～４式
98 － 5 土師器　大形壺 ２区　土坑１	口径　13.8cm 残存高　12.2cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（８条 /cm） 内面　指頭圧痕（肩）、ケズリのちナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR8/3 浅黄橙色 ・2.5Y8/3 浅黄色	・布留３～４式
98 － 6 土師器　高杯 ２区　土坑１	口径　15.2cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　3.7cm（全体 3/20 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式
98 － 7 土師器　高杯 ２区　土坑１	口径　23.1cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　9.6cm（全体 7/20 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	密	・7.5YR7/6 橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・布留３～４式 ・大形高杯 ・円板充填法が用いられる
98 － 8 土師器　高杯 ２区　土坑１	口径　－ 残存高　6.0cm（全体 2/5 残存） 裾部径　10.7cm ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ、シボリメ	良好	φ３mm 以下の長石、石英含む	・5YR6/6 橙色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色～ 5YR6/6 橙色	・布留３～４式
98 － 9 土師器　小形粗製壺 ２区　土坑１	口径　5.0cm 残存高　5.3cm（4/5 残存） 底径　2.7cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR8/3 浅黄橙色 ・10YR8/3 浅黄橙色	・布留３～４式 ・体部から底部外面に黒斑残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
98 － 10 土師器　壺 ２区　土坑２	口径　13.9cm 残存高　16.7cm（3/4 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（５条 /cm）のちナデ、ハケ（６条 /cm） 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・10YR6/6 明黄褐色 ・10YR6/6 明黄褐色	・古墳時代中期 ・体部外面に黒斑残る
101 － 1 庄内式土器　長頸壺 ３－北区　谷地形	口径　17.8cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　8.6cm（全体 3/10 残存） 底径　－ ・外面　ハケ（７条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（５条 /cm）のちナデ ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ハケ（７条 /cm）、指頭圧痕、ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英含む	・2.5Y5/2 暗灰黄色 ・2.5Y5/2 暗灰黄色	・庄内１～２式
101 － 2 庄内式土器　二重口縁壺 ３－北区　谷地形	口径　－ 残存高　3.4cm（体部片） 底径　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキのち直線文（８条 / cm）１条および波状文（８条 /cm）２帯 内面　指頭圧痕、ハケ（６条 /cm） ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・5Y4/1 灰色	・庄内１～２式
101 － 3 庄内式土器　二重口縁壺 ３－北区　谷地形	口径　－ 残存高　3.4cm（頸部のみ 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、刻目（突帯） 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・10YR8/3 浅黄橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・庄内１～２式
101 － 4 弥生土器　壺 ３－北区	口径　36.0cm（口縁部残存 1/10 からの回転復原） 残存高　3.6cm 底径　－ ・外面　ナデ、斜格子文 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母含む	・2.5Y5/1 黄灰色 ・7.5Y5/4 にぶい褐色	・畿内第Ｖ様式
101 － 5 弥生土器　長頸壺 ３－北区　５トレンチ	口径　8.0cm 残存高　4.0cm（4/5 残存） 底径　4.1cm ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　クモの巣状ハケ（５条 /cm）	良好	φ３mm 以下の長石、石英、チャート含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・畿内第Ｖ様式 ・注口部をもつ ・体部外面に被熱痕あり
101 － 6 弥生土器　壺 ３－北区　谷地形	口径　－ 残存高　15.2cm（体部～底部 7/10 残存） 底径　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ、ハケ（10 条 /1.3cm）のちナデ、ハケ（10 条 /1.3cm） ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ｖ様式 ・体部から底部外面に煤付着、被熱による表面剝離あり
101 － 7 弥生土器　長頸壺 ３－北区　谷地形	口径　10.4cm（完形） 残存高　19.0cm 底径　4.0cm ・外面　ケズリのちハケ（５条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・外面　ヘラによる線刻、ハケ（７条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ハケ（８条 /cm）のちナデ	良好	φ３mm 以下の長石、石英、チャート含む	・5YR7/3 にぶい橙色 ・10YR7/4 にぶい橙色	・畿内第Ｖ様式 ・肩部にヘラによる線刻あり ・底部に焼成後穿孔２孔あり ・口縁部から底部内面、底面に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
101 － 8 弥生土器　壺 ３－北区　谷地形	口径　－ 残存高　15.8cm（3/5 残存） 底径　4.7cm ・外面　ハケ（６条 /0.8cm） 内面　ナデ ・外面　ハケ（６条 /0.8cm）のちナデ 内面　ハケ（４条 /cm） ・外面　ナデ 内面　ハケ（４条 /cm）	良好	φ３mm 以下の長石、φ１mm 以下の雲母含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部、体部から底部外面に煤付着 ・底部内面に炭化物付着
102 － 9 弥生土器　壺 ３－北区　５トレンチ	口径　17.1cm 残存高　7.0cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ハケ（５条 /cm）、ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ハケ（５条 /cm）のちナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部外面に黒斑残る
102 － 10 弥生土器　二重口縁壺 ３－北区　７トレンチ	口径　16.4cm 残存高　4.5cm（全体 1/10 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（８条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR8/3 浅黄橙色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部内面に黒斑残る
102 － 11 弥生土器　壺 ３－北区　５トレンチ	口径　13.0cm（口縁部 5/6 残存） 残存高　20.8cm（9/10 残存） 底径　4.3cm ・外面　ナデ、ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm）のちハケ（７条 /cm）、肩部に竹管文 内面　ハケ（10 条 /1.5cm） ・外面　タタキ（３条 /cm）、ナデ 内面　ハケ（10 条 /1.5cm）	良好	φ２mm 以下の長石、雲母含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・肩部に竹管による記号文あり ・ドーナツ底 ・体部下半から底部外面に黒斑残る
102 － 12 庄内式土器　二重口縁壺 ３－北区　１トレンチ	口径　17.2cm（口縁部残存 2/5 からの回転復原） 残存高　11.2cm 底径　－ ・外面　ナデ、ハケ（４条 /cm）、ナデ 内面　ナデ、ハケ（６条 /1.4cm） ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、雲母含む	・7.5YR6/3 にぶい褐色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・庄内１～２式 ・大形二重口縁壺 ・東部瀬戸内系
102 － 13 弥生土器　壺 ３－北区　１トレンチ	口径　14.8cm 残存高　5.3cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、ヘラミガキ、ハケ（８条 /cm） 内面　ナデ、ヘラミガキ、指頭圧痕 ・　－ ・　－	良好	φ１mm の長石、石英含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式
102 － 14 庄内式土器　甕 ３－北区　谷地形	口径　15.2cm 残存高　15.2cm（3/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（２条 /cm）のち縦方向の線刻、タタキ（２条 /cm） 内面　ハケ（５条 /cm） ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、φ１mm 以下の雲母含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・庄内１～２式 ・口縁部と体部外面に煤、炭化物付着 ・ヘラ状工具による線刻あり
102 － 15 庄内式土器　甕 ３－北区　７トレンチ	口径　17.8cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　9.2cm（全体 1/4 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ、指頭圧痕 ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR5/4 にぶい黄褐色	・庄内１～２式 ・体部外面に煤付着

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
102 ー 16 庄内式土器　小形甕 ３ー北区　５トレンチ	口径　10.9cm 残存高　5.9cm（全体 3/10 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（２条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ３mm 以下の長石含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・庄内１～２式
102 ー 17 庄内式土器　小形甕 ３ー北区　谷地形	口径　8.8cm 残存高　8.8cm（3/5 残存） 底径　3.8cm ・外面　ナデ 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ ・外面　タタキ（３条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・外面　ナデ 内面　クモの巣状ハケ（７条 /cm）	良好	φ１mm 以下の石英、長石、チャート含む	・7.5YR7/3 にぶい橙色 ・7.5YR7/3 にぶい橙色	・庄内１～２式 ・体部～底部外面に煤付着
102 ー 18 庄内式土器　小形甕 ３ー北区　５トレンチ	口径　10.8cm 残存高　11.1cm（9/10 残存） 底径　3.1cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、チャート含む	・7.5YR6/4 にぶい黄色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・庄内１～２式 ・口縁部～体部外面に黒斑残る ・体部内面剝離
102 ー 19 庄内式土器　小形甕 ３ー北区　７トレンチ	口径　12.8cm（残存 1/4 からの回転復原） 残存高　7.3cm（全体 3/10 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（４条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ ・　ー	良好	φ１mm の長石、角閃石、雲母含む	・10YR4/3 にぶい黄褐色 ・2.5Y5/3 黄褐色	・庄内１～２式 ・生駒西麓産？
102 ー 20 庄内式土器　小形甕 ３ー北区　５トレンチ	口径　13.8cm 残存高　6.7cm（全体 1/5 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（４条 /cm） 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・5Y5/2 灰褐色	・庄内１～２式 ・外面に煤付着 ・被熱痕あり
28 ー 21 庄内式土器　甕 ３ー北区　谷地形	口径　17.2cm 残存高　21.2cm（ほぼ完形） 底径　3.8cm ・外面　ナデ 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・外面　タタキ（４条 /cm）、指頭圧痕 内面　ハケ（４条 /cm） ・外面　タタキ（４条 /cm）、指頭圧痕 内面　ハケ（５～８条 /cm）のちナデ	良好	φ３mm 以下の石英、長石含む	・7.5YR8/4 浅黄橙色 ・10YR7/2 にぶい黄橙色	・庄内１～２式 ・口縁部から体部内外面に煤付着 ・底部外面表面が一部剝離
103 ー 22 庄内式土器　甕 ３ー北区　谷地形	口径　15.2cm 残存高　20.5cm（全体 9/20 残存） 底径　4.0cm ・外面　ナデ 内面　ハケのちナデ ・外面　タタキ（２～３条 /cm） 内面　ハケ（10 ～ 12 条 /cm） ・外面　タタキ（５～６条 /cm）、ナデ 内面　ハケ（10 ～ 12 条 /cm）	良好	φ１mm 以下の石英、長石含む	・7.5YR5/3 にぶい褐色 ・10YR6/2 灰黄褐色	・庄内１～２式 ・底部内面に被熱による剝離あり ・口縁部から体部外面に煤付着
103 ー 23 庄内式土器　甕 ３ー北区　谷地形	口径　16.6cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　17.0cm（4/5 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ、ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・　ー	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・庄内１～２式 ・体部外面に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
103 ー 24 庄内式土器　小形甕 ３ー北区　５トレンチ	口径　　ー 残存高　8.2cm（体部のみ 1/4 残存） 底径　ー ・　ー ・外面　タタキ（２条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・5Y2/1 黒色	・庄内１～２式 ・体部内面に黒斑残る ・被熱痕あり
103 ー 25 庄内式土器　甕 ３ー北区　５トレンチ	口径　17.0cm 残存高　3.5cm（全体 1/5 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色・10YR2/1 黒色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・庄内１～２式 ・口縁部外面に煤付着
103 ー 26 庄内式土器　鉢 ３ー北区　５トレンチ	口径　13.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　2.2cm 底径　　ー ・外面　ハケ（5 条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・　ー ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・庄内１～２式
103 ー 27 弥生土器　甕 ３ー北区　５トレンチ	口径　12.0cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　2.9cm 底径　　ー ・外面　ナデ、刻目（口縁端部） 内面　ナデ ・　ー ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y5/3 黄褐色	・畿内第Ⅴ様式
103 ー 28 弥生土器　甕 ３ー北区　１トレンチ	口径　ー 残存高　4.1cm（底部 1/2 残存） 底径　5.4cm ・　ー ・外面　タタキ（３条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（７条 /1.5cm） ・外面　ナデ 内面　クモの巣状ハケ（７条 /1.5cm）	良好	φ１mm の長石、雲母含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR6/2 灰黄褐色	・畿内第Ⅴ様式 ・ドーナツ底
103 ー 29 弥生土器 ３ー北区　７トレンチ	口径　ー 残存高　6.9cm（全体 1/5 残存） 底径　13.1cm（底部 5/12 残存） ・　ー ・　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ	不良	φ３mm 以下の長石、石英含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅳ～Ⅴ様式 ・底部外面に煤付着
103 ー 30 弥生土器　壺 ３ー北区　５トレンチ	口径　ー 残存高　5.0cm（全体 3/10 残存） 底径　4.6cm（底部のみ完形） ・　ー ・　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ、クモの巣状ハケ（７条 /cm）	良好	φ３mm 以下の長石、石英含む	・2.5Y5/2 暗灰黄褐色 ・2.5Y5/2 暗灰黄褐色	・畿内第Ⅳ～Ⅴ様式 ・ドーナツ底 ・体部、底部外面に黒斑残る
103 ー 31 弥生土器　鉢 ３ー北区　５トレンチ	口径　12.9cm 残存高　7.1cm（全体 2/5 残存） 底径　3.6cm ・外面　ナデ 内面　ハケ（５条 /cm） ・外面　ナデ 内面　ハケ（５条 /cm） ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　クモの巣状ハケ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅴ様式 ・口縁部外面に黒斑残る ・ドーナツ底

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
103 ー 32 庄内式土器　有孔甕もしくは鉢 ３ー北区	口径　ー 残存高　3.5cm（底部のみ） 底径　3.2cm ・　ー ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・庄内１～２式 ・底部に内側からの焼成前穿孔１孔あり
104 ー 33 庄内式土器　高杯 ３ー北区　谷地形	口径　25.8cm（口縁部残存 5/12 からの回転復原） 残存高　6.2cm 底径　ー ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ハケ（８条 /cm）のちヘラミガキ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ハケ（８条 /cm）のちヘラミガキ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・庄内１式 ・大形高杯 ・杯部外面に黒斑残る ・杯部内面に煤付着
104 ー 34 庄内式土器　二重口縁壺もしくは器台 ３ー北区　７トレンチ	口径　ー 残存高　3.1cm（口縁部の一部のみ） 底径　ー ・外面　ナデ、竹管文 内面　ナデ ・　ー ・　ー	やや不良	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・5YR6/5 橙色 ・7.5YR6/2 灰褐色	・庄内式期
104 ー 35 庄内式土器　高杯 ３ー北区　１トレンチ	口径　23.3cm 残存高　15.2cm（7/10 残存） 裾部径　14.2cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ケズリのちナデ 内面　ナデ、ハケ（３条 /cm）、ケズリ	良好	φ２mm の長石、雲母含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・庄内１式 ・杯部外面に黒斑残る ・接合法が用いられる ・大形高杯
104 ー 36 土師器　高杯 ３ー北区　１トレンチ	口径　ー 残存高　11.6cm（全体 1/2 残存） 裾部径　10.8cm（杯部の一部と脚台部のみ） ・　ー ・　ー ・外面　ヘラミガキ 内面　ケズリのちハケ（条数不明）	良好	密	・5YR6/6 橙色 ・5YR6/8 橙色	・古墳時代後期前半
104 ー 37 弥生土器　高杯もしくは鉢 ３ー北区　５トレンチ	口径　ー 残存高　3.2cm（全体 1/10 残存） 裾部径　9.5cm（裾部残存 1/6 からの回転復原） ・　ー ・　ー ・外面　ナデ、ヘラミガキ、透孔 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR6/3 にぶい黄橙色 ・10YR6/3 にぶい黄橙色	・畿内第Ｖ様式 ・透孔（円形）（上段２孔、下段３孔）
104 ー 38 土師器　高杯 ３ー北区　１トレンチ	口径　ー 残存高　5.0cm（全体 3/10 残存） 裾部径　8.6cm ・　ー ・　ー ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　シボリメ、ケズリのちナデ、透孔	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・5YR6/8 にぶい橙色 ・5YR6/8 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・透孔（円形）３孔残る
104 ー 39 土師器　高杯 ３ー北区　谷地形	口径　ー 残存高　8.8cm（脚台部のみ 9/20 残存） 裾部径　10.0cm ・　ー ・　ー ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ナデ、ケズリ	良好	密	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・古墳時代後期前半

図ー番号 器種 出土場所	・口縁部（口頸部） 大きさと、調整・施文 ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
104 ー 40 弥生土器　蓋 ３ー北区　谷地形	口径　　ー（口縁部欠損） 残存高　4.1cm つまみ径　5.2cm ・　ー ・外面　ナデ、指頭圧痕（つまみ） 内面　ケズリのちハケ（５条 /cm） ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石含む	・7.5YR6/6 橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅲ～Ⅳ様式 ・外面全体が被熱により赤変する
104 ー 41 弥生土器　ミニチュア土器 鉢 ３ー北区	口径　3.4cm（残存 / からの回転復原） 残存高　3.7cm（全体残存） 底径　2.7cm ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ３mm 以下の長石、石英含む	・10YR6/2 灰黄褐色 ・10YR6/1 褐灰色	・体部から底部外面に黒斑残る
104 ー 42 弥生土器　ミニチュア土器 壺 ３ー北区　５トレンチ	口径　1.9cm（完形） 残存高　6.1cm 底径　2.4cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、石英含む	・2.5Y7/3 浅黄色 ・2.5Y3/1 黒褐色	・口縁部外面に黒斑残る ・ドーナツ底
104 ー 43 土師器　壺 ３ー北区　１トレンチ	口径　11.2cm（口縁部残存 5/12 からの回転復原） 残存高　5.4cm（全体 1/5 残存） 底径　　ー ・外面　調整不明 内面　ハケ（４条 /cm）のちナデ ・　ー ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、結晶片岩含む	・2.5Y6/2 灰黄色 ・2.5Y3/1 黒褐色	・古墳時代中期中頃 ・口縁部内面に煤付着、口縁部の外表面は剝離
104 ー 44 土師器　小形丸底壺 ３ー北区　谷地形	口径　　ー 残存高　5.3cm（全体 2/5 残存） 底径　　ー ・　ー ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	密	・5YR7/6 橙色 ・5YR7/6 橙色	・布留１式 ・体部内面に炭化物（漆？）付着 ・体部から底部外面に黒斑残る
104 ー 45 土師器　短頸壺 ３ー北区　１トレンチ	口径　12.8cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.0cm 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y6/3 にぶい黄色 ・2.5Y6/2 灰黄色	・布留３～４式 ・口縁部外面に黒斑残る
104 ー 46 土師器　短頸壺 ３ー北区　１トレンチ	口径　18.9cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　3.6cm（全体 1/10 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・10YR7/3 にぶい黄橙色	・布留３～４式
104 ー 47 土師器　直口壺 ３ー北区　１トレンチ	口径　13.8cm（口縁部残存 5/12 からの回転復原） 残存高　6.6cm（全体 1/10 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ（口縁端）、ハケ（６条 /cm） ・外面　ハケ（６条 /cm） 内面　ケズリ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y7/2 灰黄色 ・2.5Y6/3 にぶい黄橙色	・古墳時代中期中頃 ・口縁部に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
104 ー 48 土師器　甕 ３ー北区　１トレンチ	口径　13.4cm 残存高　4.8cm（全体 7/20 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・2.5Y5/2 暗灰黄色、2.5Y2/1 黒色 ・2.5Y5/2 暗灰黄色	・布留３～４式 ・口縁部外面に煤付着
104 ー 49 土師器　短頸壺 ３ー北区　１トレンチ	口径　13.8cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.6cm 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・10YR にぶい黄橙色 ・10YR にぶい黄橙色	・古墳時代中期中頃 ・口縁部外面に煤付着
105 ー 50 土師器　甕 ３ー北区　１トレンチ	口径　15.2cm（口縁部のみ完形） 残存高　12.7cm 底径　　ー ・外面　ナデ、頸部に工具痕 内面　ナデ ・外面　指頭圧痕のちナデ 内面　ケズリのちハケ（６条 /cm） ・　ー	良好	φ２mm の長石含む	・10YR5/2 灰黄褐色 ・10YR8/2 灰白色	・古墳時代後期 ・口縁端部、体部外面に煤付着 ・体部内面に黒斑あり
105 ー 51 土師器　甕 ３ー北区　１トレンチ	口径　14.0cm（口縁部残存 1/3 からの回転復原） 残存高　4.4cm（全体 1/5 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ、ハケ（６条 /cm） 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ ・外面　ナデ、ハケ（６条 /cm） 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ ・　ー	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y7/3 浅黄色 ・2.5Y7/3 浅黄色	・古墳時代中期中頃
105 ー 52 土師器　高杯 ３ー北区　谷地形	口径　12.7cm（口縁部残存 1/2 からの回転復原） 残存高　4.8cm 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキのちナデ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキのちナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・2.5Y7/1 灰白色	・古墳時代中期中頃
105 ー 53 土師器　小形器台 ３ー北区　谷地形	口径　　ー 残存高　5.6cm（脚台部 1/2 残存） 裾部径　10.8cm ・　ー ・　ー ・外面　ヘラミガキ 内面　ハケ（４条 /cm）のちナデ	良好	密	・5YR5/6 明赤褐色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・布留０～１式 ・脚台部外面に赤彩あり
105 ー 54 土師器　鉢 ３ー北区　１トレンチ	口径　12.8cm 残存高　5.6cm（3/4 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・古墳時代後期
105 ー 55 土師器　杯 ３ー北区　４トレンチ	口径　14.6cm 残存高　3.8cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	密	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・平安時代前期～中期

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
105 ー 56 須恵器　杯蓋 ３ー北区　１トレンチ	口径　12.0cm(口縁部残存 1/4 からの回転復原) 残存高　4.1cm（全体 1/2 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N6/0 灰色 ・N6/0 灰色	・MT15 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・口縁部から天井部外面に自然釉付着
105 ー 57 須恵器　杯蓋 ３ー北区　谷地形	口径　13.0cm(口縁部残存 1/2 からの回転復原) 残存高　4.1cm（全体 1/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N5/0 灰色 ・N5/0 灰色	・TK216 型式 ・ロクロ回転方向右回り
105 ー 58 須恵器　杯蓋 ３ー北区　１トレンチ	口径　13.8cm（口縁部 1/2 残存） 残存高　4.0cm 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・2.5Y7/2 灰黄色 ・10Y6/1 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向右回り ・天井部外面中央にヘラによる線刻
105 ー 60 瓦器　椀 ３ー北区　４トレンチ	口径　12.0cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　2.5cm（全体 1/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　暗文風ヘラミガキ ・　ー	良好	密	・N4/0 灰色 ・N5/0 灰色	・鎌倉時代 ・大和形
121 ー 1 須恵器　杯身 ３ー南区　２トレンチ　流入土	口径　13.1cm(口縁部残存 1/4 からの回転復原) 残存高　4.3cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ	不良	密	・5Y7/2 灰白色 ・5Y7/2 灰白色	・TK43 型式 ・ロクロ回転方向右回り
121 ー 2 須恵器　高杯蓋 ３ー南区　流入土	口径　15.0cm（口縁部 5/6 残存） 残存高　5.3cm（9/10 残存） 底径　ー ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ、ナデ（つまみ） 内面　ヨコナデ ・　ー	良好	密	・N7/0 灰白色 ・N6/0 灰色	・TK10 型式 ・ロクロ回転方向右回り
122 ー 1 土師器　小形丸底壺 ３ー南区　住居 11	口径　8.9cm(口縁部残存 1/12 からの回転復原) 残存高　7.2cm（2/3 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（５条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・布留３式
122 ー 2 土師器　小形丸底壺 ３ー南区　住居 11	口径　8.4cm（口縁部 3/4 残存ほぼ完形） 残存高　8.1cm 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ヘラケズリ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5YR6/8 橙色 ・2.5YR5/6 明赤褐色	・布留３式 ・体部、底部外面に黒斑残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
122 － 3 土師器　高杯 ３－南区　住居 11	口径　18.8cm 残存高　12.9cm（4/5 残存） 裾部径　11.7cm ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ、指頭圧痕	不良	密	・2.5YR5/8 明赤褐色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留３式 ・接合法を用いる ・風化激しい ・柱状部内面に黒斑残る ・裾部内面に炭化物付着
123 － 4 埴輪　朝顔形埴輪 ３－南区　住居 12・13	口径　－（口縁部片） 残存高　6.1cm 底径　－ ・外面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ナデ（貼付突帯） 内面　ハケ（７条 /cm） ・　－ ・　－	良好	φ５mm 以下の長石、石英、チャート、赤色斑粒含む	・10YR7/3 にぶい黄橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・古墳時代中期～後期
123 － 5 土師器　把手 ３－南区　住居 12・13	残存長　6.1cm 残存厚　2.9cm（全体 1/10 残存把手のみ） 残存幅　－ ・　－ ・外面　指頭圧痕、ハケ（８条 /cm）、ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・古墳時代中期中頃～後期
123 － 9 土師器　二重口縁壺 ３－南区　方形状落ち込み	口径　10.0cm（口縁部 11/12 残存） 残存高　5.3cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリ ・　－	良好	密	・5YR4/3 にぶい赤褐色 ・5YR4/3 にぶい赤褐色	・布留３式
123 － 10 土師器　二重口縁壺 ３－南区　方形状落ち込み	口径　28.0cm（口縁部残存 //12 からの回転復原） 残存高　7.8cm（全体 1/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・5YR6/6 橙色 ・7.5YR5/2 灰褐色	・布留３式 ・口縁部内面に黒斑残る ・山陰系か
123 － 11 土師器　小形丸底壺 ３－南区　方形状落ち込み	口径　7.5cm（口縁部残存 1/2 からの回転復原） 残存高　8.8cm（全体 1/2 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ケズリのちナデ、指頭圧痕 ・外面　ナデ 内面　ケズリのちナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR4/2 灰褐色	・布留３式 ・体部外面に黒斑残る
123 － 12 土師器　小形丸底壺 ３－南区　方形状落ち込み	口径　7.5cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　9.1cm（4/5 残存） 底径　－ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ヘラケズリのちナデ、指頭圧痕 ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、角閃石、雲母含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・布留３式
123 － 13 土師器　小形丸底壺 ３－南区　方形状落ち込み	口径　8.6cm（口縁部残存 1/2 からの回転復原） 残存高　6.1cm（全体 2/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリ ・　－	良好	φ３mm 以下の長石含む	・5YR5/4 にぶい赤褐色 ・2.5YR6/8 橙色	・布留３式 ・口縁部から体部外面に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
124 ー 14 土師器　短頸壺 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　12.2cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　21.3cm（全体 9/20 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y7/2 灰黄色 ・2.5Y7/2 灰黄色	・布留３式
124 ー 15 土師器　小形壺 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　10.5cm 残存高　10.4cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ケズリのちヘラミガキ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・5YR5/4 にぶい赤褐色 ・10YR5/3 にぶい黄褐色	・布留３式
124 ー 16 軟質韓式系土器　壺 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　ー 残存高　18.5cm（全体 2/5 残存） 底径　11.6cm ・　ー ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR5/6 黄褐色 ・7.5YR6/6 橙色	・布留３式 ・体部内面に環状に被熱痕あり ・体部外面に黒斑残る
124 ー 17 土師器　高杯 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　17.3cm 残存高　5.3cm（杯部のみ 1/2 残存） 底径　ー ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（８条 /cm）のちナデ ・外面　ハケ（６条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（８条 /cm）のちナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・10YR4/2 灰黄褐色	・布留３式 ・円板充填法が用いられる
124 ー 18 土師器　高杯 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　18.8cm（口縁部 7/12 残存） 残存高　6.3cm（全体 2/5 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留３式 ・挿入法が用いられる
124 ー 19 土師器　高杯 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　19.4cm 残存高　6.4cm（全体 3/10 残存） 底径　ー ・外面　ハケ（７条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（７条 /cm）、ナデ ・外面　ハケ（7条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（７条 /cm）、ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・5YR7/6 橙色 ・5YR7/6 橙色	・布留３式 ・挿入法が用いられる
124 ー 20 土師器　高杯 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　18.0cm（口縁部 3/4 残存） 残存高　12.4cm（3/5 残存） 底径　ー ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・外面　ヘラミガキ 内面　シボリメ、ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英含む	・2.5Y6/8 橙色～2.5Y2/1 黒色 ・2.5Y6/8 橙色	・布留３式 ・挿入法が用いられる ・杯部内面、脚台部外面に黒斑残る
124 ー 21 土師器　高杯 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　19.0cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　4.7cm（杯部のみ） 底径　ー ・外面　ケズリのちナデ 内面　ナデ ・外面　ケズリのちナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石含む	・5YR6/6 橙色 ・5YR6/6 橙色	・布留３式

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
124 ー 22 土師器　高杯 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　　ー 残存高　5.5cm（全体 3/10 残存） 裾部径　11.8cm ・　ー ・外面　ナデ、ハケ（５条 /cm） 内面　ナデ ・外面　ナデ、ハケ（５条 /cm） 内面　ナデ	良好	φ３mm 以下の長石、結晶片岩、赤色斑粒含む	・7.5YR6/8 橙色 ・5YR7/8 橙色	・布留３式 ・裾部内面に黒斑残る
124 ー 23 土師器　高杯 ３ー南区　方形状落ち込み	口径　18.6cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　10.7cm（全体 9/20 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ハケ（８条 /cm）のちナデ ・外面　ナデ 内面　ハケ（８条 /cm）のちナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ハケ（６条 /cm）のちナデ、ケズリ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR5/3 にぶい黄褐色 ・10YR5/2 灰黄褐色	・布留３式 ・挿入法が用いられる
125 ー 1 瓦器　椀 ３ー南区　ピット 209	口径　15.0cm（口縁部残存 1/3 からの回転復原） 残存高　6.6cm（全体 1/2 残存） 底径　6.4cm ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ナデ、指頭圧痕のちヘラミガキ ・外面　指頭圧痕、ナデ 内面　ナデ、指頭圧痕のちヘラミガキ	不良	密	・2.5Y5/1 黄灰色 ・2.5Y7/4 浅黄色	・平安時代後期 ・大和形
125 ー 2 庄内式土器　壺 ３ー南区　ピット 210	口径　18.0cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　3.8cm（全体 3/20 残存） 底径　　ー ・外面　ハケのち（５条 /cm）ナデ、波状文（４条 /0.5cm）、竹管文のある円形浮文（口縁端面） 内面　ナデ、ヘラミガキ、刺突文、波状文（５条 /0.5cm が２帯） ・　ー ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR5/2 灰褐色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・庄内１～２式
125 ー 3 庄内式土器　二重口縁壺 ３ー南区　ピット 210	口径　30.4cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　6.9cm（全体 1/10 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ、突帯 内面　ナデ ・　ー ・　ー	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母、赤色斑粒、チャート、角閃石含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/6 橙色	・庄内１～２式
125 ー 4 土師器　甕 ３ー南区　ピット 245	口径　16.0cm 残存高　6.0cm（全体 1/10 残存） 底径　　ー ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・　ー	不良	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・2.5Y5/8 明赤褐色 ・5YR6/6 橙色	・布留２～３式
125 ー 5 土師器　甕 ３ー南区　ピット 245	口径　18.7cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.6cm（全体 1/10 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・布留２～３式

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
125 － 6 土師器　甕 ３－南区　ピット 245	口径　17.4　cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　7.1cm 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/6 明黄褐色 ・10YR7/6 明黄褐色	・布留２～３式
125 － 7 須恵器　杯蓋 ３－南区　ピット 246	口径　13.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　3.1cm 底径　　－ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・　－	良好	密	・2.5Y5/1 灰色 ・2.5Y5/1 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向右回り
125 － 8 須恵器　瓶 ３－南区　ピット 246	口径　9.9cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　9.9cm（4/5 残存） 底径　－ ・外面　ナデ、波状文（６条 /0.3cm・７～８条 /0.5cm） 内面　ナデ ・外面　ヨコナデ、波状文（５条 /0.4cm）、凹線２条 内面　ヨコナデ ・外面　タタキ（３条 /cm） 内面　ナデ	良好	密	・N5/0 灰色 ・N6/0 灰色	・TK23 型式 ・ロクロ回転方向左回り ・体部中程やや上方に穿孔あり
125 － 9 土師器　壺 ３－南区　ピット 250	口径　19.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.0cm（全体 1/10 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母、赤色斑粒含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・古墳時代中期中頃
125 － 10 土師器　壺 ３－南区　ピット 250	口径　18.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　5.3cm（全体 3/10 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、雲母、チャート、赤色斑粒含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・古墳時代中期中頃
125 － 11 土師器　羽釜 ３－南区　ピット 253	口径　20.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　5.8cm（全体 3/10 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ケズリ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、チャート含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・平安時代後期 ・内外面に被熱？
125 － 12 瓦器　椀 ３－南区　ピット 253	口径　15.8cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　4.1cm 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－	やや不良	密	・2.5Y8/2 灰白色 ・2.5Y8/2 灰白色	・平安時代後期

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
125 ー 13 黒色土器　椀 ３ー南区　ピット 253	口径　　ー（口縁部 1/6 残存） 残存高　3.7cm 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 内面　ヘラミガキ ・　ー	良好	密	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR2/1 黒色	・平安時代後期 ・黒色土器 A 類
126 ー 14 土師器　羽釜 ３ー南区　ピット 253	口径　　ー 残存高　7.1cm（鍔部 1/5 残存） 底径　　ー ・　ー ・外面　ナデ 内面　工具によるナデ ・　ー	良好	φ３mm 以下の長石含む	・5YR5/4 にぶい赤褐色 ・5YR6/6 橙色	・平安時代後期 ・体部、鍔部の内外面に黒斑残る
126 ー 15 土師器　高杯 ３ー南区　ピット 263	口径　　ー（口縁部 11/12 残存） 残存高　7.1cm（全体 2/5 残存） 裾部径　11.4cm ・　ー ・　ー ・外面　ヘラミガキ 内面　シボリメ、ナデ	良好	密	・5YR5/6 明赤褐色 ・5YR5/4 にぶい赤褐色	・布留２～３式 ・脚台部外面に黒斑残る
126 ー 16 土師器　高杯 ３ー南区　ピット 264	口径　14.5cm 残存高　5.8cm（杯部のみ 1/2 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　ー	不良	φ１mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	・10YR8/4 浅黄橙色 ・10YR8/4 浅黄橙色	・古墳時代中期 ・円板充填法が用いられる
126 ー 20 土師器　甕 ３ー南区　ピット 289	口径　14.2cm(口縁部残存 1/6 からの回転復原) 残存高　7.1cm（全体 3/10 残存） 底径　　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　ナデ、指頭圧痕 ・　ー	良好	φ１mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・布留３～４式 ・口縁部外面に黒斑残る
127 ー 1 土師器　壺 ３ー南区　土坑 20	口径　10.1cm 残存高　9.2cm（口縁部～体部 7/10 残存） 底径　ー ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　指頭圧痕、ナデ ・　ー	良好	φ１mm の長石含む	・5YR7/4 にぶい橙色～ 7.5YR5/1 褐灰色 ・7.5YR5/1 褐灰色	・布留２～３式
127 ー 2 土師器　高杯 ３ー南区　土坑 20	口径　　ー 残存高　6.5cm（脚台部のみ 4/5 残存） 裾部径　11.0cm ・　ー ・　ー ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　シボリメ、ヘラミガキ	良好	φ１mm の長石、石英含む	・5YR6/4 にぶい橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・布留２～３式
127 ー 3 土師器　高杯 ３ー南区　土坑 20	口径　17.7cm 残存高　11.7cm（全体 2/5 残存） 裾部径　10.7cm ・外面　ナデのちヘラミガキ 内面　ナデ、ヘラミガキ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 内面　ナデ、指頭圧痕、シボリメ	良好	φ１mm の長石含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・布留２～３式 ・接合法が用いられる ・外面全体に黒斑残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
128 － 4 土師器　高杯 ３－南区　土坑 20	口径　　－ 残存高　6.5cm（脚台部のみ 4/5 残存） 裾部径　11.0cm ・　－ ・外面　ハケ（５条 /cm）のちナデ 　内面　ナデ ・外面　ヘラミガキ 　内面　シボリメ、ケズリ、ハケ（７条 /cm）	良好	φ１mm の長石、雲母含む	・7.5YR6/6 橙色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・布留２～３式 ・円板充填法が用いられる
128 － 5 土師器　高杯 ３－南区　土坑 20	口径　　－ 残存高　6.7cm（脚台部のみ 1/2 残存） 裾部径　10.0cm ・　－ ・外面　ナデ 　内面　ナデ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 　内面　ナデ、シボリメ	良好	φ１mm の長石含む	・5YR7/8 橙色 ・5YR7/8 橙色	・布留２～３式 ・挿入付加法が用いられる
128 － 6 土師器　高杯 ３－南区　土坑 20	口径　　－ 残存高　7.0cm（脚台部のみ 1/2 残存） 底径　　－ ・　－ ・　－ ・外面　ヘラミガキのちナデ 　内面　シボリメ、ナデ	良好	φ１mm の長石含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・布留２～３式 ・挿入付加法が用いられる
128 － 7 土師器　高杯 ３－南区　土坑 20	口径　　－ 残存高　7.0cm（脚台部のみ 2/5 残存） 裾部径　10.5cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ、ヘラミガキ 　内面　ナデ、シボリメ	良好	φ１mm の長石含む	・5YR7/6 橙色 ・2.5Y7/8 橙色	・布留２～３式 ・接合法が用いられる
128 － 8 弥生土器　甕 ３－南区　土坑 22	口径　23.7cm 残存高　8.0cm（全体 1/10 残存） 底径　　－ ・外面　調整不明、口縁端部に刻み目 　内面　調整不明 ・外面　調整不明 　内面　調整不明 ・　－	良好	φ１mm 以下の長石含む	・7.5YR6/6 橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅰ様式に属する ・口縁部内面に黒斑残る
128 － 9 土師器　壺 ３－南区　土坑 22	口径　9.9cm 残存高　4.4cm（全体 1/10 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 　内面　ナデ ・外面　ナデ 　内面　ナデ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・7.5YR6/4 にぶい橙色～ 7.5YR2/1 黒色 ・7.5YR6/4 にぶい橙色	・古墳時代後期前半 ・口縁部外面に炭化物付着
128 － 10 土師器　高杯 ３－南区　土坑 22	口径　－ 残存高　5.4cm 裾部径　22.2cm（裾部位残存 1/12 からの回転復原） ・　－ ・　－ ・外面　ハケ（７条 /cm）のちナデ、ヘラミガキ 　内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ	良好	φ１mm 以下の長石、赤色斑粒含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・古墳時代後期前半
128 － 11 土師器　小形高杯 ３－南区　土坑 22	口径　13.4cm（口縁部残存 1/6 からの回転復原） 残存高　5.3cm（全体 3/10 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 　内面　ナデ ・外面　ナデ、指頭圧痕 　内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の長石、チャート、雲母含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・古墳時代後期前半 ・杯部外面に黒斑残る ・接合法が用いられる
128 － 12 土師器　高杯 ３－南区　土坑 22	口径　15.2cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　12.3cm（4/5 残存） 裾部径　10.0cm ・外面　ナデ 　内面　ナデ ・外面　ナデ 　内面　ナデ ・外面　ナデ 　内面　ナデ、ケズリ	良好	φ２mm 以下の長石、石英、雲母、赤色斑粒含む	・10YR7/4 にぶい黄橙色 ・10YR7/4 にぶい黄橙色	・古墳時代後期前半 ・挿入付加法が用いられる ・杯部、裾部外面に黒斑残る

図ー番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
128 － 13 土師器　高杯 ３－南区　土坑 22	口径　　－ 残存高　8.3cm（脚台部と杯部の一部のみ 1/3 残存） 底径　　－ ・　－ ・外面　ハケ（７条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（７条 /cm）のちナデ ・外面　ハケ（７条 /cm）のちナデ 内面　ナデ、ケズリ	良好	φ３mm 以下の赤色斑粒含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・古墳時代後期前半 ・挿入付加法が用いられる
128 － 14 土師器　高杯 ３－南区　土坑 22	口径　　－ 残存高　7.5cm（全体 3/10 残存） 底径　　－ ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ、シボリメ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・古墳時代後期前半 ・脚台部内面に黒斑残る
128 － 15 土師器　台付甕 ３－南区　土坑 24	口径　　－ 残存高　4.5cm（全体 1/5 残存） 脚台部径　8.0cm ・　－ ・　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	φ１mm 以下の長石、石英、雲母、赤色斑粒含む	・7.5YR7/6 橙色 ・7.5YR7/6 橙色	・古墳時代中期中頃 ・東海地方の影響を受ける外来系土器
128 － 16 土師器　壺 ３－南区　土坑 24	口径　12.6cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　4.5cm（全体 1/5 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、石英、赤色斑粒含む	・5YR6/6 橙色 ・5YR7/6 橙色	・古墳時代中期中頃
128 － 17 土師器　壺 ３－南区　土坑 24	口径　12.8cm（口縁部残存 1/4 からの回転復原） 残存高　3.9cm（全体 1/10 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・　－ ・　－	良好	φ２mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	・7.5YR5/6 明褐色 ・7.5YR5/6 明褐色	・古墳時代中期中頃
128 － 18 庄内式土器　甕 ３－南区　土坑 30	口径　14.7cm（口縁部残存 1/12 からの回転復原） 残存高　6.0cm（全体 1/10 残存） 底径　　－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ（３条 /cm）のちナデ 内面　ナデ ・　－	やや不良	φ３mm 以下の長石含む	・7.5YR6/6 橙色 ・2.5Y3/1 黒褐色	・庄内１～２式
129 － 1 土師器　壺 ３－南区　溝 11	口径　　－ 残存高　11.02cm（体部～底部のみ完形） 底径　　－ ・　－ ・外面　ケズリ 内面　ナデ、指頭圧痕 ・外面　ケズリ 内面　ナデ、指頭圧痕	良好	φ１mm の長石、雲母、黒色砂粒含む	・2.5Y6/6 橙色 ・N3/0 暗灰色	・古墳時代中期中頃 ・体部から底部内面に黒斑残る
129 － 2 土師器　高杯 ３－南区　溝 11	口径　　－ 残存高　7.8cm（全体 1/2 残存） 裾部径　10.0cm ・　－ ・外面　ケズリのちハケ（５条 /cm）、ナデ 内面　ヘラミガキ ・外面　ハケ（５条 /cm）のちナデ 内面　ハケ（６条 /cm）、ケズリ、シボリメ、ナデ	良好	φ１mm 以下の長石含む	・7.5YR7/4 にぶい橙色 ・7.5YR7/4 にぶい橙色	・古墳時代中期中頃 ・挿入付加法が用いられる

図－番号 器種 出土場所	大きさと、調整・施文 ・口縁部（口頸部） ・体部 / 天井部 ・底部（脚台部・高台）	焼成	胎土	色調 ・外面 ・内面	備考
129 － 3 土師器　高杯 ３－南区　溝 11	口径　　－ 残存高　8.4cm（脚台部のみ 3/10 残存） 底径　　－ ・　－ ・外面　調整不明 内面　調整不明 ・外面　調整不明 内面　シボリメ	良好	φ１mm の長石、雲母含む	・5YR7/6 橙色 ・5YR7/6 橙色	・古墳時代中期中頃 ・挿入付加法が用いられる
129 － 4 土師器　高杯 ３－南区　溝 11	口径　14.0cm 残存高　5.6cm（杯部のみ 2/5 残存） 底径　　－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・　－	良好	φ１～２mm の長石、石英含む	・7.5YR8/6 浅黄橙色 ・5YR6/6 橙色	・古墳時代中期中頃 ・挿入付加法が用いられる ・杯部外面に黒斑残る
129 － 5 軟質韓式系土器 甕 ３－南区　溝 12	口径　18.2cm 残存高　22.2cm（全体 2/5 残存） 底径　　－ ・外面　ナデのちハケ（７条 /cm） 内面　ナデ ・外面　タタキ（４条 /cm）のちカキメ（７条 /cm） 内面　調整不明 ・外面　ハケ（７条 /cm） 内面　調整不明	良好	φ１mm の長石含む	・7.5YR8/6 浅黄橙色 ・7.5YR8/6 浅黄橙色	・古墳時代中期前半
138 － 1 弥生土器　甕 １区　６トレンチ	口径　　－ 残存高　3.6cm（破片） 底径　　－ ・外面　ナデ、刻目 内面　ナデ ・外面　ヘラ描沈線３条、ナデ 内面　ナデ ・　－	良好	φ１mm 以下の石英、長石含む	・10YR6/4 にぶい黄橙色 ・10YR6/4 にぶい黄橙色	・畿内第Ⅰ様式の新しい段階

別表２　出土石器・石製品　観察表

図ー番号 器種 出土場所	大きさと重量	色調	石材	備考
48 － 11 石錐 １区　２トレンチ　谷地形	最大長：5.65cm 最大厚：1.0cm 最大幅：1.5cm 重量：9.0g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・柳葉形 ・回転痕あり
48 － 12 石錐の未完成品もしくは削器 １区　３トレンチ　谷地形	最大長：5.05cm 最大厚：0.95cm 最大幅：2.5cm 重量：8.7g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・回転痕風の摩滅あり
48 － 13 楔もしくは削器 １区　３トレンチ　谷地形	最大長：6.3cm 最大厚：1.0cm 最大幅：3.05cm 重量：14.7g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・石鏃の未成品の可能性あり
48 － 14 石皿片 １区　２トレンチ　谷地形	最大長：4.9cm 最大厚：1.2cm 最大幅：7.05cm 重量：43.1g	10Y6/1 灰色	安山岩	・完形 ・削器などに利用された可能性あり
48 － 15 削器 １区　３トレンチ　谷地形	最大長：4.2cm 最大厚：0.9cm 最大幅：4.9cm 重量：21.5g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・完形 ・原礫面が残る
48 － 16 石包丁 １区　２トレンチ　谷地形	最大長：5.5cm 最大厚：0.65cm 最大幅：（2.6）cm 重量：15.6g	2.5GY6/1 オリーブ灰色	緑泥片岩	・紐穴が１孔残る
48 － 17 石包丁 １区　２トレンチ　谷地形	最大長：（3.6）cm 最大厚：（0.45）cm 最大幅：（4.1）cm 重量：7.1g	2.5GY5/1 オリーブ灰色	緑泥片岩	・表面に研磨が残る
48 － 18 剥片 １区　３トレンチ　谷地形	最大長：3.9cm 最大厚：0.5cm 最大幅：1.95cm 重量：3.6g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
48 － 19 石棒または石斧の基部 １区　３トレンチ　谷地形	最大長：9.85cm 最大厚：5.1cm 最大幅：7.05cm 重量：64.8g	5Y5/2 灰オリーブ色	安山岩	・完形 ・欠損後敲き石として利用された可能性あり
48 － 20 敲き石の破片 １区　３トレンチ　谷地形	最大長：(5.0)cm 最大厚：2.9cm 最大幅：12.15cm 重量：26.0g	5Y6/1 灰色	砂岩	・1/2 残存
55 － 122 凹基式石鏃 ４区　３トレンチ　谷地形	最大長：2.95cm 最大厚：0.3cm 最大幅：1.6cm 重量：0.9g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・完形
55 － 123 巡方 ４区　７トレンチ　谷地形	最大長：10.0cm 最大厚：4.7cm 最大幅：10.6cm 重量：656.7g	5Y7/1 灰白色	粘板岩	・奈良時代～平安時代 ・２孔１組の未貫通の穿孔有り
56 － 124 磨石 ４区　４トレンチ　谷地形	最大長：10.2cm 最大厚：6.2cm 最大幅：11.5cm 重量：610.0g	5Y8/1 灰白色	砂岩	・4/5 残存 ・使用期間の短い成品もしくは再加工品
56 － 125 敲き石もしくは磨石を転用した石錘 ４区　４トレンチ　谷地形	最大長：3.8cm 最大厚：0.8cm 最大幅：3.7cm 重量：21.6g	5Y2/1 黒色	安山岩	・4/5 残存 ・紐をかけるための窪みを敲打により作りだしている

図－番号 器種 出土場所	大きさと重量	色調	石材	備考
87 － 48 削器 ２区　谷地形	最大長：3.7cm 最大厚：1.35cm 最大幅：6.5cm 重量：30.4g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
87 － 49 削器 ２区　１トレンチ　谷地形	最大長：4.5cm 最大厚：1.4cm 最大幅：3.5cm 重量：18.5g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	
87 － 50 剥片 ２区　１トレンチ　谷地形	最大長：3.55cm 最大厚：0.9cm 最大幅：2.4cm 重量：4.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・楔形から剥離した可能性有り
87 － 51 剥片 ２区　１トレンチ　谷地形	最大長：6.7cm 最大厚：1.7cm 最大幅：2.9cm 重量：28.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
87 － 52 剥片 ２区　１トレンチ　谷地形	最大長：3.3cm 最大厚：0.8cm 最大幅：3.65cm 重量：8.6g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・楔形から剥離した可能性有り
87 － 53 剥片 ２区　１トレンチ　谷地形	最大長：3.8cm 最大厚：0.9cm 最大幅：2.6cm 重量：12.1g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・楔形から剥離した可能性有り
90 － 31 剥片 ２区　谷地形	最大長：3.1cm 最大厚：0.55cm 最大幅：2.1cm 重量：3.5g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・両側縁部に片面細部調整
90 － 32 凹基式石鏃 ２区　谷地形	最大長：2.1cm 最大厚：0.3cm 最大幅：1.45cm 重量：0.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・未成品
90 － 33 石錐 ２区　谷地形	最大長：5.2cm 最大厚：0.7cm 最大幅：1.0cm 重量：4.5g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・棒状 ・両端に回転痕
90 － 34 削器 ２区　谷地形	最大長：4.2cm 最大厚：0.9cm 最大幅：2.75cm 重量：11.2g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・石鏃の未成品の可能性あり
90 － 35 石錐未成品 ２区　谷地形	最大長：3.9cm 最大厚：1.2cm 最大幅：2.6cm 重量：7.9g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・未成品 ・逆涙滴形 ・原礫面が残る
90 － 36 石錐 ２区　谷地形	最大長：5.6cm 最大厚：1.4cm 最大幅：3.7cm 重量：19.2g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・逆涙滴形 ・原礫面残る
91 － 37 削器 ２区　谷地形	最大長：5.2cm 最大厚：0.95cm 最大幅：2.15cm 重量：6.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・鋸歯縁を作り出す ・原礫面残る
91 － 38 楔形 ２区　谷地形	最大長：4.7cm 最大厚：0.8cm 最大幅：2.4cm 重量：11.2g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る ・白く潰れる部分あり
91 － 39 剥片 ２区　谷地形	最大長：4.2cm 最大厚：1.2cm 最大幅：4.6cm 重量：21.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・一部に細部調整

図ー番号 器種 出土場所	大きさと重量	色調	石材	備考
91 － 40 楔形もしくは削器 ２区　谷地形	最大長：1.2cm 最大厚：1.5cm 最大幅：4.2cm 重量：31.6g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
91 － 41 敲き石 ２区　谷地形	最大長：8.9cm 最大厚：3.9cm 最大幅：5.5cm 重量：276.5g	7.5Y6/1 灰色	砂岩	・1/2 を欠失 ・敲打痕が中央と周縁部に残る
91 － 42 柱状石斧 ２区　谷地形	最大長：8.0cm 最大厚：2.1cm 最大幅：6.0cm 重量：173.9g	7.5Y6/1 灰色	安山岩	・刃部の一部を欠失
91 － 43 砥石 ２区　谷地形	最大長：5.7cm 最大厚：2.85cm 最大幅：4.05cm 重量：64.8g	10YR8/1 灰白色	凝灰岩	・被熱痕あり ・４面を砥面とする
91 － 44 砥石 ２区　谷地形	最大長：8.2cm 最大厚：3.52cm 最大幅：4.2cm 重量：138.7g	2.5Y4/1 黄灰色	凝灰岩	・被熱痕あり ・４面を砥面とする
91 － 45 柱状石斧 ２区　谷地形	最大長：5.1cm 最大厚：1.1cm 最大幅：2.8cm 重量：25.7g	10Y3/1 オリーブ黒色	結晶片岩	・刃部および基部欠失
91 － 46 砥石 ２区　谷地形	最大長：9.4cm 最大厚：1.5cm 最大幅：4.5cm 重量：76.4g	N3/3 暗灰色	結晶片岩	・被熱痕あり ・1/3 を欠失 ・４面を砥面とする ・柱状石斧の再加工品？
91 － 47 砥石 ２区　谷地形	最大長：6.05cm 最大厚：3.1cm 最大幅：5.1cm 重量：139.6g	5Y7/1 灰白色	凝灰岩	・被熱痕あり ・３面を砥面とする
92 － 48 石核 ２区　谷地形	最大長：6.3cm 最大厚：2.6cm 最大幅：9.1cm 重量：172.7g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
92 － 49 剥片 ２区　谷地形	最大長：3.6cm 最大厚：0.8cm 最大幅：1.2cm 重量：1.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	
92 － 50 楔形石器 ２区　谷地形	最大長：5.2cm 最大厚：2.0cm 最大幅：5.8cm 重量：48.7g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・対向する２辺に刃潰れがみられる
92 － 51 剥片 ２区　谷地形	最大長：3.0cm 最大厚：0.7cm 最大幅：2.7cm 重量：3.0g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
92 － 52 剥片 ２区　谷地形	最大長：7.0cm 最大厚：1.2cm 最大幅：3.65cm 重量：13.9g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
92 － 53 剥片 ２区　谷地形	最大長：3.0cm 最大厚：0.7cm 最大幅：1.8cm 重量：4.1g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	
92 － 54 剥片 ２区　谷地形	最大長：2.1cm 最大厚：0.7cm 最大幅：1.8cm 重量：2.3g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る

図－番号 器種 出土場所	大きさと重量	色調	石材	備考
92 － 55 剝片 ２区　谷地形	最大長：3.15cm 最大厚：0.5cm 最大幅：4.5cm 重量：6.1g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	
92 － 56 剝片 ２区　谷地形	最大長：2.75cm 最大厚：0.75cm 最大幅：1.4cm 重量：3.1g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	
92 － 57 楔形 ２区　谷地形	最大長：3.6cm 最大厚：1.8cm 最大幅：3.5cm 重量：21.3g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・３辺に刃潰れがみられる
92 － 58 石錐 ２区　谷地形	最大長：3.3cm 最大厚：0.4cm 最大幅：1.1cm 重量：1.1g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・縦長剝片を用いる
92 － 59 剝片 ２区　谷地形	最大長：3.3cm 最大厚：1.1cm 最大幅：3.8cm 重量：8.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
92 － 60 剝片 ２区　谷地形	最大長：3.0cm 最大厚：0.5cm 最大幅：1.5cm 重量：1.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・風化激しい
92 － 61 楔形 ２区　谷地形	最大長：3.75cm 最大厚：1.6cm 最大幅：4.7cm 重量：24.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・風化激しい ・２辺に刃潰れ
92 － 62 剝片 ２区　谷地形	最大長：5.5cm 最大厚：0.75cm 最大幅：3.7cm 重量：24.2g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る ・風化激しい
92 － 63 勾玉 ２区　谷地形	最大長：2.55cm 最大厚：0.55cm 最大幅：0.9cm 重量：3.6g	5Y5/2 灰オリーブ色	滑石	・片面穿孔により１孔を穿つ
106 － 61 削器 ３－北区　５トレンチ 谷地形	最大長：7.1cm 最大厚：1.1cm 最大幅：8.55cm 重量：37.3g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る ・風化激しい
106 － 62 削器 ３－北区　谷地形	最大長：6.4cm 最大厚：1.5cm 最大幅：5.1cm 重量：34.9g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る ・風化激しい
106 － 63 剝片 ３－北区　１トレンチ 谷地形	最大長：5.75cm 最大厚：0.75cm 最大幅：3.35cm 重量：11.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
106 － 64 車輪石 ３－北区　谷地形	最大長：2.7cm 最大厚：0.9cm 最大幅：2.9cm 重量：7.0g	10GY6/1 緑灰色	緑色凝灰岩	
106 － 65 剣形滑石製模造品 ３－北区　１トレンチ 谷地形	最大長：3.55cm 最大厚：0.4cm 最大幅：1.95cm 重量：4.5g	10G2/1 緑黒色	滑石	・１孔を穿つ
106 － 66 有孔円板 ３－北区　１トレンチ 谷地形	最大長：3.6cm 最大厚：3.5cm 最大幅：3.5cm 重量：7.0g	10Y6/1 灰色	結晶片岩	・２孔を穿つ (両面穿孔か)

図－番号 器種 出土場所	大きさと重量	色調	石材	備考
106 － 67 有孔円板 ３－北区　５トレンチ 谷地形	最大長：2.1cm 最大厚：0.35cm 最大幅：2.15cm 重量：2.6g	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	滑石	・２孔を穿つ (両面穿孔か)
121 － 3 削器もしくは楔形 ３－南区　２トレンチ 流入土	最大長：9.15cm 最大厚：1.2cm 最大幅：5.8cm 重量：115.8g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面が残る
121 － 4 砥石 ３－南区　２トレンチ 流入土	最大長：6.0cm 最大厚：2.65cm 最大幅：3.15cm 重量：83.5g	5Y4/1 灰色	砂岩	・1/2 以上を欠失 ・砥面は３面
121 － 5 有孔円板 ３－南区　流入土	最大長：2.7cm 最大厚：0.35cm 最大幅：2.6cm 重量：14.0g	5GY4/1 暗オリーブ灰色	滑石	・片面穿孔２孔
121 － 6 勾玉 ３－南区　流入土	最大長：4.5cm 最大厚：0.6cm 最大幅：1.8cm 重量：12.6g	5GY4/1 暗オリーブ灰色	緑泥片岩	・両面穿孔
123 － 6 剝片 ３－南区　住居 12・13	最大長：6.2cm 最大厚：1.4cm 最大幅：2.8cm 重量：30.3g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・風化激しい
123 － 7 磨石 ３－南区　住居 12・13	最大長：11.6cm 最大厚：4.4cm 最大幅：5.7cm 重量：411.2g	5Y6/1 灰色	砂岩	
123 － 8 砥石 ３－南区　住居 12・13	最大長：8.8cm 最大厚：3.05cm 最大幅：3.8cm 重量：173.4g	5Y6/2 灰オリーブ色	泥岩	・砥面８面あり
126 － 17 石鍬もしくは石斧 ３－南区　ピット 264	最大長：9.95cm 最大厚：2.8cm 最大幅：4.6cm 重量：160.1g	5Y5/1 灰色	砂岩	・被熱による赤変あり
126 － 18 石材 ３－南区　ピット 274	最大長：13.05cm 最大厚：2.35cm 最大幅：4.1cm 重量：157.2g	7.5Y5/1 灰色	結晶片岩	・加工痕はみられない
126 － 19 石錐未成品 ３－南区　ピット 274	最大長：4.2cm 最大厚：1.2cm 最大幅：3.2cm 重量：16.0g	N1.5/0 黒色	サヌカイト	・原礫面大きく残る
129 － 6 有孔円板 ３－南区　溝 12	最大長：2.3cm 最大厚：0.3cm 最大幅：2.55cm 重量：3.5g	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	結晶片岩	・完形 ・片面穿孔２孔

別表３　出土木製品・木器等　一覧表

１．木製品等については、その計測値等を一覧するに際して、「護岸材一覧表」（別表３－１）と護岸材以外の木製品・木片一覧表（別表３－２）に分けて作成した。

２．別表３－１　護岸材　一覧表の「形式」・「類型」・「ａ（cm）」・「ｂ（cm）」の項に記した、護岸材の型式分類・類型分類および寸法の計測箇所については、藤田和尊氏が御所市鴨都波遺跡出土護岸材に対して行った分析に際して設定したもの（藤田 1992）に従った。これは、同一地域における同種遺物について、統一的な視点で観察、分類することで、今次調査出土遺物についても将来的に分析を行うための基礎資料と成すためである。

３．藤田氏による護岸材の型式分類は、下記に引用する藤田氏作成表のとおりである。

形式	型式	規定基準	断面模式図	類	類別基準
杭	A	丸木杭		1 2 3	1→ａ＝２cm以下 2→ａ＝３～６cm 3→ａ＝７cm以上
	B	半裁杭		1 2 3	
	C	四分割杭 （ａ≦ｂ）		1 2 3	
	D	角杭 （ａ＜ｂ×２）			
矢板	A	原材の芯側に面を持たぬもの （ａ＞ｂ）		1 2	ａ＝１０cm以下 ａ＝１１cm以上
	B	原材の芯側に面を持つもの （ａ≧ｂ×２）		1 2 3	ａ＝１１cm以下 ａ＝１２～１７cm ａ＝１８cm以上
	C	原材の表面を割り取る板目材			
横木	A	丸木横木			
	B	・半裁横木			
	C	四分割横木			
	D	角柱横木			
	E	原材の芯側に面を持たぬ板			
	F	原材の芯側に面を持つ板			

5．出土木材は、可能な限り樹種同定を行った。同定は株式会社　吉田生物研究所（※１）、パリノサーヴェイ株式会社（※２）が行い、それぞれの記号を表中に記した。

別表３－１　護岸材　一覧表

番号	図一番号	遺構	出土状況図	形式	類型	残存長(cm)	a(cm)	b(cm)	木取	樹種	樹種同定	地区・遺構旧名称・現地での取上番号
１区												
1		７トレンチ谷地形		杭	A1	20.8	2.9		心持	ニレ科ニレ属	※１	1-6tr・掘削時
2		10トレンチ谷地形		杭	A2	32.2	3.9		心持	マキ科マキ属イヌマキ	※１	1-7tr・杭１
3		10トレンチ谷地形		杭	A2	97.0	5.1		心持	マツ科マツ属(二葉松)	※１	1-7tr・北東トレンチ
4		10トレンチ流路		杭	A2	16.2	5.8		心持	マツ科マツ属(二葉松)	※１	1-7tr・流路２
２区												
5		１トレンチ谷地形		杭	A2	50.0	5.5		心持	ブナ科コナラ属コナラ亜種クヌギ節	※２	2-1tr・旧谷オチ・杭１
6		１トレンチ谷地形		杭	A2	38.3	4.2		心持	ツバキ科サカキ属サカキ	※１	2-1tr・旧谷オチ・杭２
7		２トレンチ		杭	B2	31.6	5.2	3.8	心持			2-2tr 拡張部・包含層下層（黒褐色砂）・木製品７
8		２トレンチ		矢板	B1	15.4	4.3	0.5	心持			2-2tr 拡張部・包含層下層（黒褐色砂）・木製品８
9		２トレンチ		杭	D	116.4	6.6	5.8				2-2tr 拡張部・包含層（黒粘土白礫混）・木製品９
10		２トレンチ		杭	A2	59.0	4.9		心持			2-2tr 拡張部・包含層（黒粘土白礫混）・杭８
３区												
11		１トレンチ谷地形		杭	B2	29.2	3.0	5.0	心持			3-1tr・落ち込み・杭３
12		１トレンチ谷地形		杭	B2	12.5	4.8	2.8	心持			3-1tr・落ち込み・杭４
13		北区谷地形	図 99	杭	A2	122.0	5.4		心持	マツ科モミ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・3
14		北区谷地形		杭	A2	68.0	4.0		心持	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・6
15		北区谷地形		杭	A2	78.0	3.5		心持	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・30
16		北区谷地形	図 100	杭	A2	30.7	3.7		心持	ブナ科シイ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・38
17		北区谷地形	図 100	杭	A2	52.0	4.5		心持	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・39
18		北区谷地形	図 100	横木	A	142.0	5.0		心持	カバノキ科クマシデ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・40
19		北区谷地形	図 100	横木	A	93.0	4.8		心持	ブナ科シイ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・41
20		北区谷地形	図 100	杭	A2	38.0	3.0		心持	クスノキ科クスノキ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・42
21		北区谷地形	図 100	横木	F	192.0	9.3	1.5	板目	イチイ科カヤ属カヤ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・43
22		北区谷地形		横木	A2	118.0	5.0		心持	マツ科モミ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・45
23		北区谷地形		杭	A2	13.3	4.6		心持	ニレ科ムクノキ属ムクノキ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・47
24		北区谷地形		杭	A1	19.2	2.9		心持	ニレ科ムクノキ属ムクノキ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・48
25		北区谷地形		杭	A2	68.9	6.5		心持	ニレ科ムクノキ属ムクノキ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・49
26		北区谷地形		杭	A2	35.0	4.0		心持	ツバキ科サカキ属サカキ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・60
27		北区谷地形		矢板	A1	29.3	3.8	2.4	板目	ブナ科シイ属	※１	3- 北区
28		北区谷地形		杭	A2	29.0	4.0		心持			3- 北区

別表３－２　護岸材以外の木製品等　一覧表

番号	図－番号	遺構	出土状況図	形式	残存長(cm)	幅・直径(cm)	厚さ(cm)	木取	樹種	樹種同定	地区・遺構旧名称 現地での取上番号
２区											
29		１トレンチ谷地形		鋤先	18.1	9.2	2.1	柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜種	※２	2-1tr・旧谷オチ・木製品 1
30		１トレンチ谷地形		木樋	118.5	23.5	3.5	板目	バラ科サクラ属	※２	2-1tr・旧谷オチ・木製品 2
31		１トレンチ谷地形		板材	25.4	12.7	3.2	柾目	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	※１	2-1tr・旧谷オチ・木製品 3
32		１トレンチ谷地形		板材	16.2	4.6	1.3				2-1tr・旧谷オチ・木製品 4
33		１トレンチ谷地形		板材	12.0	6.8	1.0				2-1tr・白色砂礫・木製品 5
34		１トレンチ谷地形		流木	15.7	1.8	0.6				2-1tr・暗灰粘質土の高まり・木 1
35		１トレンチ谷地形		流木	13.7	9.0	6.7				2-1tr・木 2
36		１トレンチ谷地形		流木	22.8	13.8	3.8				2-1tr・木 3
37		２トレンチ谷地形		板材	96.1	10.8	1.8	追柾	ヒノキ	※２	2-2tr 拡張部・包含層下層（黒褐色砂）・木製品 6
38		２トレンチ谷地形		板材	21.8	2.8	1.4	分割材	ヒノキ	※２	2-2tr 拡張部・包含層・木製品 11
39		２トレンチ谷地形		流木	7.5	3.4	0.8				2-2tr 拡張部・包含層
40		３トレンチ谷地形		流木	9.7	7.4	4.6				2-3tr・SX-01
３区											
41		１トレンチ井戸	図 24	曲物	(24.2)	(8.2)	1.5	板目	ヒノキ	※２	3-1tr・井戸１Ｃ・井戸１
42	図 107-68	北区谷地形	図 99	刀形木製品	54.3	2.8	1.1	板目	ヒノキ科ヒノキ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ暗青灰色粘土（砂礫混じり・植物堆積層）
43	図 107-69	北区谷地形		弓	79.4	5.0	4.6	心持	マキ科マキ属イヌマキ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・12
44	図 107-70	北区谷地形		建築部材	129.3	9.9	4.8	板目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・36
45	図 108-71	北区谷地形		建築部材	67.6	19.4	1.4	板目	ヒノキ科ヒノキ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ・10
46	図 108-72	北区谷地形		容器（槽）	50.8	9.5	3.7	横木	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層）・28
47	図 109-73	北区谷地形	図 99	容器（木槽）	128.4	29.4	3.0～9.0	板目	ミカン科キハダ属キハダ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・2-1・2-2
48		北区谷地形	図 99	木製品	110.0	18.0	11.3	板目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・1
49		北区谷地形	図 99	木製品	141.0	3.4	2.5	心持	ツバキ科サカキ属サカキ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ暗青灰色粘土（砂礫混じり・植物堆積層）・4
50		北区谷地形		建築部材	46.5	2.2	1.5	板目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・5
51		北区谷地形		板	55.0	6.5	1.7	柾目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・7
52		北区谷地形		建築部材	103.2	8.5	9.0	柾目	ブナ科クリ属クリ	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・8
53		北区谷地形		建築部材	66.2	10.0	1.2	柾目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・9
54		北区谷地形		板	14.3	6.6	1.4	板目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・11
55		北区谷地形		板	19.0	19.0	1.8	板目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・14
56		北区谷地形		木製品	20.0	6.3	4.5	心持	クワ科クワ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・15
57		北区谷地形		建築部材	73.5	18.0	3.5	板目	ブナ科シイ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・16
58		北区谷地形		板	26.6	4.0	0.7	板目	ヒノキ科アスナロ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・17
59		北区谷地形		木	11.1	3.4	1.5	板目	クスノキ科クスノキ属	※１	3- 北区・東西方向ＮＲ黒色粘土（白色砂礫混じり植物堆積層）・18

番号	図ー番号	遺構	出土状況図	形式	残存長(cm)	幅・直径(cm)	厚さ(cm)	木取	樹種	樹種同定	地区・遺構旧名称 現地での取上番号
60		北区 谷地形		木製品	13.0	2.7	1.5	板目	ウルシ科ウルシ属ヤマハゼ or ハゼ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ黒色粘土(白色砂礫混じり植物堆積層)・19
61		北区 谷地形		木製品	26.0	4.3	3.0	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ黒色粘土(白色砂礫混じり植物堆積層)・20
62		北区 谷地形		建築部材	109.5	16.5		心持	ブナ科クリ属クリ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ黒色粘土(白色砂礫混じり植物堆積層)・21
63		北区 谷地形		板	8.2	7.6	1.0	柾目	ヒノキ科アスナロ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ黒色粘土(白色砂礫混じり植物堆積層)・22
64		北区 谷地形		板	34.0	8.8	1.7	板目	ヒノキ科アスナロ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ（植物堆積層)・23
65		北区 谷地形		建築部材	48.0	4.0	2.8	板目	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ（植物堆積層)・24
66		北区 谷地形		板	35.0	8.5	1.9	板目	マツ科モミ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ（植物堆積層)・25
67		北区 谷地形		板	40.5	3.9	1.0	板目	ヒノキ科アスナロ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・26
68		北区 谷地形		建築部材	62.6	5.0	3.1	柾目	マキ科マキ属イヌマキ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・27
69		北区 谷地形		木製品	77.0	13.0	2.5	板目	マツ科モミ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・29
70		北区 谷地形		木製品	117.0	6.5	2.8	板目	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・31
71		北区 谷地形		木製品	29.0	4.1	2.7	心持	ブナ科シイ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・32
72		北区 谷地形		建築部材	32.7	3.5	2.0	板目	ブナ科シイ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・33
73		北区 谷地形		木製品	13.2	9.2	1.3	柾目	ブナ科クリ属クリ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・35
74		北区 谷地形		建築部材	32.5	3.0	2.5	柾目	マツ科ツガ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ灰黄色砂礫土（植物堆積層)・37
75		北区 谷地形		建築部材	125.0	9.5	5.5	板目	マツ科モミ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・50
76		北区 谷地形		木製品	44.0	5.2	4.2	心持	マツ科モミ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・51
77		北区 谷地形		建築部材	83.4	6.0	4.5	柾目	マツ科モミ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・52
78		北区 谷地形		木製品	22.0	4.5	2.9	心持	ニレ科エノキ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・53
79		北区 谷地形		板	61.5	14.0	1.8	柾目	マツ科モミ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・54
80		北区 谷地形		建築部材	94.6	3.4	2.7	柾目	ヒノキ科アスナロ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・55
81		北区 谷地形		木製品	44.4	3.0		心持	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・56
82		北区 谷地形		建築部材	125.0	6.2	5.5	心持	マツ科モミ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・57
83		北区 谷地形		木製品	110.0	17.0	6.5	板目	クワ科クワ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・58
84		北区 谷地形		木製品	45.6	3.5	1.4	柾目	ヒノキ科アスナロ属	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・59
85		北区 谷地形		木製品	51.5	5.0	3.3	柾目	イチイ科カヤ属カヤ	※1	3-北区・東西方向ＮＲ青灰色粗砂・61
86		北区 谷地形		木製品	122.0	6.0					3-北区
４区											
87		３トレンチ谷地形		板材	66.6	13.3	1.1	板目	ヒノキ科アスナロ属	※1	4-3tr・谷・木製品 10
88		３トレンチ谷地形		板材	10.6	4.6	2.0				4-3tr・植物堆積層
89		３トレンチ谷地形		板材	11.8	2.4	0.7				4-3tr・植物堆積層
90		３トレンチ谷地形		角材	33.2	2.2	1.7				4-3tr・植物堆積層
91		３トレンチ 谷地形		建築部材（板材）	41.8	7.0	0.3				4-3tr・植物堆積層

図　版

１区１トレンチ　全景　南から

１区２トレンチ　全景　北から

図版2

１区３トレンチ　西側　全景　東から

１区３トレンチ　東側　東端付近　西から

２区１トレンチ　全景　北から

２区１トレンチ　谷地形　南東から

図版4

２区２トレンチ　全景　北から

２区２トレンチ　拡張部　東から

２区３トレンチ　全景　東から

２区４トレンチ　全景　北から

図版6

２区５トレンチ　全景　北から

２区６トレンチ　全景　南から

２区７トレンチ　全景　西から

２区８トレンチ　全景　東から

図版8

３区１トレンチ　谷地形　南から

３区１トレンチ　井戸検出面　南から

３区１トレンチ　井戸検出状況（１）　南から

３区１トレンチ　井戸検出状況（２）　南から

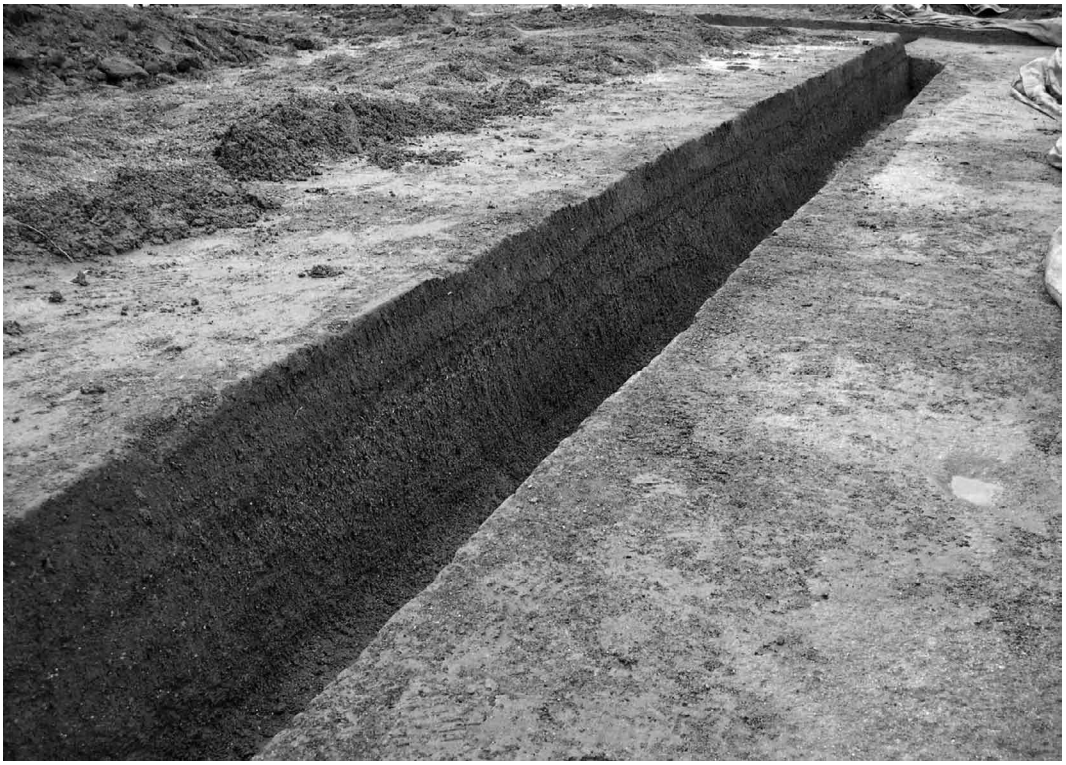
図版10

３区２トレンチ　全景　北から

３区２トレンチ　西側拡張部　全景　東から

３区３トレンチ　全景　北から

３区３トレンチ　拡張部　全景　北東から



３区３トレンチ　拡張部南　南西から

３区４トレンチ　全景　南から

３区５トレンチ　北半　東から

３区６トレンチ　北から

３区７トレンチ　全景　南から

３区８トレンチ　南から

４区１トレンチ　全景　西から

４区２トレンチ　全景　南から

４区３トレンチ　全景　南から

遺物出土状況（１）

遺物出土状況（２）

遺物出土状況（３）

遺物出土状況（４）

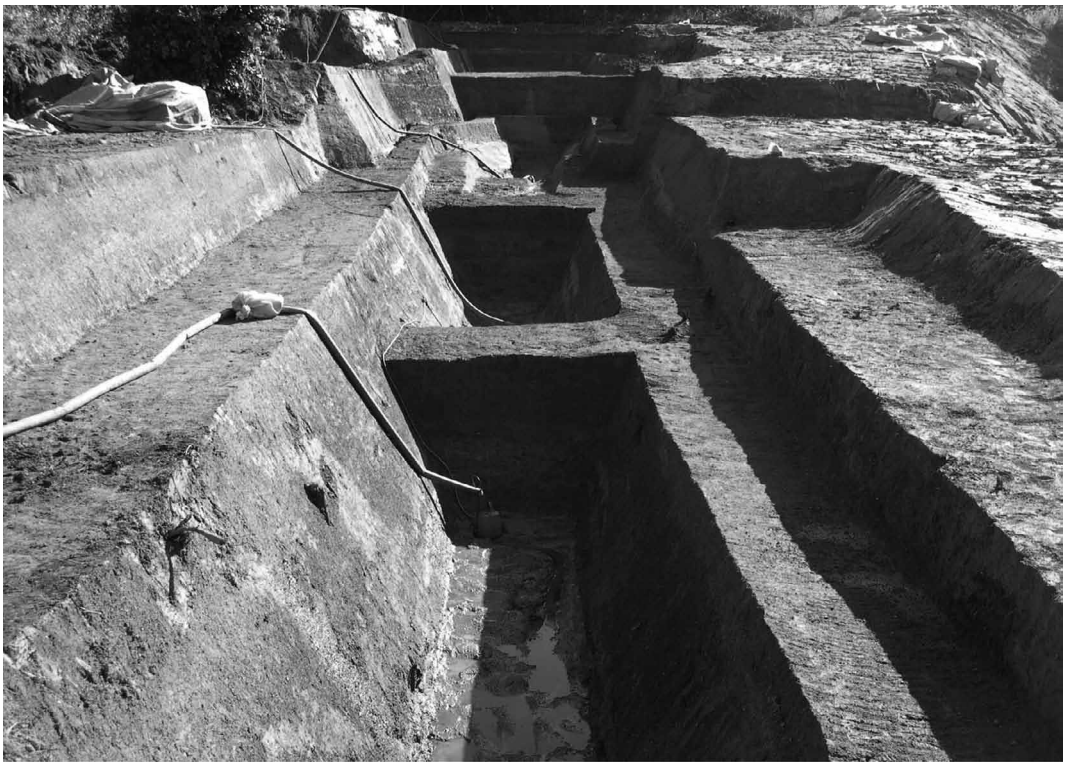
４区４トレンチ　全景　北から

４区５トレンチ　全景　南から

４区６トレンチ　全景　南から

４区７トレンチ　全景　北から

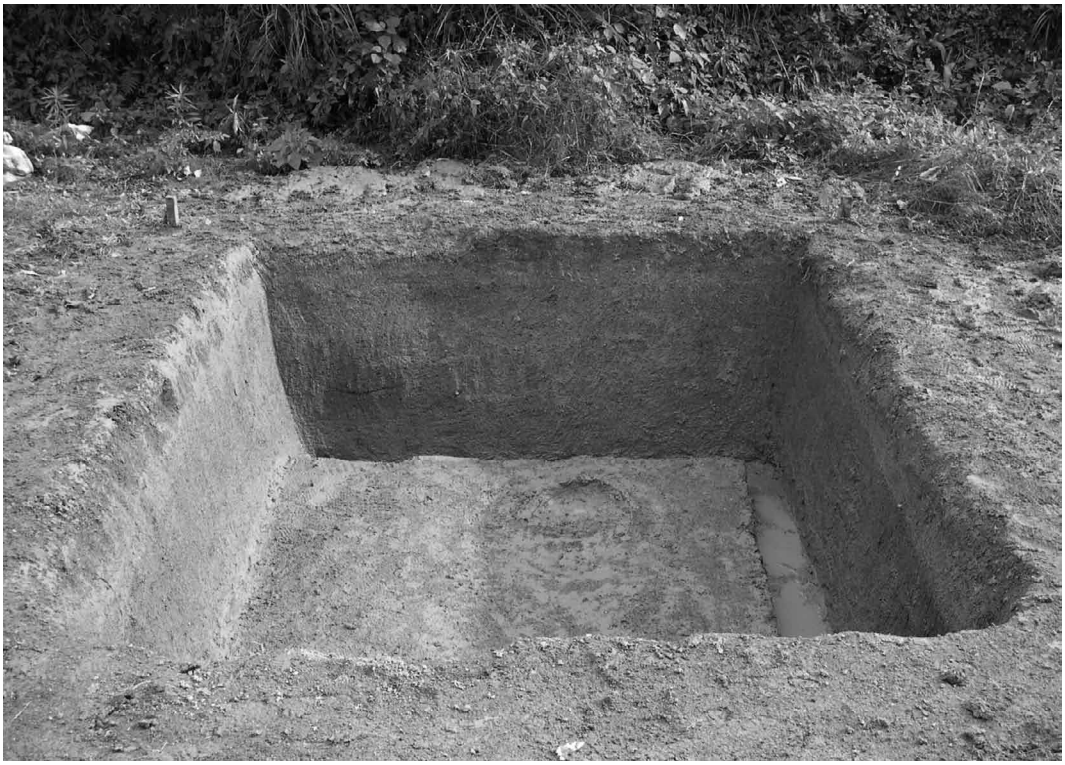
５区１トレンチ　南から



５区２トレンチ　全景　北から

５区３トレンチ　全景　北から

５区４トレンチ　全景　北から



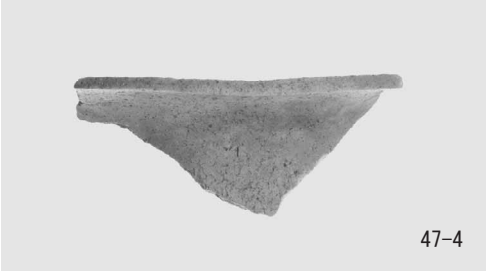
５区５トレンチ　全景　西から

５区６トレンチ　全景　西から

47-1

47-2

47-3


47-4

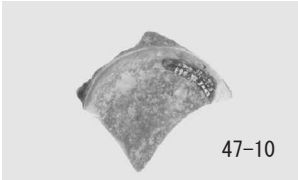
47-5

47-8

47-6

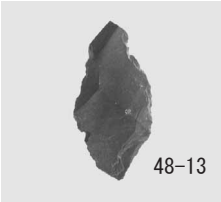
47-7

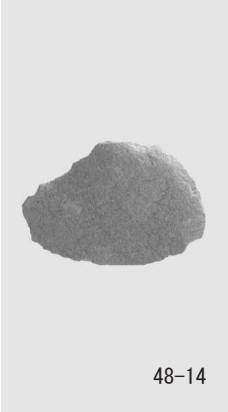
47-9


47-10

48-11

48-12

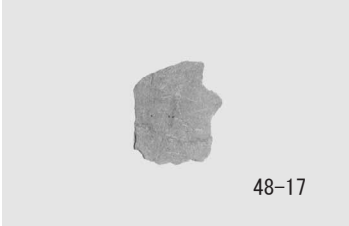

48-13


48-14

48-15

１区　谷地形　出土遺物（１）（S.≒1/3、但し 48-11 はS.≒2/3）

48-16


48-17

48-18

48-19

48-20

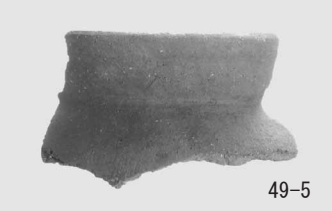
１区　谷地形　出土遺物（２）（S.≒1/3）

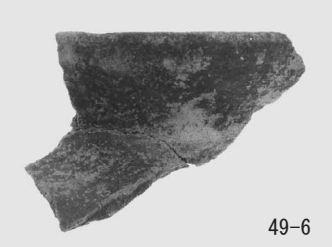
49-1

49-2

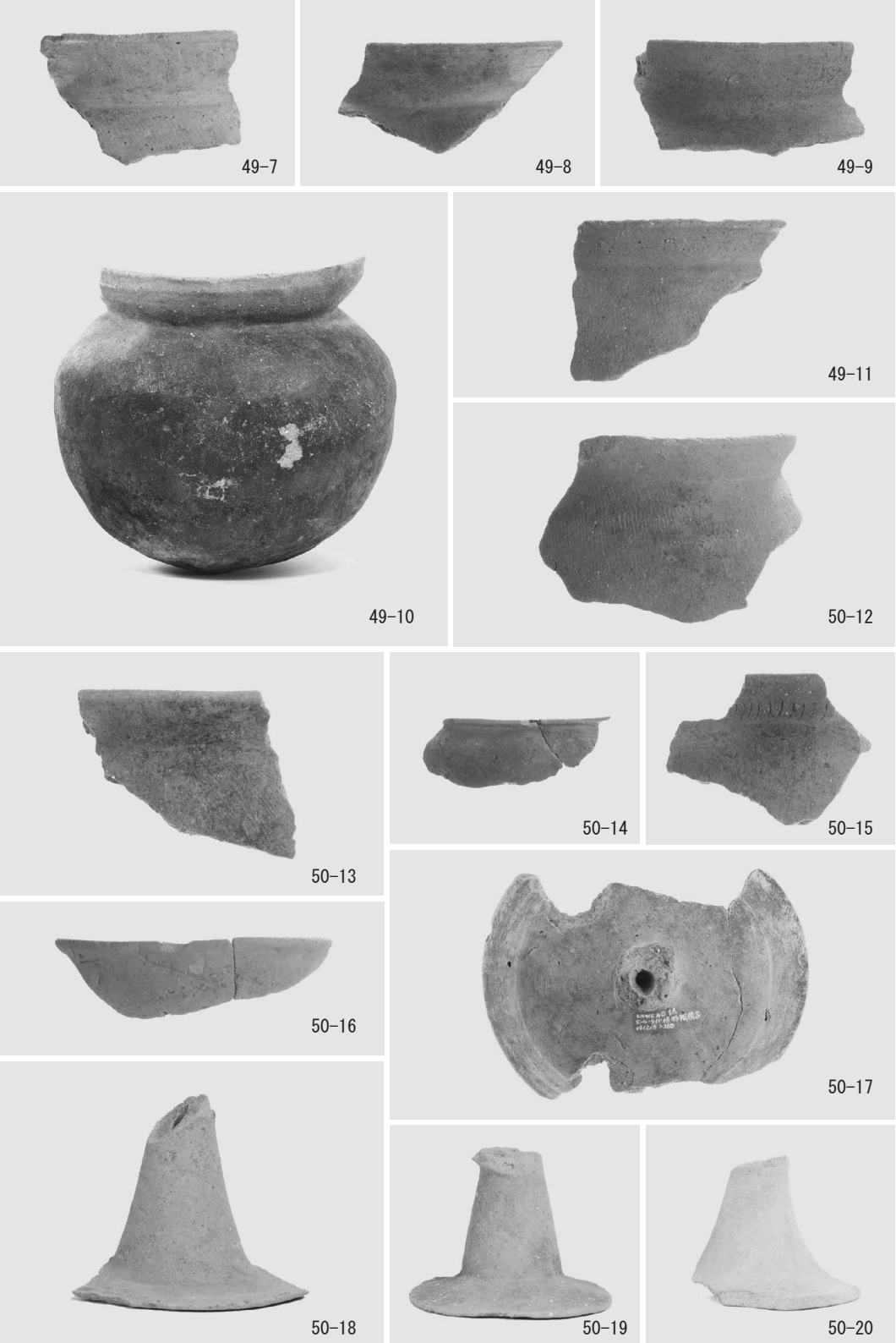
49-3

49-4


49-5


49-6

４区　谷地形　出土遺物（１）（S.≒1/3）



４区　谷地形　出土遺物（２）（S.≒1/3）

50-21

50-22

50-23

50-24

50-25

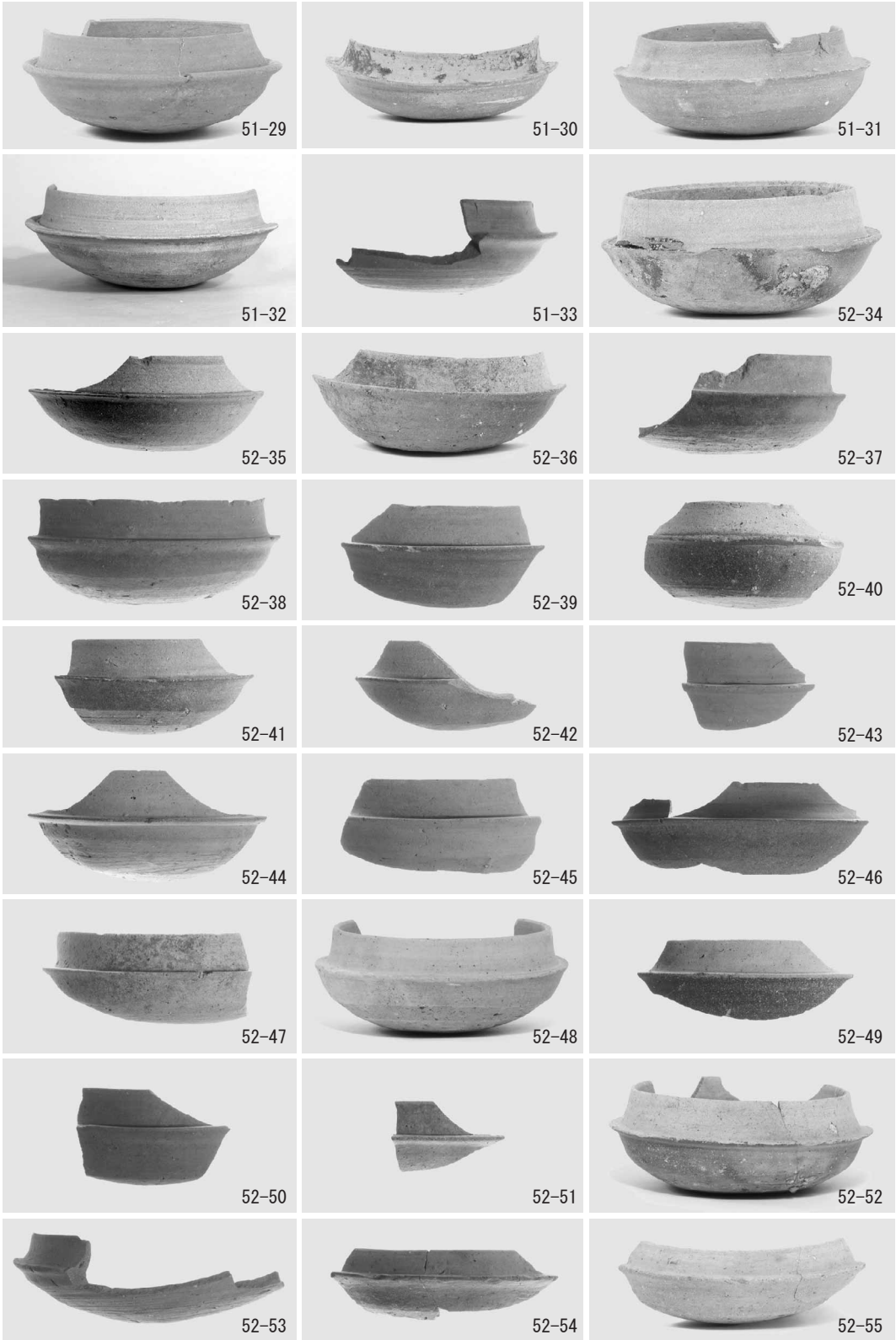
50-26

50-27

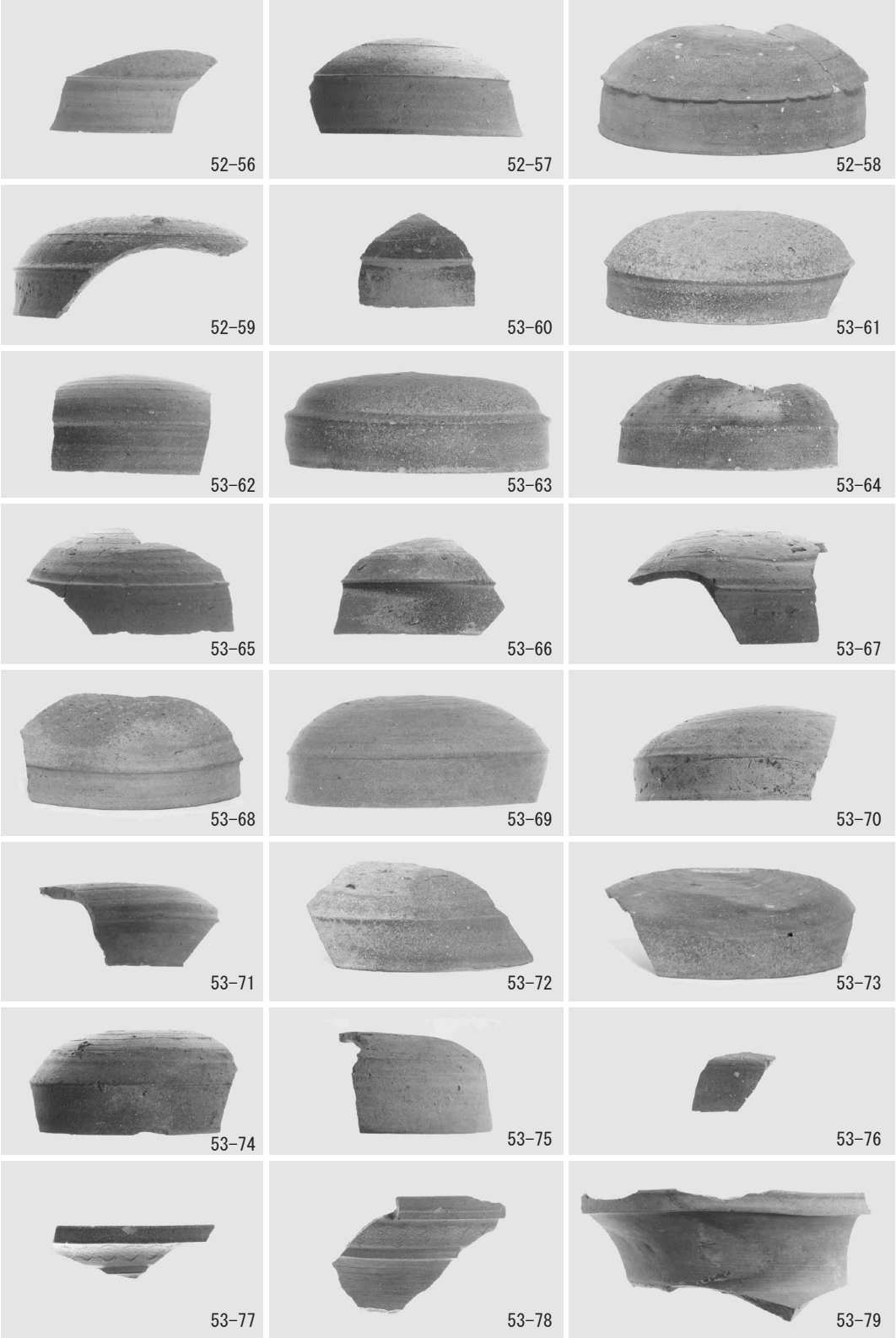
51-28

４区　谷地形　出土遺物（３）（S.≒1/3）

図版26

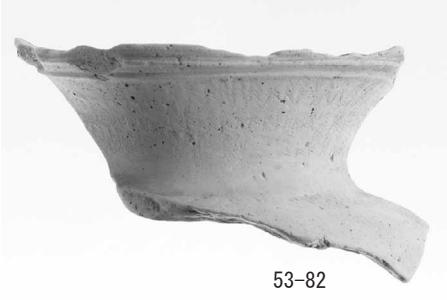


４区　谷地形　出土遺物（４）（Ｓ.≒1/3）



４区　谷地形　出土遺物（５）（Ｓ.≒1/3）

53-80


53-82

53-81

54-83

54-84

54-85

54-86

54-87

54-88

54-89

54-90

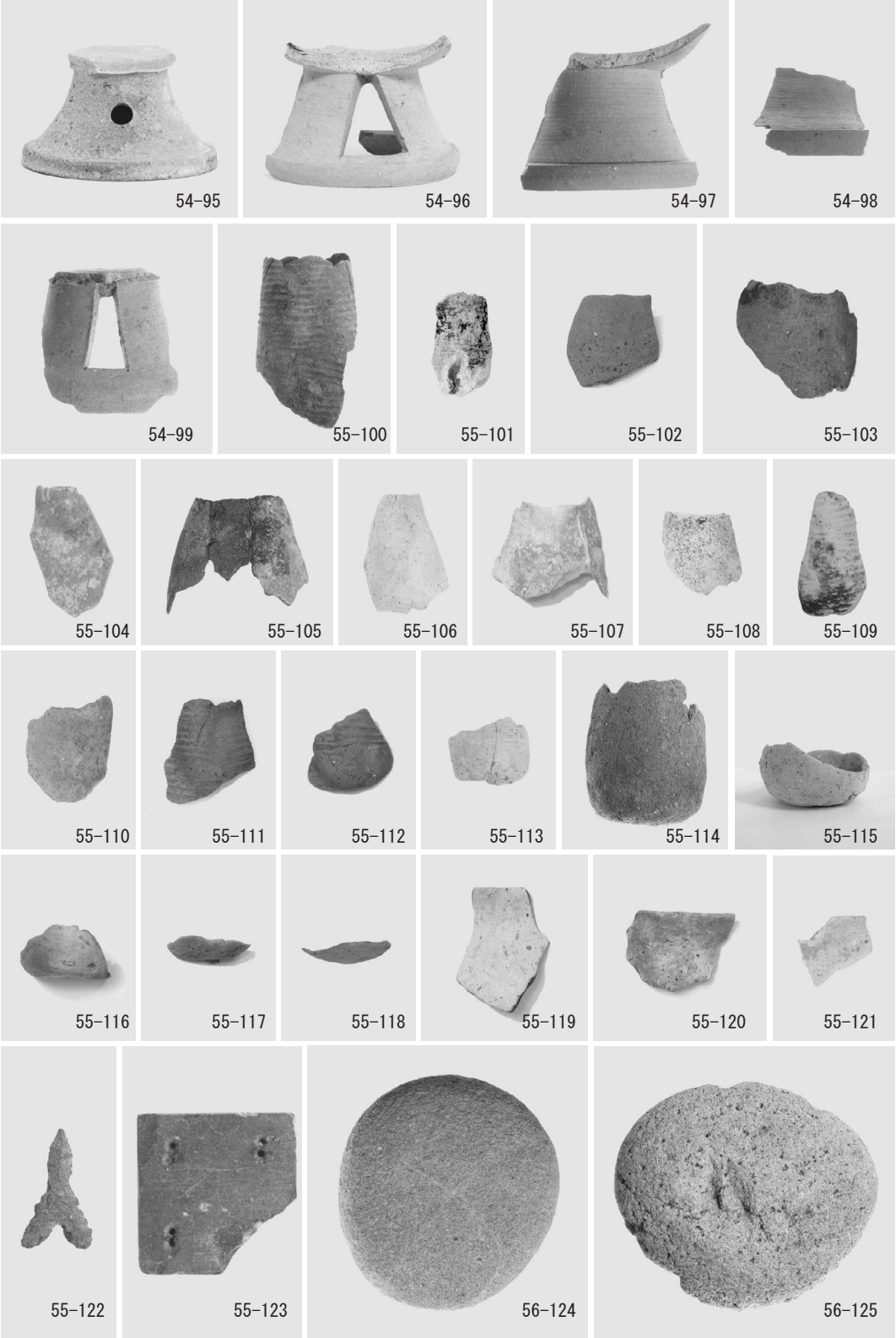
54-91

54-92

54-93

54-94

４区　谷地形　出土遺物（６）（S.≒1/3）



４区　谷地形　出土遺物（７）（Ｓ.≒1/3、但し 55-122・123 はＳ.≒2/3）

２区　全景　南から

２区　北半　西から

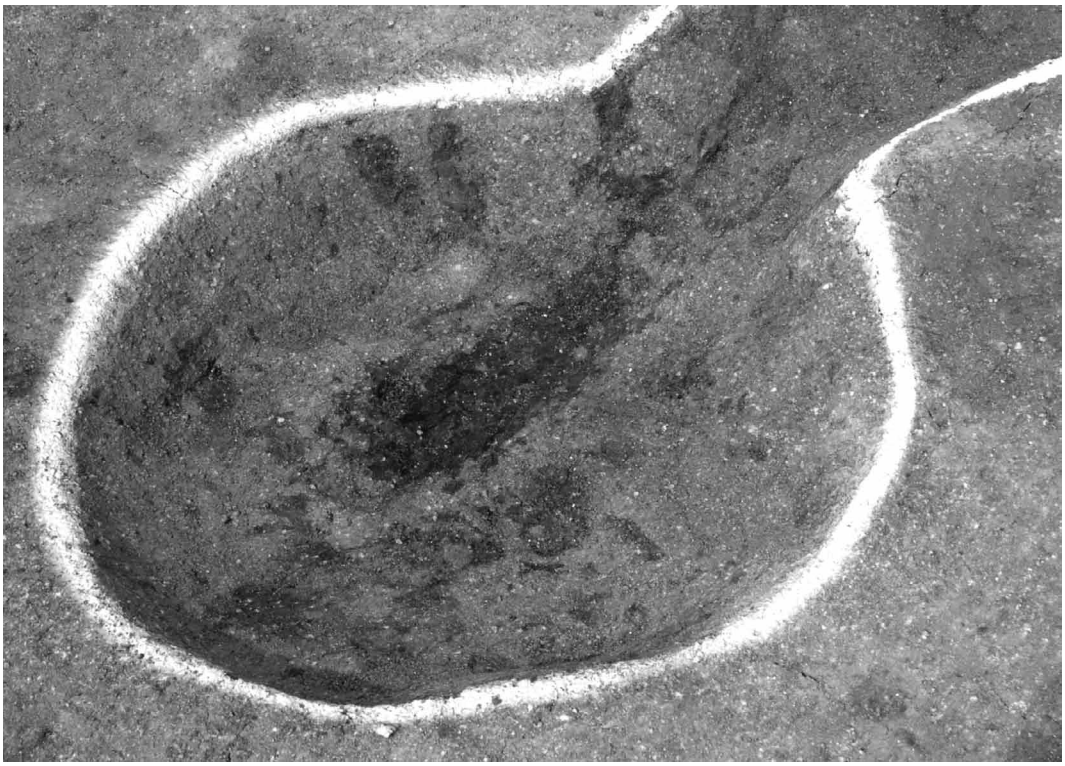
２区　中央部　住居１・４～10　南から

２区　南半　住居２周辺　東から

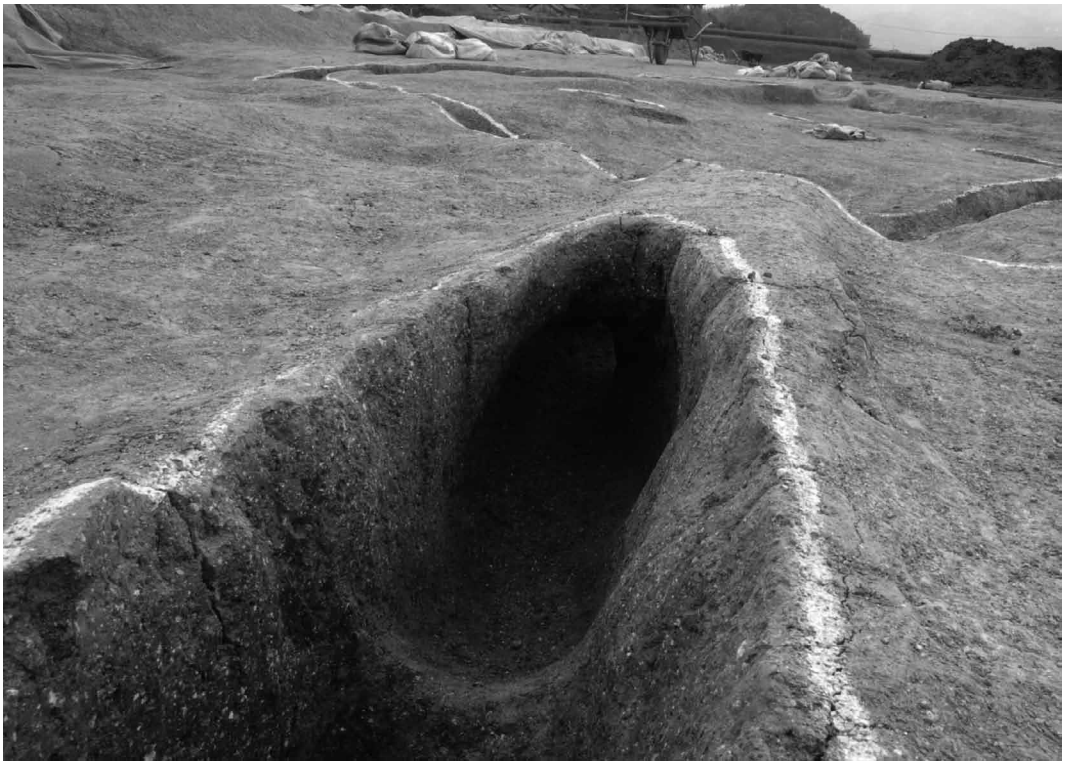
２区　住居１　北西から

２区　住居１　東から

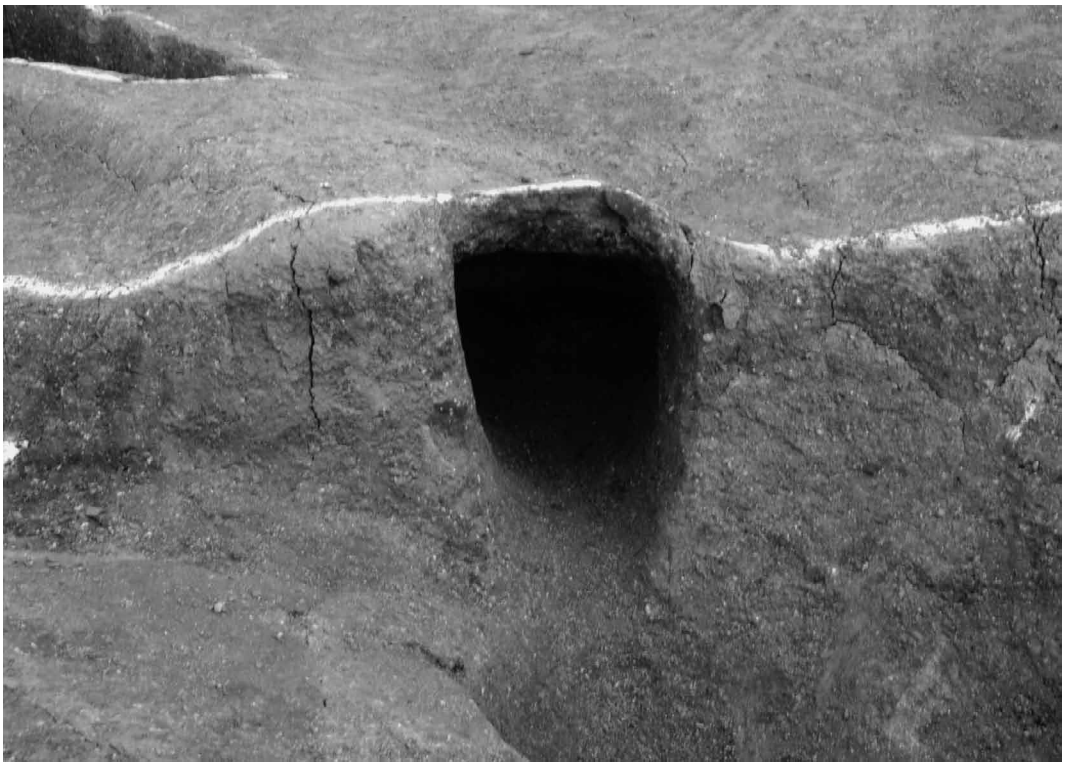
２区　住居１周辺　北から



２区　住居１　土坑 16　南から

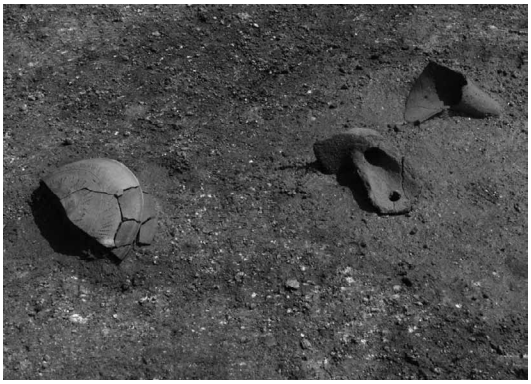


２区　住居１　トンネル状遺構　東から

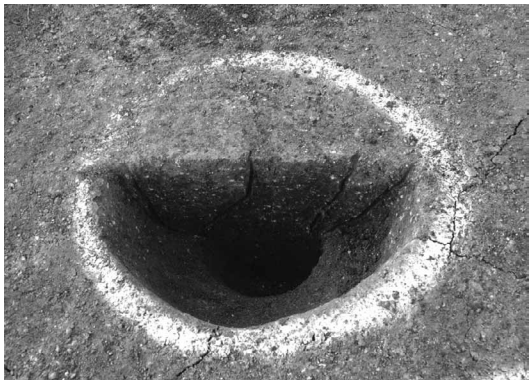


２区　住居１　トンネル状遺構　西から

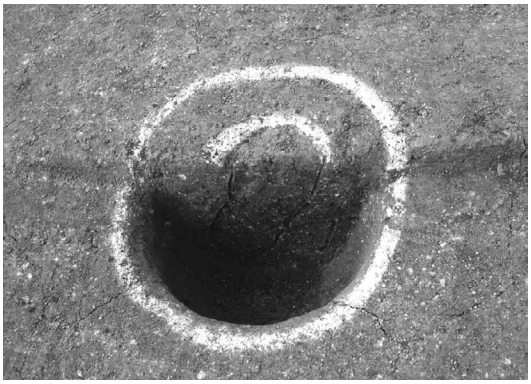
２区　住居２　北から



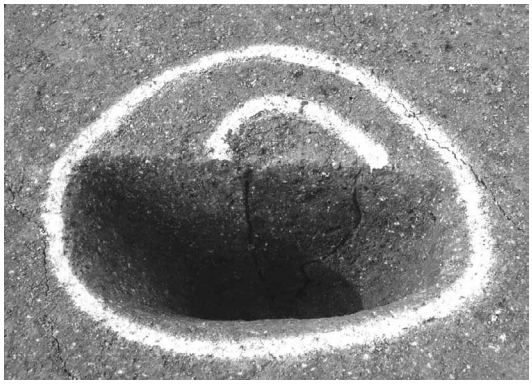
２区　住居２　遺物出土状況　北から



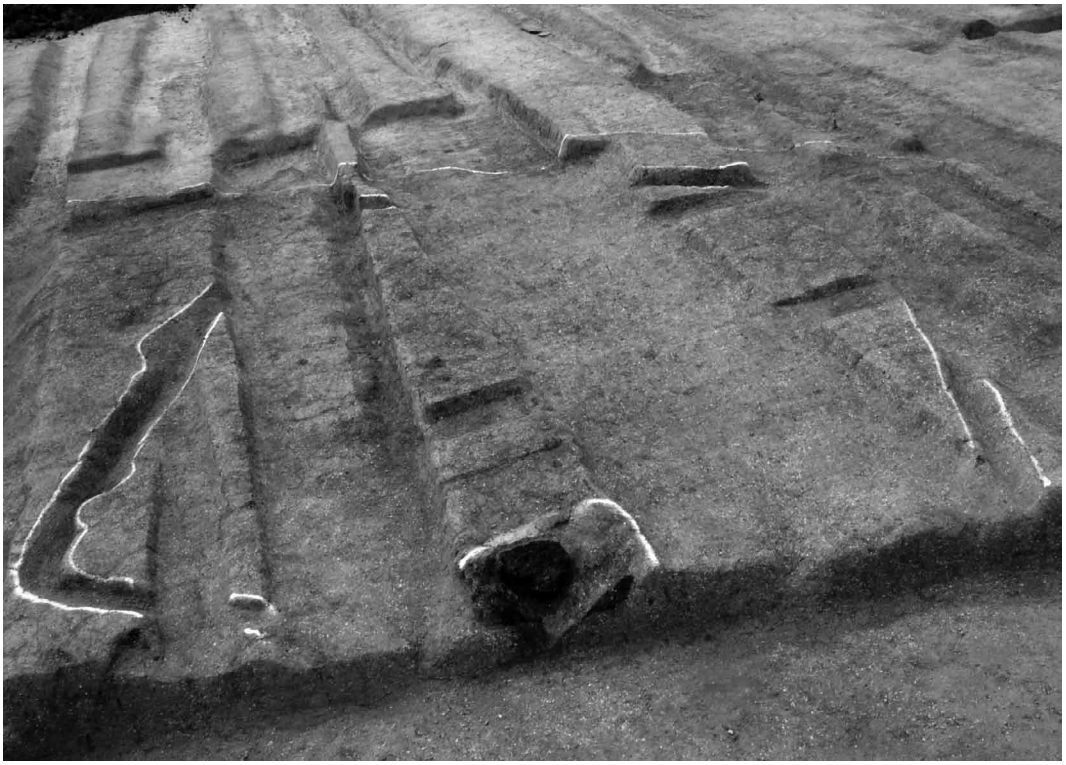
２区　住居２　ピット 146　南から



２区　住居２　ピット 150　南から



２区　住居２　ピット 151　南から



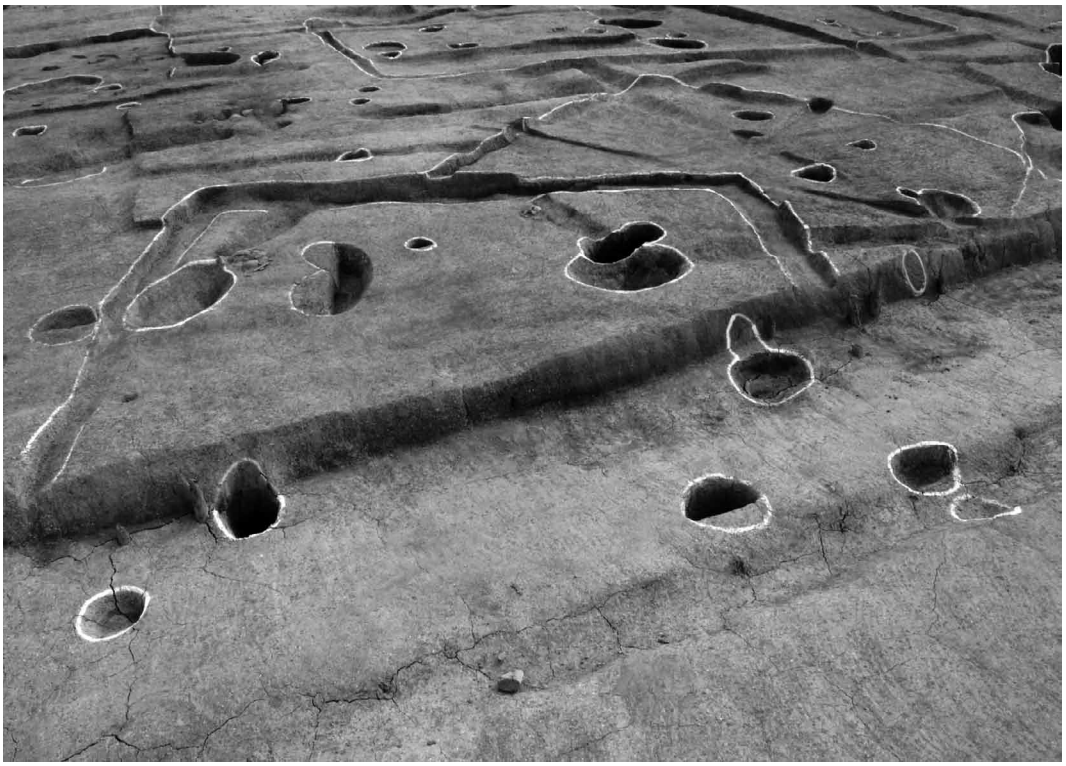
２区　住居３　東から

２区　住居３　炭化物集中範囲　東から

２区　住居４　南から

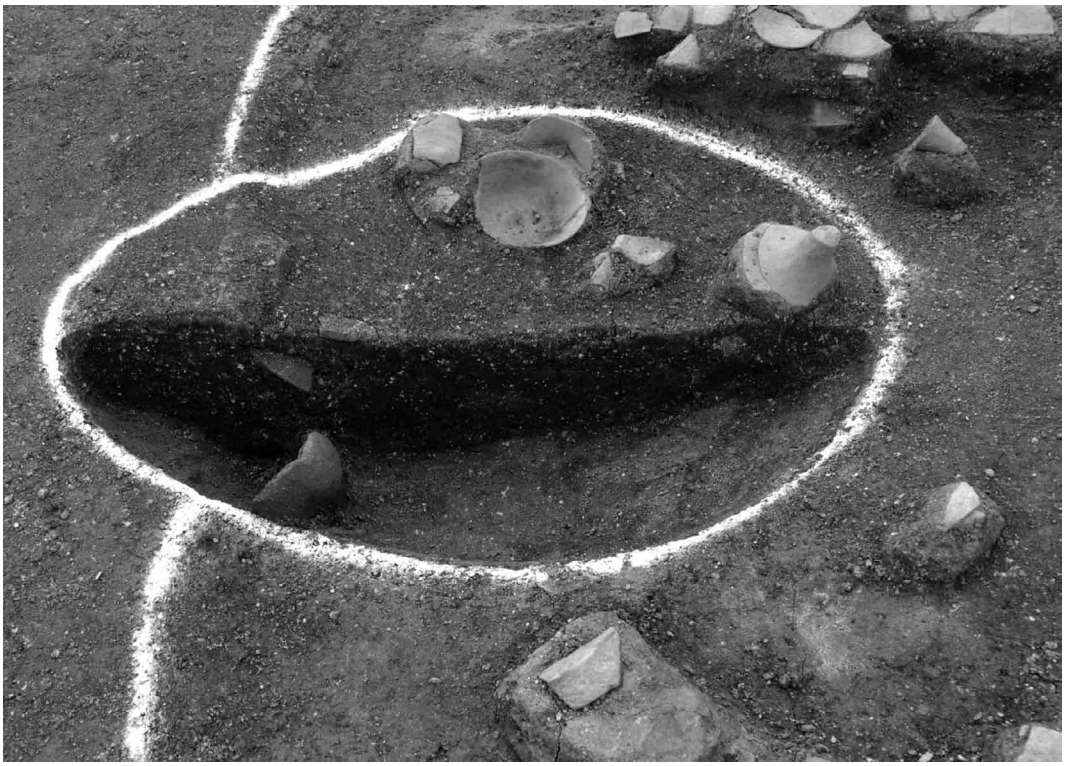
２区　住居５・６　南西から

２区　住居５　南から



２区　住居５・６　北から

２区　住居７　南から



２区　住居７　土坑 11　北から

２区　住居７　竈（１）　北から

２区　住居７　竈（２）　北から

２区　住居８・住居４　南から

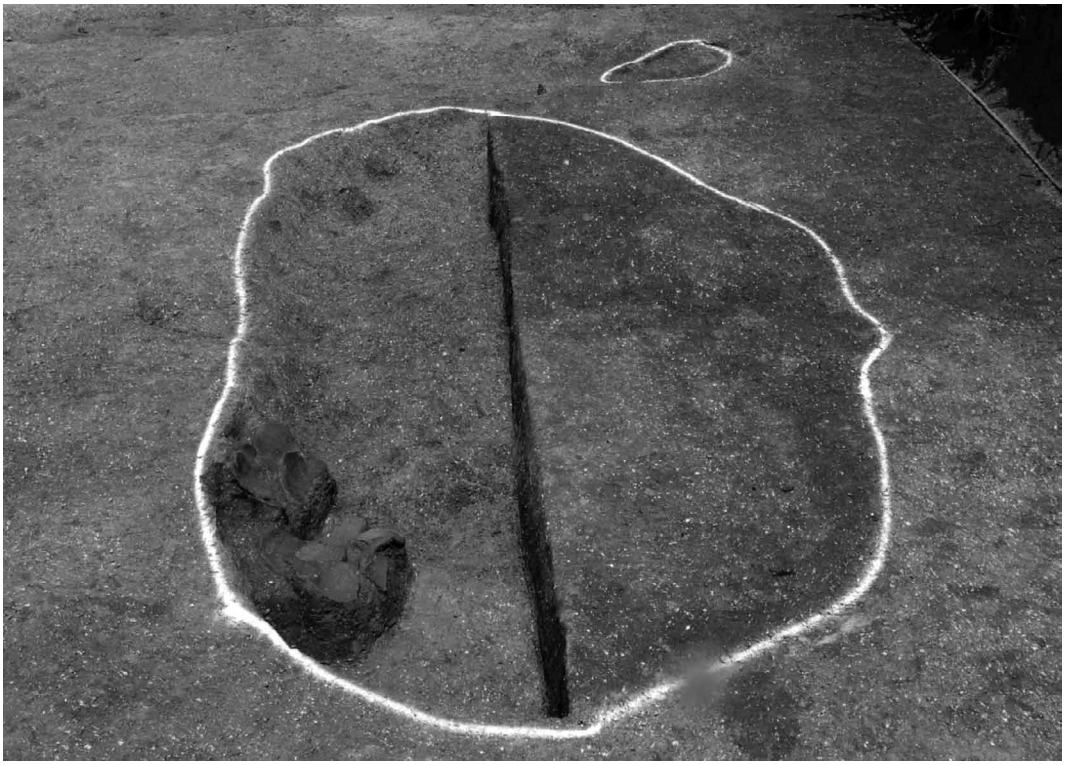
２区　住居７・８　南から

２区　住居９・10　南から

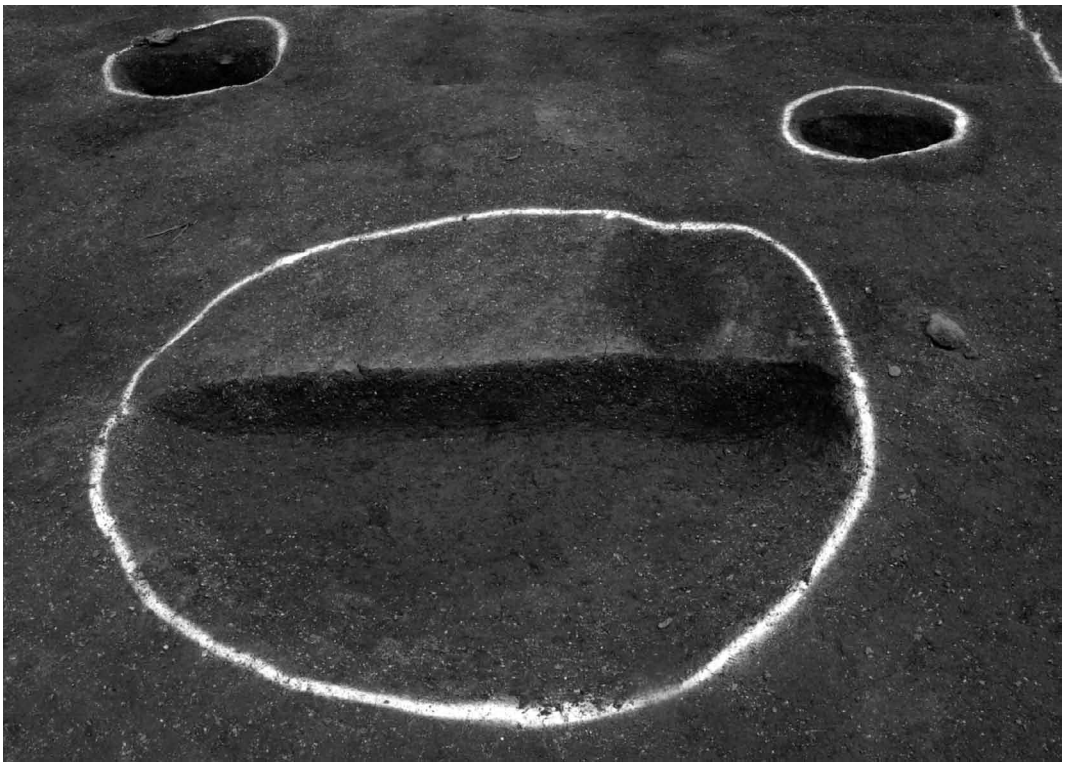
２区　住居９・10　東から

２区　掘立柱建物　南から

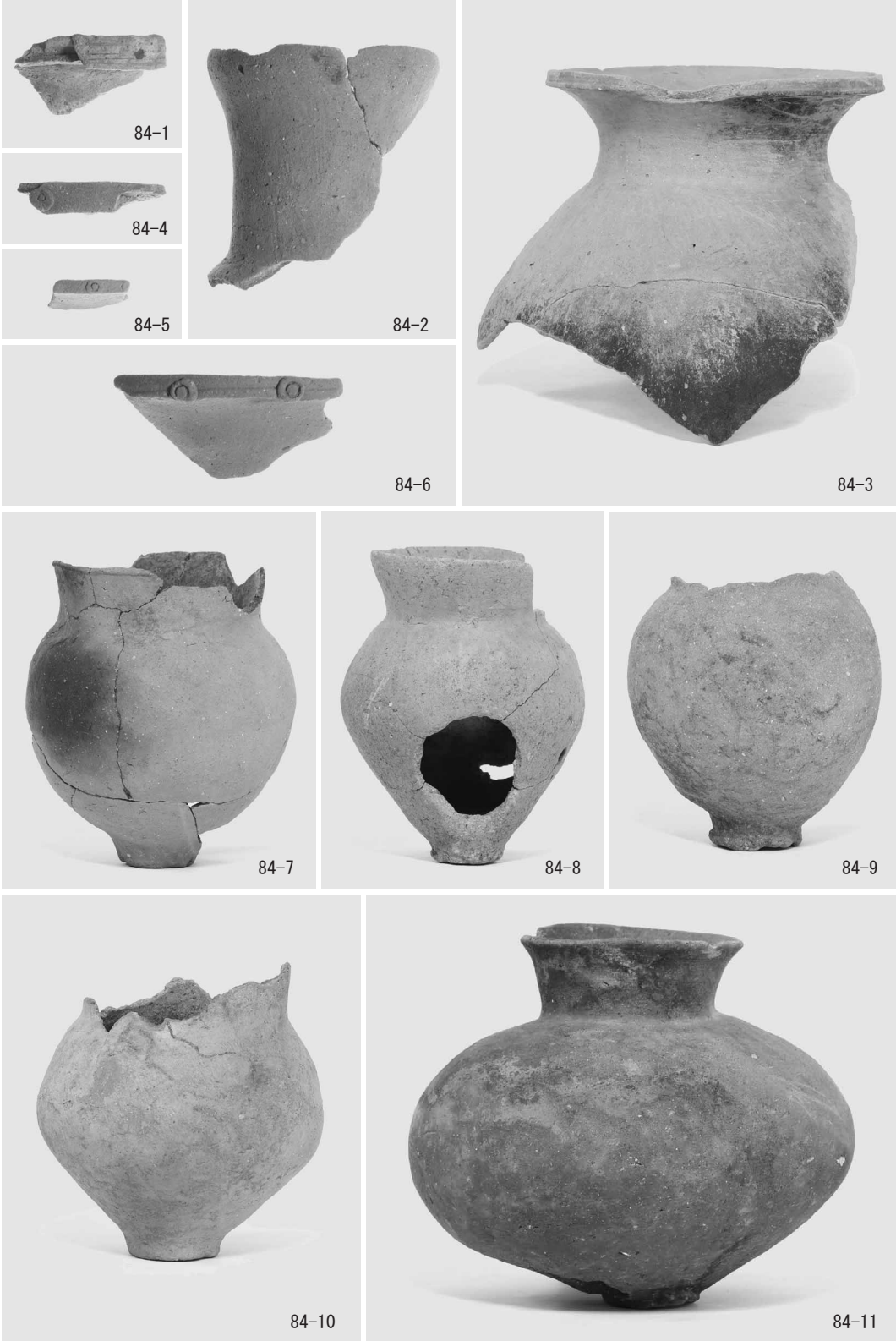
２区　土坑１　南から



２区　土坑２　南から



２区　土坑３　東から



２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（１）（S.≒1/3）

85-12

85-13

85-14

85-15

85-16

85-17

85-18

85-19

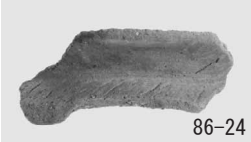
85-20

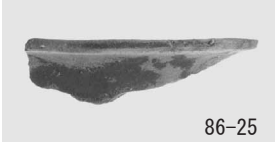
85-21

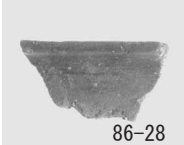
85-22

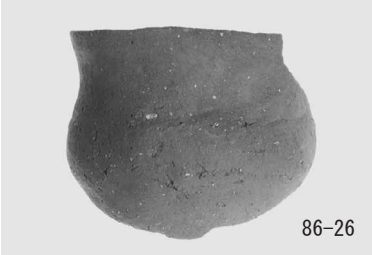
２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（２）（S.≒1/3）

85-23


86-24


86-25

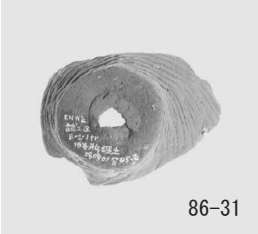

86-28


86-26

86-27

86-29

86-30


86-31

86-32

86-33

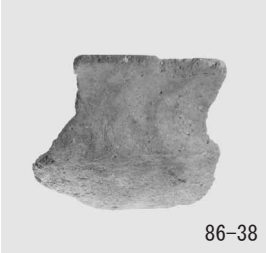
86-34

86-36

86-35

86-37

86-39

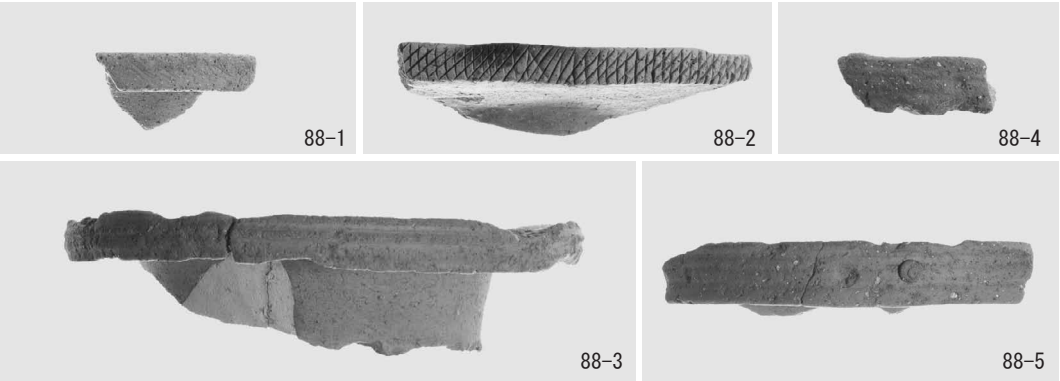

86-38

86-40

86-41

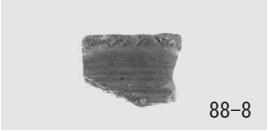
２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（３）（S.≒1/3）

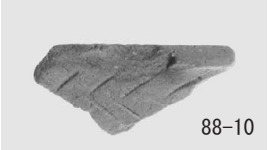
２区　谷地形（東西方向）　出土遺物（４）（S.≒1/3）



２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（１）（S.≒1/3）

88-6

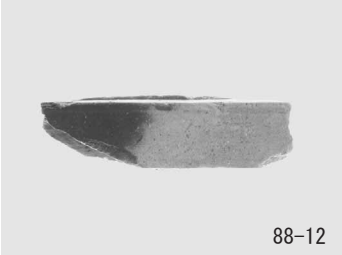

88-8


88-10

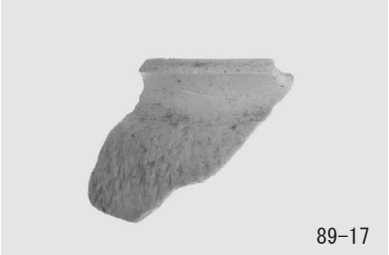
88-7

88-9

88-11


88-12

89-13


89-17

89-14

89-15

89-16

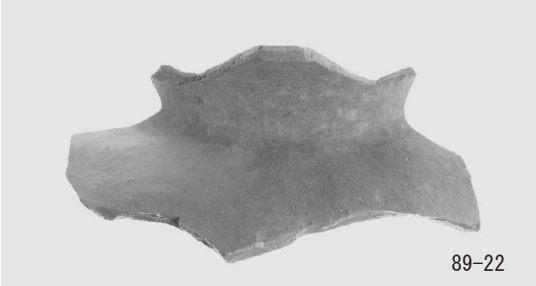
２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（２）（S.≒1/3）

89-18

89-19

89-20

89-21


89-22

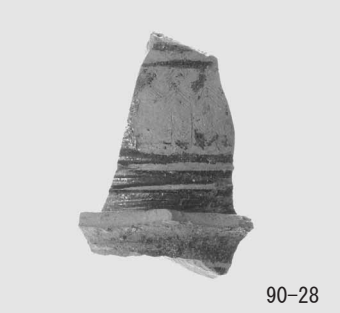
89-23

90-27

89-24

89-25

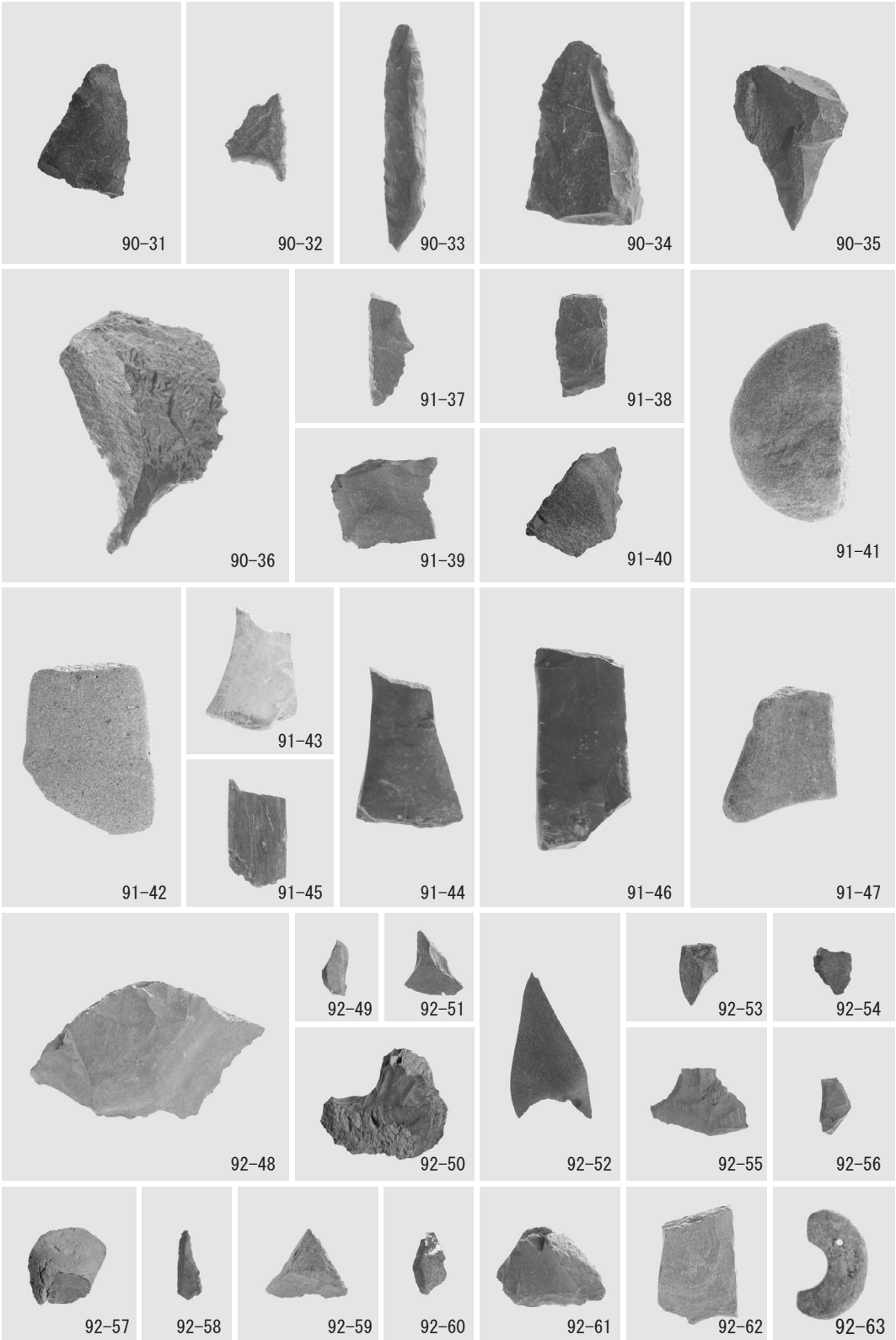
90-26


90-28

90-29

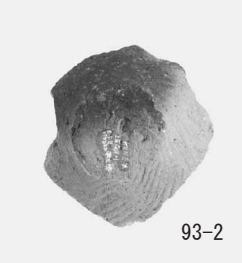
90-30

２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（３）（S.≒1/3）

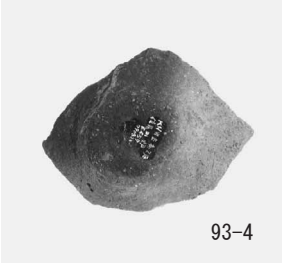


２区　谷地形（南北方向）　出土遺物（４）（S.≒1/3、但し 90-31 ～ 90-36・92-63 はS.≒2/3）

93-1


93-2

93-3


93-4

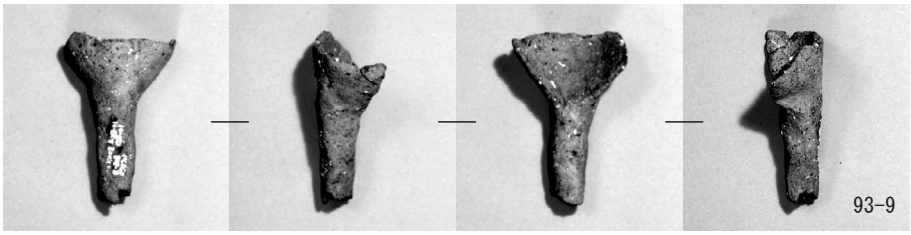
93-5

93-6

93-7

93-8

住居１


93-9

住居２

93-10

93-14

93-11

93-12

93-13

93-15

93-16

93-17

93-18

住居３

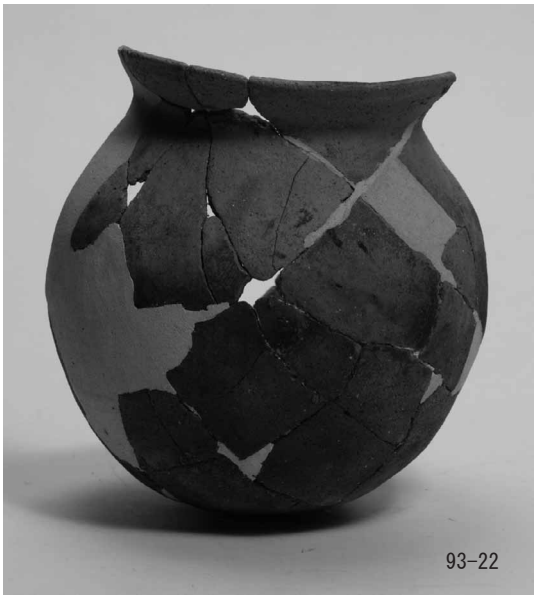
93-19

２区　住居　出土遺物（１）（S.≒1/3）

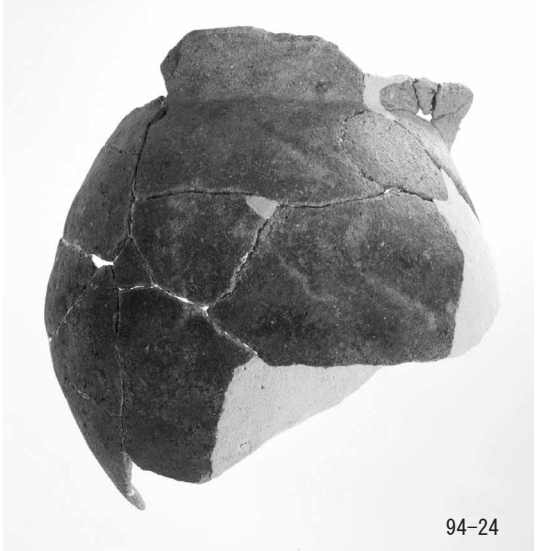
住居７

93-20

93-21


93-22

94-23


94-24

94-25

94-26

２区　住居　出土遺物（２）（S.≒1/3）

住居７

住居８

２区　住居　出土遺物（３）（S.≒1/3）

住居９

２区　住居　出土遺物（４）（Ｓ.≒1/3）

ピット121

96-1

ピット80

96-2

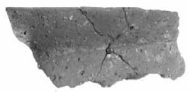
２区　ピット　出土遺物（S.≒1/3）

土坑１

97-1

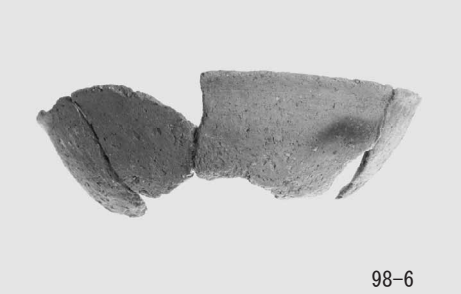
97-2

97-3



97-4

２区　土坑　出土遺物（１）（S.≒1/3）



土坑１

土坑２

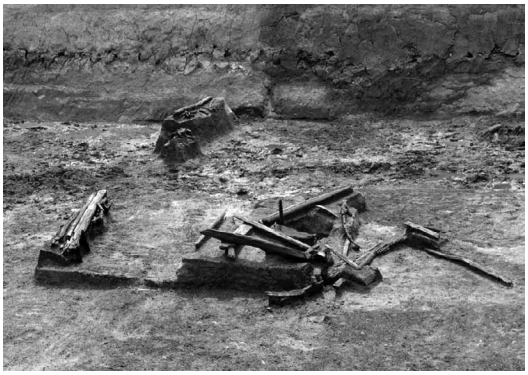
２区　土坑　出土遺物（２）（S.≒1/3）

３一北区　谷地形　全景　南から

３一北区　谷地形　西から

３－北区　しがらみ検出状況　東から

３－北区　しがらみ検出状況　上から

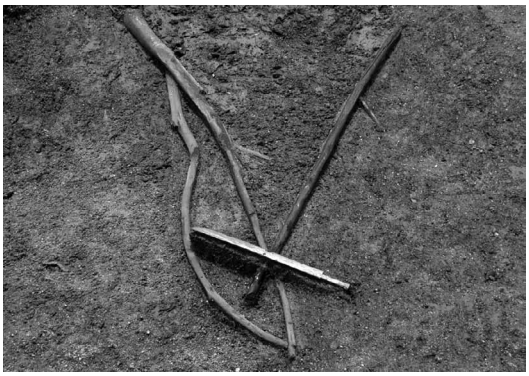


３一北区　谷地形　遺物出土状況（１）　東から

３一北区　谷地形　遺物出土状況（２）　東から

３一北区　谷地形　遺物出土状況（３）　南から

３一北区　谷地形　遺物出土状況（４）　南から



３一北区　谷地形　遺物出土状況（５）

３一北区　谷地形　遺物出土状況（６）

３一北区　谷地形　遺物出土状況（７）

３一北区　谷地形　遺物出土状況（８）

101-1

101-2

101-3

101-4

101-5

101-6

101-7

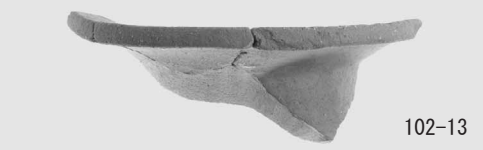
101-8

102-9

102-10

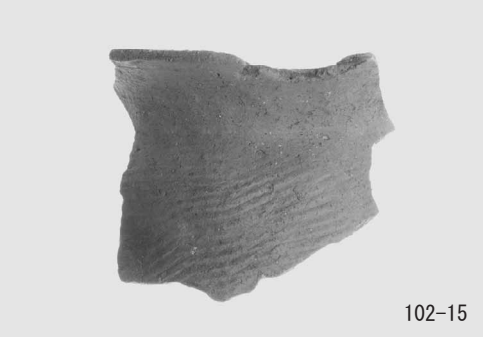
３－北区　出土遺物（１）（Ｓ.≒1/3）

102-11


102-13

102-14

102-12


102-15

102-16

102-17

102-18

102-19

102-20

３－北区　出土遺物（２）（S.≒1/3）

103-21

103-22

103-23

103-24

103-25

103-26

103-27

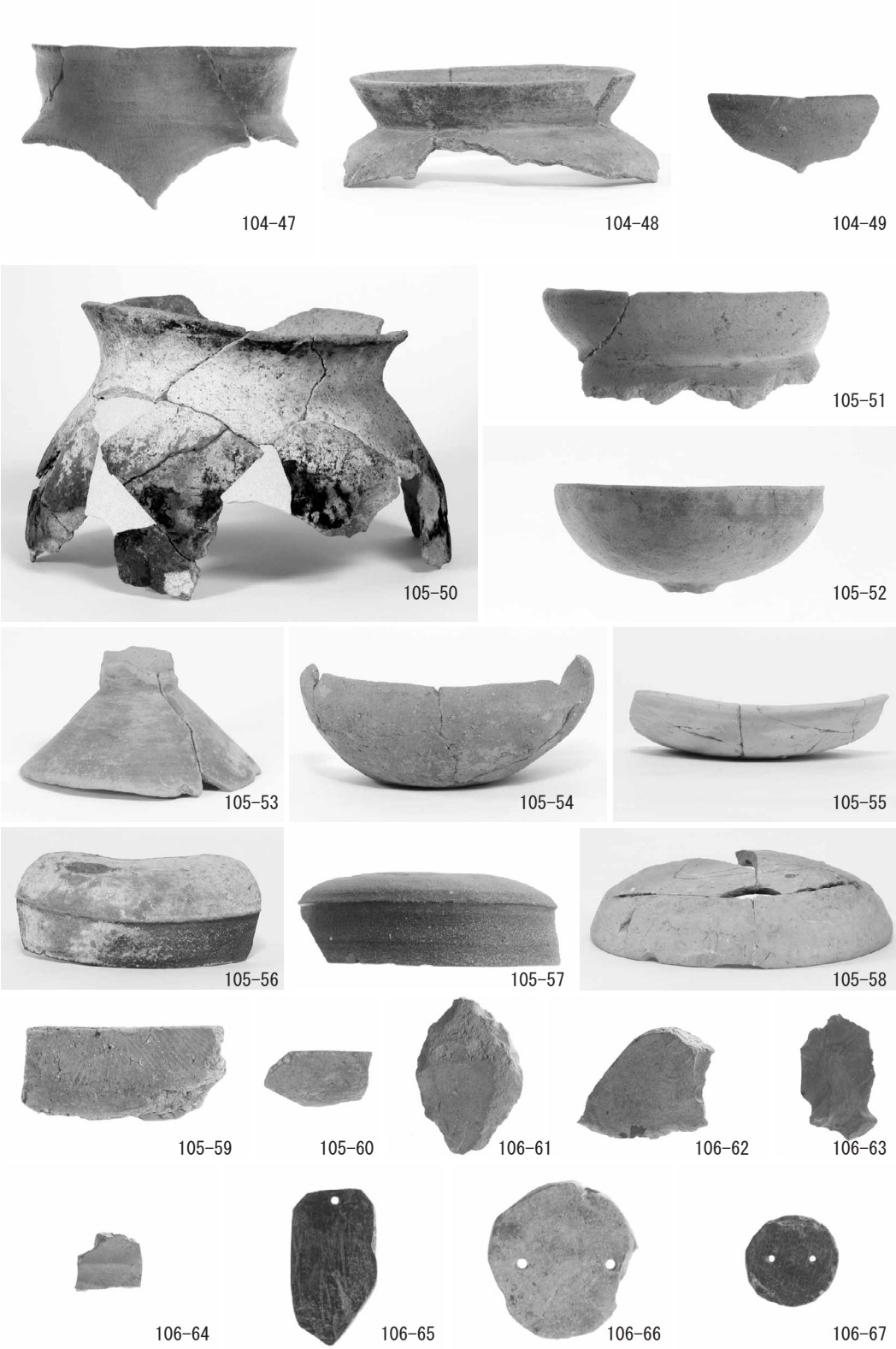
103-28

103-29

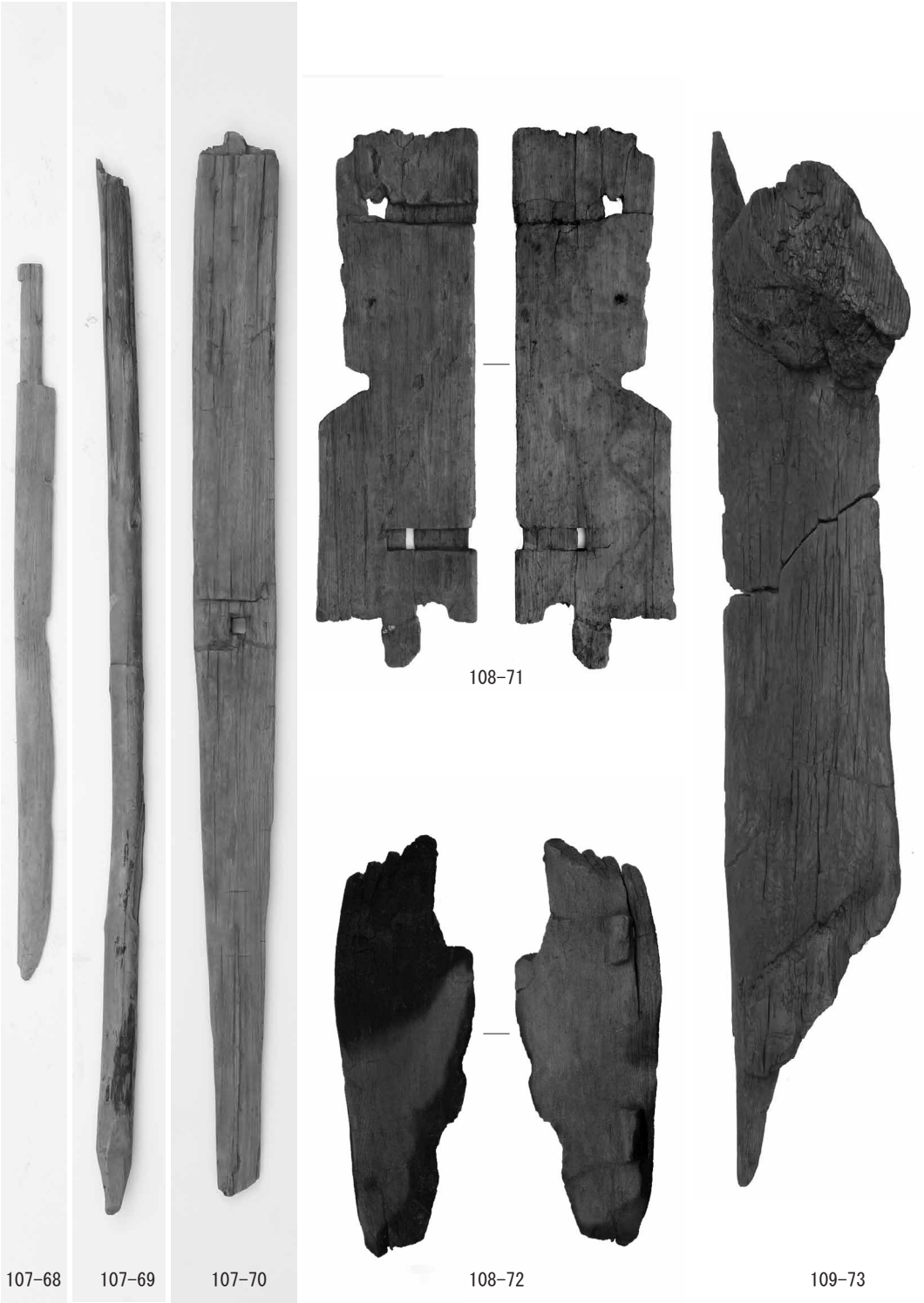
103-30

３－北区　出土遺物（３）（Ｓ.≒1/3）

３－北区　出土遺物（４）（S.≒1/3）



３－北区　出土遺物（５）（Ｓ.≒1/3、但し 106-64・66・67 はＳ.≒2/3）



３－北区　出土遺物（６）（107-68・69 はＳ.≒1/5、107-70 ～ 109-73 はＳ.≒1/8）

３－南区　全景　南から

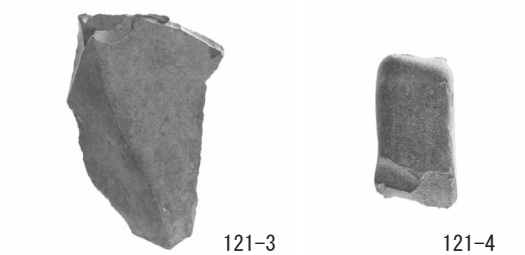
３－南区　住居 11　西から

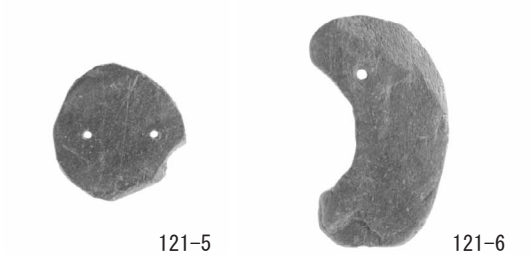
３－南区　住居 12・13　北から

３－南区　方形状落ち込み　南から

121-1

121-2


121-3 121-4


121-5 121-6

３－南区　流入土　出土遺物　（Ｓ.≒1/3、但し 121-５・６はＳ.≒2/3）

122-1

122-2

122-3

住居 11

住居 12・13

123-4

123-5

123-6

123-7

123-8

３－南区　住居　出土遺物　（Ｓ.≒1/3）

方形状落ち込み

123-9

123-10

123-11

123-12

123-13

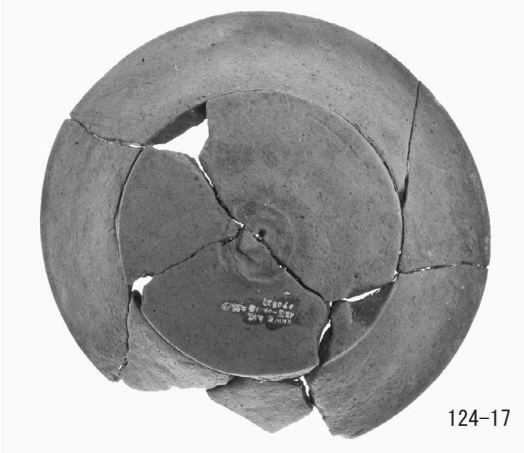
124-14

124-15

124-16

３－南区　方形状落ち込み　出土遺物（１）（Ｓ.≒1/3）

方形状落ち込み


124-17

124-18

124-19

124-20

124-21

124-22

124-23

３－南区　方形状落ち込み　出土遺物（２）（S.≒1/3）

ピット 209

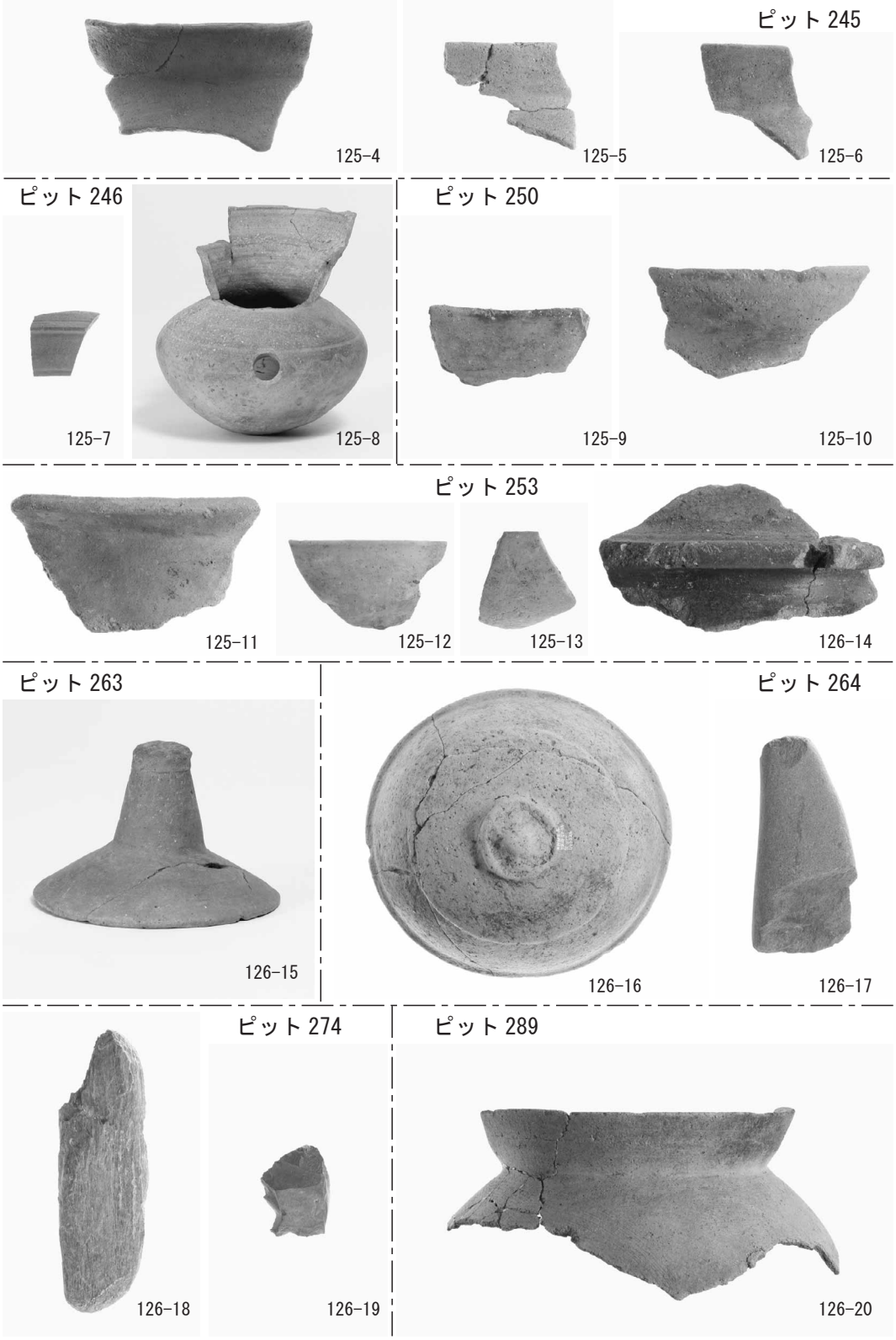
125-1

ピット 210

125-2

125-3

３－南区　ピット　出土遺物（１）（S.≒1/3）



３－南区　ピット　出土遺物（２）（S.≒1/3）

127-1

127-2

127-3

128-4

128-5

128-6

128-7

土坑 20

土坑 22

128-8

128-9

128-10

128-11

128-12

128-13

128-14

３－南区　土坑　出土遺物（１）（S.≒1/3）

土坑 24

128-15

128-17

128-16

土坑 30

128-18

３－南区　土坑　出土遺物（２）（Ｓ.≒1/3）

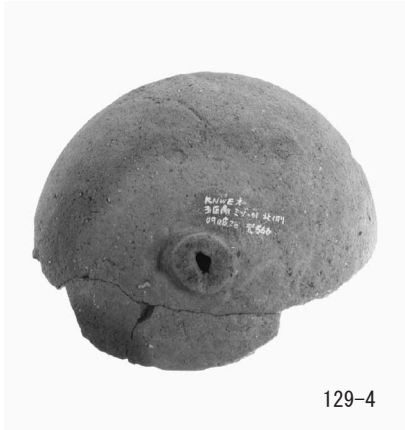
129-1

129-2

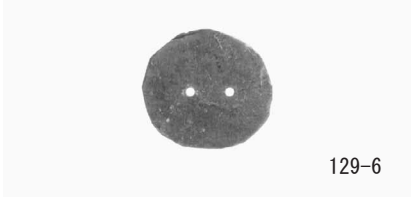
129-3

溝 12

129-5


129-4

溝 11


129-6

３－南区　溝　出土遺物（Ｓ.≒1/3、但し 129-6 はＳ.≒2/3）

１区４トレンチ　全景　東から

１区５トレンチ　全景　東から

１区６トレンチ　素掘溝検出状況　南から

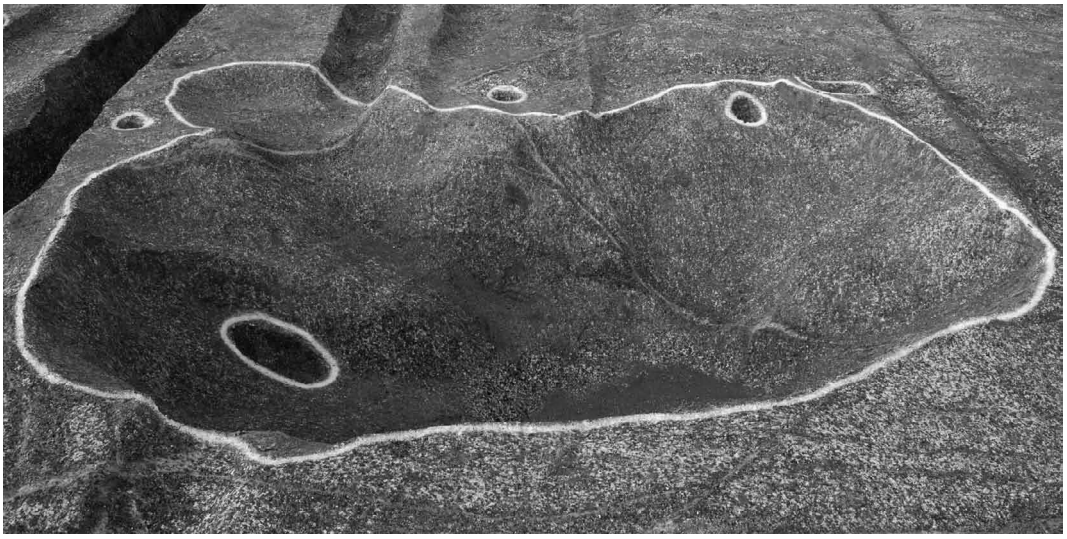
１区６トレンチ　谷地形　南から

１区７トレンチ　全景　南から

１区９トレンチ　全景　西から

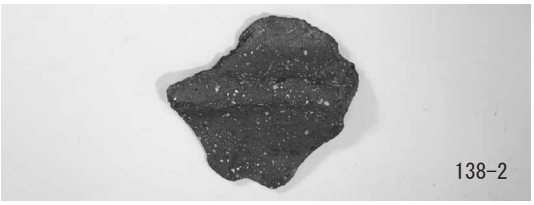
1区10トレンチ　全景　南から

1区10トレンチ　全景　南東から



１区 10 トレンチ　土坑 40　南から

１区 10 トレンチ　土坑 41　南から



１区６・10 トレンチ　出土遺物（S.≒1/3）

報告書抄録

ふりがな	なかにしいせき
書名	中西遺跡
副書名	第12次発掘調査報告　京奈和自動車道建設に係る発掘調査成果
巻次	
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第54集
編著者名	木許守・井ノ上佳美・影山美智与・千喜良敦
編集機関	御所市教育委員会
所在地	〒639-2277　奈良県御所市室102番地　ＴＥＬ 0745-60-1608
発行年月日	西暦　2017年12月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかにしいせき 中西遺跡	なら 奈良県 ごせ 御所市 大字 じょうむろ 條・室	29208		34°26′35″	135°44′27″	20080609～20090227 20090406～20090831 20090928～20091014 20120905～20121024	9,400	京奈和自動車道建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中西遺跡	集落	弥生～古墳	住居跡・掘立柱建物・ピット・土坑	弥生土器・須恵器・土師器・石器・木製品	弥生時代後期～古墳時代後期の遺構面。同期の建物跡、ピット、土坑など。

中　西　遺　跡

－第 12 次発掘調査報告－

京奈和自動車道建設に係る発掘調査成果

御所市文化財調査報告　第 54 集

平成 29 年（2017 年）12 月 20 日
編集・発行　御所市教育委員会
　　御所市１－３
印　　刷　橋本印刷株式会社
　　奈良県葛城市竹内３６５−１